蕉門俳諧後集

装幀　津田青楓

其角短册

煤掃てねた夜は女房めづらしや

きかく

（久保田初藏氏藏）

嵐雪短册

不産女の雛かしつくそ哀なる

嵐雪

（武藤一郎氏藏）

去來短册

（吉田里子氏藏）

有明にふりむきがたき寒哉

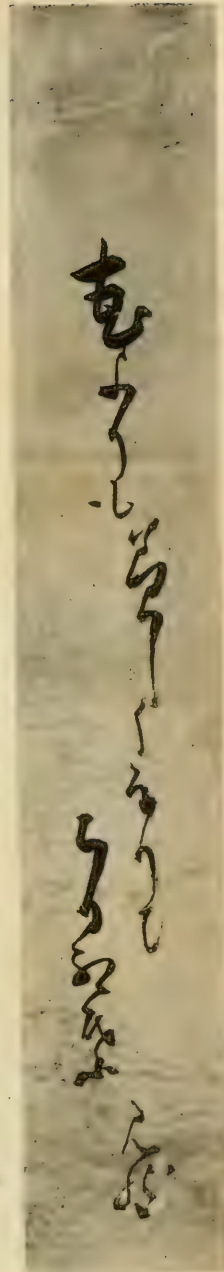
落去來

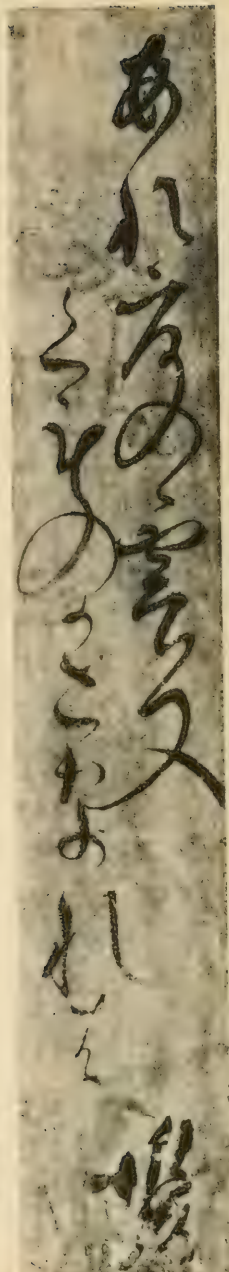
丈草短册

（武藤一郎氏藏）

黄鳥の來る日もあらむ冬櫻

丈草

支考短册　（武藤一郎氏藏）

花よりも美しうなりてちる紅葉　見龍

惟然短册　（吉田里子氏藏）

あれ夏の雲又くものかさなれば　惟然

露川自畫贊

捉なき竹の節ぞおかしけれ

月空居士

（澤市郎右衛門氏藏）

解　題

芭蕉といふ偉大な人格を通じて統一された蕉門の俳諧は、その死に直面して一時門人間に異常の緊張を來したが、その門人の異なる個性と傾向とは決して永久に融合されて居る筈がない。二三の野心ある作者が名を芭蕉に藉りて、自己宣傳に志した結果、その行爲を憚らずとして排撃する者が現はれ、同一蕉門の徒としてはあるまじき陋劣な、にが〱しき勢力爭ひを起したのであつた。江戸蕉門の其角・嵐雪は師の生前俳壇的に確實な位置を占て敢て動搖はしなかつたし、杉風は溫厚な長者の風あり、桃隣は其・嵐二子の後進として自制をして居たので、同門の間は比較的圓滑であつた。野坡一派は『炭俵』の流行躰にしばらく時めいたが、野坡の大阪轉住後はその徒の孤屋・利牛は杉風側に屬して落着いた。たゞ其・嵐の二子も芭蕉の死後、才麿・調和・露言・沾德の如き談林系統の人々と深い交渉を生じて、閑寂又は輕味よりは世話と人情の世界に落ちて、蕉門・談林兩者の趣味と利害の一致より江戸座と呼ぶ新運動を起す事になつたが、それは享保時代に至つて實現されたので、こゝには談林傾向の復活す可き可能性のある點を注意して置けばよいのである。江戸に對する關係上、奧羽の蕉門は全く同一の步調を辿つて居たが、中心人物は須賀川の等躬であつた。尾花澤の淸風は休俳し、酒田の不玉は表面に現はれなかつた。上方主として京都の蕉門は『猿蓑』の句境に終始した去來一派によつて、眞摯に忠實に守られ、去來は其角に書を送つて晩年の師風に歸向す可きを勸說したりして居たが、丈草は佛幻庵にこもつて出でず、凡兆は事に坐して失脚し、去來一派としては風國が頻りに活動して居た。長崎の卯七は親族の關係があつて去來に屬し、越中の浪化も亦その敎示するところに聽從して居た。史邦は去來と同

じく亡師を崇敬して弟子の情を盡した。前に二三の野心ある云々と述べたのは支考等の行動である。支考は『笈日記』に芭蕉の使徒として終焉の前後及び當時の諸國蕉門の狀態を詳記したが、その後の撰集になると自己宣傳の色彩が濃い。後年美濃派として非常な勢力を扶植した事は、その多辯と衒學と著述とにあるが、實際は僞書に托して諸國を遊說した効果であつた。溫厚な去來を信ぜしめて、その紹介によつて北越・加賀の蕉門を勢力圏內に收め、浪化の如きも後には支考の說に心服して居た。加賀の牧童は彼と『草苅笛』を共撰した程なので、北枝や秋の坊の徒も支考を排斥しなかつたらう。その佯死して『阿難話』に世人を瞞着したのは享保以後の事である。支考はかうして如才なく立ち廻つたが、芭蕉の道統を稱して、同門諸子に苛酷な評語を加へた許六は、彦根にその一派を構へて居た。『正風彥根躰』は甚だ傍若無人な態度であるといはねばならぬ。その許六から甚だしく攻擊された惟然は全く別箇の行動をとりつゝあつた。俳諧の口語化運動である。惟然の主張は感情の發露するところ、一切の技巧を排してありのまゝに詠ぜよといふので、口語を重視してその律動(リヅム)をさへ取入れ、鬼貫一派と默契して或る程度の成功を收めて――姫路を中心に流行して居た。蕉門の發祥地である尾張は荷兮の不遇、杜國の死、野水の茶道に隱るゝあつて、元祿以後は殆んど人物の凋落を來したが、唯一の生存者越人が支考等の背後を脅威する一敵國であつた。越人は熊本歸還說が信ぜられたが、その虛妄なる事は享保時代の歲旦牒及び撰集の發見によつて明瞭になつた。露川は越人と沒交涉にその徒を尾張に擁し、地方行脚を常として支考一派と論爭して居た。支考の美濃派に對峙して後世流行した伊勢風は、悉く涼菟の系統である。涼菟は江戶の其・嵐二子に私淑したが、その旅行癖は諸國に門徒を加へて、門人乙由に至つて彼の伊勢風を大成したのであつた。蕉門俳諧の後期に於ける大勢と推移と、本集の系統は上述したところで、ほゞ理解された事と思ふから、解題に入つて更に詳しく內容を述べる事としやう。

笈日記　　元祿八年板　　中本三冊

黑塗に金泥のまき繪はあるかなきかに剝落して侘しい笈の中には、芭蕉晩年の行脚のをり〳〵の自他の發句・文章を手抄した『笈の小文』の一篇が祕められて居た。かたみの笈は熱田の桐葉亭に殘されたそれであらうが、遺稿の內容は門人のひとしく見ん事を望んで許されざる祕稿であつた。師亡き後の一集に志した支考はその題號に何よりも先づ着眼し、奧羽・北越の遠隔の地はさし措き、たやすく行き廻らるゝ諸國の蕉門を遊說して、その地方にちなみ淺からぬ遺吟・書翰及び文章を採訪しつゝ、その徒の悼吟・四季の發句・連句を求めて此の『笈日記』の中に收めたのである。日記とは師終焉の前後を日記躰に認めてあるから附した名で、題號の主眼は笈の一字にある事動かし難い。芭蕉の鄕國伊賀に於ける貞享以後の動靜、わけて元祿七年最後の歸省とその旅立に支考が隨行した事を起筆として、難波の部に稿をつゞけ、九月廿九日の發病後は日附順に記し、座右の品々の遺物をも一々擧げてあつて、其角の『枯尾花』及び去來より浪化に送れる書翰と共に、當時を知るべき最も正確な記錄となつて居る。京都・湖南・彥根・大垣・岐阜・尾張・伊勢の部立を以てつぎ〳〵懷舊の記事あるうちに、岐阜の部に故人落梧の遺著『瓜畑集』を採錄してあるのは支考の情誼に厚きことを思はせ、且つは本集の賣名の手段のみより撰んだものでない事を信じさせる處もある。雲水の部に伊勢より江戶に向ふ旅中の見聞、江戶に於ける芭蕉の遺蹟を書きとゞめ、餘興に支考の伊勢山田に一庵を構へた記事があるが、本集の成就したのは奧書に「洛の桃花坊にをゐて校焉」とある如く、京都の旅寓であつたであらう。

梟日記・　　元祿十二年板　　中本二冊

東に杖をつけば東華坊、西に笠を向ければ西華坊、たゞ旅を好む氣隨の一雲水、さなくば風雅宗の使徒として

月華の梟と申道心者支考

に過ぎないと見せて、其の努力をぬけめなく國々に賣めた支考の筑紫紀行である。元祿十一年四月、見送りの舍羅と西の宮にて袂を別ち、備中倉敷の除風亭にて茶の水汲む雲鈴を同行に誘ひ、六月小倉に筑紫の土を踏んで、濱の宮に[illegible]を携へ來つた朱拙及び紫風と對談し、豐後の日田に野紅・りん夫婦の愛子に別れしをなぐさめ、七月長崎にいたり、その十一日洛より去來の歸省せるとゆくりなく廻り逢ひ、牡年・卯七の徒との俳諧夜話に師說をつたへ、それより歸路に就いたが黑崎にて發病し、藥餌にしたしむ事二旬、九月下の關にたどり着くまで約半歲にて紀行の筆を擱き、旅中の俳諧及びそれに對する一家の私論は別に『西華集』に收めてある。支考の俳論として『葛の松原』とならび稱される『續五論』は此の『梟日記』の附錄に添へたので、井筒屋の目錄に兩者をならべて三冊、壹貫五匁となつて居るが、『續五論』はこゝに除いて第四卷に載せる事にした。

有磯海・となみ山

元祿八年板　　中本二冊

撰者は越中の僧浪化である。同國井波の瑞泉寺に住持せる本願寺の連枝で、元祿七年去來の落柿舍にて芭蕉に面接して蕉門の若き篤信者となつた。常に師の「早稻の香や分入る右は有磯海」の吟を慕ひ、その題號を以て一集を發企したるに對し、芭蕉は和歌の名所に紛らはしいから浪化集とよんだ方がよいと述べた事が去來の遺語に見えて居る。その結果か題簽の『有磯海』の下に小さく「浪化集上」と書添へてある。『となみ山』は去來の賀に「凩や釼を振ふ礪浪山」といふ句が題名を現はして居るが、それにも同じく「浪化集下」とあるから、兩集を合して一部の『浪化集』を

なすものと見てよからう。『有磯海』は丈草が敬虔な筆で撰集の由來を序し、秋・冬・春・夏の四季別にて諸家の發句を錄し、去來の「鶯の子や野分にふとる有そ海」の祝句が擧げてある。『となみ山』は其角・嵐雪・桃隣の三人、落柿舍をたたいて師芭蕉のありし昔をしのび、泣きつ笑ひつして寒夜を慕ひ明せること、その折から去來を通じて浪化の本集を發企せる次第を聞き、當座の發句を井波に送つて浪化の脇を求めた其角の「刀奈美引」及びその「表」と四季發句、幷に歌仙五吟を收めてある。それらの事情より察すれば浪化の撰となつて居るが、去來がすべてを斡旋して完成したのであるらしい。寛政七年板の「續七部集」には「刀奈美山」・「有磯海」と卷の上下を顚倒して覆刻したが、原本の題簽及び柱に「有礒上」幷に「有礒下」とあるので本集の如く載するのが正しい順序であると思ふ。

續有磯海

元祿十一年板　　中本二冊

連枝といへばその人物と態度の寛容なるべき浪化みづから「當時みだりに蕉門の徒と名乘るやから國々にあまねく所々にみてり」とその序に怒氣をふくんで嘲笑して居るので、蕉門に名を托せる末輩の跋扈せる事のいかに甚しいかを窺ひ知らるゝが、伊賀と江戸と湖南と、この三個所には流石師の遺風の行はるゝをゆかしみながら、越中の邊僻にあつて同門と會談を遂げ難きを恨み、文通にて接手せる佳句を以て本集を撰し、句々の分類は『和漢朗詠集』の部立を典據とした旨その序言に述べてある。部立に就いても去來の語れる芭蕉の評言にもとづいて居るので、全篇去來の後見によつて成立したのではなからうが、去來系統の撰集と見做して大過ないであらう。卷頭に落柿舍に於ける芭蕉師弟の連句一卷を擧げ、四季の部立は朗詠集に對照すると題の配置その他まさしく同一で、雜の部の如き詩歌にはあまねく行はれて俳諧には、用例の乏しいものも、その配置を狂はするところなく、體裁の整備せるは撰者の苦心の存す

る所であらう。篇外に浪化とその一派の歌仙四巻、并に丈草の發句によつて文通で卷いた歌仙を收載してある。

草刈笛　元祿十六年板　中本二冊

權略家の支考が正直偏固の牧童をかつぎ上げたのでないかとも見らるれば、「居眠りをもて生涯の得ものとせり」といふ牧童の脫俗せる境涯に心から感激して共撰者となつたのかも知れないと、善惡二樣に觀察されるが實際の撰集は支考が擔當して、牧童は撰者名義に過ぎない事は疑ない。外題に牧童傳の東花坊贊に「俳諧はたゞ戯也。俳諧にはあそぶべし。世にたはぶれ世にあそぶ時は、草刈笛の世にわすれて牧童の名もおしむまじけれ」とあつて、牧童の名にふさはしい其のもてあそび草の草刈笛といふ意味で附けたのであらう。牧童傳は許六の『風俗文選』巻八の傳類に載つて居て世に知られてゐる。內容は秋の坊の「鶯や一聲啼てあちらむき」の發句に牧童の「垣根の梅のさむい咲やう」と脇した一卷及び夏・秋・冬の連句と餘興と都合五歌仙、いづれも支考の一座しその判によつたものと思はるゝ者を卷頭に置き、諸家の發句を四季別にかゝげてあるが、作者は支考系統の人が中心となつて純粹の蕉門作者はそのあしらひに加入されてゐる程度で、美濃派の色彩の頗る濃厚な當時の傾向を如實に現はして居る。牧童・北枝・万子・秋の坊の蕉門屈指の徒をその一派に加擔させた支考の手腕と力量とを漫然見逃してはならない。上中下の三卷、その量から見てかなり大きな出板であつた。井筒屋の目錄には賣價四匁三分となつて居る。

菊の香　元祿十年板　中本一冊

風國は既に『初蟬』を出して去來系統の京都蕉門として知られたが、其の勘考をかねて芭蕉の「菊の香にくらがり

登る節句かな」を外題に取つて本書を撰集したのである。序文に芭蕉の遺語を引いて常に新らしみに推移するを以て、蕉門俳諧の要諦とし、春の部「命二ッ」の句註に芭蕉の作と雖、「その時代の新古をしらざれば翁の變化流行の次第をしりがたからん」といひ、去來の論旨に合致するところあるのは、其角に對する去來の勸告書を附載せるものを見れば更に明らかに理解されやう。四季發句の中に挿入せる初蟬勘考に前集の誤を訂し、其角の『うら若葉』に載する去來の勸告書とその正文とをあはせ掲け、誹和歌と題して後の俳諧歌風の其角・去來の作を錄してあるなど、一特色をなして居る。作者に蕉門の名ある俳人をあつめ、選句の概して中正なるは去來の助言によつた結果であらう。

渡鳥集　寶永元年板　中本二冊

長崎の蕉門は去來と其の一家の聲望とを以て流行した。去來は九歳、父元升に伴はれて京都に引移つたが、その弟魯町が元升の設けた聖堂を保管し、後に其の祭酒となつた關係で常に長崎と來往を絶なかつた。去來の甥卯七は簑田氏、十里亭と號して芭蕉から直接敎旨を受けて俳諧道に精進し、彼の『去來抄』は卯七の筆錄説が傳へられる程、蕉門に對して功績のあつた人物で、叔姪その志を一にして此の『渡鳥集』を撰集したのであつた。去來の「入長崎記」は元祿十一年、『梟日記』に支考が偶然その歸省に邂逅した時の事らしい。その時の兩吟

故郷も今はかり寐や渡り鳥　去來
ひゞきほのかに夜の明る月　卯七

此發句を題號に取つたのであらう。夜と晝の兩卷、去來の入長崎記及び兩吟、その他の連句を夜の卷に收めて、その中歌仙の形式を完うしたもの六卷、卯七の「京入や鳥羽の田植の歸る中」の一卷は芭蕉が披見して「我が手筋を失なは

ず」と評した七吟である。正秀の跋がある。晝の巻は支考が筐底に秘めた師の遺吟「日にかゝる雲やしばしのわたりどり」を卯七の撰集を貸して遺れるものを巻初にかゝげ、秋・冬・春・夏の順に諸家の發句を錄し、丈草の跋並に作者名錄が附いて居る。本文は木村素水の寫本から轉寫したのであるが、藤井紫影博士の好意で京都大學所藏の摸寫本を以て更に校訂した。原本は大阪の北田紫水氏と洒竹文庫とに各一冊づゝ藏するものを藤井博士が交渉して兩冊を合せて完全に寫し取つて置かれたのである。

芭蕉庵小文庫

元祿九年板　　中本二冊

撰者の史邦は中村氏、尾張犬山の人で後に京都の仙洞御所に勤め、猿蓑の前後蕉門に入つて五雨亭と號した人である。亡師芭蕉の遺稿の散佚を惜みて、本集の編纂に着手したらしく、序文に江戸深川の長溪寺にて杉風のたてた芭蕉の句碑を拜し「日の影のかなしく寒し發句塚」といふ追慕の吟を詠んで居る。冬・春・夏・秋の四季別として蕉門諸家の發句を配列し、その季に適當な芭蕉の遺文を挿入し、それに連句一卷づゝを添へてある。芭蕉の發句・連句を拾遺したものは蕉門俳書の通例であるが、芭蕉の文章をかく多數に筆錄したものはない。「石臼之讃」より「堅田十六夜之辨」に及ぶ文章の中で、「石臼之讃」は越人の『不猫蛇』によると、芭蕉の添削を求めた越人の作を支考が誤つて芭蕉の作として世に傳へたものであるが、その他は疑ひなき芭蕉の遺稿である。史邦は二見の文臺及び硯箱、行脚中に使用した笠・蓑に添へて自畫像を芭蕉から授與された事を記し、本集中にも『嵯峨日記』の發句を二個所引用してあるから、發句・文章以外に定めし師の遺物を多く傳來したであらう。二見の文臺は明治になつて發見されたが、『嵯峨日記』は私の一見したもの三卷とも轉寫したもので、まだ其の眞蹟に接しないのは遺憾である。

俳諧猿舞師　　元祿十一年板　　中本一冊

外題の『猿舞師』は「猿のみ哀成と仰られし」によつたとあるが、芭蕉の遺語にはさうした言葉はない。猿に關する芭蕉の發句三章を秋・冬・春の三季のはじめに揭げ、夏は史邦の「夕顏に猿涼ませて寐て居ゞか」の句を代用させて居る。史師と稱して居るので撰者種文は史邦の門人であるに違ひないが、松氏とのみでその人となりは判然しない。野童の句の前書に「難波在勤のつれ〴〵に撰集のおぼし立」とあるので大阪に寓居した人である事は解る。史邦は當時浪人して「冬籠素槍一本具足箱」の窮迫した境遇に落ちて居た。『炭俵』に出羽の公羽の作を翁と誤記し、芭蕉も浪花の遺言狀にその事を苦にして書いて居るが、本集に「冬枯の礒に今朝見ルとさか哉」及び「川中の根木に横ろぶ涼かな」の二句であると史邦の言によつて指摘して居る。凡兆下獄の吟「猪の首の强さよ年の暮」が讀人しらずとして載せてあるは、凡兆の罪に坐したのは『猿舞師』板行の前後の事と思はれて氣の毒である。史邦・種文の兩吟五十韻幷に芭蕉の五吟歌僊を附錄してある。

陸奥衛　　元祿十年板　　中本五冊

元祿七年九月大阪から江戸の杉風宛の書翰に、別座舗・炭俵の好評なるを報じて「少は桃隣にも師恩貴きをわきまへゆへ」とその技倆の同門に認知された事を師恩云々といふて居るので、芭蕉と桃隣とその師弟の道の淺からざるを知り得るが、桃隣が元祿九年三月、芭蕉の三回忌に際して追善俳諧の營みにては滿足せず、師の足跡を辿つて奥州行脚に志したのは此の師恩の程を深く感じて居たからであらう。「凡七百里の行脚、是を手向草」として「所々の吟行・懷舊

の百韻」を錄せるは「師恩を忘れず、風雅を業のみなり」と記してあるので本書の内容は一層よく解される。卷の一は自序と「片鹿師の繪を掛て月の秋」の百韻一卷と歌仙二卷の外に芭蕉の發句を四季別として百句を錄し、諸家の春の發句を附載してある。卷の二には歌仙三卷、表六句を載せ、桃隣の行脚を送れる江戸宗匠の餞別吟を添へた畫像十八枚及び師芭蕉、桃隣自身の畫像を揭げ、諸家の夏の發句を附せること前卷と同一である。卷の三は芭蕉が那須の翠桃亭にて興行せる一卷と桃隣旅中の歌仙四卷、幷に貞享五年素堂亭で行つた殘菊の宴幷に舊庵後の月見の句稿、千里の入道偈を收め、諸家の秋の發句を附してある。卷の四は芭蕉三回忌の歌仙・桃隣の獨吟、外數歌仙と諸家の冬の發句を收めてある。卷の五は桃隣行脚中の手控であるが、紀行は『奥の細道』に憚つて記さず、名所・古跡の順路をむしろ煩雜に渉る位、詳しく書いて、所々の發句・連句をその中に挿んで、最後に素堂の跋を附し、全五卷を終つて居る。

伊達衣　元祿十二年板　中本二冊

曾良の日記によると、芭蕉が須賀川の等躬亭に入つたのは元祿二年四月廿二日で、かの「風流のはじめや奥の田植唄」はその挨拶の句である。等躬はその時の芭蕉の捌きに感じて前著『信夫摺』に歌仙を一卷發表したが、『奥細道』に「脇・第三とつゞけて三卷となしぬ」とある別の一卷は本集の「かくれ家」の卷として、殘り一卷はどうなつたか行方が知れない。それは暫らく別問題として『伊達衣』は序文に「惣摺・伊達衣續きよければ」とある通り續集に充る本意であつたので、蕉門系統の俳書には不向な雜多の分子をまじへて居る。それはその筈で等躬は元來江戸の未得門で藤躬とよび、後に乍單齋等躬と改めた人であるから蕉門の徒との交際が甚だ尠い。僅に江戸の其角・嵐雪、『陸奥

衝』の桃隣、それと行脚の折に立寄つた支考位のものである。本文は神祇・戀・述懷・名所の題目にて諸家の發句を擧げ、等躬の一座した歌仙五卷を以て上卷を了り、下卷に再び諸家の發句を四季類題別に配置してあるが、作者は須賀川を中心として調和・沾德・不角の如き人々で、跋も貞德系統の和英が書いてゐる。

皮籠摺　元祿十二年板　中本二冊

凉菟の伊勢風は門人乙由が諸國に流行させたので、『皮籠摺』の時代にはそんな傾向もなければ、又、野心も持つて居なかつたであらう。元祿十一年五月江戶へ向つて伊勢を立ち、江戶では口遊亭を假寓として其角・嵐雪の俳席に出て居たが、蕉門以外の宗匠には接しなかつた。其角はその年六月廿二日に芝三田の新庵有竹居に引越し

竹の蟬さゝらに絞る時もあり　晉子
泊りたふなる家の凉しさ　凉菟

と兩吟一卷を試みて、凉菟から守武の世の中百首の話を聞いて、その事を序文に書いてあたへて居る。上卷は歌仙と四季發句の春・冬の部で、下卷は東武行と題して伊勢を旅立つ時の餞別吟、途中見聞の句を書きとめ、夏・秋の發句、追加の歌仙を載せてある。發句の作者は諸國に涉つて蕉門の徒に限られて居る。蕉門の俳書は悉く京都の井筒屋が板元であるが、本書は井筒屋の目錄に見えず、奧附に西村市郎右衞門の開板となつて居る。『凉菟七部集』の名は曲齋の『海印錄』の奧附にあるが、此の『皮籠摺』が主著で、この書には後の伊勢風の卑俗な調子はすこしもない。

一幅半　元祿十三年板　中本二冊

伊賀の梢風尼は芭蕉が文臺を捌く時、袖の邪魔にならぬやう右の袖を半分に裁つたものを仕立てゝ、その着衣に贈

つたので、芭蕉はいたく喜び一幅半とよんで愛用したといふが、その一幅半の袖をひるがへして伊勢山田の路草亭に客となり「紙衣のぬるとも折む雨の花」と吟じたむかしを思ひ出でゝ、その日の亭主路草庵乙孝の撰集したのである。路草は江戸の芭蕉庵をたゝいて翁の話から「手にとる士峰の雪を見よ」と深川の川岸を案内された事もあり、芭蕉に對して懷舊の情が一入であつたらしい。涼菟の序、「紙衣の」の卷は惜しい哉芭蕉の附句のみで全歌仙を載せず、涼菟・支考等との連句及び蕉門諸家の發句を上卷に錄し、下卷には伊勢の同門との五歌仙并に「水風呂のことば」といふ俳文一篇を添へてある。涼菟系統の俳書でその作者は主として伊勢の人であるが、特に伊勢風の俳諧と稱する程の色彩はない。併し涼菟一派の人々がかうして次第に一致して、後の伊勢風に向ひつゝある形勢は察するに難くないであらう。

杜撰集

元祿十四年板　　中本二冊

蕉門の俳人は行脚に出てその俳道の厲みとしたが、其角と嵐雪は行脚の經驗を持つて居ない。嵐雪はしば〳〵旅に出たが、越後へ行つたのは高田藩に勤番のためであり、淡路に赴いたのは兄弟に逢ふためで、旅行の目的は別にあつた。さなくば物見遊山の旅で『杜撰集』に收めた二紀行が正にそれである。「裴遊稿」は東海道を京都に向つた旅行記で、その妻の盆會に廿年來連れ添へる仲を顧み、むかしは遊女、その罪を懺悔して尼となつた事などを問はず語りに書いて居る。「塔澤記」は箱根入湯の旅中の印象并に溫泉の緣起・靈驗を語り、宗祇の廟にて「石塔をなでゝは休む一葉かな」と詠じ、鎌倉へ廻つて戻つた記事である。上卷はその二紀行にあて、下卷に一門の發句を四季に分ち、歌仙二卷、百韻一卷を附錄として居るが、作者は嵐雪系統の人ばかりで、尙白・千那の句の散見するは偶然文通で接手したものを挿入したのであらう。嵐雪の若き時の放縱に對して、佛門に歸依せる老後の生活が本集を通じて窺ひ知

ちるゝ。

錢龍賦　寶永二年板　中本一冊

幻住庵の記には「空山に虱を捫りて座す」とあるが、それは支那の故事の假借で『猿蓑』の「手の平に虱這する花のかげ」は實際の情景であらう。芭蕉はかく虱を嫌惡しなかつたが、虱を俳書の題とするまでには思ひ至らなかつたらう。錢龍は虱に擬した古語である。卷初には七草を題した七番の發句合に嵐雪の評語を加へたものを掲げ、芭蕉庵眺望の百韻一卷、歌仙四卷の所々に五行・方位・五色及び十二支を題とした發句をはさみ、嵐雪の「病床に虱をとる辨」及び錢龍の題にて芭蕉その他同門の虱の發句をあつめて、更に蚤の發句・蚤の歌仙に及んでゐる。跋に「肋下にきたつて三拳し去る。この風顛還而雪中の虱を被る。その蝨を錢龍賦といふ」と禪家の偈の如き文章がある。嵐雪の門人百里の輯となつてゐるが、井筒屋の目錄には撰者を江戸百里・嵐雪としてあるから、嵐雪の後見で出來たのであらう。嵐雪系統の俳書はその數に乏しいうちで、外題・内容ともに頗る異色あるものといふ可きである。

韻塞　元祿十年板　中本二冊

許六と李由とは共の性格の類似して居る譯ではないが、莫逆に二人の仲が好い。傲岸で人を見下す許六も李由に對しては一目置いて居た。著書を出す時には必らず二人の共撰とした。『韻塞』も乾の卷は李由、坤の卷は許六と分擔の體裁になつて居る。乾卷は李由の明照寺にて「百年の氣色を庭の落葉哉」と詠じた芭蕉の發句を卷頭として類題別によらず、十月より九月に至る一年十二ケ月のその月毎に諸家の發句を配し、別に閏月を設けてそれを追加としてある。

李由の序に管丹好忠の案集を典據にした旨を述べ、乾は千那の筆である。坤卷は許六の「五老井記」の文に許六亭にて芭蕉の掛いた「けふばかり人も年よれ初時雨」の卷を配したのは明照寺に於ける發句に對照させたので、歌仙八卷及び、彦根の俳人馬佛の追悼をかゞけ、芭蕉の「許六離別詞」がある。これは「風俗文選」の卷の一に「柴門辭」とあるのと同一の文章である。許六出立の砌に「例の次郎兵衛を使として」芭蕉の送り屆けた「餞別の詞」の外、其角が扇の形を描いてその中に題した「餞許六」の文をそのまゝ揷繪風に模刻し、許六の「田路記行」「風狂人が旅の賦」の二文を附錄してある。『續七部集』に乾坤を顚倒して覆刻したのは不注意と云はねばならぬ。

正風彦根躰

正德二年板　　中本一冊

その序に「正風の血脈を相續する者は湖東の門人也」と自贊せるは例の傍若無人な許六の癖で、その剛慢さをいよ〳〵増長させたばかりであるが、汶村の「借錢涅槃經」に「彦根風のこなし」を說き、殊に「寒路の遠きものを上手としるべし」といへるは俗俳に對する頂門の一針であらねばならぬ。許六の提唱せる彦根躰の俳諧は蕉門の一傾向を傳統せるもので、作者が悉く其の一門で一人の異分子もなきところ、無批評に看過するを許さない。本文は第一雪月花・時鳥の汰汰より第十雜題・讀物の格に至る十題に四季發句を類別してあるが、「寐釋迦御忌銘」によると許六は病臥既に六年「人みな菊阿は寐る物と覺ゆ」と自嘲して居るあたり一掬の同情心を起さゞるを得ない。許六の語に「先師直判の祕本二冊あり」とあるのは、雲鈴に傳授せるものを後年闌更が發見開板した「俳諧新々式」及び「白砂人集」の二書であるならば、貞德式の制約書でさして價値あるものとは云ひ難い。

二葉集　元祿十五年板　中本一冊

素牛時代は純眞な蕉風躰であつたが『藤の實』以後「梅の花あかいは〳〵な」の新句境を發見し、風狂の僧惟然として師芭蕉の發句に特殊な節付をした風羅念佛を唱へつゝ、口語本位の俳諧運動を起したのであつた。その主張は「但、戯言・俗諺、飾り無く巧み無く、突然として頓に出て、思慮を煩はさゞる、此れ之れを誹諧と謂ふ也」と本文「誹諧非レ藝」に於て說ける如くで、奇を好む人情に投じたといふよりは、姫路の千山など惟然調の支持者が現はれて一時大に流行したが、鬼貫一派の口調と酷似して居るので、孰れを主動者とも定め難い。『二葉集』は惟然の新運動の主著で、同一系統の千山の『花の雲』月尋の『とてしも』は多少興味中心に流れて眞劍味に乏しい。笑々翁一吟の序、その一派の四季發句及び連句を輯めてある。「それ〳〵」「ちよつ〳〵」「ふら〳〵」「とろ〳〵」の如きたゝみ言葉を用ひたると、座五を「ぶつくさと」「それ來るは」「あとからも」「なつたはさ」「似たはいの」の如き口語で結べるが其の特徴の一つである。惟然の主張から季題無視說は當然起る可きであつて、然も雜の部を獨立させたに過ぎないのは、猶徹底味を缺いて居るといはねばならぬ。千山の跋がある。

庭竈集　享保十三年板　中本二冊

芭蕉の誡を忘れて女を持ち、それが爲に勘當された通說は信じられぬが、元祿以後越人は一時不明で同十五年板の『藁人形』には亡越人となつて居る。享保時代再び名古屋に現はれて『鵲尾冠』及び『庭竈』を著作した。題名は芭蕉の「叡慮にて賑ふ民の庭竈」に據つたので、上卷は詠史躰の發句並に書史・佛說・伎樂に關する雜詠を收めてあるが、「往昔芭蕉菴に旅寐せし比」其角・嵐雪・擧白・宗和の諸門人が來つて和漢の人物論となり、芭蕉の發言で我が朝の

聖君・賢臣を題として詠じた句稿の殘存せるものに、越人一派の作句を輯め添へたのである。下卷は四季の發句、芭蕉の「二人見し雪は今年もふりけるか」を立句とせる脇起しとも歌仙七卷で、作者の日蘖は「曠野」以來の舊友であるが、羽笠はその子が二代を嗣いだので、雙笠・芝響・間景等の「鶴尾冠」以來の作人は越人晩年の弟子であらう。越人の熊本歸還說や佐分利氏云々の系譜の全然虛構なるは本集を援手すれば、たゞちに判然するであらう。本書に越人が虎が雨の如きを季題として扱ひながら、待賢門の軍、頼朝大佛供養の如き歷史的事件を雜とせるは不可解であると、その季題成立說を主張して居るのは一理ある論である。

幾人水主

元祿十六年板　　中本一冊

撰者は名古屋の素覽である。三輪氏、雞頭野衣と號し、芭蕉の「水雞鳴と人のいへばや佐屋泊り」の三吟歌仙の作者で芭蕉の直門ながら、露川の後見で此の書の撰者となつたのらしい。露川は門人燕說の著『西國曲』及び『北國曲』で見ると、九州・北越の諸國を遊說して地方的に勢力を得たが、支考と不和の結果その傳系は美濃・伊勢兩風の如く後世までは擴はなかつた。「幾人水主」は伊勢の凉菟が加はつて居るので、露川系統のものでは公正な撰集である。序文は露川、夢想の吟「船で見る鴉の纜や郭公」を卷初に載せ、冬・夏・春・秋の順序にて尾張と諸國の作者を別々に揭げ、神祇・釋敎・賀・戀・旅の六躰の連句を添へ、「この舟に俳諧はせで物喰ふて眠る人をばねぶらせてをく」の狂歌を跋の代りに載せてある。（勝峰晋風）

豫定の『そこの花』『花の雲』『鶴尾冠』『菴の記』『西國曲』『北國曲』の六書は頁數超過の爲め續集に收める事にしたが、蕉門後期の俳風の系統は以上を以ても充分であらうと思ふ。

日本俳書大系 第三巻 蕉門俳諧後集 目次

笈日記……一
梟日記……六七
有磯海……一〇七
となみ山……一二九
續有磯海……一四一
草苅笛……一七三
菊の香……二一七
渡鳥集……二三一
芭蕉庵小文庫……二六一
俳諧猿舞師……二八九
陸奥衞……三〇九
伊達衣……三九一
皮籠摺……四二五

一幅半……四七七
杜撰集……四八二
錢龍賦……五〇五
韻塞……五二五
正風彥根躰……五六五
二葉集……五九五
庭竈集……六二三
幾人水主……六六七

短册・畫讃

其角・嵐雪・去來・丈草・支考・惟然——短册
露川——畫讃

笈日記

上・中・下

支考撰

笈日記之序

笈の小文は、先師ばせを庵の生前におもひをける集の名也。是は人〳〵のふみの端にほつ句あり、文章あるものをあつめて、行脚の形見となすべきよし、かねておもひたち申されし也。しかるにその人はおはせずなりて、この心ざしのむなしからん事をおしむに、はた吾ちからの小文集にたへざらんとすや。たゞに舊遊の地をたづねて、その時のありさまを思ひあはせ、一夜・二夜にちぎり捨し所〳〵も、その面影をうつし出し侍るに、おほむね十ところ十部ばかりも侍らむ。その外、奥羽の風流は、奥の細道にみづからかきて、洛の去來に殘し侍り、潜淵庵が續尾集にもこも〲出し侍るかし。越路の遺草は、ありそ海・となみ山の二輿にとゞめられて、ちか比にもてなし侍れば、その間にもらしぬるもの、わづかに百餘草に過ざらまし。是に病前死後の兩篇をくはえて、前後日記ともいひ、笈日記とも申侍る也。誠におしむべし。此叟の風雅にやつれたる事、五十にして頽年のしら髪をいたゞく。生涯は風前の一葉にまかせたれば、とゞむべき住家もあらず。衣食は明暮をそなえねば、むさぼるべきあたひもなかりけり。たゞ世の人の是非にたてる事のあさましうおぼゆるとて、老後には、恨をふくめる人のもとにもひたすら行かよひて、まどかになし給へるは、是をも風雅の上にあらんと、殊さらにたふとかりける。されば世に風雅〳〵といへるものも、其さま身にをはざる時は、終にあらそひの媒となりなむ。いとむつかし。その間にあそべるものゝ、その肩たゆまずといへる、世にはいくばくも侍らじを、此叟ひとり風雅の上にわすれぬるかな。

元祿乙亥の穐七月十五日

文考白序

笈日記 上卷

伊賀部

貞享五年の春、何月幾日芭蕉老人よし野山の花見むとて、伊賀の國より旅立申されしに、尾の杜國も是に供せられて、ともに筆をとつて檜の木笠の裏に狂せしとや。

乾坤無住

芳野にてさくら見せうぞ檜の木笠　風羅坊

よしのにておれも見せうぞひの木がさ　万菊丸

おなじ年の春にや侍らむ、故主君蟬吟公の庭前にて、

さまぐの事おもひ出す櫻かな　芭蕉

そのとし阿波といふ所の大佛に詣して、

丈六のかげろふ高し石の上　仝

紀行

さやの寺まにりしに、有明の月入はてゝ、みちのおもふゝ路の山〳〵雲降かゝりて、いとおかしきに、おそろしき髭生たるものゝふの下部などいふものゝ、やゝもすれば舟人をねめいかるぞ、輿うしなふ心地せらる。桑名より處〳〵馬に乗て、杖つき坂引のぼすとて、荷鞍うちかへりて馬より落ぬ。ものゝ便なきひとり旅さへあるを、まさなの乗てやと、馬子にはしかられながら、

かちならば杖つき坂を落馬哉　はせを

といひけれども季の言葉なし。雜の句といはんもあしからじ。

そのゝちいがの人々に此句の脇して見るべきよし申されしを、

角のとがらぬ牛もあるもの　土芳

去年元祿七年、後のさみだれに、武江より舊里にわたりて、洛の桃花坊にあそび、湖の木曾塚に納涼して、文月のはじめふたゝび伊賀に歸て、九月の始又難波

津の方に旅だつ。この秋此別ありとしらば、たのむべく、なすべき事もおほかるべきに、

七月十五日

家はみな杖にしら髪の墓まいり　翁

八月十五日

今宵誰よし野の月も十六里

名月の佳章は三句侍りけるに、外の二章は評をくはへて後猿蓑に入集す。爰には記し侍らず。今宵の前後にや有けむ、猿雖亭にあそぶとて、

あれ〳〵て末は海行野分哉　猿雖

鶴の頭をあぐる栗の穗　翁

九月二日

支考はいせの國より斗從をいざなひて、伊賀の山中におもむく。是は難波津の抖擻の後、かならず伊勢にもむかへむと也。三日の夜かしこにいたる。草庵のもうけも、いさゝこゝろさびて、

蕎麥はまだ花でもてなす山路哉　翁

松茸やしらぬ木の葉のへばり付　仝

この松茸をその夜の卷頭に乞うけて、一哥仙侍り、爰に記さず。次の夜なにがしが亭に會して

松茸や宮古にちかき山の形　惟然

松風に新酒を澄す山路かな　支考

此句は山路を夜寒にすべきよしにて、その會みちて歸るとて、集などに出すべくば、もとの山路しかるべしといへり。いかなるさかひにか申されけむ。

行秋や手をひろげたる栗のいが　翁

九月八日

難波津の旅行、この日にさだまる事は、なら(奈良)の舊都の重陽をかけんとなり。人々のおくりむかへいとむづかしとて、朝霧をこめて旅立出るに、阿叟のこのかみもおくりみ給ひて、かれて引わかれたる身の此後はおはじ〳〵とこそ、あきらめつるに、たがひにおさろへ行程は、別もあさましうおぼゆるとて、供せられつるもの共に、介抱の事などかへす〳〵たのみて、背影の見ゆるかぎりはゐ給ひぬ。その日はかならず、なら(奈良)までといそぎて、笠置より河舟にのりて錢司さ

いふ所を過るに、山の腰すべて蜜柑の畑なり。

されば先の夜ならん、

山はみな蜜柑の色の黄になりて　翁

と旅し句には、まさしく此所にこそいへと申ければ、あはれ香橘を見せけるよとて、阿叟も見つゝわらひ申されし。是は老杜が詩に、青は峯巒の過たるをおしみ、黄は橘柚の来るを見る、といへる和漢の風情さらに殊ならねば、かさぎの峯は誠におしむべき秋の名残なり。船をあがりて、一二里がほどに日をくらして、さる澤のほとりに宿をさだむるに、はい入て宵のほどたまどろむ。されば曲翠子の大和路の行にいざなふべきよし、しゐて申されしが、かゝる衰老のむつかしさを、旅にてしり給はぬゆへなるべしと、みづからも口おしきやうに申されしが、まして今年は殊の外によはりたまへり。その夜はすぐれて月もあきらかに、鹿も聲々にみだれてあはれなれば、月の三更なる比、かの池のほとりに吟行す。

ひいと啼尻聲かなし夜の鹿　翁

鹿の音の糸引はえて月夜哉　支考

九月九日

菊の香やな良には古き佛達　翁

霜をかぬ三笠のかげや神の菊　支考

錢百のちがひが出來たならの菊　惟然

幾年斗先にか侍らん、この宮古の西大寺に出して

青葉して御目の雫拭ばや　翁

中比元禄巳の冬

大佛殿興をよろこびて

初雪やいつ大佛の柱立　仝

四季

春

山櫻世はむつかしき接穂かな　猿雖

庭掃も慰になるさくらかな　尾頭

ほれられて顔の出されぬ花見哉　万乎

花といへ最ひとついへやちいさい子　羅香
啼鳥花の雪吹や尾も頭　射江
頓て〳〵すうもあかうも梅の花　荻子
戸を明るあたりやくはつとむめの花　望翠
さびしさに雪打おとす柳哉　颯聲
篦つりの笠きてあがる柳かな　小子 長年
鶯に底のぬけたるこゝろ哉　土芳
顔見せよ鶯くゞる垣の隙　卓袋

奴の居ぬほど手づから
鍋の下た焼て

白魚やたまか細工にみその汁　荻子
白うをの舛たゝかする斗かな　氷固
春雨や格子より出す童の手　車來
麻蒔や俵の口とく宇和嶋　示蜂
壬生念佛茶屋の夜迯は哀也　陽和

一花おりに
かゝりければ

山吹に頭あげたり柿頭巾　配力
山ぶきや日をかゝえ出る駕籠の内　吹衣
松の葉を振ふて見たるつゝじ哉　苔蘓

夏

ほとゝぎす田舎稀なる曇哉　一桐
摺付て啼や二階のほとゝぎす　祐甫
しら壁の必角はあふひかな　万乎
老僧の眞向に見るや紅牡丹　陽和
頭そる袖うそくらきぼたんかな　猿雖

雪芝亭

涼しさや直に野松の枝の形　翁
若竹に涼しき聲や七ツ鷄　車來
蚊屋を出てもう一度涼む戸口哉　土芳

秋

渡るほど田の水越や宵月夜　仝
隣より破風の影來る月夜哉　仙杖

旅行

月出ると寐耳に入し名所哉　風睡
日あたりに直る晩稲のいなご哉　猿雖
片帆の秋のやつれや茄子畑　仝
垣越や竿にて貰ふ菊の花　我峯

冬

小坊主も旅人なれや枯薄　配力
おそろしうなりて入日や枯尾花　魚日
木枯やさかなをさがす梨の殘　氷固
手間いれて落る木の葉や森の中　雪芝
足袋ぬぐや机の間の手習子　望翠
物かくに少はたかき火燵かな　猿雖
老の羽織初雪迄に仕立たり　仙杖
乞食さへ雪に出立やみのと笠　九節

草庵をとぶらへる人に對して

君火たけよき物みせむ雪丸げ　翁
庭寒し二度めは雪のてか〳〵と　卓袋

歌仙

笋の力づき行しはりかな　猿雖
　きらりとあがる夜の夕立　支考
狀箱に大な者が二人出て　土芳
　町はばた〳〵煤掃の音　万乎
門しめてはいれば寒き松の月　卓袋
　喰ひさがしたる膳のかさなる　雖
姉が來て髪の埒明おとゝ共　考
　屛風に醫者の出たり入たり　芳
むら〳〵ととまり雀の塒崩れ　乎
　むかひの畑に押渡す水　袋
隙さうに寺のお坊ののらつきて　雖
　皿一束の直をきばる也　考
道明て籾ほす門の秋日和　芳
　下向の衆も八朔の比　乎
草臥て晝は寐たがる相撲取　袋

月夜〳〵の番場醒井　雖
しらせずにつとめて見たる花の奥　考
春の小鳥のみなに成けり　芳
商人の荷にやとはれて日ぞ永き　乎
祝事やら餅のちらばふ　袋
江戸の留守くゞり斗を明て置　雖
犬の取たる猫の侘言　考
とろ〳〵と寐入かゝりの面白さ　芳
見ずに幾つも傾城の文　乎
身代を葛籠ひとつに仕舞込　袋
盆のあまりをひやす素麺　雖
宵の間は樫にかゝりて月くらく　考
だまつて来ては喰ふ秋の蚊　芳
焼付てまづ茶をわかす生いろり　乎
壚出すやうな見世のつき也　袋
高藪の絡あちらには御門跡　雖
喧嘩のさたをとり〴〵にする　考
ずか〳〵と道のはか行ひとり旅　芳
節供の宵の宿の結構　乎
咲立て花は西にも東にも　袋
一里四方の湖のどか也　執筆

右一集はことし元禄乙亥の夏十月廿九日於雖亭におゐて記焉。

連衆廿五人

難波部　前後日記

去年元禄の秋九月九日、な良より難波津にわたる。生玉の邊より日た暮して、

菊に出てな良と難波は宵月夜　翁

今宵は十三夜の月をかけて、すみよしの市に詣けるに、晝のほどより雨ふりて吟行しづかならず。殊に暮〳〵は惡寒になやみ申されしが、その日もわづらはしさて、かいくれ歸りける也。次の夜はいさ心地よしさて、畦止亭に行て、前夜の月の名殘をつくなふ。住吉の市に立てさい

へる前書ありて

艸買て分別かはる月見かな　翁

十六日の夜、去來・正秀が文をひらくに、奈良の鹿殊に外に感じて、その奥に人〳〵の句あり。

北嵯峨や町を打越す鹿の聲　丈草

露草や朝日にひかる鹿の角　野明

猿の後聞出しけりしかの聲　荒雀

棹鹿の爪に紅さすもみぢかな　爲有

振わけて尾花に見せよ鹿の角　風國

啼鹿を椎の木間に見付たり　去來

南大門たてこまれてや鹿の聲　正秀

冬の鹿

鹿の影とがつて寒き月夜哉　洒堂

きよつとして霰に立や鹿の角　支考

川越て身ぶるひすごし雪の鹿　臥高

其柳亭

秋もはやはらつく雨に月の形　翁

此句の先へ昨日からちよつ〳〵と秋の時雨かな

といふ句なりけるに、いかにおもはれけむ、月の形にはなしかえ申されし。廿一日・二日の夜は雨もそぼ降りて靜なれば

秋の夜を打崩したる咄かな

此句は寂寞枯槁の場を、ふみやぶりたる老後の活計、なにものかおよびはんとおの〳〵感じ申あひぬ。

車庸亭

面白き穐の朝寐や亭主ぶり　翁

廿六日は淸水の茶店に遊吟して、泥足が集の俳諧あり。連衆十二人。

人聲や此道かへる秋のくれ

此道や行人なしに穐の暮

此二句の間いづれをかと申されしに、この道や行ひとなしにと獨歩したる所、誰かその後にしたがひはんとて、そこに所思といふ題をつけて、半哥仙侍り。爰にしるさず。

松風や軒をめぐつて秋暮ぬ

是はあるじの男の深くのぞみけるより、かきて

とゞめ申されし。

旅懐

此秋は何で年よる雲に鳥

此句はその朝より心に籠てねんじ申されしに、下の五文字、寸々の腸をさかれける也。是はやむ事なき世に、何をして身のいたづらに老ぬらんと、切におもひわびられけるが、されば此秋はいかなる事の心にかなはざるにかあらん。伊賀を出て後は、明暮になやみ申されしが、京・大津の間をへて、伊勢の方におもむくべきか、それも人々のふさがりてとゞめなば、わりなき心も出きぬや。とかくしてちからつきなば、ひたぶるの長谷越すべきよし、しのびたる時はふくめられしに、たゞ羽をのみかいつくろひて、立日もなくなり給へるくやしさ、いとゞいはむ方なし。

白菊の目にたてゝ見る塵もなし　翁

是は園女が風雅の美をいへる一章なるべし。此日は一會を生前の名殘とおもへば、その時の面影も見るやうにおもはるゝ也。

唯止亭

今宵は九月廿八日の夜なれば、秋の名殘をおしむとて、七種の戀を結題にして、おの〳〵ほつ句あり。是は泥足が其便集に出し侍れば、爰にしるさず。

明日の夜は、芝柏が方にまねきおもふよしにてほつ句つかはし申されし。

秋深き隣は何をする人ぞ　翁

廿九日

此夜より泄痢のいたはりありて、神無月一日の朝にいたる。しかるを此叟は、よのつね腹の心地惡シかりければ、是もそのまゝにてやみなんと思ひいけるに、二日・三日の比よりやゝつのりて、終に此愁とはなしける也。されば病中の間は、晋子が終焉記にくはしければ、但よのつれの上、わづかにかきもらしぬる事を支考が見聞には記し侍る。

十月五日

此湖南の御堂の前しづかなる方に病床をうつして、膳所・大津の間伊勢・尾張のしたしき人〳〵に、文したゝめつかはす。その暮支考をめして、殊の外に心の安置したるよし申されさな、さばかりの知識達も生死は天命さこそおぼしゆへ、たゞ心のやすからんはありがたう侍るさ、申して介抱のものも心さけぬ。

六日

きのふの暮より、なにがしが薬にいさこゝちよしさて、みづから起かへりて、白髪のけしきなご見せ申されしに、影もなくおさろへはて、枯木の寒岩にそへるやうにおぼえて、今もまぼろしには思はるれ。

七日

此朝湖南の正秀、夜船より來る。直に枕のほさりにめされて、何さもいふ事はなくて、泪をおさし給へりけるが、いかなる心かおはしけむしらず。その程も過ざるに、洛の去來きたる。その暮つかた、乙州・木節・丈艸おの〳〵來りつごふ。平田の李由きたる。

洛の去來はしばらくも病床をはなれず。いかなるゆへにかと申に、此夏阿叟の我方にいまして、誰〳〵の人は吾を親のごさくし侍るに、吾老て子のごさくする事侍らずさ、仰せられしな、いさしらず、去來は世務にひかれてさるべき孝道もなきに、かゝる事承る事の肝に銘じおぼえければ、せめて此度ははなれじさこそおもひゆへさ申されし也。

八日

之道、すみよしの四所に詣して此度の延年をいのる所願の句あり、しるさず。此夜深更におよびて介抱に侍りける呑舟をめされて、硯の音のから〳〵さ聞えければ、いかなる消息にやさおもふに

病中吟

旅に病て夢は枯野をかけ廻る　翁

その後支考をめして、〽なをかけ廻る夢心さいふ句つくりあり。いづれをかさ申されしに、

その五文字は、いかに承りは半さ申ば、いさむつかしき事に侍らんさ思ひて、此句なにゝかおとりは半さ荅へける也。いかなる不思議の五文字か侍らん、今にはいなし。みづから申されけるは、はた生死の轉變を前にをきながら、ほつ句すべきわざにもあらねど、よのつね此道を心に籠て、年もやゝ半百に過たれば、いねては朝雲暮烟の間をかけり、さめては山水野鳥の聲におどろく。是を佛の妄執さいましめ給へる、たゞちは今の身の上におほえ侍る也。此後はたゞ生前の俳諧をわすれむさのみおもふはさ、かへすくやみ申されし也。さばかりの叟の辭世は、などなかりけるさ思ふ人も世にはあるべし。

九日

服用の後、支考にむきて、此事は去來にもかたりをきけるが、此度嵯峨にてし侍る大井川のほつ句おほえ侍る歟さ、申されしを、あさ荅へて

大　井　川　浪　に　塵　な　し　夏　の　月

さ吟じ申ければ、その句園女が白菊の塵にまぎらはし。是もなき跡の妄執とおもへば、なしかへ侍るさて

清　瀧　や　波　に　ち　り　込　青　松　葉　翁

十日

此暮より身ほさをりてつねにあらず。人く殊の外におどろく。夜に入て去來をめして良談す。その後支考をめして、遺書三通をしたゝめしむ。外に一通にみづからかきて伊賀の兄の名殘におくらる。その後は正秀あづかりて、木曾塚の舊草にかへる。

是より後、十六日の夜曲翠亭に會して、おのくひらき見るに、伊賀への文はたゞ何事もなくて、先だち給へる事のあさましう、おぼゆるよし、かへすく申殘されしなり。外の三通には、思ひをける形見の品く、おほくは反故・文章等の有所、なつかしき人くへの永き別をおしめるなりけり。

一　新式　埋木　二傳

一　古今ノ序註　百人一首　兩部

一　三日月日記　奥の細道

一　拄風　銅鉢

その外はせを庵に安置申されし出山の尊像は、支考が方につたへ侍る。是は行脚の形見なるべし。

夜ふけ人いねて後、誰かれの人〳〵枕の左右に侍りて、此後の風雅はいかになり行侍らんとたづねけるに、されば此道の吾に出て後三十餘年にして百變百化す。しかれどもそのさかひ眞草行の三をはなれず。その三が中にいまだ一二をもつくさゞるよし、唇を打うるほし〳〵やゝ談じ申されければ、やすからぬ道の神なりと思はれて、袖をぬらす人殊におほし。

十一日

此暮相（くれあひ）に晉子（しんし）、幸に來りて今夜の伽にくははりけるも、いさちぎり深き事なるべし。その夜も明るほどに木節をさとして申されけるは、吾生死も明暮にせまりぬとおぼゆれば、もとより水

宿雲棲の身の、この藥かの藥とてあさましう、あがきはつべきにもあらず。たゞねがはくば、老子が藥にて最期までの唇をぬらし侍らんと、ふかくたのみをきて、此後は左右の人をしりぞけて、不淨を浴し、香を燒て後安臥してものいはず。

十二日

されば此叟のやみつき申されしより飲食は朝暮をたがへ給はぬに、きのふ十一日の朝より今宵をかけてかきたえぬれば、名殘も此日かぎりならんと、人〳〵は次の間にいなみて、なにとわきまへたる事も侍らざる也。午の時ばかりに目のさめたるやうに見渡し給へるを、心得て粥の事すゝめければ、たすけ（介）おこ（起）されて、唇をぬらし給へり。その日は小春の空の立歸りてあたゝかなれば、障子に蠅のあつまりける（居）をにくみて、鳥もちを竹にぬりてかり（狩）ありくに、上手と下手のあるを見て、おかしがり申されしが、その後はたゞ何事もいはずなりて、臨終申されけるに、

誰も〳〵茫然として終の別とは今だに思はぬ也。此夜河舟にてしつらひのぼる。明れば十三日の朝、伏見より木曽塚の舊草に入れ奉りて、茶菓のまうけ、います時にかはらず。埋葬は十四日の夜なりけるが、門葉焼香の外に、餘哀の者も三百人も侍るべし。

十八日

所願忌

湖南・江北の門人おの〳〵義仲寺に會して、無縁塔を造立す。面には芭蕉翁の三字をしるし、背には年月日時なり。塚の東隅に芭蕉一本を植て世の人に冬夏の盛衰をしめすとなり。此日百韵あり、略之。

なきがらを笠にかくすや枯尾花　其角

温石さめてみな氷る聲　支考

行燈の外よりしらむ海山に　丈草

乃至

霜月三十日

此時は伊勢の國にありて、我草の庵にこの日の供養をまうけ侍る。

大練忌

葉落て山つきぬれば、曉の雲の歸るべきたよりもなく、日暮て道遠ければ夜の鶴のうらむべき方もなし。されば此叟の宿世いくばく人にかちぎりをきける。生前の九十日はしらぬ事のくやしさをかなしみ、死後の四十九日はかへらぬ事のかなしさをくやむ。すべての明暮は誰がためにかかなしみ、誰がためにかくやめるならむ。

節〳〵のおもひや竹に積るゆき　支考

右は去年の冬季歸鳥庵におゐて記焉。

京都　附嵯峨

去年の夏なるべし
去來別墅にありて

朝露によごれて涼し瓜の泥　翁

人〳〵つどひゐて、瓜の名所なむ、
あまたいひ出たる中に

瓜の皮むいたところや蓮臺野　仝

文　通

その比支考は下の京に侍りて、文つかはしける
返事に、

されば[illegible]たる
二種被レ懸ニ御芳情ー旅店の一德珍重
去来、[illegible]わすれ候。
不レ浅賞翫申候。今日去来きせるの
御出の方ニ而、季を
掃除、去来一世の初たる故、きせるの
定可申候也。
掃除、壬五月と季を定て、折節ニ貴僧
初音信、是亦壬五月の季を定候間、向
後左樣ニ思召可レ被レ成候。晩方御入来
可レ仰候。
はせを
廿三日

かゝる夢うつゝもかへらずなりて、〳〵さみだれ
も後の五月の小文哉　さおもひやるばかりはか
なし。

賛

雲竹自書像

こちらむけ我もさびしき秋の暮　翁

是は湖南の幻住庵におはす時の作也、君は六十。
我は五十といへる長星一聚の前書侍りけるが、
あやまりておぼえ侍らず。

茄子繪

見せばやな茄子をちぎる軒の畑　惟然

その葉をかさねおらむ夕顔　翁

是は惟然、みのに有し時の事なるべし。

嵯峨　下句

ほとゝぎす大竹原を漏る月夜　翁

落柿舍

五月雨や色紙まくれし壁の跡

野明亭

瀧瀧の水汲よせてところてん

小倉ノ山院

松杉をほめてや風のかほる音

嵐山

六月や峯に雲置あらし山

清瀧

難波の部にほつ句あり、爰に出さず。

いづれの時の秋にや、去來・千子が伊勢まうでの比、道の記かきて深川に送りけるに、奥書の褒美ありて、

西東あはれさおなじ秋の風　翁

鳥部山

玉祭けふも焼場のけぶり哉　仝

是もいづれの秋にか侍らん。人間たゞ一日、朝暮鐘聲をへだつさいへる、世の觀相なるべし。

去來文通

囀るもかへりがけなる小鳥かな　浪化

三月十二日大津義仲寺、古翁の塚にまうでゝ

かげろふや苔につきそふ墓めぐり　仝

二三日蚊屋のにほひや五月闇　仝

菜の花や戸口見つけてまはり道　越中 嵐青

凭物を小たてにとるや冬ごもり　仝

早稲の香に蚊帳の動く夜明哉　同 呂風

呼にやる人ももどらずおぼろ月　加賀 北枝

蝸牛目やさますらん秋の風　仝

打綿の籠背負ふたるさむさかな　加賀 句空

此夏賀茂祭りにまうでゝ

剃さげのあふひをはさむ烏帽子哉　長崎 魯町

風口に來てはねころぶ涼みかな　同 卯七

ひとり寐はどちらむきても寒かな　同 野青

此冬の寒さもしらで秋の暮　惟然

谷間に橋も見えけり雲の峯　野明

万歳やけふ來て御所の菖蒲　野童

素袍ばかり着しゝ老人はちがひゆ

百八の馬も通るや鉢たゝき　風國

初花をふれてありくや肴うり　仝

ほとゝぎす船は追手(おいて)に走る也　壺中

落柿舎

放すかと問るゝ家や冬ごもり　去來

名月

岩はなやこゝにもひとり月の客　仝

此夏回國の時、
みのにて申侍る。

夏かけて眞瓜も見えずあつさ哉　仝

此句はみの(美濃)へつかはし候へども、懸二御目一候。
尤中捨にて候。
七月八日

哥仙

猫の子の巾着(きんちやく)なぶる凉みかな　去來

塀のかはりにたつる若竹　支考

折角とちか(近)道來ればふみ込て　風國

旦那とおれが蕎麥のあつらへ　來

薄絹の羽織も後の十三夜　考

此秋畑のやまい氣もなし　國

御遷宮松坂までは用もあり　來

一門中(ぢう)に齋(とき)のやくそく　考

どうよく(胴慾)に闇きさ月の廿日過　國

下の村から牛の放るゝ　來

笠着せて先へたてたる乙なすこ　考

見えた通は伯母むこの山　國

商も片手わざなる肤使宜　來

十六日は盆の草臥　考

食(めし)喰ふてその儘戻る宵の月　國

時雨も露も北山の庭　來

花の時東寺(とうじ)の塔を横に見て　考

走穂わたる麥の春風　國

鶯の啼日は旅のおもはるゝ　來

壁うちはなす二枚戸の間　考

あほう(阿呆)を使にやりて案じるる　國

から神鳴のいとゞ赤照　來

萱がほの花遣ひかゝる砂畠　考
　簗瀬の下を渡る淺川　園
鞍ぐるみ蒲團しきたる迎ひ馬　來
　酒とあぶらの所帶半分　考
よい時に上方筋を見て仕舞　園
　今年の雪のどつかりと降　來
月寒くねられぬ宵の放下僧　考
　隣の井戸はちつと迷惑　園
門に出て聞合せたる肴賣　來
　土用の風のきのふけふ吹　考
木曾川のゐせきにかゝる十五村　園
　若宮殿に時の鐘つく　考
朝起の花まださきひらきやう　來
　廣い屋敷の柳しだるゝ　園

今年元祿乙亥の夏四月二十五日、桃花坊ニおゐて記焉。

湖南部

元祿三年の秋ならん、木曾塚の舊草にありて、敲戶の人〳〵に對す。

草の戶をしれや穗蓼に唐がらし　翁
稲すゞめ茶の木畠や迯どころ

そのゝちは武の深川に有しが、去年の秋文月の始、ふたゝび舊草に歸りて、

道ほそし相撲とり草の花の露
木つゝきの入まはりけり藪の松　丈草
蕎麥の花まちてやたてる岡の松　支考

此二句も木そ塚の前境なるが、藪の松・岡の松とて阿叟もおかしがり申されしに、それも耳底の名殘とおもへば、爰には記し侍る也。

三夜の月

是もむかしの秋なりけるが、今年は月の本すゑを見侍らんとて、待宵は楚江亭にあそび、十五夜は木そ塚にあつまる。いざよひは船を浮て、

さゞ浪やかた田にかへるさよめる、その浦の月ななん見侍りける。路通がまつ宵に月なさだむる文あり、支考が名月の泛湖の賦あり、阿叟は十六夜の辨をかきて竹内氏の所にとゞむ。此三夜な月の本末と名づけて、成秀・楚江が二亭に侍り。文しげゝれば爰にしるさず。

十四夜

うかるなよ跡に月まつ宵の興　　路通

十五夜

まつ宵はまだいそがしき月見哉　　支考

来るゝ友を今宵の月の客　　翁

五器たらで夜食の内の月見哉　　支考

十六夜　三句

やすくと出ていざよふ月の雲　　翁

十六夜や海老煎る程の宵の闇

その夜浮見堂に吟行して

鎖あけて月さし入よ浮み堂

おなじ年九月九日、乙州が一樽たづさへ来りけるに、

草の戸や日暮てくれし菊の酒　　翁

蜘手にのする水桶の月　　乙州

正秀亭初會興行の時

月しろや膝に手を置宵の宿　　翁

萩しらけたるひじり行燈　　正秀

去年の夏、又此ほとりに逍吟して、游力亭にあそぶさて

納涼　二句

さゞ波や風の薫の相拍子　　翁

湖やあつさをおしむ雲のみね

湖水田植

渺くと尻ならべたる田植哉　　仝

曲翠亭にあそぶさて、田家といへる題を置て

飯あふぐかゝが馳走や夕凉　　翁

夏の夜や崩て明しひやし物　　仝

是に今宵の賦をくはへて、後猿みのに入集す。爰にしるさす。

菜種ほすむしろの端や夕涼み　曲翠
螢迯行あぢさゐの花　翁

木間氏主馬が亭にまねかれしに、太夫が家名を稱して、吟草 二句

ひら〳〵とあぐる扇や雲の峯
蓮の香に目をかよはすや面の鼻

おなじ津なりける湖仙亭に行て

此宿は水鷄もしらぬ扉かな　翁

春

片岨や麥にふり込はなの枝　曲翠
山ざくら散るや小河の水車　智月
蟹の泡吹て入日のさくら哉　臥高
鶯の手をくだきたる日和かな　游刀

伏見にて

大名の字を桃のはたけかな　正秀
あさつきのむすびやすさよ霜の杲　吐龍
春雨やぬけ出たまゝの夜着の穴　丈草
鼠色になる迄梅のにほひ哉　本間丹墅
白雲を瀧にけおとす雲雀かな　女万里

夏

ひだるさよ竹の子風の窓の中　木節
月代に夢見て飛か蟬の聲　正秀
日のあつさきはまる比や百合の花　探芝
涼しさやうか〳〵行ば行どまり　里東
いそがしき中をぬけたる涼ミ哉　游刀
馬柄杓を岩にわり込清水哉　野徑
くだり坂馬もあふのけほとゝぎす　本間安世
つらなりて鵜の巣にすがる螢かな　吐龍
螢火や葉かげに光る瓜の肌　臥高
蝸牛土もつかずに垣ねかな　楚江

白牡丹子は幾たりも持ければ　知月

秋

稲づまや池にこぼるゝ宵のやみ　臥高
稲妻に座を渡してや消る虹　正秀
頽みたる竹にはなるゝむかご哉　野徑

別墅

いざよひの雲やしくらむ蓼の花　曲翠
名月や座敷をのぞく勝手方　昌房
棉の簀に卷込められしいなご哉　仝
堂頭の新そばに出る麓かな　丈草
秋さびしいづこをさして無分別　木節

冬

夜あらしや鴨の腹する長等越　正秀
それ鷹の鈴振まはるみぞれ哉　仝
一僕のもつものおほき時雨かな　安世
から船の黒津に戻る時雨かな　探芝

初雪のあとに氣の付やなぎ哉　里東

難波

四つ橋の角立けるぞ冬の月　乙州
宵月のしか〳〵とてるさむさ哉　臥高

奈良の御祭に

雪の日やにぎりつめたる舞扇　丹墅
牛の尾にくるふ雀や雪の上　臥高
寒る夜や海に落込む瀧の音　曲翠
一よさに猫も紙子もやけど哉　丈草

哥仙

へた〳〵と雲のしろみや郭公　臥高
もみ茶こぼるゝ芝原の上　支考
草臥た脚をちよつ〳〵と折まげて　正秀
秋の節供はあそぶ空なき　臥高
其儘に雨は晴たる宵の月　支考
うまいところを起す肌寒　正秀

童のつゝんだ物をうれしがり　高
木屋崩して普請はたつく　考
隣からもらひに來たる馬の水　秀
祭のはなし見いてくやしき　高
帷子の訴訟を姉に談合する　考
ひつさに待し裏むきの用　秀
ちらりとも動かぬ萩に月の影　高
あつたら穐を連の無風雅　考
濁り酒鼻も醉はずに寒がりて　秀
狀の返事を立かゝりよむ　高
何方も今年の花は十日過　考
菜種の中の雲雀出て啼　秀
在郷から音信したる獨活一把　高
よんだ女房を寄合てとふ　考
めつそうに白子の濱の年じまひ　秀
扨もふつたる雪の明ぼの　高
手もあやに文箱の深紅かゞやきて　考
ついしか戀のけぶらいもせず　秀

草履をばけふのもうけに破らかし　高
蚊屋のそばにて茶漬喰也　考
商の工夫に落ぬ盆の前　秀
月夜はとかく十五十六　高
椎柴のちいさい庵に門立て　考
どんな男が木を割て居る　秀
とろ〱と油のやうな天氣相　高
馬糞の上に蝶の飛ちる　考
千石の高屛越に華を見て　秀
三月盡を出來されたげな　高
顔つきの猿に似たるは淋しさよ　考
客にわせても誰もかまはぬ　秀

右一集はことし元祿乙亥の夏、四月十二日
木村探丸の舊宿におゐて記焉。

連衆十五人

笈日記　中巻

彦根部

元祿五年神な月のはじめつかたならん、
月の澤さきこえ侍る
・明照寺に羇旅の心を澄して、

たふとかる涙やそめてちる紅葉　翁
一夜靜るはり笠の霜　李由

僧の李由は風雅の心ざし深くして、阿叟の病中にも難波にくだり、そのゝち木曾塚の埋葬の夜をも見はてゝ、ふかく生前の形見をのぞまれしに、遊笠をおくりつかはしける也。此笠は洛の野童子が阿叟の生前に約しをきたるに、その事ならずして此變にあへる事をかなしみ、七日の會に塚の前にそなへける笠也。まことにもろこしの季札がつるぎをかけたるたぐへのみならんや。かの一夜とちぎり捨しはり笠の霜も、幾年の記念にか、さりつたふべき也。されば埋葬の夜にて侍らん、李由申されしは、此叟のめでたくおはすならば、伊勢の行脚の後は、かならず吾が月の澤にもさちぎりをきし事の、雨となり雲となりて、万里の幽冥にへだゝり行給へる事の、いかなる不幸にか侍らんさて、秋もぬるゝ斗きこへ侍るに、いざや君にさきだちて、いせへさちぎりをきしものは、いかになし侍らんさてさもに泣ける也。

そのころ、そのほさりの田家に宿して、

稲こきの姥もめでたし菊の花　翁

是もおなじ時に供せられて、

打過て又秋もよし梅紅葉　桃隣

次の年ならん、神な月三日の夜許六亭にて野仙あり。爰にしるさず。

けふばかり人も年よれ初しぐれ　翁

深川の草庵をさぶらひて

寒菊の隣もありやいけ大根　許六

冬さし籠る北窓の煤　翁
月もなき宵から馬をつれて來て　嵐蘭
是は嵐蘭が身まかりしあさのなつかしさに、此三句を出し侍る。
春風や麥の中行水の音　木導
かげろふいさむ花の糸口　翁

春
正月も四日五日や茶椀賣　馬佛
春雨に大工づかひや北の院　汶村
藤かざす人や大津の繪の姿　許六
行春にきのふもけふも茶漬哉　李由

夏
石竹(せきちく)や紙燭して見る露の玉　許六
田仕事の中にも淸き早苗(さなへ)哉　李由
傾城のかはゆがりけり團(うちは)賣　木導

煎たつる醬油麥や蟬の聲　朱廸

秋
秋風に吹かれがほ也市女笠(いちめがさ)　汶村
山伏の貝すさまじや生身魂(いきみたま)　朱廸
峯入の笠もとらるゝ野分哉　許六
さし櫛の蒔繪うつくし相撲取　木導

冬
夕露の何となりたる今朝の霜　老人 如元
木がらしや宿にとりつく暖(あたゝ)まり　汶村

留別
深川の草庵をいづるとて
木枯やあとにひかゆる富士(ふじ)の山　許六
田ノ上や名字(みやうじ)もつたる網代守　朱櫓
しみ〲と餅腹さむき亥子(いのこ)かな　徐寅
蠟燭に鷹の眼(まなこ)の光かな　木導

歌仙　　支考

卯の花に祈り過たる曇り哉

雉子啼あとの豆のむら生　許六

溝川に晝食くひの鍬つけて　李由

茶賣の影をむすめ出て見る　汶村

余所よりは夜明のはやき山の月　木導

牛ふみ分るくま笹の露　考

初秋やみのゝぢに入れば米の味　六

野郎まはしの宿のつれ/\　由

浪人の女房衆をこゝろがけ　村

さい/\涼む藪の片側　導

湯をわかす釜のあたりを掃くべて　考

在所のものゝ呼出しに來る　六

五十日寐て居たうちの小借錢　由

雀しらずの色む皿畑　村

引つれて馬衣も寒き山颪　導

道者わかるゝ關川の月　考

二三軒家の後の花盛　六

大きな蟻のあたゝかに出る　山

開帳を延して見たる日の永き　村

なんにもかゝぬ屛風一双　導

月雪に飛彈の金森家ふりて　考

住持に化た狸煎て喰ふ　六

雇人の半分聞てはや合點　由

ちぎつて捨る裾の瓔珞　村

吹まくる雪隠鷹をつかまへて　導

こちの芦毛もちう戻ころ　考

泣やうな日和もようはこたへたり　六

千石岩の松の靜さ　山

うろ/\と扶持に離し鷹の影　村

上をふさいで普請落つく　導

うそついて晝からあがる手習子　考

祖父をのぞけば目を明て居る　六

もらふたるあかの強飯のやんはりと　山

用にもたゝぬ口たゝく也　村

幾筋も道の付たる花のかげ　導

とつとの空に雲雀まばゆき　筆

元祿乙亥の今年四月二十日於老井におゐて記焉。

連衆九人

大垣部

貞享元年の冬、如行が舊第に旅寐せし時

霜寒き旅寐に蚊屋を着せ申　如行

古人かやうの夜の木がらし　翁

此時世ないかにおもひ捨給へるならん。〽薄な霜の髭四十一　と申され侍しも、此所にてあなるよし。すでに初老にてはありけるかし。

千川亭

折〳〵に伊吹を見てや冬籠　翁

斜嶺亭

戸をひらけば、西にしに山あり。伊吹といふ。花にもよらず、雪にもよらず、只これ孤山の徳あり。

其まゝに月もたのまじいぶき山

左柳亭

はやくさけ九日もちかし菊の花

畫讃

西行の草鞋もかゝれ松の露

菊　如行亭

痩ながらわりなき菊のつぼみ哉

竹　木因亭

降ずとも竹植る日は簑と笠

是は五月の節たいへるにや、いと珍し。

木因亭

かくれ家や月と菊とに田三反　翁

おなじ比、

舟にて送るさて

秋の暮行先〳〵の苫屋かな　木因

荻にねようか萩に寐(いね)うか　翁

文通

何某新八去年の春みまかりけるを、ちゝ(父)梅丸子もとへ申つかはし侍る。

梅が香に昔の一字あはれ也　武陵芭蕉

一歳の夢のごとくにして、猶彿立さらぬ歎のほど、おもひ(思)やりける斗に候。

二月十三日

梅丸老人

時鳥聲横ふや水の上　聲や横ふか　一聲の江に横ふやほとゝぎす　水光接レ天白露横レ江の字猶句眼なるべしや。ふたつの作いづれにやと推稿難レ定所、水沼氏沾徳(閭)と云もの訪來れるに、かれ物定(ちかさだめ)の博士(はかせ)となれと、兩句評を乞。沾曰、横江の句文ニ對メ考レ之時は、句意尤いみじかるべければ、江の字拔レ之、水の上とくつろげたる句のにほひ、よろしき方に思ひつゞくべきの條申出候。とかくする内に、山口素堂・原安適(あんてき)など詩歌のすきもの共入來りて、水上の聲よろしきに定りて事やみぬ。させる事なき句ながら、白露横といふ奇文を味合と御覽可レ被レ下候。

はせを

荊口丈

春

玉椿扇にをき(置)てさかりかな　如行

絹ばりに一方(ひとへ)たのまうさくらかな　斜嶺

のんとりと山は日の出るさくらかな　水莫

むつ／＼とにほふでもなし桃の花　木因

三日月にけしき過たる朧かな　支川

かげろふのきほひかゝるや菜園もの　仝

その傍の岩までほしきつゝじ哉　柊角

大夜着の裾きて寐るや春の雨　呉竹

夏

枕蚊屋子共にかりて晝寐哉　斜嶺

蒲團きてあたま斗や蚊屋の內　水魚

蚊屋釣そめて

蚊の聲を隣のやうに聞夜哉　呉竹

わづかなる青雲ゆかし五月雨　如風

川端やくゞり明れば入ほたる　仝

江のほとり

足高に涼しき蟹のあゆみ哉　木因

家主の寐てゐるもよし杜若　如行

四十二賀

二親とすゞむ心の自慢かな　斜嶺

順禮を迎て

屓摺をぬがば出さん鮎のすし　如川

穐

旅人や通りあはせし不破の月　木因

名月にあからみそめよ櫨楓　文鳥

夕顔の蔓仕舞ばやけふの月　怒風

月や空橋の下行帆かけぶね　呉竹

顏のしゝ落て年よる月見かな　斜嶺

蜻蛉のつゝとぬけたる廊下哉　仝

玉祭

棚經や手まはしばやにはさみ箱　如行

立かはり茶の下燃す夜寒かな　水魚

冬

炭の火の針ほど殘る寒さ哉　文鳥

葉の食は女房の喰ふ寒さかな　如行

初雪や片髭剃てさしのぞき　仝

朝風やひれ反かへる魚の凍　水魚

水仙のほつれかゝるや朝あらし　斜嶺

高網に鴨もぬからぬ羽音かな　怒風

たゞ廣ふ宇治の茶の木や冬籠　木因

元祿乙亥今年四月十六日、如行亭におゐて記焉。

連衆十二人

岐阜部

畫讃

こゝろ／＼見めぐりて、洛に暫く旅ねせしほど、みのゝ國よりたび／＼消息有て、桑門己百のぬしみちしるべせむとて、とぶらひ來侍りて、

しるべして見せばやみのゝ田植哥　己百

笠あらためむ不破のさみだれ　はせを

其草庵に日比ありて、

やどりせむあかざの杖になる日まで

貞享五年夏日

名にしおへる鵜飼といふものを見侍らむとて、暮かけていざなひ申されしに、人／＼稻葉山の木かげに席をまうけ、盃をあげて、

又やたぐひ長良の川の鮎なます　翁

夏來てもたゞひとつ葉の一葉哉　仝

鵜舟も通り過る程に歸るとて

面白てやがてかなしき鵜ぶね哉　仝

落梧亭

藏のかげかたばみの花めづらしや　荷兮

折てやはかむ庭の箒木　落梧

たなばたの八日は物のさびしくて　翁

その比ならん、落梧のぬしおさなき者を失へる事をいたみて

もろき人にたとへむ花も夏野哉　翁

似たかほのあらば出て見ん一おどり　落梧

されば夏野の花をはかなしと見たる叟、かつみられて、はかなしとおもふ親の心も、ともにさゝまるべかられば、落梧に四とせ斗先に身まかり、阿叟に去年の冬世をさり給へり。かくいふ

人も又は、いつか人にいはれんとおもへば、な
にゝさだむべき世のかぎりぞや。

稲葉山

撞鐘もひゞくやうなり蟬の聲　翁

十八樓ノ記

みのゝ國ながら川に望て水樓あり。あるじを
賀嶋氏といふ。いなば山後にたかく、亂山西に
重りてちかゝらず遠からず。たなかの寺は杉
の一村にかくれ、きしにそふ民家は竹のかこ
みのみどりも深し。さらし布所〳〵に引はえ
て、右にわたし舟うかぶ。里人の行かひしげ
く、漁村軒をならべて網をひき、鈎をたるゝ
をのがさま〳〵も、たゞ此樓をもてなすに似
たり。暮がたき夏の日もわするゝ斗、入日の
影も月にかはりて、波にむすぼりしかゞり火
の影もやゝちかく、高欄のもとに鵜飼するな
ど、誠にめざましき見もの也けらし。かの瀟
湘の八のながめ・西湖の十のさかひも、涼風一
味のうちに思ひためたり。若、此樓に名をい
はむとならば、十八樓ともいはまほしや。

此あたり目に見ゆるものは皆涼し　はせを

貞享五仲夏

その年の秋ならん。この國より旅立て、更科の
月みんとて

留別　四句

送られつおくりつ果は木曾の秋　翁

草いろ〳〵おの〳〵花の手柄かな

人〳〵郊外に送り出て、三盃を傾侍るに、

朝がほは酒盛しらぬさかり哉

ひよろ〳〵とこけて露けし女郎花

春

僧をとゞむる一興

一よさは盗人なりと花に僧　己白

穴熊や日裏の山の遲ざくら　僧一露

草の戸に薺斗は手のものぞ　蓬雨

若草はねぶる斗ぞ牛の舌　己百

蚫の髭になを静也春の雨　白蘋

何になる虫やらひとつ春の雨　長良 泊楓

水鳥のあとも濁るか朝がすみ　仝

山ひとつ拾ふた風のかすみ哉　低耳

立ながら乗物かきや雛の膳　仝

蜂の巣の親は幾つもあるものか　蓬雨

たつ蝶に随て行こゝろかな　一水

夏

くらけれどきらぬ榎ぞほとゝぎす　泊楓

鴉子のあぶなげもなき生立哉　白蘋

熊蟬に針などあらばたまるまじ　一水

廣き野や蛇のをらずば夕涼　一露

門涼み内には猫の棚さがし　己百

夏草やその長〳〵に風涼し　仝

風の柳うはの空なる涼かな　蓬雨

下ざまは初物はやし柏粽　仝

越前 伊呂の濱

蜑の子に髭ぬかせけり五月雨　低耳

秋

朴木の葉ほどは秋の色もなし　一露

桐の木の思ひきつたる一葉かな　泊楓

吹ふかぬ風の目利や早稲の花　己百

朝がほを又見なをせば哀也　低耳

念佛者は秋のさびしき顔もなし　一水

酒の菊どれをちぎらん咲かゝり　白蘋

柴栗も節供なりけり座敷つき　蓬雨

冬

夢うつゝ冬神鳴を夜着の中　白蘋

眞白に月を見透す時雨かな　一水

夜時雨や一言ぬしの出雲立　一露

うれしさや五十になれど雪丸げ　己百

はづみたるあんこの腹や薄氷　仝

馬上回頭

石山の鐘も音なき師走哉　蓬雨

瓜畠集

是は落梧のぬし、かねて撰集の事思ひたゝれけるに、その志ならずして、すたれむ事をおしみて、その方の人〳〵此部の末に録出し侍る。

夏之部

落梧なにがしのまねきに應じて、稲葉山の松の下凉みして、長途の愁をなぐさむほどに　はせを

山かげや身をやしなはむ瓜畠

若鳥のあやなき音にも郭公　其角

あまつさへくだり坂也ほとゝぎす　蕉笠

竹責てはづかしの世やほとゝぎす　梅餌

苗の色は早稲も中稲もひとつかな　落梧

さみだれや空まちの田の淺緑　杏雨

五月雨や晩にはすこし晴て見る　一髪

露沾公に申侍る

五月雨に鳰の浮巣を見に行む　翁

髪生て容顔青し五月雨　仝

をもだかも田草の數にとられけり　如行

取出してまた上に着る袷かな　李晨

神鳴のひゞきにちるかけしの花　蕉笠

岐阜山にて

城あとや古井の清水先問む　翁

山清水とかしたなさを命かな　落梧

蚊に聲のあればこそあれ夕凉　令木

笛さして川邊を行や夕凉み　鷗歩

山中泊

蚊のをらぬかはりに落る百足かな　一髪

夏草もまだ生出の男鹿哉　杏雨

晩涼

かゞり火に見れば知たる鵜匠かな　落梧

秋之部

いはふても心ぼそさよ蓮(はす)の食　一髪

よめぶりの動き出けり今朝の秋　落梧

加賀の國を過さて

熊坂がゆかりやいつの玉まつり　翁

秋野

名もしらぬ小草花さく野菊哉　素堂

なを聞てまた見直(みなほす)や草の花　低耳

扣(たた)かれて駒のかぎ行花野かな　炊玉

くねるとは萩もいはせよ女良花　一髪

片かげや茗荷の花のうすよごれ(汚)　梅餌

蜻蜓やとりつきかねし草の上　翁

白菊やさすがしらくる星月夜　杏雨

人聲やひとり坊主の菊ばたけ　嵐簑

末のおくれたまへる事はわりなき事也、さ世繼(よつぎ)の翁の物語にいへり。

その柞實(はゝそ)はどんぐりと申也　杏雨

薄色に南やあさき天の河　仝

或夜

翁の事を思ひて

稲妻の物にとまらぬすがた哉　落梧

秋の夜やかへりさうなる人の膝　一髪

なた豆に置ほどもなし秋の霜　蕉笠

かきちらす鶏にくし稲の霜　李晨

たのむ事ありて、人のがり(許)文やりけれど、よすがなければ

我が文はいつ松茸(茸)のつゝみ燒　杏雨

名月

蝙蝠の飛(とぶ)をくま(隈)なる月見哉　落梧

此月見今年の米のにほひかな　蕉笠

十六夜

いざよひのいづれか今朝に殘る菊　翁

十七夜

月の名もまだあるうちぞたのもしき　落梧

九月十三夜

後の月又めづらしや秋茄子　杏雨

冬之部

そのゝちは虫の音もなし神な月　一髪

空しみて時雨もやらず神無月　李晨

盗人のあとおそろしき時雨哉　嵐篁

時雨せぬ前とはちがふ紅葉哉　鴎歩

初雪や夜着からのぞく懶さ　落梧

はつ雪のたらぬほど降柳かな　蕉笠

雪の日や疊ぬくとき人のあと　梅甜

大雪や苫屋の内の咳ばらひ　一髪

酒のなるはもてなしやすし雪の暮　杏雨

如意輪は人の心をおぼしわづらひて、つら杖をつきてをはす。

ぬすむともしらでかき來る落葉哉　一髪

鶏の蹴爪にかゝる落葉かな　梅甜

鼾かく衛士やつみなき御佛名　落梧

お火焼やたま〳〵鍛治が顔白し　李晨

少年を失へる
人の心を思ひやりて

埋火もきゆや泪の煎る音　翁

此聲や宵に通りし鉢たゝき　炊玉

豆腐ひく寒さくらべよ鉢たゝき　落梧

春之部

山伏も花見にまじる木かげかな　蕉笠

花に暮て反叺にはまるくらさ哉　杏雨

蜂の髭ににほひうつらん花の蘂　落梧

やまざくら瓦ふくもの先ふたつ　翁

山里は万歳おそし梅の花　仝

無慚愧

ねはん像錢かきよする僧いかに　落梧

をりざまに吹たてられし草の蝶　蕉笠

囀りや少はちがふはますゞめ　仝

春たつや今朝の雀の額つき　一髪
雲雀たつ川原柴胡や笹つばな　仝

歌仙

さつぱりと人なき暮のさくら哉　落
からす水のむ土堤のたんぽゝ　蕉笠
筍うちかたげ行春雨に　一髪
苞ことづかる里の明ぼの　杏雨
月影に皂角の實のから〱と　杏晨
秋たつ空の日和見に出る　梧
初鮭にろとりも客の隙いらず　笠
女房はたゞ奥にのみ居る　髪
しほ〱とむし齒おさゆる眉のきは　雨
結縁經のよみをはるまで　晨
あはれさは無言の比のほとゝぎす　梧
食ねくさしや夏の夕月　笠
舟底の高低ありて藻むしろ　髪

草臥たるか夢の見つゞけ　雨
講釋もきかでおこたる五六日　晨
いろりふさげば廣き住ゐや　梧
花に行顔知人もたづね寄り　笠
雛の調度を取ひろげたり　髪
春の朝嵯峨の佛餉まいらする　雨
大黒棚のとぼし消ぬか　晨
何事も心にもたでかいころひ　梧
あまり暑しと水あびに來ん　笠
むら〱と李ばかりに市たてゝ　髪
寐起のまゝのあたまつき也　雨
ばち〱と竹さしくべてあたりいる　晨
粥うちあくる門の槽　梧
徹書記が來むと告こす初雪に　笠
冬のぼたんのいとゞ唐めき　髪
更る月そら醉をして立出る　雨
秋風さむく待てゐるらむ　晨
遊君の衣かゝえ行露しぐれ　梧

おはちやくになる旅のやすらひ　笠
汗ふけと肥たる背さしむけて　髮
まだ年わかき驗者成けり　雨
座つきにはまづ餅をつく花の晝　晨
上下ゆるす宿の梅がえ　執筆

元祿乙亥のことし四月十二日、岐山の草々庵におゐて記焉。

連衆十八人

尾張部

去年元祿七年前の五月なるべし。尾張の國に入て、舊交人々に對す。

世を旅にしろかく小田の行戻り　翁

閑居をおもひ立ける人のもとに行て、

涼しさはさし圖に見ゆる住居哉　仝

元祿三年の冬神な月廿日ばかりならん、熱田あつた梅人亭に宿して、塵寰の閑を思ひよせられけむ。九衢齋といへる名を殘して、

水仙や白き障子のとも移り　仝

おなじ冬の行脚なるべし。はじめて此叟に逢へるとて

奥底もなくて冬木の梢かな　露川
小春に首の動くみのむし　翁

抱月亭

市人にいで是うらん笠の雪　翁
酒の戸たゝく鞭の枯梅　抱月

是は貞享のむかし抱月亭の雪見なり。おのおの此第三すべきよしにて、幾たびも吟じあげたるに、阿叟も轉吟して、此第三の附方あまたあるべからずと申されしに、杜國もそこにありて、下官もさる事におもひ侍るとて、

朝かほに先だつ母衣を引づりて　杜國

と申侍しと也。されば鞭にて酒屋をたゝくとい

へるものは、風狂の詩人ならばさも有べし。枯梅の風流に思ひ入らば、武者の外に此第三有べからず。しからば此一座の一興はなつかしき事かなさ、今さらにおもはるゝ也。

ためつけて雪見にまかる紙子哉　翁

面白し雪にやならん冬の雨

おなじ比ならん。杜國亭にて中おしき人の事、取つくろひて、

雪と雪今宵師走の名月歟

そのさしあつ田の御造營ありしを、

とぎ直す鏡も淸し雪の花

防川亭

香を探る梅に家みる軒端哉

病中

藥のむさらでも霜の枕かな

しのぶさへ枯て餅かふやどり哉

尾張國あつ田にまかりける比、人〳〵師走の海みんとて、舟さし出て

海暮て鴨の聲ほのかに白し　はせを

おなじ比鳴海にわたりて

星崎の闇を見よとや啼千鳥　仝

畫讚　四幅

巴丈亭

はつかあまりの月かすかに、山の根ぎはいさ闇、こまの脚もたど〳〵しくて、落ぬべき事あまたゝびなりけるに、數里いまだ鷄鳴ならず。杜牧が早行の殘夢、小夜の中山に至ておどろく。

馬に寐て殘夢月遠し茶の烟　はせを

三聖人圖

月花の是やまことの主達

盤齋背むきの像

團もてあふがん人の背つき

菊花ノ蝶

秋をへて蝶もなめるや菊の露

題　二句

野中の日影

蝶の飛ばかり野中の日かげ哉

雲雀ふたつ

永き日を囀りたらぬ雲雀かな

不覺レ閑　三句

杉の竹葉軒（ちくえふけん）といふ
草庵をたづねて

粟稗にまづしくもなし草の庵

田中の
法藏寺にて

刈あとや早稲かた〳〵の鴫の聲

大曾根（おほそね）
成就院の歸るさに

有とあるたとへにも似ず三日の月

むかし此國より武江にくだるさて人〻に留別す。

牡丹しべを分て這出る蜂の名殘哉　翁

訪二杜國一紀行

すくみ行や馬上に氷る影法師　はせを

旅宿

ご（松葉）を焼て手拭あぶる寒さ哉

いらこ崎な
ロ渡して

鷹ひとつ見つけて嬉しいらこ崎

逢二杜國一

さればこそ逢ひたきまゝの霜の宿

麥はえてよき隱家や畠村

此時は越人も具せられしさかや。

寒けれど二人旅ねはおもしろき

次のさしならん。越人が方へつかはすさて、

二人見し雪は今年も降けるか

春

彌生篇

秀正が時代を啼か金衣鳥　巴丈

鶯や啼ずにあそぶ隙もなし　左次

童部が言葉によりて

鶯や藪ある家のはなし飼　斧芥

行がけや侍町のはなざかり　和泉

花にねていかなる事を鳥の夢　露川

畑守が苣に酢みそや華の客　松醒

らく／＼と寐て見る花やいま／＼し　凵山

あした来ばかたらず花を黒木うり　山石

きのふけふ海雲まちしか初櫻　抱月

今朝の事わするゝ山のさくら哉　犬山　不流

海棠の咲やめくらの晝の夢　杜旭

すい顏の花に咲たる野梅かな　犀角

笠ぬぎてかほ洗ふたる野梅哉　素覽

梅が香を澤山に吹みなみかな　鼠彈

客の歸るを送るさて

かしませに椿ちりたる小庭かな　直全

壁土の畔や水越す桃の花　素覽

火はもえて内に人なし桃の花　鼠彈

つんぶりと一日曇るやなぎかな　全

橋づめに菓子うる家の柳哉　捨石

追立て兎ころぶや岩つゝじ　犬山　隨岐

つばくらや糸に羽を揺いかのぼり　不流

白雲の糸にたはむや紙鳶　犬山　梅仙

材木に居りわづらへる胡てふ哉　衣吹

がやつきて水田の星に蛙かな　捨石

一節は麥あからむや藤の花　犬山　呑水

むら雨や苞に花もつ茄子苗　左次

夏

郭公啼やしづかに苣の薹　露川

寐ほうけ一髪のそゝけやかんこ鳥　松醒

若竹や寄合つきの臼の音　友巴

晝がほや日はかたむかず橋ばしら　杜旭

月涼し影すい／＼とはし柱　左次

銀河（あまのかは）瀬越に涼し夏の月　素覽

箱根山

湖のなぎさやにごる栗の花　鼠彈

菱咲て野中は後こそばゆし　巴丈

黒き葉のにほひも暑し夏木立　仝

桐の花ちるや是から夏木だち　松翁

用いふて門から戻る蚊遣かな　千聲

蚊柱や捨子もあそぶ宵の程　和泉

庭鳥もなかぬ在所や五月雨　枝殘

片ふきに嶋のかすりやしやがの花　梅仙

訪二幽棲一

麥刈に汲でもらへる清水哉　抱月

白雨を見てゐる東あふみ（近江）かな　仝

秋

秋立や竹の中にも蟬の聲　素覽

早稲の穂や鮒のひたつく桶の中　和泉

穐まちてはづむ桔梗のつぼみ哉　左次

穂薄の便おかしや晝ぎつね　友也

どか雨に算をみだすや山すゝき　露川

くどからぬ花や野菊に殘る月　仝

かまきりの鎌にはゞむや芋の莖　大山如山

松茸や飯臺につく田舍客　衣次

松くべて粗する宿や鼻の穴　呑水

うき別あとに連子のうづら哉　杜旭

冬

草むらの花は黄に咲小春哉　左次

浮あがる土の黒さよ冬ぼたん　杜旭

かまきりや枯葉の笹は右ひだり　山山

薪部屋の女よばるゝしぐれ哉　捨石

もや賣の聲も夕日の時雨哉　卍春

十夜迄たはい〳〵て熟柿哉　卜志

一振すつほりかねや冬籠　梅仙

食くふて寄かゝりたる火燵哉　不流

雲の色は海鼠へぎたる空さむし　素覽

桐の木はあかはだか也冬の月　仝

凩の志賀は哥にもまだきかず　巴丈

見レ雪ニ興

韋駄天のはやさも見たし雪の原　一狐

錢買がさしきらしたる雪の道　露川

隱士山田氏の亭にとめられて　はせを

水雞啼と人のいへばや佐屋泊

苗の雫を舟になげ込　露川

朝風にむかふ合羽を吹たてゝ　素覽

追手のうちへ走る生もの　翁

さかやきに暖簾せりあふ月の秋　川

崩てわたる椋鳥の聲　覽

耕作の事をよくしる初あらし　翁

豆腐あぢなき信濃海道　川

尻敷の緣とりござも敷やぶり　覽

雨の降日をかきつけにけり　翁

炮烙のもちにくるしむ蠅の足　川

藺を刈あげて門にひろぐる　覽

切麥であちらこちらへ呼れあふ　翁

お旅の宮のあさき宵月　川

うそ寒き言葉の釘に待ぼうけ　覽

袖にかなぐる前髪の露　翁

咲花に二履はさむ無足人　川

打ひらいたるげんげしま畑　覽

山霞鉢の脚場を見おろして　支考

船の自由は半日に行　左次

月夜にて物事しよき盆の際　巴丈

かりもり時の瓜を漬込　川

三鉦の念佛にうつる稲の風　覽

使をよせて門にたゝずむ　考

我戀は逢て笠とる山もなし　次

年越の夜の殊にうたゝ寐　丈

扨は下戸いちこのやうに成にけり　川

達者自慢の先に立れた　覽
金剛が一世の時の花盛　考
つゝじに木瓜の照わたる影　次
春の野のやたらに廣き白河原　丈
三俵つけて馬の鈴音　川
それ〲に男女も置そろへ　覽
よめらぬ先に娘參宮　考
あり明に百度もかはる秋の空　次
疊もにほふ棚の松茸　丈

元祿乙亥のとし三月二十六日、尾城の白鷺亭におゐて記焉。

連衆四十三人

伊勢部

貞享の間なるべし。此國に抖擻ありし時、

奉納　二句

はせを

西行のなみだをしたひ、増賀の信をかなしむ。

何の木の花ともしらずにほひかな
裸にはまだ二月のあらし哉

おなじ春ならん、なにがし寺に詣して

菩提山

神がきや思ひもかけず涅槃像

二乘軒

山寺のかなしさつげよ薢ほり

守榮院

藪椿門はむぐらの若葉哉

楠邊

門に入ればそてつに蘭のにほひ哉

逢二龍ノ尙舍一

盃に泥な落しそむら燕

湖來亭

物の名を先とふ荻の若葉哉
梅の木になをやどり木や梅の花

是はその父弘氏のぬし、此道の風流に名あるゆへなるべし。

路草亭
紙ぎぬのぬるともをらん雨の花

廬牧亭
蔦植て竹四五本のあらし哉

園女亭
暖簾の奥ものゆかし北の梅

かへし
時雨てや花迄残るひの木笠　その女
宿なき蝶をとむる若草　翁

讃　二幅

あすは檜の木とかや、谷の老木のいへる事あり。きのふは夢と過て、あすはいまだ來らず。たゞ生前一樽のたのしみの外に、あすは〳〵といひくらして、終に賢者のそしりをうけぬ。

さびしさや華のあたりのあすならふ　はせを

美人圖
蘭の香や蝶のつばさにたきものす

春

梅の花
垣草の古葉も寒し梅の花　園女
賣家の奥ほのくらしむめのはな　一道
日あたりの干塩にちるや梅の華　支考

さくら
掃人の跡はさだめぬさくらかな　柳玉
髮そりて見たきもの哉山ざくら　流霞

峰に花ちるといふ七文字をおきて
米踏や峰に花ちる朝あらし　路卿
花曇けふはどこぞへいき日哉　夕穐

朝熊山　二句
麓から我を見るらむ花の笠　園女
院〳〵の斎食時や花ざかり　賀枝

手づかみに菜(な)はあれたる花見哉　柴友
へん〳〵と花に鳥啼日和かな　芦本
裸子の菜の花くゞるひよりかな　信昌
結構な日を鳴くらす蛙かな　乙由

小鮎　二句

青柳に頭そろえて小鮎かな　口遊
早川を麁相にのぼる小鮎哉　桂之

鶯　二句

鶯に一日なじむ日脩かな　乙由
鶯やかけつなけつに山屋敷　芦本
明ぼのや茶摘に犬もついて行　仝
種ものゝ俵や直に鳥おどし　園友
山吹のしろさやいまだ夜の深き　柳玉
垣越に李の花や星月夜　胡來

夏

ほとゝぎす　二句

つばくらのゐなじむ空や郭公　芦本
ほとゝぎす夜明〳〵のまだ寒し　乙由

杜若　三句

轉寐(うたゝね)や簀子(すのこ)の下のかきつばた　路草
水際を直さずもがなかきつばた　柳玉
濡色を持て出るやかきつばた　賀枝

百合草　二句

片つりに袂ひたすや車百合　口遊
百合の花風はあれども暑かな　柴友

芥子　二句

いくほどの世に奇麗なりけしの花　支考
蒔たらぬ苣(ちさ)のあまりや芥子の花　夜霜

夕がほ　二句

夕顔の形(なり)にくぼ(窪)むや藁廂　川舟
瓢箪のつるや隣をはゞからず　園友

節供　二句

聟が來て娘にけ込菖蒲哉　芦本
菖蒲(あやめ)葺(ふく)屋ねに日和の日利(めきゝ)かな　園友

納涼　四句

蜘の巣の顔なで居るや夕凉　信昌
客つれて畠見に行凉み哉　梅知
絹張をくゞりあるいて凉み哉　乙由
穴藏や瓜ひやしたる下凉み　一道

川逍遙

此中に冷麥喰ぬ人もなし　二木
河狩やおかでさし出る疝氣持　加青
鵜づかひの我も口あく拍子かな　柴友
蟬啼や川に横ふ木のかげり　園友

秋

月　三句

有明に顏ほす鬚がしわざかな　路艸
兀山の砂に小松や三日の月　賀枝
名月や濱邊の鳥の長高し　乙由

田莊

粟稗を刈れてあとの木槿かな　長利
新田の路のまばらや鴫の聲　園友

泣て來て子も食喰ふや稻の中　乙由
芋の葉よ動くについてひとなるか　信昌
朝がほを切そこなひし薄刄哉　柳玉
水栗に菊の香うつれ鱠皿　口遊

殘暑　二句

秋もまた膳すはりたる暑さ哉　乙由

宇都の山

初秋に日和あがりのあつさ哉　賀枝
細道や蚓のゝたる草の色　一道

鉢ひらき　二句

鉢ひらき彼岸に渡る小鳥かな　支考
竈馬や咳してのぞく鉢開　芦本

冬

十夜

小坊主の伯父に逢ふたる十夜哉　乙由

大根引　二句

ほか〳〵と鼻いき立や大根引　路艸

まづ二本寺へもやるや大根引　作者しらず

寒　四句

梅もどきこぼれ初たる寒かな　跋之
明家に階子かけたる寒さ哉　桂之
酒盛の張番したる寒かな　賀枝
眞丸に日の影さむし臍の先　芦本

火燵　二句

かはる〲火燵にあたる旅ね哉　一道
侍は腹さへ切ルに火燵かな　支考

千鳥　二句

むら千鳥蛤ふみの路淺し　柳玉
村千鳥水かすり行夕日哉　流霞

師走　二句

煤はきや馬のいなゝく藪の中　乙由

師走のそらの
あそぶ方なくて

掛乞に我庭みせむ梅の花　園友
手枕に花の夢みむとしわすれ　信呂

哥仙

てら〲と晝一しきり袷かな　園友
お下屋敷の牡丹見に行　支考
片簀に卵青ものとり入て　木因
吹あらしたる野分むら雨　乙由
五幾内の旦那を廻る秋の月　芦本
今朝あかつきの寐冷おぼゆる　友
六齋の掃除かゝさぬ砂の上　考
いつもやうに出來し淺漬　因
立前の着替をとりに狀添て　由
侍の子を弟子に肝煎　本
笋も半夏過れば卓散に　友
十日斗の旅をして來る　考
すまふたる跡から家の氣にいらず　因
手鍋をさげる秋の淋しさ　由
平押に小鳥の渡る河原畑　本

朴の廣葉の三日月に散　友
金の間の花はさびたる古法眼　考
初雷にほろ〳〵と降　因
朝東風に川のむかひの馬啼て　山
在郷の隙に莚うり出す　考
奉公もかせひで見たる若盛　友
二度ほど起てたばこ呑也　本
煤掃はことしも雪になりかゝり　因
源介樽の横に賑はふ　友
髭殿はよい仕合であるかるゝ　考
湯治の時の酒の友達　由
赤餅の苗をもらふて一せまち　本
番屋の蚊屋の低うたくなる　因
朝月のまだちろ〳〵と水の上　由
紅葉をおしむ明神の山　本
茸狩に子どもの足の達者さよ　友
馳走にあふて暮相に來る　考
首途も明日の手箱の荷ごしらへ　因
いとこ夫婦のいとゞ中よき　由
初華にひらりとはいる鶴大夫　本
凸の梅の大かたに咲　筆

今年元祿乙亥の夏五月十二日、直見齋におゐて記焉。

連衆十九人

笈日記 下卷

雲水部

今年元祿乙亥の春、伊勢の國より武江の方に旅だつとて

留別 二句

雁の聲おぼろ〳〵と何百里　支考

むまのはなむけしける人に

しら玉や梅のつぼみも一包み

餞別

見送らむ花もかすみも塩見坂　園友

鶯や尻もためずにいとま乞　斗從

川越てかいくれ見えぬ柳かな　芦本

花はまだかたへら寒き旅ね哉　賀枝

見ひらくやはなの天氣のあみだ笠　乙由

桑名 五句

古益亭

冬ぼたんちどりか雪のほとゝぎす　翁

おなじ比にや、

濱の地藏に詣して

雪薄し白魚しろき事一寸

此五文字いさ口おしとて、後には明ぼのとも置こえ侍し。

狼も一夜はやどせ芦の花

花を吸ふ虻なくらひそ友すゞめ

此二句も阿叟の吟なるよし。此ほとり漂泊の間なるべし。

又、いかなる時にか侍りけむ。

たがの權現を過るとて

宮人よ我名をちらせ落葉川

途中吟 五句

あれ是をあつめて春は朧也　支考

布子着て夏よりは暑し桃の花

小夜の中山より
かの大井川を
見渡して

日晴ては落花に雪の大ゐ川

安部河にたゞ
名のみして

水上は鶯啼て水浅し

箱根を越る日は
雪なを降ける。

鶯の肝つぶしたる寒さかな

武江

三月四日、武江にいたる。きのふは
桃花の節なりとて

鶏の獅子にはたらく逆毛哉　其角

つとめての日なるべし。其角・桃隣・介我、上野の
花みむとて、いざなひ行けるに、院〳〵の風流
など見ありきて、

椽からはこなた思ふや花の庭　仝

といへるは、いかなる時のほつ句にか侍らん。

今おもひ出るなどさゝめかし渡りて、その暮は
嵐雪亭にこみ入、酒のみてかへり侍る。
その比嵐雪亭に、句合の侍りけるが

其一

白つゝじまねくやう也角櫓　嵐雪

十二日は阿叟の忌日つとむるとて、桃隣をいざ
なひて、深川の長溪寺にまうで侍る。是は阿叟
の生前にたのみ申されし寺也。堂の南の方に新
に一簣の塚をきづきて、此塚を発句塚といへる
事は

世の中はさらに宗祇のやどり哉　翁

此短冊を此塚に埋めけるゆへなり。此ほつ句
ははせを庵の一生の無ゐなるべしと、杉風の
ぬし、語り申されし。
かの塚の前に香華をそなへ、まさ木の枝を折、
左右にかざしおきて、いふ事も思ふ事もなき跡
はしらずなりぬるよと、ふたりながら泣ていぬ。
その後は舊草を見に行けるが、たゞ見しらぬ人
の住てぞ侍るなる。

むかし此叟の深川を出るさて、此草庵を俗なる
人にゆづりて、

草の戸も住かはる世や雛の家

今はまことに、すますなりてかなし。

素堂亭

十日菊

蓮池の主翁、又菊をあい(愛)す。きのふは龍山の宴をひらき、けふはその酒のあまりをすゝめて、狂吟のたはぶれさなす。なを思ふ、明年誰か、すこやか(健)ならん事を。

いざよひのいづれか今朝に残る菊　はせを
残菊はまことの菊の終りかな　路通
咲事もさのみいそがじ宿の菊　越人
昨日より朝露ふかし菊畠　友五
かくれ家やよめなの中に残る菊　嵐雪
此客を十日の菊の亭主あり　其角
さか折のにゐはり(新治)の菊とうたはゞや　素堂

よには九の夜日は十日と、いへる事をふるき連哥師のつたへしを、此あした、しみ(紙魚)を拂ひて巾侍る。

又中比

戀になぐさむ老のはかなさ

むかしせし思ひを小夜の枕にて

我、此心をつれにあはれぶ。今なを思ひいづるまゝに

はなれじと昨日の菊を枕かな　仝

芭蕉庵

十三夜

ばせをの庵に月をもてあそびて、只月をいふ。越の人あり、つくしの僧あり、まことにうき艸のこらず水にあへるがごさし。あるじも浮雲流水の身さして、石山のほた(螢)るにさまよひ、さらしな(更科)の月にう

そぶきて庵にかへる。いまだいくかもあらず。菊に月にもよほされて、吟身いそがしい哉。花月も此外に暇あらじ。おもふに今宵を賞する事、みつればあふるゝの悔あればなり。中華の詩人わすれたるににたり。ましてくだら・しらぎにしらず、わが國の風月にさめるなるべし。

もろこしに富士あらばけふの月見せよ　素堂
かけふた夜たらぬ程照る月見哉　杉風
後の月たとへば宇治の巻ならん　越人
あかつきの闇もゆかりや十三夜　友五
行先へ文やるはての月見かな　岱水
後の月名にも我名は似ざりけり　路通
我身には木魚に似たる月見哉　僧宗波
十三夜まだ宵ながら最中哉　石菊
木曾の痩もまだなをらぬに後の月　はせを

仲穐の月はさらしなの里、姨捨山になぐさめかねて、猶あはれさのめにもはなれずながら、長月十三夜になりぬ。今宵は宇多のみかどのはじめて、みことのりをもて、世に名月とみはやし、後の月あるは二夜の月などいふめる。是才士文人の風雅をくはふるなるや。閑人のもてあそぶべきものといひ、且は小野の旅寐もわすれがたうて、人〳〵をまねき、瓢を扣、峯のさゝぐりを白鴉と誇る。隣の家の素翁、丈山老人の、一輪いまだ見たず二分虧といふ唐哥は、此夜折にふれたりとたづさへ来れるを、壁の上にかけて、草の庵のもてなしとす。狂客なにがし、しらゝ吹上とかたり出ければ、月も一きははへあるやうにて、中〳〵ゆかし

きあそびなりけらし。

貞享五戊辰菊月中仲旬

物しりに心とひたし後の月　蚊足書

十四日武江を旅たちけるに

餞別

高砂に足ふみもどせ山ざくら　介我

咲花の中をぬけ出て尻つまげ　乙州

見事なる旅の相手や花に鳥　桃隣

嶋田

十八日嶋田の驛に入て、如舟亭に足をやすめ侍る。此亭はかつて阿叟の往來の勞をたすけ侍るゆへありて、吟草もあまた侍りける中に、

額

五月雨の雨風しきりにおちて、大井川水出侍りけるにとゞめられて、しまだに滯留す。如舟・如竹などいふ人のもとにあそびて

ちさはまだ青葉ながらになすび汁　はせを

さみだれの雲吹おとせ大井川

竹ノ讃

たはみては雪まつ竹のけしきかな

今の嶋田よし切か門も見捨がたくて

かざの火も殊さらにこそ笠の雪　嵐雪

驚かぬ往來や冬の大ゐ川　桃隣

三河

新城(しんしろ)はむかし阿叟の逍遙せし地也。なにがし白雪といふおのこ、風雅の子ふたりもち侍る。二人ながらいさかしこくぞ侍る。阿叟もその少年の才をよみして、是を桃先・桃後と名づけ申されしを、支考も名の說かきてとゞめける也。

其にほひ桃より白し水仙花　翁

是は水仙の花を桃先・桃後といへるより、かくはいへるなるべし。

しのぎかね夜着をかけたる火燵哉　　桃先

節季ゆのはりあひぬかす明屋哉　　桃後

菅沼亭

京にあきて此木がらしや冬住る　　翁

おなじ比

鳳來寺に參籠して

木枯に岩吹とがる杉間かな

夜着ひとつ祈り出して旅ね哉

尾張

今月廿七日尾府にかへる。二十九日は杜旭亭にまねかれて、おの／＼春の名殘をおしみける。

三月盡　二句

ちり／＼に春やぼたんの花の上　　支考

鶯の調子かえたるあらしかな

卯月の始は、亡父の年忌つとむべきにあたりて美濃の路に旅立ける。

餞別

國／＼に殘しをかれける文のはし／＼、色紙・たんざくなどひろひあつめては、さかせばの伊勢の便にもさ、いさま乞もそこ／＼になりて、

つゝめ君笈の小文に花柑子　　左次

鶯はなけど卯月の別れ哉　　露川

竹の子や見えた通の旅すがた　　素覧

此翁の世をさりぬれど、その道は小文にとゞまれる心を

花橘それぞとにほふ障子越　　木之

美濃

此國は支考が古さとに侍れば、武府の行に先だちて、母堂をかへり見侍る。その比は二月にてありけむ、いなかのけしきまた珍しくて

前境　二句

くゝ立の花うちこはす彼岸かな　　支考

水澄て籾の芽青し苗代田

雲鴻のぬし、今は世を引かえて、わびし氣なるを思ひわびて

鶯や枯木がちにていたましき　支考
　雪の消れば畠もくろむ　雲鴻
春中は米をうるなと觸て來て　夕可
　水風呂桶のどこもさし合　均水
茸萱のもそつとたらぬ宵の月　閑如
　子共のつかひ八重手間になる　筆

各〻一順

遊處　三句

山寺

鳥の巣に葢(ふた)してをけば椿かな　支考

田家

燕についてはいるや箱まはし

別墅

歸るとて梅に一夜や四十雀

洲原

此すはらさいふ所は、左右に山かこみ、中には河舟の往來も侍りて、かの桃原のむかしも殊に思ひ出て、〽桃咲て石にかごなき山家かな　さ申侍しは去年の春にや侍らん。

可吟亭

朝鷹のぬれて出るや花の中　支考
　山から見れば城の長閑(のどか)なり　可吟
雛賣のやつと一駄をからにして　碧川
　降か〱と空の氣づかひ　指筭
寄鯵に網の手おろす暮の月　吟
　紙すきかゝる上原の稲　考
新蕎麥にお寺の衆を指呼て　筭
　芝居があれば仰(ゲウ)にそはつく　川
誰にやら鋸(のこぎり)かしてうろおぼえ　考
　蚤掃したる跡はすんなり　吟
初茄子花のすむ間の退屈さ　川
　行灯にむきて目藥の沙汰　筭
湯に入てけふの寒さを取かへす　吟
　秋の仕舞の年貢一段　考
桑名迄便船したる朝の月　筭
　澤山に居る鳫のほしさよ　川

風のものおはねば風も苦にならず　考

悟ッ仲間の丁ど四人　吟

支考五句　碧川四句　可吟五句
指算四句

岩崎

此地を過る事、四月十日の程なるべし。二竹堂に一宿す。此人はさるべき世を田舎にのがれて、淵明が三徑のむかしを、まねびゐければ

耕作のまづ手習や夏大根　支考

岐阜

遇ㇾ雨

うね〳〵にながるゝ雨やけしの花　仝

大垣

斜嶺亭

此亭より伊吹山をたゞちに見渡す。此山は此府の名山にもてなして、秋冬の風情はさらによし。

殊に夏草の生しげりて、青天にそゝぎたるが、いさぎよさに、〽涼風の青田におろす伊吹かなと申侍しに、吾叟の爰にも見、かしこにも見て、吟情を此山にまつはれけるもわりなし

誰家の伊吹ぞ軒の青あらし　支考

水魚・吳竹といへるはらからの人は、風雅の心ざし切にして、吾行脚をとゞめて、二人ながらよくもてなされければ

どこやらか菖(あやめ)ににほふかきつばた　仝

柏原

江水亭

行暮て蚊屋釣草にほたる哉　支考

彥根

卯月十八日許六亭に寄宿す。物語の序に、みづから繪かきたる色紙數多取出し給へるに、人〳〵の筆にて、その人のほつ句かゝせをきたるが、卷頭は先師はせを庵の四季の句にてぞおは

しける。くりかへしたる中に、梨の花の白妙に咲て、その陰に唐めきぬる人の驢馬の頭引たて、背むきに乘たる繪の侍り。是は支考が東路にて
馬のはすぼめて寒し梨の花　と申侍しほつ句かゝせむと思へるなるべし。されば此句のからめきて、詩に似たりと見給へる眼は、繪を得て俳諧をとり、俳諧をえて繪にうつし給へるならん。みづからなしをきたる事の此さかひにいたらざるは、繪につたなきゆへならんと、いさゝうらやましかりし。

されば人の句をきかぬ事たやすからじ。去年の夏、阿叟の桃花坊におはす時、人〻よりいて物語し侍るに、支考が集つくらば、なにがしの桐火桶に似せて侍らん、たとへば

梅が香にのつと日の出る山路かな

なまぐさし小なぎか上の鮠の腸　翁

梅が香の朝日は餘寒なるべし。小なぎの鮠のわたは殘暑なるべし。是を一躰の趣意と註し侍りと申たれば、阿叟もいとよしとは申されし也。

その後大津の木節亭におそぶとて

ひや〳〵と壁をふまえて晝寐哉

此句はいかにきゝ侍らんと申されしを、是もたゞ殘暑とこそ承りはへ、かならず蚊屋の釣手など、手にからまきながら、思ふべき事をおもひ居ける人ならんと、申侍れば、此謎は支考にとかれ侍るとて、わらひてのみはてぬるかし。

芹燒や縁輪の田井の初氷

此句は、初芹といふ事をいひのべたるに侍らんと、たづねければ、たゞ思ひやりたるほつ句なりと、おぼむかれにける。かゝるあやまりも、殊におほかるべし。

明日旅だゝんと
おもふ今宵

うのはなに祈り過たる曇かな　支考

餞別

駕籠わきの宿の方やほとゝぎす　許六

さしかえて扇持たる別かな　木導

湖南

二十二日木曾塚にいたりて、師の無縁塔を拜す。拜して、さしむかひぬける塚の神の、何ともいはざるはたゞかなし。その夜は舊草にむかしをしのぶとて、一夜寐侍りて、

夜咄のねぶたかりしも夏の夢　支考

湖水眺望

ほとゝぎす帆掛に出るや日枝おろし　仝

京

風國亭

羽づかひの空に浮ぶや郭公　支考

伊賀

二十六日猿雖亭にたゞよひつきて、撰集の事かたり出たるに、舊交の人〳〵つどひ入て、阿叟の生前死後をさだむるに、君子にしてあらそはず、かくありて此月もみそかばかりにして、伊勢の方に旅立ける也。

途中吟　二句

永所〳〵の山は覆盆子の盛哉　支考

松風を後にしさる田うえかな

伊勢

團友亭　三句

酒狂の後、人〳〵の口質をえらびてみむとて、

瓜喰ふて酒のむ腹は祭かな　支考

竹に寐てすべり落ばや夕凉

凉しさに中にさがるや青瓢

紀行　十六所

漂泊　九十日

雲水追善

悼芭蕉翁　尾州熱田　連中

その神な月中の二日、しばしさゞめず、今のむ

かしさはかはりぬ。何事もかくさわきまへかぬろなみだ思へばくやし。芭蕉翁、十とせあまりも過ぬらん、いまぞかりし比、はじめて此蓬萊宮におはして、〽此海に草鞋を捨ん笠時雨　さ心なさども、景清も屋しきちかき桐葉子がもさに、頭陀をおろし給ふより、此道のひじりとはたのみつれ。木枯の格子あけてば〽馬をさへ詠る雪　さいひ、やみに舟をうかべて涙の音をなぐさむれば〽海暮て鴨の聲ほのかに白し　さのべ、白鳥山に腰をおしてのぼれば〽何やらゆかしすみれ草　となし、松風の里・寐覺の里・かゞ見山・よびつぎの濱・星崎の妙句をかぞへ、終にかたみとなし給ぬさ、互に見やり泪の内に、人〳〵一句をのべて、西のそらを拜すのみ。

泣事も先力なき水の雪　桐葉
見る物にあはれ殘るや霜の塚　梅人
戀しさのうつりかはるや村しぐれ　辨三

伊賀の上野にたづねまかりて、紙子まいらせし事思ひ出て

悲しさの數にも入や新紙子　鷗白
木枯の名ばかり殘す木立かな　野遊
面影にみよや櫻は霜白し　湘水
冬枯て何をたよりに松の聲　南北
露霜の下にかなしや力草　馬蹄
何事も枯はつる世や冬の山　梨雨・
月寒てなき人忍ぶ影法師　水酉
なき人を思ひ出せとや鴨の聲　十水

我泣聲は秋の風　と聞しに、何事こ成給ひしかなしさ。
愁傷十方
なくて一字をたむけぬ。

塚も動け我泣聲は冬の風　東藤

悼二松倉嵐蘭一

金革を衽にして、あへてたゆまざるは士の志也。文質偏ならざるをもて、君子のいさおし

とす。松倉嵐蘭は義を骨にして實を腸にし、老莊を魂にかけて、風雅を肺肝の間にあそばしむ。予とちなむ事十とせあまり九とせにや。この三とせ斗官を辭して、岩洞に先賢の跡をしとふといへども、老母を荷ひ稚子をほだしとして、いまだ世波にたゞよふ。されども榮辱の間に居らず。日ゝ風雲に座して、今年仲秋中の三日、由井・金澤の波の枕に月をそふとて、鎌倉に杖を曳、其歸るさより心地なやましうして終にいきたえぬ。おなじき廿七日の夜の事にや。七十年の母に先立、七才の稚におもひを殘す。いまだをしむべき齡の五十年にだにたらず。公の爲には腹をし切ても悔まじきうつはものゝ、はかなき秌風に吹しほたれたる草のたもと、いかに露けくも口をしくもあるべき。今はの時の心さへしられて悲しきに、母の恨、はらからのなげき、したしきかぎりは聞傳えて、偏に親ぞくの別にひとし。

過つる睦月斗に稚子が手をとりて、予が草庵に來たり、かれに號得さすべきよしを乞。王戎五才の眼ざしうるはしと、戎の一字を摘て嵐戎と名付。其よろこべる色、今目あたりをさらず。いける時むつまじからぬをだに、なくてぞ人はとしのばるゝ習、まして父のごとく子のごとく、手のごとく足のごとく、年比云なれむつびたる倂の、愁の袂にむすぼゝれて、枕もうきぬべきばかり也。筆をとりておもひをのべんとすれば才つたなく、いはむとすれば胸ふさがりて、たゞをしまづきにかゝりて、夕の空にむかふのみ。

秋風に折て悲しき桑の杖　はせを

九月三日詣墓

みしやその七日は墓の三日の月

祭二圖司一

出羽國羽黒の麓なる圖司なにがし呂丸、四とせの先ならん、宮古の方をゆかしがりて、古・さは葉月中比にうかれたちて、野店の月・山橋の霜、かれておもひぬるま〻にわびけるとや。かくて武のはせを庵に旅ねしてしばしの秋をおしみ、洛の桃花坊にかりゐして、春のやがてきたらんといふ事をまつ。その春の花も半ならんほどは、支考にくみして、大和路の行脚もすべきなどさ〻めかしおもひゐけるに、む月の中比よりやみつき侍りて、何のすべきやうもあらで、春も二月の二日なるに身まかりける也。されば此郎は門にまたるべき子さへありて、妻はいさわかくて侍り。その夢におえぬつまこに、此便きかせ侍らば、まづ人をなむうらみ侍るべし。それ雲水漂泊のものはおもふ方もつましきゆへなりさ、誰〳〵もおもふかは。その比、是をきゝつたへ侍る人は、いとあはれとて、手むけしける人もおほかりしが、かつて涙子となりて、ひさへに客をあはれむといへる、まして此時の手向なるべし。

しに〻来てその二月の花の時　支考

鴈一羽いなでみやこの土の下　酒堂

土たかき所あはれや春の草　團友

當飯よりあはれは塚のすみれ草　はせを

雲水發句

春

切干の大根に梅のにほひかな　ミノ 闇如

鶯ののぞいて見るや梅の空　ミノ 黄蝶

訪二山隠一

梅白し昨日や鶴をぬすまれし　翁

二月や藪にかくる〻鳥の影　ミノ 二竹

菜の花になりて戀るや猫の面　仝

奉納

ちる花やぬれ草鞋にて神の前　ミノ 可吟

笠かふて一度もきぬや花曇　柏原 林木
幕〳〵に鉢やひらかむ華の山　ヲカザキ 睡闇
穗は枯て臺に花さく椿かな　殘香
鰐口や小松の中に雉子の聲　ミノ 均水
燕もなれてはそりの烟かな　ミノ 夕可

和哥浦 二句

雲雀啼芦の中なる鳥井かな　殘香
置て行蜆ざら〳〵片男浪　仝

獨旅

ぬい〳〵と身がらひとつや紙鳶　雲鴻
出かはりや在所の寺に因果經　仝

夏

凉風や水にうつろふ松の鷺　均水
凉しさや折目たがはぬ稻むしろ　指筭

憶二師舊跡一

水あびしむかしを今の凉み哉　夕可
寐た家を人のさけすむ凉みかな　廣嶋 井水

水に咲花や扇の白地の繪　二竹
藻の花のちゞみ寄たる入江かな　殘香
長の立ところかぎりや菱の花　雲鴻

此菱の花は落梧子が便して、阿叟も一筋の風流いさよしと申されけるよし、名殘にしるし侍る。

髮生て容顏靑し五月雨　翁
五月雨に襁褓ばかりや置火燵　雲鴻
布杭に桶の尻ほす五月哉　可吟
鶯の啼ても見たるあつさかな　仝
砥草刈日和や雪の駒が嶽　闇如
水無月の鮠やふまれん足の甲　仝
作ばや寒の水とて鮎なます　素人
生垣の間〳〵やはな卯木　柏原 櫻三
くち〳〵と咲や葵の根ぎはから　睡闇
葎替や蜘の糸はる桐の花　黄蝶
商人は小判の桐の花見かな　柏原 江水
雲の峯けがにも富士に似たるなし　仝

節供

山鳥の尾は煤びたる菖蒲(あやめ)かな　ミノ 角巾

しよんぼりと山鳥出るや栗の花　硯石

宿借(ヤドウカ)や掃除して寐る栗の花　碧川

出羽の便にきこえ侍る。

山畑をこけて落たる胡瓜(きうり)かな　さか田 不玉

穐

麻かるや西日も月も座敷迄　可吟

芋あぶる朝〳〵せはし鵙の聲　仝

早稲の香や猿も出そめて人の中　素人

稲の香や虎落(モガリ)のうらのあかね染　雲鴻

廣澤や名月渡るいねの花　殘香

子にそひて寐覺や後家の星祭　膳所 里洞

送火やよし人なみに燃ずとも　同 柳江

鱠喰ふかほの赤さよ紅葉狩　江水

風かはる鴈のさはぎや帆かけ舟　闇如

草庵

榎の實ちるむくの羽音や朝あらし　翁

手をあてゝ見るや鑵子(くわんす)も秋の風　均水

四五尺のかたき有けり鷄頭花　二竹

冬

線香も一本の間の時雨かな　碧川

時雨ては星のきほつく木間哉　闇如

身は樂に時雨て通る野馬哉　殘香

此作者、いかなる時の境界にや。いさ浦山し。

初雪や酢瓶の蓋(ふた)は氣のつかず　黄蝶

手拭も木になりにけり雪の朝　二竹

割織(サキアリ)も袖の不足や雪の花　ミノ 槐人

ほか〳〵ときらす(雪花菜)の湯氣や雪の花　雲鴻

礒際や砂うちかぶる霜ばしら　硯石

山中

水仙も咲やこゝらの年貢時　指算

菰はりや越後そだちの冬牡丹　治棟

蠟燭に顏のてかつく寒かな　櫻三

煤はらひ牛のしらみの榎哉　闇如

金屏に松のふるびや冬籠り　翁

有明もみそかにちかし餅の音　仝

桑好法師が許に

ありさだにひさにしられて身のほどや
みそかにちかき有明の月

今年元祿乙亥の秋七月十五日、幾暁庵において記焉。

連衆四十六人

笈日記餘興

ト居篇

世に巣作といふ鳥あり。晝は山花野草にわすれて家をおもはず。夜は露霜のふせぎがたきにうんじて、たゞに巣つくろふ〳〵と啼あかしぬるが、あけなば亦わすれぬべし。さればさゞゐ(栄螺)のをのれが門をかため、盤の穴の甲に似せたらん、それもいくほどのよはい(齡)にかあらん。世はすべてその時にのぞみて、よろこびもかなしみもしつべき事なるに、さるものはいと不覺(ふかく)なりと、いへる。いふ人のしたしければ、そも亦あらかひ(抗)もすべからず。たゞ雲鳥の無心なるものに似ざらんほどは、世にありて殊にたゞすからじ。今年は草庵の秋をおもへるより、かのほうし(法師)の、こゝもまたみやこ(都)のたつみ(辰巳)といひけむ、伊勢の國にしかぞ住ゐ侍る。

宇治山の僧もお出や初月夜　支考

薪置二階の窓やはつ月夜　芦本

寐て見るや余所の腹にて初月よ　乙由

草庵やまだ誰も來ぬ宵の月　賀枝

へつ(盂)ゝいもかはかぬ盆の祭かな　一道

白壁の間にはさかる月よ哉　如舟

此如舟は、するがの國嶋田の驛より參宮申されしが、吾草庵をたづねて此句申捨られし。

奥深に月は隣の梢かな　園友

花ながら枝折に萩の庵かな　口遊

文通　尾張

草庵出來のよし、まづ〳〵珍重の御事に候。定而鍋ひとつ桶ひとつたらい(盥)は、いまだあるまじくと存候。何れ參宮の雨やどりに、生田の森ならば幾度もまいり候はんと、みな〳〵よろこび存候。

物賣の聲きゝしるや市の秋　巴丈

朝がほに推して見たる小庭哉　露川

三か月やナユばかりの庵の前　素覧

文月の文のしるしや庵見舞　左次

七月六日

七夕　草庵

たなばたや穐をさだむる夜のはじめ　翁

高水に星も旅ねや岩のうへ

後の句の心は、なにがし女の、岩の上にひとりしぬればとよみけむ旅ねなるべし。今宵この事語り出たるついでゆかしきにしるし侍る。

手のとゞく屋根のもちるや星祭　路艸

椽先や寒うなるまでほし祭　乙由

土佐が繪にあをのく人や星祭　支考

七夕のおどりになるや市の跡　園友

銀河(あまのがは)さらしあげたる今宵哉　芦本

盂蘭盆　花庵

目にみえぬもののいそがし盆三日　乙由

男所帯の
いさすげなきに

雨の手に四五膳ヅヽや玉まつり　園友

去年の秋は阿叟をまつべき頃に、此國にかりの住ごころもさめて、へ秋風や身につまされて二枚數　と申侍しに、阿叟のさみし給へりけるも、今年は吾草庵にその魂をまねき侍る。せめてはその時のほいなるべし。

松の葉につゝむ心を蓮の飯　支考

元祿乙亥　秋八月十五日、
洛の桃花坊におゐて　校爲

京寺町二條上ル町
井筒屋庄兵衞板

梟日記
乾・坤
支考著

梟日記之序

洛陽花ひらけてあらたに、武城鳥啼て靜なる春も、きさらぎのはじめなるべし。いせ(伊勢)の國に住なる法師、筑紫のたびね(旅寝)おもひたち侍りけるに、あまてる(天照)や此御神の御まへに詣して、この時の風雅のまことをぞ祈りたてまつりける。されば瘦藤に月をかゝげ、破笠に雲をつゝむといふ、むかしのひと(人)のあとをまねびたるにはあらで、風雅は風雅のさびしかるべき、この法師の旅姿なりけり。

月華の梟と申道心者

むかし魯の孔丘は、麒麟を得て春秋をしるし給へりしに、をのづから世の人のためしともなれりけり。今又梟の一字に筆をはじむるに、褒貶(ほうへん)はしばらくなきにしもあらず。一字の妙處にいたる事は誠に難からん。さるを此記の名になし侍らば、岸のからす(烏)の魚をうかゞひたるにやあらむ。西華坊みづから此一稿をなして、是を序のこゝろとはおもへるかし。

餞別之地

伊勢　山田　富田　桑名

尾張　名古屋　熱田　犬山

美濃　古郷　洲原　長澎　上有知

　　　關　加治田　深田　黒野

　　　岐阜　大垣

近江　柏原　彦根　膳所　大津

京

西華坊梟日記　乾

元祿戊寅之夏四月廿日、津の國や此難波津に首途して、人もしらぬひの名にし逢ふ筑紫のかたにおもむく。道遠く山はるかにして、たゞ雲水の身をまかせたれば、世にいふ山姥にはあらねど、みづからくるしび、みづからたのしむ。さるは世の人のありさまにぞ有ける。

　卯の華に難波を出たる無分別

今宵は西の宮に宿す。難波の舍羅、此處におくり來る。このおのこは、かねてこの行脚にくみすべかりしが、さる事侍りてならずなりぬるを、ほいなき事におもひて、一夜の名殘をおしむべきと也。

　みじか夜の名ごりや駢十ばかり

廿一日

兵庫の湊川を過て楠が古墳を見る。されば此士は文に

あはれに武にたけかりしが、一子正行が櫻井の宿のわかれまでおもひ出られて。

　鎧にも泣たもとあり百合の露

かの須磨の浦を過るほどは、此里の新茶ほすころにて、それもあはれに淋しとはおぼえられし。

　關守もねさせぬ須磨の新茶哉

からす崎にいたりて頭をめぐらせば、須磨・あかしの眺望又こよなし。

　山懸て卯の花咲ぬ須磨明石

廿二日

播磨國

明石

詣人丸廟

おのへの松原は、この道より一里ばかり南にあり。高砂の松は江をへだてゝ、是より又十余町ばかりに見渡さる。いづれも見すつまじき風雅の地なり。

　ほとゝぎす高砂おのへ二所帶

石ノ寶殿

無禰(たね)ノ松

廿三日

姫路

此地に千山・元灌などいへる人は、かねて風雅の名つたへ申されしが、今宵は何となき旅店にかりねして、かくいふ事を人〳〵のかたに申つかはしける。

晩鐘や卯の華の雪に宿からふ

廿五日

厚風亭にいたりて、その父了意老人の閑居を見るに、老父は此ほどいづこへか渡り給ひて、庭には牡丹の花の咲のこりてありしを、

我袖は牡丹をぬすむ風雅なし

春亭

風爐(ふろ)かけて淋しき松の雫かな

臨川亭

う(卯)の華やちぎれ〳〵に雲の照

廿七日

此日書寫山(しよしやさん)にまうづ。道のほど二里ばかりも侍らむ。けふは垒夷のなにがしにあるじせられて、いざなふ人〳〵あまたなる中に、老たるあり、わかき(若)あり、若きは何がし小三郎とかや、誰が家の白面の郎ぞ。老たるは藥師六兵衛、是もたゞうきたる佛なるべし。たばこは酒にかえむ、さけ(酒)はたばこにかえむといひあへる、をのれ〳〵が道すがらの物ずき、いづれにか定侍らん。山は半里ばかりにそびえて、翠微に頭をめぐらせば、あは(淡)ぢしま(路嶋)眼の中に落つ。須磨・あかし(明石)の浦浪、おのへ(尾上)の鐘は、名のみぞおもひやらる。山のたゝずまゐ、よのつねにはあらで、風聲水音の清淨も人の肌をかゆるばかりにぞありける。いたゞきの僧房あまた、所がら竹藪のくま〲にかくれて、しばらく思ひかけぬ山のありさま成けり。

ほとゝぎす鳴山藪や雲つたひ

笋の露あかつきの山寒し

それより奥の院にわたりて、性空上人の影堂を拜す。かたはらに池あり。是へ辨慶がむかし、晝寐のかほを水かゞみけるよりこの名ありとぞいへる。我もその池の邊にたちよりて、

旅寐せしかほや茄子のむさし坊

是は夏季の茄子のくるしきこそおかしけれとて、たはぶれに申侍りき。されば夕陽の影も木の間にのこりて、その程もやゝ日暮にけるか、麓のさとにたどりて、明松といふ事をおもひ出して、あと先にふりあげたれば、世にいかめしき葬禮にこそありけれ。さらば孟嘗君がともがらならば、泣まねの上手もあらんといふに、まこと太泣もしつべし。その夜は元灌亭にかへりて、殊さらにくたびれふしぬ

五月五日

備前國

此日岡山の城下にいたる。殊にあやめふきわたして、行かふ人のけしきのはなやかなるを見るにも、泉石の放情はさらにわすれがたくて、

松風ときけば浮世の幟かな

六日

此日吉備津宮にまうづ。此朝はくもりみはれみ、おもひさだめがたき空のけしきなるを、かりそめに思ひ出ぬる道のことさらに照りわたりて、そのあつさたえざらんとす。笠かぶり物もとめ出るに舊門はあやまたず、雲鹿は笠の緒のなまめきたる、いかなる人にかかり出らん。ひとつ緒の俄あみ笠は、梅林のぬしの名にこそにほへ、晩翠はよのつねの法師がらにもあらぬに、供笠とかいふなるからかさに、柄のなきものをうちかぶりたれば、夕影のかほもかゞやくばかり、かの祇園の火ともしなめりと、眞先におしたてらるゝに、雨放しの風まけして、果はたどきずなりぬ。三門柴山のほとりも過行ほどに、夕陽の影は山をひたして、笹迫とかや、かんこ鳥の聲もきこゆなり。

俳諧師見かけて啼や諫鼓鳥

されば鶯・ほとゝぎすの世にしられたる、鷹の聲のまたれてわたる空、ちどり(千鳥)のあかつきはさら也。さるは哥にもよみ詩にもいふなる、諫皷鳥の淋しさのみ誰にかよらん。かくて八坂(ヤソコ)といふ所の橋をわたりて、きびつ(吉備津)山にむかふ。そもそも此神は一神二應とかや。備前・備中の兩國におはして、吉備の中山なかにへだゝりぬ。

みじか夜やどなたの月に郭公

備前の御神はちかき(近)比御修覆ありて、朱椽(しゆてん)あらたに應化の影をかゞやかす。誠にありがたき御世のありさまなるべし。大藤内屋敷はいづこにかと尋侍りけるに、門戸たかく石垣よも(四方)にめぐりて、子孫猶めでたし。

淨留理にいへば夏野ゝ草まくら

今宵はなにがしの社家に宿して哥仙半におよぶ。七日又岡山に歸る。

梅林亭

窻に寐て雲をたのしむ螢哉

八日

備中國

此日雲鹿・舊白をいざなひて倉敷(くらしき)におもむく。鴫(しぎ)がはなといふ處は山城の六地藏に似て侍りといふに、げにもくらしき(倉敷)は、みやこ(都)のたつみ(辰巳)ともながむべかり。

宇治に似て山なつかしき新茶哉

狂客三人除風庵にこみ入。あるじの僧は外にありておどろき歸る。そのよろこび面にあらはれて、心ざし又他なし。茶漬の冷飯は露堂のぬし、行水の湯は誰かれといふより、とうふ(豆腐)・蒟蒻の施主も有て、わかき人老たる人さまざまに行かひさゝやきて、あるじの僧はいきもつきあへず。その事この事漸に暮はてゝ、しばらく灯前夜雨の閑を得たり。されば此あるじの除風は、松島・白川の風月にもやつれ、武城の嵐雪が黑白の論にあづかりて、はじめて風雅に此事ありといふ事をしれり。本より眞言のながれに身をおきて、生涯もよくつとめたりといふべし。

露堂亭

先いのる甲斐こそ見ゆれ爪(瓜)なすび

五月雨に袖おもしろき小夜着哉

此里の東南に山あり。この山に小堀遠州の汲捨給へる井ありて、今なをしたゝり絶る事なしと。露堂曰、この水又酒によろし。一荷汲ときは底をつくせども、たちかはるほどありて又一荷出と。まことに清淨の水にこそありけれ。西華坊かつて姫路を過し時、何の藤三郎とかやいへる少年の、我に初白の茶一ふくろおくりて、たびねの風情をくはえられしが、此里に來てこの茶ある事風流やむ事なし。水汲は雲鈴法師、茶挽は除風とさだまりて、客は倘雪・壽楮の二老人、あるじは露堂にもあらず我にもあらず、たゞのみてなむやみぬ。是又一時の風雅なるべし。

茶にやつすたもとも淺し山淸水

十日

此日人〳〵に催されて藤戸の浦見にゆきけるが、今はむかしにはあらで、田にもなり畑にもなりて、浦の男があはれのみ、その夜いかにとおもひやるばかり也。

生てゐて何せむ浦の田植時

簑里號

笠縫の里は古哥の名所なるに、簑といふものは、野夫のたもとをかさねて、俳諧のたよりあるもの也。若き人といへどこのみちのさびなからんや。

怀ならで五月もさむし鷺の簑

十三日

此日倉敷を出て矢懸におもむく。道のほど五里ばかりなるべし。除風・雲鈴の二法師をいざなひて觀音寺に宿す。今宵の空のおぼつかなきに、曉の夢さめて鐘の聲をきく。

夏の夜の夢や管家の詩のこゝろ

十五日

此日矢懸をたちて尾道におもむく。その道のかたはら

にあやしき小家の侍り。雲鈴曰、我かつて此家に一夜をあかしつるが、能因法師のかくてもへけりとよまれし哥を、よもすがら思ひあはせ侍るといふに、げにもあさましき草のやどりなりけり。

　笹の葉に何と寐たるぞ蝸牛

十六日

備後國

宿ニ福善寺ニ

此日尾道より小舟に棹して、安藝の竹原といふ處にわたる。道のほど八里ばかり也。青鷺の影左右につらなりて江上の望遠からず。浄土寺の塔は松の木間にかくれて、千光寺の塔はこなたの雲にそびゆ。西湖の風月・煙雨の樓臺すべてこのまのあたりをさらず。舟は靜にして座せるがごとく、かたはしに苫屋形ふきよせたれば、東坡が赤壁の繪を見るやうにぞ侍る。をりふし酒もあり肴もありて、このふねとぼしからず。殊に年老たる船頭の物いはぬ顔のおかしければとて、たゞ酔によひふしぬ。かくて楓橋の夢もさめて、夕陽のかげみねにかゝれば、三原の城は松の麓にかゞやきて、鳥の聲もきこゆばかり也。されば此あたりあしか潟ともいひ、能地の浦とかや浮鯛の名所なるよし、かねて人のかたり申されしが、世に櫻鯛の名はありながら、この魚のいろのみよく照りて、風味又よのつねならずと。かの松江のすゞきは、あまたにては侍らざらん。

　浮鯛の名やさくら散三四月

十七日

安藝國

この竹原といふ所は、山を箕の手におひて、前に汐濱あり。何かゆふべのといへるたびねの心にもかよひて、あはれむべき住どころなりしが、むかしのおとゞはうつしてだに見給へるに、さなく見る事のめづらしければ、なにがし一雨亭にこのほどのやどりぞもとめ侍る。

　五月雨の汐屋にちかき焼火かな

十八日

此日梅睡亭にまねかる。是も汐濱の中にありて、千山も力水ものぞみたふまじき別墅なり。今日はとに片照片降とかいふ空のけしきなれば、よのつねにはあらでいとよし。

夏菊に濱松風のたよりかな

十九日

例のさみだれにふられて竹原を旅だち出るに、流水のおのこ、心ありて林光庵の辻といふ所におくり來る。道のほど二里ばかりもあらん。是に留別の句かきて、つかはしける。

我影や田植の笠にまぎれゆく

今宵は四日市といふ所に宿し侍るが、蚊屋釣よすがもなきいぶせきやどりなりけり。このあたりは西條とかいへる柿の名所なり。此里に我名しりたるおのこありて、來りて風雅の事いひていにける。あとに宿のあるじのいかに聞とりてか、我に物かきて得させよといふ。あなかしこ我をたふときものと思ふにこそと、こゝろのほどおかしければ、かくいふ事をかきてとらせける。

弘法を狸にしたる蚊遣かな

次の日は廣島にいたる。里洞・柳江を尋るにあはず。是より後、下の關を過て柳江に逢ふ。心ざしのおのこ也。

廿二日

宮嶋

神前奉納

燈籠やいつくしま山波の華

三とせの先ならん、ある夜の夢に何ともなき山里に行けるが、宇金の布衣かけたるおのこの我にむかひて、是は安藝の宮嶋といふ所なりといへるに、ほとゝぎすの聲の山陰にきこえたれば〽郭公是なん山路の小かなとおもひよりて、小春の山路とやせん、山路の小春とやせんと思ふほどに、夢の行衛もしらずなりぬ。されば今宵は廿二日、神前の廻廊に百八の灯籠かけわたして、冥感も肝にそむばかりにたふとかりしが、眼前の境に催されて、たゞ今の句なぞ得侍る。

當季さだめがたければ、過し夢の事まで思ひあはせけるなり。

華表額　表　嚴嶋大明神　弘法大師筆也
　　　　裏　伊都岐島大明神　小野道風筆也

御殿の反橋の際に、尊圓親王の落書あり。長谷千松とあり。兒の時なるべし。

彌山

彌山とは芥子のつぼみに朝日哉　倚政亭

鹿の子のあそびたらでや礒の月

廿五日

周防國

この日岩國の續橋を見て、柱野といふ所に宿す。此處を旅立出るに、雨もそぼふりてこゝろぼそき山中なりしが、田舍座頭の琵琶負ふたるさまをはじめて見侍りて、

ほとゝぎすむかしなつかし琵琶法師

廿六日

徳山

雲鈴曰、今宵此所發句ありや。予曰、なからん。徳山とは夏の名にあらず。先師むかし出羽の國を過たまひて、

あつみ山や吹浦かけて夕すゞみ

此句は吹浦の二字うれしければかく申され侍しを、此ごろなにがしが集には、福浦かけてと出し侍り。是俳諧をしらぬのみにあらず。先師をあやまるにちかし。鈴曰、しからば福浦・徳山の類は發句あるまじきや。予曰、季節の相應あるべし。福浦は正月とおもひよせて、万歳・鳥追の部にあるべく、徳山は冬きたりて炭賣・柴賣の類にあるべし。このごろ俳諧の撰集に、先師のこゝろにもあらぬ發句を書ならべ、天地にたがひたる句意を集の題號にとりつけたるなど、その場をしらぬ人のあやまりたる也。むかしある人、さのゝ渡にほとゝぎすの歌よまれしを、さる事有まじと人の難じ給ひしとかや。げにさのゝわたりといへば、空晴て寒きやうに

おもはるゝかし。いにしへより哥の名所に、そこに是はいはず、こゝにそれはよませじなどいへば、あら氣づまりの哥道や、たゞ俳諧せむといふ人あり。さるは俳諧の仲間にも得あるまじき人なり。かゝる事はその道〳〵の宗匠の格式をたてゝ、無理を云やうにおもふらめど、その場〳〵に物のかなへる本情は、何の俳諧に無法あらん。富士参に雲隠を案じ、芳野ゝ奥に饅汁の相談をして、是はめづらしき名所のよせ物などいへるは、世の雑談俚語といふべし。それは鳴たつ澤の夕おかしく、田子の浦のあさ日はなやかならんといふ、その場をしらぬ人なるべし。されば珍しき事あたらしき事をこのむは、人の世の中に何かおもしろからんと、たくみありく遊人のたぐひなるべし。面白事に面白事をかさぬれば、それもおもしろからず、是もおもしろからず。はては金殿楼閣にもあきて、その果は世の中も飽ぬるかし。是風雅の淋しきより、にぎはしき方を見やるべき世にある人の心行なるが、まして行脚漂流の身のその場といふをしらねば、たゞ放言の遊人なりと先師も遺誡申されしが、俳諧ならでもたふとむべき事也。先師又いへる、名所に對して當季をむすび、その場を案ずるには、文字の數たらひがたからん。名所などは雑の句もよからんと申されしが、雑の句などは殊さら名人の手段なるべし。

佐野礒田

またぐらに山見る礒の田植かな

黒髪山

早乙女や黒髪やまを笠のかせ

廿七日

宮市

此地に天滿宮おはして、鏡の御影ときこへさせ給ふは、さすらひのむかし、旅姿を水かゞみ給ひしよりかく申傳へしと、宿のあるじのかたり申されしに、

五月雨ににごらぬ梅の疎影哉

次の日此山中を過るに、女の童共の伊勢詣するに逢ふ。首途も此あたりちかきほどならん。髪かたちもいまだ

つや〳〵しきが、みな月の土さへわるゝ、といへるあつき日には、我だにたふまじきたびねの頃なるを、いかに道芝のかりそめにはおもひたちぬらん。百里のあなたはるけき我いせのくにぞよ。道のほとりなる家によび入て、何がしがかたに文つかはす。その奥に此童ア共もに茶酒喰せ給へ、柿本のひじりもあはれと見たまへるものをとかきて、

姫百合の情は露の一字かな

我がいせにある時は、虱の異名をぬけまいりなどいひならはせたるに、かゝるまことのぬけまいりならば、うしろ影も見やりつべし。さればこのあたりは中山宿とかや。馬にのりて行けるが、馬の上に我が吟聲をきゝて、口につきたるおのこの、我かほを見あげて、いせの人〳〵におはさば守武・望一のながれをしり給んといふにおどろきて、おのれ俳諧をしりて侍るやとあやしむるに、おさ〳〵しりてぞありける。あらたふと、かの姫百合の露の神にも通じけんと、夢のこゝろにおもはれしが、さしも今の風雅のいたらぬ世もあらじと、たのもしき事にぞおほえ侍る。

廿八日

船木

呼坂

ほとゝぎす・かんこ鳥の名所といふべし。猿などは山のあさきやうにも侍らん。

化粧坂

百合の花酒に酔てやけはひ坂

廿九日

長門國

今宵は下の關につきて流枝亭に宿す。欄干に風わたりて雲臥衣裳さむし。されば文字・赤間の二關は、筑紫・中國のさかひにして、海のおもて十余町にさしむかふ。壇の浦といふも此のほどなるべし。

關の灯のあなたこなたを夕涼

三十日

此日下の關を出て小倉にいたる。此地の人〳〵のとゞめ給へるを、行さきもくらきやうに侍れば、歸るさにはかならずとゞめられん。まして此ところ古戰場にして、秋のあはれをこそ見るべけれとて、是よりこゝろつくしにぞおもむきける。

西華坊泉日記　坤

元祿のことし六月一日豐前の小倉にいたる。その夜は有觜亭に宿す。是より九州の道、東西にわかれて、行脚の心ざしさだめがたし。

笠に帆をあげてどちらへ夕凉

二日

大橋

この日元梨亭にいたる。此おのこは、おかしきおのこにて、人に面をかざらねば心又物にかゝはらず。その夜いねたりけるまくらのあなたにて、明日さらば何をかもてなさむといへるに、何もかまへたる事侍らずと、こたふる聲のひきいりてきこえたるは、げにこの人の妻なるべし。我さらに美好の味はもとめねども、竹の子は已に過て瓜・茄子はいまだきたらず、今ぞ心ぼそき世なりける。

竹の子や茄子はいまだ瘦法師

三日

柳浦亭にまねかれて、手作の瓜畠など見あるきけるに、古里の眞桑もいまや盛ならんとおもへば、なにがしの僧正の哥のこゝろまでおもひやられて、

　美濃を出てしる人まれや瓜の華

此日このところを出むといふに、人〳〵袖にすがりとゞめられしを、是も歸るさの道しるべなどさま〳〵にいひなぞらへて、

　又越む菊の長坂烋ちかし

　あまの(天)河によみたる菊の高濱も、此あたりなるべし。

四日

この日大橋の人〳〵におくられて濱の宮にまうづ。此神のむかしこの浦に一夜の夢をむすび給ひしを、世に綱敷の天神とはあがめたる也。さるたびね(旅寢)は神だにあはれとおぼしたらんに、おろかなる人はましてぞや。

　晝がほよ今宵はこゝにはま(濱)の宮

今宵はこゝに社僧の情ありて通夜申侍るに、元翠・柳浦・桐水などこゝにありて名殘をおしむ。日暮て一袋きたる。このあたりちかき椎田の人〳〵も、きゝをひ(追)來りて、奉納の歌仙半におよぶ。夜更て朱拙・怒風など名のりて戸をたゝき來る。此人〳〵は黒崎のかたにありて、きゝおひ來れるにぞありける。朱拙のぬし續さるみのを懷にしきたる。さりや此集は先師命終の名殘なりしが、さる事の侍て武洛の間をたゞよひありきて、今こゝに見る事のめづらしうも、かなしうもおもはれて、泪のさと浮たるが、人にかたるべき事にはあらずかし。そも今宵は田舍芝ゐのやうにつどひあつまりて、その朝は又はら〳〵にわかれ行に、僧の怨風はみのゝ國にかへるときけば、古さとのかたも戀しうぞ侍る。此僧は我舊識の人なりしが、この春のころより筑紫の方にありて、彼は歸り我は行、そは又誰がために行、たれがためにか歸るならむ。いとまなき世のありさま

かな。

夏旅の馬ならばよきくろみかな

五　日

仲　津

此日竿水亭にいたる。あるじはゐ給ざりしが、なにが、しのむす子もたりければ、親がかくいひをけるなど、こゝろやすきほどにもてなされて、おとなしき子はほしきものかなとおもはるゝよ。今日はことにあつき日なるに、夕だちをまつといふ題のこゝろにて、

みな月の雲一寸のにしきかな

六　日

この日寶蓮坊にまねかる。あるじの僧はいまだ見え給はぬほどなるが、屏風のかたはらに、すまふの土俵などいふべきまくらを二つまでかさねをかれたり。このぬしのいかに寐給ふらんとおもふに、げに法師がらもよのつねにはあらで、としもよきほどに德やゝたかし。詩は獨行稿に稱せられ、文は名公文集に名をならべて、さるはこの枕に吟腸をさだめ給りと、朱開いぬしかたり申されし。

六月の峯に雪見る枕かな

此句は枕を高ふして、前山の雪に對すとも見るべし。又西行の腰かけまくらともいふべし。みつのもののいづれにか侍らん。

題庭前瓠

炭とりとしらで瓢のつぼみかな　泥蓮主人　道香

和瓠字

弔来吾寂寥　投合樂昭々
雅曲長良種　要求五石瓢

七　日

此日宇佐の宮にまうづ。神前に眼をとぢて、そのかみをおもひ奉るに、感情まづむねにふさがる。

鎧きぬ身もあはれなり蟬の聲

今宵は小山田のなにがしに宿す。さるを芦惠のあるじにまねかれて、風雅の物語などしけるが、捨がたき事にいそがれて、宵のほどに歸るとて、

短夜のうさとよむべし月の宿

八日

この日仲津に歸る。その夜源七のなにがし、我に初眞瓜おくられければ、

源の字はわすれじ今宵初眞瓜

九日

此日仲津を旅だち、豐後の日田におもむく。たち野といふ處を過るほど夕だちに逢ふ。空やゝ晴て凉し。羅漢寺の麓に駒とめて、

蟬の音をこほす梢のあらし哉

山頭によぢのぼりて五百尊を拜す。誠に飛花の春におどろき、落葉の怺かなしめるならひ、是も無風雅の佛達にはおはさゞらむ。山は萬重にけはしく、巖は千丈にそばだちて、清淨やゝ人の胷をあらふ。ありがたき佛場也。

葛の葉の怺まちがほや羅漢達

この夜は仲津の齊蓮坊にたよりせられて、岐の西淨寺といふ寺に宿す。さればきのふけふ馬の口に付たる久作とかいへる、おのこのひるゐ喰ふどに、五郎四郎〱といふを見れば、我が國の小麥の餅なり。是を尋ね侍るに、筑紫人はすべていひならはせたるよし、この名のうれしければ、今宵是が傳つくりて、なにがしがたにつかはす。

五郎四郎傳

筑紫に五郎四郎といふものあり。その性は小麥の餅なり。明暮是に馴たる人はたゞ五郎四ともいふ也。も此の野畠の間に生じて、肌おろそかにいろくろし。しかれども菓工の手にわたりて百練千鍛すれば、あるいは饅頭の肌やはらかに、かすてらの味ありて、ほとんど僧を落さむとす。むかし志賀寺法師のかたちこそ痩たれ、

こゝろは花の都人を戀そめて、玉の緒の歌はよみ給へり。ましてその名も三輪の山本に住て、かづらきの神の晝のかたちにもはづる事なし。さればこゝろくだり姿いやしきだに、色はすつまじき世なりけり。五郎四何にかわびしからんよ。あるつらの人は衣食のあたひをむさぼらず、酒肆娼房の眼高しと、世の人にもてはやされて、こゝろのほかに見ぐるしうやつれ、座上にありて虱をひねる。さばかりすてはてたる世ならば、石上樹下の住るこそあるべけれ。しのぶ山の關路も越る人のあればこそあれ。戀せじ酒のまじとは、誰にかかためたるぞや。先師曰、色を思ふ事溫飩のとくせよと、汝をよろこぶもの日夜に愛せず。汝をにくむもの絕てきらふ事なし。しからば物のほどをいへるなるべし。汝が本性はいやしからねど、おほくは賤の女の抄子にかゝりて、ありがたき生涯をあやまる。されど世をてらひ人にこびて、身をかざらんとする人には、をのづからまさりとすべし。このさかひは汝五郎四がしる處にもあるまじ。何晏がおしろいせぬ顏も、一世のねがひにはあらず。兵部卿の宮のかりのにほひもまたあだなりとしるべし。世はたゞ世にしたがひて、眼前のたのしびをたのしむべき事なり。

夕がほに鏡見せばや五郎四郎

十日

此日西淨寺を出るに、此道八里ばかり、七瀨の川をやせわたるとかやいへる、ものうき山間のみちすがらなりしが、夏山の鶯の今も盛のやうに鳴たるが、慰むかたもありて、

夏山や鶯啼て小六ふし

十一日

豐後國

此日日田につきて、その夜は西光寺に宿す。寺はから竹藪よもにめぐりて、山川のながれ左右にわかる。今宵このこゝろ夏をわすれたりといふべし。

宵月や寺はちどりの巢のあたり

十二日

風吹ク

ちり込て晝寐を埋む笹葉哉

鶯をいなせて竹の落葉かな

里仙亭

きり麦や嵐のわたる膳の上

香爐庵記

里仙亭あり。亭の南に一草堂ありて、方一丈ばかりならん。此内にみだ佛を安置し、かたはらに父母の尊靈をまつる。是をこなたよりのぞめば、そのかたち汐屋香爐といふものに似たれば、かく名づけて侍る也。亭のあるじ里仙は年やゝ五十年を過て、佛はつとむべく世はたのしむべしといふ事をしりて、かならずつとめ、かならずたのしまんとにもあらず。その身を風雅にをきて、わかき人にまじはれば、わかき人亦老をわする。西華坊とし此亭にたびねして、はじめて此名を得たる事は、亭の前に簾を卷てこの香爐庵を見ば、をのづから我かたみともならんとなるべし。

月雪や夏は晝寐の香爐庵

此夜玖珠（クス）といふ所よりたより（便）せらる。その地は是より八里ばかりあなたにて、投錐・曲風などいへる風雅の友達なるよし、その文のしるしに、よしの葛おくり申されしが、そのこゝろざしのたよりに感ぜられて、

葛水に玖珠といふ名の面白し

十四日

野紅亭にあそぶ。亭のうしろに蓮池ありて、一二輪を移しきたりて、此日の床の見ものにそなふ。あたかもあるじの紅の字添（を）るに似たり。蓮衆十六人をのゝこの筋のにほひふかく、吾門の風流この地に楽むべし。

盧山にはかへる橋あり蓮の華

此曉ならん。野紅のぬし、夢もおもひかけぬ事に、おさなき娘の子うしなひ申されし。その妻も風雅のこゝろざしありて世のあはれもしれりける。ふたりの中の

かなしさ、露も置所なからん。かゝる痩法師の身にだに、子といふものもちなば、いかに侍らんとおもひやるばかりにかたし。

世の露にかたぶきやすし百合の花　支考

晝がほもちいさき葉のあたり哉　雲鈴

子たおもふ道にさいへる人の言葉も、今の身いうへにおもひつまされて

十四日の月に闇ありほとゝぎす　野紅

面かげも籠りて蓮のつほみかな　倫女

十五日

呼丁亭

祭客我ほどくろき顏もなし

十六日

獨有亭

さかづきや百日紅にかほ（顔）の照

此亭に先師はせを庵の手跡あり。是は湖南の正秀がかたへ、難波の旅館よりおくり申されし文なり。

文詞に

何とやらかとやら、行先〳〵の日つもりちがひ、炑も名殘のやう〳〵紙子もらふ時節になりて、紙子はいまだもらはず、たゞ時雨のみ催したるなど、その終に發句三あり。

重陽の朝奈良を出て難波にいたる

菊に出て奈良と難波は宵月夜

又酒堂が、予が枕もとにて鼾をかきしを、

床に來て鼾に入るやきり〳〵す

又十三日住よしの市に詣て、壹合升ひとつ買申候てかく申捨候。

升かふて分別かはる月見かな

九月廿五日

主曰、此宵月夜の句は何とうけ給り候半。予曰、是は彭略互見の句法也。此格をしらざれば見る事かたし。主

曰、月見の句又如何。予曰、分別かはるといふ中の七文字見がたし。發句は殊更その人の身にあてゝ見るべし。升といふ物は世帯の道具なるに、此升かふて後は鍋もほしく桶もほしゝ。世の中の隱者此筋よりあやまる事を人の鏡には申されし也。

さりやこのふみを見るに、翁の書殘し給へるもの都あたりにはあまたありながら、筑紫の巣に相見たる面かげの殊に、此文は命終の日數も廿日にたらぬほどなり。その日の筆とり梟もうちかみなど申されしありさまの今なを、忘れぬなみだこそはてしなけれ。

菊もありて人なし夏の宵月夜

十七日

今宵の月の涼しきに夜道かけんとて、玖珠のかたにたびだつ。みちすがらいとねぶたし。行さきもいさやしら月夜の果は、風さへ身にしみて、谷をわたり山を越るほどに、藪村とかいふ所にて、には鳥の聲を聞。

竹あれば鷄あり里は夏月　支考

朱拙曰、このあたり人里ありとは、かねてしれるだに、今宵はおぼろげにたづきなきこゝろもせられて、藪村の鷄の聲も人をおどろかすばかりにぞありける。

白雲の下に家あり夏の月　朱拙

道のかたはらに柴折しきて、例の食闘をひらくに、鷄ははら／＼と啼て心ぼそし。

盜人の夜食やなつのみだれ鷄　雲鈴

代太郎とかいふなる麓のさとにいたりて、夜はゝやほのしらみたるが、殘月のかげに郭公の二三聲ばかり啼過たるを、たゞ有明の月ぞ殘れるとおもひあはせたる哀ふかし。

都をばいつ六月のほとゝぎす

十八日

此朝投錐亭に落つきて、ゆあびして臥す。殊のほかに草臥侍りて、二日ばかりは物も覺侍らず。

二十日

此日曲風にまねかる。このあるじはよのつね立華にあそび申されければ、此日のもうけもたゞにはあらで、

生華やなつの枯葉を軒まはり

此日箱人形といふものをまはし來りけるに、かゝる艶姿綺語のたぐひは、いたらぬくまもなき世のならはせかな。さるはみやこの戀しさも、たゞまのあたりなるかし。

人形のかほにたもとや葛の花

廿一日

可庭亭　對前山

前置におのへの松やくものみね

此日雷に逢ふ。おどろくもの五人、おどろかぬもの二人ばかり。朱拙まづおどろく。亭のあるじいねたり。西華坊その第五指にあたるものなり。晴て後是を論ずるに、おどろかぬ人の曰、我〳〵も是が好にはあらずと。おどろく人の曰、好不好といふは、芝居の太鼓などにあるべし。世に誰か好物あらん。

青雲を見れば此世の夕すゞみ　作者しらず

此日なにがし女の風雅の心ざしあるをよみして、紫那といふ名をつけ侍りて、

旅人の名はよくしりぬ夏の草

廿二日

肥後國

此日小岡といふ處にいたる。その夜は怒留湯氏の家に宿す。是は風雅のよすがにはあらず。なにがし西田といふおのこのゆかりの人にておはせば、獨有のぬしのたよりせられけるにぞありける。今宵の物語にあるじ曰、俳諧はたゞありのまゝなりや。予曰、食喰へば腹のふくるゝといふはたゞ言也。ねむしとか、あつしとかいふは俳諧也。たとへば今宵この亭にかくのごときはしゐして、眼前の俳諧をいはむとならば、

翠簾越にむかひの人を夕すゞみ

此朝この亭をわかれて、熊本の方におもむく。うちのまきの道知寺にひるゐして、是より怒留湯氏に文つかは

す。

夜前者種々御馳走淺からず存候。我等此度俳諧せず。さらば坐敷をもはかず。殊ニ今朝馬にておくられ候段、上方ニ而は薩摩守と申候。定而たゞのりと申事にて可レ有レ候。此言葉のおかしければ、かきて馬かたにとらせ申候。

たゞのりの馬も木賃や百合の影

今日は天氣も曇がちに、馬も能あゆみ候て、道すがら殊外面白御ざ候。かさねて書通可二申謝一候　以上。

六月廿三日　　　　西華坊

怒留湯惣左衛門様參る

過阿蘇麓

高砂のゆかりや松の下すゞみ

廿四日

熊本

此日願正寺にいたる。是は近江の李由より便し給へるにぞありける。この寺の小僧達のものかきて得させよといふに、國の產なれば水前寺（すゐぜんじ）の事を尋ね侍るに、江津の河上半里ばかりにあるよし。さるは水苔にてぞありける。

苔の名の月先涼し水前寺

此地に長水のなにがしを尋ね侍るに、この春身まかり申されけるよし。ありし友達の僧使帆とかや、そのほかの人〳〵もきたりて物かたりせられけるに、あはれはかなの人や。蕉門の風雅にこゝろざしをよせて、桃祗（ネリ）とかいへる撰集もありしが、さるは西王母が桃の實にやあらん、先師の名にふれたる桃にやあらん。それもなく是もなくなりて、姓名一夜の烁といへる詩の心にやあらん。

桃の實のねぶりもたらぬ雫かな

廿六日

宇土

圓應寺

闇に來る烁をや門で夕涼み

廿七日

八代　理曲亭

みな月や蜜柑の秌も今三日

露亭

蟬の聲けふは晝寐の仕舞かな

七月朔日

この曉やつしろ（八代）をたちて、佐敷の方におもむく。棟祗・理曲など殊に名殘をおしまる。熊川のわたし越るほどに、夜もはや明しらみて、海山のけしきもたゞならぬに、けふの馬方のわかやかに湯衣きなして、伊勢に降ゆき朝日にとける君が黒髮は何とやらと、いふ哥をうたひあげたるに、われは起わかれたるうき人もなけれど、をりにふれたる朝日の礒山にさしかゝりたれば、もろこしにわたりたる人のやうに、いせの方も戀しかりしを、

早稲の香やいせの朝日は二見より

是より一里ばかり行て、二見といふ村の有しが、殊さらなつかしき事にぞ侍る。此道八里ばかり山の嶺をめぐり、礒の松風も浪の音にまがひて、初秌の風情一夜に眼をかゆるばかし也。

早稲の香や蟹蹈わくる礒の道

二日

佐敷

此日要阿亭にまねかる。亭の前に江ながれて、万里の清秋一望の中にあつむともいふべく、山もよきほどにへ（隔）だゝりて、松の南は晴るゝしら雲　とちよみまへたり。

秋もまだ二日月夜や峯の松

さればむかしより詩歌の余情といふ事は、言外の風光を見得たらん、見るものゝ手柄なるべし。南朝四百八十寺多少の樓臺煙雨の中といふ詩も、をのづから江をへだてたりと見えて、杜牧がたましゐ此筋に浮たらん。

専明寺

桐のはにたらでも今宵秌の風

龍千新宅

砧にはまだあたらしき家居かな

此里にきぬたの歌のよみて侍れば、かく申つる也。さゝさむくさ古人のよまれしも、この心のさびなるべし。

四日

今宵全睡亭に會して、おの／＼餞別の句あり。されば この一里は山かこみ江ながれて、住む人の心さへ我一人のたがひもあらで、かの桃源といふ處もかくや侍らんとおもひやらる。殊に風雅の友達もあまたなれば、行先たのもしき所なるべし。

一里は皆俳諧ぞくさの華

留別

長崎の烋や是より江の月夜

五日

此日艤して長崎におもむく。海上三十里ばかり、こなたにおもひやる心こそはるかなれ。一里ばかりは磯の松風に吹おくられて、船もなからましかばと珍しけ心ちすなり。秤石とかやいせ所の儀の木陰より、扇あまたひらめかしたるが、挽夷・谷吹の二法師、洞翠がともがらのはなむけの酒のまむと、ぬけがけきたれるにぞありける。その／＼船中餞別の句あり。この人／＼にわかれて後は、此川口に風まちくらし、苫もる月の波まくらにわびて、心ぼそき事のはじめにぞ侍る。曉の風もやう／＼に漕はなれ行に、たらあしろとかやいふ浦にて、帆をさげ碇をおろし侍る。この浦のあまたも見えわたらぬに、人のこゝろの情ありて、茶にいり物など舟におくりたる、しばしなぐさむかたともなりぬ。

黍の葉もそよぎて浦の朝茶哉

是より三里ばかり行て、この風よからずなどいひて、礒山かげに又舟をかけたり。あら心うの事や。ゆられたる舟の中になにと此日を送らん。すべて舟の事よくしらねば、百年の苦樂は他人によるといへる婦人の詩の心なるべし。

このふねに類舶の侍りしが、是もあなたの山かげにか

ゝりて、礒の岩間に物しかせて、物うげにながめゐたるが、浮世の北の撰者可吟のぬしにありさまの似て侍り。その傍に廿ばかりなるおのこのそこら見まはして、何氣もなうありしが、その友吏明にこゝまがはね。さるは古郷のこひしさにかゝる事侍りといふ、人の人に似たるはおかしからねど、あざむかれてなさけなの船頭やとおもされて、腹もたつべかりしが、そはそれかゐ餅を萩の花といふにはあらじといひたるが、時によきいらへなりとおぼえ侍る。世の人の風雅にあそぶといへば、所帶とりをきて風雅一偏とおもへる、しらぬ人のまどへるなり。人にむかひて物語すれば、物がたりやめて俳諧せんといへる、物がたりのほかに俳諧の侍る也。士農工商のうへ、起臥茶飯の間、何か俳諧にあらざらむ。それも不通の人のはやり言葉にならひ、秀句ことさがのまじはりならば、咄の外の風雅もあるべし。

　人が人に似とて餅を萩のはな

かくいひ侍れば、その姿たくみにして、武の晋が風流には似たれど、發句にてはさぶらふかし。此日この事になぐさみて、やゝ暮方になりぬ。

此夜風少たゆみたるに三里ばかり押渡て、本土の瀬戸とかや、天草の地なるべし。何のたつきもしらぬ礒山かげに、かの碇藤をざぶと入たる音の、いかにわびしきものとかはしる。

七日

今宵はそも年にまれなる二星の夜なり。然に風はげしう吹て、雲のたゝずまゐあめを催す。かゝるあはれも船頭はしらずなりて、艄の音に更行こそ、たゞもいすごき夜なりけれ。

　牽牛の傘すぼめてやはしの上

八日

この朝大かたに晴わたりて、又漕出たる船のすゑは、しら波の早崎とかやいへる。世に鳴戸の汐にも似侍るときけば、渡りくらべて今ぞしるべき所なる。此日もわ

づかに四五里ばかり行て、通事の浦とかいふ處にいたる。是より長崎は七里ばかりにさしむかへり。此汐よからずなどいひて、又碇入たるが、かはく間もなき袂かなといふいかりの歌よみぬべし。されば今宵は空あらたにして、宵月の影に濱の松原もほの見得わたりて、是ぞすてがたき旅寐のなかだちなりける。

松むしに人なつかしや磯の家

こなたも苫ふきよせたる下に、燒火の影いとさむげにさしむかひて、茶などのみ居たるが、をのづから世にあることゝちには侍る。

船に火をたけば蔦這ふ家のさま

九日

肥前國
長崎

此日十里亭にいたる。このあるじは洛の去來にゆかりせられて、文通の風雅に眼をさらして、長崎に卯七もちたりと翁にいはせたるおのこ也。予又この地に來りて、酒にあそばず、肴にほこらず、門下の風流誰がためにか語らん。

錦襴も緞子もいはず月夜かな

十日

久米のなにがし素行にいざなはれて、此清水寺に詣けるに、今日は二万五千日の功德とかや。殊に女ごゝろのたのみをける日なるべし。此津の遊女どもの人も見、人にも見られむとよそほひ立たるに、往來のをひ風に心ときめきせられて、花すゝきのなびき合たる野邊は、男山もあだにたてりと見ゆらんかし。さるは浮草の世にうかれて身をあだなりと見る人は、浦のみるめもいかにあだならん。今さしあたりたる物おもひはなけれど、左右の翠簾越にのぞかれて、顏のをき處なからんこそうたておもはるれ。禿といふものゝ何ごゝろなくて、茶漬喰ひたしとおもへる、雀の花見がほにもたとへ侍らん。をひさきいかなるあだ人にか馴て、物おもふ事もならひてむと、是さへあはれにおぼえられける。

草花の名にたびねせんかぶろども

十一日

此日洛の去來きたる。人〳〵おどろく。この人は父母の墓ありて、此秋の玉祭せむとおもへるなるべし。此日こゝに會しておもひがけぬ事のいとめづらしければ、

萩咲て便あたらしみやこ人

牡年・魯町は骨肉の間にして、卯七・素行はそのゆかりの人にてぞおはしける。この外の人も入つどひて、支草はいかに髪や長からん。正秀はいかにたちつけ着る秋やきぬらん。野明はいかに野童はいかに、爲有が稻ほしの花は野夫にして野ならず。落柿舍の秋は腰張へげて、月影いるゝ槇の戸にやあらんと、是をとひ、かれをいぶかしむほどに、

そくさいの數にとはれむ嵯峨の柿　去來

返し

柿ぬしの野分かゝえて旅ねかな　支考

十二日

牡年亭夜話

卯七曰、今宵は先師の忌日にして、此會此こゝろさらにもとめがたからん。たかく蕉門の筋骨を論じ、風雅の褒貶をきかむ。そも〳〵先師一生の名句といふはいかに。答曰、さだめがたし。時にあひをりにふれては、いづれかよろしく、いづれかあしからん。世に名人と上手とのふたつあるべし。名句は無念無相の間より浮て、先師も我もあり。人〳〵も又あるべし。名句のなきは有念相の人なればならし。たとへ俳諧しらぬ人もいはゞ名句はあるべし。上手といふは、切屑をとりあつめ一料理せむに、よきとあしきといさかひありて、はじめて上手・下手の名をわくるならん。吾ともがら先師のむねをさだめねば名句の事はしらず。

卯七曰、公等自讃の句ありや。曰、自讃の句はしらず。自性の句あるべし。

應〳〵といへどたゝくや雪の門

有明にふりむきがたき寒さかな　去來

評曰、始の雪の門は、應とこたへて起ぬも、砧をきゝてたゝくも、推敲の二字ふたゝび世にありて、夜の雪の情つきたりといふべし。次の有明はその情幽遠にして、その姿をばいふべからず。

腸に秌のしみたる熟柿かな　支考

梢まで來てゐる秋のあつさかな

評曰、始の熟柿は西瓜に似て、西瓜にあらず。西瓜は物を染て薄く、熟柿は物をそめて濃ならん。漸寒の情つきたりといふべし。次の殘暑はその情幽遠にして、その姿をばいふべからず。

されば秋ふたつ冬ふたつ、そのさま雪草の變化に似たれば、ならべてかく論じたる也。自讚の句は吾しらず。是を自性の句といふべし。先師生前の句はおゝくその光におほはれとあれども、あるにはあらざらん。筋骨褒貶は沒後の論なるべし。

素行曰、八九間空で雨降柳哉　といふ句は、そのよそほひはしりぬ。落所たしかならず。西華坊曰、この句に物語あり。去來曰、我も有。坊曰、吾まづあり。木曾塚の舊草にありて、ある人此句をとふ。曰、見難し。この柳は白壁の土藏の間か、檜皮ぶき（ひはだ）のそりより片枝うたれてさし出たるが、八九間もそらにひろごりて、春雨の降ふらぬけしきならんと申たれば、翁は障子のあなたよりこなた（此方）を見おこして、さりや大佛のあたりにて、かゝる柳を見をきたると申されしが、續猿蓑に、春の鳥の畠ほる聲　といふ脇にて、春雨の降ふらぬけしきとは、ましてさだめたる也。去來曰、我はその秌の事なるべし。我別墅におはして、此青柳の句みつあり、いづれかましたらんとありしを、八九間の柳、さる風情はいづこにか見侍しかと申たれば、そよ大佛のあたりならずや、げにと申、翁もそこなりとてわらひ給へり。

されば人の俳諧を見る事、その人の胸中を草鞋はきて二三べんもかけめぐりたらんに、などか見あやまり侍らん。名家高達の人といへど、よきはよくあしきはあしからん。人を見てその人にまどふ事は、世に尻馬にのる人と云べし。西華坊かつて尾城にありし時、そこ

の人〳〵の物うたがひありて〽金くるゝ小町が手より花の春　〽蓬萊にきかばや伊勢のはつだより　此歳旦ふたつ出して、句ぬししらぬ先の評をきかむといふ。西華坊曰、花の春の句は、二十年骨をりて俳諧をまぎらかしたる句也。初便の句の好悪はいふべからず。蓬萊の五もじ(文字)、よのつねならずといふに、人〳〵なをあざむきて、歳旦に蓬萊といふ五文字何かかたからん。西華坊曰、人は元日とをくべし。蓬萊にあらざればこの句に形容なしとおもへる、是人の及まじき工夫なり。かゝる風情と風姿をしらんに、俳諧にわたくし(私)したき事さる事なるべし。去來曰、春もなをむかしなるが、先師湖南におはして〽行春を近江の人とおしみける　といふを、大津の白(尚白)が評に、行年(ゆくとし)をあふみの人といはんも、行春を丹波の人といはむも、おなじ事に侍れば、一句ふりたりとおぼえ侍と申き。去來、汝はいかにと仰られしを、曰、尚白が言よからず。近江の人とおしみ給ふは、湖水朦朧たるをりふしのすみかなればならし。暮春もし丹波におはさば、本よりこの起向(趣)うかぶまじ。歳暮又近江におはさば、此感なかるべし。風流はをのづからその場にあるものをと申たれば、去來汝は共に風雅をかたるもの也と、殊に感賞にあへりけるが、その場といふ事をしるべき事なり。

問曰、門下の俳諧に下手の名ありや。答曰、なきにしもあらず。先師死後五年にしてはじめてしるべし。そのほどは、そのにほひ残りて、好悪の名を定がたからん。さしもよき人は見給らめど、吾ともがらはしらず。卯七曰、さいふ人の俳諧はいかに。曰、難し。不易有流行あり。不易にくはしきものは、流行に手をはなつ事あやうく、流行にとりひろけたるものは、不易のたへなる處をしらず。誰は流行をしり、彼は不易をしる。おほくはかたつ〳〵(片)なり。その作者あつまりて、しかして俳諧一芝居といふべし。しからば我が翁の風雅にをける、ふたつのものをつばさにして、天下に獨歩せる人ならんか。吾ともがらいかにしてこの夜光を失へるやと、又かなしみ、又かなしみて夜あけぬ。

後賦

西華坊が秀句に催て是を後賦と題す。ともに粟行が家の記念にはのこし侍る。前後赤壁の賦に習ふと也。

去來稿

十日・八日はたふときちかひありて、ちかき山寺に佛おがまむとて、こゝの遊女どもの月まうでする也。もろこしぶねも入つどふみなとなれば、浦人のけしきさへうちさはぎて、秋風のおりにふれては、葛のはのうらみがほに、いそべの鴈の大ぞらに吹なされて、そゞろに人をおもひおどろくならん。それがなかにもはかなき世をちぎりわびて、もろともに苔の下になどゝいのりおもへらん人も有べしと、あらぬこゝろさへ取そへられてかなし。見渡したる人〳〵のをのが国ひゐきに物くらべしあそばんにも、なにはの浦のあしざまにはいかでいひ落し侍らん。ひたすらにあまの子のあさましとのみおもひあなづりて、上がたの商人の手袋ひきたるためしもおほしとかや。かゝる事などはいひわたるべき年のほどにはあらぬを、西華坊にこのながめの賦つくりたりとほのめかされて、終に後の賦のぬしとはなり侍りけり。

いなづまやどの傾城とかりまくら

望江亭

朝寐にはよしあさがほの北座敷

北溟亭 病後

燈籠にならでめでたし生身魂

十五日

一介亭

仲麿は誰が家にきて玉まつり

今宵は法性院の欄干に月を賞す。この流にさしむかへる山は、この地の墓所とかや。松の木の間にかけわたしたる燈籠百千の數をしらず。世にあはれなるものゝおもしろきは、去ものは日ゝにうとしと、いへる人ごゝろなるべし。

咲みだす山路の菊をとうろかな

十六日

今宵又なにがし鞍風にいざなはれて、いざよひのかげに小船を浮たれば、かの數千の燈籠、そのひかり水面につらなる。

いさり火にかよひて峯のとうろかな

影照院

蕎麥に又そめかはりけん山畠

十七日

明日はわかれむといふ今宵、人〳〵につれだちて諏訪の神にまうづ。此みやしろは山の翠微におはして、石欄三段にして百歩ばかり、宵闇の月かげほのわたりて、宮前の吟望いふばかりなし。

一は闇二は月かげの華表かな　支考

山の端を替て月見ん諏訪の馬場　卯七

山の端を門にうつすや諏訪の月　素行

木曾ならば麥蕎切ころやすわの月　雲鈴

たふとさを京でかたるもすわの月　去來

十八日

筑後國　柳川

廿日

久留米

此日西与亭にいたる。亭のまへに川あり。さるは古歌にも詠じたる一夜川にて侍るよし、あるじのかたり申されしを、

名月はふたつこそあれ一よ川

廿二日

筑前國

この日宰府にいたる。久留米にありし時、日田の里仙きたる。是も此地にいざなひ、この天滿宮に詣しこの時の風雅のまことをごいのり奉りける。かくて連歌堂に宿してわがこゝろ猶あかず。曉の月に又詣し侍りて、

俳諧の腸をかたむけ侍るに、機感たゞ胸にあつまりて、終に奉納の句なし。

廿四日

博　多

此地に市扇をとぶらふ。この庵は箱崎の松原につゞきて、世の住ところもつね(常)にはあらぬに、かくてもあるべき所かなと、余所ながらまづおもひやられし。

松原の葛とよまれし住ゐかな

廿五日

此日一知亭にまねかる。むかし大貳高遠この地にきたりて菊の歌よみけん練酒は、今の俳諧なるを。

ねり酒にやぶ入せばや菊の宿

廿六日

此日呂倚亭にまねかる。此あるじは落柿舎の去來いとこになむおはせば、そのこゝろをおもひ出侍りて、

さびしさの嵯峨より出たる熟柿哉

廿七日

福　岡

この日片雲堂にいたる。堂上に眸をさけば、箱崎の松原は東につらなりて、唐泊(カラトマリ)野古の浦浪もこゝらとちかくうちよせて、もみぢやまの玉がき西にかゞやきたり。さればこのところ、むかしはもろこし(唐)ぶねも入つどひたりときけば、今の長崎のやうにや侍るけん。五里の濱といふ名は、此あたりすべて一覩の中なるべし。

もろこしの菊の花さく五里の濱

城外の鐘きこゆらんもみぢやま

今宵は一日の俳諧に草臥て、宵寐の宿からんといふに、梅川のあるじぞ心ありける。その夜は殊に雨晴て風もひやゝかに、浪の音も障子のあなたなれば、早秋の苦熱も一夜にわすれぬべし。

夜着の香もうれしき妹の宵寐哉

廿八日

此前日洛の助叟きたる。共に和風のぬしにまねかれて市中の別墅にいたる。この日の殘暑たえがたきに暮に歸る。道すがらの江村の暮色よのつねならぬに、磯山に夕日のかゝりたるけしきを、

山は秌夕日の雲ややすあふき　助叟

鯊釣

はぜ釣や角前髮の上手がほ　支考

この前髮はあな一の時はにくけれど、一藝に名あれば世に又捨がたし。

今宵菊虎亭にまねかる。亭前に手燭をかゝぐるに、蘇鐵山ありて、白砂をしきわたしたる庭ひろし。

爐次下駄に雪の音あり萩の露

廿九日

この日極樂寺にいたる。このほどは世情の捨がたき中にたゞよひて、風月の高情も身をくるしむるわざとやなりなむ。さるを野芋の何がしにたすけられて、人間半日の閑を得るに似たり。極樂の二字何かうたがひ侍らん。

寺は我古巣なりけり樓閣の秌

八月朔日

此日何となく病つき侍りて、その夜はおそろしきねち(熱)にくるしむ。この寺の和尙もその外の人〳〵もおどろきあへりけるに、助叟・里仙などまして雲鈴はいねず(寢)ありける。さらでも心ほそきたびねなるを、かく物もおぼえずなり行らむ、世のさまこそあやしき物なれ。生の松原もこのあたりちかければ、生ては歸らんなど人のいへるをきけば、

秌風の枕にちかしいき(生)の松

身の秌を何たのむらん生の松

二日・三日もかくわづらひて侍るが、藥のしるし(驗)だにあらぬを、おなじかたにまもられたらんは、人にあかるゝ(飽)ならひもやあらんと、うき(憂)が中のこゝろづかひ(心遣)せらるゝも、捨がたき世のさま成べし。明日は黒崎のかたにお

もむかむといへば、此ほどよりゐたる人〳〵も、わかれ〳〵になりて、今宵は物にも似ぬ名残にぞありける。

四日

福岡を出て黒崎におもむく。道のほど十四五里もあるべし。箱崎の松原を過るほどは、かの松風も身にしむばかり、波のたちゐ(起(立)居)もいとくるしきに、心つくしのたびねとは、此時ぞ思ひあはせられける。その夜は何とかいふ處に宿して、夢もくるしき夜すがらにぞ有ける。

五日

黒崎、沙明亭にいたる。けふは殊さらに雨に降れ、駕籠にゆられて、人こゝちもあらずまどひふし(臥)て、あるじだにしらぬやどり(宿)なりしが、次の朝は心地つきて侍り。さてもはかる(計)まじき世や。三とせばかりまち(待)かけたる人のかくわづらひ(煩)ていりき給へるを、かほ(顔)だに見ずやあらんと、我友水颯などいひていに(往)けるといふをきけば、あるじの沙明と雲鈴にぞありける。さりや吾旅だちし日より、この所に此人〳〵ありとたのみたるは、かゝるあはれを見られんと云物のおしえ(教)にや侍らん。一保・帆柱などいへる人もおはして、年のほどもやゝたのむべくぞ思はれける。そのほども七日ばかりありてよからず。

十一日

黒崎の人〳〵にいたはられて、小倉の旅店に病床をうつす。この地に醫師を求むるに、西鷗老人ありて名望やゝ高し。その術は扁倉がきねの人を見るに殊(異)ならずといへば、さしも此國のたのもし人にぞおはしける。藥を用る事日あらねど、さみだれの笹葉に日のさしたるやうに心地はれて覺ゆ。旅店のあるじは、なにがし德左とかや、その妻もいとあはれがりて、ともに親のやうに侍るが、たびねに鬼もなき世のなさけなるべし。

十五日

今宵は名月の殊に名にし逢ふ(賀)菊の長濱も、此あたりち

かければ、いかにさゞめき渡らんに、枕だにはなれがたく、死生もしるまじき身のほどおもひやらば泪も落ぬべし。されば福岡にやみつき侍りて、生の松原の發句おもひよせたるに、烁風の枕にちかしとやせん、何たのむらん生の松とやさだむべき。いづれも俳諧の趣向にてはあるまじき物をと、その夜その次の夜はおもひゐけるが、そのうちははてしもあらで、このほどなしおきたる何ども、其外のことば書までも、それを思ひ是をおもふほどに、心しづみて水をわたり、夢あれては山にのぼる。たゞに一糸一草をたづねあるきて、魂くだけんとして胸をいたましむ。我はなどかくあさましきや。花を見、鳥を聞も世にある耳目のなぐさみならんに、さるは身をくるしむるかせにぞ侍れ。いざや我こゝろ俳諧を思ふまじとおもへば、おもふ心なをあらがひて、十日ばかりはとにくるしみ、かくにくるしむ。今はたゞわすれもしつべし。是は人のおそるべきをのれ執念なるぞや。

今宵はそも人ごゝろづきて、此世の月も見ばやと、障子明たるかたを、けしきばかり見やりたれば、空は薄ぎりたちて月のいろもあかく、紅さしたるやうにおぼえられしは、わがねちのはなはだしきたがひにやあらん。

十六日

黒崎・大橋の人々、ましてこの所の人もあまた行かひつどひて、世にもにぎはしきやみどころなりけり。此日殊さらに伊勢のたよりなど人の傳へきたりけるに、さる事のうれしき文にてぞ侍る。

十八日　雨天

西鼠老人、薬園の百詠をよび、唐賢稱美の詩集などたづさへきたる。さるは病床に目をよろこばしむる成べし。

廿一日　晴天

今日は夜着もほし枕もかたづけて、坐敷はきたるなど心地殊更によし。此暮日田の人〳〵よりたよりせらる。

廿五日

此日駕籠にたすけられて、ふたゝび黒崎に歸る。是は水颯・沙明など枕がみになげき申されし、はじめの心ざしをつぐのはんとなり。

駕籠の戸に山まづうれし鵙の聲　沙明亭

生て世に茶汁菊の香目に月夜　水颯亭

腕息に木兎一羽烌さむし　一保庵

何とやら心も髭に老の烌

右三句は病後の吟也。

ひだるさを兒の言の夜さむかな　帆柱亭

三十日

この日黒崎をわかれて、小倉におもむく。人のわかれ・世の名殘は行脚のおどろくべきにはあらねど、今の別のかなしきは、病後のたづきなきこゝろにや侍らん。

菊萩にいつ習ひてや袖の露

九月朔日

有觜亭にいたる。この亭はみな月のはじめならん、一夜のかりねにわかれ侍しが、行めぐりたる九國のさまもおもひやられて、

琵琶形にあるきて秋も九月哉

此家の後に閑居あり。一枝とかいへる額をうちて、こなたには棚つり、へつゐもふたつばかりありて、窓外に山を見わたせば、松の嵐もつとふばかり、中〳〵おかしき住ゐなりしが、病後なお藥をやめがたく、雲鈴にこの所帶をわたして、餅もやき茶も煮つべし。

藥鍋相手にとるやきり〴〵す　雲鈴

元翠・柳浦など水颯・沙明も又つどひ來て、夜をせめ日をつくす。このあそび三四日ばかりなるべし。

虎もゐぬ和田酒盛やあきのくれ

唐辛といふ
題にあたりて

鑓持の秌や更行唐がらし

五日

玄全亭にいたる。是は西鷗老人の高弟になむおはしけるが、師老をまねぎて我病後をも賀せんとなるべし。鷗老人かねて遊行の詩を給りしを、此日藥園百詠の感をのべて、かつはこの度の恩をむくひ奉るとや。

藥園の花にかりねや秌の蝶

七日

此日下の關にわたる。流枝亭に會して、おの〳〵病床つゝがなき事を賀せらる。

しなでこそ都のあきも山つゞき

泊船津

船頭も米つく磯のもみぢかな

壇浦

此地は平家の古戰場にして、歌人詩僧もむなしく過べからず。さればやよひの花ちり〳〵に、金帶玉冠もいたづらに、千尋の底にしづめられしむかしのありさま、今なほ見るばかり、あはれふかし。

鳥邊野はのがれずやこの浦の秌

世につたふ、この浦の蟹は、平家の人〳〵の魂魄なりと。誠にその面人にことならず。をの〳〵甲冑を帶して、あるは眉尻さかしく、髭生ひのぼりていかれる姿、さらに修羅のくるしみをはなるゝ時なし。

秌の野の花ともさかで平家蟹

阿彌陀寺といふ寺は、天皇・二位どのゝ御影より一門の畫像をかきつらねて、次の一間は西海漂泊のありさま、入水の名殘に筆をとゞめたりと、この寺の僧の繪ときゝ申されしが、折ふし秌の夕の物がなしきに、人はづかしき泪も落ぬべき也。

屏風にも見しか此繪は秌のくれ

この寺の庭に老木の松ありて、薄墨の名を得たる事は、

文字が關を此松の木間より見わたしたるゆへなりと、
柳江・流枝などかたり申されしに、

薄墨のやつれや松の烁時雨

重陽

簑笠にそむきもはてず今日の菊

世情の物に逢て物に感ずる事は、いにしへ猶今にたが(違)ふ事なし。我かつ都を出し日より、世の好惡にすゝめられて、その是非にある事二百余日ならん。さるは誰がために(親)したしく、誰がために(疎)うとましきや、是を料撒の鏡とおもはど、あだに破草鞋の名はとるまじきに、褒貶一情といふ所には、いかで我ちから(力)を得侍らん。菊の隱逸に對して、この心をなげくはかり也。吁(アヽ)此時の風雅のまこと(眞)あれや。この時の風雅のまことあらざらんや。

元祿戊寅之秋九月九日

臯日記 終

ゐつゝや庄兵衛板

有磯海（ありそうみ）

浪化集上

浪化撰

有磯海序

はれの歌讀むと思はゞ、法輪に詣て所がら薄を詠よとおしへ、雪見の駒の手綱しづかにして、灞橋の邊にあそべと示しけん、よくも風雅のわり符を合て、向上の關を越過ける事よ。然どもつく〳〵思ふに、是等はみな文吏・官士の上にして、たまさかに市塵を離るゝ便なるべし。平生身を風雲に吹ちらして、心を大虚にとゞめん中には、限もなき江山に足ふみのばして、行さき毎の風物をあはれみ、雪ちるやほやの薄　と、しほれ果たる風情、いかでか其の法輪・灞橋にのみかたよらんや。されば芭蕉庵の主、年久しく官袴の身をもぬけて、しばしの苔の莚にも、膝暖る暇なく、所〳〵に病床の曉を悲しみ、年ゝに衰老の歩を費して、またとなく古びたる後姿には引かへて、句ごとのあたらしみは、折〳〵に人の唇を寒からしむ。一年、越の幽蹤に杖を引て、袂を山路のわたくし雨にしぼり、海岸孤絶の風吟、心を惱されしかど、聞入べき耳持たる木末も見えず、辰巳あがりの棹哥のみ聲〳〵なれば、むなしく早稲の香の一句を留て過られ侍しを、年を經て浪化風人の吟鬚を此道に撚られしより、あたりの浦山頭をもたげ、翠をうかべしかば、いつとなく此の句の風に移り浪に殘りて、えもいはれぬ趣の浮けるにぞ、ひたすら其境のたゞならざりし事を、おしみ感ぜられけるあまりに、穗を拾ひ葉をあつめて、終に此集の根ざしとはなりぬ。この比洛の去來をして、あらましを記せん事を蒙る。かゝる磯山陰をもたどり殘す方なくして、かゝることの葉をこそ、あまねく世の中にも聞えわたらば、猶ありとし國のくま〳〵には、いかなる章句をか傳られ侍るにやと、思ひつゞくる果しもなく、ありそめぐりの杖のあとをしたわれけん筆のあとも、又なつかしきにひかれて序。

懶窩埜衲丈艸謹書

有磯海

秋 あきのまき

早稲の香や分入みぎは有そ海　芭蕉

此句は元祿二年、奥羽の行脚に春夏を送り、秋風たつ比三越ぢにかゝり、處〳〵の風吟有けるなかに、當所のほ句と申つたへける。

早稲の香や有そめぐりのつえ(杖)のあと　浪化

芭蕉翁當國の行脚もしらず、良程(やゝ)を經て、其句をまふけ其人を慕ふ。

早稲の香や有その濱の放れ駒　よみ人しらず

わせのかやゝとひ出るゝ庵の舟　丈草

わせのかや田中の庵の人出入　曲翠

わせのかや田中を行ば弓と弦　支考

芭蕉翁の、伊賀(いが)へこし給ふを洛外に送りて

先入や山家の秋をわせ(早稲)の花　惟然

行人や門田のわせの籾(もみ)つもり　之道

田隣へ早稲かるしきの日和哉　正秀

早稲干や人見え初る山のあし　去來

世のうさや早稲つみたるゝ舟の垢　越中 呂風

刈入てうらやまれけりわせつくり　同 嵐青

米になる早稲の粃や秋露入　同 其繼

早稲の田に刈すかさるゝ小村哉　同 林紅

山水やまだ初秋の香薷散(かうじゆさん)　句空

病中

秋の蠅かうべむや〳〵足せゝり　カヾ 秋之坊

すか〳〵と西瓜切也穐のかぜ　イガ 陽和

七夕や秋をさだむるはじめの夜　芭蕉

酒もりとなくて酒のむほし(星)むかへ　去來

聖靈も出てかりのよの旅寐哉　丈草

露もるや聖靈棚の瓜なすび　サガ 荒雀

玉棚のはしご(階子)をのぼるすゞめ哉　小倉山僧 閑夕

籠かきの佛見事や玉まつり　京 風國

尼壽貞が、身まかりけるとき、て

数ならぬ身となおもひそ玉祭り　芭蕉

ならの片わきにやどりて

うら盆や家のうらとふはかまいり　(イガ)卓袋

三浦には九十三騎やはかまいり　乙州

とぼしては風にけさるゝ切籠かな　(ゼゞ)蟬鼠

村ごしに見せてやしのぶ高燈籠　(ミノ)淵泉

明る夜をとらで仕舞や下手相撲　(サガ)野明

物ごとの御物にたり相撲とり　曲翠

勝まけをわすれて立や相撲草　(長崎)錦水

電の山を出かぬる夜あけ哉　嵐青

電や門の茶による物がたり　(大坂)伽香

朝がほに野邊のちぎりや稲光り　(サガ)爲有

あさがほや宵のかやりの焼ほこり　(ゼゞ)昌房

蕣や梢に垣の這あまり　杉風

あさがほや水の引たる塀のきは　(越中)平交

おくれじと木槿の花のみだれ咲　土芳

女郎花ゑのころ草になぶらるゝ　野童

荷の端もかけにとざすや女郎花　(イガ)尾頭

駒買に出迎ふ野べのすゝき哉　野明

花薄たけをのび切ルあきの雨　(ゼゞ)闗河

歌枕見に行人の従者にさらせける

花すゝき達者にありけ十文字　(イガ)車來

比丘定・かまくらの女郎は、すゝ竹のつめだに織ものゝ手おほひ、うつの宮かさをきりゝとめされて

秋のゝを舞臺に見たる薄かな　(ゼゞ)萬里女

世の中をかう見て行ん花野哉・　胡故

鷄の尾につられけり初あらし　荆口

芭蕉庵のるす

主まつ春の用意やちり柳　桃隣

初かりや比良で追つく帆懸舟　木節

行かりの友のつばさや魚の棚　惟然

とりかごの噂はやし秋の聲　(越中)平水

木啄の入まはりけりやぶの松　丈草

日當にせゝくりながすうづら哉　正秀

馬夫にふみ立られてなくうづら　臥高

粟の穂のひくに入たるうづら哉　惟然

薪ともならでくちぬるかゞしかな　正秀

しる人になりてわかるゝかゞしかな　惟然

太宰府を通りけるに、女どものおほく集りて、稲こきける中に申遣しける。

一夜さもゆるしてねせぬかゞし哉　長崎 卯七

かへし

うき人の袖引やぶるかゞしかな　よみ人しらず

奈良の鹿　二句　木辻に泊りて

門立のたもとくはゆる小鹿かな　其角

番の火を便にねるや鹿のなり　探志

啼はれて目ざしもうとし鹿のなり　丈草

ひざ見せてつくばう鹿に紅葉哉　半銭

かんせきに四足そろゆる小鹿かな　彦根 汶村

四塔に宿して　二句

明星や尾上に消るしかの聲　曲翠

いすまひをふつとなをすや鹿のこゑ　蘇葉

秋日游小倉山　同賦鹿角

振あげて薄に立や鹿の角　野明

諸角に月いたゞきて出鹿かな　サガ 來几

鹿たてや角かたむけてしのび足　荒雀

たゝきあふ角見てたくや女鹿の聲　閑夕

飛鹿の角にもつるゝすゝきかな　爲有

臥處かや小萩にもるゝ鹿の角　去來

あつさをもしのぎつけゝり稲の花　ゼゞ 游刀

禪門の後手さむし稲のはな　大坂 芝栢

出揃ふや稲の田づらのざんざぶり　尾州 露川

なが月の末、大井川をわたりて

いつしかに稲を干瀬や大井川　其角

狼のこの比はやる晩稲かな　支考

稲村の鶴を見ておるすゞめ哉　孤屋

稲といふ名もきがゝりやいもが門　史邦

嵐闌子をいたみて

なき出して米こぼしけりいな雀　智月

粟畑の奥まであかき入日かな　イセ 空芽

暮待て盛見せけりそばの花　ゼゞ 雨汀

狐火のしらけて過やそばの花　荒雀
口取も咳氣ごへ也駒むかへ　曲翠
京がさは皆駒曳のもどりなり　浪化
一番にかざしをこかす野分かな　許六
みのむしの家くづしたる野分哉　句空
日より能なるとてよるの野分哉　浪化
くずの葉にふとり〳〵て野分哉　小松 塵生
風の根をてり付にけり杉の空　長サキ 卯七
電の切れて殘るか三日の月　ミノ 文鳥
待宵や流浪のうへの秋の雲　惟然

伊賀山中にありて

名月や花かと見えて綿ばたけ　芭蕉
明月に麓のきりや田のくもり　同
野山にもつかで晝から月の客　丈草
名月や野山をあしのつゞくまで　江戸 太大
めいげつや馬より下ルせたの橋　彦根 如元
名月やいかり打込なみのくま　ゼゞ 正于
明月や舟にもたえず岩の上　長サキ 野青
口でりにはあぶなげもなき月見哉　伊賀 買山
賑な内を出て來る月見かな　利牛
名月や宵は女の聲ばかり　木節
明月や里の匂ひの青手柴　大津 木枝

不破の宿に寢て

目利してわるひ宿とる月見かな　如行
明月や向への柿やでかさるゝ　去來
明月や家賃の外の坪のうち　野馬
飼猿も呼出す庭の月見かな　殘香
明月や片手に文と座頭の坊　ミノ 左柳
名月にもたれて廻るはしら哉　野童
仕舞せば勝手はねせる月見哉　山蜂
明月やはら〳〵鷄の假客　浪化
月影にはね鯉ねらふ獵師哉　江州奥守村 宮城氏
豆腐やゝつとめて月の七つおき　長崎 牡年
おろ〳〵とむかへば月の御光かな　智月
やゝさむし早稻のひつぢの角芽立　野童

正秀が方へまかりけるに、物一ツ

詣ほどもなく、枕引よせて共にね
にけり。やゝふくるまゝ、おどろ
き立かへるさて

宵の間をぐつとねてとる夜寒哉　臥高

かへし

あんどんをけしてひつ込よ寒哉　正秀

木枕にはなかみあつる夜さむ哉　イガ 風麥

友すれの舟にねつかぬよさむ哉　丈草

生柴をちよろ／＼させて砧かな　ミノ 千川

手の下にしるやいなごのちからあし　岱水

秋もはやくるゝとしらず飛いなご　風國

すゞむしの啼そろひたる千ぐさ哉　カゞ 桃妖

すゞむしに客を通すや廻り緣　ゼゞ 兒觥

燈明に虫もよらぬやひえの山　蘇葉

寒けれど穴にもなかずきり／＼す　丈草

菜畠の一うるおひやあきの雨　李由

菊の香になくや山家の古上戸　北枝

煮木綿の雫さびしや菊の花　支考

椀かくのたらぬ住居や菊の花　李由

菊の花見に來てゐるかいしたゝき　京 可南女

蒼浪にのぞみたえけりきくのきし　嵐雪

九日に菊をたねとやしろ椿　ゼゞ 待彼

松茸やふごをおろしてかほくらべ　爲有

天王寺に、遷座まし／＼ける善光
寺の如來を拜して

みだ頼むこよひになりぬ後の月　之道

あるほどの節句仕舞て月見哉　江戸 八桑

寒やみの炬燵もほしや後の月　斜嶺

蔦の葉や貝がらひらふ岩の間　臥高

彦山に詣。同國五百らかんを拜み
侍るさて、樵のかよひける紅葉谷
といふところに入。みちのほど五
六里さらにほかの栫も見えず、同
行に由侍りける。

秋の道一日かなしもみぢ谷　長サキ 田上尼

かへし

數十里は雲も燃けり紅葉谷　長崎 魯町

澁柿ややぶのうちから山の路　呂風
晝中にやねからおつるふくべ哉　（江戸）呂國
行く秋にきるほどもなき袷かな　牡年
行く秋をぶらりと蚊屋のつり手哉　史邦

冬

古郷に高ひ杉あり初しぐれ　荊口
いさかひに根もなき市の時雨哉　正秀

嵯峨山にあそびて

宇治木幡京へしぐれてかゝる雲　曲翠
住よしのま一しぐれとくゝるまで　之道
塩間に鮎死にかゝるしぐれかな　如行
やねふきの海をねぢむく時雨哉　丈草
日枝までものほれ時雨のはしり舟　李由
牛馬のくさゝもなくて時雨かな　浪化
しぐるゝやもみの小袖を吹かへし　去來
ふる／＼と晝になりたる時雨かな　臥高
芋ほりに男はやりぬむら時雨　風國

門火たくたもとにやみのしぐれ哉　閑夕
秋露の持とをしたる時雨かな　（越中）平水
五器ざらも手當かたしけさの霜　露川

芭蕉翁の七日／＼もうつり行あはれさ、猶無名庵に偶居して、こゝちさへすぐれず、去來がもとへ申つかはしける。

朝霜や茶湯の後のくすり鍋　丈草

かへし

朝霜や人参つんで墓まいり　去來
馬の息ほのかに寒しけさの霜　民丁
霜のくさ裏かへし見るしとゞ哉　（江戸）素龍
をく霜に聲からしけり物狂　（大坂）呑舟
雑水の名だてに寒し神送り　（越中）紅朝
此里の牛の聲きけ神をくり　木枝
こがらしや廊下のしたの村雀　（越中）夕兆
こがらしや天井はらぬ堂の中　林紅
木枯の更行かたや蠟たまり　其纜

芭蕉翁の葬送に逢ひ侍らんと、膳所より木曾寺へいそぎて

こがらしの尻吹すかす鞍かな　野明

凩や田より田にゆく水のおと　彦根 木導

こがらしや明星ぬれて三保の松　空芽

音もなし木の葉のあるゝ社家の庭　八桑

紅葉ちるやねの木のはや石まじり　イガ 氷固

黄になりて落る木の葉や蝶のはね　野明

あらし山猿のつらうつ栗のいが　野明息十一歳 小五郎

どん栗のころび合たり窪たまり　牡年

馬しかる聲もかれのゝあらしかな　曲翠

野はかれて砂にすり込うづら哉　イガ 荻子

枯あしや何に折たる汐干がた　彦根 馬佛

丸ながら月よ嬉しき十夜哉　越中 壽仙

小倉山常寂寺にて

御命講やあとの月には月の友　荒雀

開山忌となりは留主のいなり山　浪化

夷講我料理してしらぬかほ　曲翠

大屋から先にしてとれゑびす講　嵐青

芭蕉翁の難波にてやみ給ぬときゝて、伏見より夜舟さし下す。

舟にねて荷物の間や冬ごもり　去來

そこ意にや廣間の番も冬ごもり　ミノ 恕風

炭の火に並ぶきんかのひかり哉　北枝

冬籠り炭一俵をちからかな　備 滄波

炭うりもつら出しかぬる嵐かな　カ 温故

口燒や吹革祭の酒のかん　ミノ 竹戸

洛にのぼりて、寺社おがみめぐりけるに、淨土の寺ことにゝぎはしかりけるなかきのぞきて

口切や講肝煎を筆がしら　正秀

くち切やことし作りしふくべ共　木導

宿かへてまた土くさき火燵哉　イガ 我峯

埋火に根ぶとの痛むよ明かな　汶村

埋火やふとんを通す茶の匂ひ　許六

折かへししくもかぶるもふとん哉　大津 海動

縫てやつとさげたるふすまかな　杉風

雑水に琵琶きく軒の霰哉　芭蕉

ねこ鳥の山田にうつるあられかな　正秀

新田に水風呂ふるゝあられ哉　昌房

白丁の根に吹まくるあられ哉　支考

みぞるゝや鶏のぞくとまり時　平夾

はつ雪や人の機嫌はあさのうち　桃隣

初雪も飛石ほどの高さかな　斜嶺

はつ雪や人まつ市の松かざり　之道

芭蕉翁の住捨給ひける幻住庵へ、
あづかり侍りければ

はつ雪や去年も山で焼たうふ(豆腐)　(ゼヾ)霊椿

初雪や小坂にはやくすべりみち(道)　(イガ)配力

はつ雪や奥の洞屋の雪なだれ　李由

日枝一つ前に置たる雪見かな　乙州

川こえて身ぶるひすごし雪の鹿　臥高

ひる通る岡部の鹿や雪あまり　魯町

雪の原ほつこりとなる木かげ哉　(ミノ)此筋

雪の夜もゆかた(浴衣)一ッや瀧まうで　(奈良)含粘

ゆきふりや堤にかゝる片いざり(躄)　(大坂)舎羅

砂川の雪をちからやむまの沓　(ゼヾ)駟石

から鮭の目つらも見えず舟の雪　正秀

鴨の背にゆふ日やのこす雪のあし　(ゼヾ)支幽

かりよする鶯かごや雪のあさ　惟然

はたれ雪ひらりとしてはみそさゞい　(イガ)祐甫

さゝ一葉ちり(塵)となりけり雪の上　土芳

ほつかりとわれて落ちけり笠の雪　(イセ)芦本

笠の雪いくび(猪首)になりてをしまるゝ　卯七

米武俵おろしをきけり雪の中　(彦根)湖風

雪空や片隅さびし牛のるす　丈草

かはゆさや雪を負ねてかへる猫　(ゼヾ)堀江氏妻

應〳〵といへどもたゝくや雪のかど(門)　去来

大雪や隣のをきる間合せ　浪化

手水湯や流しそこなふ雪の上　(ゼヾ)弩鳥

御築地のうちなおがみ侍りけるに、
如意が嶽よりいづる月の南門にか
ゝりて、かぎりなくめでたければ

から花に月雫こぼすとびらかな　嵐雪
竪横におらせて見ばや雪のいと　支考
雫うちや首から尻に灘のいと　荒雀
御座そりや先に立たる道具持　羽州 不玉
あし代ややぐらの下のうすごほり　許六
茶の花や鶯の子のなきならひ　浪化
小坊主の上下きたり水仙花　尾州 素覽
寒菊のふるごものぞく日和哉　ミノ 嵐舟
寒菊の隣もありや生大根　許六
日の縁にあがる大根や一むしろ　臥高
すみがまや口付かゆる風のむこ　子珊
河づらや聲吹ながすあじろもり　其繼
河豚洗ふ水のにごりや下河原　其角

粥たくはれば、いなぬさいへば

蠅ほどの物と思へど大師講　句空

岡崎村に住侍りけるころ

うしなはで落穂をたくや大師講　可南
肝煎の手をはなれけり冬の月　曲翠

かり金や友になくれて寒の入　風国
のら猫の聲もつきなや寒のうち　浪化

大名の參會し給ひけるを、二人物のかげよりかきのぞきて

正客の行儀くづさぬさむさ哉　野坡

さ、かんじけるを、其大名にかはりてかへし

れき〳〵の水鼻たるゝさむさ哉　利牛
すりこぎに取つく老のさむさ哉　野明
手もださで机にむかふさむさかな　大坂 舍羅
しかめたる鏡のかほのさむさかな　イガ 九節
いつそふにわめひてかへるさむさ哉　加賀 點吹

いたはり侍る比、洛の鴨川の邊に旅宿して

ふじ垢離の聲高になるさむさかな　牡年
をし鴨のつくべき水の見晴かな　林紅
筑摩江やたつべをのぞくかいつぶり　汶村
白濱や千鳥あつまるあみのあと　ゼゞ 微房
塩燒の夜伽になくや濱千鳥　ゼゞ 川支

寄たてゝ跡の仕舞や小夜千鳥　左次
あら鷹もその鷹匠もづきんかな　彦根 朱迪
狼のひよつと喰べし鉢たゝき　野童
雉子の尾にせばき師走の湯殿哉　蘆生
錢湯の朝かけきよき師走かな　惟然
煤掃や二階をおろす古かはご　イガ 望翠
すゝはきやかしらをつゝむみなとがみ　彦根 黄逸
煤掃のちりにかくるゝ數寄屋哉　史邦

春とゝもに旅立んと、いふ人のもとにて

春かけて旅の蔦やとし忘れ　惟然
牛の子の角や待らんとし忘れ　荊口
節季ゆや夕日につゞく袋持　浪化

此の句は、夢中に句作り侍りけり。

盗人に逢ふた夜も有年のくれ　芭蕉

春

むつくりと皿の枯木も霞けり　杉風
宿うらや風すさまじき梅の花　土芳
痩はてゝ香にさく梅の思ひかな　去來
梅がゝのかみのそりねにとまれかし　句空
梅が香にはづんで反や折の鶴　臥高

伊賀の城下にうに、と云ものあり。わろくさき香ない。

香にゝほへうにほる岡の梅のはな　芭蕉
梅がゝや風呂屋のみちの一たより　浪化
むめが香や雪がこひとる軒の晴　越中 夕里
掃切て梅がゝ遠きひろまかな　江戸 凉葉
梅がゝや別當をおくる村の口　呂風
しかるべき松原も有むめの花　如行
笠ぬぎて貌洗ふたる野梅かな　素覽
手水場のまだほのくらし梅の花　嵐青
梅さくやまだひをむしの朝ちから　荊口
ちりしほやはぜうる里の梅花　許六
竹簀戸のあほちこぼつや梅の花　丈草
ちる時をさはがぬむめの一重哉　桃隣

七種や唱哥ふくめる口のうち　北枝

ならべ置膳にたゞなのひゞきかな　我峯

數〳〵は女房のせわのなづな哉　風睡

鶯の小がろきなりややぶ椿　微房

別二支考一

鶯や尻をもためず暇ごひ　計徒

化粧する果やなき出す猫のこひ　史邦

猫の戀風のおこらぬ斗なり　風國

更る夜を水のむ猫の別かな　川支

背戸中はさえかへりけり田にしがら　丈草

足までか〳〵とてはるのゆき　支考

出替や酒の使の名のはじめ　路健

山鳥と小松の殘る燒野かな　洞木

やまどりの樵を化す雪間かな　支考

曉の雉子にさめけり猿のかほ　關河

やまうらの夕轟きやきじの聲　空芽

雉子なくやほゝろは消る瀧の上　車來

子をつれて岩にふりむく雉子哉　魚光

つゝくりと雉子つらなるや木瓜の花　露川

源平の古戰場をたづねて、兵庫にいたる。

便船や雲雀の聲も塩ぐもり　史邦

四五尺を雲に入とや雲雀かご　千川

しら雲を瀧へけ落す雲雀哉　万里

おそはるゝゆめのかしらの野駒鳥かな　卯七

いせより江府へまかるころ

雁の聲朧〳〵と何百里　支考

波先や勢田の水行朧月　猿蹄

朧よに引や網場のからす貝　乙州

野馬やあとのさびしき小大名　李山

馬の尾に陽炎ちるや畫はたご　惟然

かげろふや晝より前はあくのかす　共纖

陽炎やしたはながるゝ水ながら　平水

陽炎のもえて田にちる椿かな　曲翠

老鏡

九月より春まで花の老椿　風麥

見おとるや里に植ては山つばき　イガ 良品

文の添ふ椿は道でもげにけり　利牛

大佛やよこねもならず御入めつ　不玉

春雨やはたごもとはで奥坐敷　正秀

水風呂に茶をはこばせて春の雨　曲翠

鶺鴒の尾にたゝきだすつくしかな　ゼゞ 麻三

置土やへぎおこしたる蕗の塔　江戸 子繡

茄なへもらはん雨のしめりかな　江戸 壺蛙

いのしゝのやぶほりかへすのびるかな　野明

女のもとより、白魚を人のもとに
おくるとて

白魚や道で氷らん飛鳥川　よみ人しらず

ときこえければ、其人にかはりて

しら魚に透ても見えよ胸のくま　曲翠

しら魚のすべりなれたる碇かな　木導

身のはるを飛んで見するや池の鯉　殘香

春かぜや蝶のうかるゝ長廊下　林紅

はるかぜの空にのぼるやくれ木つみ　イガ 配力

市中や馬にかけ行いかのぼり　イセ 園友

花鳥の空にいそぐやいかのぼり　土芳

あひおひの姫とつるゝや雛あそび　エツ中 宇白

煤けたる壁ほのくらし紙雛　イガ 雪芝

土器のはくもゆりこせもゝの花　其繼

鶏の相手もなしやもゝのはな　殘香

菜畠や境てりあふもゝのはな　浪化

はれ物にさはる柳のしなへかな　芭蕉

畑の鱗をながすやなぎかな　曲翠

五六本よりてしだるゝ柳かな　去來

をしよせてたばぬる程の柳哉　探芝

待花に小さむい雨のあした哉　杉風

櫻ならばなどねどころにせめぞ、は
なにねぬはるの鳥のこゝろよ。

花にねぬ此もたぐひか鼠の巣　芭蕉

片尻は岩にかけけりはな莚　丈草

一本をくるり〳〵とはな見かな　浪化

花見にもたゝせぬ里の犬の聲　去來

ちかづきになりてくつろぐ花み哉　正秀

喰物に喰入やつもはな見哉　古 嵐蘭

寺中花

小坊主にしかられてのく(退)花み哉　共継

ぬり笠に花の末うつあらしかな　來几

あつらへの天氣也けり花ぐもり　史邦

物干や夜着かゝへ出て花の雲　岱水

花の雲世を一ぱいの入日かな　卯七

鳥追て花つかみ行す鷹(巣)哉　怨風

かし家や花のさかりに門の錠　風睡

花ちりて二日おられ(居)ぬ野原哉　嵯峨農十二歳 市

御封切る廊下の口やいとざくら　ミノ 支老

東叡山

八ッ過の山のさくらや一しづみ　其角

日枝のやまにのぼりて

悪僧の弓はるあとや山ざくら　野明

立臼の木取て有やゝまざくら(山)　孤屋

野遊くれかゝりぬれど、猶、獨芝居はなれねば、従者をかへして申遣しける。

つれ(追)まつ(待)やとろ／＼坂の薄すみれ　イガ 尾頭

かへし

盃の中にさかせんつぼすみれ　イガ 示蜂

山吹や水そこ(底)見こむ馬の上　イガ 石推

やまぶきに牛の尾をふる道もなし　イガ 狄子

五六反しざり(退)て見るや松のふぢ(藤)　爲有

やはらかに濁るか藤の雨しづく　木枝

狼のによろりと出るや藤の花　荒雀

山ひとつ青みも見えぬつゝじ哉　文鳥

梅かえにこそ鶯は巣たゝへ

もず(鵙)の子をそだて揚るや茨くろ　ゼゞ 素覧女

三月盡

何番の花でつくるや春の空　野童

夏

ほとゝぎすたれに渡さん川むかへ　丈草
時鳥二ツの橋を淀の景　惟然
ほとゝぎすせたは鰻のじまん哉　許六
頭のうへにむせぶや摩所の時鳥　支考
啼ころぶ曉あらんほとゝぎす　北枝
竹の子もひかれておそし時鳥　李由
麥めしで埒明客やほとゝぎす　之道
木を立て木にうつる間ぞ時鳥　壽仙

句空法師が、山寺に來りけるをさゝめて

豆腐こそなのらね山は時鳥　浪化

かへし

ほとゝぎす山には鬼もなかりけり　句空
雀よりやすきすがたや衣がへ　雪芝
衣がへ雑巾ひとつ出來にけり　之道
鶯に糊ちらしけりひとへもの　呂風
竹の子や風呂やの土のあたゝまり　朱迪
たけのこや皮つきこはし甲武者　智月

許六が江戸よりやがてかへるべきさ、いひこしけるに申つかはしける。

竹の子のきほひや人を待日數　李由

かへし

竹の子の上る競や夜ゝの露　許六
頭をあげて咲かゝりけりけしの花　斜嶺
ぬけ道や垣ゆひ切てけしの花　左次
むまにのる皃おり〳〵や若楓　卓袋
芍藥や盧路をひらけば奥の前　支老
草むせやところ〳〵に百合の花　イセ宗比

人〳〵川さきまで送りて、餞別の句を云・其かへし

麥の穗を便につかむ別かな　芭蕉
むぎ秋は身の置どころなかりけり　風蕎
疱瘡する兒も見えけり麥の秋　浪化
麥秋やとんぼうとまる淵の上　越中和求

麥わらを取かぶせけり地藏堂　平交

麥笛やふいて見による師子がしら　イガ 魚日

夕雲雀鳴やむ麥のくろんぼう　野童

一朝に降しづめけり麥ほこり　平水

元祿七年久しく絶たりける祭の、おこなはれけるを拜て

醉顏に葵こぼるゝ匂ひかな　去來

奈良の万僧供養に詣で、片ほとりに一夜をあかしけるに、明て主につかはすべき料足もなければ、枕もとのから紙に、名處とゝもに書捨、のがれ出侍りけり。

短夜や木賃もなさでこそはしり　惟然

あやめ草茶師のよろこぶ節句哉　木枝

大井川水出て、島田塚本氏のもとにとゞまりて

さみだれの空吹おとせ大井川　芭蕉

宇都山 うつのやまにて

さみだれや棹にふすぶる十團子　左柳

五月雨にもてあつかふはしご哉　里東

眞白に鹿の星毛や五月あめ　江戸 楚舟

鉢〳〵と留守の間めぐる田植かな　示蜂

鴉の巢や螢もかりの足やすめ　荊口

たゞ一つやなに落たるほたるかな　越中少年 鹿也

顏つきや藤の裏葉の螢とり　イガ 苔蘇

水うちて跡にちらばふ螢かな　ゼゞ 囘鳧

蚊の中を軒つたひ行螢かな　イガ 市文

露川が等、さやまで道おくりして、共にかりねす。

水鷄なくと人のいへばやさや泊り　芭蕉

くる音は麥わらかつぐくいな哉　イガ 玄虎

うしろより戾かゝればなくくゐな　半殘

水札なくや懸浪したる岩の上　去來

よし鳥や日のさし廻る假の庵　錦水

片壁にはやためろふや蚊のやどり　イガ 蛙弓

蚊の聲の中にいさかふ夫婦かな　李由

蚊遣り火や麥粉にむせる咳の音　許六

訪農家

行水の下たき立るかやりかな　野明

かへし

客ともにつれてけぶたき蚊やり哉　爲有

妻をうしなひける比

子をねせて頼む人なき蚊遣かな　ゼヾ牝玄

やう〳〵と涼敷なればかやりかな　不玉

うたゝねをこかし入けり蚊屋の内　車來

鵜づかひの晝ねの床や蠅の聲　史邦

日のかげをおぼえて蠅のざしき哉　長サキ近習

苦しさや笹葉かけ行牛の蠅　九節

町幅のいんきなりけり京の夏　孤屋

あたりから晝ねの客や夏の亭　桃隣

ざしきまでとゞかぬ夏の木陰哉　野坡

月代にゆめ見て飛ぶか蟬のこゑ　正秀

時〳〵に寐言がましやよるの蟬　句空

降うちや蟬のなかねば物わすれ　子珊

あふ坂やいとゞせき合せみのこゑ　智月

空せみとなるまでなくを仕事哉　乙州

しがみつく力やのこす蟬のから　此筋

すゞしさや瓜ふむやみのあぜ傳ひ　支考

しぶかみに瓜の匂ひや市あかり　夕兆

茶ほこりの手をあらはばや眞桑瓜　正秀

水かえてこすほどすゞし眞桑瓜　游刀

水仙のとちほりかへすあつさ哉　雪芝

馬の目のおろかにくるゝあつさかな　カヾ牧童

蟹の手のひゝもかはらくあつさ哉　野明

白砂に雀あしひくあつさかな　遲望

立合て牛うる軒のあつさかな　探芝

暑き日や馬屋のなかの鞦俵　恕風

上下とひねる枕のあつさかな　魚日

ゆつくりとねたるうへにも暑哉　大垣遊糸

そろばんも枕數也竹婦人　卯七

夕立に吹ちる物や竹の皮　イガ澤雉

白雨や由伏里に入かゝる　イガ万乎

ゆふ立やろぢより出る水の穴　望翠

麥かりし夜は猶うすし夏の月　山宗
われ鐘のひゞきもあつし夏の月　北枝
暑き夜や井戸に水なき夏の月　荻子
かやの手に馬追なくや夏の月　猨道
夕良やあるじのしよさのなつかしや　我峰
ゆふがほをくゞり廻るや夏ざしき　臥高
夕顔にかんぺうむいてあそびけり　芭蕉
日ざかりの花やすゞしき雪の下　呑舟
おさないに花むしらるゝけまん哉　一鷺
くらがりにいちご喰けり草枕　史邦
なつもゝや一構つくにかご竹　空芽
礒ぎはをやまもゝ舟の日和かな　惟然

淀川晝舟

浦〱のうしろに實なき榎かな　風蕎
からむしのあとからそばの二葉哉　浪化
種麻やぐるりに残るやけ畠　仝
やねふきの額しろしや麻頭巾　壽仙
おもだかも田草の數にひかれけり　如行

川狩や村は御藏の薮の隈　嵐青
馬柄杓を岩に割込清水かな　野徑
先馬の脊しめし行清水かな　猿雖
我あとへ猶口立よる清水哉　許六

老鶯

暮しばし緣近にじるすゞみ哉　祐甫
葛布のきごゝろしれや夕凉　買山
嫁つれて凉やせどのえ木の上　龜水
とぎ立る庖丁すゞしすのこ緣　其繼
すゞしさや折つて見せたる生鯛　臥高
風すゞし膳出しかゝるはな鰹　洞水
出嫁のおされて行や夕すゞみ　仙枝
すゞしさやうか〱行ば行とまり　里東
里の子の乗物のぞくすゞみかな　萬乎
砂川をわたりてあそぶ凉哉　土芳
すゞしさや水の流の畠なり　蘇葉
凉しさや八人代の田の青み　荒雀
凉しさのこゝろもとなしつたうるし　丈草

紀の藤代を通ける比、此處に三郎重家の末、今にありと聞およびぬれば、道より少山ぞひに尋入侍しに門・ついち押廻シ、飼たる馬、みがきたる矢の根たてかざりて、いみじきものゝふ也。又庭にいにしへの弓懸松とて、古木など侍りけり。

藤代やこひしき門に立すゞみ　　去來

暮まつや白地扇の風あたり　　良品

町禮や袴のひもに扇さす　　曲翠

直さまと書なぐりたる扇哉　　望翠

水無月をきはだつ雲の高ね哉　　靈椿

八雲たつ此の嶮讃を雲のみね　　其角

ありそ海集撰たまひける時、入句とも書あつめまいらせけるにそへて祝ス。

鷲の子や野分にふとる有そ海　　去來

元祿八乙亥歲花老上旬

正竹書焉 □□

となみ山

涙化集下

涙化撰

刀奈美山引

頭巾とも襟巻ともつかぬはなむけせしは、霜月十三日の夜也。そのよはことにさむかりしかども、嵐雪に妹ともいはせず、桃隣に狂氣とも迯さず、落柿舍をたゝいて入しより、先たき付る酒の間、ともに本情をあらはすたのしみ也。四子一胸に成て、芭蕉翁の昔を泣みわらひみ、嵯峨の咄は幻住庵へとんで、深川をわたれば、清瀧川の塵なき月を思ひ、猿蓑の評は芝居の沙汰にうつり、戀をば一句にてこそ捨といへば、早く傾冶のたはぶれに事よせて、人事人情かはる〲の轉動の上にも、十人の酬和と云し九人が意地をたてしも、たゞ翁一人を眼にし口にし、横行の蟹の迯穴をふんで、時のさかなにせんと咄ししこるに、八ッの鐘耳ひそかにして、鉢たゝきのしはぶき來る。是を嵐雪が馳走にと十錢をなげて、千聲のひさごをならさしむ。

千鳥なく鴨川こえて鉢たゝき　其角

今少年寄見たし鉢たゝき　嵐雪

ひやうたんは手作なるべし鉢たゝき　桃隣

旅人の馳走に嬉しはちたゝき　去來

されば堅固のつとめ哉と、その跡をしたふて、明れば十四日の明ぼのに四子北野へまふで侍り。輪藏を廻りて回廊によれば、雪の風はな松をはらつて羽織しめり、かほそき梅にかゝるさへ田樂の匂ひになりて、一盃はとすゝむる桃隣が良色ことに青し。嵐雪が奉納の一句に十面するを、時うつすまで繪馬をながめて待かねたり。とかくする中に、かたはらに腰掛所得て、爰に都の名殘をおしめり。むかし芭蕉翁北越の旅寐に、ありそ海の吟あり。浪化君此の句より信仰の一集をおぼしめし立ちありて、去來着頭をかうむるなり。江戸門葉のものにも、かねて發句まいらすべきよしを、催しぬる事を語り出で、とみになみ山のおもてを起しぬ。往年落柿舍にて夜ひそかに翁をむかへ、向對の盃ありて、門人のかためをなさせ給ふ御こゝろざしの、目出度覺えぬれば、予も一かたにおもひ侍るよしを約して、心かたむかぬ等をぬきんで、撰集の餘力とし、こしのとなみに雁陣をたて、同じく綰柳の庵をふるつて、下知する事をしかいふのみ。

となみ山の表

こがらしや沖より寒き山のきれ　其角
高きところに生るふゆ（冬）麥　浪化
來春の用意するらん木具提て　嵐雪
家は見事にたちそろひけり　桃隣
山鼻にしる人待てはしりよる　去來
きざみ（刻）なます（膾）に入るこんにやく（蒟蒻）　角
萩の花小刀ぬいて下へを（下）り　化
はこに鼠のかゝるあさ露　雪
有明の汐に筏をおしくづし　隣
番羽織着ていきるくみつき　來

冬

此の家が不破（ふは）の關屋か雪の中　岩翁
初雪に眞葛（まくづ）が原のめかけ哉　晋子
すり針や今ふるやうにいつの雪　龜翁
はら（拂）はずに雪の風鈴の音もなし　介我
初雪や炉次（ろじ）に女の雀弶　紫紅
かくれ家や片耳かけて角頭巾　專吟

春

やぶ入やひとつはあたるうらや算　晋子
齒につかぬ子こもりも哉花の時　岩翁
物陰や田螺ののぼる種だはら　尺草
彼岸にて彼岸櫻のちりにけり　彫棠
春の野や木瓜は莚の敷合せ　沾德
やぶ入や朧月夜の酒の醉　專吟

夏

卯の花に芦毛の馬の夜明かな　許六
早乙女の手でせくものよ川の支（テア）　彫棠
飛石の間や牡丹の花のかげ　介我
旅立に火繩やりけり門すゞみ　岩翁
凉しさや帆に船頭のちらしがみ　晋子
凉み舟鷂はかしまし（喧）と沖へ行　枳風

秋

星合や離別の中をわびて見ん　山蜂
暁を引板屋にかはる妻もがな　秋色女
穐のくれはり合もなし舟遊山　紫紅
寐た家の燈籠哀に月夜哉　未陌
水の蛛一葉にちかくおよぎ寄る　晋子
雁の腹見送る空や舟の上　同

元祿猪頭勇進之日
去來丈　演說し給へ　其角

礪浪山の撰集に、我かたの連衆催されければ　曲翠

捨鐘の間を降出すくれ(暮)の雪
鷹とまらせにおろすたれ(垂)ご(菰)も　浪化
松茸の數を袖より見せ合て　正秀
簭に露うく盃のもち　臥高
名月をこゝろ〳〵に申なし　胡故
湯治の旅をあとさきの初　翠
ともかうも少の金をしひろげて　高
去ル牢人のむすめ養ゥ　秀
反故にもちよつ〳〵と見ゆる文の端　翠
時雨の比はみ(美濃)のを出て行　故
さび刀冥加も有れといたゞきて　秀
戸を片陰にひろき寐所　高
椶櫚の葉に風吹あつる月よかげ　故
すゝきの岸を下ル川舟　翠
よひ衆の見たがられたる秋のくれ　高
豆腐に葛のまづき(奇)れ(麗)いなる　秀
今はやる庭とて花を五六本　翠
春のひよこの股立をとる　故
陽炎のちら〳〵としてあたゝかに　秀
そこら廻りの鍬すてゝおく　高
蜂のさす貞をさまるてすゞみ居る　故
五器に蓋してもろふ何やら　翠
下町の盗の出た噺しして　高

越前衆の遲ふたゝれし　秀
行違ひ手ぶりで通る松の間　翠
月もくらみて光るいなづま　故
翠簾の下ひそかにくゞる秋の風　秀
淺茅の露を戀の一景　高
おもふ事あとは念佛にまぎらかし　故
五百の錢をどちへすまさう　翠
腹持を今朝の欵に直したり　高
旦那の留守は門たてゝをく　秀
柴積んだ上に子供をあそばせて　翠
きのふの古着ね直をさしてくる　故
しやら〳〵と花見の通る眞盛　秀
武士片側に寺町の春　高

曲翠　九　浪化　一　正秀　九
臥高　九　胡故　八

鶯に朝日さす也竹閣子　浪化

禮者うすらぐ春の靜さ　去來
やぶ入の見やげ似合に拵へて　同
又時の間にわるうなる空　化
炬燵切寒もちかしくれの月　同
ひろい處を丸口にかる　來
旅人に錢をかはるゝ田舍道　同
かひこの臭き六月の末　化
雫たる網を一ぱい引ちらし　同
小屋敷並ぶ城の裏町　來
謂分のちよつ〳〵と起る茶道事　同
梅咲そめて立花はやらす　化
年中を松の内より料理くひ　同
いせの朕日のいそがしき春　來
上紺の木綿合羽に傘さして　同
湯屋の手透は八ッさがり也　化
夕月のもやう互にかくしあひ　同
一ァでもなき梨子の切物　芭蕉
玉味噌の信濃にかゝる秋の風　同

不足な寺を無理に持する　來
右の手の振ひしだひに强ふなり　同
　點かけてやる相役の文　化
此の宿をわめいて通る鮎の鮓　同
　青田うねりて夕立のかぜ　蕉
平めなる石を敷たる行水場　同
　給仕をさせて馬夫が食喰　來
月くらき夜の塩梅を星で見る　同
　聖靈棚はよほど窮屈　化
しのぶ間を踊に出るとおもはせて　同
　來てうからかす去年の傍輩　來
參宮といへば盗もゆるしけり　化
　につと朝日に迎ふよこ雲　蕉
蒼みたる松より花の咲こぼれ　來
　四五人とほる僧長閑なり　化
薪過町の子供の稽古能　蕉
　いつつも春にしたきよの中　來

浪化十五　去來十五　芭蕉六

ことし乙亥のむ月、加賀の金澤に旅寝す。たまたま蕉翁の百ヶ日に逢侍れば、句空・北枝が等をまねき、この日の作善をおこす。

即興

問殘す歎のかずや梅のはな　北枝
　春も氷にしづみつくいけ　浪化
田を返す馬の鞍蓋こしらへて　句空
　石つる方へとやのかたがる　林紅
白水の二番取おく月の影　牧童
　梧桐落るを秋の手はじめ　筆
打明る折敷にはぜのそりかへり　化
　這かゝる子にいかい目をむく　枝
借屋から奉加の帳をつけ廻り　紅
　袷洗ふてもろふ旅だち　空
そはそはとして何もかも忘れたり　枝
　笑ふて濟す途なかの禮　童

物ねぎる内より雨の晴あがり　空
おもひ懸なきうづらなき出す　化
すががきの同じ手かへす秋のくれ　童
殿にもまけずいらへする月　枝
ちる花に有ほどの戸を明はなし　化
欲にめし喰ふ熊野路の春　空
さえかへる兵具のつゞらしめからげ　枝
めづらしさうに犬の尾をふる　童
裏白のほぐちのうつるすりびうち　空
四方ぶんなる茅の辻堂　化
往昔の宗祇の連衆したはるゝ　童
蒼き空より雪のうちゝる　枝
あぶつけに小ぶとん敷て里歸り　化
一荷ひほど鷄頭のはな　童
うそ寒き淺草前に店はりて　枝
けさは露見るやねの置石　化
つう〳〵と目白の渡る月しろし　童
藪のうしろを鉦たゝき行　空
麥刈の晝間過せと留守をして　化
ひえたる菓子を盃にもる　枝
上一ッぬらで帶するひぢりめん　空
船ゆる度に肝つぶす君　童
さればこそ松は花より朧にて　萬子
海苔もてはやす百日の空　紅

北枝　八　浪化　八　林紅　三
万子　一　句空　七　牧童　八
筆　一

追悼のほ句

去年の神無月、翁の辭世し給ふ事も、越路のはし〳〵には、やゝ日數へて聞えぬれば、義仲寺へ手向杯おそなはり侍りて、晋子が終焉の記にもゝらされし事、人〳〵あさましさおもへれば、今ここにさゞめれ。

落着は難波のゆめや都鳥　句空
かなしさや時雨に染る墓の文字　浪化

冬籠うき次手なる別哉　加賀 萬子
風渡る枯葉に見るや雪の舍利　秋之坊
黑海苔の文も形見や雪の跡　加賀 四睡
風と化すたよりに袖の時雨かな　平交
車座に並び泣けり冬の月　エツ中 宇白
獨言いふてくやむや小夜時雨　同 芦葉
痩せ〳〵て終に折れけり水仙花　壽仙
初雪や扇だけなる墓の松　呂風
白玉も涙の名なり冬つばき　林紅
閙忌に籠る霜よのうらみ哉　北枝

蕉翁の落柿舍に寓居し給ひけるころ、たづれまいりて、主客三句の情をむすび立かへりぬるを、その後人〳〵まいりける序、終に一巻にみち侍るとて、去來がもとより送られける。

葉がくれをこけ出て瓜の暑さ哉　去來
野松に蟬のなき立る聲　浪化
歩行荷持手振の人と咄して　芭蕉
かごと御供の間ひとぎるゝ　之道
半時ほど夜のかゝりたる月の入　丈草
火のぱち〳〵と燃えてやゝ寒む　支考
軒口は蔦這のほるふしん前　惟然
兄弟どもが兄をあがむる　野童
切立て畠見渡す丹波やま　野明
そろ〳〵出す冬のうり物　來
寄合は鯨のとれぬさたばかり　道
あかうすゝけしあんどうのさや　草
ちくとした風呂敷さげて戸をたゝき　考
こそり〳〵とそよぐ黍の葉　然
砂川の淺くながるゝ夕月夜　童
露しとれども輕荷ふらつく　明
百遣ふ花の木陰の店屋もの　道
茶煙朧に西を見はらす　來
此寺に楞嚴よめしこその春　草

獵場の公事のむづかしうなる　考
朝の內むす子に馬をおはせやり　然
餅つきあげて汁粉もり出す　童
はご板の寄て一間にあまるほど　明
借上いふてめかけたづぬる　道
茶小紋にろの十德のすんかりと　來
手船さつさと秋は來にけり　草
此夕月を野にとり山にとり　考
しづが畠のなるこからつく　然
雨氣づく鉢の戻りのはら〱と　童
早ふ出來たる市の小屋懸　明
此ごろの化物ばなししづまりて　道
むこと舅のなをる挨拶　考
御局の里下りしては涙ぐみ　草
ぬつたはこより物のだし入　蕉
花の香の暫くやまぬ宮うつし　然
日がな一日鳥のさえづり　明

去來　四　浪化　一　芭蕉　二
之道　五　支考　五　丈草　五
惟然　五　野童　四　野明　五

百舌鳥なくやまだ明星の入殘り　風青
うす〱霜のみえわたるあき　共纖
木綿取庭もお上もふさがりて　浪化
廿四五夜のほのくらきつき　呂風
紫陽花に螢みだるゝ水の色　林紅
村をはなれて小家一軒　夕兆
寢處を不性や蕢も敷つめて　路健
手繰おろして間にかよふ也　青
入ちがへ〱ふる玉あられ　纖
みかんのかざのはんなりとする　化
金屛をたゝみよせたる秋の風　風
月代見えて月の出かぬる　紅
しづ〱と女房達を先へたて　兆
御國いんきよのめでたかりける　健

鶯の餘の鳥どもと鳴まじり　青
うらゝに眠る長谷の所化寮　繼
杉の葉の花にならべば赤ばりて　化
沖より風の吹まくりけり　風
いくはなも大名衆の鑓印　健
けふは隨分朝起をする　青
湯づき芋をかけちらしたる竹の垣　繼
顏の上氣にうつる白粉　化
こも僧に太事の手共所望して　紅
御齋過ればはらはらとたつ　化
一面に雪のふり込水たまり　青
手のきはばかり殘る松明　健
村切に役の人足つめさせて　風
内のつとめにかゝる遊行派　繼
しん物の串柿おろす春の月　化
藪をはなれず人ぢかな雉子　紅
本丸を打こして見る花の雲　繼
青い合羽のつゞくあめふり　化

緺干を燒ば匂ひの鼻につき　紅
牛の債の銀をいたゞく　青
聞しより宮司の娘てんばなり　兆
あそびのやうに前わたりくる　風

嵐青 六　其繼 六　浪化 七
呂風 五　林紅 五　夕兆 三
路健 四

賀刀奈美山撰集

凩や釼を振ふ礪浪山　去來

元祿八乙亥歳暮春上澣

正竹書

京寺町二條上ル丁
井筒屋庄兵衛板

續有磯海（ぞくありそうみ）

上・下

浪化撰

續有磯海序

公任の大納言は、みやこ北山の谷にこもりて、いくばくの思ひをめぐらし、和漢朗詠集をえらびて、唐人の奥ある情、和國は猶才ふかき文人・歌仙の詩歌を集め給ひける。今もそのところを朗詠谷と云つるとかや、まことに至情虚ならざる風雅と羨しく崇し。されば故芭蕉翁も折ふしのことわざにも、彼集の部立の面白きなど沙汰侍りしと、日ごろ去來が語りけるに耳とゞめて、今年有磯の後集撰ばんと思ひたつより、かの卿の集に倣はん事を據とし侍りける。當時みだりに蕉門の徒と名乘るやから、國々にあまねく所々にみてり。されども正しく其直示を得たるものすくなし。伊陽は翁の故國、東武は舊縁の地なり。湖南また折々に痩筇を休めたまひしゆかりにして、彼ほとりの諸生は、げにも亡師の遺風をさまさず、なつかしき事のみ多し。これに會談を欲すれども、彼ははるかに東南の地を隔てゝ、我は又邊塞の境にあり。折ふしの便さへ心にまかせず、たゞ山遠水長の歎を增のみ也。されども時々の文通に聞えわたる佳句の、無下に紙魚の栖に成果むは口おしく、かつ師におくれて、其佛を歎きしたふ者どもの作をも拾ひあつめて、續有そ海集と名付侍る物ならし。于時

元祿戊寅抄秋廿三日

浪化□

元祿七年後の五月に去來が許にて故翁に向對の折、此比難波の之道がまいりて、人〳〵打より申捨たるとて見せ給ひし歌仙一巻、今續集の冠となし侍る。

落柿舎卽興

牛ながす村のさはぎや五月雨　之道
青葉ふききる梅檀のはな　去來
一枚のむしろに晝ね押あひて　芭蕉
柄も小鎗もふるき脇ざし　惟然
つき影に苞の海鼠のさがるなり　丈艸
堤おもては田の中の道　支考
家〳〵はなよ竹原の間にて　去來
御齋は月に十五盃有リ　之道
秋もやゝ今朝からさむき袷がけ　惟然
雁より鴨のはやう來て居る　野明
抱こみて松山ひろき有明に　支考
逢ふほどの人魚くさき也　はせを
雨乞のしぶりながらに降出して　丈草
紡苧をみだす櫛ばこの蓋　惟然
極樂でよき居處を賴みやり　之道
しはうきたなき浮世經に臭　去來
道もなき島の皿の花ざかり　丈草
半夏を雉子のむしる明ほの　支考
獵船の出水にくだるうす霞　野明
塔にのぼりて消るしら雲　惟然
賣にやる竹の子ほりて惜むらん　支考
茶どきの雨のめいわくな隙　之道
此ごろの上下の衆のもどらまし　去來
腰に杖さす宿の氣迷　芭蕉
わら葺に夕瓠のなりのおもたくて　惟然
ちら〳〵鳥のわたり初けり　埜明
朝の月起〳〵たばこ五六服　之道
分別なしに戀に仕かゝる　去來
蓬生におもしろけづく伏見わき　芭蕉
加減をせゝる淺漬の桶　惟然
出來てくる靑の下染機に入て　埜明

何をけら〳〵笑ふ髪ゆひ　之道
吸物で座敷の客をたゝせけり　去來
肥後の相場をまた問てこひ　はせを
幾くちか花見のつれのさそ(誘)はれて　惟然
日ぐせになりし春の雨風　野明

須磨寺に吹ぬ笛きく木下やみ　芭蕉
須磨の浦一見の時

此句は湖南の丈艸、幾とせ衲底におさめられしを、此たび我續集結縁にとて、文通の中に緘して送られ侍る。されば亡師の句、諸邦の集に洩レたるもすくなく、程なき年月のうちに、その言葉さへ俤さともに殘りなく成果ぬるぞ歎し。よつて右に寫して追憶の志をあらはす。

續有磯海

四季部立　徴明詠集上卷

立春

花鳥にひまぬすまばや春もたち　東武 杉風
水仙に來るもの一重としの明　伊賀 土芳

早春

柊(ひゝらぎ)にさへかへりたる月夜かな　湖南 丈艸
梢もえて餘寒をあそぶ二夜哉　加賀 万子
春風に塵もほとくる氷かな　大津尼 智月

春興

天水(てんすゐ)に息つく猫の戀心　膳所 正秀
揚つけて町へ見にやるいかのほり(凧)　越中井波 路健
走り〳〵風にわたすや紙鳶(いかのぼり)　美濃 海動

行脚惟然(ゐぜん)に遣しける
木の朶(えだ)にしばしかゝるや紙鳶　江戸 嵐雪

芽を出して末つまゝるゝ圓柏哉　如行

山がらのつい來て歸る木の芽哉　カゞ 牧童

五六間飛出て雉子のほろゝかな　皐鶴少年 助童

駒鳥の聲を見かへす格子哉　京 風國

送惟然子

去年は都の花にかしらをならべ、よめ菜・つくゞしを摘て語り、今年東武の餘寒はおなじ衾を引張、雲雀・鶯に句をひらふ。

菜の花や浮世は去年の穗のうね　江戸 野坡

陽炎に追ぬく麴や麥の色　ゼゞ 遲望

かげろふに長活したる野猫哉　イナミ 呂風

茅屋に客を設て

何がなと見こむ日和や仲の春　仝 嵐青

春夜

菊苗の咄ししみけり宵のやみ　大坂 諷竹

宵闇もおぼろに出たか出て見よ　惟然

かいとらぬ雨の降出や朧月　嵐青

子日

烏帽子きて泥さくになる子の日かな　尾張 和泉

心齎は撰屑ひろふねの日哉　浪化

若菜

若菜摘ミ敷物やらうさん俵　京 去來

踏分る雪が動けばはや若菜　惟然

手に寒き古葉ながらのわか菜かな　ミノ 前川

瓜切ッ若菜の汁のうす緑　土芳

七くさやそこに有あふ板のきれ　イナミ 吏全

三月三日

雛仕まふ跡のかざりや三日の月　ミノ 荆口

喰もので釣て遊ぶやひなの客　京 范孚

桃

つぼふかき盃とらんもゝの花　カゞ 北枝

うす藪の口をてり出す桃の花　伊賀 林紅

鶏の晝鳴仕まふ桃のはな　イナミ 荻人

暮春

越中庄の川は、源飛彈の中山より

出ッ。淺谷の岩間をくゞりて漲る流れ奔箭のごとし。其ほとりに雄神の叢祠有。庄川は庄の在所ある故なり。然れば雄神川成べし。夫木集第二十四に俊頼の哥あり。暮春の一日爰に遊びて、各おがみ川の句を探る。

奥ふかに巣鴨の鳴や雄神川　浪化
おかみ川春のあらしや日のなをり　呂風
鶯のつれを見出さんおかみ川　路健
おそ消の雪の流れや雄神川　吏全

おなじき折山寺に遲櫻のさかり成を見て

おそ櫻かるはづみなる出合かな　林紅
一まがり奥の在所やのぼり梁　荻人
細道を散ふさげたる椿かな　江戸 希志
三月に萬歲見るや不破の關　彥々 汶村

三月盡

行春やおんどりがちになるひよこ（雄鶏）　嵐青

各、春をおしめる吟席にて

一日の春はつまげるこゝろかな　林紅

閏三月

行春を閏の花のおぼろかな　ブンゴ日田 野紅
三月に蚊の聲まじる閏哉　浪化

鶯

鶯や鼠ちり行閨の隙　江戸 其角
鶯や籠からまぼる外のあめ　日田 朱拙
うぐひすの甘味鳴出す小書かな　仝 若芝
鶯の聲まで伊吹おろし哉　オハリ 鶴觜
うぐひすや雪折竹を通り筋　カヾ小松 致畫
鶯の魚に鳴出る出かせ哉　イナミ 夕兆
鶯に似たものもなき春野かな　エツ中有礒 路青
鶯や里を見立て鳴はじめ　イガ 良品

霞

松原や枝に霞の横がすり　氷固
若草にかすみわたるや地のいきり　エツ中高岡 東白
燕の幅して通るかすみ哉　林紅

耕作の毒にもならぬ霞哉　幽泉

春雨

献だてにたらぬものあり春の雨　北枝

春雨や火燵ぶとんのよごれはて　カヾ 八子

梅

卓散についてもたらず梅の花　浪化

梅を見に行とはいふな藪の中　さか田夫 爲有

二月やさむさはまけて梅の花　京 壺中

雪いまだあそびたらぬに梅の花　日田 西六

雜鳥もきほふて廻る梅の花　有礒 游人

梅ちるや勝手座敷のあけ隔　路健

梅が香を蚯のとりたる日なた哉　梅素

南京の筆すゝきの繪に、岩屈の上に風水洞ともいふべきに、梅のさきみだれ、酒のむ人のふたりありけるを

こちらながら東坡の顔よ梅の花　風國

陳閑齋が水墨梅の題に、含章簷下のこゝろの自畫に讃す。

化粧する鏡の中や軒の梅　彦根 許六

紅梅

紅梅や座にもつかずに様の客　路健

紅梅の畫の讃に

うぐひすに墨のひなたや梅の花　浪化

柳

白鷺の雨にくれゆく柳かな　諷竹

雪のある山を柳の見こしかな　イセ 支考

仕事する邪魔になりたる柳かな　嵐青

人ごみの中へしだるゝ柳哉　浪化

しだれたる柳とらえて咄し哉　高岡 十丈

戸の口に手の隙のなき柳哉　イガ 素交

花

花にいざ茶摘用意もして置ぬ　野坡

花に見て道〳〵家のなつかしさ　伊賀 風麥

立どまり花見や過す畠つら　仝 卓袋

正月の客のかぶれや花ざかり　ミノ 大舟

花ざかり酒賣のゐる峯の松　カヾ 秋之坊

山行

群のぼる鳥のわかちや花の數　林紅

それなりに日和もすはれ花の雲　江戸楚舟

ぬれぬとや花の思はん雨支度　北枝

山人を見たさに廻る花見哉　イガ汜思

有たけの機をのばさばや山櫻　カヾ句空

鳶の輪につれてよらばや山櫻　丈屮

こし元は雨に出來よる櫻かな　イガ橋木

つか〳〵と門にはいりて櫻かな　カヾ一洞

遊東福寺化縁場

簷口をかゝえるやうに寺の花　風國

仇暮のもどる明さや花のうへ　浪化

はなちかし盞もちて馬の上　万子

小初瀬や花にくれゆく番袋　去來

陽炎や朝日てらつく花の中　東武史邦

花鳥の分別わかし三十二　支考

落花

ちるはなの松をふさぐや日の透間　ゼヾ游刀

ちりしほや花の中から持青み　夕兆

くたびれた顔に花ちる婢子かな　オハリ露川

躑躅

根ざらへに箒さしこむつゝじかな　林紅

土龍ねらひつけゝり庭つゝじ　越中高岡紫芳

山吹

山吹の晝からなをるけしきかな　芬芳

落水に山吹落す田づら哉　狄人

山吹やすましきつたる棒つかひ　野角

天滿宮の御旅所にて

山吹や粟飯ちぎる幹廻り　風國

藤

笠の端のくもりもさびし藤の花　ゼヾ探芝

物賣のあそび處や藤の花　江戸利合

藤咲て貞なでらるゝ巣鷹哉　ブンゴ玖珠頭水

胡床かく岩から下やふぢの花　丈艸

山ふぢのきまゝを見たるしだれ哉　長崎卯七

夏

更衣

西行は娘もちてや更衣　支考

赤うらを泥におろすや更衣　呂風

首夏

卯の花や田舍がよひも思ひがけ　埜坡

卯の花で松の下もつ山路哉　荻人

杜若晝より露のあがる也　(イナミ)和久

淺井戸にそつとすゝぐや杜若　北枝

青雲や雫の落るかきつばた　風國

柘の葉を鎚に切こむ茂り哉　探芝

卯月來て閒日なしけふも祭哉　(エツ中今石動)溫故

松の尾明神の神事に

青麥の神輿にとゞく御いて哉　爲有

夏豆の二葉や麥の株かへし　去來

夏夜

短夜や糸屑みだす洗濯場　路健

寐つ起つ帆下にならぶ夏の月　卯七

越中行脚の折ふし、井波の山下にしるべあるまゝ、たづね入て足を休む。

さればこの山にもたれて夏の月　惟然

端午

寐未進のおもひはらさん端午哉　林紅

釣竿で晝からさそふ端午哉　(高岡)一村

中刈や軒の菖蒲のよい加減　(ミノ)可文

納涼

夕〱涼しがられてふくべかな　(イガ)猿雖

打込て水に成たや夕涼み　(仝)万乎

死かゝる鯰を活して涼みかな　路健

月涼し森に打こむ夜鷹かな　吏全

涼風や岡の湯小屋の宵のやみ　(長崎)素仲

拔山を次手(ついで)に見たるすゞみかな　呂風

下(お)りのぼり二階のくちの涼みかな　林紅

すゞしさは獨目のあく座敷かな　野坡

千貫の涼しさもあり松の月　風國

あら壁や水で字を吹夕涼み　丈草

晩夏

一繩手駄荷にもまれし暑さかな　(ミノ)遊絲
月額につれの出來たるあつさ哉　荻人
大名のとをるほこりで暑さ哉　梅素
唯あつし客も亭主も一ね入　史邦
あつさうな良や瓜田になく蛙　句空
夕だちにあふて涼しき土瓜かな　桃雨
夕だちや杖にして待ッはねつるべ　北枝
水うてば夕立くさき庭木哉　(大坂)芝柏
ゆふだちを根から吹ぬくあらしかな　十丈
白雨に煤氣をながす戶板かな　(カヾ)盧程
夕立や鈴鹿の坂ののぼり端　(仝)七里

山路にて

神鳴やいらくり稈(わら)の畑より　如行
草刈の草にむさるゝ暑さ哉　正秀

茶摘

橋に夏うぐひすや蝶ノ鳥(トリ)鳴　浪化

虛家(からいへ)や花たちばなの花づくし　牧童

蓮

蓮池や手ぢかに花のさかり前　嵐青
ならび田へくゝる廣さや蓮の花　林紅

郭公

一聲は闇のつぶてや郭公　去來
郭公峯に筋かふ水のあと　(ゼゞ)且酔
郭公見失ひたる茂みかな　(江戸)泥芹
とぼしさも忘れて寐たり時鳥　楚舟
幾鳴と年にちぎるや子規　(ナガサキ)牡年
子規田中の藪や足かゝり　猿雖
蜀魂二聲かゝる一枚田　浪化
時鳥まぎれて行や闇のかぜ　(イナミ)氷麥

嵯峨の邊に逍遙して

猪追の寐入か藪の子規　丈艸
郭公藪のみどりのすりはらひ　風國
子規鳴や田うえ(植)の尻の上　許六
野の人のうたのさかりや杜鵑　(江東平田)李由

螢

草も木も螢くさゝや水の音　正秀
飛ほたるあるきあるいて篠の枝　日田 林女
宇治へ來てのほる螢のはなか哉　オハリ 鼠彈
落汁の淀にながるゝ螢哉　高岡 北人
つくなりし中からついと行螢　四睡
外藪をなして螢のぬけ道り　井波 千歌
よ合に井戸ほる筋の螢哉　嵐青
螢火やわれに出むかふ里の門　イガ 祐甫

蟬

添乳してともに起るや蟬の聲　爲有
桐の木のふとりざかりや蟬の聲　荻人
旅だちに明ケや近よる蟬の聲　胡仲

扇

二本目の扇をおろす暑さ哉　嵐青

京なる人に對して
都人の扇にかける綱代哉　許六

秋

立秋

あきたつや鷹のとや毛のさしのこり　浪化
年よりに先ッ見舞ばや秋の入ッ　嵐青

早秋

帷子も着たりぬいだり秋の風　野坡
身にさはる蚊屋のさかりや秋の風　ミノ 筵山
日のうちはけふも暑うて一葉哉　牧童
伯樂や馬をあつめてちる柳　呂風
打なびき虛空にわせの匂哉　カヾ 慮程
早稲刈や峯入もせぬ小山伏　ヒコネ 朱迺
初秋やくつろぎかゝる稻の中　路健

或人の新庵に見舞て
瓢簞の尻もすはらず秋幾日　イガ 雪芝

七夕

墨すらば團扇よごさん星むかえ　風國
塀木ずゐ越てもかよへ天の川　其角

旅蚊屋の釣手わたすや天の川　卯七

七夕に雨ふりければ

彦星や田畑へおろす宵の雨　北枝

七夕や大かた出たることし物　浪化

秋興

相撲場やあれにし後は秋の風　許六

撫子の内股くゞるすまふ哉　ヒコネ 木導

分別の留主を出ぬけて躍哉　ヲハリ 東推

見しりたる背中どやする躍哉　北枝

遠州にて

鶉なく大名地野はいづこにや　史邦

籠に來て二日めをなく鶉哉　一村

あるまいとおもふ處のいくち哉　日田 釣壺

段原や沙蹴ちらかす松露がり　豐前中津 眠山

秋晩

舟ならで見馴ぬ浦や秋の暮　江戸 利牛

いろ〳〵の合點かなし秋のくれ　秋之坊

長床に懸物もなしあきのくれ　ミノ 斜嶺

日當りや畚いろづく秋のくれ　玉秀

秋夜

夜あるきにから櫓の音や浦の秋　去來

荷をつけて馬のたゝずむ夜寒哉　林紅

釣鍋のそらにえしたる夜寒哉　京 呂物

からびけり木なら草なら夜の音　大坂 虎道

八月十五日

此心常にあらばやけふの月　智月

名月やからす羽いろに海の上　支考

名月の一ぱい鳴や秋の虫　イガ 風麥

明月や瀨をなでゝ行雲の影　荻人

名月の思ひ處や晝の雲　路健

庭かして筆つかはるゝ月見哉　江戸 利合

ひたるめてかへすもおかしけふの月　ミノ 大虚

子の刻、袴を休て

夜半方こちの目にして月見哉　遊糸

竹切て寐させたうべてけふの月　ミノ少年 羅秋

飼鳩の軒に首出す月見哉　野明

誰もまだ寐まいかなんどけふの月　羽州鶴岡 素岑
名月の前へ廻るや山のつま　林紅
明月や藪とかけくむ葡萄づる　胡仲
名月に陸より船のけぶりかな　吏全

象潟にて
名月や稲つみ舟の跡を押ス　呉柳
生柴に茶の出かぬる月見哉　夕兆
合口の跡追ふて行月見哉　野坡

月
三日月の秋を運ぶや艸の上　風國
月代(つきしろ)や雀こそつく藪の中　ゼゞ 回虎
うは鷺の姿やしのぶ宵月夜　長サキ 素仲
萍(うきくさ)や鯉のはねたる跡の月　ゼゞ 徴房
後ロ手に又たゝきけり月の門　万子
市の氣もひそまる月の名殘かな　朱拙

九日
けふの日や品はあれども菊の花　膳所 呂房
菊の香や何かにうつる小盃　カマ山中 桃妖

菊
雁鳴て目をあく菊のつぼみ哉　土芳
胴欲に菊のさかりや御内佛　嵐青
暮かゝる菊一しきりさかり哉　ミノ 殘香
ゆひそえし竹のしはりや菊の露　ゼゞ 汀芦
敲ぬく菊のにほひや雨日でり　高岡 蘭水
いろはずに咲せん菊のうらおもて　蒼墨 毛紈

九月盡
五助田はまだ手もつけず九月盡　諷竹
粟の穂の枕あはせに暮の秋　路健

女郎花
おみなへし松へとれたる地のしめり　呂風
照つめて風のやすみや女郎花　荻人

萩
鬼つら(貫)に笠ぬがしけり萩の花　尼 智月
萩と荻同士打にちるも哀也　ミノ 荊口
秋萩につゝいて見こむ杉戸哉　ミノ 文鳥
うらはらや秋の哀れを萩の花　東推

散栗をおぎなふ萩のさかり哉　路健

蘭

宿直に侍りて

寐用意も夜さむに成てふぢばかま　（ミノ）千川

槿

蕣の花や惣ねに雨の後　浪化

朝がほやみだれ口たつ明の空　萩人

あさがほも泥にまじるや明屋敷　（カヾ）長緒

前栽

もくろみの住るになすや菊の花　（ミノ）支浪

うら枯や茶かすこぼるゝ菊の垣　北枝

塀際へつめかけて咲木槿哉　萩人

紅葉

かつら子の髪にさゝばや薄紅葉　（サガ）可南女

いためたる木から染けり庭もみぢ　四睡

もみぢ葉のおもてや谷の數千丈　（ミノ）千川

五六間蔦のもみぢや松ののし　（筑前ミ崎）水札

雁

初雁のひしぎつけたる小鴨哉　（日田）野紅

初雁のとちへも廻る山路かな　呂風

下り雁の澤にあまりて岡野哉　（井波）汶、酒

鶏頭のゆるぐや雁のたつ畠　浪化

虫

松むしも馴てうたふや手杵臼　卓袋

種麻を鳴てまはるやきり／＼す　萩人

夕露や何ともしらぬ虫が来る　長州

蟷螂のふんばる足や菊の露　（仝）愼女

草茎に今さゝれたるいなご哉　（日田）紫道

かまきりや裙はらふ手にすがりつく　十丈

鹿

鹿小屋の火にさしむくや菴の窓　丈艸

松風につれて聞けり鹿の聲　（日田）若芝

目にかゝる物なき濱に鹿の聲　四睡

露

道なかや薄の露のこけ下り　夕兆

朝つゆのさらりときえて梅もどき　（有磯）拾貝

霧

霧雨に尾髮もふらず駒の旅　許六

馬宿にすそ湯わかすや霧もたち　浪化

山中温泉の上藥師寺に詣て

うすぎりや白鷺眠る湯のながれ　北枝

擣衣

猿引は猿の小袖をきぬた哉　芭蕉

兵法もともに更行砧かな　林紅

夜もすがら病馬の側の砧かな　オハリ左次

冬

初冬

宮守が俵(へう)につめたる落葉哉　正秀

掻ためて押出す垣の木の葉哉　林紅

はこび行や何もない野の初時雨　猿雖

海山の骨を見するや初しぐれ　游刀

一日に着(つく)舟は出ぬ時雨かな　路健

つまむ程干(ひ)た處なき時雨哉　タカオカ野角

みそさゞゐ藪にはたらく時雨哉　イナミ桑栃

棹(さを)鹿の身すかしもどる時雨哉　若芝

葛葉よりかさつく比のしぐれ哉　許六

後の世の事など松のしぐれ哉　諷竹

中〳〵に傘も苦になる時雨哉　野坡

倶利伽羅(くりから)の峠をくだりて

休み場にうれしき松の小春哉　嵐青

ひつぢ(穭)田も實(み)のりさうなる時雨哉　汀芦

山ぶし(伏)の脇ざし抱(かゝ)へしぐれ梟　筑後吉井杜山

耳に似た戸の拔(ぬけ)ぶしい寒さ哉　カヾ和風

生壁により付がたき寒さ哉　平田李由

淺漬の重石(おもし)になくやみそさゞゐ　京吾仲

水仙のひらく匂や袋一個　カヾ宇路

水仙の香にゐならぶや夷講(えびすかう)　風國

こつそりと起て門見る神(かみ)送り　荻人

冬夜

有明にさむし宿直(とのゐ)の蔦籠(つゞら)取(とり)　荊口

有明にふりむきがたき寒さ哉　去來
跡もとの物をふまゆる寒さ哉　嵐青

歳暮

節季候に賛してもどのす頭かな　土芳
せきぞろもむかし忍ぶや笹おほひ　北枝
黄鴨の毛も撫つくす師馳哉　浪化
行としや木の葉まじりのくだけ炭　沙明
年のくれすこしの事が例になる　其繼
楠が思案もほしや年の暮　利牛

炉火

埋火や障子より來る夜の明り　浪化
脇ざしは背中にあそぶ火燵哉　万乎
行燈をあけて状かくこたつ哉　四睡

病中吟

介病も一人前する火燵哉　去來
くつろぎの次の座鋪やくづれ炭　烏澤
榾の火やふくべの色もかはきけり　探芝

霜

老師に酒たすゝめて
初霜や勝手のちがふ酒の間　史邦

幻住菴頽廢の跡一見して
霜原や窓の付たる壁のきれ　丈草

大宰府にまうでゝ舍六に申侍る。
篠栗の時分それたり霜の中　万袋
朝霜や火の氣も見えず町はづれ　李水
狐火の穴にひかゝらす霜夜かな　畔路
初霜の下りてくつろぐ日和かな　一草

雪

去年とは十日もはやしけさの雪　風國
初雪の市にうらばや雉子兎　正秀
初雪の今朝はかくれず脊の鼻　可南女
初雪やけふ山茶花も賑はされ　橋木

旅行

薄ゆきに兀の際だつ峠かな　夕兆
魚店に鰒の殘るや雪げしき　呂風
畑道に鹿もころぶや雪の朝　回虎

雪の夜や障子の紙のたるむ音　ミノ 三箕

闇の夜や波にくづるゝ磯の雪　野明

身を横にひらむや雪のみそさゞゐ　水札

鶺鴒の田をこく足や雪の中　嵐青

大雪に明たまゝ也枝折門　荻人

門〳〵や子供呼込雪のくれ　京 野童

奥州南部くりや川にて

厨川のぞいて雪にまぶるゝな　惟然

せめよせて雪のつもるや小野の峯　去來

正月が來とて寒し雪の花　支考

氷

瀧はどや氷の中のいざり松　其角

能夜ほど氷る也けり冬の月　江戸 仙化

右の句北枝が集に、名乘書たがえて入まし侍い、武江の文通に聞えける也。

霰

初雪の次手のよさにあられ哉　雪芝

一おこし日を取たてゝあられ哉　林紅

續有磯海上卷終

嶽山のしるしにおろす霰哉　路健

佛名

佛名や打敷ほむる翠簾の中　許六

佛名や屛風見くらす小僧哉　浪化

續有磯海

雜　擬朗詠集下卷

風

有磯の浦廻りも果てし、ばらく氷見の湊に足を休む。

先かせの名をならはばや合歡の花　惟然

陰うらも日なたの風や麥の秋　嵐青

風吹ておもしろき日や蕎麥の花　如行

雲

山門を雲の出引や夏の山　(オハリ)露川

いろ〳〵と雲によごれて夏の富士　(イガ)投印

雨風の根をたえしてや雲のみね　(黒崎)沙明

北の秋日よりがまへや雲の透　(ゼゞ)回虎

凩に雲のそびえやもらひ雨　正秀

晴

朝はれや青みに花の一つくね　野坡

紙鳶ほかす隈なき日和かな　風吾

晴あがる羽力見する雉子哉　荻人

聲ほそき小鴨にはるゝ雪吹哉　秋之坊

曉

鶯の音や行燈の引時分　万子

通夜みつる曉ちかし郭公　(カヾ小松)イ人

あかつきの日和を見こむ小梅かな　路健

松

重寶と松に落たる椿かな　如行

旅行にて

雪汁のきはつく松の折木哉　夕兆

雨あがり松のにほひや青あらし　(ミノ)支流

枯のぼる松のすはりや雲のみね　路健

辛崎の松をだかえし月夜哉　(さが)爲有

行年の跡のまつりや岡の松　(大坂)芝柏

竹

竹の子の網はる枝やひな燕　(サガ)荒雀

竹の子をぬいてまはりし晴間かな　吏全

笋のひねみ持たる出かけ哉　八子
笋の風に頬ふゆがみかな　斜嶺
今年竹しまらぬ村のつゞき哉　林紅
若竹や道のふさがる客湯殿　浪化
枯竹や雪にもよらず二三本　万子
春風や師走の月の藪の末　鼠弾

草

初午や小草に人のぞよ〳〵と　史邦
物の實のあがらぬ畑や春の草　文鳥
苗代に飛はしりけり春の草　路健
菜の花に咲かわりけり金鳳花　何空
白けしに糸ゆふあそべ弱いどし　荊口
花けしや南の町のきぬくばり　可南女
晝がほや淵へ咲こむ道くだり　桑栢
切かゝる針に手を引なすび哉　市中
酢に味噌に朝晩つまむ穂蓼かな　素覧

初めて對顔しける人に

はねて出す草にはあらぬ花野哉　游刀

猪の矢つぼをはづす薄かな　曲風
箒程たばねて来たり草の花　風国

鶉

むれ鶉の見こうで下る枯野哉　桑枯
鷹匠のつゑにふまれて手柄哉　如行

猿

時雨るゝや葛の下ゆく猿の良　投印
梅が香をしらず深山のあかき猿　千川
柴の戸を明てはいるや猿廻し　釣壺

管絃付舞妓

伶人の門なつかしや春の聲　其角
白粉のともしに照るや神樂みこ　牧童

文詞付遺文

古文よむ人も一日花に蝶　浪化

芭蕉翁はての年は、堅田のゆかり伊賀のしるべ、思ひの外に成ぬるを佗て、宇津の山より人々に申遣す。

置捨に笈の小文やとしのくれ　其角

酒

咲花や鼻にさして酒のたね　ミノ斜嶺

追〻に酒屋へはしる櫻かな　オハリ夕道

筑紫へ下る比

酒になるけんかい灘のしぐれ哉　サガ野明

棟上の酒もり寒しはだか家　正秀

山　付山水

殘りけり卯辰にかゝる峯の雪　北枝

みねすじや殘った雪のゆり下り　夕兆

峯筋の出來る日もなく時雨哉　荻人

炭竈や起てめし燒廻り番　呂風

山水に藥の花のにほひかな　浪化

水

花落て筧のよどむ椿かな　爲有

家ひとつ此ごろ出來ぬ清水かな　林紅

おいかはの背中をすます清水哉　兕觥

死事としらで下るや瀬々の鮎　去來

食どきをねらふて來るや鰯船　ブンゴ玖珠呼丁

流れこむ雪の筏や鴨の中　胡仲

さし汐に走りあまるや濱千鳥　李由

中食に鵜飼のもどる夜半哉　浪化

禁中

大雪の降けるとし

九重に見なれぬ雪のあつさ哉　去來

万歳が内裏見て來たうつし哉　游刀

故京

長岡も今に日出たし松かざり　芦本

ならづけの根本とはん八重櫻　浪化

故宮　付故宅

筑前の國苅萱の關にて、木の丸殿の舊跡を感す。

歌舞の地や枯野のうへをふくあらし　日田朱拙

礎のしづみながらや糸すゝき　京蒙野

春先にうれたる家の清水哉　同范孚

仙家　付道士隱倫

人を吐く息をならはん冬籠　堅田千那

隱士の許へ申遣しける

蓮の實の中はひそかに卷葉哉　万子

山家

雲に入鳥まちそろふ山家哉　荻人

わたり猪の竹の子につく山家哉　浪化

谷越えに聲のとゞくや冬がまへ　大サカ 天垂

一きはをたてゝ山家の冬木だち　梅素

田家

茶の醉や菜たね咲ふす裏合せ　丈艸

一日二日田家に宿し侍りける折から、春雨しきりにねざめがちなりけるに

夜着ひとつふみぬぐ跡や種俵　嵐青

苗代に覗かぬ鳥はもどるなり　黒崎 水札

いそがしき手によく渡せ早稻打　カヾ 一洞

旅行

すぐに來る夏野の風や里の家　イナミ 汶泗

礪波山も程なく過て、猶山ぞひ井波の麓にしるべ有まゝたづね入て

眞綿むく匂ひや里のはいり口　惟然

夕がほの生ッ倒したる垣根かな　ミノ 海動

芋の葉のかまへに成し里家哉　高岡 丹岫

只ひとり桶の輪入や庭の蕎麥　ゼヾ 昌房

隣家

行安きとなりの見せに涼み哉　嵐青

隣どし替ッて作れ一夜酒　荻人

ひとり寐も隣たきとて暑さ哉　イガ 陽和

山寺

山でらの馳走に菊の醉ァへ哉　正秀

佛事

百姓がおかしき壬生(みぶ)の念佛哉　如行

涅槃會や空日かようて雪がふる　十丈

灌佛や釋迦も畠に二年越　諷竹

宇治にて

八日茶の花がやそよぐ興聖寺　カヾ小松 季邑

達磨忌やにべなき衆の寺參り　支浪

僧

老僧も雲も睡るやふぢの花　ミノ文鳥
墨染は船のかしらや夕涼み　林紅

閑居

けふ何と柴の戸たゝく春のくれ　江戸僧依々
櫻より牡丹にうつる寐起かな　大坂三惟
涼しさをうけては廣し菴の內　高岡好風
秋の菴哥よむほどに荒に梟　支考

眺望

住吉の濱に出て

青麥にしばらく曇る淡路哉　許六
目にあたる木草の數や秋の空　日田盞泉
冬の海見やりて寒し竹生嶋　彥根錢芷

餞別

支考が西國へ趣きけるに

若竹をとらえて放っわかれ哉　平田李由

旅だつ人を里外まで送りて

別れ場や川のところで朝涼み　浪化

黒崎にて人々に留別

此寒さ背中を見せて別れ哉　朱拙

行旅

旅だちや一手うつたる更衣　嵐青
追わけにわかれて鳴やぎやう／＼し　オハリ水枝

朝とく鞠子の宿を出て

山芋も茂りてくらし宇津の山　許六
箱根路や汗になりたる石の跡　羽州山形風仙
山にそふ駕籠いそがする雉子哉　漁川

熊野に詣ける比、八鬼尾谷といふ處にふりこめられて

逗留のまどに落るや栗の花　去來

初秋中比大坂に旅ねして

盂蘭盆や我もさながら遊び分　路健
凩にふかれた顏の旅ね哉　ミノ此筋

庚申

夏むきは晝から出るや庚待　アリソ路青
此降を人かのべさる花見哉　共角

帝王　付法皇

親王　付　王孫

丞相　付　執政

將軍

刺吏

右の題發句なし

詠史

綿拔や本の子なみに閔子騫　カゞ 蘇守

驪山擧燧因褒姒

月代と雲にぬかりし花火かな　浪化

王昭君

いさゝか勤る事に江戸におもむく。旅館の屏風にふつゝかなる繪ながら、琵琶なかゝえ馬に乘し女の姿なり。かの胡國に行けん人よと、折から哀れもふかくして

昭君が畫とみじか夜の旅寐かな　万子

妓女

雪の日はしんから出來ぬ伶子かな　林紅

早稻の香や美濃にうけ來るいせ哥舞妓　此筋

遊女

物おめぬ遊女あはれや衣更　土芳

いなづまやどの傾城とかり枕　去來

口見せぬ遊女ぐらゐや置火燵　林紅

老人

老來ればさめがちなりければ

春の夜の後夜もわれより若き哉　尼 智月

花守もこまる老女の根間哉　カゞ 翠女

交友

友だちのことしは替る月見哉　江戸 楚舟

打こみの酒の友來るしぐれ哉　夕兆

惟然を宿して

隅によるよつもつた雪のぬくともり　仙臺 千調

誰〳〵ぞ雪に唯今掃きこむ　惟然

懷舊

ばせを墓にまうでゝ、手ずから草二葉

秋むかし菊水仙とちぎりしが

苔の底泪の露やとゞくべし　東武 素堂

いが〻おもむくとき、ばせを翁墓にまうで〻

ことづても此とをりかや墓のつゆ　丈草

睦月十二日、翁忌日に

大空も形見と見えず梅の花　北枝

故翁の靈を祭りて

里人も一門なみや魂まつり　去來

卯月に身まかりける老母の墓の、其年の盂蘭盆には、はや古墳の數に立ならびけり。

似たやうな松のふとりや墓參り　嵐青

すげ笠に鳥もよるや墓參り　風國

つねづねのそば切へらぬ魂まつり　小松 斧卜

述懐

嵯峨のほとりに草の戸をトて

麥の穂の世に出るまでの菴　野明

寐處も見ゆる小家の切籠哉　カヾ 鳥跡

秋の比夫にはなれ、愛にあまる孤の悲しければ

孤(みなしご)に雪をばよけよ年の暮　武陵 共角妹

病後に

皺口に風のしみけり年のくれ　許六

慶賀

路健新宅にて興行

あたらしき間風の木香や冬籠　嵐青

御火燒に元服するや鍛冶の弟子　浪化

祝

眞白にかしらの花や年男　許六

初午に山は蠶のいはる哉　呂風

文の返しに

どれどれも無事にて生立(ソダ)ッかいこ哉　大坂 芙雀

戀

蝶鳥になるや花見の美少年　荊口

妾といふ一字題にあたりて

花見から直にあがるや奥なをり　呂風

柳より合點細し夢のあと　京 魚人

出代や小野の小町も衣裝から　ヒコネ 木導

出かはりや盃させばわるびれる　高岡 北人

出替りを見舞て

山雀も去るやらして鳴てゐる　大坂 芝柏

愁眉啼粧爲妖態

泣さめの顔に似たりや朧月　林紅

无常

猶子守壽十六歳の春、身まかりけるに

死顔のおぼろ〱と花のいろ　去來

同守壽都にて身まかりけると聞て

朝夕に生かへるかと風便り　長サキ 魯町

知人の母はかなく成しと聞て、文に申遣す。

鶯の鳴音や今朝の片便　有ソ海 定風

嵐青が老母におくれて、歎き居るをとぶらひて申遣す。

鶯の又と音もなき別れ哉　林紅

蚤も蚊もくはぬ國見や死出の旅　李盛

潮春子をいたみて

泣てよむ短冊もあり花は夢　共角

續有磯海下卷終

白

有明ときのつく雪のあかさ哉　浪化

張たての障子に明るさむさ哉　岡 風青

元祿丁丑の夏、烏落人はるかに京師より故翁引杖の跡を慕ひて、有その磯めぐりも日數ありて、我松扉を敲きて、半日の閑談に世慮忘たり。

歌仙亂吟　半時

草蒸におなじ顏なる小松哉　浪化
木ずゑの蟬のおしまずに鳴　惟然
のらこいてある〻間のひしなくて　拾貝(執筆)
見しらぬもの〻舟を手傳ふ　林紅
月もまたどうもいはれぬ宵の內　然
のり(海苔)に菌(キノコ)のかるい吸物　化
禪寺は旦那のま〻に秋の風　紅
湊を出てもまだ海のつら　然
じだらくにおほひ(覆)かさなる濱楸　化
狐の人を化(ばか)す分別　紅
傘も木履もそこに預け置　然
外(そと)百番から習ふ小うたひ　化
凉しさの月に誰かれ呼にやり　然
瓜の虛は形(なり)で見しられ　紅
かたらばや涙の程をおし隱し　化
どちをどうともいはぬ雨降　同
花の木もたゞの木もある庭がまへ　紅
春は中〱物もようなり　然
陽炎に西國からも狀が來る　全
夜は出られぬ寮のうら門　紅
大株な薄も萩も植ちらし　全
一羽つばめの去(イニ)殘りけり　紅
跡からのつれはおくる〻朝の月　然
木綿の干せば道につかゆる　化
此寒さどうして立る吾妻衆　紅
惣まくりにもわるうなる空　然
竿の手に衣の袖をびらつかす　化
米のなさにぞひたとね(寐)てゐる　然
有ふる〻家の鼠に名を付て　化
了解がすんで登る立山　紅

わるい事して遊びたる子共ども　然
次第に冬は近う成ゆく　紅
麥畑をまた一二反買そえて　然
すがれた花は今やくにたつ　化
囀りてはらはら鳥の飛で來る　然
くもりげのなき三月のそら　揚句

浪化十一　惟然十三　林紅　十
有讀 拾貝　一　揚句　一

荻人

のぼる日に場のひろがるや秋の蝿　荻人
家うちのものがかゝる稲こき　浪化
眠たげも肌の寒いにはりあひて　林紅
獵師の舟のそろふ月影　人
平砂にすぐつたやうな松のはへ　化
くはたくとしてはいるうら門　紅
叮嚀につゝんだものを又はとく　人
四月のくせに空がばらつく　化
芍薬をなどころばかり切すえて　紅
大ざしものよかゝる長刀　人
鼻帋に菓子をさし出す女中どし　化
小袖のはしのつかる川ぶち　紅
曝布を一たいらづゝ取ちらし　人
さらりと霽の散る萱やね　化
立飼の病馬さむがる朝の月　紅
小砂ぐるみにうつす鯉鮒　人
まだ花に減目(へりめ)もつかず咲そろひ　化
三尺口をとをる春風　紅
鶯を下に鳴するかけ作り　人
鉢巻とればすんすりと成　化
つめてゐてやれば返事もやはらぎて　紅
泪こぼすも細いおもわく　人
持あるく行燈にむごう行あたり　化
五人まへほど晩のこし　え　紅
弟もかるい(輕)能(のう)からならはせて　人
置火燵して下る川舟　化

有明のかゝえどもなう照わたり　紅
　段の處にひらく花そば　人
面家の道はひつこむ秋のくれ　化
　瓦の屑の數年こたゆる　紅
ばら〳〵と鳥のひろがる風のすき　紅
　何かををいて荷を付にゆく　人
行水もつくばひながらあびてゐる　化
　持た分にて菴もさだめず　同
伊賀越を花の前後におしわたり　人
　空がくもればうその猶なく　紅

初雪に風のかゝりし桙かな　路健
　冬の小鳥をねらふ平藪　浪化
丸とした俵を奥につき立て　嵐青
　屋根をふさげば先ッ徙る也　健
降念もぬけて月すむ宵の雲　化
　堤の稲の穂をしめて見る　青
寺の柿こねりの分は塀へつけ　健
　下りばかりがつどふ馬次　化
剃刀のついでに鬚をもうて來る　青
　日傭どさつく麥の株打　健
燕の二番大かた巣をたちて　化
　味噌の加減を內儀あづかる　青
入物に楔からめく普請過　健
　盆のあげくはどこもねてゐる　化
うはむきは月見るやうにこしらえて　青
　むしろにさかす秬の干こみ　健
大門のさし口からが花の中　化
　肴の籠にきせる若草　青
　ようも一日鶯のなく　健
からび置木綿うり出す春仕事　化
木曾川の舟になれたる足づかひ　青
　開につきてたえぬ笹の根　健
さげ墨にちよつちよと家のふりを見て　化
　袷の下を脫かけに梟　青

打つけに戀の手なりも味に成り　健
臺にさびしき鳴の音信　化
すいヽヽと物に實の入ルちから風　青
禰宜の出世に肝を煎る月　健
雲雪の師走廿日におしつまり　化
ひとり住ゐの鎰持てゆく　青
茶をこきに一はなおこる賑かさ　健
自然と山の芝になりたる　同
菅笠に加賀の上下の見しらるゝ　化
日は三月の長きたゞ中　同
咲花に組ゞをこつきり打明て　青
餘程雲雀に囀りがつく　同

水のみに落る雲雀か芦の中　加州 北枝
ちらヽヽ春の麥に穂がさす　浪化
哎かな旅路に風のさだまりて　呂風
晝ねの顔で門に立ゐる　胡仲

山出しの石を引ずる暮の月　林紅
貧の卓散についた蓮池　吏全
遊び事八朔からを淋しがり　荻人
ひだ目をなでゝ入るゝ上下　梅素
いそがしき使のものをまたせ置　汶泗
たばねながらにひらく寒菊　桑栢
見せかけて屏風もあれば戀仕組　路健
掃除をさせる行燈の臺　和久
ばらヽヽと雨の降にも朝の虻　夕兆
盃はさしあふ髮ゆひの隙　嵐青
方ヽヘ出來た初尾をもちくばり　化
照にむきたる月のたゞ中　枝
大つれの花見のもどり宵かけて　全
そろヽヽ山へはづす鶯　紅
束にする若布の鹽の打こぼれ　仲
駕籠と歩行とではなしして行　風
よい風の松をはづむで直に來る　栢
もう一たてゞ埒の明戀　人

おかしがる事はちら〱顔へ出て　枝
　家具の雫の氷る夕月　泗
見るうちにづらりと山も雪に成　素
　唐(から)櫃(びつ)越をとをる初旅　仝
謂ぶんもくんで落れば酒にして　青
　質の中より寢まきえり出ス　健
やり水を町へはかする大戸口　紅
　節句の朝の物しづか也　兆
桐の葉のかずゆる程にふとり立　久
　打明てやる菓子の重箱　仲
階子からそこらの人を呼集め　風
　きのふの雨の雲が出てゐる　仝
郭公花のすがりを鳴かけて　枝
　赤いつゝじの下に場をとる　素

浪化　三　呂風　三　胡仲　三
林紅　三　吏全　三　荻八　二
梅素　三　汶泗　二　桑柘　二
路健　二　和久　二　夕兆　二
嵐青　二

追加

丈艸いひ捨にわき有さて、風國がもとよりこしけるを、文通の便り〱に句をつられ、來往して亂吟の一巻となりぬ。

屋のむねの麥や穂に出て夕日影　丈艸
　芝にかすれる夏川の末　風國
歌斗(ばかり)うたへば連の荷になりて　浪化
　相間にあたる雨の大粒　去來
年〱に輕みを見だす月の前　去來
　こそつく度に落る桐の葉　丈艸
ウ
雁金の啼ば二階をさびしがり　仝
　船にのれとて湯漬して來る　風國
はら〱ときのふの髮のこらえかね　仝
　芝居に似たり虫干のきぬ　丈艸
打きせる山をとりたき京の方　仝
　額おさえてやればうは言　仝

たゞつたもの月夜がらすのむれて行　風國
　ひら一枚に咲し蕎麥畑　仝
有付た皃見せに來る秋の空　仝
　風にかづけて生姜酒飲　浪化
ちり殘る分でも余所の花ざかり　仝
　蒲鉾形の道の陽炎　丈艸
燕の中へ投やるはなし鳥　仝
　はらつかせてもあれほどの雲　仝
すゞしさは花表の石の切あまり　去來
　狐は除ど根が阿房なり　同
寐處にしらり／＼と夜を明し　風國
　鈴鹿かさなる錫杖が嶽　仝
空尻の痛めば横にふり直し　浪化
　穗蓼に鮓のひれをはねさす　同
しばらくと秋の暑さを住替て　同
　月夜になれば世が廣うなる　同
くる／＼と帶をまくらのしどけなさ　浪化
　頬ふてから袖につらるゝ　丈艸

生柴の時雨にくろむ軒の下　同
　ひつこむ家は寺に共まゝ　浪化
かいくれにさり處のしれぬ郭公　風國
　大小さしてかゞむ相傘　仝
板橋の中はひたつく花の浪　去來
　行さき／＼に蝶のかたまる　浪化

丈艸十一　風國十　浪化十
去來五

元祿戊寅
仲冬上旬

京寺町二條上ル町
井筒屋庄兵衛板

草苅笛（くさかりぶえ）

上・中・下

支考
牧童
撰

牧童傳

牧童はもと小松の素生にして、賀の金城に居る事年ひさし。家は砺刀のわざをもて、よのつねのたつきとはなせりけり。牧童は彼が兄にして、北枝は是が弟也。本より謝公が才能をあらそはざれば、かつて阮家の富貴をもうらやまず。たゞ同袍のあはれみ、をのづから世の人の鏡ともいふなりけり。むかしは梅翁の風流をしたひ、中比は芭蕉の門に入て、時の風雅にあそべる心の、ふたりともにあそぶ所おなじからず。たとへば一巣におひたちぬる鳥の、彼は梅のはなの清きに囀り、是は卯の花の曇れるにあそぶ。あそぶ所のおなじからずといふは、たのしむ心の殊なればならし。砥とりの山のほとゝぎすも、けふはときそと啼わたれば、夜をふくろふのあそび數奇となりて、吟席・交會此人をしらずといふ人なし。時に居眠りをもて生涯の得ものとせり。ある時は欄干の花にそむき、ある時は檐外の鳥を聞ながら、ねぶり來りねぶりさりて、四十年の春秋も過行ぬれば、貴介もこれをわすれ、高明も是をゆるし給へば、終に兜率の内院にも高くねぶらんとぞたかぶりける。湖南翁かつてある法師にむかひて、牧童はよき者なりと申されしよし。よくてあしからんや、あしくてよからんや。其翁ならずばしらじかし。しからば生天は先なるべくとも成佛は後ならん、といへるむかしの人のこゝろも、人はふたりの人に似てや侍らん。牧童つねにいへりけり。我むかしばせをの翁にま見えて、武の素子堂が、浮葉卷葉此蓮風情過たらん といふ句の物がたりにおよぶ。此句は此蓮と聲にとなへたるがよしと、おしへ給へりし外は別になに事もおぼえ侍らずと。時の人是を許して、げに人は人のならひありて、さらぬみなもとも、たどりたるやうにをよづけいふらん。かくたゞありの人は世にたふとしと。されば世の中の老の坂越たらんその人は、飢寒の間におきて、風雅もやゝあやうからずといふべし。

東花坊賛して曰、むかし人はつねの産なければつねの心なしとて、つれ〴〵の法師だに安部野のあたりに花むしろ織りて、都のつてには賣もせられしが、まして世

にある此人ならば、礪刀のわざのみいと淸げ也。かくするどなる物の中にも、かの居眠りのさむまじくば、物と我とわすれたりとやいふべき。物その我をやわすれけむ。我その物をやわすれけむ。ねぶるに時もなく、さむるに又時もなし。なにがし和尙の虎によりて居ねぶりたらん、世におこがましく見られがまし。ある上人は目のさめたらん時俳諧せよとも仰せられしか。さて俳諧は人の心にすまじきや。たゞ我心にすなりけり。しかれども人のおもしろがらずは、我もおもしろからず。此さかひをしりてこそ俳諧はすなりけれ。さりや俳諧は人の心をやはらげて、花に啼鳥の花ならずしてかうばしと、いへる世のまじはりの媒とならば、かの鳩鴿のはらからもなどや一巣のよしみなからん。俳諧はたゞ戯也。俳諧にはあそぶべし。世にたはぶれ世にあそぶ時は、草苅笛の世にわすれて、牧童の名もおしむまじけれ。いはゆる素子堂が一蓮のちぎりあらば、その時の翁の心にあそびて、今も一字の師の影をもふまざれと也。

元祿庚午仲秋日

文考記

草苅笛

春之哥仙

鶯や一聲啼てあちらむき　秋之坊
垣根の梅のさむい咲やう　牧童
露の臺とりに行程雪ふりて　支考
あれは茶漬のぬるい音也　長緒
洗濯の糊すり〳〵も朝の月　八紫
黍も色ます風のたゞ吹　坊

ウ

何とやらいふ鳥の來て里の秋　童
壁土こねてたらゐつり込　考
齊喰ひの戻りは袴腰につけ　緒
日が暮るゝかと皆おもひぬる　紫
町中にいかいやしろの杉檜　坊
ねぶたざましに魚釣に行　童
畑うちのたばこ呑居る川むかひ　考
あたゝか過て雨の氣遣ひ　緒
咲そろふ花の中よりいかのぼり　紫
目白囀る籠の弓はご　坊
月殘る野は霜どけのつたひ道　童
荷ふた人の見えぬ豆の葉　考

二

酒のよい城下は水も奇麗也　緒
笹のしめりに螢出そむる　紫
湯あがりの下駄はきながらさそはれて　坊
二階の客はひとり三味線　童
泣ほどの戀も一度はして見たし　考
小野の小町もきけばうそつき　緒
淨るりの場にも念佛は申されて　紫
夜食の時は皆ろくに居る　坊
あれて來る時雨の空の一通り　童
田中の松に鶴のつゝたつ　考
名月は麓の橋の暮かけて　緒
肌めづらしき綿入の穐　紫

ウ

柿灸る圍炉裏の端に子共衆　坊

おもへばけふは庚申の筈　童
暮六をつくと安井の門さして　考
たまの遊山に花も過行　緒
ぬり笠にほこり靜る春の風　紫
雲雀の聲の川をへだつる　執筆

草苅笛
夏之哥仙

從吾

湯あがりの鏡やそこに白牡丹　從吾
若葉の風に翠簾の薫　牧童
神鳴の雲かと峯は雨晴て　林陰
野中の川の帶にながるゝ　秋青
狐にもせよ道づれは旅の月　和丈
腰かけ酒に門の穂すゝき　野棠
物數奇は垣根を見越す秋の山　童
霧のかさねの日も朧なる　吾
鵙の音の朝とおもへば晝過て　青

蒸防こほるゝ椽のはり物　陰
お屋敷の使に鐵をかくれさせ　棠
矢筈の紋はしれた挑灯　丈
死ざまは錢六文に草まくら　吾
烏の日暮鷺の曙　童
艋をぶね濱の鳥井に波よせて　陰
若衆つれだつ虛無の編笠　青
宮方は花ちり月も落かゝり　丈
梢は雪の衣きさらぎ　棠

二

東風さゆる高座にくんと鼻かみて　童
芝居の風を似せる聲つき　吾
よしあしの穂に出て戀の花はなし　青
文箱の中も余所にしら菊　陰
供人の門にさゝやく夕月夜　棠
紅葉狩かと笛の聞ゆる　丈
借錢の節季を何と駿河殿　吾
お袋はたゞ坊主好也　童
物の降日はおもしろと傘さして　陰

一 足ちがひ風呂をしまふた　青
棚本も暮て掃やる猫の五器　丈
調市（でつち）を呼ば蚊にむせて居る　榮
ウ 客ぶりも子細に時宜をこね合て　童
八幡是はよい日和也　吾
鶯の花にあそぶはちと古し　青
餅は淺黄に桃はくれなる　陰
着かざりて生た雛（ひな）も一座敷　丈
嫁のこゝろのいつまでも春　榮

草苅笛
秋之哥仙

茸狩や龜井片岡ひたち（常陸）坊　雨青
あかいも道理酒に紅葉ゝ　牧童
名月の繪簾あまた見込せて　鳥水
舟に乘たい風の吹やう　山隣
分別は親仁まかせの旅枕　魚素
さりとはむさい疊なりけり　青
ウ 朝霜の窓から猫に日のさして　童
余所の子見やれ食（かし）くふて來る　水
八朔もあそぶ筈とは聞しかど　隣
長岡は今在鄕の秋　素
麵棒でならば來ませむそばの花　青
年寄の身の明日はしら露　童
山寺のこんな月夜は藥也　水
風すい〳〵と谷の水音　隣
あちからはこちこちからはあちの花　素
來るも草餅來るも草餅　青
出替になじまぬ薯（イモ）をぬりかねて　童
佛なぶりの朝起の家　水
二 雪隱のちかい隣も御迷惑　隣
細（こまか）に降て雨もはたさず　素
生魚の旅に飽たる浦づたひ　青
俳諧したき寺がある也　童
あの男浮世繪に見るあたまつき　水

綸子の高い時に戀する　隣
練酒に博多の柳冬がれて　素
いづれの世より田樂の二字　青
大兒と小兒といつも智惠くらべ　童
耳のきこえぬ婆ゝ様も伽　水
から紙に月のさす夜は夜更まで　隣
松むし鈴虫かうろぎの聲　素
ウ　薄ちる荻のうは風萩の露　青
口で馳走をする亭主ぶり　童
よい人であつたが祖父は死れたり　水
ことしの花は彼岸過ぬる　隣
あたゝかな日和をすかぬ鳥もなし　素
笠はどこにか置てかけろふ　筆

草苅笛

冬之哥仙

とりしめぬ嵐や竹に冬の月　桐之

千鳥啼よなる舟の行灯　牧童
橋通る木履の音に目の覺て　從吾
飲ちらしたる重に盃　秋之坊
おしからぬ疊に西日さしかゝり　支考
水うつ先を猫のそばゆる　之
ウ　小坊主が相手になりて子共達　童
鰐口高き宮の石壇　吾
三か月の此夕をや琵琶の海　坊
繪師が烏帽子の秋寒げなる　考
菊の香の强飯をへぎにかすませて　之
蠅もこゝには居らぬ板の間　童
靜さに人の來たがる晝寐時　吾
後家のつかえの針に名の立　坊
打鋪の小袖にほれた物ならん　考
木曾路の橋の文もさい〱　之
御所方の春も暮行雨の花　童
僧正ひとり獨活のあへもの　吾
二　鶯に水の手寄も自由也　坊

朝日の雲の殘る山藪　考
菅笠に國の名遠き旅すがた　之
どちぞといはゞお齒黑の方　董
暖簾の奥なつかしき茶の匂ひ　吾
夜明にふつた山茶花の雪　坊
登城の馬上に鐘を聞ながら　考
三日飛脚の戻る状箱　之
行水も食も一度にさし合て　董
隣へ物をかせば持て來ぬ　吾
秋になる月夜はどこも夜をふかし　坊
人の心の糸に啼虫　考
ウ
蔦の葉の簾にかゝる山嵐　之
折も崩れて棚の物置　董
傘にはたつきまはる俄雨　吾
傍輩どもの憎む前髪　坊
寶引の勝て帶買ふ花ごゝろ　考
春のにほひも過る正月　筆

草苅笛
餘興

干鮭に花こそさかな冬の梅　浪化
紙子の襟に唐織の箔　北枝
柴垣に掃部の介を呼入て　万子
金の手形の判見せてやる　支考
飲すてし鉢の肴に猫の夢　牧童
余所は味噌する夕食の空　化
船に帆の風はなをりて三かの月　枝
鳥もちくと秋を高ぶる　子
ウ
山柿に野山のにしき染かけて　考
檳榔笠の僧たどり行　童
馬病て東坡は宿に居らるゝか　化
火燵ぎらひの庭の熊笹　枝
酢をかけたやうに冴る月の影　子
塩なき海に水莖の岡　考
さりとてはつらい返事に袖ぬれて　童

屋敷の首尾を語る中立　化
上郎衆のそれは奇麗にあやめ草　枝
ぴかりとひとつ神鳴の雨　子
此宮の繪馬に鳩の住あれて　考
森の下行水に日のさす　童
坂越る人待居れば花に鐘　化
ねぶつてあそぶをれが長閑さ　枝

二

正月のいなれた跡に餅搗て　子
今度の家も鬼にかな棒　考
こゝもとは伊勢の檜垣の旦那衆　童
堤がきれていかい騒動　化
猫鳥は南風吹かもめ也　枝
酒の杉葉を船に見かける　子
一間ッをおけば御坊のはたらきて　考
雪のふる夜は焼火なりけり　童
山里に誰まつ風の吹あらし　化
狸が來たら鼓打せむ　枝
友達の異名の中に鶴太夫　子
葬禮の時みな眞鍮也　考
白露にあかい花咲野の月夜　童
秋こそ來たれ帷子が辻　化
きり〳〵す新在家には味つけて　枝
鉢くれさうな竹格子ども　子
鰤あぶるにほひに飽し夷講　考
茶の湯ごゝろに咲た水仙　童
五十まで兀ぬあたまも無風流　化
鉦打すてゝ願以此功徳　枝
重箱に南天の葉は合點也　子
あれが大工にほれた女か　考
藪入の盆は來たれど藪もなし　童
折かけふたつあはれなる墓　化
轡むし斗になりて月高く　枝
鳥居を乘て出る母衣武者　子
誰家の子ぞ少年の花の時　考
後集をちぎる藤に山吹　童

艸苅笛 春之部

花鳥

あら土の畠にちるや梅の花　浪化
鶯の空鞘ながき初音哉　露川
双六に折かけ垣や梅の花　北枝
鶯や竹のしはりの啼ごゝろ　芦文
三井寺や倶舎よめかゝる梅の花　許六
鶯よとてもの事に衣桁迄　万子
梅さくや海雲の水のあたゝかさ　洒堂
茶染屋に鶯なくや此日和　支考
梅を見に下駄のはきたき足駄哉　秋之坊
鶯や宵の茶糟を窓の下　桐之
ふたつゝつ花になりけり苔の梅　従吾
鶯や足袋はきかゝる障子越　牧童
兀るなら足の薬鑵に梅の花　桑名 支稽
うぐひすは臍の下よりはつね哉　有磯 路青
瘦馬に笠きて見ばや梅の花　ミノ 二竹
鶯や夕日の竹に一あそび　雨青
透腹に酢を呑よりも梅の花　林紅
うぐひすに隣はどこへ鎖おろし　石動 濫吹
梅がゝをまるめてこぼす雫哉　高岡 十丈
鶯の藪に啼日はこちの物　林陰
寺の名で此村さびし梅の花　蘇守
鶯や日をこすり来る手習子　石動 濫故
牛の子も野はあそびよし梅の花　ミノ 光清
鶯やさらりと晴し夜の雨　城ケ 不旧
むめ咲や窓閑といふ道心者　福光 巴兮
鶯や一羽かり出す藪の雲　仝 半綾
手拭に梅やこぼれて端じるし　此山
鶯にふはりと乗るや朝ごゝろ　城ケ 知足
遠山に雪はなりけり窓の梅　牧童
うぐひすの羽やうすものゝ爪はづれ　従吾

何さなく遠ざかりける人の
はいかいせむさいひおこせたるに

物に飽人やされども梅のはな　万子

髭ぬくによき日移りや窓の梅　桐之

段〳〵に梅が香ちかし箱階子　林陰

梅咲や禰宜の子共のひよこ共　（敦ハ）愚恕

若艸の雫ちいさしむめの花　（石動）未允

松風にはたらく梅のにほひ哉　（福九）竹紫

朱鞘さす人物すごしんめの花　一庸

からし酢や鼻からぬけて梅の花　八十

楊貴妃が三二も四一も梅の花　芦文

梅に鶯と
いふ事を

鶯の五器も杪子も梅の華　李山

うぐひすの聲に闇なしんめの花　從吾

梅さかぬ間は鶯も旅ごゝろ　八紫

鶯の舞臺にふむや梅の花　和丈

うぐひすの藪入したり梅の花　浪化

哉どめにならぬ鳥あり梅の花　（福九）柳士

鶯やその時判官んめの花　木導

作麼生か是鶯に梅の花　文考

華

花でまつ一晴してや風の雪　木因

人肌の佛いますや花の奥　（居城）素覽

くら〳〵に戻る寒さや雨の花　浪化

から〳〵と花に釣瓶のかるさ哉　三通

重箱にその日所帶や花の山　文川

此寺につるどはいらず花盛　許六

いそがしい人はいそがし花ざかり　一洞

都の人の山里をねがひ、山里の人はみやこをおもふ。はてしなき世のさま也。

誰ために住むや庵の花の番　音吹

此德利抱ても寐たし花の陰　（ミノ）闇如

畫贊

人丸は花見がほにて帆かけ船　長緒

しかられて下戸につくばふ花見哉　厚爲

花嫁の花物いはず花見かな　東子

神法樂

白鷺の流も淸し神の花　難波 三惟
つみとがを川へながせば川も花　北枝
何鳥の聲がたらぬぞ宮の花　有磯 玄指

鳥

駒鳥の影やうつらんぬぐひ板　鳥水
駒どりの格子をほめて通りけり　長緒
こま鳥や聲あきらかに花の中　支考
駒鳥の出所ゆかし花の雪　牧童

花

山寺の寒さはなれむ初櫻　温故
垢つかぬ小袖よ神の初ざくら　似猿
柴人の時宜にむつかし山櫻　城ケ 十治
あれ式に見られてあはれ山櫻　不旧
市中の山や淋しき山ざくら　元尹
鷄鳴や寺に米つく山ざくら　蘇守
山寺やあたら櫻に奉加帳　卑水
山ざくら雲に浮たり沉だり　十丈
見おろせば又あの谷に櫻哉　野棠

都はよろづなつかしきに今やうは羽織みじかくて、むな紐しめつけたる兼好法師もその人はいふまじ。

ぬり笠にむかし綸子や櫻狩　牧童
鑓たてゝ出るや奥野の櫻狩　北枝

鳥

杉むらに日のありたけや鳴雲雀　桐之
纔の緒のきれてや空に啼雲雀　従吾
朝月や鏡にかけてなくひばり　ミノ 丹芝
行雲や峯にちりゝと鳴雲雀　八紫
笹苞に嫁の戻りや啼ひばり　三国 胡仝

田打ば
鍬の拍子にかゝりて

晝食はまだか〳〵と啼雲雀　牧童
春の野をしりつくしてや鳴雲雀　万子
吹とばす嵐や笠に啼ひばり　支考
空色を草の原とやなくひばり　賴元
雲雀啼羽のうつりや虹の影　濫吹

ひばりなく山の青みやはなれ馬　未允

雲をふむ足とも見えず夕雲雀　楚桃

身を捨て上見ぬ鷲のひばり哉　有馬 海人

鷹の巣に轉りかゝるひばり哉　豐州 芦惠

一里來て雨になりたる雲雀哉　石動 可水

入相の鐘にちつたるひばり哉　ミノ 其由

羽づかひに自慢の見ゆる雲雀哉　長緒

嬉しげに雨晴あがるひばり哉　秋之坊

世の中を空にして啼雲雀哉　雨青

花

乘物の窓にゆかしきつゝじ哉　林陰

朧明の袖に照こむつゝじ哉　府中 可汲

柴苅の言葉を記

咲たちて柴のならぬかつゝじ山　丈艸

つゝじ咲岩根や猿の醉狂ひ　福光 逸正

鳥

松山や下苅させて啼雉子　不旧

山畑や雲にきかする雉子の聲　仰士

笹原や雪踏わけて鳴きゞす（雉子）　支考

寐にくひかすぐろ（末黑）の薄啼雉子　北枝

川越せばあとに啼なり雉子の聲　文砌

花

朝酒のいざや相手に桃の花　北枝

茶の音に小家のぞくや桃の花　魚津 雨村

お醫者から娘の方へもゝの花　府中 桃睡

轉寐の枕かへすやもゝのはな　同 金嶺

しばらくは藏の窓から桃の花　柳士

乞食は寒しひだるしもゝの花　牧童

鳥

海山の夢や燕の五器の中　大聖寺 長水

燕にゆかしがられむ細簾　支考

雜水の世帶見さがす燕哉　厚爲

つばくらも赤前垂はなじみ也　長緒

燕も普請じまひや門の川　從吾

つばくらの巣は野にもあり馬の沓　府中 桀木

落さうにあそぶ柳の燕哉　福井 山殘

花

跡からは咲あとからは咲く椿哉　秋青

もらひたや里の垣根の白椿　孫之

おなじく

菜の花に裾野は黄也峯の雪　牧童

飛咲の菜の花寒し麥の中　三徑

久保氏の何がし二合半の世帶を見やぶり、東武の髮つきをもやめて、ことし四とせばかりならん。片里の陀畑に手作の野菜をたのしみ、明暮は手ならひ子共相手にして、悠然とあそべりければ

菜の花や酒にいださむ手習子　路青

おなじく

傾城の屓れて行や藤の花　木導

飴賣の引のばしてや藤の花　溫故

つくり木や抄子定木にふじの花　素洸

桔梗一揆花一揆と聞えしは
風雅ある大將なるべし

母衣武者に峯のあらしや松の藤　從吾

峠より夕日かゝるや松の藤　凍松

此春もさけばぬらりと藤の花　野棠

木陰にて物おもはばや藤の花　ミノ 嘯風

おなじく

山吹の中や顏出す酒の時宜　ミノ 此山

山吹や木陰ほしなる茶辨當　楚臺

春雪

立出て白がねふまむ春の雪　北枝

古哥一首添てふる哉春の雪　秋之坊

若菜

簑笠に百が雫の若菜哉　浪化

水鼻に手の隙もなき若菜哉　柳士

若菜つむぬぎかけ袖や雪礫　北枝

小川とぶ袖の拍子や若菜摘　ヒ波 呂風

路の臺

禪僧の口にはあまし露のたう　城ケ 一川
水波のながめ捨けり露の臺　石場 宇白

出替

出かはりやおもひきつたる尻つまげ　林紅
出かはりやけふも鐘きく傘の下　巴兮
出替や蚫の貝の片おもひ　支考
出かはりの浮世は油くさゝかな　京 范孚
出かはりや麝香の藥和中散　木導
出替に涙がましき湯漬哉　桐之
出かはりの宿の亭主は佛哉　ミノ 柳泉
出替や明石を余所にすまのうら　東賀

春雨

春雨や夜着きてあそぶ茶洗髪　從吾

有レ約

春雨の晴ても來ぬや繩簾　秋之坊

柳

後だてたのむ甲斐なき柳哉　ミノ 角呂
釣竿のしきりにほしき柳哉　其山

やりかけて水の打たきやなぎ哉　山隣
水波の手拭落すやなぎかな　萠子
正直な人の門なる柳哉　文砌
風ふかばふけ雨ふらば柳かな　城ケ 其風
觀音はどなたへ風の柳哉　蘇守
入口は二王にかゝるやなぎ哉　小松 廣房
東雲に出馬の見ゆる柳かな　宇白
翠簾の目にはさまれてゐる柳哉　林陰
長閑さにけふは隙也糸柳　愚恕

猫の戀

三味線の皮のうき名や猫の戀　木導
猫の戀隣はつらし枳殼垣　大聖寺 里楊
若衆には化る智恵なし猫の戀　支考

雛あそび

隱遁の雛もありけり小柴垣　いせ 芦本
三か月の影まつ雛の屏風哉　豐後 野紅
あの隅におれがやつたる雛もあり　北枝
その次に居るはかはゆしひなの顏　福光 是通

桃の香や漸く雛の心ほど　富山 野調

世のさまも是や一夜の雛達　宇白

膝居る手は奇麗ぞや雛達　長緒

紙鳶

いかのぼり見事にあがるあほう哉　林紅

紙鳶山は青葉と成にけり　石山 遲動

師の坊の前の心ぐるしきに
鳶の鳥のと啼わたりたらんは

箱王も空に心やいかのぼり　牧董

あけたらぬ心の糸や紙鳶　南甫

陽炎

陽炎をとらへて見れば我手哉　柳士

かげろふや白髪にもゆる窓の下　巴兮

陽炎の先にあゆむや岡の松　ミノ 水石

蛙

春なれや田の青苔になく蛙　許六

小田の二字首にかけてや鳴蛙　支考

夜もあけば又鋤鍬やなく蛙　魚津 乙運

日の暮やどの田を先に鳴かはづ　有磯 爲昨

行燈のあかりうけてや鳴蛙　三通

掃除したあとや奇麗に飛蛙　東賀

草臥の脚半にあたる蛙哉　大聖寺 關雪

戻りして馬が來るやらなく蛙　北枝

田の畔や虹を背負ふて鳴蛙　去來

桑子

簑笠に露けき宿の桑子哉　支考

釣棚に片袖くらき桑子哉　宇白

お持佛の戸は明にくし桑子時　石動 香鵲

晩春

夕日はや春のおしさよ疊丈　浪化

舟かりて春見おくらん柳陰　北枝

延〳〵て春も一日柳哉　林紅

春について行合點也藤の花　半綾

名所

摺針や雪の殘りのみがき砂　嘯風

亀山や尻にして來る花筏　北枝

野々宮にて

世の中の花の後や小柴垣　吾仲

多胡の浦にて

このしろのたこの浦輪や藤の花　牧童

桶やきむ田簑の雨の田螺賣　木因

此日今庄の驛を立て都の空にむかへば、山は千丈にして人家稀也。水の音左右にわかれて、行客更に一歩になづむ。

こちからも越の山路や八重霞　北枝

松原をつたひて三保の雲雀哉　一洞

雜躰

物おもふ春のふかみや唯かすみ　難波 諷竹

貧な子は貧でかはゆし梅櫻　濫吹

梅が香に春の小鳥や口ほどき　魚津 秋幽

嬉しいか田をすきはてゝ歸る駒　素念

苗代に蹈こむ道のつばな哉　烏水

つばなぬく人の赤さに鳴雲雀　十治

谷そこに櫻をあびる田打哉　尾張 丑栢

夜更て歸る時に蠟燭なし。亭坊の細工にて、火さぼす物でかしてわたされたり。むかし龍潭の紙燭は、さゝらんとおもふも骨おりならんと、たはぶれて

春の夜や蕪にとぼす小挑灯　牧童

麥はまだ雜子もかくれぬ寒さ哉　富山 故白

此君庵にあそぶ

鶯もなかねばならず川に竹　從吾

野をいくつあつめて鍋に芹の嗅　長緒

正月を洗ひ流して茶漬哉　露川

春雨のけふは接木の休み哉　厚爲

草苅笛夏之部

花鳥

卯の花や野中の家の酒ばやし　万子
ほとゝぎすさめ果たりや春の夢　杉風
卯の花に笠きて行む川むかひ　支考
京にひとつ田舎にひとつ郭公　諷竹
うの華に坊主か牛か川むかひ　牧童
獅子舞は口から聞やほとゝぎす　許六
卯の花や雲はきかけて山の眉　温故
ほとゝぎす朝観音に夕薬師　桐之
うの花や屋根に鶏啼繪の模様　北枝
菜種殼たくや野風のほとゝぎす　丈艸
うの花や窓をのぞけば化粧時　半綾
桐の葉を笠にきてなけ時鳥　八十
卯の花に一杵過せ客の米　楚桃
わんといふ大佛殿のほとゝぎす　彦根 汶村
卯の花や膳にむかへばいか鱠　京 洗柳
鳥の名は痩たやうなり郭公　山隣
うのはなや雲は行きる跡の山　林紅
弓はりのかけつた雲にほとゝぎす　秋之坊
卯のはなや枕おしやる窓あかり　時陳
水底にないたやう也ほとゝぎす　竹紫
卯の花の六月咲て雪に似よ　八紫
郭公あの世へ通る一嵐　支考
卯の花や瘧の間口の薄曇　故白
蜀魂聞てころばむぬかり道　万子

餞別

うのはなや行さき〳〵の朝朗　富山 秀尹
白濱の松やつたひて時鳥　從吾

花

帽子きぬ野郎はしらずかきつばた　難波 舎羅
手とゞきに咲てもくれず杜若　桐之
朝起や手水わするゝかきつばた　里楊

鳥

風の日の菅にもまるゝ水鶏哉　不旧

夜食には何やらたゝく水鶏哉　柳士
挑灯をまたせて鳴ぬ水鶏哉　野角

花

青竹に茶巾かけてや花菖　輕舟
涼しさを葉なら花なら花あやめ　從吾

鳥

川せみのつる居て行や岩の花　万子
川せみの行さき／＼や涼舟　方錐

花

河骨や流れては又起かへり　方堅
河骨や水にはりあふ葉のつよみ　万子

鳥

名に啼かよし原すゞめ行ゝ子　北枝
すゞしやと蚊屋釣る舟に行ゝ子　長緒

華

待人の道まで出るや合歡の花　雨青
川音や三日月しづむねぶの花　自笑
似合しき鳥も來て寐よ合歡の花　万子

馬市の中に淋しや椛の花　南甫
百姓の今はいそがしねぶの花　鳥水
ねぶの花さめてや岸の水かゞみ　牧童

鳥

鷺の子に笠ぬぐ橋の木かげ哉　東子
鷺の子や森に花咲日のかへし　南里
さぎの子の親には似るな鵁鶄(ごいさぎ)　吾仲
鷺の子に手習させむ芦の陰　從吾
鷺の子に袴きせたらによろり哉　雨青

花

しのゝめの星やまじりて桐の花　秋之坊
水色や桐の花さく井のうつり　芦葉
童部はちるを待けり桐の花　和友

鳥

木の空(うろ)に皷かけてやかんこ鳥　蘇守
淋しうて佛にならば諫皷鳥　支考

花

木の下や夜の明かゝる百合の花　浪化

寐てかゝる人のこゝろや百合の花　魚素
水鳥にして流さばやゆりの花　林紅
汗くさい我にも百合の匂ひ哉　柳士

木因亭に
生花を賞して

笹百合の水を明たるけしきかな　ミノ 大川
ゆりの花生(イケ)ればあちらむきたがる　支考
あみ笠に呑るゝ兒やゆりの花　三國 昨嚢

おなじく

紫陽花や串海鼠(くしこ)をきざむ窓の先　芦文
あぢさゐの花や手鞠の染かへし　北枝
紫陽花やたゞ青ざめて薄月夜　従吾

おなじく

世の中を芥子も一重の羽織哉　范孚
傾城の分別薄しけしの花　従吾
鍬音の背戸におやぢやけしの花　一之

おなじく

夕良やわざとも植て綿帽子屋　句空

貧乏を花と咲たるふくべ哉　ミノ 如舟
ゆふがほを這せて見たし舟の苫(とま)　此山

おなじく

薄やうはさし味盛たる牡丹哉　ミノ 圓解
折〳〵はべに(紅)もさしたし白牡丹　山中 桃妖

牡丹過ㇾ門ヲといふ
題にて

菅笠も白きぼたんの使かな　従吾
牡丹咲日や暑からず寒からず　泊 松宇

更衣

高砂の脇いたさばや更衣　露川
庭訓(てきん)もまづ是までぞ更衣　溫故
箸に目をつけたらあれよ衣がへ　浪化
夏ごろもかるい若衆や馬に鈴　万子
あさつきに酢みそと出たる袷哉　北枝
豆の粉の膝打たゝく袷かな　牧童
いにざまに尻たゝかるゝ袷かな　凉莵

祭

松風の人にまけたる祭哉　従吾
烏帽子きて幕を尋る祭哉　里楊
長明の勝手は淋しまつり客　秋之坊

若葉

楊弓の中りきこゆる若葉哉　厚爲
短尺に一雨わたる若葉かな　和友

若竹

若竹や竹より出て青き事　北枝
わか竹やまだ水くさき笹の露　濫吹
若竹にしみ込む笛の高音哉　長緒
わか竹に殘る寒さや宵月夜　半綾

五月雨

立のぼる霧の日數や五月雨　長崎 卯七
式臺の灯影も遠し五月雨　従吾
傀儡の中に寐る子やさ月雨　牧童

旅店遇レ雨

五月雨の繩に合羽や辻芝居　厚爲
五月雨や窓の畑はどちへ行　野棠

田植

青天に鷗の聲の早苗かな　汶村
靜なる空にも風を早苗哉　温故
門さきに夕食よばる早苗哉　林紅
卯の花によごれ初たる田植哉　香鵲
松風も吹や田植のすまし汁　ミノ 巴靜
あら磯の風に乘たる田哥哉　方堅
早乙女の笠の日影や水かゞみ　和丈

螢

螢火や夜雨に見ればあつちこち　文砌
一筆に螢消したり今朝の空　秋之坊
麥がらの小路をぬけて螢かな　十丈
迯て出たあとに手をかく螢哉　宜作
あちからも人を見たがるほたる哉　牧童
翠簾にきて薫物くさき螢哉　浪化
笛の音や螢出てちる水の上　北枝

螢はいかなる美人のたましゐにかあらん

飛ほたる十八町の清水哉　知足

松明が過て草葉に螢哉　府中 延貞

草の葉のほたるの上や行螢　不旧

江の草の花かと水にちる螢　乙運

笘(とま)に居て沖から戻る螢哉　方竪

笹の葉にすべるやうなる螢哉　周芳

草の葉の泥やはなれて飛螢　遅動

宵闇や行たい方へ行ほたる　府中 臨川

我胸の佛たうとき螢かな　ミノ 猿之

夕立

夕立の風や生姜の喰あはせ　尾城 素覽

夕立や伽藍に手なき佛達　一丹 蟻道

ゆふだちや落書したる檜木笠　離冬

夕立や西瓜ころばす雲の上　柳士

此句ふしぎのかけり也。板敷の上に西瓜ころばしたらん、誠に神鳴のとどろき也。たゞ雲の上とやりはなしたる作者の心きかまほし。

蓮の葉にまだ夕立の殘り哉　三志

夕だちやたゝきさがして笹の泥　爲昨

ゆふだちや關に笠ぬぐ後より　和丈

夕立の仕舞ば涼し露と風　宜伴

蟬

蟬の音や海ほそく見て行次第　秋之坊

松の蟬峠の茶屋に寐て行む　和丈

取ついたちからや殘る蟬の聲　素然

霧雨にしめりて啼や谷の蟬　李邑

日の出(いで)をはづみ切たり蟬の聲　牛花

松脂(やに)を流しかけたり蟬の聲　洞梨

清水

我顔の底に涼しき清水哉　有磯 启之

獅子舞の影も立よる清水哉　福光 只艸

扇 附團

繪をほめて直にかりたる扇哉　松陰

挨拶にかなめ(要)のはしる扇かな　牛綾

後手につかふ扇や風隣　東賀

山寺の道のかざしや灉園　八紫

端午

笹の香のほめて喰はるゝ粽（ちまき）かな　桐之

白菅にとり合せたり笹粽　万子

弔屈原

粽ほどく手もとは似たり經の紐　北枝

粽ゆふ時は簔きよ袖の露　支考

あやめの日は三國にあそびて酒のみけるが、かゝる酒盛の座敷にふり袖は物にさはりがちに、たちゐ（起居）もいささはがしさて、重箱の箸もかたよせたるは、たゞょし脇あげの君のこのもしからればならん。

小傾城來れば菖蒲のにほひ哉　里楊

出女の心あたらしあやめ草　ミノ丹芝

美しき良や格子の紙幟　從吾

紙子着た人こそ見えね紙幟　ミノ可吟

蚊遣　附蚊帳

茶の音に蚊遣わけ入戸口哉　楚桃

かやり火は余所の無常や山の庵　乙運

蚊の聲や屛風の松のうそくらき　闇雪

文ひとつ書て蚊帳つる旅ね哉　知足

暑かなさいふ事な

温飩屋は人に喰れて暑さ哉　許六

九重の人は着かざるあつさ哉　万子

編笠の緒のとけかぬる暑かな　牧童

我笠の影踏て行あつさ哉　三國水音

さかやきに手を置馬場の暑哉　洞梨

夕立の便もなしにあつさ哉　井波荻人

箔椀に居（すゑ）るお齋（とき）のあつさ哉　仝吏全

麥の穂に風は戻りて暑さ哉　林紅

石花菜

鯉の登るけしきをつくやところてん　尾城東推

一皿で坂を越せとやところてん　城ケ山之

膳組に涼風そへてところてん　八紫

短尺やよゝ人しらず石花菜　友松

納涼

夕闇や腰に鎰鳴る門涼み　北枝

精進のつれなき腹や夕涼み　桐之

知足亭にあそびて

しゆろの木は老がなじみぞ夕涼　不旧

梟を見出すや森の下涼　方堅

ふうはりと蓮に乗たき涼哉　三國播東

涼しさや木の間の水に塔の影　愚恕

すゞしさや膾殘魚の料理を岩の上　有磯海人

身を置て見れば涼しや壁の穴　文砌

季夏

夏菊の白きを見れば秋ちかし　富山芝道

夏菊の夏といふ字もけふばかり　秋之坊

名所

玉水の早苗や奈良の晒時　桐之

覆盆子喰ふて寐てもゆけとやさよの山　従吾

熊谷の堤あがればけしの花　とは湖東の許六申されしが、誠に此堤は此花の咲てぞ侍りける。

熊谷に敦盛咲やけしの花　万子

更科の麓は月なき比通り侍りて

更科の闇を請とれ郭公　仝

若楓石山でらの手水鉢　秋之坊

梅檀の花ちりかけて雲津川　北枝

雲助も雲津の川や夕涼　遲櫻

しのばずが池にて

蓮の時又來て買む香煎哉　巴堂

東武紀行

鳥部野に鳴ぬ日はなし蟬の聲　路中

蚊屋つらぬ枕に木曾の嵐哉　厚爲

九條殿の姫君此春此道を御通のよし

名護屋から馳走に咲しさつき哉　仝

吹上の茶屋にて

一重にてしかも白さよけしの花　仝

雜躰

豆植へと啼鳥すごき山路哉　句空

二番草仕のけて行か鯰ずき　万子

琴引もおなじ浮世に田草取　支考

夏草を馬子が片手や馬の口　十治

東花坊に浴衣おくりて

我心一重は薄し夏ごろも　安居寺 晋吹

雲に樹のうつろひ涼し風の鷺　秋之坊

舞鶴の影や涼しき草の上　巴兮

すゞしさや草苅舟にぎすの聲　南里

武の杉風より東花坊に文通あり。その書の末に、

愚事もはや世上もやかましく、口に出るを我と吟じて、我をなぐさむる斗にて諸事御免し可給候。一両年の内には追善の句をうけ申にて可有候。

以之外病苦かさなり申候。

蚊のすねも達者に見ゆる夏のうち　杉風

題しらず

くらき世に木の下闇の念佛哉　濫吹

題しらず

青梅にうはの空なる人戀し　北枝

舎九といふおのこの法師になりたるを示して

蚊屋を出て又障子あり夏の月　丈艸

木枕にさけ松風は蚊屋の中　支考

此二章はある人の文通にきこえしが、予が集の棠花とせり。湖南の僧は出生入死のかぎりなき世に、此たび俗塵を離れたりとおもはゞ、迷を出てさらに迷へる人ならんとしめし、東花坊は出入の境をはなれて、かの夕月の山の端に、出るとも入るともおもふまじとならん。撰者それがし、後評にかく慮外申たるにぞありける。

旅野郎をあはれむ詞　北枝

晝はあし垣の一ふしなる小宿に世の人をはゞかり、咳ばらひに隣を忍びては、あみ笠のかげにつめ袖をやつし、ありがたき日影をさへ瘧の間日には寐くらすならん。夜はそこ〳〵にむかへられて、脇ざし羽織の置所いぶせく、ひとり躍の口三味線に、いきもつきあへぬこそうたておもはるれ。又無理酒にたましゐをくだき、梅漬の竹の子をさがし、蚫のわたあへに氣しきとりみだれたる、あかつきの夢もいつはりがちならん。さるを世のさまに寐ならひて、かりの枕にも打とけて寐たる顔つきの、國はいづこ氏は何人ぞや。

たらちねや
かくなでしこの
草枕

草苅笛 秋之部

花鳥

菊の花いつも目醫者の匂ひ哉　李由
蚊屋しまふ夜は野原也鴈の聲　作者しらず
お内義のまゝにもならず菊の花　芦本
初鴈のみやげは今朝の寒さ哉　從吾
白菊や有明の月のひつはなし　牧童
はつ雁をまつや田づらの鰯雲　宇白
しら菊や菊の心で狂ひ咲　万子
啼せむに門田もほしや雁の聲　支考

菊に酒の名ありて、餅の名なき事は何ぞや。

菊の花黄な粉の色で哀也　許六
爼板の上をわたるや鴈の聲　桐之
初菊や陶淵明が念佛講　小音
雲に啼聲が聞たし小田の雁　秋之坊

白粥もよい寒さ也菊の花　長紅
鍋かけて待人おそし鴈の聲　柳士
堀越や隣でほむる菊の花　支嵆
雁がねや遠から啼て屋根の上　南里
菊の香や紅裏見ゆる細簾　吾仲

都の法師に別るゝ時

菅笠の道づれやらん鴈の聲　和風
菊の香や風漸々に窓の破　(非波)路健
雁がねに入かはりけり旅芝居　東子
草履賣る隙に見事や菊の花　北枝
雲はやし磯行ふねに鴈の聲　野鼠

親の忌日なりけるに、菊の花を給たる返しに

佛より先にたふとし菊の花　一洞
水汲の木履のあとや菊ばたけ　意程
床ぶちの墨塗もよし菊の花　從吾
盃に菊のにほひや指のさき　香鵲
酢味噌にはゆかしき花の野菊哉　鳥水

買て行障子の骨に野菊哉　此山

華

粟食を喰せむ馬に女郎花　支考
山寺にお見住せておみなへし　万子
手のつかぬ黄むくはゆかし女郎花　(柏原)櫻三
ほれられておらぬ人なし女郎花　柳士
おもひあらば八幡の牛房をみなへし　牧童

おなじく

西行の肩にかゝりし小萩哉　(府中)遠近
夕露の念を入たる小萩哉　輕舟
紅も月夜をあての小萩哉　牧童

おなじく

こゝろ見に秋の口きる桔梗哉　闘雪
ひらく音あらん桔梗のつぼみ哉　從吾

人の文にうしろくらき事きこえ給ひしに

我心桔梗にさきて何もなし　(遊女)千里
小刀目いれて咲せん桔梗哉　蘇守

空色の草に落ては桔梗かな　輕舟

おなじく

朝良の垣根や宵の温飩桶　楚桃

朝がほやきのふもわせた鉢ひらき　山隣

あさ良や逢ふ度人の殘おし　秋靑

朝がほに朝酒のむは朝比奈か　桐之

あさがほや烏は起てすつと行　大聖寺 虎角

おなじく

鷄頭にあまる西日や竹格子　府中 白烏

よし垣にくゝり付てや鷄頭花　遠近

鷄頭もちとあはれ也一時雨　泊 眞春

お比丘尼の口紅ゆかし鷄頭花　尾城 倘細

栗は大和はなは唐也鷄頭花　富山 二川

おなじく

約束の日はまだ遠し蕎麥の花　府中 梅摘

やれそこな大根よそばは花ちりぬ　支考

蕎麥の花なら茶の花はなかりけり　浪化

旅人の朝がほ寒しそばの花　長水

鳥

うら枯や日は田に落て鴫の聲　林紅

夕晴や鴫の一聲木の雫　遲櫻

きち／＼と啼は誰子ぞ鴫の聲　支考

豆の葉をこくなと鳴か鴫の聲　嘯風

鴫居て脚半ほしがる子共哉　此山

それほどの用とも見えず鴫の聲　汶村

おなじく

萩苅に踏立られてなく鶉　雨靑

栗かりて今朝の無念を啼鶉　桐之

粟の穗の書院に砂や鶉好　從吾

おなじく

松原に山雀籠を若葉哉　嘯風

山雀の我棚つるか釘の音　支考

山陵の猿の手つくす梢かな　八紫

山がらや細谷川の丸木橋　北枝

おなじく

啄木の十二一重や蔦紅葉　輕舟

啄木や日のさす松に影法師　宜伴

木つゝきや鳥井に移る松の中　此山

木つゝきや隣の松へ猿すべり　北枝

木つゝきの音や銀杏の散がてら　支考

おなじく

水のある峯や木末の渡鳥　石動 芦葉

掃除日の風や木の葉に渡鳥　仝 一點

長月廿日あまりの旅行ならん、廣しまの人〳〵のせち(切)にとゞめ申されしを、わりなく

立出るとて

此ごろとなりていそがしわたり鳥　去來

初秋

帷子はしらじ草葉に今朝の露　支考

秋たつやきのふの雨を今朝の露　從吾

松風の秋や先だつ荻の上　文砌

紙塩の鯛や今朝吹秋の風　汀芦

水の音風も吹ぬに雨の降　六歳女 珉

輕舟亭に人〳〵寄居て初秌の句をせむといふに、此子のかくいひ出せるを、風の音にぞおどろかれぬると、おとなしき人の感じ合たるを、さはむづかし、たゞ一座のはつ秋と見て置べし。

七夕

七夕のたとへに人の遠〳〵し　京 蒐

七夕も泊り客なり草の上　三國 布留

たなばたや水からくりの糸加減　支考

橋かけ(架)に行や七日の夕がらす　雨青

高砂や住よしかけてあまの河　尾張 凹山

飛越む土用の中のあまの川　杉風

魂祭 附 灯籠

親の名になりてその名を玉祭　水音

淋し氣に木の下露や魂祭　方堅

魂まつる棚に何〳〵松の月　万子

玉棚やさぞおし合て此暑さ　輕舟

聖靈もござるか今の風の音　桃妖

聖靈も矢橋はちかし帆懸船　長緒
素麵のきらひもあらん玉まつり　石動 可水
手に居て佛くさゝよ蓮の飯　濫吹
玉棚に蠅をおがむや蓮の飯　笠寺 渚高
みそ萩は盆のこゝろに野がけ哉　野棠
餓鬼の首のがれて盆の晝寐哉　凉莵
盂蘭盆や持佛に戻る佛達　八紫
送火の山へのぼるや家の數　丈艸
松杉の中に花咲切籠かな　自笑
松杉の夜雨もすごし高灯籠　厚爲
高灯籠たばこ呑たき夜道哉　李邑
灯籠の火は有ながら鼾哉　素洗

相撲

唐黍の力足ふむ相撲哉　牧童
時宜をする言葉の下や相撲とり　只艸

西瓜

秌風の重石にかゝる西瓜哉　巴堂
當然の占見たき西瓜かな　ミノ 正勝
かはゆやと西瓜をさする童哉　輕舟
いたゞいてあちらむきたる西瓜哉　從吾

踊

輪におどる中の榎の嵐かな　蘇守
寺〳〵の鐘や躍の花に風　北枝

稲妻

稲妻の秋をわたるや水の上　野角
いなづまやくだけて岩に浪の花　長緒
いなづまをわけて見せけり雲の中　東賀
稲妻や雫となりて松の中　遲動
いなづまのこぼすばかりぞ草の露　ミノ 芦周
稲妻の笹に音あり峯づたひ　三國 富蘭
いなづまの上ぬりしてや闇の空　ミノ 里鳩

稲

早稲の香や雲行めぐる山のすみ　溫故
わせの香や門は青柴ほしひろげ　素洗
初嫁に早稲の匂ひや里もどり　遲動
宵〳〵の露もあす苅晩稲哉　林紅

案山子

案山子にもたゞはなられず簑と笠　万子

骨折の果や案山子の笠の霜　桐之

笠ぬいで物いひさうな案山子哉　離冬

川越して道のまぎるゝかゝし哉　素洗

人の田を後にさする案山子哉　林陰

立ながら往生申(まうす)かゞしかな　北枝

秋風

竹杖のころぶ音まで秌の風　芦本

何草かまづもてなさむ秌の風　従吾

山蟬のうかいする音や秋の風　大川

秌風を松に吹せて茶數奇哉　可吟

十用なかばに
あき風のたつさいへば

ほめられて秋風吹や帆かけ船　山中 三枝

秋風の手を付そむる柳哉　梅子

散口のあくや柏の風うつり　包之

落栗

落栗や小僧先だつ猿の聲　桃妖

落栗や鐙にあたる草枕　布鼓

月

浮雲に切てはなつや三日の月　枝東

棟上(むねあげ)の弓とならぶや三かの月　府中 嵐枝

栗の穂に戸口分入る月夜かな　福井 元春

肌ぬいで出れば瘦たる月夜哉　富山 野調

草庵せまけれど
秋ごとに今宵の月なさにれて

窓本をちれば野原や月の客　丈艸

与三右申月のためには水車　伊丹 青人

三井寺

村雲の橋ふみ越てけふの月　膳所 曲翠

峯でほす海の雫や今日の月　東推

名月や壁に酒のむ影法師　牛綾

浮世繪の顔をならべて月見哉　尾城 猩卜

信濃屋の狀で田毎の月見哉　木因

もう木曾の望も寒し後の月　凉菟

又さけるいばら薔薇も後の月　ミノ荆口
雲行も十夜かしらず後の月　二竹

駒迎

駒牽の秋や草津の姥が餅　牧童
駒の尾にまだ霧原の嵐哉　支考

夜寒

冬瓜の傍にねころぶ夜寒哉　魚津 雨村
漆の葉に生壁にほふ夜寒哉　富蘭
乘合にしらぬ顔ども夜寒哉　似猿

唐辛子

俎板の仕舞に乘るや唐がらし　丹之
空むいて子細らしさよ唐がらし　秋青
いら〳〵と鳴は啼也唐辛　浪化
唐がらしちと小兵にはゆへど　嘯風
人の心面のごとし唐がらし　ミノ 箕中

秋蟲

灯とぼして嬉しがらせむ袜の虫　長緒
すゞ虫や峯よりさそふ松の風　府中 蜜中

まつ虫のまたぬ夜もなし松の露　北枝
草の葉や馬屋の外の轡むし　冷翠
きり〴〵す扇をあけてたゝむ音　和丈
葛の葉を屋根にして寐よきり〴〵す　枝東
草刈の鎌とぐ傍やきり〴〵す　木曽 紫嶂
墓守の箒に啼か蛬　府中 五六

此袜いかにとさはれたる
文のかへしにいひやるとて

きり〴〵す起て物食ひ寐て枕　林紅
馬肥のにほひにそむなきり〴〵す　宇白
穂蓼つむ袖の下より蛬　岩瀬 竹子
蛬なくや杉葉の餅のあと　昨嚢

人〳〵殘暑の
こゝろをいはむとて

きり〴〵す啼せて寐たし籠枕　支考
簀戸たてゝ晝も啼せむきり〴〵す　浪化

砧

御あかしの明りに住むできぬた哉　伊丹 鷺助

板敷の上ときこゆるきぬた哉　桐之

手の皹(ひゞ)をなで〳〵むかふ碪哉　此山

木綿取

山の端の日の嬉しさや木綿とり　浪化

棉取の菅笠しろし夜目遠目　石動 丈紅

茸狩

茸狩や赤裏見せて峯づたひ　八紫

茸がりの手わけやこゝは水の音　里楊

薄

柿色に枯野めかすや花すゝき　露川

花薄ちるや野中でふる(振)あたま　雨青

華すゝき聟といはれて通りけり　楚桃

寄レ薄戀

風吹に君は帯せぬすゝき哉　闘雪

おし分て見れば水ある薄哉　文砌

蜻蜓

蜻蛉の秋をかざすや羽の上　吾仲

蜻蜓や涼しう草のしなへ行　布留

立よれば又先へ行とんぼ哉　湛白

そこにかと猫を見て行とんぼ哉　僧 魯九

紅葉

木づくりの心も中に紅葉哉　巴兮

折かざす鷹野戻りの紅葉哉　南甫

葉月の中比、廿日ばかりの旅をおもひ立て、紀行の一稿をしたためたるに

まづ首途の筆をなさりて

蔦紅葉留守にぬらせむ藏の壁　従吾

戸を明て壁に這せむ蔦紅葉　富山 椎雪

山寺の開帳さむし蔦紅葉　乙運

鹿

寐覺して秋の底也鹿の聲　白笑

松風の戸にあたりてや鹿の聲　富山 一甫

ある僧の細きまよひや鹿の聲　牧童

鹿に紅葉といふ事を

小男鹿のいつ着そめてや栬(もみぢ)笠　京 子直

献立はいろ〳〵鹿に紅葉哉　従吾

純子の夜着蒲團も
ひとり寐ならば何にかせむ

妻と寐るその夜は鹿に紅葉哉　支考

あみ笠で鹿も戀せよちる栬　牧童

暮秋

行秋や糸瓜のかほのぶらり病　昨嚢

行ばこそゆかずば秋もあきの風　支考

淋しさのつきてや秋も暇乞　吾仲

名所

我數奇の粟津が原や鳴鶉　支考

粟稗の名も深草や啼鶉　蘇守

京より歸りたる人の矢橋の往來に、
勢田のはし、しらぬも口おしきに、
まして辛崎の松は
遠目がれの沙汰にも及ばず。

鮒好はしらじ堅田の鴈の聲　桐之

星崎や天の河原の波の花　尾城 獨卜

風さはる小松すゞむし糸鹿山　秋之坊

倶利伽羅やからくれなゐに散栬　従吾

落栗や鬼にも逢ず大江山　雨青

雜躰

芋の葉に露ちる茶宇の袴哉　溫故

行脚の法師に
わかれて

草苅のまだ夜はふかき月夜哉　長之

菊の香の座敷に殘る反古哉　長緒

魚釣や暮合おしむ水の月　ツルガ 何悦

月あれば酒あり味噌もちとにしき　秋之坊

旅行

早稻餅の音や出馬の乘ぢから　輕舟

草苅笛冬之部

華鳥

茶の花や我日の本のちやの花　支考
笹垣のどちらに啼ぞみそさゞゐ　去來
茶の花に餌さしの笠や川むかひ　水音
忽然と後にありてみそさゞゐ　角呂
茶の花に寺はたふとし油あげ　吾仲
金持の家はわすれてみそさゞゐ　北枝
茶の花の香や冬枯の興聖寺　許六
揖小木に啼鳥ならばみそさゞゐ　從吾
茶の花の時や名もなき夕日山　牧童
鷦鷯啼や在郷のあるき神　布留
茶の花や白衣の僧の朝寐良　昨嚢
誰やらが親仁もあれよみそさゞゐ　胡全
朝霜の花も奥あり茶の木原　去來
今降た雪のほこりやみそさゞゐ　嵐青
茶の花や礎殘る寺屋敷　輕舟

みそさゞゐ打かぶせたる茶糟哉　木導
茶の花やびうと風吹松の間　左岫
節季ゝの拍子で來たり鷦鷯　許六
ちやの花や何となりとも咲合點　巴兮
味噌部屋に我を啼也みそさゞゐ　京洗柳
茶の花や蝶の心に小六月　長緒
朝市や先ひすらこき鷦鷯　昨嚢
茶の花や烟行あふ里ならび　山隣
みそさゞゐ馬の背中やつたひ道　万子
最一里ちやの花白き泊り哉　烏水
なでくべむ木葉の中のみそさゞゐ　ミノ普石
茶の花に川越す馬の寒さ哉　一點
人にしてあのはたらきをみそさゞゐ　林紅
火燵にもあたらでせはしみそさゞゐ　未允
雪の日に最ひとつ來いよ鷦鷯　東子
巾着に入て啼せむみそさゞゐ　南里
啼形のちと塩からし鷦鷯　烏水

花

編笠は今時さむし歸り花　吾仲
山人の笠に夕日やかへりばな　（京）蒙野
酒くさし屋敷隣のかへり花　（府中）指柳
そくさいな祖父のおぼえや歸花　輕舟
ことし程歸花咲年はなし　從吾

おなじく

箸鷹の鳥架にちかし枇杷の花　幽琴
鳥どもの出ては這入やびわの花　文砌
しばられて小僧さむいか枇杷の花　林陰

おなじく

山茶花をながめてねばし碁の相手　秋之坊
延〱て山茶花見たる灸かな　林陰
山茶花に茶をはなれたる茶人哉　北枝
山茶花や雪にてる日の薄あかし　文砌
山茶花や椽に雪吹の足のあと　魚素

おなじく

水仙にあかい花なし小さかづき　柳士
水仙に墨な飛せそ青疊　南里
起〱に水仙見るや夢あはせ　（岩瀬）留水

少年の墓をとぶらふ。

水仙に面かげさむし墓の松　林紅
雪霜に笑ひかゝるや水仙花　（富山）雲車
白雪の水にそだつや水仙花　東賀
水仙や藪の付たる賣屋敷　浪化

鳥

笠に吹風の音也濱ちどり　長緒
月影や薄墨色にむら鵆　八紫
物の具の音かと寒し村ちどり　支考
聲さむき千鳥の痩や水かゞみ　鳥水
寒さうにふるうてなけや川鵆　東賀
あら磯や波と千鳥の入ちがひ　八十
いそがしと千鳥啼也濱の市　文砌

おなじく

鷹の羽の雪や蹴さがす松の中　支考
風にひらりと白し鷹の腹　從吾

木がらしや岨に落たる鷹の鈴　巴兮

開炉

炉びらきやどちらに寐ても壁の際　桐之

炉開のこゝはおやぢの柱哉　雨青

時雨

ありやうは純子に寐たし初時雨　支考

ひよ鳥も上戸の名あり初時雨　從吾

ざゞんざや猶濱松にはつしぐれ　北枝

さし足をわすれて闇の時雨哉　湖南 正秀

から笠の上に月すむ時雨哉　闌雪

澁柿に合點させたるしぐれ哉　素洗

串柿の干かげむ如何村時雨　僧 義靜

しぐるゝや綱をひかえて流し抄　水音

旅ならば亭主もあらん夕時雨　万子

氣みじかな人のこゝろや一時雨　ミノ 正勝

十夜

分別は参てちがふ十夜かな　遲動

極樂とおもへど寒き十夜哉　有磯 風絮

月影はたのまず彌陀の十夜哉　只帥

鷄頭もけふは笠ぬぐ十夜哉　賦裝

血脉を蕎麥粉にかゆる十夜哉　半綾

溫飩屋できけば十夜のうどん哉　北枝

大根引

久〲で野に出る馬や大根引　浪化

伊吹には雪こそ見ゆれ大根引　支考

むす子にはいつかかゝらむ大根引　牧童

大根引足のはこびや土俵入　箕十

鷄頭に庭は秋也大根引　播東

大根引土のつきけり門ばしら　許六

麥蒔

麥蒔やまだひよ鳥の啼やまず　難波 休計

麥蒔の肱に袖なき寒さ哉　長緒

麥を蒔人やまさしく虹の中　梅子

麥蒔もおしむや霜の菊畠　梅扇

鍬に笠きせて麥蒔日和哉　魚素

枯野

葛の葉は先に立たる枯野哉　路青

口とらぬ馬もたゞ行枯野哉　桐之

病中吟

手にさはる骨や枯野ゝ草枕　(亡人)夕湖

野も山もすゝき〳〵と枯にけり　胡仝

凩

木がらしや扶持方(ふちかた)渡す藏の前　宜作

木がらしもふけや相手は唐がらし　支考

あきの坊を さぶらふに留守也。

凩の置て行たる庵哉　巴兮

凩のわづかに青し麥畠　方竪

落葉

凬きかぬ山は木の葉の更になし　杉凬

落葉に門をひらけば鳥哉　北枝

參錢の音まれ〳〵に落葉哉　支考

凬も木も合點の上の落葉哉　山隣

一桶の提水に朝腹を かゝゆる草庵ありて

水汲で來れば道〳〵落葉哉　遠近

いとゞ日のみじかいやうに落葉哉　牧童

夷講

乞食に精進はなしゑびす講　支考

十露盤もけふは枕や惠比須講　(ヒゴ)乚明

來年と申も遠しゑびす講　楚桃

いにざまに雪駄の時宜や夷講　(大津)千那

火燵 附火鉢

菓子盆の底あたゝまる火燵哉　桐之

行灯を横に直して火燵かな　(有磯)胡桃

不機嫌な日はつゝはふて(這)火燵哉　巴兮

談合も冷行夜半の火燵哉　從吾

そこにある物もとられず火燵哉　宜作

小便におもひ切たるこたつ哉　枝東

されば野郎のなめ過たるに、地若衆のあまえたるは、いづれにか侍らん。

御器量の蒲團喰はゆる火燵哉　林紅

千石の手の筋見出す火鉢哉　野紅

看經の袂あぶなき火鉢哉　野棠

化さうな火桶を祖父の相手哉　意程

花鳥もこゝにおさまる火桶哉　牧童

冬籠

摺小木の細工もはてず冬籠　芦文

爰かけばかしこもかゆし冬籠　鳥水

狸にはならでけふとし冬籠　雨青

芦の葉の鷺とすくまむ冬籠　支考

俳諧に文字の數すくなければ、序哥の躰トいふ物なし。去年の冬籠にかく申たるは、すくむといはむばかり、芦の葉の鷺に用なければ、是たゞ序歌の躰にやあらむと、東花坊物がたりありしが、誠にさる事やあらんと此集に評しける也。

紙子

千石はあたまに兀て紙子哉　吾仲

茶を汲も又騒動な紙子哉　福井 秋之坊

膝たゝく拍子に居る紙子哉　福井 葦吹

衾

淺茅生に衾ゆかしや硯箱　濫吹

ごそつきて又おもしろき衾哉　宇白

十郎が五郎案ずるふすま哉　温故

生海鼠

腹たてる人にぬめくるなまこ哉　支考

酢にあふて骨あるやうななまこ哉　竹紫

やゝありて酒をもて來る生海鼠哉　牧童

寒さかなといふ事な

酒の名のみぞれは宵の寒さ哉　筑前 沙明

澁柿にきつと日のさす寒かな　北枝

面白ふ屏風のゆがむさむさ哉　福井 和木

板の間に錢つき捨しさむさ哉　麼房

十文が炭からげたる寒さ哉　童

摺鉢の音のちら〳〵きこえて、さろゝのかまぼこにまぎれたるもおかしきに、戸のたて合のおろそかに、雨氣の空の打けぶりたる時は、よき人の住居のうらやまし。

宮方は喰物遠きさむさ哉　宇白

紙子ふむで温飩に似たも寒さ哉　愚恕
見て居れば米も搗たき寒さ哉　秋之坊
餅をまつ鼠がへしのさむさ哉　雨青

雪

初雪に来る人嬉し窓の竹　四睡
初雪や窓の朝日に鳥の影　牧童
はつ雪や一村かけるはなれ馬　只艸
松風のはりあひぬくや今朝の雪　魚津 秋幽
かる餅の宿は口おし松の雪　敦賀 佳木
簑笠の雪こぼし行酒屋哉　丈紅
機織の窓に雪ちる茶事哉　諷之
竹の雪くゞりありくや豆腐賣　肥後 挽夷
摺鉢の隣も遠し竹の雪　府中 桃容
傘のいくつ過行雪の暮　北枝
是もので歸るや雪の小傘　芦文

此雪のいかゞさいへる
人の文の返しに

踏なとてあるかにやならぬ雪見哉　林陰

柴の戸の寐言や雪に茶雑水　箕十
向上な乞食のかほや雪の暮　李由

冬の月

熊笹の光きはどし冬の月　雨青
殘る葉を鳥かとも見む冬の月　一點
きら〳〵とへげるやう也冬の月　意程

佛名

佛名や極樂もかく庭の雪　支考
翠簾の灯のこぼれてさむし御佛名　浪化

歳暮

鰤の大津どまりや明日は春　涼菟
啄木も師走になりぬ暮の鐘　十丈

伏見の里な
過るさて

つほ〳〵のとなりかくなり年の暮　諷竹
人を見てたのしめさても年の暮　北枝

旅より歸りて

笠ぬげば都は年の暮てあり　京 轍士

明暮の二字を一字や年の暮　従吾

雜水の師走はこらへ袋かな　闇如

干鮭で我子をたゝく師走哉　(伊丹)馬櫻

都にも師走かあゝと啼からす　支考

我もあの人の境界に三日なりて死たしさは、年の暮の言葉にして、まして下より上をねがひ、上より下をねがふ。いづれにても、をのれ〳〵がたのしみをしらぬ人ならん。

大としや梅咲藪の道心者　半綾

しら〳〵し白髮あたまに年の市　素洗

楪葉(ゆづりは)を杵に小附やとしの市　隆村

例の野亭に寄來りて
先獻立の筆をとる。

年忘若菜もちかし蕪汁　万子

鰒汁の白髮めでたし年忘　桃妖

節分の夜の
鬼をあはれむ。

鬼もさぞ門はあられに豆の音　和丈

豆うてば鬼も裸にふどし哉　牧童

名所

初雪や柿に粉のふく伊吹山　許六

凩に鷹の古巣や彌彦山　汀芦

餅搗にさぞや都の音羽山　桐之

都のぼりのよろづうゐ(初)〳〵數にまざ〳〵しき事を、人にたづねむも心ぐろしく、さは(問)で見ざらんは又さら(更)也。わら草履のあたらしく、手拭ねぢて腰にさげたるは、まさしき田舍人なりさ、そこなる人の見置たるこそ口をしけれ。

筏士にとはでも峯は嵐山　従吾

おもしろき果や生野(いくの)ゝ枯薄　雨青

幸若が愛智川わたれば鳴衛　北枝

辛崎へ梶とり直すちどり哉　布留

二の汁の鴨川かけて水菜哉　支考

雜躰

大豆小豆小坊主さむきなら茶哉　万子

俳諧に冬來て啼や茶づけ鳥　作者しらず

深川の草庵にありて、年たむかふる夜、人〳〵掛乞の句あまたいひ捨たるに、先師の茶話に、掛乞は冬の季しかるべし。つなぬきの音さえて小挑灯の影いそがしきは、彼が本情にして、よのつれの掛乞おかしからず、夜着・ふさん(蒲團)・水風呂の類ならば、發句にして冬の雜躰ならんさ。

掛乞や猫の啼居る臺所　支考

行灯の四角にさむしぬぐひ板　圓解

細工繪かける人の圓き物せむさて、茶碗伏せたるは、定規のひづみたらんも心もさなし。

蒲團着て寐た繪はやすし我かゝむ　牧童

冴て來る鐘の響や夜着の上　福井 路走

おかしき栞の月に一夜あるべき事ありて、我もたびね(旅寢)のこゝちながら、人にはやゝ亭主めかされて

ない袖はふられず客に蒲團哉　從吾

かへし

夜着かけてつらき袖あり置火燵　北枝

京寺町二條上ル丁
井筒屋庄兵衛板

菊の香

風國撰

菊の香

はせを庵の先生、一日門人に對せられていはく、今の風躰を以テ、故人のいたされしところを見るに、その趣向・作意すでに、もとむるにたやすし。またわれ〳〵が今もてあそびて、情志をたのしましむるの堺も亦、さぞしか(然)なりゆくべし。後世何者か出て、いかなるあたらし(新)みをやさゝくり出すべし。我は只來者をおそることばかりにぞ。わが蕉翁の道は、あたらしみにおしうつる處に眼目をはなさず。風骨をつよくし、しかも其味のいとほそ〳〵と、京すじのやうに、その道を極るに、至切なるといふ處を識得(しりえ)がたくなんとおもふ(思)にてこそ。またあら〳〵しき集などを見るニ、たがひ(違)あるもうちすてゝ辨ぜざるは、風雅をいたづらにするの罪をまぬかれがたしと。吾初憚に筆を入んとするに、東西の書中に見えし佳句をつらねて、校考の冠とし侍りぬ。

元祿十丁丑重陽　風國

菊の香

あきの部

くらがり峠にて

菊の香にくらがり登る節句かな　はせを

此句、菊の香やならにはふるき佛達といへる同日の吟なり。

はつあきをもてなす物や燕の羽　惟然

盂蘭盆(うらぼん)をそさうな皃で念佛かな　イガ万乎

三日月やまだ稲の穂の出そろはず　越ヤ十丈

白河のさゝの童ならん、花うる聲のしければ

穐來ぬと桔梗刈萱賣に梟　風國

あさがほや夜は葎(むぐら)のばくち宿　去來

七夕は七ゆふだちの仕廻かな　彦根李由

山の井や猿もあぐらを星むかえ　豊後日田朱拙

七夕やまだ越後路のはいり初　惟然

栗畑に壘をしかん星むかえ　尾州捨石

雨雲の遠いから見る花火かな　イガ てう女
かた衣の覗けばつまる燈籠かな　イガ 杜若
この人は何を仕事に躍かな　おなじく 近之
さびしさや飛鳥井殿にちる柳　壺中
あき風や誰にかみつく栗のいが　豊後日田 幽泉
草の萩をくや殘暑の土ほこり　加州 北枝
釣竿をとり置て見んそばの花　風國
上京や繪行器をうる足ほこり　姫路 千山
手がたればせつ〳〵なぶる瓢かな　イガ 我峯
たふとがる彼岸のいろや粔園子　京 芷孚
柴に撰る栗や松葉や笹交り　イガ 射江
おもふさま藥をほしたに野分かな　ヲハリ 松星
稻妻のかきまぜて行やみよかな　去來
この盆はとりのこされて穗蓼かな　風國
だき起す雨の薄のみだれかな　イガ 苔蘇
夏菊の照殘りてやあきの露　同 雪芝
名月や晝見ぬ形の松が出る　イガ少年 花幸
松茸を嗅出され梟月の客　京 吾仲

田も畑も見て來て月は書院かな　ヲハリ 左次
新月や一枚舖のかたさがり　ゼヾ 野徑
名月や廣きざしきの二方椽　ゼヾ 昌房
見處は松のかしらぞけふの月　ゼヾ 游刀
名月や川はあさみの底光り　ゼヾ 探芝
手をあげて雲をかゝゆる月見かな　イガ 陽和
情出すや月の名ごりをなくいとゞ　ゼヾ 正秀
木まくらにはなれ兼てぞ月見かな　風國

象潟にて

名月や青み過たるうすみいろ　惟然

もゝ嶋の浦は、村上近ゝ處にて、有明のうらと聞ば

月になくあれは千鳥か磯のかぜ　仝

羽黒山に僧正行尊の名ありけるに、人ゝ案内せられて

豆もはやこなすと見ればおどろかな　仝
時を今渡るや鳥の羽黒山　仝

湯殿山にて

日のにほひいたゞく磯の寒さかな　おなじく

筑後ノ國ある人の許にて

何だんの米で仕廻ぞ菊の客　朱拙

木づたふて穴熊出る熟柿かな　丈中

鳫鴨の落着やすし早稲のあと　幽泉

初雁や良もちあぐる茶湯客　風國

幸寫山に登りて

秋の日の入やおり坂十八町　千山

行あきや行燈くらきさがの町　瓢竹

鳴鳴て花喪のおくは何もなし　露川

初蟬校考

名のりのたがひ・衍字・誤字なべて圏點を加ゆ。四季是にならへ。

手拭のかつぎやうにて躍かな　風。睡。

鈴鹿の麓に宿して

のかくとしらね梢の月見かな　猿雖

鳩吹やよいとわるいを聞くらす　托中

またいつと寄。占のはたや秋のかぜ　惟然

冬の部

初雪や雀の扶持の小土器　其角

初雪や植こみ退て松たてむ　卓袋

雪の客おもひ出さば誰か出む　土芳

節とんで雪にあかるし竹障子　車來

淡雪やたまりかゝれば日がくるゝ　可桀

五十師川舟中

朝霜や五十師の䱜のほりにつく　風國

ほだの火やあたゝかになくきりくす　露川

族の屋の次の火燵や柴の熾　猿雖

同炉の對客

なま煮へを鈍といふべし鈍汁　其角

かれ野にも姿は例のすゝきかな　無筆

こがらしに道いそぎてや頰つゝみ　幽泉

こがらしにふりむく鷺の一羽かな　朱拙

度くのしぐれや笹のぬれつひつ　東推

あふさかは草鞋のうるゝしぐれかな　風国
かた袖をひかで戸立るしぐれかな　十丈
寝藪に茜根干たる小春かな　ヲハリ　衣吹
黒土にふみくだく音霜ばしら　イガ　祐甫
觜に目のあぶなさや並ぶ鴨　杜若

丹後の國、九世戸ニ出テ橋立ヲ詠る。

橋立の松をつなぐやむら千鳥　大津　梅主
鷹の目の枯野にすはるあらしかな　丈草
紅梅や咲あふせたる寒のあき　イガ　橋木
かたはらもいたむ簀の戸や冬の月　風國
掛聲で松きる旦のつらゝかな　水札
冬ごもり目の草臥んあかりまど　朱拙
墨染に眉の毛ながし冬籠り　去來

初せみ校考

吹あらしあらしと今は山やおもふ
行あかつきのねざめなりしを。と
いふを誦して

山やおもふ紙帳の中の置火燵　丈草

松賣とあるいて見しや年忘れ　近之
節に[著]なふ中間殿にかくれ梟[兒]　共角
くもり晴まづはあられのもやうかな　望翠
風の吹のばしたりふとん張　仙杖
鋸で招て見るや炭だはら　荻子。

春の部

花ぐもり田に[螺]しのあとや水の底　丈草

金の岸にいたるべしとうたひ候。
一切稱經に金岸の字見えず。みな
渡竿さゝでもわたると、うたひは
侭ば、こがれと岸にいたるべし成
べしと、問答するに

わたし船武士の只のる彼岸かな　共角
正月もまだすゝくさしねこの戀　露川

よしのにて

けふといふ今日此花のあたゝかさ　惟然

おなじく

花に来て足かはゆがるよしの山　東武 野坡

ものよみや花ぞひらくる一葉ッヽ　大津あま 智月

順禮の棒をはなさぬ花見かな　李山

ひがし山の花ざかりなる比、遊行しけるに、片輪車もむかしをしのぶばかりのそめ小袖、ぬり笠の内に、髮ゆひなせゑ風情の今めかずして、たゞ世を耻て、身を賤しくは今さらすてがたきすがたにぞ見ゆ。はやつる〳〵と獨手を離れて走れる兒に、箔のつる龜も處〳〵にのこり、さもよごれし産衣着せたるを先にたて、花あるかたへとあいをなしツヽ、おもむろにして行梟。其姿なんぞ、花に出るをほいさは思ふまじ。こゝろよく此兒を歩ましめんがためなるべし。子をもたぬ人は、此あはれはしるまじく、ひたすら感をもよふし侍りぬ。佐野のつねよが妻か・朱買臣がつまにてはなからんさ、しばし行をさゞめて見送る。

笠のはのあらはれつうせつ花の中　風國

高濱の花も動くやはしり船　豊前中津 眠山

水口ニて廿年を經て、故人にあふ。

命二ッ中に活たる櫻かな　芭蕉

此句は貞享の作なり。野ざらし記行に出ッ。其比の句、初蟬ニも數多出せり。すべて翁の句多ゝの撰集にさゞまりし中ニ、天和・貞享の比の句あり。最近來の吟多し。其時代の新古をしらざれば、翁の變化流行の次第をしりがたからん。翁の句なればさて、むかしの流行いたされし跡をあらためず。今の鑑さなさば、却ッ血脈を得がたし。その流行いたされし微意を得て、それよりこそ先翟未發の場に至り、千載不易の跡もまた堅固なるべし。今よりはじめて、翁のあさをしした

ふて門に入ルの徒は、新古の分別に意を付べき事ならし。他門の集に拾ひ入しは、眞にあらざるもありぬ。盡ク信レ書不レ如レ無レ書といふの古語、ありがたくぞ覺へ侍りぬ。

うさき人は折にこそよれ
使は來たり馬に鞍をけ
假ニ西行の詞ニ難ニ賴政の詠ヲ

倶ぶれも折にこそよれ初櫻　去來
散花や鳥もおどろく琴の塵　芭蕉
朝がすみ須磨をみてとる舟の上　クロサキ少年 助童
芹つみやむかひへまはる鴴のあと　十丈
春雨や芦間の蟹も小陰とる　ミノ 如行
春雨や手ちかうなりし山のはな　朱拙

船中の吟

半窓の家の高さも春の闇　クロサキ 染雫
菜の花のいろをぬすみし胡蝶かな　さか田夫 爲有
菜の花やまだせどのゝが一さかり　越中 蘭水

嵐山にて

菜のはなのとり廻したる都かな　如行
山吹や羽織のならぶはしの上　イセ 團友
竹と見て鶯乘たり竹虎落　其角
鶯や楠の千枝にとりかゝり　クロサキ 沙明
谷川やうぐひすないて鮠二寸　水札
鶯の口もとまふるからすかな　イガ 雪芝

北野の南、内野はいにしへの戰場也。天もくもらば鬼も哭すべしと、おもひつゞけつゝ過るさて

うぐひすの問答でなく内野かな　風國
陽炎をけして羽をのす鳥かな　ヲハリ 和泉
かげろふに隣の茶さへ澄し梟　丈草
眞上よりふん落したる雲雀かな　ヲハリ 素覽
梅が香や手から離れて花二ッ　イガ 万乎
なはしろの毛ぬきにかゝる青ミかな　幽泉
なはしろに去年の案山子と見えニ梟　三州新城 白雪
さし傘や薪の夜の蟻通し　其角

ぜんまいもうるみ出るや山雫　ぶんごヒタ 若芝
しろ魚や雪の雫のしほ堺　おなじく 釣壺
夕暮や鍬もそこらに菊の畠　イガ 荻子
淋しくも竹椽に干蕨かな　おなじく 蛙足
餅花と弄られて居るつゝじかな　イガ 投印
親にらむひらめをふまん塩干かな　其角
青柳にのまるゝひなの屏風かな　風國
糸柳落るにちかき蛙かな　爲有
もつれては柳にはいる持病かな　イガ 配力
酒いれぬ寺にしだるゝ柳かな　水札
暮がたや柳も雲にまぎれ込　イガ 氷固
野すゞめの來てぶらさがる柳かな　ヲハリ 水杖
いつの日の風に落たぞ鹿の角　猿雖
行春の盆に鮓なの雫かな　吾仲
炉ふさぎや鉢にもえたつ小きりしま　沙明

豊前中津醫師支貞の亭にて

百草や拂はぬまどのうらゝかさ　朱拙

越中高岡十丈亭にて

椿迄ちるにとなみの山の雪　北枝

はつせみ校考

寒けれど梅はさかねばならぬかよ。　猿雖
陽炎にとりにがしたる雀かな　李山

ふしみ(伏見)の任口上人にあふて

我衣にふしみの桃の雫せよ　芭蕉
藪。入。や牛合點して大原まで　其角
木の若芽すつとしごくや馬護(まご)の鞭　雪芝

夏の部

越中に入

ゆり出すみどりの波や麻の風　惟緒
山吹に春をわたして青葉かな　支考

籠ニ山庵ー

こもらばや百日紅のちる日迄　おなじく
あの花になるはあれかや瓜作り　土芳

茶屋の火を見掛て扣くや鶏かな　左次
病人に醫者まつ里のくいなかな　ヲハリ 鼠彈
あけぼのに走る水雞の早さかな　ヲハリ 夾始
手の平で雨をしる夜の水雞哉　犬山 吞水
浮雲のはるれば瓜のさかりかな　風國
ふみこむや早苗時分の道くだり　泥足
虫つかぬいてうによらん郭公　其角
よし野にてあはれうものか郭公　去來
郭公道くさすると人や見む　イガ 風麥
郭公土橋直す村の者　芦角
子規我をたゝせて初音かな　風國
橋をきよろ〳〵見るよ蜀魂　投印
さみだれに龍も登るか軒の雲　ヲハリ 湖雀
白鷺のとんでも暑し町通り　魚人
秋ちかき鉦皷の音や念佛講　京 呂物
竹の子にそるほどうれしむかし椛　ヒコネ 許六
若竹にいにのこりてや四十から　風國
したゝりや花にもたれて杜若　イガ 我峯

此森をはなれぬ夏の鳥かな　さが 野明

月の山にて

雲のみねいくつ崩れて月の山　はせを
海原の波もちいさし雲の峯　豊後日田 也水
城あとは麥のあらしやかんこ鳥　水札
藏の戸を明てうれしゝ晝凉ミ　京 子直
すゞしさや松の古葉をとり盡す　風國
木曾川へ庭はき流すすゞみかな　ミノ 谷水
すゞしさや物いふ聲は爪の小屋　釣壺
川狩やしばし木蔭に立凉ミ　ぶんごヒタ 慧心
あるときは呼掛られて一凉ミ　おなじく 青鷲

曉が家の苦熱をみて

いさかひのあとくれかゝる蚊遣かな　はりま姫路 元灌
紫陽花のしらけ廻るや今朝の雨　越中高岡 溫和
灰小屋をこすりてさがる瓢かな　京 蒙野
いな事につらるゝ河の螢かな　沙明
麥の穂に追かへさるゝ胡蝶かな　女 可南
茶碗やくぐるりは茄子の盛りかな　ぶんごヒタ 宗之

牛買のうしろ手組や花楞　也葉

よたひらが辻にて

三ヶ月に車の音や麥の中　風國

野がらすや夕日にむるゝ麥の中　里千

早乙女の舟をこはがるふけ田かな　机下

夕立や馬とりにがす原の中　可吟

夕立のあとも傘させ柳陰　景明

虫干や大事の松の枝の上　顧丈

加賀山中入湯

こゝもはや馴て幾日ぞ蚤虱　惟然

藪の根やあけてゆり出す茶摘哥　去來

初蟬校考

ほとゝぎすまねくか麥のむら尾花　はせを

目の玉は取て出梟蟬のから。　臥高

尾花澤清風亭にて

すゞしさを我宿にしてねまるなり　はせを

面白うてやがてかなしき鵜船かな　仝

此句晋子が所持の翁の自筆には、

面白うてやがてながるゝ鵜船かな

と侍りぬるよし

晋子が申こしぬ。

去來贈渉川書なら若葉に載られたり。渉川は其角が別號なり。去來贈其角書と良だがひあり。今校考のついでに、其角がうら若葉に載たるを茲に取て載す。後に去來が正文をしるし侍る。

贈晋渉川先生書

去來問、師の風雅見及ぶところ、みなし栗よりこのかたしば〳〵變じて、門人其流に浴せんことを願へり。我是を古翁に聞り、句に千歳不易・一時流行の兩端あり、不易をしる人は、流行にうつらずといふ事なし。一時に秀たるものは、口質の時にあへるのみにて、他日の流行にいたりては、一歩もあゆむ事あたはず。退ておもふに師は蕉門の高弟也。翁の吟跡にひとしからざること、諸生のまよひ同門の恨少からずと。翁の曰、凡天下

に師たるものは、先已れが形位を定めざれば人趨くに所なし。晋が句躰の予と等からざる故にして、人をすゝましめたり。又我老吟を甘なふ人ゝ、雲煙の風に變じて、跡なからん事を悦べる狂客なり。ともに風雅の神をしらば、晋が風興をとる事可也。來曰、翁の言かへすべからず。然りといへども、俳諧はあたらしみを以て命とす。水雪のいさぎよきも止ッてうごかざる時は、汚穢をなせり。今日の諸生の爲に流行をとゞめて、古格を改めずんば、晋子を劍の菜刀なりとせん。翁の曰、晋今わがならはしを得ずといふとも、行末そこばくの風流を啗出さんこと鏡の影たり。去來曰、さる事有、たゞ是を待に年月あらん事を歎くのみと、つぶやき退ぬ。翁なくなり給ひて、むなしく四とせの春秋をつめり。今先生と東西雲裏の恨みをいだくといへども、いまだ我松-栢霜後のよはひをとぶけり。幸にうらわかばの時に逢ぬるをおもてとして、古翁の言を起しぬ。先生これを案下にさみする事なかれ。

丁丑仲夏初

贈其角先生書　校考

故翁奥羽の行脚より都へ越給ひける比、當門の誹諧已に一變す。我が輩、笈を幻住庵に荷ひ、棒を落柿舍に受て、略そのおもむきを得たり。ひさご・さるみの是也。其後又一ッの新風を起さる。炭俵・續猿是也。去來問曰、師の風雅見及處、次韻にあらたまり、みなしぐりにうつりてよりこのかた、しば〳〵變じて門人その流行に浴せん事をおもへり。我是を聞けり。句に千歳不易のすがた有、一時流行のすがた有、此を兩端におしへ給へども、その本一なり。一なるは共に風雅の誠をとればなり。不易の句を知らざれば本立かたく、流行の句を學びざれば風あらたならず。能不易をしる人は、往としておしうつらずといふ事なし。たま〳〵一時の流行に秀たるものは、たゞ己が口質の時に逢のみにて、他日流行の場にいたりて、一歩もあゆむ事あたはずと。退ておもふに、其角子は力の行事あたはざる者にあら

ず。且、才丸・一晶が輩のごとく、己が管見に息づきて道をかぎり、師を捨るたぐひにあらず。みづから及べからざる事は、書に筆し口にいへり。然ども其詠草をかへり見れば、不易の句においては、頗る奇妙を振へり。流行の句にいたりては、近來その赴を失へり。殊に角子は世上の宗匠・蕉門の高弟なり。却而吟跡の師とひとしからざる事、諸生の迷ひ同門の恨少からず。翁曰、汝が言しかり。しかれども凡天下の師たるものは、先己が形位を定めざれは、人おもむく處なし。是角が舊姿をあらためざる故にして、予が流行に誘(さそは)ざる所なり。我老吟に友なへる人ゝは、雲けぶりの風に變ずるが如く、朝々暮々かしこにあらはれ、此に跡なからん事をたのしめる狂客なり。共に風雅の誠をしらば、暫く流行のおなじからざるも又相はけむの便(たより)なるべし。去來曰、師の言かへすべからず。然ども都(すべ)て風は詠にあらはる。本歌といへど代ゝの集の様おなじからず。況や誹諧は、あたらしみを以て命とす。本哥代を以て變べくば、此道年を以て易ふべし。氷雪の清きもとゞまりて不レ動ば、必汚穢を生ぜり。今日諸生のために古格をあらためずといふとも、猶永く此にとゞまらば、我、角を以て釵の栞刀になりたりとせん。翁曰、汝が言愼むべし。角や今我が今日の流行におくるゝとも、行末又そこはくの風流を吐出し來らんもしるべからず。去來曰、さる事有、是を待に歲月あらん事をなげくのみと、つぶやき退きぬ。翁なくなり給ひて、むなしく四とせの春秋をつめり。いま先生と我、東西雲裏の恨をいだけりといへども猶、松-栢霜後の齢をことぶけり。幸に此言を書して案下に贈る。先生是をいかんとし給ふや。

丁丑のさし壬二月の日　　落柿舍嵯峨去來拜

誹和歌

○凡蟬丸より官をつぐ座頭の都
さは、いかにさいはれて

三味線に引てのこりし四ッの緒の　　其角
一ッはめくらの名に成に梟(けう)

◦しからば城とはいかにといふ時

幸になりあがりたる土めくら　　おなじく
城といふ字をかきのぞきせよ

◦中元に

聖靈のいかで此世をすてかねて　　風國
物なりを見にわせる成べし

◦捨子ありとて、一町世話をやく
みて

子を捨てむなしくかへる親の身の　　其角
かね（金）をひらはゞくやしからまし

◦かへし

ひろふ事おもひもよらぬ世の中に　　去來
かね落すべき人のなければ

◦晉子去來問答によりて、市中を
みるに

ふりとけぬ雨に合羽を着あるきて　　風國
かねほしさうに見ゆる人かな

元祿丁丑九月稔日　　京寺町
井ツヽや庄兵衛板

渡鳥集（わたりどりしふ）
夜・晝
去來
卯七
撰

渡鳥集　夜卷

入長崎記

落去來

錦をきて故郷に歸る人は、さたにや及べき。墨の衣の短きに草鞋はきしめ、頭陀修行して父祖の墓の塵うちはらひ、經よみひろげたらんさまは、さすがに尊ときすじも有べし。たゞ長途に垢つける衣裝の上に腰刀よこたへ、あぶつけといふ物鞍坪にくゝり付、笠まぶかに兩足ふらめかし、こゝかしこ案内がほにのゝしり來らんを、産神もいかに口をしと見給ふらん。漸く弟の家にたどり入侍れば、親しきかぎりの悅あへるにぞ、せめてはる〱の風波凌たる甲斐有とは覺らる。凡長崎は日の本に三津の湊ときこゆ。山〱とりかこみたる砌り、戸町西泊の方より潮さし廻り、流一里斗にしてから・やまとの船をとゞめたり。江のうち一の嶋を築て、おらんだといふ國の人を住ましむ。向は水の浦・あくの浦・浦上・稲佐の山並ばえ茂り、辨才天の社有。放火山・無凡山の漢めける、かさかしら・鍋かぶりの鄙びたるもおかし。乾の山の木の間に諏訪大明神の宮居をしめて、此浦人を守り給ふ。三段の石壇・二つの華表、昔見し光にやゝまされり。

　尊とさを京でかたるも諏訪の月

麓の松の森は、天滿宮をあがめ奉りぬ。誠に天みてる御恵みあればにや。所としてまつらずと云事なく、人として崇まずといふ事なし。日見の峠はきのふの跡のしら雲に埋れて、都の空いとゞ遠し。沖はしる舟の上に、帆たけ山は見ゆらんと思ふ物から、愛宕といふ名の戀しく成ぬ。ひんとく坂は田別當にかよひて、肥後・さつまの旅人をすゝむ。小嶋・大浦は秋の氣色ながら、なつかしき梅が崎の匂ひすればにや、丸山の山陰に游女の一里はさだむらん。すべて家富、鄕榮へ、町すじ內外にわかれ、六万の人を住しむれば、寺〱の數さへ多く、折ふしの盆會に照り渡りたる燈籠の火影は、去年みし人も今はた驚くばかり也。

　見し人も孫子になりて墓參

見る事、聞事につけ、旅ねのまくらうちかへし、此文月も

くれんとやすらん。かくて住果べきおもひには有リねど、いつ立出ん空もしらねば、よろづおぼつかなき心にぞ、住習ひ侍りける。

故郷も今はかり寢や渡り鳥

ひゞきほのかに夜の明る月　卯七

大木の榎木一本色づきて　同

かくれまがひもなき御方也　去來

五器皿を仕舞へばいつも晝さがり　同

うちかぶせたる雪前の空　卯七

ウ
うい事は頬腫物のはやりかぜ　同

そなたに人が戀をして居る　來

祭過ギ月は次第に有明に　七

京へ〳〵と時鳥飛　來

百牧の捨も中〳〵おもひ草　七

年は十六智惠は六十　來

前かたの手代小者もうちそろひ　七

きつうふけたる庚申のよさ(夜)　來

石部まで通しの駕籠をいふてきて　七

御食くやれとこゝら中呼フ　來

大分な今日の花見の出様哉　七

東風氣に成て晩はあぶない　來

二
こう〳〵と狐鳴行春の霜　同

殿をはるかに見て野雪隱　七

あたらしき草履草鞋腰につけ　來

ふらりとゞく名月の文　七

女房衆の出ていなれしは去年の秋　來

稻も木綿もはいる最中　七

かき曇り雨は霰とふりかゝる　來

山伏ひとりくれに失(うせ)けり　七

さるほどに荷物もつきて椽の先　來

茶のたばこのといふて約束　七

世の間(なか)は氣勢でやればやりすます　來

やつぱり元のこぬかあきなひ(商)　七

ナ
鴨川や吉田白川しゝが谷　同

比叡の根嵐吹たてゝ行　來

目振ルまい今日は朔日神無月　七

取出して見る物の古びな　來
田舍にて娘そだつる花の陰　同
すゑのたのみのつゝじ山ぶき　七

元祿十一の秋七月九日、長崎にいたり十里亭に宿す。此主は洛の去來にゆかりせられて、文通の風雅に眼をさらし、長崎に卯七持たりさ、翁にいはせたる男也。予此地に來たり、酒にあそばず、肴にもほこらず、門下の風流たれが爲に語らん。

錦襴も純子もいはず月よ哉　支考
　磯まで浪の音ばかり秋　卯七
唐黍の穗づらも高く吹あげて　素行

素行亭興行

三味線に秋まだ若し涼み舟　支考
　西瓜〳〵の橋の夕月　素行
よい宿をさがせば庭に萩咲て　卯七
　むすこの將棊肝のつぶるゝ　去來
晝食はこちで喰ふたる呼使　素民
　雨があがればちと用もあり　鳳叩
ウ
肥後米は石で八十三匁　先放
　夕アの坊は面白ぼん　考
誹諧で隱居の疝氣さたもなし　行
　柿に葡萄に秋は來にけり　七
みわたせば月は法輪嵯峨の寺　來
　うき世めぐりて跡はしら露　民
孫八に聞けば秩父も息才に　叩
　とろゝ數奇かとおもふ出來相　放
惣〳〵が御輿おがみに打明て　筆
　河原ばたけのあるゝ麥の葉　行
鵯も鳩も寐による藪のはな　考

春の小雨の座敷鞠ける　來
二 よその子の覗に來たる雛餝り　七
うそ八百に咄す商人　叩
幸とおぶくいたゞく晝さがり　民
榎の木に陰る門のほし物　考
おか様はいなせてかのに鴫ざらし　放
鐘木の戀を見習ふてやる　七
松坂もこへぬ躍の汗くさき　行
かほはほこりに宵の間の月　民
盆比に吹直したる浦の浪　來
愛宕の坊でちよつと盃　放
虱かと何やらかゆき旅姿　叩
あたまに隙のとれる若衆　行
かんがりと取ひろけたる窓明り　考
まだほつこりとならぬ二月　來
西腰はつぼんだ迄に地主の花　七
かねかり達の春はうかるゝ　叩
うちつゞき治る世こそめでたけれ　民
ことしで丁ど長百になる　放
各五句　筆

元祿八年の秋、西の國旅おもひ立、月に吟じ雲に眠りて、九月一日崎江、十里亭に落つきける。

朝霧の海山こつむ家居かな　惟然
このごろ秋の鰯うり出す　卯七

素行亭

浦人を寐せて海見る月よ哉　去來
渡り仕舞て雁靜也　素行

從二去來一赴レ京

此ごろの空引のべよ渡鳥　卯七
芦間の月の先にたつ旅　去來

送ニ卯七皈ㇾ國

枝〳〵に分るゝ秋や唐がらし　酒堂

草鞋をしめす椽先の露　卯七

影照院は崎陽の辰巳に有。入江みぎりに廻り、小嶋山向に横たふ。吟友支考が、

蕎麥にまた染かはりけん山畠

と聞へしは、秋の比にや來りけん。其年の名殘惜まんと、人〳〵に誘れて

山畠や青み殘して冬構　去來

朝霜寒う村雀啼　素民

そろ〳〵と駕籠の有迄ふみ出して　先放

酒にしたがる饅頭の代　素行

御部屋には四季をうつして月の影　風叩

箔ほどひかる隈篠の露　卯七

ウ なつかしくめがと男鹿のつれ渡る　民

墨の袂ももとが戀かぜ　來

たび〳〵に文のしるしのおとましき　行

寒の入からひたと煩ふ　放

當年も鯨中間のそは〳〵と　七

二介がいやで半介になる　叩

ま壹分付直したき嶋の帶　來

松坂よりはいせに日だより　民

夏切の茶をとりはやす朝の月　放

竹の葉ごしにやねかすか也　行

花のちる比は夜晝雪吹して　叩

春の名殘と京に逗留　七

一折出來ぬれば、物うち喰ひ咄ししこりて、あさつきけんさも謂はず。例の卯七火燵の方位を分ちて、又題を探らしむ。それが中に主の灰つくろひ、先放があたりかれたるもおかしっ櫓の上に眠たる猫をかはらせて、小僧が句をなし、各〳〵其趣を賦す。

東　風叩

折ふしと阿彌陀にむかふ火燵哉

西
火燵でも秋好の宮は此座かや　卯七

南
眞夜半や火燵際迄月のかげ　去來

北
此方は火燵も寒し雪おろし　素行

上
猫出して火燵の上のかざり哉　小僧

中
足あぶる火燵でいつも手鍋哉　素民

角
せり込んで見ばや火燵の人の間　先放

此浦に先師の石碑立なん其處もとめに、かたはらなる山家に行やすらひて

籾摺や日なたしに寄小六月　卯七
かきねをせゝる冬の鶯　野坡

元祿壬午の歳、都にのぼり落柿舍に會す。

梟に數よまれてや村千鳥　先放
海もきこゆるこがらしの月　去來
膝皿のひゆる机を押やりて　支考
おとこ世帶のいま味噌をする　放
松の有ところ〴〵坂のあがりたて　來
合羽たゝめばすゞしかりけり　考
狀箱に髭篭一荷の瓜の色　放
あたりのかゝがよつてついしよう　來
たま〴〵の晝ねに屛風引廻し　考
盆の用意のはしにかはらけ　放
唐黍のこなたは月の葉がくれて　來
あきかぜそよと木に登る猫　考
白壁の目にたつ岡の番所　放
錢一文の念佛聲とき　先師ノ云捨　來
奉公にくるしき木履提まはり　考
日ぐれてのぞく市の賣物　放

此神の衣更着寒き森の花　來
　雪の果とや村がらすなく　考
二藪入の馬と連だつ在郷道　放
　芝居の札にしつた名が有　來
雨の日のほろみだしたるところてん　考
　見事な帶にじばん一まい　放
君はなつ我は淸十郎と冬の來て　來
　その餅つきのあかつきの戀　考
鷄はなく臺所には有明し　放
　いつでも風のある〻白須賀　來
浪人を面白がるもうそのかは　考
　芋名月もやはり饅頭　放
あのごとく萩は錦と咲みだれ　來
　惟喬ばかりうらめしの秋　考
ナ文よんで顏とかほとを見合する　放
　夜はほの〴〵と無緣寺のかね　來
咲初る花に名殘の橋のしも　考
　下向のみちをいそぐ苗代　放

口中に雲雀の聲のはるかなり　來
　此のどけさは京も田舍も　考

風叩が春の氣色見んと、舟さし寄けるに乘て

鶯が人の眞似るか梅ヶ崎　去來
　柳見たてにこちは深堀　風叩
有がたや一盃すれば春めきて　素民
　さきの頭痛を透とわする〻　卯七
うす〴〵と西に出て居る三日の月　素行
　蕎麥のはな咲岡の白妙　先放
歌よみの御守のいほの秋更て　叩
　折〻見ゆる笈の家中衆　來
から尻も足がふらりと邪魔になる　七
　あほうのくせにせい斗のび　民
きる物の形につけても物おもひ　放
　むかしは〴〵さんちやよし原　行
水風呂に二人ヅヽ入組あわせ　來

くはらりとあぐる車戸の音　卯
つかえたる雲を嵐の吹やりて　民
松のあちらを通る公家衆　七
月花にかりの用意の板びさし　行
どうならうやらしれぬ出替　放
二
朝起ておれが數寄にはいかのぼり　風　卯
堤の上のひろき芝はら　來
古の看板出して枝折垣　七
甘ばかりはいとゞうかるゝ　民
てんかうが後は思ひの種となり　放
逢はで死んだら阿波の浪風　行
電の光つめたる閨のうち　來
薄にとるゝ入かたの月　卯
寒うなる秋をよいとはよい衆也　民
一勝殘る蕎麥のあぶなさ　七
ふまえ物せねばとゞかぬ棚の上　行
豆うつ音のよそは節分　放
浮世から鳥の戻る日枝の山　卯

ちと草臥て面白ひみち　來
孫どもの給仕に姥の取はやし　七
又灯燈を筋違に置　民
降らうやら降まいやらと宵の花　放
旅のこゝろも浦山の春　行

送二怒風皈レ國

花鳥をいつの分れやあら莚　卯七
羽織をすつる春の胴中　怒風

先放が別墅

朝〳〵の藥の働きや杜若　去來
客はんなりと夏は來にけり　先放
小包に皆飛乘の支度して　風叩
座敷の體は吸物のだん　素民
月かげに砂のぴかつく八ッ時　卯七
がや〳〵いふて鳫の這寄る　素行

元祿のはじめ都にのぼり、落柹舍を扣ひて

京入や鳥羽の田植の歸る中　去來
うれしとつゝむ初茄子十ヲ　卯七
さはりたる御脇の物をいたゞきて　同
霧立のぼる庭の椽先　七
朝月に鱸分るとどよむ也　同
瘦たる胴をさするやゝ寒　丈艸

ウ

うき戀にわりごもてなす草の上　同
室の游女の年〳〵に減ル　來
ばた〳〵と湯殿の内を吹嵐　七
奥の千手は燈をとぼしけり　艸
立臼を歸しがてらに荷ひ出し　來
蜂にさゝるゝ片頬の腫　七
花咲や跡四角なる大屋敷　艸
種籾おろす水のしづけさ　來
やりくばる山田土産のはりかはご　七
物からかひも宵の雜談　艸
戸障子、の繪もすごう成秋の月　來
露けき裝を腹卷のうへ　七
かたぞきの眞鍮さびて忍卓・　之道
鰯もらひの桶持てまつ　同
山石を道筋たてゝころばかし　七
國は周防のおなご四五人　同
錢賣の腰にさしたる箱秤　琶扣
庭鳥の毛をちらす供べや　同
きる物の裾引のばし丸寢して　七
若菜短氣に涙ぐみけり　道
夕がほの畠隣に立しのび　扣
す駕籠をかきて歸るひだるさ　七
月影に流す伽藍の柱よせ　酒堂

ナ

一息野分あるゝ村雲　車要
双六の簺ふりこぼす草の露　道
舟に淺間を拜む鳥羽浦　堂
笠の雪猪頭になりておしまるゝ　七
むねにたゝみし日蓮の御書　道

折釘の壺歩日出度花ざかり　要
やがて雉子の戸をたゝく見ん　堂

七十二　來六　艸五
道五　扣三　堂三
要二

此一巻は十年あまり昔にて、今様に叶はざらんなれど、其比先師の我が手筋を失なはずと、許し給ひしになつかしく此に記す。

追加

田上山游吟

とぢ薬うつ豆も一夜のよ寒哉　卯七
岸に雀の並ぶあさ月　素鹿
初汐になるやら船のかぶつきて　素行
ふとんの裾に物のつかゆる　風叩
今晩も奈良茶と見へて藍茶碗　先放
乳母が我で持これの内證　錦水
ウ
薪黄の樽に仕替て戻る也　一介
やぶの鵯のつれ〱の聲　風里
立ながら直に御寺の花を見て　素民
此季においた下女のこなるゝ　行
機嫌にて一座の客はいなれけり　鹿
伊駒すゞしうはるゝ青空　七
暮がたは鷺のあつまる大堤　叩
僧のちよこ〱かよふ裏門　放
謂事も先隠密のさたになり　水
籠に入たる千鮮こんにやく　介
明石より初て渡る淡路しま　里
一村雨のうちあぐる月　民
二
秋さむき彼岸の内のつゝみ銀　行
薬の出来ほめて菊の花待　鹿
千石とのぼれば人も人らしき　七
とまりまれなるかんばらの宿　叩
しけとをす空は師走の廿日過　介
島のへりで鵜の物喰ふ　水
家〱もまだ定まらぬむしろ懸　放

一夜〳〵といふて戀する　里

旦那より内儀の顔のうらめしき　民

質の古手が山のやうなる　行

秋風のいせの白子は愛なれや　叩

鱸をつりに連て兄弟　介

捧だけに月は登れど暮の雲　鹿

向ふがなうてわるい店つき　七

聲かけてほつぱなしたる駒の口　里

かねのきこゆる黒谷の山　民

ふだん見る松の木の間に花咲て　水

人は哥よむ鳥は囀る　放

各同員

名二二卷一説

物にたよりて性情を樂む事、專ら吟詠の道なり。其道またあまたなる中に、俳道殊にやはらかにして情を寫し、興を催すことつきず。此比崎江の卯七子、渡鳥集を撰びて、晝夜の二卷となしぬ。是をよるひるとかさねんや。將タ晝夜と並べんや。たゞ渡鳥のとし〳〵行廻り、己が初おはりをしらざるがごとく、撰者の心もかくおもふなるべし。されば呉燕・楚鴈・蜀魂・仙鶴のたま〳〵有が中に、秋來る鳥のおほく侍れば、其名を當季にさだめられて、實は春夏冬枯の時にも、猶たへざる物ならんかし

湖南竹節堂正秀漫書

京寺町　井筒屋庄兵衛板行

渡鳥集 書卷 秋部

贈二芭蕉翁御句一文

十里亭の何がし、撰集の望ミ有。其名を渡り鳥といふなるよし、先師に此句有て、西花坊が笈の中に久しくかくし置ける。此度此名の相あへる事の尊さければ、贈りて此集の歡(よろこび)に備へける。

日にかゝる雲やしばしのわたりどり

其序にみづからの句も申侍る。

柴賣に連てや市の渡り鳥　支考

雁金や一皐かけてわたり鳥　史邦

雲の根を押て出るや渡り鳴　浪花(化)

先鳥の渡りつけてや雲のみち　素民

秋風や浪をしのぎて雲に鳥　素行

晴になる沖のもやうや渡鳥　風叩

地につゞく沖の夜明や渡り鳥　野明

鶴なくやひゞきの灘を渡り口　荒雀

唐鳥の渡る日當や富士の山　魯町

一(ひとつ)羽にかはすや峯の渡り鳥　卯七

朝あらし(嵐)あたまの上を渡り鳥　去來

戸をたつる空もいそがし渡り鳥　先放

たそがれや雀もつれて渡り鳥　牡年

粟稗と分て落やわたり鳥　丹山

粟の穂にあそべ小鳥の渡りかけ　北枝

かけひきの葉武者もかくや渡鳥　繼(從)吾

山鼻や渡りつきたる鳥の聲　丈艸

さたなしに渡りて居るか四十雀　田上尼

御林や日高にとまる渡り鳥　正秀

雁がねの竿に成時猶さびし　去來

かりがねのしろさだまらぬとよみ哉　魯町

秋らしき様子出來けり蚊屋の外　苔蘇

あき來るや人のこゝろも打むいて　福翁

海山の心くばりやけさの秋　風國

面白し秋を待えて馬の上　求聽

立山下、魯町がもとにて

山本や鳥入來る星迎へ　去來

七夕やつゞらをかゝる明日の旅　斜嶺

七夕や幾瀬もすはる汐びかり　半朱

中ふとに流れてつらし天の河　千川

夕がほの行衛もしろし天の河　野紅

黍の葉にかけろふ軒や玉まつり　洒堂

送り火の山にのぼるや家の數　文艸

辻踊一崩して丸ふなる　釣壺

支考なやごして、雪の淡路嶋の圖を望みけるに、山は饅頭と云物のごとく、水は蚯蚓に似たり。畫を默とさして雪と名づけ、西花坊が一世一幅となん。其禮に、

燒酒に明日の望みやへちま汁　素行

朝皃のはえあふ紅粉のねまき哉　春子

蕣の開き揃ふや裸にら　鐵幽

蕣のつぼみて渡す芙蓉哉　卯七

夕皃の身をかためけり秋のかぜ　臥高

山畑や日景うち散る秋のかぜ　先放

網かけて臂吹せけりあきの風　半朱

すれ〴〵の雲のいろめや秋の風　林下

それを此茄子の蓋に萩の花　左次

あきもはや薄見よせて穗に出る　荻子

さびしさの皆穗に出たるすゝき哉　厚爲

送二去來一

朝風やまて荷にさはる花薄　如叟

おのが尾の聲につれたる鶉哉　探竿

我が數寄な粟津の原に鳴鶉　支考

粟の穗はあとでふらつく嵐哉　素民

はしり穗の朝陰清し久我繩手　卯七

早苗の香や取越す家の茶湯事　桐之

こけなりに人待がほの案山子哉　正秀

起さますもそつと長し鹿の足　いがの人の句

月しろの拍子に立や鹿のあし　潘川

女鹿つれてたゝずむ峠の月よ哉　野明

岩鼻に立あがりてや鹿の聲　泰淡

小男鹿やかしらかたげて瀧の音　浪化

かのしゝの多さに出るや晝のつじ　牡年

食堂のかねを聞しる男鹿哉　許六

病床

虫のねの中に咳出す寝覺哉　丈艸

虫の音のほどけてはつと薄哉　桐水

定まらぬ朝の曇りやきりぎりす　梅

きりぎりす鳴落したる日景哉　素行

汐風の中より百舌の高ね哉　惟然

秋の日のうしろに鳴や鶉の聲　風叩

湯の山や夫婦白髪の薬ほり　白笑

風雲や分別いそぐ蕎麥畠　思謹

ひけらかす口にもいらずそばの花　魯九

先放なあゝの浦に訪

八月や潮のさばきの山かづら　去来

女結に鱸釣たるやみよ哉　素行

相撲取待日になるや濱の市　卯七

さかやきを皆すりたてゝ駒迎　蘭園

目にかゝる在所の山や月の晴　配力

月のよの夜明にうつる野原哉　水札

戸を明て月のならしや芝の上　丈艸

下刈や月の場とりの小松原　爲有

待宵の月に打出す鐘木哉　素民

長崎より田上山に旅寢移しける比、

卯七・素行に訪れて、共三句

名月やたがみにせまる旅ごゝろ　去来

名月の麓を呼や茂木肴　卯七

伏見といふて山家も月見哉　素行

名月や晝より高きならのしやか　桃妖

蒹葭屋をさがして見ばや月の友　半残

十六夜や宿くもつまりて峯の月　先放

いざよひや月をたづぬる峯並び　風叩

電や足にもつるゝ酒の酔　先放

電やとつくり提て行かゝる　蘭國
電のめくるや藪の音もせず　丹山
いなづまのわり入る松のひゞき哉　孫七

太宰府に詣ける途にて

鶴小屋にかけて稲葉の入日哉　卯七
稲かぶの中に照込む帆かけ哉　汀芦
落水の田をはなれ行夜寒哉　柿川
木枕にすゞしの蚊屋のよ寒哉　厚爲
山陰の藪うつりして砧哉　素行
楷(かぢ)の葉のおさへて遠き砧哉　單才
鶏頭の傍にゐじりて砧哉　砂笠

千句興行有ける里神樂に

錦積む町も興あり里神樂　卯七
花の端や奈良で開くる菊の花　東耕
秋も今里にさがるや菊の花　宇鹿
菊咲て宿は曇るがおもしろい　颯聲
戸袋の板の透間やきくの花　李山
さし寄に酢壺すゑけり菊畠　素民

薄濁る酒やことしの菊の花　濫吹
同じ香に菊や匂ひて色がはり　春子
菊の香をぬすみておかん菊の月　安重
大空にきほひうつすや菊の霜　卯七
行秋のあとやふらつく菊の花　杜若
力なく菊につゝまるばせを哉　素堂
鶏頭に蕣のさはるや妹が門　素鹿
鐺持に酒のませてや鶏頭花　牡年
十五夜の主は客よ後の月　此筋

牡年(ぼくねん)亭にて

海山を覺へて後の月見哉　去來

嵯峨の古跡見廻りける比

世のさがと人のいへばやならず柿　先放
朝鹿の妻乞ふ傍に紅葉哉　長崎の人の句
小男鹿の寢あたゝめたる紅葉哉　木導

屁の杉が嶽にて

古寺を取ひろげたる紅葉哉　花明
纈(かせ)を干す濡手の下やつは(石蕗)の花　古童

行秋のさむさいそぐやつはの花　之次
行秋や壁に打むく一羽とり　朱拙
明朝は鑰を致せ神おくり　野明

渡鳥集畫卷　冬部

鶴の來る空や見る〳〵神無月　正秀
鳴渡る鶴の高さよ霜の月　卯七
國〳〵に入込つるや神無月　先放
大名の耳にもさむし鶴の聲　風叩
乘懸の見廻し寒しつるの聲　昌尙
しぐれ初て汐ふく海士の行衞哉　土芳
柳などあたまぞ寒き初時雨　去來
有やうは純子にねたし初時雨　支考
小蒲團に爪とぐ猫や初時雨　勝秀
鴨に上戸の名ありはつしぐれ　從吾
潮先にうちむく鴨のしぐれ哉　久任

水鳥の雫をそへてしぐれ哉　酉貫
うはがけに馬のかほふるしぐれ哉　霜林
天晴の使者のうつむく時雨哉　野谷
さし足をわすれて闇の時雨かな　正秀
明星や西にふり出す時雨かな　素介
坊といふ音にしぐれて山路哉　文鳥
猿の聲きやつと言ふたがしぐるゝか　万乎

春日山の山陰に、しばしがほど住ゐし侍りて

時雨行空にしまるや笛の聲　風叩
しら雲や時雨かゝゆる町の上　卯七
さむからふ障子ひとへのしぐれ哉　衣行
實綿の煎つくかざに時雨哉　子直
鍋本にかたぐ日影や村しぐれ　丈艸
後の世の事など松のしぐれ哉　諷竹

長崎に先師の碑を建て、時雨塚と名づく。今年神無月十二日人〳〵と詣て、共四句

拜ミ處にのぼる小坂の時雨哉　卯七

樫の木にたよる山路の時雨哉　牡年

踏分る杖のあまりのしぐれかな　野坡

こゝはまた汐の傍ふる時雨哉　素行

父の身まかり給ひけるあさの事ども、頼み奉る僧ハ其事も仕果ず、世をさり給ひければ

あとさきに時雨荷ふや手向水　先放

別そうな時雨の中の俄あめ　南甫

霜さむし鴨は身幅の石の上　卓袋

茶畠に霜こそつゞけ筑波山　千調

大根の根ぬけて寒し今朝の霜　素民

朝霜に足ゝびおもき濱出哉　野谷

朝霜に味噌摺り出す隣哉　魯町

せんじ茶の湯氣にしめるやけさの霜　爲有

行燈のねむり入たる霜夜哉　錦水

凩に一のくらみや岡の松　牡年

こがらしを枯てあしろふおばな（尾花）かな　洗流

こがらしを杖につきけり老の坂　智月

こがらしの都に入るや初鯨　諷竹

木枯にかくれすますや四疊半　素民

こがらしや戸を明て來る有明し　昌房

搗米の舟に舞込おちばかな　汶村

野も山も取つくろはぬ落葉哉　西貫

南天や砂にこぼれて花かたち　車來

水仙や負る物なき二王立　斜嶺

柚垣にたよるや虫の冬構　素行

物賣の一きわ遠し冬構　使帆

椿見る座敷の内や冬籠　勝之介

うき人の晝は來もする火燵哉　花明

水風呂に筧しかけて谷の柴　丈艸

談合の崩れ口にはさむさ哉　諷竹

門番の時とはれたるさむさ哉　素行

おとがい（頤）とひざ（膝）の間のさむさ哉　風叩

鋤鍬の光りもさむし庭の隅　先放

麓から誰も寢にこぬ寒哉　遠之

宿二丈艸草庵一

さむきよやおもひつくれば山の上　去來

蜑の子のかじけて寒し磯馴松　野明

喰物のふりもそろはぬ冬至哉　此筋

父の喪に

腸や寝ぬ間にこほる切小口　徐刁

枯芦を手懸にして氷哉　北枝

頃日の風さえつめてつらゝかな　福翁

乞食の尾頭もなし冬の月　許六

町陰や水の便になく千鳥　素行

白鷺の氣色つきたる霰かな　柳線

疊屋の仕事おはるゝ霰哉　紗柳

歯朶賣のさつと仕舞ふてあられ哉　配力

初雪やちらすにそつと草の上　陽和

はつ雪に地の上かろし駒の足　野明

今ふりて根雪となるやつは井坂　正秀

雪雲や横に折たる山の先　素行

狐なく岡の晝間や雪ぐもり　丈艸

頃日や曇れば雪のごとゝふる　猿雖

雪あれや舟に鴎のよりかゝり　勝之介

沖中に一きは高し雪の嶋　素民

游ニ嵯峨雪庵一 并序

柳谷子の常に興ぜられしには、東の角に些丸太の床をまうけ、青磁の瓶・竹の筒、門人の數有、寒菊のわりなく、水仙のおもひ切たるかほも、折からの花こそ、爐中に一樽のうつるをしらず、半にかへる有、來かけに中のむあり、八ッの鐘に枕をさだめ、曉のひとときに起あがりて、各此菴のことぶきを申されける。予も重て一句を留、其あそびを共にし侍る物ならんかし。

目晴らしや昨日降たる山の雪　卯七

書の中に居て見る雪の山家哉　去來

美濃みらゝ國、關山和尚の古跡を見て

雪霜の折目疊むや勅使岩　雲鈴

鑓持の小股になりぬ雪の上　風叩

出女のかほは變りて今朝の雪　先放

橋となる中から末や雪の竹　淡化
我やどの音嬉しいかゆきの竹　千友
雪の日や里どまりする鶲の聲　卯七
生垣をからす見込むや雪の朝　古勇
雪の篠さがせどおらぬ小鳥哉　大助
雪ちるや鷹すえながら酒のかん　北枝
狩衣の袖蹴放すや雪の鷹　支考
はしたかの心に馴る羽つきかな　宇白
一度は亭主のさたや鰒の友　素鹿
干鮭と鳴る〳〵行や油筒　雪之
煉味噌の雫さびしき紙衣哉　李山
佛名やあまに成たるあだごゝろ　許六
冬の日のきうに暮たる浮世哉　如元
煤掃や何ぞのたらぬたばこ盆　我峯
すゝはきや胴うたせずば雉子一羽　紫道
餅つきの手を拂ひけり衣配り　木導
年忘若菜も近しかぶら汁　万子
泥坊の日つきも寒し年の市　毛純
泥雪とくるゝや年の門ならび　卯七
大風の落たやう也年のくれ　ひろ鳴の句
浦に居て年とる魚や波うつり　素行
大年やたしかに見する臼の尻　一介
大としや數たひ蹴ちらす馬の沓　史邦

渡鳥集畫巻　春部

燕の鴈に問てや鳩まはり　丈艸
燕の門うたがひや旅もどり　素民
痩せ〳〵と來るや燕の旅衣　卯七
燕の巣も修理にかゝるや彼岸過　素行
つばくらの往たり來たりて日は長し　諷竹
飛車角行と燕働て野づら哉　一定
破魔弓で殿様事をはじめけり　勝之介
ふり袖に庖丁入てつむ若菜　游芝
たしにする乳母がたもとのわかな哉　支浪

鶯のきよろ〳〵したる風鈴哉　爲有
鶯の來たとてだまる子ども哉　諷竹
鶯の綱目をたゝく車簣戸　野徑
うぐひすの松にとまりて鳴なをす　勝之介
うぐひすの梅に飛つく機嫌哉　素鹿
うぐひすの尾に振廻す華心　土芳
鶯の舌に乘てやはなの露　半殘
うぐひすの誘ひ出すや寺若衆　先放
うぐひすのでつち連けりみそさゞい　風叩
鶯に燈を引しほの茶湯かな　野角
鶯や夜着く室の舟がゝり　素行
うぐひすの海むいて鳴須磨の浦　卯七
日に立て正月はやしむめの花　猿雖
面白や正月まはり藪のむめ　卯七
東雲の殘して行や梅の華　風叩
三日月の座ははつきりと梅花　浪化
梅が香や其尾に附て朧月　吾仲
花は朝香は夕闇の梅の花　長緒

太宰府にて奉納

千歲ふる梅の匂ひの若さかな　倫
人氣なき雨の匂ひや梅山桝　呑水
春風とおほゆる雪のにほひ哉　風叩
野も山もくつろぐ水のぬるみ哉　輻翁
よし原やたばこも入らず猫の戀　許六
いがみあふ中にうき名や猫の妻　舍六
二月や椎の木しろき雨びかり　素行
行鴈の松よりつゞく尾上哉　牧童
紅梅に白みつけてや歸る雁　范孚
紅梅によりうく鴨の名殘哉　素行
客はまだ鴨の羽音の柳かな　木導
雪汁を椽に振込むやなぎ哉　卓袋
軒口を出るや柳の一せごし　野坡
反橋にすべり馴たるやなぎかな　毛紈
手形出す柳の中の小舟哉　砂丈
折〳〵にひかれて暮す柳かな　砂明
櫓拍子や霞のうちの九十九嶋　風毛

朧夜を出ぬけて松の烏崎　卯七

海山を袋に入れしおぼろ哉　先放

松ばらの水に顔出す野馬哉　良彈

陽炎やちぎれてあそぶ波の上　卯七

陽炎のかりのやどりや牛の角　探志

陽炎のあとからめぐる野焼哉　先放

後むく野焼の森のからす哉　龜文

うそ六くや野路の嵐のたらりふき　一介

近江とや都にちかきはな曇り　許六

芭蕉居士の舊跡を訪

志賀の花湖の水其ながら　素堂

田上尼の前栽の
花見にまねかれて

海を見る日つきも出す花の空　去來

有明に潮のたゝえや花の雲　卯七

手間の入花のあたりの夜明哉　風叩

明がたにつれこや花の鳥あつめ　田上尼

梟や夜の花見のたまり物　浪化

啄木鳥の枯木さがすや花の中　丈艸

隼の花に舞込巣山かな　素行

雪の日の寒さ忘るな花に鳥　支考

花盛けうとき笛のひゞき哉　荊口

万日も紐解く花のさかり哉　正秀

うきついて花の香のする男哉　万乎

各別な顔や華見の道具持　杜若

唐人の仰く薔あり花の陰　先放

雑木のおつとり廻す櫻かな　素民

松風を賑かしたるさくら哉　松星

春風やまゝしき中も櫻狩　習水

明につく闇の淺さや山ざくら　若芝

蟹の泡吹ている日や山ざくら　臥高

櫻ちる其比ふとし瀧の水　湖梅

はじめ見た櫻に戻る垣ね哉　會幅

桃咲や蘇木すだれの日のうつり　里東

桃ちるや葛籠片荷の大工箱　卯七

馳走する身も我なれや雛の客　梅

どれもかも鑓の男は烏帽子哉　　勝之介

脇指は落して蹙る汐干哉　　牛残

淵上先師の御墓に詣て

無き影をゆすり起すや墓の蝶　　荆口

此中のどの花吸ん飛胡蝶　　素交

春の野や蝶もうかれて菜種いろ　　重晴

揚てるや志賀の雲雀の水はなれ　　福翁

陽炎の糸よりあがるひばり哉　　支考

雨雲にぬれて落たるひばり哉　　乙双

鶏はやねの上にてきじの聲　　万子

旅籠屋や門からぬける雉の聲　　野徑

苗代や東寺の塔の水かゞみ　　朱廸

苗代や皆人間は土あそび　　晩海

三日月を鼻にいたゞく蛙哉　　先放

草庵

火を打ば軒に鳴合ふ雨蛙　　丈艸

角落てどうやら有か鹿のつら　　風叩

菜の花や引のけられて種大根　　倫

なの花に割木飛込日和かな　　素斗

なの花やあたりのかゝの機見廻　　野坡

なの花に六藏こそ來れ關の女郎　　荒雀

山吹やゆらぐ筧のこぼれ水　　春子

目利する顔おぼつかな藤のくれ　　不休

牛の尾とゝまりかゆるや藤の虻　　風毛

行春のうしろ便や藤の花　　可南

三月と文にかくのも名殘かな　　去來

抜綿に畳み込るゝ彌生哉　　千川

渡鳥集晝卷　夏部

時鳥畳のうへに初音かな　　牛残

時鳥ひとつは花の引うつり　　錦水

鶯もやゝ受太刀やほとゝぎす　　去來

青麥も空もみどりや時鳥　　浪化

茶むしろと枕あはせやほとゝぎす　　衣行

時鳥なくや茄子の花むすび　紫道
うちかぶる森のあかりや時鳥　單方
わんといふ大佛殿のほとゝぎす　汶村
雨虹の消うきへしやほとゝぎす　素民
水あとや雲もしまらず時鳥　魯町

木曾川の邊にて
ながれ木や篝火の空の時鳥　丈艸

みやこにのぼりけるに
時鳥當た明石もずらしけり　卯七
時鳥帆裏に成や夕間暮　先放
有明に浪の子もなし時鳥　風叩
一聲や小瀬戸に餘るほとゝぎす　素行
高濱やついて廻りてほとゝぎす　探吟
四方の雪眼に寒し衣更　支考
山吹に月をめされて衣更　吉仲
空色に祝儀すまして衣更　斗從
墨染や衣の下の衣がへ　晡川
卯の花も照や垣根のあかね染　荆口

卯の花に笠きて行む川むかひ　支考
うの花に似合た星のひかり哉　不唉
さま〳〵の花に醉てや若楓　文鳥
明がたの空のしめりや夏木立　砂丈
狩人にとられて眠る鹿子哉　林陰
雨雲に仲込麥のさかりかな　素行
朝かぜや雀がくれの麻ばたけ　船彦
竹の子や雪におさるゝ一夜鮓　支考

妻におくれける人に申侍る
紫のさむるやゆめの花あやめ　卯七
眞菰刈榎木が下や薄濁り　哥峰
梅つはる匂ひに曇る五月かな　先放
枇杷の葉の手強くなりぬ五月雨　紗柳
山見する雲のかはりや五月あめ　爲百
川音の入組にけり五月あめ　埜海
笠の端の清水にめぐる田植哉　洒堂
右の手の左うらやむ田うへ哉　支考
青雲のきほひ見せてや田植哥　北人

谷ひとつ植て出たる田歌哉　一定
家〱の門や田植の仕舞歌　卯七
粟蒔きのあとふしづけに村雀　可南
凉しさに匂ひはせねど棗のはな　竹水
田舍じみてなつかし畔の桐の花　千川
葉がくれに先こそ見ゆれ桐の花　玄梅
火を消して狐のだまるほたる哉　爲有
螢火や空にさかまく大井川　千月
夜や更る螢の影のぎやう〱し　土芳
行燈はきへて凉しきほたる哉　蕉甫
船頭がぬれて夜明の螢哉　猿雖
うつり行喘しや蚊屋の内と外　非群
暗がりを蚊に取れたる小僧哉　霜林

明石舟中、先師の句を吟ず。

蛸つぼの上に晝ねや夏がゝり　風國
藻の花を力にゆるゝ海月哉　怒風
白蓮に朝日こぼるゝ匂ひかな　古勇
蓮の葉の水打こぼす寢覺哉　素民

蓮の花ちるとはなしに欠にけり　水音
石竹の一もと露のみたけ口　時吟
百合の花生ければあちら向たがる　支考
もがれてもそれなりに咲さゆり哉　里花
うつむいて泣く相手あり百合の花　魚素

手取川にて

晝がほや夜の間もしらず手取川　支考
晝がほの花に釣出すねむり哉　風叩
夕顔に井戸へ落なと窓の聲　半殘
夕良にいつをむかしぞ茶湯釜　何妻
日もどりや鳥羽にかよひて瓜作り　卯七
侍やかほくつきりと夏羽織　桐水
香附子のたけ見渡して暑さ哉　紫白
腰懸て飛のく石のあつさ哉　正秀
暑き日や笠で扇ぐも物たらず　柳士
蓑笠をはなれぬ蝿の暑哉　闘雪
大名の晝中通るあつさかな　李由
藪醫者のどこ迄ふとる暑かな　朱廸

温飩屋は人に喰れてあつさ哉　許六
汁椀のじり〱いふて暑かな　一歌
夕立や戸板おさゆる山の中　助童
白雨やわづかに降て田の黒　紫白

筑紫に下りける比、伏見の舟中

夕立の雲もかゝらず留主の空　去來
そろ〱と帆もふくるゝや夏の月　風叩
刈麻を露にさらすや夏の月　半綾
汗の身に薫りかゝるや松の風　巴兮

元春法師の身まかりけるに

世の中を投出したる團哉　丈艸
すゞしさや小舟の艫のふりまはし　風叩
すゞしさや月待舟の帆ごしらへ　正秀
凉しさを都にしたし下り舟　牡年

嚴嶋にて

凉風や板屋をかける猿の音　怒風
すゞしさや八景に書く膳所の城　許六
蚊屋越しに虹見る朝の凉哉　千鶴女

山本のさゝけすゞしや朝曇り　楓里
御袋のかし屋廻りや夕凉　素行
蜘の巣を取て仕舞て凉かな　書方
居替りて尻冷さばや竹莚　先放

五百羅漢寺にて

凉しやと羅漢の數に並びけり　如叟
駕籠かきの待する森の凉哉　梅
夕立を忘れてゆする藪凉　芹花
一日の息つきながす青田哉　一保
樵人も鳥も通はず雲の峰　林紅
すゞしさの茎に成けり雲の峰　砂笠
江を染る入口の前や雲の峰　卯七

賀ニ渡鳥集一句 并序

崎陽の風士卯七は、蕉門の誹路ふかく、盤桓て高吟酔をすゝめ、酬酢今に耽る。一句人を躍せずば、死ともやまじといへる勇ミ有けり。此頃撰集の催しありて、野僧が本へも句なんど求らる。松の嵐の響をだに耳の外になしぬれば、かの詩は多く人の吟ずるを聞て、白一字を題せずとかや、古人も草臥たりけり。彌其くさの方人とうち眠ながら、つく〳〵其酔詠の序にさぞ、さこそおかしく興ぜられんと、おもひやる心に引立られて、聊措き詞をまうけて、集のことぶきを申おくる物しかり。

句撰やみぞれ降よのみぞれ酒

壬午仲冬日

粟津野々僧丈艸塗稿

渡鳥集作者 次第不考

一處不住

芭蕉　丈艸　支考　惟然　雲鈴

山城國

去來　可南（同妻）　荒雀　風國　吾仲

范守　子直　涼柳　重晴　晋水

昔方　湖梅　（サカ）鶴有　（同子）太助　野明

大和國

（ナラ）支梅

攝津國

（大坂）諷竹　車要　苔扣

伊賀國

（上ノ）半殘　土芳　桐水　荻子　配力

東耕　杜若　万乎　雪之　風聲

陽和　猿雖　千友　我栄　卓袋

素交　祐甫　非群　苔蘇　時吟

車來　不知作者

伊勢國
（山ダ）斗従

尾張國
（ナゴヤ）鼠彈　左次　（犬ヤマ）呑水

武藏國
（エド）素堂　史邦　野坡　花明

近江國
（松モト）正秀　（尼）智月　船彦　（ゼゼ）洒堂　野徑
臥高　潘川　芹花　昌房　探志
里東　（ヒコネ）許六　木導　汶村　朱廸
徐刀　毛紈　如元　（僧）李由

美濃國
（大ガキ）荊口　斜嶺　支浪　此筋　千川
文鳥　怒風　（ハチヤ）魯九　（セキ）松星

陸奥國
千調

越前國
水音

加賀國
（金ザハ）北枝　万子　牧童　長緒　従吾
南甫　桐之　魚素　（未詳）林陰　（大セウジ）厚爲
闌雪　（山中）桃妖　自笑　（未詳）汀芦

越中國
（イナミ）浪化　林紅　（高ヲカ）野角　乙双　北人
何參　（魚ツ）求聽　（不詳）濫吹　宇白　（ツクマ）牛綾
巴兮　柳士

安藝國
（ヒロシマ）鳴屋少年

筑前國
（フクオカ）古勇　霜林　砂笠　爲百　千雀妻
（ハカタ）呂侑　舎六　（ハコザキ僧）哺川　（アキヅキ）曉海　（僧）丹山
（直方）一定　衣行　竹水　（クロサキ）一保　水札
（同子）助童　砂明　（未詳僧）全海　不咲　游芝
素斗

豐前國
（中ツ）曾楅

豐後國

（ヒタ）朱拙　野紅　（同妻）倫　若芝　釣壷

柿川　紫道

肥前國

（長サキ）田上尼　（寧片妻）春子　（同子）腰之介　（小年女）梅　福翁

如雙　一顯　歌擧　一介　先放

風叩　素民　素行　卯七　錦水

久任　宇鹿　勝秀　之次　野谷

春波　單才　牛朱　林下　思睡

安重　遠之　素介　颯里　里花

柳線　沙柳　古童　（僧）鐵齒　龜文

砂丈　（不知作者）　牡年　素鹿　魯町

不休　風毛　（天クサ）孫七　（平戸）蘭園　（田シロ女）紫白

肥後國

（助成寺）使帆　（僧）西貫

不考國

採吟　採竿

都　百八十七人

京寺町　井筒屋庄兵衛板

芭蕉庵小文庫

史邦撰

芭蕉庵小文庫

木曾の情雪や生ぬく春の草　と申されける言の葉のむなしからずして、かの塚に塚をならべて、風雅を比恵・日良の雪にのこしたまひぬ。さるをむさし野のふるき庵ちかき長溪寺の禪師は、亡師としごろむつびかたらはれければ、例の杉風かの寺にひとつの塚をつきて、さらに宗祇のやどりかな　と書をかれける一筒を壺中に納め、此塚のあるじとなせり。たれ〳〵もかれに志をあはせて、情をはこび句をになふ。猶、師の恩をしたふにたえず。霜落葉かきのけて、かたのごとくなる石碑をたて、霜がれの芭蕉をうへし發句塚　と杉子がなげきそめしより、愁腸なをあらたまりて、

日の影のかなしく寒し發句塚　史邦

小文庫

冬之部

島田の宿にて

宿かして名をなのらする時雨哉　はせを

旅宿

はつ時雨戸あけて見れば反歩也　山店

米河岸できくや穩田のはつ時雨　嵐竹

雷おつる松はかれ野の初しぐれ　丈草

食どきにさしあふ村のしぐれ哉　去來

板壁や馬の寐かぬる小夜しぐれ　史邦

雜冬

冬空やすがもは江戸の北はづれ　嵐竹

ほうづきやとけその山の九十月　史邦

城山に雉子出けり小六月　山店

青き穗に千鳥啼也ひつぢ稻　史邦

寒菊に野武士も住かわに堅田　仝

薫物のもれてやにほふ枇杷の花　史邦

下刈の藪きれい也つはの花　養浩

大通庵の主道圓居士、芳名をきくとしたしきまゝに、まみえむとちぎりて、つゐにその日をまたず、初冬一夜の霜と降ぬ。けふはなを、ひとめぐりにあたれりといふをきゝて

其かたち見ばや枯木の杖の長　芭蕉

舊庵　師の像に謁

芭蕉會と申初けり像の前　史邦

達磨會やもつさう食の一文字　仝

水風呂をふるまはれたる十夜かな　仝

御命講や油のやうな酒五升　はせを

上人の鼻にはくおけ御命講　史邦

ゑびす講酢賣にはかまきせにける　芭蕉

惠比須講あひるも鴨に成にけり　利合

まづ鯛と筆を立けり惠比す講　史邦

玉あられ百人前ぞおとりこし　山店

御取越内儀の客が一ざしき　嵐竹

檜物屋も間にあはせけりおとりこし　養浩

おとりこしまづ左座は松の坊　史邦

ひだるさに馴て能寐る霜夜哉　惟然

ころ〳〵と虫もむらつく霜夜哉　種文

霜腹の寐ざめ〳〵や鴨のむれ　丈草

ふるき世を忍びて

霜の後なでしこ咲る火桶かな　芭蕉

炬燵より寐に行比は夜中かな　雪芝

正秀亭當座

革羽織とりかくされて火燵かな　史邦

凩のあたりどころやこぶ柳　丈草

こがらしの藪にとゞまる小家哉　殘香

凩や窓にふき込みそさゞい　蘭芳

冬川や木の葉は黑き岩の間　惟然

くむ塩にころび入べき生海鼠哉　梨雪

雁鴨やわちがひめぐる水けぶり　蘇人

毛衣につゝみてぬくし鴨の足　はせを
雛の片脚づゝやふゆごもり　丈草
金屛の松もふるさよ冬籠　芭蕉
小屛風に茶を挽かゝる寒サ哉　斜嶺

旅宿

大名の寐間にもねたる寒さ哉　許六
猫の食干からびてあるさむさかな　山店
夜神樂に齒も喰しめぬ寒さ哉　史邦
菜をきざむ廣敷寒し吹どほし　支老
留主のまにあれたる神の落葉哉　芭蕉
甲を干すあたゝかけさや胴紙子　史邦
子祭や梅まつ宿の赤豆食　山店
子祭に目貫ほり出す自慢哉　史邦
餅蜜柑吹革まつりやつかみ取　下風
幽靈に水のませたか鉢たゝき　智月
姪入の門も過けりはちたゝき　許六
はつ雪やかけかゝりたる橋の上　はせを
初雪やひじり小僧の笈の色　仝

雪どにうつばりたはむ住居かな　仝
鶺鴒家はとざるゝはたれゆき　如行
狼の聲そろふなり雪のくれ　丈草

打出濱眺望

嶽〳〵や鳰とりまはす雪けぶり　史邦
納豆するとぎれやみねの雪起　丈艸
長尻の客もたゝれしみぞれ哉　史邦
さつ〳〵と荻も氷もあられかな　仝
冬梅のひとつふたつや鳥の聲　土芳
水仙の花の高さの日かげ哉　智月
はち卷や穴熊うちの九寸五分　史邦
あな熊の寐首かいても手柄かな　山店
丹波路やあなぐまうちも惡右衞門　嵐竹
月花の愚に針立む寒の入　はせを
寒聲や山伏村の長づゝみ　仙杖
一雨や相場のかはる事納　嵐竹
身代も籠でしれけりことおさめ　史邦
金公事もつく〳〵にして事納　山店

せつかれて年忘するきげんかな　芭蕉

魚鳥の心はしらずとしわすれ　仝

さかもりや一雫にて年わすれ　智月

うちこぼすさゝげも市の師走哉　正秀

蛤のいけるかひあれ年の暮　はせを

さかやきや咳氣をなぐる年の暮　探志

客人の心になりてとしのくれ　乙州

酢がとれて蜜柑も年の名殘哉　之道

いせゑびを取あはせけり衣くばり　史邦

餅舂に小腹たてけり瘭疽やみ　仝

石臼之讃

はせを

市中に有て俗塵によごれぬ物、げにその始をよくするよりも、その終をとぐる事はかたし。商山・竹林の猛士も、なを出てつかへ、寛平・華山の上皇も終にたしかならず。たま〱是を見るに唯石臼のひとつのみ、聖一國師は是をもつて肉身をやしなひ法身をしる。民家にはまた麥苅そむころよりも、糠こき落す冬に至るまで、片時もよ所にする事なし。其たかきとを論ずれば、役の優婆塞の庵の中にかくれて、彼たぐひを道引功の上に立べし。上と下とふたつなるは、力たらざる者のために專なればなり。不斷土間に有て莚より外を見ぬは、謙に居る事の調へるにあらずや。かりにも黄姉の手にとられざるとの有がたきとを、ふかくさぐりしるべし。目なだらか成時は、かますを荷ふ老翁のいで來りて、こつ〱とする音すみて、のちは季札が劍を塚にかくるとをはづべし。名をぬすむ盗人はあれども、石うすをぬすむ盗人はなし。またひとの心をみださゞるの至りならずや。月さしのぼるゆふがほのかげに、獨はおどろの髮をまぐね、ひとりは佛のまねをする。あたまなりにてくるしきとを覺えず。挽まはす力に、其飢をたすくるは、文王の始に仕へたまへるに事たがはず。やゝいま様のむづかしき哥のふしにかまはず、聲も唱歌も古代のまゝにして、枝もさかゆる葉もしげると、しはぶきがちにわなゝかれたるぞ、おかしきや。

机銘

閒なる時はひぢをかけて、嗒焉吹嘘の氣をやしなふ。しづかなるときは、書を紐どゐて聖意・賢才の精神をさぐり、靜なるときは筆をとりて、羲素の方寸に入る。たくみなすおしまづき、一物三用をたすく。高さ八寸・おもて二尺、兩脚にあめつちのふたつの卦を彫にして、潛龍牝馬の貞に習ふ。是をあげて一用とせむや。また二用とせんや。

應二蘭子一求　元祿仲冬　芭蕉書

對二門人僧一

是や世の煤に染らぬ古合子　芭蕉

煤掃之說

明ぼのゝ空より物のはた／＼ときこゆるは、疊をたゝく音なるべし。けふは師走の十三日、煤はきのことぶきなり。げにや雲井の儀式・九重の町の作法は嘉例ある事にして、唯なみ／＼の人のすゝはく躰こそいと面白けれ。をの／＼門さしこめて、奥のひと間を屏風にかこひなし、火鉢に茶釜をかけて、嫗が帷子・上張・爪さき見えたる足袋もいとさむく、冬の日かげのはやく晝になりゆき、庭の隅、調度どもとりちらしたる中に、持佛のうしろむきたるごめには立なれ。家の童の椽のやぶれ、すのこの下を覗まはるは、なにをひろふにやとあやし。味噌とよばる大男の袋かぶり、甕きたるもめづらかに、米櫃のサンうちつけ、狙しらけ行燈はりかえて、たつくり膾、あさづけのかほり花やかに、かみしもの膝すえならべたるに、ほどなく暮て高いびきとはなりぬ。

すゝはきや暮ゆく宿の高鼾　はせを
なぐれて雪のかゝるから竹　山店
扶持かたのはし米取に人やりて　史邦
またどろ／＼とかみなりがなる　嵐竹
風雲のはしる間を月のかげ　養浩
毛蓼の花のみゆる塀うら　執筆
雁わたるむかひは平野久法寺　店
使にやれば味噌つかせける　邦

普請場でこしらえてくる火吹竹　竹
よそほど風のあてぬ山ぎは　浩
松苗のはえ揃ふたる一里鐘　邦
田うへの留守に煩ふて居る　店
夏の月いらぬ葛籠は梁へあげ　浩
たゝきながして雨はるゝなり　竹
篠原や黒ばね山もうちつゞき　店
馬すりかえてしらぬ顔する　邦
はつ花に酒毒が出来て取かぶり　竹
年子まびけば菫みだるゝ　浩

二

御築地の雪もきえ行新在家　邦
敷て垢かく水風呂の蓋　店
雨方へあかりみせたる手行燈　浩
そよ〱草のなびく日の暮　竹
戀人のいつか後に立て居る　店
文引さいてほうばりにけり　邦
盆まへは貳分にもつけぬ小脇指　竹
隠れて京の月を見るなり　浩

槿のくづれたうへを踏あるき　邦
簾はたけば雞がよる　店
雲ぎれの山の端うすく寒くらし　浩
千日谷の銀杏冬たつ　竹
ウ
跡さきを木戸でしめたる組屋敷　店
追〱醫者を呼にやらるゝ　邦
いら〱と星のいらつく横雲に　竹
野水たゝゆる椿新田　店
藪岸にほそき櫻の咲出て　浩
夕日の筋に胡蝶むらがる　邦

分別の底たゝきけり年の暮　はせを

小文庫

春之部

年々や猿にきせたる猿の面　芭蕉

　鳴の海邊に年をこえて、
　　三日嵩を氷ム。

大津繪の筆のはじめやなに佛　仝

　ふたみの机・硯箱は翁ふかくいさをしみて、みづから繪かき讃（さん）したまひぬ。また一とせ洛（みやこ）のぼりに、いざさらば雲見に轉ぶ所迄　と興じ申されける木曾の檜笠・越の菅簑に、桑の杖つきたる自畫の像、此しなじなはさぬる年、花洛（くわらく）の我五雨亭に幽居し給ふ時、一所不住のかたみさて、予に下し給はりぬ。されば師のなつかしき折々、あるは月花に情おこる時は、是をかけこれをすえ（据）、ひたすら生前のあらましして句の味をうかゞふのみ。む月七日は、とにわか菜のあつもの（薬）をすゝめて、例よりもかなしく、かしこまる袖になみだこぼれて、

折そふる梅のからびや粥はつを　史邦

若菜つまん三浦の大助（おほすけ）百六ッ　亡嵐蘭

一かぶの牡丹はさむき若菜かな　尾頭

根小屋までうち下したるなづな哉　史邦

しろ水の押わけて行根芹哉　山店

一村を鼓でよぶや具足餅　史邦

　いかなる事にやありけむ、去來
　　子へつかはすさ有り。

蒟蒻のさしみもすこし梅の花　はせを

寺の名やわすれて梅の花ざかり　李由

うす雪や梅の際まで下駄のあと　魚日

ひらひらと菰（こも）槌越やむめの花　史邦

　鞍馬金銀の隱士が跡尋侍て

むめが香やたが賣喰の火打石　仝

白梅やたしかな家もなきあたり　千川

山崎にて

しら梅や木食寺の料理人　史邦

はれ物に柳のさはるしなへかな　芭蕉

此の句、浪化子のありそ海に、さはる柳のしなへかなと去來が書誤りて入集しはべるとて、常に此こさをくやみぬるまゝ、このついでさなしぬ。

春水滿二四澤一の氣色を

川柳水もうごかず柴葉口　山店

青柳の路次がまへなり鎗つかひ　嵐竹

川こして帶ときによる柳かな　岱水

泥龜に人だかりする柳かな　可長

青柳とともにうごくや近かつえ　史邦

馬乘の下くゞり行柳かな　里倫

春風にふき出されけり水の胡蘆　去來

いかあぐる風にこほすやいもはしか　白良

草先や追鳥狩のむさう抓　史邦

苔清水

凍とけて筆に汲干す清水哉　はせを

おなじく

はる雨の木下にかゝる雫かな　仝

鞍馬

僧正が谷をすへれば餘寒也　野童

黑ほこの松のそだちや若綠　土芳

呼出しに來てはうかすや猫の妻　去來

鎌倉も別のとなし猫の戀　南鄰

こがれ死ぬためしもきかず猫の妻　史邦

南良こえ

春なれや名もなき山の朝がすみ　はせを

二月堂取水

水とりや氷の僧の沓のをと　仝

味噌まめの煮るにほひや朧月　史邦

蛇くふときけばおそろし雉子の聲　芭蕉

多田の御廟に詣

いきほひもさすがに神の雉子かな　史邦

栖去之辨　はせを

年號いづれの年にやしらず。

こゝかしこ、うかれありきて橘町といふところに冬ごもりして、睦月・きさらぎになりぬ。風雅もよしや是までにして、口をとぢむとすれば、風情胸中をさそひて、物のちらめくや風雅の魔心なるべし。なほ放下して栖を去。腰にたゞ百錢をたくはえて、拄杖一鉢に命を結ぶ。なし得たり、風情終に菰をかぶらんとは。

雲雀より上にやすらふ峠かな　芭蕉

呂丸追悼　三句

雲雀なく聲のとゞかぬ名ごり哉　會覺

ふみきやす雪も名殘や野邊の供　去來

野をくりや膝がくつきて朧月　史邦

伊賀新大佛之記

伊賀の國阿波の庄に、新大佛といふあり。此ところはならの都、東大寺のひじり俊乘上人の舊跡なり。ことし舊里に年をこえて、舊友宗七・宗無ひとりふたりさそひ物して、かの地に至る。仁王門・撞樓のあとは枯たる草のそこにかくれて、松のいはゞ事とはむ石居ばかりすみれのみして、と云けむもかゝるけしきに似たらむ。なを分いりて蓮花臺・獅子の座なんどは、いまだ苔のあとをのこせり。御佛はしりへなる岩窟にたゝまれて、霜に朽、苔に埋れてわづかに見えさせ給ふに、御ぐし斗はいまだつゝがもなく、上人の御影をあがめ置たる草堂のかたはらに安置したり。誠にこゝらの人の力をついやし、上人の貴願いたつらになり侍ることもかなしく、涙もおちて談もなく、むなしき石臺にぬかづきて、

丈六に陽炎高し石の上　はせを

賀茂にあそびて

照つゞく日やかげろふの芝うつり　史邦

しこまれて苗代馬のあゆみかな　山店

干刈の田をかへすなり難波人　一鷺

川淀や淡を休むる声の角　猿雖

物よはき草の座取やはるの雨　荊口

はる雨や澤鷄あがる臺所　游刀

引鳥の中にまじるや田螺取　支考

咲みだす桃の中よりはつ櫻　はせを

三月三日堺の海邊に遊て　二句

胸透て須磨をのみこむ汐干哉　史邦

のほり帆の淡路はなれぬ塩干哉　去來

鹿島には杉菜のはゆる汐干哉　山店

すみ吉に詣

一日の日を春かぜや松のひま　史邦

攝州甲山

上代の春日も光れかぶと山　仝

出替や哀すゝむる奉加帳　許六

下品の情

あかつきやうちとけ安き片むすび　史邦

下〳〵もみな居なじみてよめが穐　山店

馬よけや畑の入なる桃柳　北鯤

梅つばき是にも咎し屋敷守　山店

藪に居て挽きらるゝな赤椿　仝

旅行

内庭を見せかけにけり白つゝじ　嵐竹

堀起すつゝじのかぶや蟻のより　雪芝

熨斗目きて来る人もなし菫草　山店

難波にて

海棠やお八つうち出す堂のまへ　史邦

僧丈草に別る

慇懃に成しわかれや藤の陰　同

万日の小屋もみえけり百千鳥　嵐竹

呼子鳥なくか碓氷の盤根石　史邦

西行像讃

すてはてゝ身はなき物とおもへども　ゆきのふる日は、さむくこそあれ。花の降日はうかれこそすれ。　はせを

芳野

花ざかり山は日ごろのあさぼらけ　仝
損にして食たかせけり花曇り　山店
花雪とちらすや錢のあるの山　去來
ちか道や木のまた通る花盛　洞木
村中へ咲下したるさくらかな　養浩
景清も花見の座には七兵衛　はせを
しらあやに金王櫻さきにけり　史邦
藪陰に衛門櫻のはなみかな　山店

三月盡

赤猫のうるさくなりぬ春の暮　山店
新宿は麥に穗がつく春の暮　史邦
水風呂の置所なしはるのくれ　嵐竹

三吟

櫻見る袖ちひさしや田舍染　嵐竹
麥の中からあひる啼だす　史邦
うら坐敷山をうしろに春くれて　山店
手に〳〵膳を持てたゝる　竹
ひつそりと夜半の月のさびかへり　邦
堤の雁のさきさがりなる　店
ウ
八朔のさかやき剃にまはるらん　竹
御門徒寺のすまふつぶるゝ　邦
穐蟬のいりつく様に鳴時ぞ　店
すべつた馬を引をこしける　竹
若黨に内證きかする戀もあり　邦
汁も鱠もいなだなるらん　店
はつ雪の風にはづれてひら〳〵と　竹
お堀の月のさえわたるかな　邦
あみ笠を腰にはさみて丹波道　店
六帖じきをふたりしてかる　竹
花のかけ縁日ばかり掃たてて　店
躑躅くづるゝ赤土の谷　邦
二
ひとつでも皿の揃はぬ小瀧鯛　竹

寅眷中とてけふも灸せず　店
幕かけて啼盛りたるほとゝぎす　邦
山も御茶屋も青葉なりけり　竹
本堂を右へまはれば反歩(タンボ)にて　店
ころぶといなや狐はなるゝ　邦
十五夜を吹さらしたる西の空　竹
稲こす水に祠(ホコラ)うきたつ　店
竹藪の鴨上戸うらがれて　邦
又たゝくやら泣ごゑがする　竹
一はしり行て見て來る朝肴　店
八専あき(明)て晴わたるなり　邦
ウ
庭せゝる松や小笹のうへ所　竹
返事にそえてかへすぬり臺　店
構はねばしらけて通る鉦たゝき　邦
どこでもおそき町の朝食　竹
景のよき山はづらりと花ちりて　邦
帋鳶(たこ)のきれ行梅若の森　店

花の雲鐘は上野か淺艸か　はせを

小文庫

夏之部

文字摺石

忍ぶの郡しのぶの里とかや。文字ずりの名殘とて方二間ばかりなる石あり。此石はむかし女のおもひに石になりて、其の面に文字ありとかや。山藍摺みだるゝゆへに、戀によせておほくよめり。いまは谷合に埋れて、石の面は下ざまになりたれば、させる風情もみえずはべれども、さすがにむかしおほへて、なつかしければ、

早苗とる手もとや昔忍ずり　はせを

前書されて見えず。

一つ脱でせなに負けり衣がへ　仝

からたちも刈揃へたり佛生會　山店

灌佛や釋迦と提婆は從弟どし　之道

落柿舍閑居　嵯峨日記に見えたり

ほとゝぎす大竹藪をもる月ぞ　はせを

郭公鳴や湖水のさゝにごり　丈草

夕やけやきら〳〵ととぶほとゝぎす　山店

ほとゝぎすまづ〳〵宵の丸寐にて　呑水

美濃にて

紅麥に鳴やうきかんほとゝぎす　史邦

明石

ほとゝぎすきえ行方や島ひとつ　はせを

須磨

月を見て物たらはずや須磨の夏　仝

佛頂禪師の庵をたゝく

木つゝきも庵は破らず夏木立　仝

葉ざくらや千体佛のみがきばへ　史邦

槇の戸をうつぶせにして葉より哉　嵐竹

太鼓にてほいろを返す葉撰哉　史邦

狹莚のへり踏ありく葉より哉　山店

藪畔や穗麥にとゞく藤の花　荊口

かみなりの鳴らで曇し梧の花　史邦
山椶やわか葉のくさき一しきり　北鯤
子にせうといへば迯こむふき篭　乙州
よせ馬の土手のあちらや紙のぼり　嵐竹

乙州餞別

花麥の秋はあふみとおもへども　山店

落柿舎閑居　嵯峨日記に見えたり

柚の花にむかしを忍ぶ料理の間　はせを

さがにて

おのづから梧にならふやことし竹　史邦
五月雨や蠶わづらふ桑のはた　はせを
無病さや物うちくふて五月雨　史邦
さきだちのふみ込音やさつき闇　山店
川べりに狐火立つやついりばれ　史邦
箱崎や岩たて雲をつゆあがり　養浩
只おかぬ麥のぐるりや紅の花　山店

間不レ容レ髪といふ事を

ほとゝぎす起合せたり聲の中　仝

おなじく

雲すきや尾越の鹿のねらひ狩　嵐竹

同じく

草むらや蝿取蜘の身づくろひ　史邦
蘭の花にひた〳〵水の濁り哉　此筋
一田づゝ行きめぐりてや水の音　北枝
虫の喰夏茶とほしや寺畠　荊口

卯月のはじめ庵に歸りて、旅のつかれをはらす程に

なつ衣いまだ虱を取つくさず　はせを
わが宿は蚊のちひさきを馳走也　仝
みな月の竹の子うれし竹生島　去来
六月をしづめてさくや雪の下　東以

正成之像
鐵肝石心此人之情

なでしこにかゝるなみだや楠の露　はせを
撫子にふんどし干や川あがり　嵐蘭
ひるがほに虱のこすや鷹のあと　仝
五六十海老つゐやして鯑一つ　之道

どろ〳〵とすはや夕だつ鈴鹿山　史邦
ゆふだちや蓮の葉にふる池のくま　木白
蓮の花ちるや八島のみだれ口　史邦
澤瀉をうなぎの濁す澤邊哉　嵐蘭
麻の葉のあからむすゑや雲のみね　史邦
三日月のいつか出て居る櫻麻　嵐竹
麻臥て風すぢとをす小家哉　斜嶺
蠅打になるゝ雀の子飼かな　河瓢
日の勢やくるしくうごく百合の花　素繪
鬼百合やりんとひらひて蟬のこゑ　史邦
水仙の種を干日やせみの聲　嵐竹
森の蟬すゞしきこゑや暑き聲　乙州
鴨の子の芦根はなれぬあつさかな　桐奚

甲斐郡内をすぎて

道ばたにまゆ干かざのあつさかな　許六
あさがほの二葉にうくるあつさかな　去來
煤下る日盛あつし臺所　怒風

旅行

痩馬の鞍つぼあつし藁一把　史邦

牢人して東武へ下る日、粟田口にて

すゞかけを着ぬばかりなる暑かな　仝
すゞしさや先蛤の口の砂　句空

丈山之像謁　二句

風かほる羽織は襟もつくろはず　芭蕉
さかさまに扇をかけてまた涼し　丈草
琴引て老をがませよ夕すゞみ　智月
篠木に日かげが出來てすゞみかな　山店
石竹に雀すゞしや砂むぐり　史邦

ふたみ（二見）

あら波やあれて涼しき入日影　同

鴻之臺眺望

切岸や卯の花下し一文字　山店
安房上總うしろに當て夏木立　嵐竹
うき雲や左右にわかれて青嵐　史邦

同　弔古戰場

山は刀禰のながれより生れて、瞥を南にみそなはす。未申に河水をもふけて、是がためにそばたち、山のしりへを斷て、なを壘なかされたり。さばかりのものゝふのおほく此のこゝろにうしなはれて、やゝ百の秋の露むすび、霜うつれども、なにがし誰某と時めきのゝしれる名は、さすが人の耳にのこりて、むなしからぬぞせめていちじろき。松櫻よきほどにしげり、うのはなのくもりあひたる空に、時鳥のこゑもたまぎるゝ斗なれば、魂魄の胸もはるゝにや。いさゝ哀に覺えて、

幽靈のあそび所や花うつぎ　山店

いかづちの荒てひさしき夏野かな　史邦

黑雲の折〱かゝる青葉哉　嵐竹

首塚

首塚やとけに咲たる花むばら　史邦

首塚やひるは螢の草がくれ　嵐竹

首塚や人ものぼらぬ夏蕨　山店

眞間寺

眞間山や茄子の畔もむかし細　嵐竹

なつ山や麥も櫻も寺の分　山店

さびしさに凉しき眞間の寺構　史邦

同所楓

口蓮の哥にもみえず若楓　史邦

もの喰に茶蓙かるや若楓　嵐竹

大木やはづれ〱はわか楓　山店

同繼橋

繼橋の田うえや寺の男ども　嵐竹

つぎ橋や田草もとらぬそゞろ水　山店

つぎばしのあとは水田の水雞かな　史邦

歸路の吟

ほとゝぎす水戸海道も夜船也　山店

なつ空や精をも出さず渡し守　史邦

舟梁もまくらにならずなつ衣　嵐竹

餞別

新麥はわざとすゝめぬ首途かな　山店
まだ相蚊屋の空はるか也　はせを
馬時の過て淋しき牧の野に　仝
四五千石のまつのたて山　店
方〱へ醫者を引ずる暮の月　仝
躍の作法たれもおぼえず　蕉
盆過の比から寺の普請して　仝
ほしがる者に菊をやらるゝ　店
蓬生に戀をやめたる男ぶり　蕉
濕のふきでのかゆき南氣　店
丹波から使もなくて啼鳥　蕉
節季が來れど利あけさへせぬ　店
雪に出て土器賣を追ちらし　蕉
たゞ原中に月ぞさえける　店
神鳴のぴつかりとして沙汰もなき　蕉
しやくりがやんで氣がかるうなる　店
奥の院をづ〱花をさしのぞき　蕉
けさからひとつ鶯のなく　店
春の日に産屋の伽のつくりと　同
かはり〲や湯漬くふらん　蕉
いそがしくみな肌立を取並び　店
目つらもあかず霰ふるなり　蕉
からびたる櫟林に日がくれて　店
佛の木地をつゝむ糸だて　蕉
ころ〱と臼挽出せばほとゝぎす　店
そゞろに草のはゆる竹椽　蕉
羽二重の赤ばるまでに物おもひ　店
わかい時から神せゝりする　蕉
雛をまたぬすまれしけさの月　店
畠はあれて山くずのはな　蕉
日光へたんから下す穐のころ　店
くれ〲たのむ弟の事　蕉

ゆふかぜに蒲生の家も敗れ行　同
物にせばやとさする天目　店
花のあるうちは野山をぶらつきて　同
藤くれかゝる黒谷のみち　蕉

甲斐にて

行駒の麥になぐさむやどりかな　はせを

小文庫

穐之部

はつ秋やたゝみながらの蚊屋の夜着　はせを

弔初秋七日雨星

元祿六文月七日の夜、風雲天にみち白浪銀河の岸をひたして、烏鵲も橋杭をながし、一葉梶をふきをるけしき、二星も屋形をうしなふべし。今宵なを只に過さんも殘おほしと、一燈かゝげ添る折ふし、遍昭・小町が歌を吟ずる人あり。是によつて此二首を探て、雨星の心をなぐさめむとす。

小町が歌

高水に星も旅寐や岩の上　はせを

遍昭が歌

七夕にかさねばうとし絹合羽　杉風

西風の南に勝やあまの川　史邦

閑關之說

色は君子の惡む所にして、佛も五戒のはじめに置りといへども、さすがに捨がたき情のあやにくに、哀なるかた〳〵もおほかるべし。人しれぬくらぶ山の梅の下ぶしに、おもひの外の匂ひにしみて、忍ぶの岡の人目の關ももる（守）人なくば、いかなるあやまちをか仕出てむ。あまの子の浪の枕に袖しほれて、家をうり身をうしなふためしも多かれど、老の身の行末をむさぼり、米錢の中に魂をくるしめて、物の情をわきまへざるには、はるかにまして罪ゆるしぬべく、人生七十を稀なりとして、身を盛なる事は、わづかに二十餘年也。はじめの老の來れる事、一夜の夢のごとし。五十年・六十年のよはひかたぶくより、あさましうくづをれて、宵寐がちに朝をき（起）したる、ね覺の分別なに事をかむさぼる。おろかなる者は思ふことおほし。煩惱増長して一藝すぐるゝものは、是非の勝る物なり。是をもて世のいとなみに當て、貪欲の魔界に心を怒し、溝洫におほれて生かす事あたはずと、南華老仙の唯利害を破布（却）し、老若をわすれて閑にならむこそ、老の樂とは云べけれ。人來れば無用の辨有。出ては他の家業をさまたぐるもうし（憂）。尊（孫）敬が戸を閉て、杜五郎が門を鎖むには。友なきを友とし貧を富りとして、五十年の頑夫自書自禁戒となす。

あさがほや晝は鎖おろす門の垣　はせを

槿にまぎれて木槿あはれなり　史邦

寐道具のかた〳〵やうき玉祭　去來

乳母が來てまた泣出しぬ魂祭　山店

灸してなきしも我ぞたままつり　史邦

おくり火や後さがりの袴ごし　仝

盆すぎて宵闇くらし虫の聲　はせを

牛部屋に蚊の聲よはし秋の風　仝

雀子の髭も黑むやあきのかぜ　式之

不破にて

あき風や藪もはたけもふはの關　はせを

はつ嵐ふけども青し栗のいが　仝
初茸やまだ日數へぬ秋の露　仝
しら露もこぼさぬ萩のうねり哉　仝
ひよろ〳〵となを露けしや女郎花　仝
弓がためとる比なれやふじばかま　支老
玉かつらなまりも床し爪根花　史邦
むかしきけち〻ぶ殿さへすまふとり　はせを
つね〴〵は後世ねがひ也相撲取　史邦
蜻蛉やなにの味ある竿の先　探丸

更科姨捨月之辨

あるひはしら〻・吹上ときくに、うちさそはれて、ことし姨捨の月みむことしきりなりければ、八月十一日みの〻國をたち、道とほく日數すくなければ、夜に出て暮に草枕す。思ふにたがはず、その夜さらしなの里にいたる。山は八幡といふさとより一里ばかり南に、西南によこをりふして、冷じう高くもあらず、かど〳〵しき岩なども見えず、只哀ふかき山のすがたなり。なぐさめかねしと云けむも理りしられて、そゞろにかなしきに、何ゆへにか、老たる人をすてたらむとおもふに、いとど涙落そひければ。

俤は姥ひとりなく月の友　はせを
いざよひもまださらしなの郡哉　仝

前書きれて見えず

夏かけて名月あつきすゞみ哉　仝
名月や門にさし込潮がしら　仝

世波にたゞよひて、日暮の比、岡崎より京に歸るさて、

鴨川や月見の客に行當り　去來
名月や夕日にむかふ宮さかな　塔山
名月の西にかゝれば蚊屋のつぎ　如行
名月や佃を越せば寒うなる　山店
名月や草の闇みに白き花　左柳
侍の身を露にして月みかな　史邦

常陸へまかりける時、船中にて

あけぼのや廿七夜も三日の月　　芭蕉

堅田十六夜之辨

望月の殘興なをやまず。二三子いさめて舟を堅田の浦にはす。其の日申の時ばかりに、何某茂兵衛成秀といふ人の家のうしろにいたる。酔翁・狂客月にうかれて來れりと、聲〳〵によばふ。主思ひがけず、おどろきよろこびて、簾をまき塵を拂ふ。園中に芋あり、さゝげ有、鯉・鮒の切目たゞさぬこそいと興なけれど、岸上に莚をのべて宴をもよほす。月はまつほどもなくさし出、湖上花やかにてらす。かねてきく、仲の秋の望の日、月、浮御堂にさしむかふを鏡山といふとかや。今宵しも猶そのあたり遠からじと、彼堂上の欄干によつて、三上・水莖の岡南北に別れ、その間にしてみね引はへ小山嶺をまじゆ。とかくいふ程に、月三竿にして黒雲の中にかくる。いづれか鏡山といふ事をわかず。主のいはく、折〳〵雲のかゝるこそと、客をもてなす心いと切なり。やがて月、雲外にはなれ出て、金風・銀波千体佛のひかりに映ず。かのかたぶく月のおしきのみかはと、京極黄門の歎息のことばをとり、十六夜の空を世の中にかけて、無常の觀のたよりとなすも、此堂にあそびてこそ、ふたゝび惠心の僧都の衣もうるほすなれといへば、あるじまた云、興に乘じて來れる客を、など興さめて歸さむやと、もとの岸上に盃を揚て、月は横川にいたらむとす。

鎖明けて月さし入れよ浮御堂　　はせを

安〳〵と出ていざよふ月の雲　　仝

鬼灯は實も葉もからも紅葉哉　　仝

鶏頭にうへ合せけり唐がらし　　史邦

枯のぼる葉は物うしや鶏頭花　　万乎

花葛や松ふきたふす田成畑　　史邦

もや〳〵としてしづまるや葛の花　　山店

雨晴や煙のこもるくずの花　　嵐竹

蜘なく明日は日和ぞ蓼の花　　風竹

いなづまやなぐり盡して薄原　　史邦

大見

稲妻やうみの面をひらめかす　　史邦

小見

蟷螂のほむらに胸のあかみ哉　仝
鶺鴒やはしりうせたる白川原　氷固
せきれいや壁土こねる畔のうへ　磨盤
鷹の目もいまや暮れぬと啼鶉　はせを
ひよなきに夜を待明す鶉かな　山店
はつ鶉時計の六ッもうたせけり　史邦
道〳〵の鶉きくらん薬とり　嵐竹
唐あみに袖ぬれてきく鶉かな　正秀
尻すぼになくや夜明の鹿の聲　風睡
寐がへりに鹿をどろかす鳴子哉　一酌

東山なめぐりて、一乗寺に出る。

丈山の庵はいづこ引板の音　史邦
岡崎は祭も過ぬ葉鶏頭　仝

前書きれて見えす

菊の香や庭にきれたる沓の底　はせを
見どころのあれや野分の後の菊　仝
きくの露落て拾へばぬかごかな　仝

人がらも古風になりて黄菊哉　史邦
萬歳や手をもみ初て菊のはな　風斤
借かけし庵の噂やけふの菊　丈草
あか棚やまだいきて居る紅葉鮒　嵐竹

芽立より二葉にしげる柿の實と申侍りしは、いつの年にや有けむ。彼落柿舍もうちこぼすよし、發句に聞えたり。

やがて散る柿の紅葉も寐間の跡　去來
澁柿はかみのかたさよ明やしき　丈草
木の本に狸出むかふ穗かけ哉　買山
やき米に哥こそなけれ近衛殿　史邦
虫の音や關宿船の麁朶の中　養浩
死もせぬ旅寐のはてよ秋のくれ　はせを
穐の暮留主つかはれて歸りけり　山店

嵐蘭追悼　四句

かなしさや日に〳〵ましてちる柳　嵐竹
蓖麻の實をしぼり出す涙かな　山店

かたみにはいづれの草ぞ暮の露　史邦

千貫のつるぎ埋けり苔の露　去來

高光のさいしやう、かく斗へがたくみゆるさ、よみたまひけむは、九月十三日の夜さかや、うけたまはりて、

身の秋や月にも舞はぬ蚊のちから　史邦

わが宿は四角な影を窓の月　はせを

柴の庵さきけばいやしき名なれどもよにこのもしき物にぞ有ける

此哥は東山に住ける僧を尋て、西行のよませ給ふよし、山家集にのせられたり。いかなる住居にやさ先その坊なつかしければ、

柴の戸の月や其まゝあみだ坊　芭蕉

伊勢國又玄が宅にとゞめられ侍るころ、其妻の男の心にひとしく、物ごさまめやかに見えければ、旅の心をやすくし侍りぬ。かの日向守が妻、髮を切て席をもうけられし心を、いまさら申し出て、

月さびて明智が妻の咄せむ　芭蕉

秋を經て蝶もなめるや菊の霜　仝

梧うごく秋の終りやつたの霜　仝

ゆく秋のなをたのもしや青蜜柑　仝

題鷹山別

正行がおもひを鷹の山わかれ　史邦

題司召

挾箱さいかくするやつかさめし　山店

題百菊

百菊もさくや茶の間の南向　嵐竹

三吟

帷子は日ゝにすさまじ鵙の聲　史邦

籾壹升を稲のこき賃　はせを

蓼の穂に醬のかびをかき分て　岱水

夜市に人のたかる夕月　邦
木刀の音きこへたる居あひ拔　蕉
二階はしごのうすき裏板　水
寒さふに藥の下をふき立てゝ　邦
石町なれば無緣寺の鐘　蕉
手細工の雜箸ふときかんなくづ　水
よびかへせどもまけぬ小がつを　邦
肌さむき隣の朝茶のみ合て　蕉
秋入どきの筋氣いたがる　水
鹽濱にふりつゞきたる宵の月　邦
無住になりし寺のいさかひ　蕉
持なしの新剃刀もさびくさり　水
土たく家のくさききるもの　邦
花に寐む一疊あをき表がへ　蕉
小姓の口の遠き三月　水
竹橋の內よりかすむ鼠穴　邦
馬の糞かく役もいそがし　蕉
夕ぐれに洗濯賃をなげ込で　水
とはぬもわろしばゝの弔　邦
梳かりに來れど折ふしゑびす講　蕉
此あたゝかさ明日はしぐれむ　水
夜あそびのふけて床とる坊子共　邦
百里そのまゝ船のきぬ〴〵　蕉
引割し土佐材木のかたおもひ　水
よりもそはれぬ中は生かべ　邦
言たほど跡に金なき月のくれ　蕉
もらふをまちて鳴ののつぺい　水
擂鉢にうへて色付唐がらし　邦
障子かさぬる宿がえの船　蕉
北南雪降雲のゆきわたり　水
二夜三日の終るあかつき　邦
考てよし野參のはなざかり　水
百姓やすむ苗代の隙　蕉

座右之銘

人の短をいふ事なかれ
己が長をとく事なかれ

物いへば唇寒し穐の風　芭蕉翁

元禄九丙子歳三月　日

京寺町二條上ル町
井筒屋庄兵衛板

俳諧猿舞師

種文撰

俳諧猿舞師と集號を呼侍る事、猿のみ哀成と仰られしにもとづきて也。

史師云、是に似て非成者は、犬蓼の風味にして、馬糞鷹の鳥とらぬたぐひとぞ。

元祿十一年寅歳七月

松氏

種文自序

穐之部

猿引は猿の小袖をきぬた哉　古翁

水の出た沙汰は聞ぬが天の川　史邦

上下の勢も見えずあまの川　白良

晩蟬の啼とき越かあまの川　葫官

七夕のもしや落けむ流レ星　左文

星合や蚊屋一張に五人寐ル　里倫

舟橋の上にかゝるや二ッ星　之荷

風を引客も有けり星むかへ　種文

永樂のひへも戰かほし祭り　東以

八日の朝

星達の契のすへや木々の露　白良

殘暑

暑き日を風の便りぞ銀川(あまのがは)　汶江

秋桃のむく毛もとれず暑哉　白良

初穐や居所かゆるかたつぶり(蝸牛)　史興

冷やかな風の道あく薄かな　汶江

山吹やまだ咲て居る秋の風　射落

大磯にて

穐風や心にかゝる曾我の里　史邦

朝腹にしてやる事よ蓮の飯　里山

送り火や白みて戻る波の音　種文

青蕎麥の物に成けり生見靈　史邦

味噌包桐の一葉や阿閦の棚　種文

お住持もそゝなかされて踊かな　汶江

河豕喰ぬ顔とは見えず角力取　史邦

稻荷小路といふ所を過て

朝顔も辻番持か神の垣　仝

義仲寺に詣て

秋蟬や聲を夕日の塚めぐり　種文

八朔

朝露に酢の實の匂ふ座鋪哉　史邦

初雁や二日の月の細き影　白良

ふつくりと八日や月の實入比　仝

新綿に身はふつくりと月見哉　種文

小鰹のたゝきもなれず今日の月　左文

夕月をかけて一間や土用干　種文

名月や中稻をかけて風の筋　白良

名月や鼠とらずも一座敷　之荷

名月や霧吹くづす浪の影　史邦

一かます見え來るかへしに、日上人の筆の跡おもひ出て、申遣し侍る。

秋上や滿月ほどの餅十五　史邦

八幡にもふでゝ

海老稻も實入比とや放生會　仝

渡月橋にて

十六夜も橋で吹るゝ嵐山　仝

稻妻に月なき宵の暑哉　广盤

稻づまは鶺鴒の尾の契り哉　史邦

曇ル日の影もつたてよ荻の露　仝

伏見の船中

櫻井が咄し中半や荻の風　仝

干餉を窓のしとみや荻のかぜ　種文

鷄頭の花ふり立る野分哉　白良

雪隱も野分に逢し瓢かな　夏長

此露に瓢簞公事も有けるや　史邦

乳をくれし人の便りに根芋哉　種文

竹一把橋と成けり澤桔梗

牢人して住所を去ル比、知疎の面々に對して

似た物や馬糞つかみにあかさしば　史邦

中臣の祓を讀

角ひしもなきふう味也大和柿　仝

酒しぼる藏のつゞきや葡萄棚　仝

簔虫の簔の雫や草の露　仝

あたまヽで目でかためたる蜻蛉哉　仝

蜻蛉のずいと摺行毛蓼かな　種文

遂もせぬ今日も日和ぞ菜種まき　仝

旅行

垣苅の咄や駄荷の鶉運び　仝

鴫澤にて二句

哀さや鴫立澤の俗坊主　南隣

鴫の啼たよりと成ルや六日汐　種文

鴫網の日にもたまらぬ稲子哉　史邦

どかぶりの跡はれ切ルや鵙の聲　仝

押合て目白の啼も妹背かな　六龜

王子稲荷に詣

稲もはや苅しほなれや衣裝畑　史邦

鹿小屋の火にさし向や庵の窓　丈草

鹿小屋も修覆次手や秋の風　史邦

芋の葉を喰も荒さず鹿の聲　東以

ヘマムシのあたまに似たる案山子哉　史邦

燈籠の果も有けり鳥おどし　汶江

桐の葉は散盡しけりなヽかまど　史邦

釣されて倚あわれ也忍ぶ草　夏長

羽黒山にて僧正福正の塚を拜みて

りんどうも幸有ぞいざ折らん　惟然

嵐竹子、愛子のいたみに

悲しさの數にも入か小夜碪　史邦

鎌倉にて 三句

礎うつ人も住けりひきが谷　東以

柚味噌やく匂ひもふかし比丘尼寺　仝

大佛のひざに上ればはつ嵐　仝

帷子の置洗澤や木槿垣　史邦

重陽

葉しやうがの匂ひや添て菊の露　仝

白菊の露にて花の茂り哉　白良

頃日は藪蚊もおらず菊の花　磨盤

菊の名や問かへさるゝ白ウルリ　史邦

辻番が小遣銀や庭の菊　東以

後の月尙冷し杉の影　白良

雁がねもちつと寒や後の月　之荷

願有る身のせはしさよ後の月　史邦

黒崎の祭をかたれ月の女　東以

行穐や太鼓でおくる風の神　仝

行秋や返す〳〵もから衣　史邦

冬之部

初時雨猿も小蓑をほしげ也　古翁

頓て入る月や二日の夕時雨　史邦

三ヶ月や野分の跡の初しぐれ　白良

旅行

時雨や哀箱根の石の臼　南隣

家一つ中に包んでしぐれ哉　東以

海山の時雨つき合庵の上　丈草

達磨忌を狐も啼か南禪寺　史邦

翁三回忌

凩や哀を終る日の袖の上　仝

芭蕉會に蕎麥切打ん信濃流　仝

お命講に上戸も餅の一座哉　汶江

山芋を焼て十夜の名殘哉　種文

遲う咲菊の手柄や開山忌　東以

井戸神の待もふけ也つわの花　種文

目の覺て鼻のぐすつく火燵哉　夏長

師の坊の腰もむ夢や置火燵　史邦

樂々と鷺は睡るか薄氷　广盤

鴨どもや胸に割行うす氷　種文

冬空や星の亂るゝ榎の間　白良

凩や手の平立る妙龜山　史邦

鴻の臺、法量棺を拜みて

かろうど(棺)や蓋の透(すき)より枯薄　仝

鎌ヶ谷などいふ所を過て、こがね(小金)の原に至る。

玄蕃(げんば)とも云べき人か野駒取り　史邦

冬枯の磯に今朝見しとさか哉　公羽

右の句翁の句也と、誰やらが集に書入たるは、翁と公羽の文字を讀たがへたると、史子申されける。

初霜や一臼つきて米の減(へり)　種文

霜の夜や案山子の腹も虫の聲　白良

初雪も降ぬに猫の戀心　史邦

猿蓑撰集催しける比、發句して心見せよと、古翁の給ひければ

はつ雪を誰見に行し馬の糞　仝

初雪の初手や駿河の御本城　广盤

はつ雪や打違へたる千木(ちぎ)の上　東以

初雪に燒(たき)合(あはせ)けり栗の喰(かし)　種文

大竹の雪はね返す日の力　白良

武藏野や雪振分て富士筑波　史邦

責寄て雪の積や小野ゝ峯　去來

双六(すごろく)のさいもさへ行あられかな　種文

淋しさの底ぬけて降みぞれかな　丈艸

べむ〳〵と串海鼠(くしこ)もにへず霙哉　史邦

粟津日記の内　五句

智月が亭にて

落着の時宜(じぎ)してはたく笠の雪　史邦

無名庵にて

茶のからをさがし出しけり庵の雪

湖水遙に白髮の神を拜みて

雨眼の雫も寒し白かへし

幻住庵にて

枯柴やたぬきの糞も庵の門

正秀が亭にて我が淚〳〵の事など、
尋られし返しに

冬籠素槍一本具足箱

ぬり桶に猫は這ひ込や冬ごもり　種文

蟻を喰ふ熊の命や冬籠　東以

史邦、老人ごさしに夜更す火燵哉
ご申されければ

老人の宵からも寐ず冬籠　广盤

毛頭巾をかぶれば猫の冬籠　史邦

洗足は頭巾もぬかず仕回けり　種文

有明に振向がたきさむさ哉　去來

水仙はねきにもならぬ寒哉　里倫

小便につれ立て出る寒哉　東以

簑虫の首をも出さぬさむさ哉　广盤

あかゞりの踏立られぬさむさ哉　汶江

寒き日はさむし〳〵をちからかな　史邦

月影の針もてさすか冬の空　何某母

金花山の道すがら、大原さいふ所
にやごりて

あかゞりをいざ灸せばや刈干火　惟然

喰物と知れどうるさき生海鼠哉　白良

鮟鱇や小ぶりなれども二人前　史興

河豚つりや海にきわ立山の雪　史邦

がらのわたりにて

水鳥やがらのわたりに浮沈　仝

柴漬や芦浦領の濱年貢　仝

芦の葉や氷を疊む浪の跡　白良

髪置や七郎殿の眼ざし　仝

髪置にまた袴着や兄弟　六龜

淚〳〵を訪ふ人の方へ、文のかへ
しに

金貳兩光過たり紙子代　史邦

客やふいごまつりの小鬢兀　仝

梅が香のほのかに嬉し里神樂　里倫

藥喰罪科もなし高鼾　史邦

外わなに鼠もつかず鉢たゝき　仝

煤掃の朝の御膳は馬屋にて　仝

下帯の下るもしらず蝶拂　之荷
有明の月吹落せ餅の臼　史邦
のし餅の跡飯櫃なり月の影　種文
ふく大豆や拾へば落る指の間　六龜
三文が錢も貫目や厄落し　广盤
年忘れ府中歸りの南部黑　史邦
水風呂も片身替りや年の宵　汶江
塩賣の手をはたきけり年の暮　广盤

讀人しらず

猪の首の强さよ年の暮

年の夜や君が八千代を風呂の曲　史邦

古翁ある時のたまひけるは、史子我道は牛房の牛房くさきを持て、よしとするに比せり。是をしれりやと、仰られし返しに

上下や下は紙子のはら背負　史邦

其後人々此心を尋られしかば、師の道は信を以て物にむかふ。物また信に應ずるなりと、荅申けるとかや。

春之部

年〳〵や猿に着せたる猿の面　古翁
霞野や明立春の虎の糞　史邦
廣袖も寒きけしきや水あびせ　東以
手拭やしほにかぶりて摘若菜　白良
鶯の名で摘れたるよめ菜かな　广盤
七草にもれて侘しきよめ菜哉　仝
七草に左のきいた拍子かな　種文
七草や襟にはね込薄氷　史邦
梅が香を持廣けりはつ霞　東以
霞野ゝいづく木神の當り所　广盤
啼〳〵て曉聲や猫の戀　夏長
鷄の啼ばなき出す猫のこひ　广盤
うたゝ寐を取まかれけり猫の戀　里倫
食時にはづれて啼や猫の戀　葫官

うつゝなや主も見知らず猫の戀　東以

十二支にもれてや侘る猫のこひ　種文

札張し上にも啼かねこの戀　白良

梅が香に鼻うごめくや猫の妻　史邦

蜘の巣を力に置や春の雪　種文

際内に片道つくや春の雪　東以

正月十四日するが河にやどりて

春風も靜な夜半をまとひ年　惟然

正月十六日加茂に詣て

梅が香や精進の頭の入替り　史邦

おなじ所にて

鶯や聲もたしかにさくや姫　仝

うぐひすに後を見せて疊寐哉　仝

鶯や衣張つなぐ枝つゞき　何某女

鶯や竹に來て啼はね釣瓶　蘭芳

うぐひすのきてとまりけりけづりかけ　夏長

破魔弓の仕廻口なり烏賊登り　仝

菊の芽の匂ひ泄けり生大根　白良

梅が香にほころび初て三日月　广盤

梅に來る客も難波のとまり[illegible]　種文

山彦の適〳〵問ふか谷のむめ　白良

梅が香にまた素戻りの君が宿　史邦

仙洞忠勤のむかし、唐御門にて

鐘の音に笋吹合ぬ朧月　仝

みぞろが池にて夜遊の吟

朧夜を笛吹て出よ池の主　史邦

金龍山に詣て

吉原も彼岸をかけて花の春　仝

雲切のなくて暮ける彼岸哉　種文

涅槃會や難陀文珠はどの坊主　史邦

何事も初手には强し電　白良

蚊屋干は初雷の印かな　之荷

他虫釣大上手なり御乳の人　夏長

土を引蟻も大儀や春の庭　白良

紫蘇蓼の一葉二葉や蟻の道　夏長

四天王寺にまふでゝ

耳のある蛇も這出よ椋の穴　史邦

積塔や袴も着ずに寺小性　里倫

積塔や下駄でふまるゝつほ菫　東以

六浦にて

菜の花もやせたる砂の塩屋哉　百圍

雉子笛を吹てはからむ(刈)菜種花　東以

櫻咲競(きそひ)なりけり雉子の聲　種文

翁の供して東山にて

かなしさや子路(しろ)がそこつの雉子の聲　史邦

旅せよとせたけて啼か雉子雲雀　仝

雲雀啼日は降もせず薄曇　白良

春の夜や雁の城かへ隙もなし　广盤

油なき雁の羽並(はなみ)や旅支度　史邦

新田の出來も揃はで田螺かな　史興

御領にもさのみ替らぬ田螺哉　種文

かけろふに匂ひを付ル干(ほし)鰯(か)かな　里倫

紅梅や緋桃にならふ色移リ　白良

散塩のにがき匂ひや桃の華　種文

日和にはさのみかまわず(構)雛遊び　仝

埒もなき家のしめしぞ雛あそび　史邦

童の名の大きさよ鶏あはせ　種文

晝の日の笠に影なき汐干哉　種文

蜑どもは衣裳着かへて潮乾(しほひ)哉　广盤

待兼る馬刀(まで)の出塩や三ヶの月　種文

出替りのいつも雨降四日かな　汶江

橙に青みも少し初ざくら　史邦

あさつき(胡葱)を披露申や櫻がり　里倫

雁金の旅立ッ跡やさくら醒　種文

南氣(みなけ)になまけて寄るか櫻河豕(ふぐ)　東以

鳶之説有略

鳶啼や花も榎も踏散し　白良

土器も樽も座切や花の前　仝

花散や陰に仁王の力足　夏長

袷にて能(よき)くらいなり花ざかり　汶江

西心と云僧の庵に詣侍るに、此人

のひたひ（額）のかゝり、眼の光など、常人と見えず。いと哀に覺ければ

蓮生がさとりを開む花曇　广盤

磯山やわさび（山葵）も匂ふ花曇り　種文

額ぬく隙見付たり華の雨　广盤

花盛り雨が降ねば風が吹　史邦

陽炎や朝日てらづく花の中　仝

難波にて酒堂に申句

月花に無欲のまゝをうつけばや　仝

詩家に遊びて

皷張て花にうかれん河家の皮　仝

上臈のめして、花見る事侍る比

白河や花吹かゝるひざ栗毛　仝

鬧しく花見る人やがゞん坊　仝

芝矢射に花の雪吹の吉田越　仝

目黒にて

花盛りしづめてもよし松の風　仝

きる物も是で置たき彌生哉　種文

莊子をよむ

野等猫のつらよ彌生の河家の膓　史邦

山吹や手舟は出す夕日晴　種文

燕の巣もかたまるや御影供　仝

春雨や灯花のくらみ立　汶江

子を運ぶ猫の思ひや春の雨　里倫

挽臼の目を打せけり春の雨　東以

春雨やおもきが上のふけあたま　史邦

何某が艸庵におくりて、松杉に張ル

あさり來る春の烏や鬼子母神　仝

常陸の國にて

糢ひたす畔の小橋や大のこじ　仝

本丸の跡は墓なりいはつゝじ　仝

猫の背にも生るか羊躑躅　山店

花躑躅太刀疵のある岩も有　嵐竹

散事をならはで果す岩つゝじ　白良

材木の木取たも有羊躑躅　種文

行春に塵をも付ず浪の上　史邦

夏之部

夕顔に猿涼ませて寐て居ルか　史邦
出舟や百挺立のころもがへ　種文
馬士はなを裸なり衣がへ　射落
卯の花に世はうそ寒し衣更　广盤

黒谷にて

有明の雫や落て白牡丹　史邦
塩風に牡丹も咲か濱やしき　東以

題ニ天蓼花一

夏梅の香や遠州の花の跡　史邦
子規かの字を付る聲のあと　仝

四方郭公と云事を

塩時や來て一面に郭公　仝
郭公啼ともなれず藥酒　六亀
編笠の入る天氣にもほとゝぎす　夏長
子規山より啼て海へ出る　東以
ほとゝぎす夜着でも寒き夜半の聲　白良
郭公聞て登るか大番しゆ　广盤
ほとゝぎす啼て見すれどからつゆ（空入梅）　種文
杜鵑腹一ぱいに啼もせず　汶江
郭公兩國橋を渡るとき　里倫
よしきりや蛙も共に夜〃の聲　史邦
灌佛や濟おくれたる奉公人　東以
なら漬の粕に醉けり佛生會　種文
葉櫻に産湯やさめて齋太皷　種文
兩腰を鼻に懸るや加茂祭　仝
青ざしや大黑棚の山折敷　白良
靑麥の葉越に鳴〃や馬の鈴　里倫

布施の辨天に詣ける比

龜山や尾先にそよぐ麥畑　夏長
麥の穂につかれて泪こほれけり　風竹
鷄や首さしのべて射干の花　里倫
青くさき木の下闇や閼伽の棚　種文
簑虫のぶらさがりけり桐の花　東以
實櫻や血目のかゆみの繁き時　種文

一口に喰へど手間取粽かな　之荷
五月雨に夏大根も太煮哉　種文
隣から臼借りに來る蜜栗花哉　夏長
入梅晴や似鴨出て鳴明厩　種文
鶯や聲もすがれてばらの花　史邦
息切て登れば匂ふ箱根荊棘　南隣
川舟や漕ぬく岸の花むばら　種文
新麥に中入けり棒つかひ　史興
青梅に息を次けり御輿かき　種文
由來なき繪や書壁の蝸牛　史邦

無縁寺を過るとて

開帳の過て間もなし今年竹　仝

高田に遠乘して

若竹も塩硝くさし組屋鋪　仝

鎌倉日記之内

谷〳〵や穴ばかりにて青あらし　仝
大形は哥も諷わぬ積田哉　東以
雁瘡の道斑なり早苗取　夏長

水あびて雀逆行田植かな　里倫
薄月夜毛鎗の先へ飛ッ螢　史邦
時〳〵や畑の中にも水鷄なく　史興
夕立に川魚越すや筵の上　種文
撫子や瀬が落替る水の中　白良
楊梅や雫も染ずつま袋　仝

旅行

なでしこに宿の直がなる峠哉　種文
蓮の葉や浪を切たる風の色　東以
麻苅や雜役馬の毛深さよ　種文
夕皃や日向〳〵へ葉のねぢれ　夏長
晝顔や吹ども花の頭をふらず　史邦
どくだみや繁みが上の馬ほこり　仝
椎の葉も動出にけり蟬の聲　南隣
朝露を鳴もこぼさず蟬の聲　ウ門
ぬけ出てすはだに啼かせみの聲　夏長

世上をつく〳〵おもふに

蚊の聲をはたけば痛し耳のたぶ　史邦

猫の子のざれて臥けり蚊屋の裾　仝

柏の香に蚿きづかふ蚊やり哉　何某母

病中の吟

蠅打や暮がたき日も打暮し　史邦

石火之氣ミ云事を

追立てすねとらへけり蠅の聲　仝

蠅打に猫飛出ルや膳の下　汶江

ばち〳〵と板屋に鳴ルや蠅の聲　仝

干爪（瓜）を屋根にもしたり屋形舟　六龜

鳩啼や山路いきれて薄曇り　汶江

旅宿

跡付をだき籠にする旅寐哉　史邦

奈良越にて

涼風の立やさらしの疋田山　仝

此魚此川の名物さや

涼しさや瀬見の小河の談儀坊　仝

涼風に皆むくれけり竹の皮　東以

ぎぼうしも首數なり夕すゞみ　汶江

編笠の人も見えけり夕すゞみ　南隣

笠の緒の跡を撫〳〵涼かな　風斤

汗かきし跡涼しさや夏の月　广盤

庵に宿

芭蕉葉や風なき内の朝涼み　史邦

川中の根木に横ろぶ涼かな　幺羽

右の句翁の句也と、誰やらが帳に書入たるは、翁と幺羽の文字を讀たがへたると、史子申されける。

所々順禮して、美濃の國に至る。

美濃かけて眞桑も見えず暑哉　去來

右の句笈日記に書あやまり侍るとし、史子申されけるまゝ、此次手となしぬ。

旅行

大津繪のゑどりも暑し甲武者　史邦

蛇皮面のにがり切ッたる暑哉　史邦

鶏の觜たゝきするあつさ哉　史興

あつき日や行も歸るも町の中　里倫

赤松の日影もなくて暑哉　葫官

植ッ栢の木の透されもせず暑哉　汶江

傘にはづれて暑きひらだ哉　種文

むしあけて月の光のあつさ哉　广盤

ころ柿も鼠毛立たる暑哉　白良

石磯にて

夏さへも有磯行脚のうつけ共　惟然

佐倉野にて

角力にも得たり顔也野駒取　史邦

偽レ可ニ御撰集中賀一各中合目錄之通致ニ進覧一候

緡一端

うす柿に染ても宮の縮かな　嵐竹

汗拭一筋

南天にしばしと干や汐ぬぐひ　山店

扇一箱

神鳴の灸する繪も扇哉　史邦

瓜一籠

菰のはへ狂ふたる田瓜かな　山店

鮎一桶

卷柏を植た跡あり鮎の石　嵐竹

麻生酒一樽

撫子の泄も落さじ淺生地酒　史邦

以上

丑六月　日　史邦

雨雅丈

右之噺物は誰やらが使あめる比、遣しけるさかや。撰者いかに思ひ取てや受納なかりけるまゝ、今度我撰集のこさぶきさなせる也。

笹百合や土用をかけて穐の風　史邦

夏深き茂みが下の早百合葉に
しられぬ程ぞかよふ秋風

今おもへばかゝる御寄もありけり。

雨吟五十韻

數珠掛はどの木に啼や栗の花　史邦

庭の滑りの青む若竹　種文

井戸普請隣の人も見廻シて　仝
明日はとうから扶持方が出る　史邦
雲切レのしてもあぶなきふじ南　仝
小豆ばかりはまづ煎させけり　種文
髪ゆふて來るとてはすぐ朝月に　史邦
霧一盛り湯屋が肥たつ　種文
ウ
間ヒ〳〵に泥くみかくる葉鶏頭　種文
鹿沼ざらしの身に付ぬ風　史邦
鎗とつて皆ばら〳〵と立別レ　仝
汁がさむるとつぶやきにける　種文
山芝は薄縁しけど不陸にて　仝
ぞろ〳〵潮のあがる石垣　史邦
長降シケに情出してむく蛎蜊　種文
十夜の豆腐あつらへて置　史邦
夕月の反歩を歸る乞食ども　仝
たばねてかろき唐秬のから　種文
露寒き水の替りに旅をして　史邦
金さへあらば伊勢の龜山　仝

先花に一筆書て醫者もなる　種文
たゞ氣みじかに雪の村ぎへ　仝
二
立つ春の茶初尾汲て棚へ上ゲ　仝
赤貝ふたつまだ生て居る　史邦
雨雲の打かぶさりてむし〳〵と　史邦
折角ゆけば御寺留主なり　仝
卯の花の比も買出す茄子苗　種文
山郭公ちか〳〵となく　仝
きぬ〳〵を友達共のさそひ合　史邦
釣瓶かくしてわらひ行らん　種文
川風に裏屋の道の吹通し　仝
廿日程には京も見じまふ　史邦
めづらしき玉子の料理習たり　仝
手入が過て痛む水仙　種文
月影の壁を煎土でまぎらかし　仝
埒の明たる禪の盆棚　史邦
二ウ
穐風のふいと相撲へ行て來る　仝
餅米までも籾で取らるゝ　種文

椵松にはやり稲荷を植くろめ　仝
から〱するに足駄おかしき　史邦
夏の夜は鬼灯ふいて涼らん　史邦
背中たゝひてやる戀も有　種文
する程の商ごとにすれ渡り　仝
四十の年に酒毒わづらふ　仝
花照す金の杜の施主と成り　史邦
村は霞に舟の手づかひ　仝
下館に二月末迄月を見る　種文
壹分の事で奉公に出る　史邦
なきがらに添て捨たる笠と簑　仝
かれし芭蕉を拜む木曾寺　種文

史邦二十五句　種文二十五

五吟哥仙

古 初茸やまだ日數經ぬ穐の露　翁
青き薄ににごる谷川　岱水
野分より居むらの替地定りて　史邦
さし込月に藍瓶のふた　半落
塩付て餅くふ程の草枕　嵐蘭
なでゝこはゞる革の引はだ　翁
ウ 年寄は土持ゆるす夕間暮　岱水
諏訪の落湯に洗ふ馬の背　史邦
辨當の菜を只置く石の上　半落
やさしき色に咲るなでしこ　嵐蘭
四ツ折の蒲團に君が丸く寐て　翁
物書く内につらき足音　岱水
月暮て雨の降やむ星明り　史邦
早稲の俵にほめくかり大豆　嵐蘭
胸虫に又起らるゝ穐の風　岱水
ふごに赤子をゆする小坊主　史邦
花守の家と見えたる土手の下　半落
細き井溝をのぼる若鮎　翁
名 春風に太鼓きこゆる族芝居　嵐蘭
のみ口ならす伊丹もろはく　岱水

琉球に野郎疊の表がへ　翁

是非此際は上ッものやく　史邦

見知られて近付成し木曾の馬士　半落

嫁入するよりはや鳴子引　翁

袖ぬらす染帷子の盆過て　嵐蘭

月も佗しき醬油の粕　岱水

草赤き百石取の門がまへ　半落

公事に屓たる奈良の坊共　翁

傘をひろげもあへず俄雨　史邦

見る目もあつし牛の日覆　嵐蘭

ウ

出店へと又も隱居の出られて　半落

干物つきやる精進の朝　岱水

手拭のまぎれて夫を云つのり　翁

駄荷をかき込板鋪の上　嵐蘭

人つゞく毛利細川の花盛り　史邦

聲も賢なり雛子の勢ひ　半落

古 翁 八句　七 半落 七　岱水 七

七 嵐蘭 七　史邦 七

難波在勤のつれ〴〵に撰集のおぼし立、其比予が發句など申來る。つかはし侍るとおもひしに取おとし、塵壺に殘りぬ。此集梓にちりばめんとて、わがもとに送たもふ。幸に一句を加ふるもの也。

まことにさるは哀なりけり。

月花に猿の背中のまるき哉　野童

京寺町二條上ル町
井筒屋庄兵衛板

陸奥鵆

全五巻

桃隣撰

雲霧長流のとゞまる處をしらず。片霞伊賀山の岫を出て、難波の浦にたゞよふ芦の若葉に生替る事、十とせあまり五とせにやなりぬべき。予黄口のむかし、破魔弓をとる手に賭弓の名を聞傳へ、竹馬に鞭をあぐるより競馬の爭ある事をしりて、終世利をいとひ遊民となつて、よすがなき花月の僕と身をくづをれ漸、壯年に至る。されば師が東行の袂にすがり、はじめて富士の高きを驚き むさしの廣きをうかゞふ。まことに風雅は野のごとく山にひとし。凡山岳千草の名のわかるゝ事も、ひとへに此道の爲に有なるべし。四時の變にまかせて、松嶋や蚶潟に神を動かし、玉川に筆を染たる驛の卷〳〵一集に綴り、其足形の跡をふんで、むつちどりと名付るものならし。

太白堂

桃鄰 印印

こゝろなや
うしろに
かつぐ
花の籠
立鶴子

(陸奥衛 卷二)

新樞會

片庇師の繪を掛て月の秋　桃隣
料理がましく彈青豆　其角
折形に蘭さし込て匂ふらむ　嵐雪
緋傘振出す轎の上　介我
橋の名を三子の口に繰返し　東潮
盲の腕に響く空打　仙化
雪圍ひ夜のまに柱かたまりて　素狄
跡の短かい鶤雞の時　堤亭
腹筋のよれる嘶を饗たり　神叔
出合て見れば誹諧の友　氷花
御供所といへども常に火の氣なし　沾德
窓をば葉にて編る赤松　執筆
水の音金谷の岱に聞えけり　芝柏
初の行脚の連もとんてき　巳應

住所我に事足二分坪　其角
又とる種も舟西瓜なり　嵐雪
中川の釣の盛や暮の秋　介我
肌寒からぬ肌の薄綿　桃隣
伶人の足本習ふ庭の月　仙化
老の寐覺に湯漬乞覽　東潮
幾世にか物好殘す花の陰　素狄
山吹あるはみな戻り駕籠　沾德

二

鯉喰て鬢を撫たる春の風　其角
ふられた中が戀の第一　素狄
下戸性の胸に思ひの行詰　介我
置所なきむかし長持　芝柏
讀聲のしどろに響く實語敎　堤亭
島のたよりは年に二度宛　沾德
薄曇難なく雪と云當る　桃隣
師走に入て京の顏見世　其角
中直り同竈のこゝろあひ　介我
兎角借り出す大名の金　仙化

聲を帆に生魚送る秋の風　素狄
是も七符か早稲藁の薦　桃隣
我親に中能僧も月の前　東潮
角力といへば人先に行　嵐雪

ウ

透されて鷲は歸らぬ大榎　其角
笠おもたくて雪を搖竹　介我
女にて若衆せたる御油の宿　東潮
にほひ袋に仕込七化　芝柏
此夏の扇は盡て骨ばかり　介我
尺蕣の華の一時　素狄
皿戻すこゝろづかひの秋鰹　巳應
屋根有舟や腮までの月　堤亭
敲く戸に裸で出る主の前　沾德
垣をおさへて風を追ふ聲　仙化
鳥さしも寺のあたりは除て行　桃隣
眞はぬかれて立る竹のこ　嵐雪
花の時屏風と椀をやつて置　其角
見て足音を止る蜂の巣　堤亭

三　鳥居より外の霞や綿帽子　東潮
拾ふた錢にたをさるゝ酒　素狄
眞黑な冶郎疊の四疊半　桃隣
袖も袂も匂ふ鵜づかひ　仙化
村雨の罌粟は袋に成にけり　其角
舌のまはらぬ小僧かゝゆる　芝柏
鋸の音は毎日うち普請　堤亭
おもはずあびる鮟鱇の水　沾德
雙六の賽の込ほど居じばりて　素狄
門から直に戻る掛乞　桃隣
丸藥はまさかの時の用遲し　介我
かびたやうなる濱端の岩　堤亭
吸がらの細く烟りて空の月　嵐雪
足は泥にて踊子のうち　沾德
三ウ　品川の横町淋し蔦かつら　桃隣
物引かぶるやまひ臆病　芝柏
媒が返事持て來てきしまかす　沾德
過世いかなるやりて同行　其角

ぬかる道付木を立て筋を見る　堤亭
泣れて急に貰ひ乳を待　介我
大黑は棚にころげて守るらん　嵐雪
無理すゝめにてすます老　素狄
尼寺の夜食は二時の物にます　東潮
上代やうを乞巧の文ッ　桃隣
まん丸に雀毛の立ッ月の暮　素狄
傘を道から戻す霧雨　巳應
物くるゝ心當あり華衣　東潮
養父入に出る若輩な髭　介我
名　見かけより鐵炮雉は手輕て　桃隣
子どもの鳴りのきこゆる平城　東潮
盗人を縛て笠をかぶせ置　其角
凝ぬ爲に朝は粥燒　介我
藺の跡のつきし莚を道の艸　嵐雪
着にくき羽織脱で來る花　沾德
雨氣やら耳の鳴出す日暮方　芝柏
さかなあらふも濁の水　桃隣

消そうな時面白き高灯籠　堤亭
　關所は月の明て人音　仙化
根を分て牡丹を移す石の間　桃隣
　生る笑ひを油彩色　其角
高樓は辷ル階子にこまりけり　堤亭
　うらみた面を君につめられ　素狄
名ウ
郭公きかぬといふも戀ならん　桃隣
　踵を搔てすはる酌取　東潮
色々の反古より和巾振ひ出し　沾德
　壁の濕氣に半戸立かけ　介我
三ッ引を透す火燵は不庸にて　嵐雪
　轉す卵のひとりとゞまる　仙化
蝶花に痲起を安く年を經ん　介我
　塀に根ざしの槌成桃　已應

遙に思ひやりし名所、風雅にひかれて近く見侍り。一句を窺ふ。

岩城山さおもへば香あり夏木立　桃隣

　梅首雞の群たる方は玉河　露沾
引起す朝寐の枕打やりて　助叟
　樂屋の札を僕が請取　沾德
坂ゆへに門も氣高き秋の月　沾荷
　筑山廣く出る初茸　兎谷
ウ
新蕎麥に口は匂ひて濃茶也　芳津
　土圭の鈴も濁るむら雨　沾國
別れには禿に髮を曲さする　兎谷
　何を諷ふもみな涙なる　桃隣
眞帆ながら播磨路過ル走舟　露沾
　ねぢれた松を庭にほしがる　助叟
新參律義な迄を取得にて　沾國
　壹分のあるもしれぬ付紙　芳津
緒桶は借りて漬たる宵の月　沾德
　根は隣にて此地の楷の木　沾荷
穴藏を出せば花のいつきりさ　兎谷
　彌生をおしむ鎌倉の僧　露沾
ナ
浮雲の雨に片寄雉の聲　助叟
　文字彫筏はや普請めく　沾德
長嘯の褒て涯れし此所　桃隣
　厠に遠ゝ弱る虫の音　沾國
露艸に影も寐て居る順禮等　沾荷
　歩行歩の役に當ル月の夜　兎谷
忍び夫是にしのべさ古革籠　芳津
　祈れば踊出る幣串　助叟

引登す板久(いたこ)の舟の脚早き　露沾
　二人天窓を入ル菅(すげ)笠　桃隣
夏漉(すき)の半紙なるらん此臭さ　沾徳
　蝿に雀の内までも來ル　沾荷
ウ
水待て薪を流す熊野川　助叟
　旅で豆腐の味は喰出す　芳津
忘れんと思へば吃逆(シヤクリ)猶やまず　沾國
　面〳〵硯引寄す床　露沾
あの崖は竹で持けり花の雪　沾徳
　地道ばかりを春の遠乗　兎谷

沾德岩城に少時滯留の幸を得て、文臺を捌き侍る。

元祿六酉三月十八日
人麿講桃隣亭

凡(およそ)又東叡山や花の種　枳風
　春は地よりも近き白雲　仙化
朧月赤貝舟の彌帆引て　全峰
　四五はしれずに詞闘ひ　氷花
面箱を物に中テたる上ゲ下シ　其角
　滑りを明る犬の鼻づら　介我
ウ
凩を火燵に凌ぐ大和機　桃隣
　修行歸に分ル鉢米　万卷
竹の垣鉋丁さしに成にけり　其角
　山水を取ル小田原の庭　枳風
養子聟一日二日のもの思ひ　氷花
　髮の結目のゆるき姿見　仙化
駕を椽まで上る武士めかし　介我
　一里前から音大井川　其角
鮨に置手比(てごろ)の石の撰からし　万卷
　ちいさき御師(おし)の神樂珍し　氷花
座頭連月に目明(めあき)は先に立ツ　介我
　待乳に舟をよせて虫の音　枳風
ナ
菌を荷作らせたる齋(とき)の施主　仙化
　名譽な僻で口で爪取ル　桃隣
隱れなき看板書の字の丸し　介我
　新地渡ると其まゝの垣　万卷
石灰の畑にむごき芥子花　桃隣
　藪の中にてつかふ洗足　仙化
繋がれて間なく動かす馬の舌　其角
　蕎麥急がせて廻ル小座鋪　枳風
懷の本の表紙は皺に成　介我
　頬摺をして思ひ切する　仙化
鎖戸に通へば目立宵の月　万卷
　早稲の御供を後手に持　氷花
ウ
葉隱の橘を鳴らせし山嵐　桃隣
　襟に掛ては輕き唐珠數　其角
着物の色も自味(じみ)成年廿(はたち)　枳風
　道具好する京の付合　氷花
粘(ねば)土は鉄を養ふ花の庭　万卷

物な隔ぬ蛙泥龜　　桃隣

芭蕉翁近來の發句、都鄙門人の集每に顯し侍れども、旅泊の竟界往來る度、あるは席〳〵にて云捨たる句など其數しれず。秀たるは世にひ　ごりて、人〳〵耳にさめぬ。しかれども遠境の聞は又傳に聞觸て、てにはの違、文字の誤りな見て情ならず。蕉門に志ヽ好人は日來是な歎き、たよりもがなとわがひけるに、予が行脚の幸な悅び、對談するよりひさしく、猿にきせたる猿の面　いかなる事にて侍ぞさ一句〳〵の問答、おの〳〵胸膈な開き、一筋に眼付替て風雅よごさになりぬ。且は此等のためおほくの門葉守ル處、旁捨がたくて新古のわかちなく、亡師の句四ツの部な立て百句、此度又愚集に加へ侍る。尤專傳甫閱の誤ヲぬな正すのみなり。

春部

人も見ぬ春や鏡のうらの梅

年〳〵や猿にきせたる猿の面

蓬萊に聞ばや伊勢の初便

大津繪の筆のはじめは何佛

春も漸けしき調ふ月と梅

鶯や餠に糞する椽の先

猫の戀止時閨の朧月

梅ケ香にのつと日の出る山路哉

鶯や柳のうしろ藪の前

傘に押分見たる柳哉

八九間空に雨降柳哉

青柳の泥にしだるゝ汐干哉

永き日を囀りたらぬ雲雀哉

雲雀鳴中の拍子や雉の聲

蛇喰と聞ばおそろし雉の聲

辛崎の松は花より朧にて

あすは檜の木さかや、谷の老木のいへる事あり。きのふは夢さ過て、あすはいまだ來らず、ただ生前一樽のたのしみの外に、あすは〳〵さいひくらして、終に賢者の譬なうけぬ。

さびしさや花のあたりのあすならう

花の雲鐘は上野か淺艸か

木の下は汁も膾もさくら哉

加州白山奉納

うらやましうき世の北の山櫻

東叡山

四ツ五器の揃はぬ花見ごゝろ哉

かづらきの麓を過る

猶見たし花に明行神の顔

景清も花見の座には七兵衛

望湖水惜春

行春をあふみの人とおしみける

夏部

鎌倉をいきて出けむ初鰹

木がくれて茶摘も聞や郭公

京にても京なつかしや時鳥

ほとゝぎす啼や五尺のあやめ草

行旅

野を横に馬引むけよ時鳥

深川

鶗鵑（ほとゝぎす）聲や横とふ水の上

不卜一周忌　琴風興行

杜鵑鳴音や古き硯ばこ

卯花やくらき柳の及ごし（腰）

駿河路や花橘も茶の匂ひ

紫陽草や帷子時の薄淺黄

ふらずとも竹植る日は蓑と笠

夕にも朝にもつかず瓜の花

鶯や筍藪に老を啼

粽結ふ片手にはさむ額髪

五月雨や蠶煩ふ桑の畑

桃隣新宅　自畫自讃

寒からぬ露や牡丹の花の蜜

石山に籠るさて

先頼む椎の木も有夏木立

子共等よ晝顔咲ぬ瓜むかん

那須溫泉

湯をむすぶちかひもおなじ岩清水

殺生石

石の香や夏艸赤く露暑し

須ヶ川 等躬興行

風流のはじめや奥の田植哥

蚶潟(きさがた)の雨や西施(せいし)が合歡花

西行ざくら

ゆふ晴やさくらに涼む波の花

貧家舍(にやどる)

蚤虱馬の尿するまくらもと

蝸牛角ふりわけよ須磨あかし

蛸壺やはかなき夢を夏の月

嵯峨に籠し比

六月や峯に雲をく嵐山

清瀧や波に塵なき夏の月

尼州野水新宅

涼しさを飛彈のたくみが指圖哉

秋部

文月や六日も常の夜には似ず

早稲の香や分入右はありそ海

あか〳〵と日はつれなくも秋の風

太田神社 寶物實盛鎧

むざんやな甲の下のきり〳〵す

胡蝶にもならで秋ふる菜虫哉

加州一笑墓に詣

塚もうごけ我泣聲は秋の風

高水に星も旅寐や岩の上

青くてもあるべき物を唐がらし

あの雲は稲妻を待たより哉

女木澤 桐奚興行

秋に添て行ばや末は小松川

古郷墓

一家皆白髪に杖や墓參

松茸やしらぬ木の葉のへばりつく

名月や池をめぐりて夜もすがら

夏かけて名月暑きすゞみ哉

名月や門へさし来る汐頭

敦賀にて

名月や北國日和さだめなき

夕顔や秋はいろ〳〵のふくべ哉

對伊陽門人

行秌や手をひろげたる栗の毬（イガ）

蓑虫の音を聞に来よ草の菴

重陽 南都に一宿

菊の香や奈良には古き佛達

びいとなく尻聲悲し夜の鹿

見所のあれや野分の後の菊

菊の後大根の外更になし

大坂 芝柏興行

秋ふかき隣は何をする人ぞ

冬部 鳳来寺

夜着ひとつ祈出して旅寐哉

炉開きや左官老行鬢の霜

口切に堺の庭ぞなつかしき

葛の葉のおもて見せけり今朝の霜

鞍壺に小坊主のせて大根引

住つかぬ旅のこゝろや置火燵

はむれい（范蠡）がてうなん（趙南）いこゝろな

一露もこぼさぬ菊の氷哉

乾鮭も空也（くうや）の瘦も寒の内

いざゝらば雪見に轉ぶ所まで

いかめしき音やあられの檜笠

寒菊や小糠（こぬか）のかゝる臼（うす）の端

金屛の松のふるびや冬籠

煤掃はをのが棚釣大工かな

兎も角もならでや雪の枯尾花

初雪や水仙の葉のたはむまで

闇の夜や巣をまどはして鳴衛

塩鯛の歯ぐきも寒し魚の店

振賣の鴈哀なり夷講

乞て喰ひ、貰ふてくらひ、さすがに
さしのくれければ

めでたき人の數にもいらむ老の暮

節季候を雀の笑ふ出立かな
分別の底たゝきけりとしの暮
魚鳥のこゝろはしらずとしの暮
蛤もいける甲斐あれとしの暮

春部

櫻咲く馬の面出す萱屋哉　露沾
いへばえに鼻毛植けり花の蘂　調和
鳥の蹴て花守さはぐ鳴子哉　立志
又二町櫻にまがる徑かな　山夕
桃の日や蟹は美人に笑はるゝ　嵐雪
新田にならで中〳〵汐干哉　擧白
月やあらん御幣子の顏白椿　不角
田螺取田づらもけふの汐干潟　無倫
寐る時や灯白き梅の枝　素狄
散花にとく〳〵戻ル清水哉　盤谷

誰もかも花待こゝろ十五六　介我
烏越の鳳巾が見えたる揚屋哉　艶士
淺ましき身にたぐへけり雛の金　紳叔
人の妻小者で見しる花見哉　琴風
袖口の繻子のさはりや玉柳　楓子
蒟蒻の名物問ん山ざくら　李里
風の來て馬の莚出す柳哉　風調
みがく齒と開きかゝれる梅何れ　臨江
寺の花茶の木齅もうらみ成　同
繼母の蹙見えけんさくら狩　讃秋
花盛柳の道や隅田川　八匡
梅を折ル人編笠に黒羽織　才麿
海棠や庭のけしきの東福寺　宇月
我主へ尻を向けり茅花狩　蟻少
手も足も後にはえたる蛙哉　三州 硼水
若鮎や落來る水の流星　槿堂

此春招かるゝ方ありて

分別に百里の羽や花の年　難波 その女

見上ればまだ日の殘ル柳哉　野坡
人の居ル所は黑し花の山　兎園
塞(ふさぎ)がばや櫻に並ぶ煙出し　直屁
櫻狩傾城請し世人哉　駿河國 秋山
あの峯に人はおらぬか山櫻　孤屋
物音も奥ある花の曇哉　利牛
川上へ流るゝやうな柳哉　濃州 此筋
朝起や獨花見の壁訴訟　仝 千川

旅行

散花や笠にあふぎて玉津嶋　仝 文鳥
百堂のうちに入レけり花の菴　紫紅
櫻貝や花の上漕帆かけ舟　桃司子
初霞立ばや部屋の庭の山　圓風
碎(くだけ)ずに煙の潜ル柳哉　氷花
打波に洲崎崩さぬ柳哉　桃舟
鶯の物に驚(コチ)けり隅田川　桃明
花鳥の分別若し三十二　山田 支考

餞別 郡境まで送り出ル

駒とめて片荷に立ん梅柳　那須黑羽 桃雫
春雨の晴て鳥の光かな　仝 桃賀
起されて腹も立ぬぞ花の時　仝 白桃
梅が香にひかれて壁の崩哉　仝 桃水
雲連て原にひろがる霞哉　奥州石川 等盛
難波津や明の星咲としの花　仝 等般
藝のなき人は通さじ花の闇　等盛
思ふ人覗(つそき)逢(あり)けり窓の梅　仝
梅咲や長暖簾の布袋殿　その女
世の中や大根の花も藤色に　桃鄰
有增の願(ねがひ)は盡ず初ざくら　此筋
鶯の梢を廻るあさ日かな　堤亭
物おもふ人の姿や朧月　奥州桑折 不碩
花守の疊や窪ム尻の下　仝 桃祇
雨風にならで消行霞哉　仝 馬耳
花一重戻りは八重に成にけり　奥州日和田 芦葉
帶ほどに川は流れて汐干哉　沾徳
海苔取リの赤き足見る嵐哉　尺艸

口の筋や流るゝ花に舞胡蝶　日ノ田 等芳
春雨や花見ぬ代に物の本　名古屋 仙木
茶を摘て花見ぬ姥や小町顏　仝 黄花
　雪鶏墓に詣
卵塔の花生割ル日數かな　岡山 兀峯
人家あり煙の中の梅の花　村矢
喧嘩する聲音笑はん百千鳥　浮生
近〳〵と寄ル人いかに山さくら　二本松 文車
とても此足袋踏込んよめがはぎ　仙台 滿松
花に來て駒牽錢ぞ殘りける　馬耳
咲かゝる藤の曇りや井戸の上　白獅
逞き松も眠るや春の雨　桃鄰
陽炎や上り坂行牛の面　新眞
　介我興行
磯山や波に打込ム雉の聲　茄毛
梅の晝湯屋に法師の預ケ物　冬市
駕や花の料理の組所　玆少
垪土も香に離れぬや梅のもと　少喰

庭帶廻れば廻る胡蝶哉　成田 秋園
白雲の一段下や山ざくら　仝 林翠
捨る身や花見に足の續く迄　仝 夕亭
畑から頭巾呼也若菜摘　其角
出替りや其門に誰(たが)辰の市　嵐雪
鶯や枝搔さがす聲の隙　介我
物よはき草の座とりや春の雨　濃州 荊口
七種や跡の拍子は鳥の骨　桃鄰
　立志興行
風雅なる人の手柄や初ざくら　志言
横に來ル礫をとむる柳哉　冬菊
杏や和尚の前に藥酒　橘之
行春や名殘に今朝は谷中迄　秋田 呂長
まばゆさに尖ふ空の雲雀哉　同
たゆまぬもひとつ綠の柳哉　奧州白川 盧柱
手にとりて見られぬ雛の器哉　同
　於別屮興行
朧夜や眼鏡懸ても朧月　立鶴子

名もしれぬ小草酢で喰汐干哉　立志

糸嶋の襟行出して若菜摘　その女

水物も鷲にふませぬ櫻哉　九梅

藤棚や場を取ル琴の乗セ所　桃鄰

雛の尾にすられて偷む蛙哉　冬菊

深川庵

おもふさま遊ぶに梅は散らば散し　行脚 惟然

東叡山

花の山ほうど妹を褒にけり　冬市

曉の風を見かけて花見哉　桃鄰

塩鴨の世話やく比や遅櫻　濃州 枯竹

蜂の巣や笠持ながら這入口　仝 走風

畦は皆塗込られて菫かな　仝 呉竹

躑躅より若葉に移ル稚子哉　黒羽 桃雪

山里の梅や干菜の先ヅ匂ひ　同

春雨や寐返りもせぬ膝の猫　蘆野 桃醉

暮六ツにじつと落着柳哉　等盛

心より花に蝶咲柳かな　馬耳

青柳に念なかりけり朧月　杉風

遅咲の梅や櫻の道塞ケ　桃司子

とまりつゝ雀あふのく柳哉　濃州 海動

出替りや乳の日利が一の筆　その女

蛙鳴とぎれ〴〵や水の音　山形 風山

淋しさの始り見たり朧月　同

櫻咲比ぞ隱者の古疊　桃鄰

右は瀧左は藤のなだれ哉　蘭水

阿久津川より常陸へ過る。

行舟や筑波に瀬とる春の雲　山形 風陽

手拍子も厭へさくらの眞盛　羽藤田 如濁

沖の石けふぞ汐干の酒香場　文車

舊臘桃隣へ雉子を送りけるに、問屋に滯り、屆かざりければ

むさしのや苞の雉さへ飛で行　那須烏山 新文

池邊花

色もなや水に移ふ華の裏　方雨

奉納

蜜の香や七ッ曲りて山櫻　桃鄰

猫の戀通ふや犬の鼻の先　（庄内）重行

牛追の費をせぬや若菜摘　蘭水

編笠の紐も付たり春の雨　止水

花散て呼聲低しひらめ賣　青洋

麥洗ふ日は何時ぞ藪の梅　猊山

回文　絕てさくらのなかりせばと、よめるごとく、花なくば何をよすがに

さくらのみ苦よ春はよく身のらくき　臨江

（陸奥鵆 巻二）

夜雨吟

五月雨や硯箱なる番椒　嵐雪

藜蘆に雙ブ早苗一株　桃鄰

風〱にしよろ〱瀧の拗つきて　神叔

塩魚の荷の驛を行年　冬市

動突の有明かけて鳴渡り　桃鄰

濡た扇をしぼる其露　嵐雪

飛〱に四石八木むら栬　市

盛な男老を組臥　叔

糸底に糸を巻たり嫁の五器　雪

宿替名替何思ふらむ　鄰

鰒歩く世間に臭事もなし　叔

石路や汚桶の雪を見て寝る　市

氣遣な海を脊に住こなし　鄰

是も小鳥の中か雁金　雪

手の下の君にぬかれて晝の月　市

花火の立場あれさ喟　叔

あなつたなの丶字を眞の筆づかひ　雪

羽織嫁ひの寒うない顔　鄰

二

喰付て跡から時宜を思ひ出す　叔

一人の女等を賦たり蹈たり　市

半分は祭の迯て八ッ時分　鄰
凉しい風の雪隠へ來る　雪
海面に根もたい煙もつて居る　市
イスぬく骨牌かるたけふも暮しつ　叔
此足は君かと問ィて冷火燵　雪
拔キ刀にて迫はれたる夢　鄰
輕氣が徳じや〳〵と叢もはや　叔
茶うけの中に筑つき山の鎰かぎ　市
結構な加賀の金澤月も照ル　鄰

ウ

謡ウタは秋かぜ戀はみ所　雪
恨なき手鍋の下に萩も燒ク　市
楔クサビを俵にかつぐ普請場　叔
繪で見れば皆近付の名所也　雪
人にそげたも一代の損　鄰
よき物は花に灯暮に雨　叔
榮耀になりぬ元日の夢　市

面六句

水無月や友を尋て南向　翁和
爪引落す文臺の前　東江
雷が好物なりと面ツラ出して　秋雁
脊から馬を雇ふ山坂　梅旭
鳴りもせぬ笙吹しころ桂影　希叉
矢の跡もあり色替ぬ松　執筆

仙臺杉山氏興行　山川の富を祝す

氣を濯ぐ淸水や影は青葉山　桃鄰
郭公づれほとゝぎす來ン　流和
雙べたる木具に羅うすもの打かけて　助叟
五段の舞は皆眠るなり　千調
けふの月松の透間は西の方　獨笑
御所柿つけて出ル鐙付ケ　い角
酒もはやほか〳〵として露しぐれ　枝水
貰ひ羽織はゆきの揃はず　朱角

ウ

逝ては乳守の親と名乘かれ　玉陽
後うしろあがりのれつゐ鬂びんつき　沾玉
順禮の札はうたれし柴屋町　晩濤
茶碗を割て何を叫ク　有角
いやながらたらりになれと灸相手　流和
夏も紙子の夜着を引摺ル　桃鄰
空堀の暗い所にかきつばた　千調
行に隣の遠き在鄕　助叟
差當ル小謠ばかり口つきて　玉陽
愈なほらぬ病ぬすみなりけり　枝水
門松を買納ても春めかす　朱角
母を繪にかく山寺の兒ちご　獨笑
月や空そら華の鏡の水呑て　助叟
矢を通してはかざす白梅　晩濤

ニ
地に落てはなれぬ蝶の一もつれ　い角
雨氣になれば狭き海道　流和
銀屏のふすまり唯の物でなし　桃鄰
立振舞が嫁は嫁なり　有角
文讀で匣の底に押隱し　沾玉
さもない事に申ス念佛　獨笑
更科へ通れば木曽へ關一ツ　千調
二寸又廣く打直ス捺　枝水
張貫に力の見えぬ鎧武者　沾玉
南部を出て京をいやがる　玉陽
ウ
勾當の中に燕尾や兎ス覽　桃鄰
祕していはぬを妙薬の妙　助叟
船嫌ひそつさはづして岡の月　沾玉
秋も蚊帳を好ム傾城　曉濤
誰思ひ葡萄を隅に一包　流和
禮もいはずに戻す文臺　朱角
關には猶白き筋立銀河　助叟
二里十文で牛に乘旅　桃鄰
手拭に榧の匂ひの染殘り　有角
鎖貫さしにさゐた脇指　玉陽
花の陰煙のたつは臺所　曉濤
蟆も穴を出てうごつく　い角

伊達郡桑折田村氏は、武江不卜門

葉にして、年來此道を好み、陸の巷を踏分たり。迷ひ行下官、彼が扉を敲き、膝をゆるめて

誰植て桑さ中能紅畠　桃鄰
蓬蒿藺に莊隱す宿　不碩
陸の膳旅の行衞をこさぶきて　助叟
子どもの三十おさな名を呼　馬耳
月に寢て羽織を夜着に取替ん　東舟
蝶のつゐでに榎まで伐ル　桃鄰
ウ
途ル壁も男世帶のやりはなし　不碩
こゝろこ染ぬ憂世佛法　助叟
其恨果さずありけり大邪　衣吹
根をよく聞ば繼の盗人　東舟
住馴し二十間しり莚の花　馬耳
月は更たか吸ものゝ音　衣吹
岡野の津の祭に伊賀も打交　桃鄰
肩のいかりは先角力さり　不碩
檢斷の役は達者に物書て　東舟
二時寢れば頓てしのゝめ　馬耳
けふの花茶は手前より持スべし　衣吹
又燕のうゐた梁　桃鄰
名
海よりも霞の登ル峯の坊　桃祇
感を催した辭世語り句　不琥
稚は田舍の水に色黑し　馬耳
後目づかひにせざる二腰　桃祇

御忍の鈴さ一度に番を引　不碩
此降雨に何鳥の啼く　衣吹
百年は疑もなし杉檜木　桃鄰
裏町は皆禰宜さ山伏　馬耳
先様の當名忘るゝ狀使　不玻
師走の果が尚慕ル戀　桃祇
まじ〳〵さ寐られぬ思ひ氷る月　衣吹

こちからさきへ突あてた舟　不碩
ウ
羽のぬけて頬に鳫の聲高キ　馬耳
青田の末も青き席の葉　不玻
蒲原の屋れも損ル不二颪　桃鄰
神軍さや海の眞中　衣吹
一本の花千本にひろごりて　馬耳
酒よゐ〳〵さ名をさりて春　祇桃

遙に旅立と聞て、武陵の宗匠殘りなく餞別の句を贈り侍られければ、道祖神も感通ありけむ。道路難なく家に歸り、再會の席に及び、此道の本意を悅の餘り、をの〳〵堅固なる像を一列に書て、一集を彩ものなり。

子の彌生　日

調和

不角

艷士

常陽

盤谷

長途日毎變

嵐雪

沾徳はみちのくにくだり、東潮は宮古の花に行、他の餞別は爰に略す。

往し春蕉翁が東行を思ひおりて、こたび先師の枝折を尋、松島の夕陽・象潟の朝旭をたどりぬ。遥き境・險しき山路・深き江・遥き瀬・野に寐、里に明るの艱、おもへば翁の心ざし哀にもかなしく、予が行旅の首途に二たび、像を拜せしめんがため、畫工につけて物し侍りぬ。無下に紙魚(しみ)の古巣にせざらん事、本意なく今爰にあらはし侍りぬ。

芭蕉

名所の同名數多ある中に、緒絶の橋、奥州に四ヶ所有。いまだ是非はしらず、玉川も又同じ。世にしりて常におぼえぬは奇なり。

山城　むかし誰うへはじめてか山吹の名を流しけんいでの玉川　俊成
攝津　見渡せば浪のしがらみかけてけり卯の花さける玉川の里　相摸
近江　明日もこん野路の玉川萩越て色なる浪に月やどりけり　俊賴
武藏　玉川のさらす調布さら〳〵にむかしの人の戀しきやなぞ　不知
陸奥　夕されば汐風こしてみちのくの野田の玉川千鳥鳴けり　能因
紀伊　忘れてもくみやしつらん旅人の高野のおくの玉川の水　弘法

右六首つかれて
むつ千鳥むさし調布近江萩
山やまぶきにきさく津は卯の

夏部

その道に汗忘れけり風炉(ふろ)の炭　岩翁
風の間は何にかたよる時鳥　杉風
潛ル鵜に藻の花動く淺瀨哉　旭志

着せて見て我笠買ん門凉　琴風
根を空に瀧と落たる若葉哉　楓子
卯の花に茶の園香ある菴哉　淵松
ゆふがほや淡泡汲かけて水車　その女
聞と云氣も二三度ぞ郭公　玆少
猫の子に馴(かま)れて居るや蝸牛　才麿
物の音も鈍(にぶ)で貴し夏神樂　秀和
切口に池の水持菖蒲かな　介我
引盡す菖蒲の跡や田のつもり　桃隣
一重宛散ルを牡丹の賴ミ哉　石周
麥(むぎ)擔(かつぐ)興津の海士の暇かな　伊賀 猿雖
闕守の灯を名殘也郭公　朝叟
時鳥鳴や並木の山續き　十四才 桃士
五月雨や蚓(みゝず)の潛ル鍋の底　嵐雪
哀さや蠅にたかりし蠅の數　立志
爪立て跡見送るや時鳥　深川 淵泉
卯花や白き胡蝶も二ッ連　深川
人の內見込て通ル凉かな　千川

蚊柱やさて是程に風のなき　素狄
水際や手の皺悔るかきつばた　風調
虫干や人の哀を古着店　桐奚
甚狐ねぢむく跡や田植謳(うた)　名古屋 仙木
並松や二筋通る蟬の聲　仝 孤山
割鐘やわれぬもおなじ五月雨　權堂
簑虫のぶらりと涼む木陰哉　李下
日暮から行灯(あんどん)出す螢哉　同妓 はな
更衣替ぬもつらし夜着蒲團　桃鄰
蝸牛(でゝむし)の這引形や車牛　志言
五月雨や石切石を切やまず　冬菊
もだれ居て壁暑苦ろし椶櫚(しゆろ)箒　少喰
水茶屋に眠覺たり蟬の聲　硧水
誰なくて舟流したる五月雨　山夕
夏草に脇指さして見せばやな　惟然
水打が已が身に知ル涼かな　立鶴子
一嵐比良(ひら)のうつりや藻刈舟　氷花
起兼て蟬のもだえや石の上　冬市

涼しさよ枕に借りし袈裟衣　山形 風陽
筏士は流〱て涼かな　等盛
勅筆に地(ち)下(ゆ)の歌有時鳥　九梅
澤(おも)瀉(だか)の花や苦樂の水離れ　眞義
藍蓼の丸ふ生(そ)長(だつ)し利(り)根(こん)哉　艶士
世話やきが持ッてまはつて蚊遣哉　猊山
榊葉や枕返しの郭公　青洋
江戸の譽れ若紫の小鰺哉　九梅
笋やゆがみ廻つて椽の下　蘭水
藪臺に麥を干けり御本陣　松花
橘や奈良の宮古の土の香(カザ)　春桐

松が岡

呵(しか)ル所まで行清水哉　僧 白仙
初幮(かや)にはや朝寐せん思ひやり　臨江
麥の葉に慰行や小山伏　才麿
蓮(はちす)見や寮より出て高足(たか)踏(だ)　讃秋
川筋や薪割ルうしろけしの花　常陽
幸にけし銀有ぞほたる賣　白絲

晝顔や砂より覗く海の端　如濁

藪垣や雀に交ル烏瓜　桃司子

唯居ても肩癖強し五月雨　圓風

夢想

垣の目に水の出ばなや花菖蒲　李里

端午

三河町軒の菖蒲やかきつばた　秀和

呑切て涌ク間を凉ム清水哉　槿堂

杣共が聲の響や雲の峰　朝叟

藥草や撓むまゝなる古清水　新眞

郭公扨山畑の片下り　柏十

深川の末や女中の茄子狩　桃隣

五月雨や杖にて探る井戸の上　橋之

凉舟狹くて廣きこゝろ哉　立鶴子

屋敷出と帷子の香にしられけり　伸龍

幅廣く聲は落けり郭公　神叔

罌麥散てつむり打合ふ畠哉　宇月

斑猫のあとさきになる暑サ哉　羽黒山 呂茄

杜若並の草の青みどり　仝 卽堂

ふりもどり富士見る富士の下向哉　桃鄰

簾下ゲて誰ガ妻ならん凉舟　女 秋色

餞別

又見せん梧桐の花を祝種　桃雪

黑き蝶飛跡白し風車　那須 翅輪

首夏

引裾にもの忘けり更衣　その女

五月雨に前キの帶取ル小橋哉　盤谷

卯花や立歸香ニ水の味　秋田 蘇堂

此次に鬼の出けん雲の峰　仝 子焉

五合帆に蚊もあらばこそ沖の月　仝 友吟

うたはせて鷺の植行早苗哉　仝 林翠

家〳〵の楊貴妃見ばや更衣　子焉

夕凉女ばかりぞ袋町　濃州 波艸

立歸ル鮎の命や築枕　仝 海動

更衣塗長持や一二附ケ　仝 芝尺

讃秋興行

一間の床は牡丹に呑れけり　不角
尼寺の素天窓凄き涼かな　氷花
瑠璃燈に曙青し五月雨　浮生
蟹を見て氣の付岨の清水哉　桃鄰

相州いせ原にて
戻り足御迎ひ松も雲の峰　常陽
朝濕り紫陽草轉て水の隈　仙臺 千調
都かな一夜漬にも初茄子　仝 玉陽
珊瑚珠の玉とならぶや初茄子　仝 雲水
松嶋の松の香もあれはつ鰹　仝 沾玉
笋のうちやゆかしき節の數　仝 晩滄
一日に寺の田植は仕舞けり　仝 獨笑
京染を見るや菖蒲の露の跡　玉陽
山鳥瀧を蹴て行暑サ哉　東潮
坂毎に修行者は行ケ杜宇　沾徳
獺のぬれしかたちや宵の雨　岩翁

平和泉へ通るさ聞て
此奥の趣向の外や夏の月　仙臺 牛水

朝霧に畑の麥蹈ム裾輪哉　村失

机に附た曲
水無月や人の來ぬ間は丸裸　桃鄰
葭雀や泓のむかひも寺の中　浮生
越瓜もふくべに成て終りけり　堤亭

亢龍悔
喫つめて是も悔あり花葵　奥州 不碩
蚊禦や寐た子の側を探リ足　仝 不琙
五月雨に讀仕舞たり太平記　仝 衣吹
居直りて調子替たり松の蟬　仝 桃祇
闇は猶螢影增ス清水かな　馬耳奴 馬夕
淺香山影や蚊遣の細明り　須ケ川 等躬
時鳥みなつきねとや二番艸　同
一八に言葉もかけず牡丹哉　桃鄰

打麥歌
蟬鳴や麥を打音三ゝゝ　嵐雪

多田院に詣
金にて鑄つべき顔や合歡花　その女

唐芝や四人口よりは簟(たかむしろ)　千調
若竹や喰氣はなれて風の音　同
汗入て跡いたゞくや辻地藏　二本松 不仙
若竹や氣遣もなき鶯鳥　白川 一葉
凉所や居住居直す親の前　不碩
見分ぬは櫻本意なし夏木立　芦野 寸意
わりなさや螢も廻る水車　名古屋 孤山

高輪を過ル

戸を五寸明て帋帳を疊ミけり　尺艸
煠けたる鵜匠の顏や朝朗　桃鄰
石磨も庭に馴こし苺(こけ)の花　同
夕顏の花や日に立玄關前　桑折十一才 如風
隱家をさがしに來ては苺(こけ)淸水　仝所 凉風
投うてど逆サにならぬ早稻哉　等盛
石竹の夕立はやき野分哉　無倫
呼聲の中や幾(いく)足(あし)晒賣　臨江
貧 おほた子に髮なぶらるゝ暑サ哉　その女

天王祭

水無月や端籬となる町の木戸　春桐
更衣帯のむすび目替りけり　等般
川風や撫子一ッ動き初　同
木枕を二ッ重ねて夏座鋪　那須 桃賀

餞別

紙入に忘れそ脊薦乾生薑　旭志

（陸奥衛　巻三）

陸奥にくだらむとして、下野國まで旅立けるに、那須の黒羽と云所に、翠桃何某の住けるを尋て、深き野を分入る程に、道もまがふばかり草ふかければ

秣負ふ人を枝折の夏野哉　芭蕉
　青き覆盆子をこぼす椎の葉　翠桃
村雨に市の假屋を吹とりて　曾良
　町の中行川音の月　芭蕉
鷹の子を手に居ながらきり〱す　翠桃
　萩の墨繪の縮緬は誰　曾良
ウ
物いへば小笠に顏を押入るゝ　芭蕉
　みだれた髮のつらき乘合　翅輪
尋るに火を燒付る家もなし　曾良
　盗人こわき二十六の里　翠桃
松のねに笈を雙て年とらん　芭蕉
　雪になるから連歌はじむる　翠桃
鹿机にておかしき小野ゝ炭俵　翅輪
　礎うたるゝ尼達の菴　曾良
あの月も戀故にこそ悲しけれ　翠桃
　露とも消ぬ胸の痛きに　芭蕉
錦繡に時めく花の憎かりし　曾良
　己が羽に乘蝶の小車　翠桃
名
日傘さす子どもすかして春の庭　翅輪
　ころもを捨て輕き世の中　桃里
酒呑ば谷の朽木も佛也　芭蕉
　狩人歸ル血の松明　曾良
落武者の明日の道問ふ草枕　翠桃
　水ごと〱と御手洗の音　翅輪
日中の鐘撞比に成にけり　桃里
　一釜かする美濃の莖長　曾良
乞食とはしらで浮世の物がたり　翅輪
　洞の地藏に籠ル有明　翠桃

蔦の葉は猿の涙や染つらん　芭蕉
冬を隣て流人柴刈　桃里
ウ　けふも又朝日を拜む石の上　芭蕉
殿付られて唯のする舟　翅輪
奥筋も時は替らずほとゝぎす　曾良
囀ずに呑と投ッ丸藥　翅輪
花の宿馳走をせぬが馳走也　桃雪
ふさぐといふて火燵共まゝ　翠桃

けふは那須の篠原をたづね、猶殺生石見んと約諾して、竹筒など認けるに、未明より卯花くだし外も覗かれず、なのづからの滯留、なのくめでくつがへり餞別ななしぬ。

剛力に成て行ばや湯殿山　桃賀
布子袷の跡は帷子　桃隣
芝屋根も南東を引請て　翅輪
いやさいふまで朝茶汲出す　助叟
今の間に霧の晴たる峯一ッ　桃水
星の備へを崩す有明　白桃
ウ　此濱の鹽は苦さ名を立て　桃栗
無理に鳴らする竹の螺貝　桃賀
題目さ大形顔に見えにけり　桃雪
積る雪也後張に降　翅輪
朝に明離るゝか三番三　助叟
借さぬ羽織を是非に脱する　白桃
塒のない戀に心や碎覽　桃栗
黑ばかりで櫛いれぬ髮　桃水
守にさ賀茂の葵なさつて來る　助叟
若葉を花に打轉す樽　桃隣
月代の遲き筈也山百重　桃賀
頭襟はづして露を引ッ敷　翅輪
名　うはくさ何やらかやら渡り鳥　桃隣
居ながら手水つかふ淀舟　助叟
せつゐても藥呑ぬは下忠ひ　白桃
喞く聲な暖簾の風　桃賀
引出しに草履も見ゆる大工箱　桃隣
搔鎗にて祝ッ朔日　助叟
十軒に足らぬも村の名を付て　桃栗
形を四角に作ル笄　桃水
ぞつさして鼻の塞年の程　翅輪
ふまれざ馬に踏馬の札　桃賀
後の月西行谷へ呼つられ　桃隣
松露さるにも上手下手有　白桃
ウ　先度から角力くさ觸廻り　桃水
疝氣も道理个朝の初霜　桃栗

衣〳〵にごうのこうのさくごつきて　桃隣
天窓の丸ィ癖に目遣　翅輪
花鳥は旅の養生さやならん　助叟
是が柳の根より涌水　桃栗

三唫　介我　桃隣　東潮

人形の手にも成シたり角頭巾　我
霜置比に響く鉄棒　隣
月影は坂で途切ル町寒て　潮
牛の子呼に野の方を見る　我
氣味悪キ淵の際より梅椿　隣
浅黄の袷を万歳が旅　潮
ウ
女等雉子の毛焼を黒木竈　我
立たり居たり余所目余所事　隣
星ありて封疆八丁のむら時雨　潮
香炉や轉ル領口の風　我
雌方習ヒ〳〵さ意味付ケて　隣
我ガ物拾ふ大酒の跡　潮
舟に積ム伏見御殿の崩壁　我
楓の外もみな紅葉也　隣
月額の疵にしむらん後の月　潮
鹿の一肢さ見る萱の形　我
あつかまし池鯉鮒の君も花の數　隣
腰さ柳はおなじ影法師　潮

名
居へ暗を蝶や追来る日八分　我
此中息子寺にほしがる　隣
大骨をからむ病に雨をしる　潮
陳な關所は田哥聞飽　我
若竹の枝をおろして諏訪の海　隣
筈を射闘タ笠掛の壁　潮
遠餘所は手摺のやうに馬場を乗ル　我
龍眼肉は憶で喰ふ　隣
怪からぬ朝の鏡は寒渡リ　潮
妬に石をくゝるむ雪打　我
一筆に恥も紛れて月清し　隣
踊の夢は寝ても描擲ツク　潮
ウ
峯入が簑代衣ひけらかす　我
扇をあてゝ焼物を見る　隣
下座より将棊倒しに花の陰　潮
草にかけて藤のしら波　我
鷽の彈ケ琴に戯化や眠るらん　隣
空に根のなき二月の雪　潮

雨唫

上氣者先へ見て取ル櫻かな　鋤立
風一押に海棠も散　桃隣
鍋手の猪口に田螺も亢て　仝

男太夫は咎そうな顔　立
二階から囃を覗く月の雨　全
まだ幗を釣ル秋の帷　鄰
草の花芦の温泉にせん木賀にせん　全
角前髮に坊主眼がない　立
戀種やいつの間にな賣扇し　全
土器作り號も焼　鄰
伊勢参京へよらぬも哀也　全
榎木で月夜明す大水　立
重陽や尾上の家に餅を搗　全
屓た角力が勝た振する　鄰
金掘りさ色の青サにしられたり　全
鳥居の施主の滞リ初むる　立
華さのみ傘走ル玉あられ　全
出双引提ル鮟鱇も梅　鄰
名
親方も治郎成けり春の宿　立
擧句に戀なあげる挨拶　全
夜紛ふ扇の白地薄淺黄　鄰
南大門の凄キ風　全
一文に念佛買て夕日影　立
髭の奴が黄疸を病　全
楡の木な味噌煮ル竈に横渡シ　鄰
噺を請て來ては長尻　全
桑染の下着も古き大屋殿　立
蘇鐵見よさや炉路明て置　全
月もけふ鳴尾の西瓜前の魚　鄰
又云出、紫宗因の烌　全
ウ
身に何ぞ有時露の面白や　立
彌勒唱て舌甘クなる　全
青疊鋪たも見ゆる華の山　鄰
そや郭公巣を立ツがる　全
蹈皮賣が仕舞ッて登ル春の風　立
名は吾妻菊醉倒レ也　鄰

元祿六酉仲秋、深川芭蕉菴留主の戸に入て

生綿取雨雲たちぬ生駒山　其角
芋の煮賣の中の松茸　桃鄰
雙ノ舟月の水主見かはして　介我
乳呑子寒く羽織着てゐる　角
舞鷹にちいさく成し鴻の鳥　鄰
柄に印有小田の捨鍬　我
ウ
のせ替て笠結付る駕籠の上　角
樗片取ル商の小屋　鄰
今の体親に似ルさて呼返ス　我
二十四五まで定らぬ心　角
紋好の貴いさはでなまめかし　鄰
加へを専に祝言の酒　我
人がらも扶持取ル醫者は武士張て　角

鎖は外へうつる挑灯　鄰

井の盞な敲ば氷ル空の月　我

納屋は寐聟に語る上瑠璃　角

参宮も見はやす顔も花の時　鄰

法躰金なのけて置春　我

鈑太刀具足の餅の幾重　角

畳の上へゆるす獅子舞　鄰

頓作は口より筆の働きで　我

坊主還りは不性成けり　角

名

蘆な撰ル最上の紅の朝市に　鄰

野越しの艸の蟆にさゝるゝ　我

革靭うしろに戻る峯の月　角

冷な　風　瀧　の　線　鄰

樫の木に椎茸出ル雨上り　我

半田の灰の霜にこぼるゝ　角

和巾まで其色替て歌仙貝　鄰

禿額は眉かけてつむ　我

ウ

誰レな誰ガ文珠普賢にうつしけん　角

彼岸七日な天王寺山　鄰

散花な風に吹込ーかます錢　我

施薬院より若艸な摘　角

四塚のぬるみな水の末にして　鄰

雁行跡は一双の鶴　我

貞享五戊辰菊月仲旬

蓮池の主翁、又菊な愛す。きのふは廬山の宴な開き、けふは其酒の餘りなすゝめて、獨吟のたはぶれさなす。猶おもふ、明年唯かすこやかならん事な。

十日菊

いざよひのいづれか今朝に殘る菊　芭蕉

殘菊はまことのきくの意哉　路通

咲事もさのみいそがじ宿の菊　越人

きのふより朝露ふかし菊畠　友五

かくれ家やよめなの中に殘る菊　嵐雪

此客を十日の菊の亭主有　其角

もぎのこす茄子はいづら菊の園　嵐蘭

さか折のにゐばりの菊とうたはゞや　素堂

よには九の夜、日は十日といへることを、ふるき連歌師のつたへしを、このあした盞を拂ひて申侍る。

又中ごろ

戀になぐさむ老のはかなさ

おかしせし思ひをさゝの梳にて

我此こゝろなつけにあはれぶ、今

猶おもひいづるまゝに

はなれじと昨日の菊を枕かな　　同

十三夜

芭蕉の菴に、月をもてあそびてたゞ月をいふ。越の人あり、つくしの僧有、まことに浮艸のうきくさにあへるがごとし、あるじも浮雲流水の身として、石山の螢にさまよひ、さらしなの月に嘯て菴に歸る。いまだいくかもあらず、菊に月にもよほされて、吟身いそがしいかな。花月も此爲に暇あらじ。おもふに今宵を賞することも、みつればあふるゝ悔あればなり。中華の詩人、わすれたるに似たり。ましてくだら・しらぎにもしらず、我國の風月にさめるなるべし。

もろこしに不二あらばけふの月見せよ　　素堂

かけふた夜たらぬほどこゝる月見哉　　杉風

後の月たとへは宇治の巻ならん　　越人

後の月名にも我名は似ざりけり　　路通

我身には木魚に似たる月見哉　　宗波

木曾の痩もまだなをらぬに後の月　　芭蕉

中秋の月はさらしなの里、姨捨山になぐさめかねて、なをあはれさのめにもはなれずながら、長月十三夜になりぬ。こよひは宇多のみかどのはじめて、みことのりをもし世に名月と見はやし、後の月あるは二夜の月など云める。これ才士・文人の風雅をくはふるなるべし。閒人のもてあそぶべきものといひ、且は山野のたび寐もわすれがたうて、人〻をまねきて瓢を扣、峯のさゝぐりを白鴉と誇る。隣の家の素翁、丈山老人の一輪いまだみたず二分虧といふ唐哥は、この夜折にふれたりと、たづさへ來れるを壁のうへにかゝげて、草の菴のもてなしとす。狂客何某しらゝ・吹上とかたり出ければ、月も一きははへあるやうにて、なか〻ゆかしきあそびなりけらし。

千里といひしは、芭蕉に隨て、尤年高し。一向此道の話を好て此道にさかしく、此道を翫て大悟を得たり。道に入の偈を作りて李里に與ふ。李里これを予に告る。予もまた同門の見きに耻て、かいやり捨がたく傍にしるしぬ。

入道偈　　千里　又損居士

心月由來無閉關　本源自性離塵埃
損之又損損非損　是贊是眞任去來

はらへたゞ我もとゆいの秋の霜
かゝれとてしもみずや有劔

一筋に思ひ入日の影法師
あるをありともなきをなきとも

元祿丙子文月十七日

秋部

甲斐の府にて申侍る。

晴る夜の江戸より近し霧の不二　素堂

花薄階子つれなくこけかゝり　嵐雪
輪ばかりの車も淋し壁の蘿　氷花
鑓持の振まはさるゝ野分哉　琴風
己が臍見ぬといふ也角力取　盤谷
稲妻や拍子踏間を橋の上　介我
化粧して地藏祭や京の辻　寒玉
一塩の妻もあるらん天津雁　其角
貰はれし其子があれか角力取　岩翁
菊の宴牡丹を祝ふ日はいづれ　風調
唉や芙蓉けに芍藥の再從弟　志言
作らねば貰ふも安しけふの菊　宇月
どこやらか苦き香もあり梅擬　蛙歌
泚水や千種の虫の餌殘り　尺艸
曉の瓦燈に凄きいとゞ哉　京 掉歌

如行を尋て

菊の香や心當なる町の奥　大坂 芝柏
七夕や戸障子立ル夜半過　荊口
稲妻や誰ガ目から出て雲に入　山夕

せがまれていろは書けり星迎ひ　濃州 燕下
茶袋の干場や菊の力竹　仝 水魚
むさしのや薄見に行蓑借ん　信徳
置霜に菊の力や油糟　大坂 車要
十團子も小粒になりぬ秋の風　許六
娘どもいでや西瓜を力持　三州 槿堂
靈棚の栗にさきたついの字哉　嵐雪
あれ見たか角前髪が播摩投　膳所 臥高
溫泉に近く薬掘たき芦野哉　桃醉
今朝は誰秣を刈て女郎花　馬耳
二日醉是や躬恒の菊の亭　不碩
宿を呼非事理も憎し秋の暮　不玳
寺〳〵は結句賑〳〵し秋の暮　等芳
茸狩や狩殘したる天狗茸　桃司子
一とせは山鳥星の逢夜哉　宇月
短冊や竹はなよ〳〵蚓書　舉白
七夕や中の口より香具賣　冬市
子一ツや分別なしに女七夕　神叔

罌粟の花や老けん仙翁花　浮生
顆に寄ル菊の高さや三四尺　濃州 其井
世をそむく野菊や百の名にいらず　桃鄰
淀川のしずみ知レけり雁の聲　冬市
鄰への藪結わけて星祭　その女
盆の鉦晴と打らん辻念佛　少喰
七十の腰も反する鳴子かな　其角
靈棚の泪引出す鼠かな　柏原 梅桃
秋風や梢に蟬のあらたまり　庄内 重行
散たびに我氣を乘する一葉哉　馬耳
稲妻は欠を止ル呪咀歟　馬耳奴 塩車
殘多し客は戻りて秋の暮　遊調
哀秋虫の音同じ一ツ鐘　立鶴子
蜂はさし蝶は眠るや菊の花　嵐雪
氣をつけて常は見ぬ也銀河　九梅

新宅

名月や馴ては聞かぬ鐘の側　立志
名月や金くらひ子の雨の友　其角

須磨の女の心とはゞやけふの月　濁子

鎌倉若宮にて

青雲に松を書たりけふの月　嵐雪
月にとて出立や扇たばこ入　沾徳
けふの月婆とはよばぬ小町哉　秋色
名月や箔紙かゝる兒の顔　その女
當なきもあらん月見の人通り　旭志

神樂岡

名月や折もあらふに猪驚し　轍士
名月の松を照して畠哉　鋤立

深川指月菴

名月や爰は朝日もよい所　杉風
澄月や秋も半の雛の段　此筋
月見るや野山につけて一人分　千川
羽織着た公家も有けりけふの月　利牛
名月や投盃も草の上　孤屋
五六人ならぶ出村の月見哉　女木澤 利合
狭莚に打ぬ藁鋪月見哉　仝 支梁

赤き色消て最中やけふの月　仝 巨宇

芭蕉庵

來るも〳〵豆腐好也けふの月　仝 桐爰
余所ばかりかせぐ合點の月見哉　濃州 芝尺
新しき噺買出す月見哉　仝 貝潮
納屋の火の丁子頭やけふの月　万卷
名月や蓮の實ぬけし水の音　介我
芦の穂の海より低しけふの月　堤亭
名月の鴈や清女が筆序　等躬
釣捘に猿の聲踏む月夜哉　不碩

山家

此けしき繪心あらばけふの月　同
海を見ぬ山人あらんけふの月　百里
蹙頞作る老も座にありけふの月　仙化
むさしのゝ約束も有けふの月　子珊
蜻蛉の水に醉たりけふの月　浮生
まじ〳〵と牛輪に寐たりけふの月　茄毛
名月や海へ嘶く三保の馬　冬市

名月や人は高みに三ッ一　方雨
名月や星なき海の澄渡り　宇月
望月や今宵二星の逢ならば　風調
直化の宿に客ありけふの月　如濁
鐵炮の香もなき野よりけふの月　朝叟
月今宵夜晝なしや昨日から　和盈
名月の銀河や雪の上の霜　無倫
白鷺や蓑脱やうに後の月　其角
懐の猫も夜寒し後の月　秋色
來月は優まん月を栗の光　沾德
鎌倉へゆかぬが手也後の月　桃鄰
埒明や蚊遣もなくて後の月　淵泉
味噌にまだ柚の色青し後の月　其井
菊の香や白粉箱の水かゞみ　未陌
紛らしや木の實の中に鹿の糞　李里
松のねを幾まがりして菊の露　擧白
茸狩の戻りは寺の非に成ぬ　秋田　長山
三尺のはしり短し菊の花　波艸

明方は木男ばかり踊かな　大坂　流麥
菊の酒葡萄の殼にしたゝみけり　其角
蜻蛉の追れてもとの垣ね哉　波竹
稻妻の跡や今迄雲の色　蓬山
居風呂に味つく秋の夕哉　濃州　水魚
名なし茸先草履にていろひけり　調武

江のしま

日を拜む蜑のふるへや初嵐　嵐雪

九月八日三嶋に泊ル

居風呂に箱根の菊の雫かな　鋤立

遊行寺

十人の殿等強し梅もどき　桃鄰

鎌倉

行秋や七里が濱も八里程　同

同若宮

銀杏も落るや神の旅支度　同
鳴蟬の下葉に沉ム夕かな　羽黒山　白藤
冷さねど瓜に水あり今朝の秋　雲河岸　風孤

鮭の來て水上黄ばむ高ね哉　同
草花の姉とやいはん女郎花　春桐
寐靜ル村をはなれて角力哉　白仙

途中吟

世は秋に鳴立澤の常芝居　秋山
靈棚に貴て蚊屋釣斗也　同

壬生の邊にまかりて

匂ひ來る早稲の中より踊哉　言水
蘭の香や角振戻す蝸牛　桃鄰
太刀持のこはき役也小鷹狩　山形何云

初秋

梨子の葉に鼠の渡るそよぎ哉　その女

曉砧

わかれても夜のありたけは碪かな　同
蓑虫の詮なき桐の一葉哉　冬菊
蕣に瓜のさなごの二葉哉　立志
立琴や庭に裏見の瀧津波　不角
新しき案山子や去年の穢俵　讃秋

こは誰に雨の朝の袋菊　其角
七夕や御中入なる鞠の庭　蘭水
稲妻や過し落花の荒靈　臨江
夜は猶靈棚臭き暑哉　介我

（陸奥衛　巻四）

元祿九丙子十月十二日　翁三回

今更に袖をしぼるや冬ざくら　桃隣
　待夜の酔和見て寒キ比　嵐雪
水甕を汲ほすまでに月澄て　素堂
　障子をのぼる虫のごそつき　神叔
御前撰ム早稲は正しくつぶ／＼さ　擧白
　乳引離す兒はうつかり　東潮
旅好キの友澤山に遊ぶらん　素狄
　軒からさきを川へ築出す　枳風

ウ

永雨に重の減りたる鹽俵　李下
　一理屈づゝこれる侍　仙化
法眼が機嫌見合ス和巾紙　翠風
　樽を裸に呑口を採　林也
下谷より千住へ近キ道の有　李里
　捨て置たを中直ル懸　桃舟
夕涼肌恥しく挾ミ帯　介我
　云そこなひをなぶられて泣　桃明
小僧をば跡に寐せたる江湖寮　全峯
　白ィ桔梗が結句しほらし　湖松
葉より増りし月や朝ぼらけ　林也
　鶉こゝろに夜着を踏ン脱ク　翠風
晴嵐の花のこぼるゝ大津口　枳風
　涅槃の床に色／＼の顔　桃隣

二

羽箒に蝶を救て又飛セ　東潮
　はづんで聲をかくる大文字　素狄
幼少を前へ／＼さ繰出して　神叔
　眞砂の舎利を洗ふ泊湘　李下
月獨山より市へ沓の跡　嵐雪
　木の葉の秋を誰か云捨　李里
土器に銀杏煎て似合鋪　介我
　割ム佛の屑はたく袈裟　全峯
見初たる肥前の國の白鳥　桃隣
　信をしれば親に孝行　林也
待衆て皆乘込し渡舟　桃舟
　終年の日のむごい汲際　東潮
猫の齒に子籠リ付てかけ廻る　介我
　婆の上着を直すふり袖　神叔

ウ

其情昨日の宿は庄屋殿　李里
　流るゝ川の中の温泉　桃隣
赤キ實は甘くやあらん草の蔓　嵐雪
　一代になき盆の遠道　東潮
鼻息に時様し見る月の向　素狄
　霜にそろ／＼濕る棱柄　李下
いはけなく這子の腰に綱つけて　翠風
　廣キ庭籠を兎押合　枳風

末留て横へはびこる今年竹　　桃隣
釜屋の爐を見に上ル舟　　琴風
紫の帽子四十のかゝり也　　湖松
大事〳〵と文の皺のす　　李里
一華の五葉を開く花の時　　嵐雪
頓首の額若艸に突　　氷花

芭蕉翁三回追悼獨唫　　桃隣扒

眞直に霜を分ケたり長慶寺
山茶花の根に線香の灰
三尺の琴を胡坐にかいのせて
紙より薄し木地の盃
物中を乞て口上忘れけり
井土の淺みを覗く鶺鴒
二つ着てうごよい也後の月
穂ばかり切て殘ス蜀黍
ウ
相剃に菅笠請ル秋の風
明日の仕事は宮様の壁
大杉の枝をこつそり伐すかし
會は延たり五月六月
生得弟めがづんと利口也
鼻でしてとる長崎の伽羅
鴫の味持ッた松浦の生鯨
錫見よかしに拔て置けり
勝ッ箸の碁を二番まで仕付られ
はやそは〳〵と踊さゝやく
月も、よしこつほり町の燒豆腐
尻にしかれた蟷螂の形
作り花母の機嫌を窺ひて
塵をふつても修羅は動ず
二
見しられて隠をたゝかぬ常乞食
杉原もみてよい火口なり
五七日降そうにしてふらぬ雨
隣の事に今朝もたゝされ
嵯峨川に丹後丹波の入交り
来るを見かけて迯ろ疫病
日ノ影のはや傾ケば合歡花
まうけの君の芳しき衣
操なる人の心に諾ヘりて
居ながら禮をなしたる番神
逆に双で軒は葺仕舞
茶碗さし出ス爼の脇
けふの月旦那の心定まらず
豐浦の祭二度はふつ〳〵
二ウ
舟底のめり〳〵といふた初汐に
夜明になれば星もさは立ッ
あの嫗四十に成て二十顔
酒でころりとこかす御影堂

ぶらかにとするな大工の功者分
　挑灯落て鼠飛出ル
百番の外五六百土用干
　歩きて見れば魔仙臺
人参で淺の命を拾ひけり
　唯しぶ／＼とした〻るき雨
逢までは摺の端書かきくどき
　あまりの事に眞葺の夢
門鎖ス庵のこゝろ月と華
　海雲なすゝる跡の香打
三
帆な下て長閑にえるゝ關の前
　愛宕いへば皆高山
短氣成親に一生呵れず
　彌助が備さ御意を蒙ル
給仕さへむづかしそうな七五三
　ごれつて見れば金の有狀
柔和にて肝のふさいが病也
　此衣更着に一丈の雪
こざ／＼さ梅も柳も植込て
　仲人いらぬ養父入の緣
輝や數にも付る美清香
　淀から乗て四ツ橋の月
勿躰は良醫成らん菊の花
　杜秤に掛たる厩の鶯
三ウ
尺八に斷云ん馬の毒

　鍋島門に續くさくら田
蓮笛に白き綸子の帶しめて
　瓜核顏のうすき唇
世の哀あはれがらぬもはしたなき
　鐃鉢過て酒になる身
一頻空に滿たる郭公
　蠟地に書て笑はるゝ筆
傾城も幾に佐渡の鉛戸
　大較な目を細する戀
有明に譃をおろす神無月
　分限さいふが內證に空
和を見てすつさきし込花筏
　遠慮もなしに蒜の息
名
講談に眼ハ人あり呼子鳥
　帶の結目に唐帯の士
惣別の刄物をのせぬ臺の上
　役者の內の光ル傳置
四季咲の能は咲たり杜若
　さり集ては二里程の道
手をかへて骨は折レどもならぬ戀
　目にもたらおでごこやらが風流
盆／＼と待ても隙はなかりけり
　御油赤坂の中の葬
追込て老馬のいさむ水の月
　相對づくにこまる盜人

吸物が十八出て明離レ
　踏でいたゞく老の腰
着たやら文を遣シたり不動院
　たつた一度で合ス算盤
ふつゝかに謡が細工ぞ猫の食
　此くらゐにはいらぬ傘
名號を請るさいふもおろかなり
　根からの友は物を隔テず
誹諧の匂ひを年の花にして
　三ッ葉を色に櫻莨蒻

亡友芭蕉居士、近來山家集の風躰をしたはれければ、追悼に此集を讀誦するものならし。

あはれさやしぐるゝ比の山家集　素堂

於別駿鳥居氏興行

鎌鍬の捨て有けりかきつばた　湖松
　追詰られて轉ル蜓の子　桃明
辨當に客の重る氣の毒に　桃舟
　けふに廿日か月の宵闇　桃隣
極印の上に積せぬ秋の風　桃洞
　又投られて頬べらの砂　湖松
ウ
五六人雁の囮に養はれ　桃隣
　戸板に張し庚申の札　桃舟
青貝の光て通る十文字　桃明
　日和のようてほんの正月　桃洞
蹇辻の裏を長閑に噺出ス　湖松
　宮の左の百本の花　桃明
冷水の錠を捻くる井戸の盞　桃舟
　身に着る程は削ル耳搔　桃隣
願ふても二すさ雪はふらぬ也　桃洞
　相手。呼に鶴の巣籠　湖松
山の寺黑く見えけり月夜さし　桃明
　糸瓜がなれば皆さつて行　桃舟
貯落ス卿侍の二番生　湖松
　香の物では膳ふ突出ス　桃洞
禁足の德を問れて飾滿けり　桃隣
　淀の牡丹や淀川の水　桃明
猫の子の禮から先へいふて置　桃舟
　瞽女の夫も城方の城　湖松
うはつらはあらはに見えず下焦　桃洞
　通り濟して息を繼グ關　桃隣
宗長の墓を尋て日は暮ぬ　桃明
　獻立さへば庭の間引菜　桃舟
雨鑑に建廻してや弟艸　湖松

御座れ〳〵さ約束の月　桃洞
鑄流馬や天神橋のかゝえ帶　桃舟
日よりも鼻へ潜ル仲立　桃明
四十已後勧念も又交る戀　桃隣
千石作る三石の株　湖松
羽二重の先味が花衣　桃洞
梅の下手に直ス文臺　筆

一とせ芭蕉、須ケ川に宿して驛の勞れを養ひ、田植歌の風流をのこす。予其跡を慕ひ、關迯ルより倒の相樂氏をたつね侍り。

踏込て清水に趾つ旅衣　桃隣
章哥さはれてあぐむ早乙女　等躬
鐙持のはれたる尻や笑ふらん　助叟

白河の關を越る

卯花に黑みやうつす影法師　仝
けふは扇の入天氣にて　桃隣
業平を思ふか鄙の都鳥　等躬

對兩雅

折に來て手足よこすな蔣草　仝

道筋聞ケは鳬の乘方　助叟
夏の月亭の四隅の戸を明て　桃隣

鋤立上京餞別の卷、難波園女判にして認登せける詠艸、愚集の傍に加え侍るは、連中したゝみを捨がたきのみ。

足本も遠山も見よ雪の松　桃隣
寒菊移ル香やまくら筥　鋤立
吸物の盞を明れば溫飩にて　硝水
若イうちには何もおかしき　方雨
透垣の月一昨日の丸合羽　宇月
千句吟ずる蔦の葉の風　冬市
快痞も柿に又發り　玆少
一文錢が耳にふらつく　硝水
押合て乘船膝に膝をあげ　旭志
さやこや云て近イ正月　桃隣
何の其䐉で負素魚實　冬市
鼻の低うもよい氣にて持　方雨
ごうぞ唯名乘せたいぞあの角力　茄毛
女で賊をする袖の露　鋤立
文や雁や住吉堺岸の和田　桃隣
月見の席に食は喰降ッ　玆少
二十五の厄前人も華心　宇月
裕雪踏で旅の糸遊　旭志

二手の垢に飴はきたなき蝶や鳥　茄毛
魚の干したが網の目に有　硴水
落し物御殺に繋ル雨の後　冬市
内を覗けば乞食でもなし　鋤立
中高な顔うつすりと化粧して　桃隣
國阿い足踏おもひ伊達迄　宇月
散な此百日紅も二百日　茄毛
碁盤を押に箏の鮨　方雨
外ト通ル人呼掛ル藏の窓　茲少
持チあつかふて手の刺ドゲを泣　旭志
うれしきもつらきも源氏打笑ひ　鋤立
月さ雪さに戀を引出す　茲少
ウ七ツから大宮通碓の音　宇月
小兒の脉を見せにふさころ　冬市
籠カゴ鑵カンにむすんで貰ふ足袋の紐　旭志
同宗旨は合カナ點ツイて濟ム　硴水
常に行所も替ル花の時　方雨
梅は匂ひよ人は息災　茄毛

於奥州石川丹内氏興行

あたらしき宿の匂ひや富貴卿　桃鄰
初卯花を見たる生垣　等秀
べら〳〵と岨道牛に打乗て　等盛
近付ふゆる温泉の言傳　等般
油じむ枕奪合夜半の月　助叟
鶉目がけた鼠落けり　桃鄰
思ふゝ軒の瓢に實の入て　等秀
箱の兀たる佛さびしき　等盛
誰殿も行脚の内は乞食也　等般
旬じやさいへば時鳥啼　助叟
投やりに颯流す磯淸水　桃鄰
二度めの婚さや〳〵させぬ　等秀
醫師ながら少占方も心得て　等盛
通事居ぬ間に絹地さし出ス　等般
月雪の箱れを越て一休　助叟
やつさ提たる鴻の羽箒　桃鄰
人斗ル升や有覽花の席　等秀
色も分ン也飯蛸の飯　等盛

三吟

唯一ツそれ〳〵さいふ螢かな　風調
涼みの床の居眠りを引　五粒
松は猶傘鉾形に鈴リン下ゲて　介我
いのし葬敲く雨の大粒　調
待月に筆が用足ス勝手口　粒
借りた鶉も稗を振舞　我
ウ百菊の外に老尼の名を工む　調
火を繼火燵足を縮むる　粒

飼鼠齧かぬ顔に投付て　我
小むづかしいさはやく刺兒　調
仙共が山伐初る斧の音　粒
年號あれど錢に文字なし　我
蒐鏡や伊勢の落獅子荷連　調
點花指南も花の若葉　粒
熱風呂に痣と見らるゝ朧月　我
戯の切して酒廻しする　調
船頭に素人棹は客に成　粒
脇息にして居るは姿歟　我

二

一筆は鬼打大豆も耻しき　調
片て並ぶる海鼠輪に成　粒
庭に降雪が歩か離ごも　我
屏のなきは割元の門　調
見る程も非事理は同じ出所　粒
餅さしの怪我に鼻を剝裂　我
ばせな葉に釣瓶隱せし暮の月　調
赤き華表も人も薄霧　粒
金屏風躍拍子や響らん　我
禁好物な御配膳に問　調
汗取に帶仕の下は紙を敷　粒
胡弓の弦を半間彈出　我

ウ

疊影泉水の魚腹を見せ　調
明衣を掛て懼す煤竹　我
口說べき貞つき知ッてびんさする　粒

痔寐病も癢れし留守　調
南風匂ひも濕る花の山　我
これにて果し六尺の噺　粒

冬部

菊畑の亭や用て今朝の雪　桃司子
家に入て後に濡たるあられ哉　立志
見る程に〳〵雪青黒し　調和
霰聞竹瓦の上や蹟柏　無倫
食繼と猫と夫婦と火燵哉　學白
我顔や時雨てのぼる井戸の中　神叔
獨活の香や幾重にへぎて冬料理　東潮
碇引綱共まゝの氷かな　立嘯

寡の家を訪て

此冬も三隅明たる火燵哉　不角
たま〳〵は靑き葉有歸花　素狄
木兎の啼や木の葉の落る度　大坂 月尋

しばらくは草に落着あられ哉　定松
雪よりもさきに落たる千鳥哉　深川
早川の底から氷るあらし哉　燕下
散かれて待たぬ戸開ヶ時雨哉　不碩
はち〳〵と旭に割るゝ氷哉　不玟
霜どけやあらぬ落葉も足傳ひ　學白
淋しさは立華崩して枯野哉　流麥
木兎の笑ひを見たる時雨哉　李里

草菴の初會

木枕や十人までは冬籠り　琴風
天井の鼠躁（さわか）し村時雨　介我
泥鼈の息屈かすや薄氷　同
朝日着（き）て蓑を脱けり網代守　文士
雪国は鳴子を引や隣同士　奥藤田 休意
初雪に姿つれなし黒牡丹　立鶴子
冬川や片手に漕（こい）で流舟　桃司子
水仙の屋根の崩やむら雀　蛙歌
蘭菊も名なしかつらも枯野哉　樵堂

初て東武にくだりける比、吉原より富士を見て

頭巾とり襟繕ふや富士の晴　湖春

行旅

初雪や筆捨山の右左　桃鄰
飛かへる音は蕪鐵の霰哉　冬菊
手習の外なし老の冬籠り　少嗜
椺の尾や茶の花時の新紙子　橘之
笠とれば六十顔のしぐれ哉　その女
寒菊にねり土寒う雨おとし　冬市
川淀や獺の貝見るむら紅葉　九桂
屋根葺のそしらぬ顔や村時雨　桃鄰

大津何白亭

むさからぬ炭や亭主の手とりまへ　鋤立
煤掃に笑ひ返すや鼻の下　蘭水
寒するにしだり初ぬる柳哉　大津 吉雄
から風の水田に吹て寒哉　序令
茶の花や雲は流て山の腰　羽黒山 呉柳

筆落す音も氷るや部屋隣　仝 呂叟

薄縁に落葉ぞめぐる八柄鉦　風調

冬籠

葱枯ぬ人は其まゝあほうらし　鷗立

鎌倉極樂寺

口切に千服茶塵淋しけれ　桃隣

由比の濱

人を鳴鷗を鳴や濱千鳥　同

松が岡

葛の葉の落ぬ構や蜘の糸　同

梶原屋鋪

平藏が歌の名殘りや歸花　同

胝や兒の手がしはの片おもて　止水

口切や取分て啄小廣蓋　艶士

水仙や屆ぬうちに間に來ル　その女

十月や出雲の國は寺の留守　志言

ねぶ川の片目見せけり霜柱　冬菊

窓もなき壁の根際や水仙花　文車

降過て信濃は雪の初もなし　等芳

降雪もよしや楽山寺の蓑と笠　芦葉

鴨の鳴たつ栗の落葉哉　如行

曲形に水筋行や朝千鳥　文車

水際にあぶなげもなし霜柱　利牛

風に吹れた顔を蹙ね哉　此筋

傘に霰走らぬ寒サ哉　波艸

初雪や冬瓜取たる屋ねの跡　海動

薄氷や羽杖突たる鴻の鳥　蓬山

節季ゆに報謝の心なかりけり　兎園

ちんまりと隅に日を持紙衣かな　堤亭

百品の旅の仕舞や冬の月　その女

柴の戸の香炉棚也山茶紅　山夕

驚かぬ心や冬の大井河　桃鄰

御火焼や檜物造りは山と呼　浮生

水形あられや是非のあはせ物　眞蓑

水鳥につるて廻りし落葉哉　茄毛

荒馬の師走の牧の寒サ哉　その女

雪の夜や刀の柄(つか)に小挑灯　松了

尖りたる風を笑ふか冬牡丹　牧堅

去來句を尋に交通し侍るに、清書の間に合がたく、
反故の中を探りて、漸一句を拾ふ。

河原毛の烏帽子の上や初しぐれ　去來

(陸奥衛 巻五)

元祿二巳三月十七日、芭蕉翁行脚千里の羇旅(きりよ)に趣(赴)く。門葉の曾良は長途の天(そら)、杖となり柱となり、松嶋・蚶潟(きさかた)を經て、水無月半ば湯殿に詣。北國にかゝれば、九十里の荒磯・高砂子のくるしさ、親しらず子しらず・黒部四十八ケ瀬、越中に入てはありそ海、越前に汐越の松、月をたれたると讀れしは西上人、是を吟じて炎暑の勞をわすれ、敦賀より伊賀に渡り足も休めず、遷宮なりとて、蛤のふたみに別れ行秋ぞ　と云捨、伊勢に残暑を凌ぎ、又湖水に立歸り、名月の夜は三井寺の門をたゝき、時雨るゝ日は智月(ちげつ)がみかの原をすゝめ、兎角すれど爰にも尻を居へず、未の十月下旬東武に趣き、都出て神も旅寐の日數哉　と吟行して、深川の草扉を閉、ひそかに門を覗ては、初雪やかけかゝりたる橋の上　など獨ごちて、閑を送るもたのし。然ども老たるこのかみ(兄)を、心もとなくや思はれけむ、故郷ゆかしく、又戌五月八日、此度は西國にわたり長崎にしば

し足をとめて、唐土舟の往來を見つ、聞しらぬ人の詞も聞ん
などゝ、遠き末をおもひ、首途せられけるを、各品川まで
送り出、二時斗の余波、別るゝ時は互にうなづきて笠をあ
げぬばかりなりけり、駕籠の内より離別とて扇を見れば、
麥の穗を力につかむ別哉。行〳〵て、尾州荷兮が宅に汗
を入、世を旅に代かく小田の行戻り　と日來の境界を言
捨、唯一生を旅より旅にして栖定まらず、しかもむすび捨
たる草菴は鄙にあり、都にあり、終に身は三津の江の芦花
に隠れて、五十年の夢枯野に覺ぬ。其頃は其角おりあひ
て枯尾花に體を隠し、百ヶ日は美濃如行一集を綴る。一周
忌は嵐雪、夢人の裾をつかめば納豆哉　とあぢきなき一
句を吐。既今年三回忌、亡師の好む所にまかせ、元祿九子
三月十七日、武江を霞に立て、關の白河は文月上旬に越
ぬ。凡七百里の行脚、是を手向草、所〳〵の吟行、懷舊の
百韻、此等は師恩を忘れず、風雅を慕のみなり。紀行の文
は奥の細道といへる物に憚り、唯名所・古跡の順路をし
るし侍る。尤見おとしたる隈〳〵おほし。後の人猶あら
たむべし

首途　　桂 隣 稿

何國まで華に呼出す昔狐

江戸より行德まで川船、木颪へ着、爰より夜舟にて板久へ
上り、一里行て十丁の舟渡、鹿嶋の華表、海邊に建、神前
まで二十四丁。

華表　杉の丸木。

樓門　内外に龍神六躰。

本社　北向王城の鬼門を守給ふ第一也。春日　志賀
一躰。

○奉納　額にて掃や三笠の花の塵

ひたち帶の事　戀を占て掛帶也。

奥院　參詣の輩、音聲高ヶ上ヶ事不叶、直しき神慮也。

御坐石　要石是也。手を觸る者は此石の根を掘て、這出
る虫の數によりて、吉凶を知ル。

○長閑成御代の姿やかなめ石
御手洗　尤冷水也。此奥に末なし川。
見ル日の神・告の宮・御寶藏。
高天原　神軍の跡。敵味方城有。
○鬼の血といふ共土が躑躅哉
御物忌　伊勢ハ齋宮・加茂ハ齋院。
香取・浮洲兩所共ニ鹿嶋ヨリ三里。鹿嶋ヨリ此所へ陸ノ行バ名物ノ松有。
鹿嶋ヨリ舟ニテ玉造へ出、小川へ通ル。此間ニ霞山・霞の浦アリ。是より筑波へ順よし。
筑波麓　十一面觀音、門外ニ不動ノ濡佛。
みなの川　此所峯ヨリ流れ落る。
禪定　兩川男躰・女躰、此外小社廿八社。
麓ヨリ二里登ル、かたのごさく難所、岩潜・岩の立橋・千尋の谷・春夏の中巓ニ茶屋五軒、魚肉酒禁斷。馬耳峯の間十丁余有、頂上ニ登て四方を見るに眺望不レ斜。
右の外、靈山の奇瑞おほし。
○土浦の花や手にとる筑波山
○筑波根や辷(スベツ)て轉(コケ)て藤の花

峯より山越の細道アリ。うしろへ下りて、椎尾山・西光寺・本尊・藥師・桓武帝勅願所、所は自然の山を請て、瀧は木の間より落ル。
○赤松の木末や乘(ノ)垂(タル)花の瀧
一里行て櫻川、明神アリ。しだの浮嶋此邊也。此川下龜熊橋渡り行ば、小栗筑高館、則小栗村とて旅人泊ル。
○汲鮎の網に花なし櫻川
是ヨリ宇津宮へ出て日光山。
御山へ登れば案内連ル。神橋、山菅橋と云。
御祭禮四月十七日東照宮、九月十七日日光宮。
石ノ花表・二王門・御馬屋・御水屋・輪藏・上御藏・中御藏・下御藏・赤銅花表(御紋アリ)・皷樓・鐘樓・撞鐘(朝鮮ヨリ献上)・火灯(同斷)・陽明門(外矢大臣 内雷天 風天)・廻樓・神樂所・神輿舍・護摩堂・唐門。
御本社　御廟上ノ山ニ有。御本地堂後ニ赤銅ノ双林塔・三佛堂・常行堂・賴朝堂・本宮權現。
○東照宮奉納　花鳥の輝く山や東向
瀧尾權現・中宮・三本杉・鐵塔・普賢・子種石(井伊少將造營)・御手洗・石天神・八幡別所・中宮別所、此所に百貼繻ギセル棒責手木アリ。

カンマンノ淵・慈雲寺淵・岩上ニ石不動立。

日光坊中墓所、骨堂、盤石を切抜、髪骨ヲ納。

中禪寺、日光ヨリ三里登ル。馬返迄二里、上一里ハ難所、

嶺に權現堂・立木觀音・牛石・神子石・不動坂・清瀧・湖水・黒

髪山則此所也。三四月にも雪降。

〇花はさけ湖水に魚は住ずとも

〇鶯は雨にして鳴みぞれ哉

〇雪なだれ黒髪山の腰は何

寂光寺、日光ヨリ一里。本尊辨財天、外ニ權現堂、左の方

に瀧有。

〇千年の瀧水蘚の色青し

此所を半里戻り、又奥山へ分入。日光四十八瀧の中第一の

瀧あり。遙に山を登て、岩上を見渡せば、十丈余碧潭に落。

幅ハ二丈に過たり。窟に攀入て、瀧のうらを見る。仍うら

みの瀧とはいへり。水の音左右に樹神して、氣色猶凄し。

〇雲水や霞まぬ瀧のうらおもて

日光より今市へ出、太田原へかゝりて、那須の黒羽に出る。

此所に芭蕉門人有て尋入。

卯月朔日雨

〇物臭き合羽やけふの更衣

はてしなき野にかゝりて

〇草に臥枕に痛し木瓜の刺

道より便をうかゝひて

〇黒羽の尋る方や青簾

行〳〵て、館近、浄坊寺桃雪子に宿。

翌日興行

〇幾とせの欅あやかれ蝸牛

與市宗高氏神、八幡宮ハ館ヨリ程近し。宗高祈誓して扇的

を射たるを聞ば、誠に感應彌增て尊かりき。

〇叩首や扇を開き戸を閉

玉藻の社・稻荷宮、此所那須の篠原、犬追ものゝ跡有、館よ

り一里計行。

〇法樂　木の下やくらがり照す山椿

黒羽八景の中

〇鵜匠ともつかふて見せよ前田川

〇夏の月胸に物なし飯縄山

〇笠松や先白雨の逃所

○籠らばや八壇の里に夏三月

行者堂に詣

○手に足に玉巻葛や九折

留別

○山蜂の跡覚束な白牡丹

那須温泉　黒羽ヨリ六里余、湯壷五ツ、西町ノ間ニアリ。

権現八幡一社ニ籠ル。麓に聖観音。

八幡寳物　宗高扇・流鏑・蟇目・乙矢・九岐ノ鹿角・温泉アリト人ニ告タル鹿也。土護ヨリ奉納ノ笙、外に縁記アリ。

殺生石　此山間割レ残りたるを見るに、凡七尺四方、高サ四尺余、色赤黒し。鳥獣虫行懸り度〳〵死ス。知死期ニ至りては、行逢人も損ず。然る上、十間四方ニ囲て、諸人不レ入。邊の草木不レ育、毒氣いまだつよし。

○哀さや石を枕に夏の虫

○汗と湯の香をふり分る明衣哉

此所山を越白河に出、宗祇戻しへ掛り、加嶋・櫻ヶ岡・なつかし山・二形山・何も順道也。是より關山へ登ル。峯に聖観音・聖武帝勅願所・成就山・滿願寺・坊の書道院よりの見渡し白河第一の景地也。

○奥の花や四月に咲を關の山

此所往昔の關所也。本道二十丁下りて、城下へ出、關を越る。

○氣散じや手形もいらず郭公

阿武隈川は白河町の末、流れは奥の海へ落る。板橋百間余、牛ニ馬除アリ。橋世に替りて見所有。影沼、白河と須ヶ川の間、道端也。須ヶ川ヨリ二十七丁白河ノ方ナリ。

須ヶ川此所一里脇、石川の瀧アリ。幅百間余、高サ三丈に近し。無双ノ川瀧、遙に川下ヨリ見れば。丹州あまのはしだてにひとし。

○比も夏瀧に飛込こゝろ哉

爰より石川の郡へ入て、一群誹士アリ。少時滞留、岩城へ山越ニ通ル。此道筋難所と云、萬不自由。馬レ借、宿不レ借、立寄べき辻堂もなし。一夜は洞に寐て、明れば小名濱へたどりつく。岩城平領也。所に東海を請て、出崎〳〵の氣色、沖に獵船、磯に鹽を焼、陸は人家滿て、繁花の市、牛馬に道なせばむ。

○初鰹さぞな所は小名の濱

此所少行て、緒絶橋・野田玉川・玉の石、いづれも同あたり

也。古人の歌を引合て思へば、海邊といひ、けしきさある事にて感を催す。

　○橋に來て踏みふますみ蝸牛

　○茂れ〳〵名も玉川の玉柳

小名濱ヨリ二里來て湯本アリ。山は權現堂、傍は町家、溫泉數五十三、宍〳〵の内に有。勝手能諸事自由にて、近國より旅人不ㇾ絕、此所半里來て白水と云所アリ。海道ヨリ十六丁、左へ入、阿彌陀堂、則平泉光堂の寫し也、秀衡妹德尼御前建立、奧院、弘法大師、尤女人禁制。岩城山・千手觀音・彌生山・麝香石・此邊也。此外舊跡ありといへども、少時の滯留見殘し侍る。

城下を立て三坂村へ八里、行〳〵て奧濱日和田へ出ル。此所四丁行て道端、右の方に淺香山。南都若艸山の俤有。名有山とは見えたり。巓に少キ榎三本有。往來皆賤登ルと見えて徑アリ。麓ヨリ巓ニテ四十三間、麓ノ廻リ貳百六十八間。

　○五月女に土器(かはらけ)投ん淺香山

此山ヨリ未申ノ方、山際に帷子と云村に釆女塚、山ノ井も此邊、藪の根に葎おほひて底も見えわかず。

　○山の井を覗けば答ふ藪蚊哉

淺香の沼は田畠となり、かつみ草・花蒋、いづれともしれず、只あやめなりといひ、眞菰成といひ、說〳〵おほし。菖蒲池と云に此所にあり。

二本松城下にさしかゝり、鍋が井、町より半里、阿武隈の川端に、彼黑塚有。邊は田畑也。此あたりをさして安達原と云。

　○塚ばかり今も籠るか麥畠

福嶋より山口村へ一里、此所より阿武隈川の渡しを越、山のさしかゝり、谷間に文字摺の石有。石の寸尺は風土記に委見えたり。いつの比か峨より轉落て、今は文字の方下に成、石の裏を見る。扇にて尺をさるに、長サ一丈五寸、幅七尺余、檜の丸太をもて圍ひ、脇よりの日影に杉二本植、傍の小山に石祠神安置ス。右の山口村へ打り、海道へ出る。行戾二十丁有。

　○文字摺の石の幅知ル扇哉

一里行、左の方徑より佐葉野と云所、二里分入、瑠璃光山醫王寺。寶物品々有。中に義經の笈・辨慶手跡・大般若アリ。佐藤庄司舊跡。丸山城跡アリ。南殿櫻・花の井𠮷名木の井也・

庄司墓所・一門石塔・次信・忠信の石塔有。

　○星の井の名も頼母しや杜若

　○丸山の構も武き若葉哉

此所ョリ飯塚へ出、奥海道桑折へ出る。是ョリ藤田村へかゝり、町な出離て、左の方へ二丁入、義經腰掛松有。枝葉入方に垂、枝の半は地につき、木末は空に延て、十間四方にそびへ、苔の重り千歳の粧ひ、暫木陰に時をうつしぬ。

　○辛崎と曾根とはいかに松の蟬

經塚山此所なり。又海道へ出るに、國見山高クさゝえ、伊達の大木戸構きびしク見ゆ。是ョリオ川村入口に鐙摺の岩アリ。一騎立の細道也、少行て右の方に寺有、小高キ所、堂一宇、次信・忠信兩妻軍立の姿にて相双びたり。外に本尊なし。

　○軍めく二人の嫁や花あやめ

是ョリ白石城下、此所と刈田との間、西の方にわすれずの山アリ。所にては不忘山といふ。金か瀬ョリ岩沼へかゝり、橋の際左へ二丁入て、竹駒明神アリ。社ョリ乾の方へ一丁行テ、武隈の松アリ。松は二木にして枝打垂、名木とは見えたり。西行の詠に、松は二度跡もなしとあれば、幾度か植繼たるなるべし。

　○武隈の松誰殿の下凉

岩沼を一里行て一村有。左の方ョリ一里半、山の根に入テ笠嶋、此所にあらたなる道祖神御坐テ、近郷の者、旅人參詣不絶、社のうしろに原有。實方中將の塚アリ。五輪折崩て名のみばかり也。傍に中將の召されたる馬の塚有。

　西　行　朽もせぬその名ばかりをとゞめ置て
かれのゝすゝきかたみにぞ見る

　○言の葉や茂りを分ヶて塚二ツ

是ョリ增田の町中へ出る。行先は名取川、橋を越れば仙臺、大町南村千調亭に宿ス。

　○落つくや明日の五月にけふの雨

　　雨天といひ所はいまだ寒し

　○奥州の火燵を褒よ五月雨　　千　調

　端　午

　○菖蒲葺代や陸奥の情ぶり

青葉山　仙臺城山、本丸・二ノ丸ノ間をさして云。此名、清輔抄には常國といへり。勅撰名所集には若狹、宗祇抄には近江とあり。

山榴岡・釋迦堂・天神宮・木の下藥師堂・宮城野・玉田横野何も城下ヨリ一里に近し。

みさむらゐみかさと申せ宮城野ゝ
木の下露は雨にまされり

とりつなげ玉田横のゝはなれ駒
つゝじが岡にあせみ花さく

さま〴〵に心ぞとまる宮城野ゝ
花のいろ〳〵虫のこゑ〴〵

○もとあらの若葉や花の一位

芭蕉が辻　大町札の辻也。

神社佛閣等所々多テ略ス。

南村に廿日滯留、いまだ松嶋たかゝえて、たゝへりなき病苦、明日もしらず、然どもあるじ心づくしによりて蘇生、旅立時の嬉しさ、いつか忘んと袖をしぼりぬ。

○陵宵の木をはなれてはどこ這ん

○一息は親に増たる清水哉

賀行旅　千調

○くつきりと朝若竹や枝配り

仙臺より今市村へかゝり、冠川土橋を渡り、東光寺の脇を三丁行テ、岩切新田と云村、百姓の裏に、十苻の菅アリ。又同所道端の田の脇にもあり。兩所ながら垣結廻し、菅を役百姓が守となん。

○刈比に刈れぬ菅や一構

此所より又本の道へ戻り、土橋より一丁行、右の方に小橋三つ有、中を緒絶の橋と云。所の者は裏の橋と答ゆ。是より市川村入口、橋を渡り右の方小山へ三丁行て、

壺の碑　多賀城鎮守府將軍古舘也。

神龜ヨリ元祿マデ千歳ニ近。

右大將賴朝

みちのくのいはてしのぶはゑぞしらぬ
かきつくしていつぼのいしぶみ

西

去京一千五百里 去蝦夷國界一百廿里 去常陸國界四百十二里 去下野國界二百七十四里 去靺鞨國界三千里
此城神龜元年歳次甲子按察使兼鎮守府將軍從四位上勳四等大野朝臣東人之處置也天平寶字六年歳次壬寅參議東海東山節度使從四位上仁部省卿兼按察使鎮守府將軍藤原惠美朝臣朝獦修造也
天平寶字六年十二月一日

碑之圖　高六尺三寸　横三尺一寸　厚一尺

此所より八幡村へ一里余、細道を分入、八幡村百姓の裏に奥の井有。三間四方の岩、廻りは池也。處の者沖の石と云。是ヨリ末の松山、むかふに海原見ゆ。千引の石此邊といへども、所の者曾て不レ知。一里行て松の浦嶋。是ヨリ鹽竈への道筋に浮嶋・野田玉川・紅葉の橋、いづれも道續なり。緒絶橋は六社御前に有。鹽竈六社御神一社に籠、宮作輝斗也。奥州一の大社ともあるべし。神前に鐵燈籠、形は林塔のごとく也。扉に文治三年和泉三郎寄進と有。右本社、主護より造營ありて、石搗の半也。

○法樂　禰宜呼にゆけば日の入夏神樂

竈は町家、町の中に鹽釜四ッ有。三ッはさし渡し四尺八寸・高サ八寸・厚サ二寸八分、一ッは四尺・高六寸五分・厚貳寸五分。往昔六ッ有けるを盗出し、海中へ落したると也。此所隣ニ牛神とて、牛に似たる石有。明神の鹽を運し牛化して、かくは成ぬと云。今は鹽不レ燒。

○月涼し千賀の出汐は分ッの物

鹽竈宿、門前より小舟にて松嶋へ渡る。内海三里、左右色〳〵の嶋、姿をあらそふ。風景物として殘らず。左を見右を見るにいとまなし。舟子に酒をくれてしづかに棹をさゝせ、一ッ〳〵聞ば、あらゆる嶋の名也。さしかゝりは雄が嶋、高ク見えたるは大澤山住鵬雲和尙隱居所、經が嶋は見佛上人讀誦の閑居、ふくら嶋は出畑有て辨慶守本尊不動有。五大堂は五智の如來、松嶋町より橋二ッ越て渡る。

雄嶋、是も橋有。船よりも陸よりもわたる。

長老坂手前に、西行戻。をしまの内に、坐禪堂・石灯籠南村宗仙寄進。

骨堂ニ地藏、奥院是也。見佛上人碑、銘有。鎌倉巨福山建長寺一山和尙筆也。此石鎌倉よりトル、高一丈一尺・横三尺五寸・厚一尺。松嶋海面殺生禁斷。

瑞岩圓福禪寺、妙心寺末寺　紫衣、改て瑞岩寺、仙臺城主菩提所。

右ニ陽德院、左ニ天麟院、何も紫衣。

瑞岩寺中ニ松嶋根深の松とて、古キ松一本有。庭ニ臥梅。額、虎關の筆、方丈の記也。

松嶋眺望　五十七嶋・四十八濱・二十二浦・三十一崎、外ニ金花山・富ノ山。

松嶋辨

抑松嶋は扶桑第一の好風にして、凡洞庭・西湖を耻ず。東南より海を入て、江の中三里、浙江の潮をたゝふ。嶋〳〵の數を盡して、欹ものは天を指、ふすものは波に匍匐、あるは二重にかさなり、三重に疊て、左にわかれ、右につらなる。屓るあり、抱くあり、兒孫愛するがごとし。松のみどりこまやかに、枝葉汐風に吹たはめて、屈曲をのづからためたるがごとし。其氣色窅然として美人の顏を粧ふ。千早振神の昔、大山すみのなせるわざにや、造化の天工いづれの人か筆をふるひ、詞を盡さん。予は口を閉て、窓を開き、風雲の中に旅寐するこそ、あやしきまでたへなる心地はせらるれ。

○松嶋や鶴に身をかれ郭公　曾良
○松嶋や五月に來ても秋の暮　桃隣
○松嶋や嶋をならべて夏の海　助叟
○橋や籬が嶋は這入口　桃隣
○橋二ッ滿汐涼し五大堂　仝
○月一ッ影は八百八嶋哉　仙化

松島より平和泉へ心ざし、迄分入まゝ海道より半里斗右へ入て、さみの山登て見れば、富山大仰寺、高泉和尚額アり。此所より松島・雄島其外島〳〵浦〳〵目の下に見おろし、手も屆く程のけしき、詞に絕たり。松島の閒より見渡したるよりも猶增りて、國主も度〳〵登山のよし、行人必尋て見るべし。

○麥喰て嶋〳〵見つゝ富の山

行〳〵て石の卷、仙臺領也。諸國の廻船を請て大湊、人家富たり。石の卷といへる事、川の洲に立石有。行水巴に成て是を卷く。昔より今に替らず、されば石の卷とはいふめる。所邊土ながら詩歌・連誹の達人籠れり。

○茂る藤やいかさま深き石の卷

牧山の道、船渡し、此あたりを袖の渡。こふちのみさき・まのゝかやはらは、牧山のうらに有。石の卷より一里行て、牧山、法華不退の道場、奥は千手觀音。湊入口石高き峯は日和山、愛宕立給ふ。
金花山、石の卷ヨリ十三里、舟路日和見合スべし。
陸地以の外難所、鮎川と云獵浦より舟路三里、黑崎と云へ、渡しに乘て島着ス。麓ヨリ四十八丁、陸ヨリ三里離て海中

ロアリ。丸キ島山也。是なん陸奥山。五丁登テ大林寺、護摩堂・辨財天・神明、嶺に權現堂并愛宕、五丁下りて御手洗、旱魃にも水不レ絶、嶺より二丁下りて廿鉢の水晶アリ。此水晶高サ貳拾尋、根の深サ不レ知、自六角にして一角の幅七尺余有、但末七尋ハ震動ニ折レテ、谷ニ落埋半見へたり。万劫經タル石故、空ハ松杉の寄生、枝を連ね、石は苔覆て光不レ明也。誠靈山の印、稀有の一物、三國第一の珍寶、末代の記念。

こがれ花さくさよめるは此山にて、千歳の苔八重に厚く、木立春秋をしらず、鶯埒を求ねば郭公鳴ず、四時の風を凩のごとし。白雲空に消て、谷は霧に埋れ、梺は汐烟立迷ふ。南の磯に海鹿日を待て眠る。東に金砂巽漂泊、默然さして是をおもひ、彼を考へば、七寶の一ツ、金生水の故ありやさ、猶尊く、御手洗を唔れば、五ツの味をなす。冷水輕して、色は靑天に等し。比はさつきの末つかた夏を忘れて、しばらく木のねを枕になしぬ。

○御手洗や夏をこぼるゝ金華山

○黄精の花やきんこの寄所

○水晶や凉しき海を遠目鑑

是より右の道筋へ出、石の卷へ戻り、和沼・新田へかゝり、清水を離て、高館の大門アリ。平泉ヨリ五里手前、城郭惣構なり。少行テ一ノ関、是ヨリ高館・平泉。義經像・堂一字。辨慶櫻、中尊寺入口ニ有。龜井が松、田の中に有。北上川・衣川・衣の關・關山・金雞山。和泉城、衣ノ關ヨリハ五丁西南ニアタリ、一方は陸三方は衣川也。弘臺壽院中尊寺は東叡山末寺、當住淨心院。當寺は慈覺大師開基、貞觀四年、元祿九マデ八百八十五年ニ成。金堂・光堂是也。三間四面、七寶莊嚴ノ卷柱、合天井、黄金ヲ彩、獸鳥十色テ競、其結構言語ニ絶タリ。唯扉ヲ開ケバ、日月ノ光明タル計也、本尊釋迦。秀衡三代ノ廟、堂ノ下に體を納ム。經堂、本尊文珠。一切經二通紺紙金泥。寶物、水晶ノ生玉・龍ノ牙齒・秀衡太刀・義經切腹九寸五分。

白山權現・藥師堂・八幡宮・姥杉十五抱　此外古跡多シ。中尊寺

ヨリ案内なくては不レ叶。

○金堂や泥にも朽ず蓮の花

○田植等のむかし語や衣川

○軍せん力も見えず飛ほたる

○虹吹てぬけたか涼し龍の牙

是ヨリ達谷ガ窟、岩前ノ深サ十間余アリ。此洞に二階堂、八間ニ五間と見えたり。多門天安置ス。不斷鎖テ人不レ入。大同二年田村丸建立と縁記に有。所は高山幽谷にして、人倫絶たる邊土、いか成鬼か住捨て、旅人尋入て道に迷ふ。此所より山の目と云へ出、又一ノ關通金成村へ出る。此村一里脇に、つくも橋あり。

陸奥の勢は味方につくも橋　梶原平次景高
わたしてかけんやすひらが首

行ケバ澤邊村十五丁南、川向にあねはの松アリ。則此邊栗原と云。宮野・筑舘・高清水、段々宿を來て、荒野と云宿西北ニアタリ朽木橋アリ。栗駒山則伊澤郡ノ内也。此邊よりは見ゆる也。峯高、水無月の雪猶白し。

○朽木の葉や幸のした涼

古川と云宿に來て、秋山壽庵に所縁アリ。尋入て一宿。

○暑き日や神農慕ふ道の艸

緒絶橋、此古川の町中ニアリ。此橋の名爰かしこにありて、以上四ツは覺えたり。何も故有事にや。此所を出て夜烏と云村へかゝる。小町塚アリ。仙臺名寄を見れば、中納言延房卿・西行法師、兩説には當國此所と有。髑髏の説は當國八十嶋と有。此嶋有所不レ知。

○昔顔の夢や夕日を塚の上

是より岩手へかゝる。磐提山、則城下の名也。いはでの關此所なり。

○爲家の山梔白し磐提山

此所より下宮と云村へ出る。さきは鍛冶屋澤、此間に小黑崎・水のをしまアリ。是ヨリ鳴子の温泉、前ニ大川綱渡し、彼十づなの渡し是成やと、農夫にとへどもしらず。川向ニ尿前と云村アリ。則しとまへの關とて、きびしく守ル。越へ行ば、笹森・うすき、此間に、かめわり坂有。小くにより新庄への脇道也。尿前より關屋迄十二里、山谷嶮難の徑にて、馬足不レ立、人家纔にアリ。米穀常に不自由。別而飢渴の折節宿不レ借。可レ食物なし。二度可レ通所にあらず。漸及レ

レ幕閣屋ニ着て、検所を尋、歎き・へりて一宿明ス。

山路險

○おそろしき谷を隠すか葛の花

○焼飯に青山椒を力かな

是より尾花澤にかゝり、息を継んとするに、心當たる方留守也。一(ひと)のしに大石田へ出て、加賀屋が亭に休足。爰より坂田(酒)への乗合を来下ル。爰より彼最上川、聞及たるよりも、川幅廣く水早し。左右の山續に瀧數多アリ。中にも白糸の瀧けしきすぐれたり。此川筋坂田迄二十一里、川の中、船關四ケ所アリ。尤大石田宿よりの手形、右の所〳〵にて入ル。能聞繕乗べし。なぎ澤・清水・古口・清川、此四所なり。

○短夜を二十里寐たり最上川

○しら糸の瀧やこゝろにところてん

坂田への入口、袖の浦・素我河原。

○薫るとは爰等の風か袖ケ浦

○うかれ出る色や坂田の紅彩花(ツシカはな)

さかたより象瀉へ行道、かたのごさく難所、半分は山路、岩角を蹈、牛馬不レ通、半分は磯傳ひ、荒砂のこぶり道、行〳〵て鹽越則きさかたなり。

蚶瀉眺望　小島の數七十八。東鳥海山、西荒海。町の末板橋の下、晝夜潮の指引有て、満干毎に瀉の姿異也。皇宮山干滿珠寺、額月舟筆、鐘樓山・西行櫻・悶覺堂・骨堂 袖掛堂是也・阿彌陀堂・觀音堂・藥師堂・赤坂普賢堂・十王堂・冠石・神明腰掛石・雨玉山光岩寺・山光山淨専寺・蚶塚・若宮・塔ケ崎・物見山・船着八幡・熊野堂・二堂・三石・堤留・鯨濱・稻宜崎・鮒崎・大石・伊佐野神山・火打山・烏石・上日山・森問・高嶋ノ辨才天・下白山・海人森・大鹿渡・唐渡山・十二森・濟當・男瀉・女瀉・腰長・合歡木・大師崎・八騎濱・女鹿渡・雕鳩巖・八ツ嶋・能因島。

松嶋・象瀉兩所ともに感情深、其彷彿タリ。倭國十二景の第一第二、此二景に限るべし。

○きさがたや唐をうしろに夏構

○能因に踏れし石か苔(コケ)の花

芭蕉に供せられ曾良も、此地に至りて

○波こさぬ契やかけしみさごの巣

此所より右の道筋を坂田へ戻る。尤此所より津輕・南部・越後筋へ順よし。一里出てうやむやの關アリ。東鑑に、大關

笹谷峠の事也。奥州にアリト云〻。きさかたのうやむや覺束なし。

○うやむやの關やむや〳〵鬼人艸

坂田より羽黒山へかゝる。麓に手向町、旅人舍リ所也。芭蕉門人、圖子呂丸迚誹士アリ。四年以前洛の土に成ぬ。其所縁はこ尋入ル。亡跡は見事に相續して、賑敷渡世す。登山の日和窺がてら滯留。彼の門弟今は便もなく、よりそふべきたつきもなかりし處に、かくと聞より詰かけての誹談、みだれたる糸筋のもこ末もわかず。いざゝらば圖子が懷舊を遊んさ、坐をしめて見るに、庭のたゝずまひ、むかしになん替らずと云。松は五葉、ここ〳〵しき捨石は莓に埋れ、こゝろなき非情の有樣、淵瀨のさかひをしらざりき。

○樹も石も有のまゝなり夏坐鋪　　桃隣

音をいれ際のたかき鶯　　露茄

朝力鉄の錠を引かねて　　則堂

峯よりすつと兀辷ル砂　　呂州

十六夜の光納る六つの鐘　　助叟

案山子を覦で通る獸　　普提

右一卷さなして靈前に備ふ。彼呂丸は一度風雅の眼を開き、四十にたらずして、行事本意なかるべし。師の信を感じて、門人此道を捨ず、己同士勵とぞ。

羽黑ヨリ庄内鶴ヶ岡へは三里也。城下近ク行水、梵字川こ云。水上は湯殿山。

○夏百日身は潔白よ梵字川

六月十五日ハ羽黑山祭禮、三所權現神輿御出、鉾・傘鉾計ニテ、境内纔一丁計廻リ、其儘本社へ入セ給ふ。繕はぬ古例、謂レ有事こや。近郷擧テ詣ス。

○五十間練ルを羽黑のまつり哉

○吹蝶に木末の蟬も鳴止ぬ

手向町より神前マデ四十丁、石の階、半途に祓川、此所にて垢離をさる。森〳〵たる杉の間より瀧落、水の烟はくりから不動の腰を廻る。修驗横行の珠數の音、邪欲煩惱の夢を覺す。

途に見れば五重の塔、是は鶴ヶ岡城主建立たり。別當は若王寺、高山の岨を請ておびたゞしき一構、風景いふに及ず。同隱居南谷に巷室、風呂の用水は瀧を請てたゝえ、廁は高野に同じ。

○水無月は隱れて居たし南谷

湯殿山へ登るに、麓は晴天、山は雨、漸月山ニ詣て、雪の巓牛が首と云岨に一宿。

早天湯殿奥院へ詣ス。諸國の參詣、峯溪に滿くて、懸念佛に方四里風に運び、時ならぬ雪吹に人の面見えわかず。黄成息を吐事二万四千二百息。

抑御山は靈現あらたにして、神祕の第一也。嶮嶺の峯天をつらぬき、雪の花は常盤の枝をさゝえ、二丈の氷篠硼にしたゝり、銀竹は瀧の俤をなす。樹は地に伏て、共に穿つ。草は土中に蘙瘞(ヘイエイ)ス。其氣色全朧月のごとし。兩權現の外、靈地の奇瑞、人々踊躍の歡喜をなし、一度詣ては年々恩をかくるが故に、戀の山とは申也。嶽祕密の御掟、尊き千品語ル事不レ叶。いよ／＼敬て、つゝしむべきは此御山成けらし。

○大汗の跡猶寒し月の山

○山彦や湯殿を拜む人の聲

曾良登山の比

○錢踏て世を忘れけり奥の院

登り下り凡十五里也。御山への登り口、都て七口、尊き光を得て、幾(いくばく)かの人民身命を繫ぎ、國豊なり。しづと云へかゝりて、山形の城下へ出ル。此所より廿丁東、チトセ山なのづから松一色にして、山の姿圓なり。麓に大日堂・大佛堂、後ロ麓ニ曉鐘寺、境内に實方中將の墓所有。佛前の位牌を見れば、

當山開基右中將四位下光孝善等

あこやの松、此寺の上、ちとせ山の岨に有けるを、いつの比か枯うせて跡のみ也。はづかし川は、ひら清水村の中より流出る。ちとせ山の麓也。

○秋ちかく松茸ゆかし千載(ちとせ)山

最上市

○野も家も最上成けり紅の花

寶珠山・阿所川院・立石寺(所ノ者は山寺と云ふ)城下ヨリ三里、慈覺大師開基。山ノ頂上ヨリ曲嶙の立石、碧落に登テ、雲頭ヲ踏ム。

嶮難百折ノ靈地、仍、立石寺と名付給ふ。

對面石・文殊堂・藥師堂(毘沙門天傳教大師)・金銅鰐口、是は主護義光朝臣寄進也。清和天皇御廟・三王權現(五月廿五日祭禮近郷出神)・常行念佛堂(此本尊彌陀)・御手洗(則阿所川)・御枕石・眞似大師御手掛石・無レ手佛。半途ニ十王・奥院(三十番神十羅刹女)・獨鈷水・骨堂・寶藏・胎内

潜・十王堂・輪廻堂・印ノ松・慈覺堂・經堂・五大堂・白山堂・地藏堂・不動堂・十八坊・天狗岩・ミチャ川。

○閑さや岩にしみ入ル蟬の聲　芭蕉

○山寺や人這かゝる蔦かつら　仙化

○山寺や蔦も榎木も皆古風　風仙

○山寺や岩に戻ッたる雲の峰　桃隣

山形より山路を經て、ゆの原へ出ル。わたる瀬村と關村の間に、飛不動、堂守は茶を煎て往來に施ス。いつの比か飛彈匠、一夜の内に堂建立せんと誓して、良材を集置けるに、半に鷄の聲聞ゆ。夜は明たりと大願むなしく成ぬ。角の柱は崖に連て岩と成り。今見るに八寸の角を雙べて、幾重堅に立たるがごとし。彼岩の頂は幽に見えて、前は早川也。組立たる岩の高さ八十丈余、横二百丈余、往來の貴賤皆足を留、膽を動ス。是より段〳〵出て桑折に着ク。田村何某の方に休足。

仙臺領宮嶋の沖より黄金天神の尊像、漁か引上ゲ、不思儀の緣により、此所へ遷らせたまひ、則朝日山法圓寺に安置し奉ル。忽の御奇瑞諸人擧て詣ス。まことに所は邊土ながら、風雅に志ス輩適中あり。げに土地の清淨・人心柔和なるを神も感通ありて、鎭坐し給ふとは見えたり。農業はいふに及ず、文筆の嗜み、桑折にとゞめぬ。

天神社奉納立半

○石突に雨は止たり花石榴

須ヶ川に二宿、等躬と兩吟一卷滿ぬ。所の氏神諏訪宮へ參詣、須田市正秀陳饗應。

○文月に神慮諫ん硯ばこ

又こゆべきと、白河にさしかゝり、

○しら露の命に關を戻り足

遊行柳（ゆぎやうやなぎ）　芦野入口一丁、右へ行、田の畔に有。たゞし絕清水も流るゝ。

○秋暑しいづれ芦野ゝ柳陰

同所宿中、桃醉興行。

○來る雁の力ぞ那須の七構（なゝかまへ）

喜連川、庚申に泊合て、

○御所近く寐られぬ秋を庚申

宇津宮へかゝり、社頭に登て叩首（つかうべ）に、額日光宮と書り。二荒を遷敬し奉りけるにや。

○笠脱で天窓撫行一葉哉

小山に宿ス。七夕の空を見れば、宵より打曇、紅葉の橋も所定めず、方角を知べきさて、月を見れば影なし。力なく宿を頼。三寸を求め、牽牛・織女に備へ、間なくいたゞきてまどろみぬ。

○又起て見るや七日の銀河

淺草に入て、はや江戸の氣色、こゝろには錦を着て、編綴の袖を謝し、觀音に詣ス。

○手を上ゲて群衆分ケたり草の花

草扉にそこほれ、破れ果て、蜘蛛は八重に網を圍ふ。

○盂蘭盆や蜘と鼠の巣にあぐむ

子
仲秋中旬

はせを老人の行脚せしみちのおくの跡を尋ねて、風雲流水の身となりて、さるべき處〳〵にては吟興を動し、他の世上のこゝろ〳〵を撰そへて、むつちどりと名付る。其人は武陽の桃隣子也。予がむかし、かならず鹿嶋・松嶋へといへるごとく、已を忘れずながら年のへぬれば、夕を秋の夕哉といひけむ、松島の夕げしきを見やせまじ、見ずやあらまし。みちのおくはいづくはあれど松嶋・鹽竈の秋にしくはあらじ。花の上こぐ海士の釣舟と詠じけるをきけば、春にもこゝろひかれ侍れど、なをきさかたの月・宮城野の萩、其名ばかりをとゞめをきけむ、實方の薄のみだれなど、いひつゞくれば、秋のみぞ、心おほかるべき。白河の秋風。

時是元祿丑の年秋八月望に

ちかきころ　素堂かきぬ

京寺町二條上ル町　井筒屋庄兵衛

江戸石町十軒店　西村宇兵衛

俳諧

伊達衣（だてごろも）

乾・坤

等躬撰

彼業平の葱摺は、誰家より染出せる模様かもしらず、唯昔といふをよすがに、古き友だちかたらひ、今の若人の馴染ふかく契りし人々の數を盡して、集め侍りしに、あるは境を隔たるは遲く知れ、ものゝ心ゆだねにもれたる句もまゝ侍りて、本意なく思ひ煩ひけるに、又傍なる人、伊達といふ言の發りは、やんごとなき御口すさび初にて、ある殿のあさからぬめいぼく等、此恐れをもかへり見ず。葱摺・伊達衣、續きよければ、かゝる名題や、しかるべからんと、いりほがなるすゝめを幸、予草案の冥加となし畢。

元祿十二己卯歳

乍單齋　等躬　序

伊達衣　上卷

神祇

唐めかず目出たし雜煮神の膳　調和

天の戸の今や祇園の削かけ　露言

相惚も神事の數か常陸帶　不碩

松風や暖かに吹神の息　助叟

釋教

涅槃忌や雪に隱れし梅の花　如濁

鶯の聲や涅槃の朝濕り　等躬

巣に馴て尼の伽する燕かな　玉水

藪寺もにぎはす變り椿哉　可朴

花咲ば初瀬の寺も在家らし　季毛

山僧や花守になり見てに成　申候

花鳥に松笠ひろへ旅の僧　等躬

留筆の破戒はゆるせ山櫻　庚蘭

古寺の跡迄おもひざくら哉　如濁

人音に小哥やめけり寺の花　しのふ
片箱にうち覆ひたるつゝじ哉　万水
あの風巾は雲と九輪の間かな　巷月
藤ばかり春に後るゝ鐘樓哉　等躬

戀

心ゆく貞女はそしる柳かな　何云
おぼろ夜や尼の裩干す軒の梅　不球
物思ふ人のすがたや朧月　不碩
髪結ぬ戀は艶しや薢堀り　鎮守山 江風
花見哉女の力に樽の口　何云
花盛妻や妾も殘されず　庚蘭

述懐

二首は持に一首のまけや座論梅　和英
隠遁の氣をもうごかす柳哉　季毛
身を山に捨てももとの躑躅哉　如濁

懐舊

山中常盤舊跡

雉の子のかゞみ所や草の塚　轍士

陸奥石川、泉式部舊跡

あやなしや爰に式部が梅の花　等躬

名所

元日や野田の衢も春の風　露沾
藤の實を仙家に賣ん子日山　何云
みちのくや宗任もこの梅の花　支考
水影の不盡おほけなや飛蛙　茄子
武藏野は人に喰付雉子哉　山形 了樹
なぐさめて通せ那須野の夕雲雀　桃隣
雁がねや霞が浦を一日路　支考
白鷹もまだらも富士の余波哉　等躬
こみ入て見所聽ん嵯峨の花　口棘
筏士や花に髪ゆふ芳野川　八角

其わざを學て

消がてに水の霞や芳野紙　和英
とばかりや花を筑波の裏おもて　助叟
花に來てむかしぶり聞筑波哉　不碩

神祇　葵祭は中絶し侍けるに、千石千貫の御寄附有、恐ながら有がたく

神慮二度の光や葵艸　季毛
瑞籬や艶を持出す葵草　等躬

塩竈なうつし奉る所にて

捧ては小祠にあまる鰹かな　等盛
唐人の眞似も日出度祭かな　季毛

釋教

夏の中は抄子をかぶる鼠哉　琴風
名ばかりや裸の行が衣がへ　不碩
似合なしや夏掻摘たる五十集店　不職
禪僧は衾とる間を涼み哉　渡部氏 自嘯

戀

ふところに吉原本や扇うり　江戸 岩翁
見ぬむかし美人ゆかしや米嚢花　好水
田うへ蓑股を見せぬを女哉　桑折 桃祇
離れ屋の田植むつまじ只ふたり　等甫
あやめ誰在五中將皃よ花　和英
すゞめども女は屛風すだれ哉　等車
風上に若衆たゝする涼かな　風仙
女なる繪師に書せよ郭公　可朴
時鳥顔見合する夫婦哉　長泥尼 妙生
きぬ〲にないてまはすぞ杜宇　等躬

懷舊

素竹軒露言懷一周忌

云出すを去年の活皃ほとゝぎす　調和

雲光寺佛國禪師舊跡

木啄も庵は破らず夏木立　芭蕉
草の戸に大キ過たる牡丹哉　何云
郭公繼子の耳もふさがれず　須竿
隱遁の相圖か瓜の蔓ばなれ　如濁

無常　此鳥は今日より死を隔て、夕の飢を斷と承れば

明日の世を雁の泪や堺ごもり　等躬

なく涙雨さふらなん渡り川氷まさりなばかへり來るかに。是は前參議なる人の妹の君

に後れ給ひけるを、悼おぼしめされてさなん。おほけなきためしながら、かゝる歎を身にしる雨のたえまなき折から、四手の田長の一聲うちしめりたるに、なみだくらぶべくおもひなして、

ほとゝぎすしるや妹のわたり川

七日〳〵は經よみなんど、ふつゝかにくり返し侍りけるに、又家童子が背夫なりける暦など、まめにしわたらへけるが、春より夏かけていたはり、皐月の中つ三日の曙の鐘に、此世の夢たえぬと消息をひらきもあへず、しはがれたるも斷過たり。

香薷散なみだほとびて味もなし

福田露言は予武江に住し比、俳言の昵ふかかりけるが、此たび、三世きれ過去の前輪や夏の月　と一句を殘して命終をとげぬと京の轍士、陸奥行脚にかたり捨て通りしかば、

ほとゝぎすやら戀し鳥無常鳥

是を聞て、人〳〵の送り侍りける句、

訃をきあへず殘り多さよ夏の露　季毛
蓮の葉の絲にはぬしとなられけり　芦葉
亡人に汝はふかしほとゝぎす　杜覺
山道や手向にとゞけ子規　等秀
汲ためて水茶や我が心ざし　等般
夏の夜や念佛一せめ朝ぼらけ　等盛
一息に死出の山路の淸水哉　茂淸
夏切の茶に追悼や和哥の友　守朴
涙かな塔婆も白き夏の菊　等水
鼓子花の露や手向のうつはもの　雪雨
生よ死よ着てぬぎ捨し衣がへ　二本松 惟氏
師の跡や卯花闇はくらくとも　文庫
緣につれ手向る花や雪見草　東水
おどろくや世は灌佛の右の指　梅月
風悄し哀香ばかり夏の花　包抄
泣なみだ夕皃黑く文白し　八角

子なうしなひて

泣あかす夜や子の爲に蚊も追はず　杜覺

名所

東武下向に
先の月みよし野の花や富士の雪　貞室
比めくや須磨人の氣も若楓　好水
我心駿河の富士やほとゝぎす　石川少女つね
星月の井より湔足す螢かな　好水
田植まで茶見せ出すや角田川　其角
業平も此川筋や夏の舟　轍士

右兩句對
何ともいへ家鴨の雛は鄙の鳥　等躬
夏の夜やによつと筑波の月ばなれ　轍士

殺生石
石の香や夏草赤く露暑し　芭蕉
玉川や渦の名になる花卯木　等隣
卯花に沓投込る影の沼　梅舍
夏草に世をゆづりてや影の沼　桃隣
安積山影や蚊遣の細明り　等躬
山の井におもはず落す扇かな　杜覺
文字摺に西行は誰レ葛の花　轍士
荵摺色あけて行け夏衣　岡村不丸

金花山
二十尋の水晶凄し苺の花　助叟
木の下の闇のたすけや泉川　等般
五月雨を集て涼し最上川　芭蕉

象潟九十九表八十八潟
口の及ぶ方へうちむく涼かな　助叟
八十八潟名名字とむる涼哉　等躬
三ヶ月の氣にやしらけし雲の峯　曾良
穂屋守の相手に作るかざし哉　等盛
雪國やあらはに穂屋の花薄　等躬

釋教
片思ひにて又やみぬ魂祭　しのふ
妹が顏他人ぶり也盆三日　和英
棚經や去年の小僧色黒し　不碩
聖靈に馳走ながらの泪かな　舟帆
魂祭挽茶は跡の物淋し　何云

佛へは拐て織れんをみなへし　桑門　檜角

婇もはや枯稿とかれぬ尼の貞　須賀川佐藤氏　豐方

名月や鐘樓に登る古木立　万水

松島の月や雲居の自畫自讃　等躬

戀

いなづまや女ぢからに戸の鏁り　口棘

稲妻におとこ買たき孀かな　好水

婇の暮男も女ごゝろ哉　馬車

誰仰に若衆行らん秋の暮　等盛

戀病やいろはを習ふ婇の昏　一馬

無常

蕣や其日〳〵の初無常　一葉

述懷

蕣や貰はずやらず垣の花　桃隣

草庵の庭つり合ぬばせを哉　雪窓

萩咲て乞食が薬屋あらは也　三春　雨舟

古家や命かけたる種瓢　松廓

居すくめど老の心や後の月　等芳

名所

須磨人はよくも浦けり秋のくれ　調和

秋ひとりたつや雄島の男松　鋤立

江戸川にて

筋違に雁や落来る富士筑波　等躬

不二の根や足の際迄稲莚　琴風

婇風や蟬の流るゝ鞍馬川　万水

草につく螽も重し箱根山　琴風

塩木割音や更行須磨の月　山形　友迪

名月や沖つの宿の緣通り　等躬

松嶋

島〳〵の暮てまはすや婇の暮　鋤立

宇治

茶を譽る比や時雨の中舍り　等躬

煎蠣や壺皿ひづむ姥が池　九河

神祇

神樂女よ早苗植しも其手もと　和英

釋教

達摩忌や何ンの香もなき所より　如濁
山科に酒屋尋つ鉢たゝき　八角
鉢扣我身の影か夜もすがら　包抄
鉢たゝき扨洛外はどこまでぞ　等躬
南無妙の心はしらじ寒念佛　芦葉
寒念佛女と成し夜明哉　不碩
年の暮宿借りかねし法師哉　季毛
年の暮くれや遠寺の村鴉　何云

戀

年の市片心には戀路哉　何云
衣くばり床しや無垢の行所　季毛

述懐

世捨ては二日とも見じかへり花　不碩
勿体は五十よりして頭巾哉　花月
隠居所やかくてよしある冬木立　三春 丸石
老楽や片耳氷る鐘の聲　包抄
名をよふで譽る姥等の品下り　万水
足ばやに何を唱へて厄拂ひ　季毛
草菴に菾石を洗ふ歳暮哉　八角

哀傷

葬の火を先あたるらん寒念佛　里夕

はせを翁追悼

とても死ぬ身なら難波の枯野哉　等躬

すま

敦盛の笛吹沸かさよ衛　万水
狂亂のこゝろや時雨ゝ角田川　不碩
姉場なる女松は何と爾時雨　等躬
寒き日や外へ出て見る不二の雪　桃隣
白雲や二村に見る馬士の雪　奥郡山 愚口
初に今朝腰きり程や越の雪　口笑
兎網かゝる哀や越の雪　會津 不憚
此雪に直道せばや三穂ヶ崎　等般

野田玉川

汐風や松につらるゝ夕衛　等躬
淀の橋みじかき人の師走哉　京 言水

あら井にてめしくふやうに師走哉　晋子

長途狂倡の吟

桑門可伸は、栗の木のもとに庵をむすべり。傳へ聞、行基菩薩の古は、西に縁有木なりと、杖にも柱にも用ひ給ひけるとかや。幽栖心ある分野にて、彌陀の誓ひもいとたのもし。

かくれ家や目だゝぬ花を軒の栗　芭蕉
まれに螢のとまる露艸　栗齋
切崩す山の井の名は有ふれて　等躬
畔つたひする石の棚橋　曾良
把ねたる眞柴に月の暮かゝり　等雲
烋しり㒵の矮屋はなれず　須竿
ウ
梓弓矢の羽の露をかはかせて　素蘭
願書をよめる曉の聲　芭蕉
松歯朶に吹よはりたる年の暮　栗齋
酒の遺恨をいふ心なし　等躬
聟入は誰に聞ても恥しき　曾良
ざれて送れる傾城の文　等雲
貧しさを神にうらむるつたなさよ　須竿
月のひづみを心より見る　素蘭
獨して沙魚釣乘し高瀬守　等躬
笠の端をする芦のうら枯　栗齋
梅に出て初瀬や芳野は花の時　芭蕉
かすめる谷に鉦鼓折く　曾良
名
あるほどに春をしらする鳥の聲　素蘭
水ゆるされぬ黒髪ぞうき　等躬
まだ雛をいたはる年のうつくしく　須竿
かゝえし琴の膝やおもたき　芭蕉
轉寐の夢さへうとき御所の中　須竿
朴をかたる市の酒醉　等雲
行僧に三社の詫を戴きて　曾良
乘合までば明六の鐘　素蘭

伽になる鶺鴒の聲を慕ひ　等躬
四五日月を見たる蚕の屋　栗齋
街にのみかひなき里のむら牝　等雲
鹿の音絶て祭せぬ宮　曾良

ウ

冠をも落すばかりに泣しほれ　芭蕉
うつかりつゞく文を忘るゝ　等躬
戀すれば世にうとまれてにくい顔　素蘭
氣もせきせはし忍夜の道　栗齋
入口は四門に法の花の山　曾良
つばめをとむる蓬生の垣　等雲

雨唫　支考

此市に淺香の沼の田螺うれ　支考
京諸白を思ひやる梅　等躬
ぬつくりと春も火燵にふん込て　仝
月に明ゆく葭の屋根裏　考
戸袋の脇に鶉のこそ〳〵と　同
肌やゝ寒き詞市也けり　躬

ウ

一縄手あたまくだしに降時雨　考
喧嘩牛をかけ通る馬　躬
黒門に鋲乗物を舁居へて　考
後世は心のふかき樂　躬
行雲の築紫の方も定らず　考
水主は衣をからころと擣つ　躬
月影に茫々とする氣をはらし　仝
何を鼠のきしる妹の夜　考
むづかしき物額まるゝ戀の文　躬
眞弓槻弓幾人の妻　考
珍らしや花の梺の屋敷取　躬

名

欵〳〵と飛水のかげろふ　考
万歳の心に成てかけ廻り　躬
上戸の筋に下戸もありけり　考
夏むきは京敷寺に居りくらし　同
朝がほの實の油しめ出す　躬
信濃なる穗屋も稲屋に建つゞき　仝

たらゐ踏ぬく月の宵やみ　考
庚申の曉に布子を引重ね　同
美面さま〲に小兒大兒　躬
闘守に物を思へばなぶらるゝ　仝
ひとり障子のころぶなるらん　考
いち時に料理の下を燒付て　同
雨にあられの雜る冬陣　躬
蕪掘る貴布禰鞍馬の坊主共　考
數多の鎰を腰につけたり　同
月毎に何やら角やら物いまひ　躬
根繼をしたる家のそゝくり　仝
咲花に鑓長刀をかけ並べ　考
春の司は鶯の哥　躬

懲摺の追加撰れしと聞て、深切の
望かたらひ、卽興の一卷を贈る。

時鳥曉傘を買せけり　共角
土手の蚊遣の匂ふ青草　岩翁
芹を取にあれよをのれと聲かけて　横几
拾ふた藥園分散也　露言
晝寐して跡のよだるき暮の月　桃隣
鰆の身われ殘る暑歟　角
川〲を親の氣遣ふ秋の雨　几
一度は駕籠で詣る万日　翁
後質見知越也扇賣　言
チヤンの匂ひのうせぬ木格子　隣
夕暮は用なけれども祇園迄　角
聟があつかふ借金の高　言
手ばなして下すは惜き女方　翁
戀もさら也伊勢の古市　几
出來さうと思はぬ料理氣に入て　隣
名人ながら針は素人　角
月花の年穿鑿に負にけり　言
眠たさましに七種をうつ　隣
船宿が喰積見れば米斗　翁

片隅に置壺の漉水　言
下駄はいて近きあたりを鉢開　几
蛬過からは徒然草を聞　翁
替にやる壹分が錢の跡もなく　隣
世のおもひ出よ玄孫を見る　几
法眼になれば苗字を呼ぬ醫者　翁
手に屆かぬと返す印傳　角
卯花に羽織を着ねば歩きよし　几
酒塩かくる鮎のしら燒　翁
けふの月あすの愛宕も天氣也　角
主を下人にして踊る聲　言
ウ
一かまへ隱家に見る菊紅葉　隣
繪を慰に書簡紙撰る　角
夏切も雨にはしめる磨の音　言
袖口くけぬ袷かたびら　几
小船にて樓船尋る花の暮　隣
鷺さへ青き苗代のかけ　筆

奥州の名所廻り、文月朔日須賀川に出て、乍單齋に舍り、一夜は芭蕉の昔を語りけるに、去秋深川の舊庵を訪し予が句を吟じ返して、燭下に一卷に綴りぬ。

初秋や庵覗けば風の音　桃隣
蚊遣仕舞し跡は露草　等躬
月獨蕎麥切腹の更過て　仝
又定紋の形り替て見る　隣
何やかや藝は覺えて師にならず　仝
只横平にこしらゆる頬　躬
ウ
湯洗は博勞しける驛にて　仝
涼し〱と石に匍匐　隣
繕はで信の増たる宮作　仝
一形儀ある哥人也けり　躬
百兩の金を直に攫くれ　仝
淺きといふは猶ふかき戀　隣
足くびは紅に隱れて前渡り　隣

秋來にけりと風呂に寐轉ブ　躬
むしらせて雁の羽箒掛て置　仝
田毎の月を語る米搗　隣
花と杉苗は後住の植られて　仝
春の永さや碁笥を枕に　躬
名
一說は猿といふ也呼子鳥　隣
手足のたらぬ御所の大三寸　躬
はら〳〵と篠つくやうに玉霰　隣
籠しめるをのが放埒　躬
貧乏の僻に代〳〵力孫　隣
伊勢は旦那を大切にする　仝
久方の月日も請よ公事相手　躬
海に見立し山間の霧　隣
僧都ともいはゞ像の消やせん　躬
君是非〳〵と拜む媒　隣
口にしほのある樊噲が若盛　躬
戀よりおこる喧嘩暖ふ　仝
ウ
喈や坂田を出る帆懸船　隣
數多の星の名を付て見る　躬
景色に過去現在を顯はして　隣
何をよすがにかゝる奉公　仝
花の香を此御小袖に舁込　躬
姑に千代をかざる蓬萊　仝

等般が迯りけるなめでゝ、申つかはしけるにすがりて、驛に少隔りぬれば、一順かれこれと廻し侍るに、家業にさへられ由捨ける。

此海松の房いたいけや月の木挾　等躬
網に澁引烋の樂　等盛
古酒新酒駄酒買込場を取て　等盤
榮螺の㕝を足に踏たて　李龍
何を見て緣がは鳴す悴共　素蘭
十面作るうちが關守　杜覺
吉凶は又近江路の生別　等子

簇色かはる戀のときめき　好水

此御子の母傾城の成(ナリ)あがり　口棘

伽羅縫くるむ寸袋の切レ　季毛

硯屏(けんびやう)の物好脇を見くらべて　執筆

乘物醫者の歩行(かち)で兩人　等躬

伊達衣　巻下

立春

蓬萊にきかばや伊勢の初便　江戸風羅坊 芭蕉

鵲(かさゝぎ)の橋踏初つ年おとこ　同東市隱 山夕

年たつや家中の禮の星月夜　同晋子 其角

國栖(くず)の曲舞(まひ)ふよ老の中間入　京小野川 立吟

記を續がば土佐の九万疋年の魚　江戸 和英

菓子よ茶の子といへる名にめでそ　羽山形 何云

予が軒の栗は、更に行基のよすがにもあらず、唯實(たゞ)をとりて喰のみ成しを、いにし夏、芭蕉翁のみちのく行脚の折から、一句を殘せしより人々愛る事と成侍りぬ。

梅が香を今朝は借すらん軒の栗　須加川栗齋 可伸

元日の心愈久ふこゝろかな　日田山佐藤氏 一葉

元日や貞(かほ)見違ふる內の人　石川滿井氏 笠松

乘初や信濃の月毛甲斐の黒　須加川關谷氏 等子

花をかけ年の序と成る壁の文字　等躬

人日

粥木も口芳しき七日哉　坤庵 未琢

贄殿に鶴と添をく根芹哉　須か川内藤氏 須竿

芹一葉二葉に氷くだけけり　同所堀江氏 好水

初市

はつ市や孔子の書のきれ買ん　江戸岸本氏 瓢堂

初市や梅の花貝千代見貝　等躬

野馬

陽炎や屋根の上より鷄の聲　須加川大川田氏 杜覺

かげろふの我肩にたつ紙衣哉　芭蕉

上巳　探題 五章

其一

百敷や雛の妹背の目張向　聊和

猪首に入て下ヶ雛の勝　艶士

人揩て土葉の薊鬼もなし　和英

其二

赤貝の山下水も汐干哉　止水

若和布色紙にならし短尺　立圃

垣根梅腰湯に小袖羽折らん　艶士

其三

誰指に太き蓬の餅　立圃

揩木の味噌で胡葱を噛　聊和

雲に入鳥毛を休驛路に　止水

其四

遲吟也蛙の面に曲り水　和英

舞雩に凪に花の木登り　止水

春日影座頭茶磨をゆるされて　立圃

其五

盧崎もわぶとこたへよ巳の袚　艶士

舟に柳を植て鞠足　和英

伽羅鐵輪仙洞様はのどけくて　聊和

曲水や筧まかする宿ならば　其角

誰に此袂の中の芥子雛　後ノ 露言
雛くれぬ姉の年いふ弟かな　須加川関谷氏 東生
鶯の雛にぬふてふ笠もがな　等躬
薄隈や桃は柳にかくれ蓑　其角
青柳の泥にしだるゝ汐干哉　芭蕉
乞食の能もあるべう汐干哉　江戸 九河
汐干潟けふは野松と成にけり　石川丹内氏 等般

春月

夕月の曲ためさん凧の糸　棚倉岡本氏 東柳
三ヶ月のおぼろげもなし病しらけ　舘岡隠士 柳雫
三日月の茅花に消る野中哉　等躬

春雨

廣庭や木葉しづまる春の雨　伊勢山田槃子事 支考
寂しさもどこやら別よ春の雨　仙臺 疎計

凧巾　東河原の晩景

烏賊吹や川は流れて北南　椎本 才麿
雲に梯や霞にいかのほり　石川丹内氏 等盛
形なき凧に目鼻やいかのほり　等躬
弩殿に弓望けり凧巾　和英

梅

風月の種割ル梅のしろみ哉　何云
梅が香にうちなやさるゝ嵐かな　舘岡隠士 万水
ある家に梅を嗅込ム寒さ哉　岩城 素虹
梅浮て水上捜す懸樋哉　黒羽 翠隣
相役の中むつまじや松と梅　杜覺
香にひかれ鼓聞出す裏の梅　等盛
黄昏や梅が香運ぶ給仕人　釋 江風

野遊に

おさかなに折人つらし梅の花　石川等般子十歳 可候
梅ちるやわりなき兒の咳拂　等躬

柳

舟引の襟の綱より柳哉　江戸短尺堂 艶士
泥沼に風の跡つく柳かな　須加川鎬木氏 等車
徒らに寐ながらすがる柳かな　好水
こゝろよく人なりになる柳哉　渡部氏 花月
借りやりにならぬ柳の柔和哉　二本松佐原氏 包抄

垣にして高くはならぬ柳哉　安積山根保田氏 等芳

船頭や帆綱さばくる江の柳　近江日野梅田氏 季毛

花　東山の木陰に下臥して

仰向て見れば低くや花の貞　京一囊軒 貞室

勸醉吟

先寐入花見歸や花を夢　其角

あふのけて寐て行花の船路哉　瓢堂

初花に車大路や明の鐘　季毛

花守の瘦たるを見よ人心　等芳

惣領の威德よ花の屋鋪取　等子

二時の食喰間も惜き花見哉　杜覺

散花を扇に救ふ御幸哉　好水

客は花亭主や雨をとめぢから　須か川佐久間氏 室成

ともすれば花に戸敲く空屋哉　桑折田村氏 不碩

吹溜に花の雪吹のとてもふけ　万水

見聽する塩屋の花のあるじ哉　二本松 音志

花賣は眞晝の鐘に散にけり　一葉

炭燒も花に手水をつかひけり　石川山野氏 等隣

闇の夜は心の内の花見哉　郡山貝山氏 友志

請答せねど主よ花の陰　長沼矢部氏 雖云

今日も又花の戻の道狹し　淺香山 保田氏 芦葉

足よどむ間を川緣の花見哉　等躬

櫻

花といふ事わすれけりさくら狩　壺瓢軒 調和

いざ櫻ちりくらならばわがこゝろ　拾葉軒 無倫

夢の樂足よごさぬや櫻がり　椎花堂 調柳

詩の唐名くやしきさくら哉　須加川矢内氏 素蘭

貫之をいはゞ櫻の案山子かな　一葉

讀さうに唖詠やる櫻哉　等隣

はつとして責馬きるゝ櫻哉　日和田小野氏 等元

先門の橋踏返すさくら哉　須ケ川渡部氏 白嘯

奥の櫻岡にて

圖離〴〵に彼岸咲有遲櫻　同小林氏 中候

家苞の櫻命の接穗哉　桑折 一馬

上代もかく侍るかやまざくら　季毛

自墮落な人には見せそ山櫻　包抄

古城は野と成迄よ山ざくら　薫才

雪吹こそ木兎の耳ふる山櫻　大和郡山万木軒 一露

行先を終忘けり山ざくら　桑折 能琉

宿に居て名斗見るを山櫻　須加川内藤氏 等栁

花をもてなすけしき也けり。

山櫻ほするに露の學るこそ　等躬

ちるさくら颾入ばや帶の心　内藤氏 須竿

流水の心にのりそ糸ざくら　何云

迚なら一重づゝ散れ八重櫻　藤田佐藤氏 休意

物濃も物にこそよれ八重櫻　等躬

春艸

若草やまだ音に馴ぬ去年の笛　杜覺

山躑躅石に咲ても根の有か　藤田佐藤氏 如濁

春鳥

雪消やまだ鶯のすゝけ聲　等盛

鶯の音や三段の枝うつり　等盤

うぐひすの聲に跪く足履哉　守山山中 忠利

鶯に帶をする引寐負哉　同所笠井氏 可朴

こは色の鶯らしき巣立哉　等躬

羽をのぶる燕あやふまし竹のうら　石川下山田氏 等水

青空や麥喰雁の一通り　等躬

冠雛

鷄の獅子にはたらく逆毛哉　其角

己が尾に追れて走る雉子哉　等芳

聲ばかり薹黑にこもる雉子哉　日和田小野口氏 泥丸

謾りて蛇にまかるゝ雉子かな　長沼矢部氏 紫藤

足もとへ來るより早き雉子哉　須加川笠井氏 木水

朝鷹や花咲ぬ間の食ごなし　芦葉

春魚

常陸下向に江戸を出る時、送りの人に

鮎の子の白魚送る別かな　芭蕉

白魚や潮の中のかへり水　大坂 万水

白魚ににほひの無て有し哉　唐丸

春虫

胡蝶ははたして、大なるないへり。

やよ胡蝶聞た所はちいさけれ　松月堂 不角

閑中の吟

蝶を嚙で子猫を舐(ねぶ)る心かな　其角

風やみて蝶の居しこゝろ廣葉哉　須か川太田氏 重之

水陸の花にのさばる蛙かな　季毛

笹舟にかしこまりたる蛙かな　好水

跫(あしおと)に飛うく夜るの蛙かな　石川鈴木氏 等秀

氷をぬけて蝌子いたく肥にけり　陸郡山津澤氏 墨糞

花に鳴る鳥にてはなし䵷蛙(アマガヘル)　守山 野松

雑春

花散ぬ繪莚賣る夏がまへ　江戸東市郎 山夕

首夏

加木まぜてよしやふたある白重　二本松百花堂 文車

夜干してぬれぬを泉郎(あま)が衣がへ　万水

鐵砲をたむる朝也ころも更　一露

綿拔(わたぬき)で借り着をかへす夕かな　重之

衣がへ頭巾羽織は花よりぞ　等躬

端午

眞菰より飛出し鮒やゑびす棚　江戸 沾徳

兵(つはもの)の座したるはなし帋幟　京風笑齋 助叟

幟見る朝や雛の聟定　調和

三(ミ)尾(ノ)谷(ヤ)が甲はしらじ菖(あやめ)曳(ヒキ)　和英

五月雨や見れば幟の竿ばかり　龜翁

片さがる軒葺直す菖かな　二本松 友春

二筋に雨落わかるあやめ哉　等芳

荒果て橋葺かくす菖かな　不碩

後京極殿判曰

藥玉や草は大都(ヨソ)直(タ)にして　等躬

須か川わたりおもひやりて

雇はれて田哥やかはる女馬子　其角

埒もなく見えて筋ある田植哉　等秀

五月雨はどこへ行やら和田津海　江戸 心水

盤子が餞別

それほどは色黒むまじ五月雨　山形 風仙

海棠の眠りやあます夏の雨　助叟

凪の入壷詰ならん氷室守　三城目 松色
夕立の傘疊む瀧津哉　和英
夕立や切を見のがす道成寺　等車
夕立や點滴あつき瓦葺　等芳
夕立や其儘くぼむ一ッ橋　等元
夕立やはづみ切たる馬士が哥　桑折田村氏 不丸
夕立や枕の鐘の呻り聲　同所佐藤氏 馬耳
夕立や合羽に包む日傘　芦葉
白雨は地よりはり合ふ煙哉　陸郡山鮎澤氏 闇夕
白雨や傘一本に人ふたり　杜覺
白雨に碁石撰出ス濱鳥哉　郡山山本氏 蟻角
白雨にはづむで撓む柳かな　日出山 一葉
白雨に鵜のはね干たる岩の阿　石川 雪雨
膳居て三間をひとつに涼哉　露言
山庄に一本見出す涼かな　須か川大田氏 口笑
門涼後は網干す所迄　沾徳
門涼麥舂哥をさかな哉　桑折 しのふ
夕涼ミ男やをのが氣一ぱい　不碩

たのしみや莚に裸の夕涼　東虫
强風呂の好さへあるをゆふ涼　杜覺
有明の月にまけけり涼ミくら　友雪
行戻り橋の間ンふむ涼かな　等般
涼風に冠直さぬ人もなし　陸郡山貝山氏 友志
涼風や哥舞の衣裝のらうがはし　等躬
世の風は貢物に出す扇哉　等子
白地なる扇よ風の色かたち　江戸吉田蘿頭 等雲
虫干や御衣の日陰に内藏頭　二本松上田氏 八角
夏の日やこまる我身の置所　等盛
夏陰や肩に髭ぬく駕の者　不碩
一町に二人と見えぬ暑さ哉　江戸 九河
空晴て肱に竿干ス暑さ哉　友志
眞ンになる咄のころや夏の月　不碩
おりにこそよれ夏帯の三重廻り　小林氏 中候
泉哉底に砂の涌返り　季毛
山里は人せり合ぬ清水哉　何云
結むすぶ手に小魚をせゝる清水哉　岩城 知信

それをさへ上戸飲かつ清水哉　不碩

我素顔うつるしみづの苦哉　長沼村上氏 少計

わが貞を清水に敲く童哉　守山 可朴

山路にて

揖越して猿の汲行清水哉　長沼暴氏 加乾

清水呑で月にまひるゝ猿哉　等盛

夏木

只丸し黒しうち渡す夏木立　江戸壺蜜軒 一蜂

濡色も手づよき枇杷の若葉哉　二本松宿氏 庵月

道邊の流な波で

譽らるゝ日影は夏の柳哉　棚倉荷木氏 東柳

夕顔の棚杭しるし垣卯木　須か川相樂氏 李龍

鄙卑たる人や曇ん花卯木　陸八幡 庚蘭

山里や人居くろめて花卯木　等躬

溫泉に赴ころほひ

うの花や低き軒端の明りとり　等般

川筋や卯花あれど妻子持　沾徳

夏草

うなひ子の両手にあまる牡丹哉　尾花澤 清風

是花とおもひながらも牡丹哉　大垣 伴自

葉の奥に開く界あるぼたん哉　江戸 洗車

世間は牡丹に足らぬ匂ひかな　藤田 如濁

花入に頭つりなる牡丹かな　館岡 柳雫

傘は外にほされぬ牡丹哉　好水

花毎に葉を付て切れ杜若　何云

河骨の一輪つよき水底哉　一露

抱つめてひしける水の蓮哉　万水

きるとはや逆手に持し蓮哉　文車

卷揚て水に蓮の逆葉哉　守山 茂信

葉は花の蓋にさゝるゝ蓮哉　石川溝井氏 梅苔

半月も丸き蓮のやれめかな　口笑

風生於土囊起於靑蘋之末

浮艸の花を染たる圃哉　万水

似合すや男の褌く紅の花　郡山 李魄

芬來る荊の花に尖はなし　三城目佐藤氏 朴探

中〳〵に生り花持な日枯瓜　柳雫

夕顔や風にもつれて屋根防　薫牛
夕良の實や名汚しからだまけ　等躬

若竹

若竹や懸花生ヶの心あて　偶庵 止水
笋や涼しく太くたくましき　等盛
篠の子のこぶかき蔭や蟻の塔　會津 不憚

陸奥甲子といへる湯の山、落葉つもりて岩と成たるあり。そこを自然と木の葉石といへり。

篠の子の生ぬく中や木葉石　等躬

夏鳥

ほとゝぎす〳〵とて寐入けり　調和
きかぬ氣に成て欺ん杜宇　不角

孝子不二遠遊一

花にこそ渡世はさはれほとゝぎす　須か川藤井氏 川柳

夜もすがらにと有しを

深窓に我と居かはれほとゝぎす　同藤井氏妹十歳 久須
餌ぶくろの哥吐返せほとゝぎす　杜覺
雨損や碁に打まけし時鳥　等柳

老の耳くじり出しけり郭公　守山 江風

浦牛に日を送る人に

海山のあぶなげもなし子規　中候
杜鵑聲より玉を吐出せ　万水
杜宇いよ〳〵先の山路かな　口棘
蜀魂右とおもへば左り哉　好水
郭公すげなや不時に只一度　等水
ほとゝぎす枕の月よ心の闇　蟻角
牛牽や牛に引るゝ杜宇　好水弟 好雪
哥はなしわすれてかへれ子規　守山 忠利
市中に馬鹿の唐名よ時鳥　如濁
下〳〵の人がましじやよ郭公　等元
百艸の露嘗て見よ蜀魂　白川響稲選氏 露休
爲朝の押手やたゆむ杜宇　三春 泥龜
涼に月や釣出すほとゝぎす　季毛
野に出て草臥付ぬ杜宇　等芳
藪守は藪をこそ守れ郭公　等躬

寄二夏艸一

時鳥啼や五尺のあやめ艸　芭蕉

郭公みなつきねとや二番草　等躬

白川に佐何云へ文なつかはすはしに

關守の宿を水鷄にとはふもの　芭蕉

いかづちのなぐれに啼く水鷄哉　庚蘭

狐めと火をかゝぐれば水鷄哉　等躬

明星や岸に鵜舟の一擧　等柳

あればあるものとて晝の鵜舟哉　万水

筏士に晝飯貰ふ鵜匠哉　等盛

夏虫

捉られてしばし消たる螢哉　素蘭

萍を閑に繰るほたる哉　文車

渡舟人にすれたる螢かな　好水

舟道の一里宛減る螢哉　須か川佐藤氏 瓶水

螢寐て浮藻を己が筏かな　等秀

螢見に喉の渴を止にけり　如濁

空舟や沖に螢の只一ッ　等芳

聲あらば見はづしはなし行螢　朴操

山家

日盛や表も裏も蟬の聲　[illegible] 如風

鳴入て身を破るなよちから蟬　杜覺

聲迄や梢にふとるちから蟬　須か川保田氏 卜水

木の間哉月に音する夜の蟬　等秀

小鵜の小蟬をこかす梢かな　等隣

蚊の聲やふとる水道の水のかさ　芦葉

蚊屋釣て鬪わするゝ夕哉　不碩

獨寐て暑さの増る蚊帳哉　閑夕

鬼神も逃がさず喰ふ蚤蚊哉　等子

信夫の川中嶋

園にて蚊をうつ猛きこゝろ哉　等躬

照射

我足の音さへ憎し照射狩　黒羽大沼氏 松廓

照射陰晝の枝折や湯守共　等躬

雜夏

よろ〳〵と夏艸背負ふ翁かな　須か川橋本氏 清定

旅宿を此主の許へ、口つきのおさ
こに申送りけり。
尻むきて馬もわかるゝ夏野哉　轍士

初秋　しら川にてかゝりて

初秋にかゝる土用や關しらず　太白堂 桃隣
はつ秌やはや帷子の置洗ひ　和英
尖なる雲のはこびや秌の風　助叟
四十より味ひ甞つ秋の風　如濁
蚊屋とればあれよ身に入(しむ)山かづら　芦葉
文月や夕〳〵のこゝろもち　万水

七夕

辻に出て帶する比よ星迎　東朝
織姿やあ(逢)ふてわかるゝ星二ツ　調和
名月の夜はいかならん、はかりがたし。
七夕は降と思ふが浮世哉　嵐雪
福嶋にて
たなばたは休め絹織男共　鋤立
無造作に絹機借さん女七夕　尉言
田舍にはかゝるまねびを造りて、
七夕の祭をなしけるに、彼陀阿上
人の、けふしもそゝぐ秌のむら雨
さ、ありし句の上を思ひて
七夕の麥藁馬や空だのめ　等躬

盆前後

落る時川さへ匂ふ花火哉　江府 岩翁
名を呼で買ん去年の花火賣　龜翁
人の親の世話の種也かけ躍　等秀
編笠は師匠めきたり練(ねり)踊　口棘
はづみ合ふ心拍子や角力取　等躬
稲妻や形は盲に語られす　調和
稲妻や筋をたゞせば蜘の家　須か川 等谷
稲妻を渡るか橋の拋(なげ)渡し　桑折 凉風

名月

こよしもかまくらの待宵は、大佛

にて見侍る。

明月は南に得たり佛頂珠　玄峰 嵐雪

新月をしぼらば水の滴つべし　尾陽巨靈堂 東鷲

名月や森を出ぬけてひなり聲　東潮

名月や宵のこゝろは相撲取　桃隣

名月や起てうたふもかゝづらひ　艶士

名月はそれよ源氏の繪入本　鋤立

名月や雨降ばふれ雛の聲　等芳

名月や壁生艸の花紅葉　万水

名月や自然と水の垢離れ　申候

名月や昨日伐たる松の枝　八角

名月やうき世心の稲むしろ　等元

名月や又新く眞白く　不碩

名月はやはり禁裏も根芋哉　等車

名月は飛たる鷺のぬれ羽哉　茂信

けふの月三里寄けり相撲取　一露

愚にかへるとは今宵也月の感　如濁

今宵滿し桂の花ぞ十五輪　和英

勝手より烏帽子算ふる月見哉　季毛

居眠りは月に見らるゝ月見哉　可朴

川尻の月見下坐たる事いくら　等躬

露降や蜘の巣曲む軒の月　江戸 曾良

白鷺もまろくふくるゝ月夜哉　伴女

夜明れど月いらぬ間は夕かな　好水

花山院の御詠は、忝き御ためしなるた思ひて、

裏板や御製におよぶ秋の月　等躬

待宵

名月をけふの下見に疵もなし　不碩

川邊の月にいざよひけるに、さく歸れさて宿よりいてこしければ、雲井にかけれさは、きのふの事なるにこ獨言ながら

十六夜は靜に歩め迎馬　等躬

重陽

菊の日の香久山いかに衣更　調和

舊友清風に白河にてふと逢侍りけ

るに、かう〳〵の物調(てうじ)こせさ、やく(約)
そく(束)し侍りしに、約の遲成て、客
の饗いかゞと申送るとて

そば切は後段の笘(とま)よ菊の燕(えん)　　等躬
海山は見所なきぞ後の月　　等芳
肥て居るあの人〳〵も露の身か　　江戸 羊素
むすぶ手に覺えぬ露の丸み哉　　黒羽 和珍
朝霧に釣鐘おもき響かな　　庵月
人や見む秌の雨日の寐草臥　　等秀

田舍連歌にかはりて

月夜さしこそけるぞけれ露時雨　　等躬
秌風の捜殘しや峯の松　　杜覺
雉子尾を眞帆に懸たる暴風(のわき)哉　　泥丸
寐とほけて片膝たゝくきぬた(砧)哉　　等柳
曙の鐘や礎のつきあかり　　須か川等子子 東生
うたゝねを寐せ直しける砧哉　　杜覺弟 夢覺
やにられて親子丸寐の礎哉　　好水
國〳〵に案山子もかはる姿かな　　曾良

あゆまねば案山子ははかぬ草鞋哉　　等秀
欠出て案内子に痙む野馬哉　　重之
肉なくてあはれに立るかゝし哉　　等盛
天然にゆれて矢を射る案山子哉　　闇夕
立案山子是なん民のひとり役　　二本松 音志
夜晝も休まぬ野田の鳴子哉　　等秀
明星にへだつ驛路の鳴子哉　　等元

秋感

木魂には目も鼻もなし秌の聲　　不角
聲なくて庭の秋也青によろり　　柳雫
中位の庭樹や秌を好む宿　　衆卜
老若の秋のこゝろや四分六分　　口棘
醉とほけ暮しつ秌の日半分　　季毛
空船や雷の鳴込秌日でり　　杜覺
手鼓やかならず秋の伽一人　　包抄
秋の暮人來る音よ藁草履　　何云
戸障子のはたつくさへや秋の暮　　會津早山 古吟
木萱こむ池の水際や秌の暮　　等躬

秋木

小男にかたじけなしや下紅葉　秀和
のさ〳〵と猿這登るもみぢ哉　季毛
下臥や名主庄官むら紅葉　等躬
澁柿や枝はもがずに爪の跡　露言
すつぺりと葉の落てさへ柳哉　凉風

秌草

わが蔓ををのが手引の西瓜哉　素堂
夕皃や秌はいろ〳〵の瓢かな　芭蕉
蕣やをのが齢も竿のうら　須賀川 等谷
朝がほや軒を花壇の緣瓦　石川 笠松
蕣の花やこゝろの塩捨場　如濁
道の邊の槿は馬の喰ひけり　芭蕉
樋の音きけば芭蕉の雫哉　文車
炉地すがら斷て入芭蕉かな　可朴
風抱てをのれと脆きばせを哉　不琺
あをる葉はこだちあぐみし芭蕉哉　少計
轉あひて芭蕉や透す露の月　等谷
蓮の實の飛を見付し夕かな　鎌倉 東鄰
蓮の實や心の角の側屑　雪雨
ぞつとするほどそよかゝる薄かな　額箭
一通り風道見する薄かな　等盛
わすれ水我影つなぐ花野哉　瓢堂

等躬に逢て

尋常の人めづらしや我木香　鋤立
花町や菊匂ひ來る朝日影　等芳
下りたちて菊いはゝせよ野路の駒　長雅
垣越に自慢くらべや菊作り　等躬子十歲 道滿
結添て荊や蔦の一ちから　季毛

秌鳥

白雲に鳥の遠さよ數は鴈　其角
鷰や崩れて落る天津雁　季毛
雁がねや何國こゝろのあて所　石川 孔口
囮とはしらで連けり鴈の聲　等般
寄戀や圃に落る天津雁　等秀
雖の歎しにのりて渡る雁　等盛

子鶉やさつかね尾とて犬子草　万水
侘しけれ身は被れつゝ鶉の尾　山形 紫園

秋虫

かはらけに追はるゝ谷の蜻蛉(トンボ)哉　等盛
鳴むしの足まとひ也霜の道　李魄
聾のむし無理に哀と聞人ぞ　須か川矢内氏 等仙
裏枯や聲さへ細む蛬(きりぎりす)　岩城関本 亀子
あたら身や人にはなれぬ秋の蠅　鋤立

雑

咳しあふ隣や秋の一ちから　江戸 梅府

温泉にまかりて

燒加減湯守に習ふ茶飯哉　不碩
秋に減り秋にふとりつ九月盡　九河
千秋の名をいたゞくや御前蕎麥　等躬

孟冬

獨身や寐なをる時の村霽(しぐれ)　京 助叟

脇差の柄に袖置しぐれ哉　何云
賤女の簇なげこむ時雨哉　江戸 此水
敲かれて待ぬ戸開く霽哉　不碩
そこらへは月の降やら一しぐれ　可朴
樫の葉におもたげもなや一時雨　東月
山鳴の一度に飛やむら時雨　万水
肌ぬがぬ船頭もあり村しぐれ　等躬
旅衣袂も襟も霙哉　季毛

物語な聞朝吟

しまきする袖や衣の前うしろ　等躬
海へ降霰や雲に浪の音　其角
余見ホに傘はねかへせ玉あられ　等盛
はね揚り二度目に破るゝ雹哉　一葉
一ぱいに籠の目ふさぐ丸雪(あられ)哉　卜水
芦田鶴のかへりさしたる霙哉　一露
崩れ岩つつはる霜の柱かな　芦葉

雪　むかしの發句

雪持て白松ならぬ松もなし　未琢

おなじく

庭の松あゝらうれしやあれに雪　露言
馬に炭さこそは開け雪の門　共角
初雪や攄なき門の市　等芳
はつ雪や椶櫚帚さへ氣にかゝる　芦葉
初雪に犬みだりなる足迹哉　等車
降雪に糊氣うはつく羽織哉　好水
ころびてもよごれめつかぬ雪野哉　等盛
山は雪樵が宿や稽古哥　紀州熊野 梅水
たど〳〵し雪しどろなる風の道　須か川瀬和氏 光重
杖のべて雪を諒や琵琶法師　中候
投の間は鵜也雪の暮　可朴
雪の底下枝にためす柳哉　高倉程内氏 恒葉
海原は常の儘也暮の雪　東柳
初雪やはたかずに寐る心操　長沼矢雜氏 可得
默然程溜る音なし夜の雪　如濁
響かすば竹もしらせじよるの雪　龜子
雪の猿片手は貞を拭ひけり　等柳

増綱を雪や懸けん繋舟　季毛
猩々の極意は雪をさかな哉　杜曉
雪見るにわざと拾はぬ松葉哉　等躬
風流男の雪車に袖敷山路哉　大坂 昨非
雜役の尿をしるべや雪の駒　等躬
柵の崩れ繕ふ氷かな　不減
曲る程小家の軒の氷柱哉　等盛
逆にふとる軒端の氷柱哉　等盛
北向ふとく南向は細る銀竹哉　長沼 遊計

冬月

名のなきを名にして冬の月夜哉　等芳
凩や浪うち際の貝のから　季毛
凩や障子をとをす月の色　等芳
凩のはね返したる暖簾哉　一葉
木がらしや猶炭賣が高調子　蟻角
凩や只きよろ〳〵と啞の貞　近江日野 梅叟
凩に其儘寐るぞ木賃喰　等子
木がらしに揃はぬ人の歩み哉　等秀

凩や横へ突ぬく耳の穴　桃隣

凩に聖人ばかり脇むかし　芳葉

冬木

數寄屋こそ掃ずに拾へ散紅葉　二本松 惟氏

足音に木葉を破る鼬かな　長沼村上氏 等麗

落葉して梢に星の殖にけり　一葉

梟のこゑ拾ひ出す落葉哉　山形 東水

草壁の破れを繕ふおち葉哉　須か川山部氏 玉水

星月夜落葉さらえば落葉哉　等躬

炑往て賑ふ氣味よ歸花　季毛

作り庭好む宿に入て

是程の冬木や鳥を宿せん爲　等躬

山茶花や椿に似ても冬三月　桃隣

冬艸

人の氣や二度盛ある冬牡丹　好水

物陰に猶堆し石蘭の花　季毛

雁鳴て菊ちる後や水仙花　等躬

水仙や花生ばかり冬めかす　等雲

冬野

腐野や城跡見えて畑境　季毛

木兎も寐に來る冬の案山子哉　等麗

冬鳥

明星や笘屋遠のく鴨の聲　杜覺

鴨鳴や啞と咄て終夜　日和田日下 松波

押破て鴨通りけり池の月　等芳

鐘凄く蹈足はやき鵆哉　一露

追かけて來る波はやし濱鵆　等般

寐くらして

幻に船頭見えつ濱千鳥　等芳

片岸に吹溜らるゝ千鳥かな　等躬

山狩に連とざめきの雪吹哉　等元

鷹居てわりなき文の封哉　何云

寒鳥はなど申事侍れば

一はなや時雨出けし雁の聲　等躬

雜冬

炭けぶるうちは止ける咄かな　文車

恭嫌ひは片付てをく火燵哉　何云

人の居ぬ間寐ころぶ火燵哉　等秀

初て人の亭にて

袴着て裾あたゝめん置火燵　等躬

跡ついて夜の伽する湯婆哉　等般

一ノ籍彌猛ごゝろや鯨舟　季毛

守らぬ間は狐火見ゆる網代哉　不碩

川長や其子の親は網代守　等躬

もどかしく讀ンで直をする暦哉　中候

呼込て明ヶを見てやる暦哉　須か川小林氏 柳雪

寒聲や行あふ所おとゝ弟子　露言

寒聲にすご〳〵出ル夜半哉　一葉

始末者は自身に掃ん寐間の煤　加吃

身を恥ん失物出る煤はらひ　不堿

花鳥の鳥直打せよ年の市　何云

煤拂や隣へ行と茶一服　等芳

此人數どこへ行やら年の市　等盛

渡舟覆すなよ年の市　文車

大切や錏半さへ年の市　等躬

君が代やあまる物なき節季市　季毛

母の事足らぬな諫

大豆煎て福を打込心かな　等躬子 道滿

賣詞八百日の濱よ松の店　文車

世の分野や大晦日の日備取　泥亀

是も又用の内也年忘　万水

石磨に聞や師走の田植哥　桃隣

歳尾

聟入の其夜も同じ歳暮哉　岩翁

寐て遊ぶ人しありなば年の暮　等躬

行〳〵て脇道もなし年の坂　松月堂 不角

相楽氏乍單齋は、予が歳に二たけ計も古き人にして、世上の俳風時うつり行をも心に捨たまはず。丹誠に句をひろひ、葱摺の一集出されしは、廿とせにも及かと覺えし。又ちかき年、桑子の繭を引どく、くれは・あやはの緯經よりも、いとこまやかに物せられ、我にも杼を投よ、筬うてなど侍りしもいなみがたし。機絹の織とめにして、其序をかへりみれば、在五中將のから衣に准へて、趣を書出せるにぞ有ける。同じ比のすき人なれば、嵯峨の至などゝ艶なるべしや。今、箏弼のだてごろも、誰にかさうそく似合しからん。都に名を觸し劍治とかやも、過し世、小六も朱の宮ばしらといはれにき。七夕妻に借さんも事古し、虫干もむづかしとて、櫻咲木の下に筆を耕しぬ。其瓊筵新古の宗匠たる人、好士・達人も多く袖をつらねたまふ。誠にむべなる伊達衣とぞ思ふ。

于晉元祿十二己卯龍集　壺枕齊和英跋之

皮籠摺（かはごすれ）

乾・坤

涼菟撰

園友齋涼兎、武さし野の月にうかるゝ事、ことし水無月の初めより、長月にふりくらしぬ。ロ遊子の許、やどゝせしかば、信因いやましに閑談せる事を述。

正四位荒木田守武は、大永年中の長官也。飛んめやかろ〳〵しき詞いひつゞけて、神慮を仰しより、今も内外の流たえず、亦世中といへる五文字にて、百首よみ侍りけるおはりに、よの中の大永五年長月のかのえさるの夜百首よむ也。是を西明寺殿の世中百首といひて、幼より諺に習ひたる哥ともさりと覺侍るに、涼兎が守武の自筆見侍るよし。

予思ふに、古來近代の撰集、作者をあやまりいへる事どもあまたあれど、瓦礫の中に埋もれずして、其成功あらはるゝ事、蘭生谷ニ人なしといへどもをのづから芳し。

涼兎先師につく事、かの文臺の二見形に扇を畫せ、岩の面を硯として、蛤に潮を汲けん古意をとりて、千とせの杉をいだくこと、嵐も霜もふりかはれど、其名朽せざるをや、こゝに明晰をしれり。

伊勢の國のみに限らず。諸國邊鄙の風騷、翁の古雅を甘美する事、その眞うたがふべからず。いはゞ十才のわらべの抜參して、必神明のことはりに感通するをや。

たふとさに皆押あひぬ御遷宮

此句をもて、宇治山田の門人等、八乙女・神樂男にいひふらせば、榊葉にうたひ鈴ふりたてゝ、さいはいすといふべかめり。是この集の趣とかや。　晋子序

六月廿日居を轉じて、竹三竿をうへつけたるに、頻にほころびたる聲あり。

竹の蟬さゝらに絞る時もあり　晋子
　泊りたふなる家の涼しさ　涼菟
とる段に又や肴をはづむらん　仝
　痩て無念な廿匁の蠟　子
印籠の仲人は誰宵の月　仝
　一はなかけて良が躍る氣　菟
ウ
御座ッたら只はおかぬぞおもひ草　艸

芋むしひとつ蜘の振舞　子
鱠をもやたらかき込明盲　仝
しかりちらして跡は晦日　莵
品川でのつけにかへる帆かけ船　仝
鼠のごとく夜討とらえる　子
太平記どこを望ん辻やしろ　仝
ことしも立て早〳〵な盃　莵
口きりを隣へおくるひしこ漬　莵
雨夜の月の瘧母かなしき　子
下河原花は青葉にちり殘　莵
茶酌のもとは一トの杖　子
菩提寺の作あほうも殊勝也　仝
照つけられてこまる馬取　莵
田のへりに置はあつたら姫小松　仝
捨子といへば先しゝを見る　子
肱笠に忌口の使者の袖ぬれて　仝
鵙の機嫌にいら〳〵と啼　莵
待月や鞠にたばねる帘　仝

二

お社務が出てもしづまらぬ市　子
長髮な亭主をつれて栢の櫛　仝
ちりめん數奇を匂はせにけり　莵
鎌鎗の寶藏院をならひ込　仝
十二樽のむをのが一年　子
世の中の百首讀たるよの中に　子
五十鈴にのぼる中村の鮎　莵
麥藁に幟かついであがくらん　仝
買かゝりさへ隱者やさしき　子
華の時杣木引也エンヤヘイ　仝
鯛を飛する江戸の三月　莵

口遊

凉莵、矮屋に旅の暑ないこへり。水飯にもてなす物、當座〳〵の干瓜なり。こゝに當座の吟

干瓜も五十の皺かあきの風
蔦のうねりを殘す桐の葉　凉莵

月の築今朝はさん〳〵ざと水落て　仝
　さとのうしろに鳴子結薪　遊
材木のあとにとぼつくちんば馬　仝
　みたけた錢に菰を引ぬく　莵

ウ

出女の鼻つかへたる高咄し　莵
　うらみて肩へかぶる小蒲團　遊
七ッから眞降になりて雪の音　仝
　大勢つれて幼少な殿　莵
山門の赤う見えたる山の上　仝
　艪かいもなうて洞庭の船　遊
葭雀のめつたに啼て打曇　仝
　日の養生に餅も得喰ぬ　莵
いま結ふた髮をそこなふわやく者　仝
　出かはり前に急な洗濯　遊
江戸に涌金をおもへば月と花　莵
　春の物見に百色の顔　遊

二

あつらへの日和に山や霞らん　仝
　さし込汐に磨く石壇　莵
鳴海から非番になりて法藏寺　仝
　俄に髭を剃し盜人　遊
十疊も敷るゝほどの松の上　遊
　雪にころびて腹もたゝれず　莵
鼻紙も珠數も押込袖の內　仝
　己がかた氣の墨繪一幅　遊
麿〳〵の女房達にかしづかれ　仝
　庭籠のぞきに出たる業平　莵
三日月を失ふ雲と打うらみ　仝
　及引をぬひてかざす稻妻　遊

ウ

綱切て猿の迯たる初あらし　仝
　畑から戻る內のものども　莵
小屛風を看經每に取のけて　仝
　園にそつと百足おさえる　遊
くれかゝる花の朽木にかりまくら　仝
　もめんに瀧の霞む山中　莵

晋子、居を南港にうつり、竹を植て有竹居と號す。其閑談をさふに竹猶ふかし。

午寂

蹈かへす履より荒て小萩原

斧にもかけず蟷の玉　其角

上莚月の落丈引摺て　心水

杖に光りの出る老中　沾洲

橋杭の太さを牛にくらべけり　景宥

前に田を見てくらす辻番　園友

さかやきのとゝろはげたる旅の顔　桑露

腹をへこめと帶むすぶらん　執筆

ウ

夫なからだるうて猿に廻しけり　角

本明星は三輪ぐむなり　寂

茶畠のうへに引ばる赤根染　友

笠でおさゆる夕立の亀　露

拾人の納戸を鳶に荒されて　水

響を枝に蒔繪さる鉢　宥

打かけた蕎麦にもあはず闇嫌ひ　洲

欠落猫に猪の早を出す　寂

牢人よ僧のたゝくは表門　角

廿日過たる臼の約そく　洲

これも又鰤の俵に越の雪　友

眉を落して瞳喩なり　宥

夜の花枳からる月を出す　露

しとみに逢てよはき羽二重　水

二

田中井に雉子の胸打つるべ縄　角

片荷になづむ肥満した孫　寂

夜を晝に津嶋祭の市屋形　友

かゆひところを縮着て摺　水

横の御意出頭人はかしこまり　宥

鵜の行筋と鷺の行松　露

椎の木に通馴たる角田川　寂

逢さぬ戀か母を誓文　洲

にしき木にそよろといはず立ゐほし　宥

褃の袖からたばこ盆引　露

あさがほに障子を立し子の忌日　寂

紙魚をはらへと渡る初雁　角
夕月に親む氣味ではかまとる　水
かるたもうたす君か寐ぬ色　洲
鬢つけに半分かりし大鏡　宿
どこて落してこの笛の鞘　友
船頭に合點をさせて石清水　露
見事な石を入るゝ壺笠　水
辛ひ香にむせかへりたる荒布店　洲
繻半ばかりで馬かたはすむ　露
あの藪の花に長者の名を殘し　友
こゝに榮行枸杞のつみしほ　筆

一折
嵐雪
齒の跡のあり葛の葉の裏表
もとの平地へ出たる茸狩　涼菟
汐濱に月のしめりを掻寄て　口遊
火うちを借た時の近付　石周

あつさにも旅がふさふて達者也　菟
阮に厠へ落ぬわきざし　雪
時雨時傘買へ〳〵と曇らん　周
割ぬを勝にしまふ瀬戸物　遊
光陰を誰一寸とつもり置　雪
與風目のさめて夜着卷てゐる　菟
猫化して尾をさかさまに歩く也　遊
女房の支配吉原の藏　周
したゝかに食喰なから物おもひ　菟
脣が笑ふかあきの夕くれ　雪
大小の長ひでおどす相撲とり　遊
月見をかけて多田の開帳　桊
牛の名に野郎も花の追からし　周
きじをむしりてはたく衣の香　遊

歌仙
麻村や家をへだつる水車　其角

螢を待に石が敷もの　口遊
福分な顔に五ッの德ありて　團友
鯛を自由に廻すまな箸　石周
もやひより朝の月にかゝる船　遊
笙かと見ゆる霧の材木　角
ウ
怀風に髭の自慢は蛭(ひる)に塩　周
京へ來てから戀の頂上　友
媒とひとつにころぶ高敷居　角
持あげられぬ太刀にのまるゝ　遊
ちる木の葉神樂の釜に掃寄て　友
鶴見屆し沖中の岩　角
窮屈にありくちんばが身だしなみ(嗜)　周
埒の躍椽で湯を吞　友
青磁さへ西瓜の皮に近省(ノトリ)　遊
菰を田鞍に望月の駒　角
盜人のないも本意なし花の主　周
背戸は一盃藤にふさがる　友
二
若鮎の膝にちりゆく糺(たゞす)川　遊
うしろに團(うちは)近邊のもの　周
干た時疊二帖が苫(とま)屋形　角
もらひにかゝる六日目の能　遊
到來(たうらい)をさあと云まゝ酒にして　友
誰耳こすり甚慮文談(其恵トモ見ユ)　角
汗取の下着君かとにほふらん　周
見かはす顔も蚊屋の夏虫　遊
御出から殊に祭の月もよし　友
力に擢(カツ)てやり過す道　周
足どりも彼ぬすまれた芦毛馬　遊
庫裡(くり)で狸の相談を聞　角
ウ
起て出る夜着に衾をまくりよせ　友
午房おこしにかゝる浪人　周
大原女のわめく時分にむら烏　角
ひらり〳〵と屋根の青染　友
鍋釜もなから仕舞に花ちりて　遊
田螺も逃る樋の落口　周

春部

若水を汲やいわ井の底こゝろ　正三位 常和
蓬萊にきかばや伊勢の初便　芭蕉
面々の蜂をはらふや花の春　嵐雪
元日は士つかふたる顔もせず　去來
門松の木藥店や大袋　木因
羽二重の心になるや華の春　如行
塩燒は海を元手や四方の春　氷花
門まつは町の涼しき始かな　春夫
橋を行萬歳どしや國ばなし　炉歩
おなじ名の一度に來たる御慶哉　芦風
年頭や上の町からちどりかけ　云比
萬歳のあとからはいる禮人哉　雨柳
元日やめて度光るあふら鷄　ミノ 伊山
元日や人のこゝろも其ごとく　吟之
萬歳やこちの親仁にいきうつし　寐覺
蓑むしのよひとししたり梅の花　一風
長岡もいまに目出度し松かざり　芦本
蓬萊やあるじに馴て鳥の來る　涼菟
どこに居て雜煮喰やらかくれ笠　仝
七くさや鑓が降とも出てつまん　歌三
嶋原の錢は匂ふか若菜うり　唐庭
若菜摘姿なりけり猫背中　秏登
飛梅や神樂どころのうつし物　圭斯
梅が香や使者の名を聞共間　イ圭
人中をにほひありくや市の梅　露川
むめが香をとりひろげたる夜明哉　信昌
薪つむ軒の富貴やむめの華　支考
梅が香に野守の鉦や旅ごゝろ　賀枝
若餅に丁ど菜漬のかげんかな　清松

廻文

ちこさのけ梅の香のめんけさの東風　藤橋
ちか見たか摘菜みなみつかたみかな　未伯

雨中梅

赤うなりしろうなる梅の雫かな　京莵
鶯のそこら見まはる初音哉　空牙
うぐひすの身ほそにくゞる垣根哉　芦本
鶯やむかしがいまにむめの花　白哥
鶯やまた古年の音を取はべす　萬水
鶯の相手をかえて椿かな　三州 白雪
鶯のまたれて鳴や日一日　北枝
鶯もみられに出たか下馬の松　露川
竹の月鶯藪と見立けり　桃後
鶯の音に起あがれ雪の竹　京莵
鶯や窓のあかりの起時分　武勇
うぐひすの働影や障子越　呂詰

西行谷　二月末日に

寺ふかしその衣更着の木の匂ひ　京莵
大木におもへばならぬ柳かな　江戸 卜女
青柳に鼻つるへたる小鮎哉　口遊
芽を出してうれしさうなる柳哉　萬水
塀越の富士をうごかす柳かな　藤橋

石垣につまるゝしだり柳かな　名古屋 素覧
いとゆふのこぼれ殘るや柳の芽　仝 其山
しほるほどぬれてしだるゝ柳哉　木因
青柳の枝末をよくる木履哉　正相
夜の明てはり合のなき柳哉　起芳
雨風を得手にまかする柳かな　芦本
合羽着て撫ても見たき柳かな　京莵
船出せばろくになりたる柳哉　鶴生
ゆく水に足手を伸す蛙哉　芦本

薪の雨に逢て

さしがさや薪の夜の蟻通　其角

蟻通の宮にて

けん／＼と雉子なとがめそ蟻通　木因
笛の音をむかひに出るや朧月　信昌
おぼろ月薫賣がしめりかな　才麿
きさらぎや火燵のふちを枕本　嵐雪

奉納

如月や雪をたゝひてかしこまり　舍羅

春雨や稽古諷の須磨の浦　心友

雲出にて

馬士に出る子をまつ門や傀儡師　共角
神風に明野がはらの杉菜かな　三河白紙
くゝ立や水口ならば鯰汁　凉菟
芹引や竹をちからに及ごし　湖水
芹つみやむかひへまはる鶴の跡　十丈
雛を待芹摘女水かゞみ　江戸由衣
春雨や桑の香に醉美濃尾張　共角
爐路の松指を殘る絲かな　凉菟
にくまれてたはれありくや尾切猫　芦本
盜して見かぎられけり猫の妻　乙由
杉起て畠を見する雪間哉　共角
くゝ立や鎰の札には下やしき　吾桐
苗代のぬしかそこらに只ひとり　芦本
苗代や座頭も得たる畔つたひ　キ角
出かはりや錦木たつる門たがへ　專吟
出かはりの目見得に來るや十八九　柴友
藪入やひとつはあたる占やさん　共角
やぶ入や童部心の小豆めし　昨意
若殿をはだしに仕たる汐干哉　戸木水仙
傳へ來て雛の寶や延善錢　共角
赤いもの揃て雛の座敷哉　諷竹
買物のから名やひなの臺所　凉菟
葉がくれで隣から見る椿かな　白歌
出かはりや盃させばわるびれる　越中北人

武城の華に

花盛道具ふらせて上野かな　凉菟
ふり出しの日に仕當たる櫻哉　似水
初花に浮るゝ足や土ほこり　越中一草
花見なり繩手にかゝる一騎打　南枝

かしま立に

華曇〳〵とて合羽かな　桃後
垣越に膳もらひたるさくら哉　耕雲

奉納

櫻とは言しりながらや神路山　卜女

この奥にさくらこそあれ宮烏　是竹

明しらむ山は花なり宮めぐり　市盛

散花を筆にはさむや硯箱　一ノセ友夕

おほゝそ鳥のこゝろすら、うわの空なろけしきども也。

ざれありく主よ下人よ花衣　其角

盃をたもとに入てさくらかな　空牙

隱者をさふ

十德で薪して來る櫻哉　凉菟

習出の笛吹華の月夜哉　仝

夜終琵琶に風吹やおぼろ月　乙掉

殿の馬かれば一日さくらかな　相可梅色

歌でよぶ當摩之丞や櫻狩　凉菟

薄色やむかしおぼえて桃の花　芦本

瘦たがる傾城もあり桃の華　賀枝

いら〳〵と日和おもふや初ざくら　富嶋井水

砂原に捨ても桃のにほひかな　吟如

傾城の畠見たがるすみれかな　凉菟

神鳴にふたを閉たる田螺哉　三ノ雪丸

ふつ〳〵と水の物いふ春日かな　一八

あの人の子の名をきゝて

ことはりや養子なら蜂之助　其角

二見

春日照二見は誰の歌すがた　卜女

額あけて名所かたるや苔拾　凉菟

のこる木のつもり仕て見る茶摘かな　水市

明ほのや茶つみに犬のついて行　芦本

つばくらや何を目あてに横わたり　越中溫故

何事を觸てまはるぞむら燕　凉菟

春になり夫婦のしれる雀かな　石舟

鳩の家のぞひて戻るつばめ哉　南枝

水影や鼯わたる藤の棚　其角

藤咲て二階座敷の荒にけり　柳水

腹這になれとや藤の花ざかり　柴友

瀧祭にまいりて

案内の禰宜が宗顏や藤の花　クハナ吾桐

欵冬(やまぶき)や親の氣のへる門の端　初花
山吹や羽織の並ぶはしの上　凉菟

冬部

伊勢の便を得て

塩鯛よ二見の浦もしぐるゝか　口遊
しぐるゝや葱(ニラ)の臺(ヒラキ)の片柳　其角
一しぐれとりつく山もなかりけり　神叔
賣竹の枝もぐ里やふつ時雨　芦本
唐崎の松くるひけり初しぐれ　(岡崎)巨扇
立に來て窓を見てゐる時雨哉　爲甲

數奇者のもさにて

近付の道具も出たりはつしぐれ　凉菟
木兎の寐よふとすれば時雨哉　乙由
寐て行や火燵のうへの物の本　乙掉
おとがいに膳居て行火燵かな　似水
火燵まで綱のばしけり猿まはし　武勇
一方は壁でつゐえるこたつかな　賀枝
もゝ尻の來てはせり合火燵哉　十丈
噺から返事も夢や高火燵　(鳥羽)儲友
不二を見た足を自慢に火燵哉　耕雲
腰かけてその時判官こたつかな　凉菟
法談のまねしてあそぶ火燵哉　一龍
冬たつや御所柿の手にひゆる程　沾德
柿ひとつ梢に殘るさむさ哉　白歌
ざは〲と落葉をわたる山路哉　正相
をり坂をまくり立たる落葉哉　元灌
けさはまだ落葉せぬ也砂の上　芦坡
ちりそめて紅葉にさむし本福寺　凉菟
うまさうな色につぼむや冬椿　芦本
日影に松たち並ぶ十夜哉　水甫
籠ふりや休處を惠美酒(ゑびす)講　(一ノセ)友夕
茶の花に歌案ずるか鶴の番　正信
茶の花に見とれて買ふた畠哉　(鳥羽)和道

ちやの華のりつぼにちるや麥畠　同 一石
茶の花や岨の畠のおくび形　涼菟
里〳〵の入口見ゆる枯野かな　耕雲
蹈からす野に一もとは何の花　閑之
塩汲の猪首も波のかもめかな　其角

小野ゝ古江を尋て

水鳥のをしえ顔也ながれ芦　涼菟
水とりやねぢむく内にはしり船　常銓
水鳥や船つくまでの伽になる　手也
しがらみの雪踏ちらす千鳥哉　豊後 りん
その篗でちどりきかせよ渡し守　乙棹
橋立や次第におもき丹後鰤　江戸 楓子
鱈汁や人のこゝろのくどからず　涼菟
まな板のこゝろもしらず生海鼠哉　三惟
いれ物の形になりたる生海鼠哉　嵐夕
山犬を馬が嗅出す霜夜哉　其角

よし原

雉の尾に雪の花ちる山路かな　支考

旅をゆく鷹も頭巾や不二颪　涼菟
干菜釣窓よりうへや松の風　省風
歌かたり口でもどるや冬座敷　一八
我馬に持あつかふや大根汁　鹿羊
休間も差合腰や大根引　鳥羽 如風
水鼻の落るはづみや大根引　同 倫参
はち巻を角にむすぶや大根引　涼菟
こけてから手を取出す寒かな　須川 天風
ゐびをりの襟にかくるゝ寒哉　松水
頭巾着てそろはぬ鍛冶の裸哉　一瓢
松風にごそつかせたる紙子かな　涼菟
わかひ衆の伊達仕たがりて紙子哉　諷竹
水仙の霜におかしきねぢれ哉　一鶏
草の霜馬に嗅れて消にけり　寸陰
ことしまで祖父が達者や大根引　賀枝
かたつぎの唐人らしき紙子哉　倫参
赤人の顔仕て見せん角頭巾　乙棹
毛ぶとんやこわい夢見る後夜鐘　涼菟

提物を蒲團の下に寐覺哉　丁里
冬籠貳の字に寐たる主かな　龜鶴
手のひらに居る間もなし初氷　草風
降さうな雪さし置てあらし哉　龜羊
おつとつて先田畠の雪見かな　素也
初雪や障子にはさむ人のかほ　口遊
はつゆきやみぞれて仕廻笹の音　木因
はつ雪や海のきわたつ葭のうへ　女 千
在郷の名は口惜やゆきの朝　鳥羽 吟子
はつゆきのはづかしきうに降にけり　一吟
初雪に賣られて通る狸哉　芦本
寐見臺雪降時は起にけり　凉莵
初雪やまだ寐てゐるに降仕廻　乎也
雪丸げ土の付までこかしけり　推奪
雪まろげおとな仕事に成にけり　耕雲

旅行

尾張路や三河へすべる橋の雪　乙棹
榾の火に咄のやうな祖父と祖母　一龍

痩－脚不レ羞レ榾ニ　甘堂
三日月の本情見する枯野かな　仝
更る夜の炭に鼠のにほひ哉　松坂 安竹
茶ばかりと狐啼也枯すゝき　凉莵
昔人もかうした事か冬ごもり　凉睡
押立た箕は屛風也ふゆごもり　箕足
湯をすゝる口のとがりや冬籠　松坂 狸々
かけものゝ壁に跡あり冬ごもり　凉莵
水仙に尤づけるさむさかな　野紅
釣－艇ハ水－仙ノ襪　甘堂

願望の事有て

どこぞでは岩も通すや寒の水　江戸 桑露
ぬきれ手を仕て戻けり鉢扣　芦風
鼻つくもしらぬ闇路や鉢扣　似水
豆腐屋に近付もあり鉢たゝき　宗比
宿に居てあはれげもなし鉢扣　天津 寸虎
蠟燭の功で濟すやまめはやし　宗比
わざくれや三百出して年忘　凉莵

熊坂がとつて返すや煤はらひ　前川
すゝ掃や藏の二階の恭戯言　（松本）平
鷄は屋根に居る也すゝはらひ　耕雲

不分當春作病夫

酒ゆへと病を悟る師走かな　キ角
うつくしい顔で錢よむ師走かな　起芳
猿引が馬で戻りし師走哉　素甫
行先で馬のはね合しはす哉　白歌
節季候に氣をもたせけり酒ばやし　三子
水風呂の中に噺やとしのくれ　吟堂
はり物の世也人なりとしの暮　口遊
古筆もかぞへられけりとしの暮　（鳥羽）梅樹
小骨ある魚むづかしや年のくれ　素や
たんてきに流るゝとしの名殘哉　柴友
くれて行年漕戻せ渡し守　近正
うどん打家や師走の梅の花　（豊後）朱椿
鴨一羽帶にはさむやとしの市　凉莵

人の許よりおこせたるものを、また

人のもとへ送るさて

ふたつなき鰤のわかれやとしの暮　哥三
鶯よ明日のはつ日もその茶でか　木因

皮籠摺　上終

東武行

元祿さらのことし五月のすゑ、武陵の旅に
おもひたちて、内外の廣前にまうづ。

凉菟拝

外宮

涼しさのまことは杉の梢なり

内宮

拍手の袂も涼し木の雫

五月の末つかたまで、つれのさしよりは降つゞきたるに、このはれなん頃、もひへまかるべきと鬮友子が告こしたるは、又例の行衞定めぬたびねなるべしとおぼえしに、さはなくてこのたびは、あづまに行て、はいかいこのむ人々にもたづね逢て、すくみちの事をもかたらひぬべきためなめりときけば、いとよくもおもほしたゝるゝにぞと、口にまかせてかくいひやりけり。

甘堂

愛子平生不ニ俗情一　唯耽ニ俳句一任ニ人驚一
士峯飽見東遊日　六月雪花吟音清

餞別

うつのやまこえて行衞も頃日は
しげりにさぞな蔦の細みち　正珍

送凉菟

臺笠芒鞋任ニ痩藤一　生涯都似ニ水雲僧一
桃青長往道源遠　欲レ問支流入ニ武陵一　沭陽

送凉菟

妙句不レ嫌元類レ俳　山哦浦詠寫ニ幽懐一
沭來相約南歸雁　士嶺月寒東海涯　訥棠

送凉菟

家聲阮籍到ニ東關一　別涙豈無ニ遊子顔一
留止江城榮貴裡　卿心不レ忘大刀環　昌臧

各餞別

水鷄にもぬかりはあらじ旅の宿　乙由
菅笠の空や道〳〵蟬の聲　白歌
なびかして行道〳〵の青田哉　萬里

富士はいま雪の凉しき時分也　正相
風切てひとへ羽織の首途哉　柴友
　閑友子發足に下りあはせて
一ふしはどこへ出しても夏男　諷竹
すい〳〵と水鷄もはしる首途哉　宗比
つねに見ぬ布の頭巾や布羽織　如硯
大名に見られて咲や箱根百合　賀枝
　凉子が首途を送るに、風呂敷に草鞋ゆひ付、はみ出しに引はだかけて、こさ〳〵しう出立たり。
旅姿青田の狐出て見よ　空牙
水無月二日　居を出て船にのるべき處へわたる。
　芦本・斯道送來。
凉しさを待あふせたる日和哉　圭斯
蚊やり焼宿も奇麗に茶もよかれ　芦本
　旅道具は一いろもむづかし。
扇から落して仕廻首途かな　凉兎
三日
　神社を出船して、二見の朝日はなやか也。
かたびらや船で髪結ふ玉くしげ
　鳥羽浦
城山や飛島かけて鰹ぶね
　答志崎
　大みや人の玉藻かるらんとよみしも、このうらなるべし。
藻の花をかけて飛たり冠鷺
　作の嶋
　はせを翁の、鷹ひとつみ付てうれしとさ中されし、いらこ崎のひだりに當れり。
ほとゝぎす啼ずばあらじ作の嶋
五日
　吉田
瓜の香やはしの前までほかけ船
　けふは塩見坂の不二見んと、急にいそぎて
六日
凸うつ黒き背中や雲の峰

新井

布頭巾魁先にたちて鴫かな

七日

小夜の中山に分入て

駕籠かきが武士を泣するむかし哉

かたはらよりはしりよるもの（寄）を見れば、十ばかりなる女の童のやさしげなるが、盲の親を養ふさて、たもとにすがる。松杉の中にうづくまりたるは、かゝがおやなるべし。

蟬聞てたのむ木陰や簔に杖

中御門の中納言家行、西岸に宿して命を失ふさ殘されし、菊川さいふ處を過るに、

松陰や目にしむ汗もとゞまらず

大井川を見渡したるに、思ひしにかはり水あせて、わたりやすげなり。

水無月やちんばも見得て大井川

瀬戸

染飯の蠅追ふてゐる祖父哉

蔦の細道

うつの山よろりとしたるあつさ哉

柴屋に尋入に、古（ふるき）さも名をしられたる庭のおもて物ふりて、岩木に似たるむかしかなさ芝仍の句、梅の青葉なるもなつかし。

くさふかき庭に物有蝸牛

姥が池

鬼蓮やうばがむし（か）のかぶり物

清見寺

椶櫚の葉に蟬はひとつか清見寺

薩埵（さつた）を見はらすに

尻むけて親しらず也海松（ミル）拾ひ

富士川をわたり、酒はよし原にさだめて、あけぼの見んなごおもひ侍るに、俄に風おちて雲は墨をうちこぼし、光はふすまをひろげたらむほごにて、夕立も常のけしきならず、往來の士官に鑓の柄に雫をかたぶけ、農夫は鋤を抱てはしる。そこら吹ちらして、あはたゞし。

神鳴に茄子もひとつこけにけり

からうじて泊にわたる。終夜雨なほやまず。

吹ゆする蚊屋を船かと寐覺哉

九日

きのふにかはり快晴わたる、雲外巓仙客來遊べし。

禪定のこゝろになるや富士の月

十日

箱根

馬かたの胸髭あつき山路かな

小田原

菅笠の馬上はいづれ獸かり

十一日

鴫立澤

西行上人の像を拜す。

水賣も只にはあらじ檜かさ

十二日

品川

涼しさを土佐殿見たり上總やま

日本橋

馬くらやまつりめいたる一かしら　　團友齋

夏部

宮城樹下

歷〳〵や下馬の折ふしほとゝぎす　　其角

いま一聲ともありげに、たゞ有明とも詠られしか。

ほとゝぎす出そむる森や草枕　　芦本

郭公聞や日待の臺どころ　　木因

ほとゝぎす芥子の花ちる暮の聲　　神叔

ほとゝぎす扨二番には紀三井寺　　東湖

ほとゝぎす庭をあがれば椽柱　　北枝

聞からに千人力やほとゝぎす　　泥足

手分して靑葉を出るか郭公　　風國

ほとゝぎす夜や明殘る藪のうら　　露川

露の降松原くらし郭公　　素狄

起〳〵や物にまぎれぬほとゝぎす　大虫

永代橋をわたれば、諸國の杣木つみ上たり。

くらぶ山材木場の日影やほとゝぎす　共角

何を當に行やら闇のほとゝぎす　豐後りん

高取にて

あけぼのや城のなぐれのほとゝぎす　吾桐

三保のあけぼのに

羽衣の松をめぐるかほとゝぎす　凉菟

ころもがへ先鶯はいとまごひ　野紅

ぬきれ手の辯もなをらぬ袷哉　芦本

人中へぞろりと長きあはせかな　凉菟

一ひやうしぬけた良也ころもがへ　萬里

一飛にかたびら着るや麥の中　凉菟

うの花に隣合や顔とかほ　口遊

卯の花に月をあへたる月夜哉　支考

氣のつかぬ扇づかひやけしの花　白歌

見渡しは百性地とやけしの花　沾德

すむ月に垢のぬけたりけしの華　桃先

泣がほに住持もなるや芥子の花　仄止

分限者のあたま丸めて牡丹かな　釜光

この池や田も養ふてかきつばた　儲友

かろ〳〵と荷も撫子の大井川　惟然

籠から使者を見てやる牡丹哉　凉兎

小ゝ性はぼたんの花の行義かな　野紅

地の衆の袴で見ゆるぼたんかな　芦本

竹の子や今朝はとさきへ手もゆかず　方風

うき草や蛙飛込あとばかり　江戸靑棘

裏門の錀あづかりや若楓　凉菟

ひがし山

京中がふかれにのぼる若葉哉　才麿

夏足袋のありきぢからや東山　折角

あてがふて風を寫る若葉哉　一吟

殿作ならびてゆゝし桐のはな　共角

塀越に大工遣ひや桐の華　凉菟

下やみに賀茂の麥食尋けり　凉菟

下闇や鳩根情のふくれ聲　キ角
山伏の鍵きて出たる若葉哉　元灌
吹おろす若葉あかるし奥の院　ミノ左蝴

内藤露沾公の高閣に瀰池を觀遊して

夏山に我は翠簾とる女かな　其角

貴人をいざなひながら

麥といふ草のながめのたどりかな　口今
青梅のわらひころげるあるじ哉　廣嶋柳江
穗に出てかなぐられけり烏麥　無尤
松風の便を啼やかんこ鳥　越中野角
殿樣のお立のあとやかんこ鳥　芦本
岩組の奥に聲ありかんこどり　白歌
所化部屋に鼻かむ音やかんこ鳥　き勇
水鷄啼葭より奥や灯の明り　白歌
宮崎やくろむ早苗にかげひなた　秡不
あの山を我物にして田植かな　凉菟
おもしろい事がまたある田植哉　是竹
いかやうにうへても凉し苗のいろ　歌三
闇〳〵に顏見合せて田うへかな　乙由
こちにゐた女子も見ゆる田植哉　芦本
乳呑子を背中にゆする田植哉　賀枝
神風に鳥も手傳ふ田うへかな　一道
田植哥おやこづからや須磨の里　吾桐
あの中へまろびて見たき青田哉　たつ
うへくばる跡からそよぐ早苗かな　萬里
螢火や草におさまる夜明がた　越中好風
後つきに螢出るなり森の中　十丈
譽られていよ〳〵光る螢かな　野角
屋根うらに螢飛なり須磨の闇　凉菟

松賀秋航、宮城へ趣に初宿せんし
ゆさかや、聞へければ

かやり火に狭箱から團扇かな　其角
蚊の聲の我を尋る夜明かな　正相
起てまた蚊屋につくばふ雨夜哉　凉菟
水鳥の巣もや引けん菖蒲草　桃隣
のぼり出す藏百性や門〻がまへ　凉菟

明わたる今日や木の間の幟竿　元灌
茶むしろの中にたてたるのぼり哉　芦本
五月雨や疊の上でくたびれる　耕雲
錢貸し家おもひ出す樗(あふち)かな　柴友
五月雨をもどせ暑さの昨日今日　松坂 竹音
水鳥の巣をゆり出す小船かな　疎松
聲かけて鵜繩をさばく早瀬哉　凉菟
渡しぶね顔もへだつるあふぎ哉　淡路 意計
若竹や雨にふられてこの通り　杜川
腹立て蠅うちまはる寐起かな　き勇
白雨や禾屋(わらや)をかぶる傀儡師　其角
此法師に雛(誰カ)かぶせけん夏頭巾　ヒロシマ 里洞
川音や寐麻のけぶる朝ぼらけ　江戸 泉日
爪(瓜)抱て頭(剃)そらするわらべかな　津 露松
夕がほの蔓のながさや下手くろし　膳方 西角
夕顔の蔓は何やらさし出す　凉菟
川狩や蓼から先へ引て行　可笑

朝

板敷や今朝ひや〳〵と蟬の聲　宗比

晝

日盛や障子に煮ゆる蟬の聲　凉菟

暮

蟬啼や日の落かゝる瓦葺　空牙

夜

晝啼たところにゐるか夜の蟬　圭斯
一聲は何に追れて夜のせみ　耕雲
梢よりこぼれかゝるやせみの聲　白歌
宵月や長刀鉾のはやし物　泥足

凉菟が馬下に

立かゝり背中をたゝくうちわ哉　口遊
くらがりに人聲は誰下すゞみ　秋不
さし當る用も先なし夕すゞみ　凉菟
星月夜明日のあつさを含けり　芦本
高橋に我も盛れて凉かな　神叔
鬢の毛の髭になりたるすゞみ哉　桑露
勘當の月夜に成しすゞみかな　其角

すゞしさや屋根葺仕まふ跡の雨　萬里
涼しさは雲より落て座敷かな　歌三

いつく嶋

へつらひのなき客人の宮涼し　嚴嶋 里洞
山を見る二階成けり土用ほし　凉兎
片よりて繈子泣けり土用干　野泉
一桶の水打あげてすゞみかな　宗比
泥足をわするゝ門のすゞみ哉　鳥羽 枯雪
六月や家うちあけてはね釣瓶　江戸 里雪
耳よりな噺してゐるすゞみ哉　津 光卜
壁へさす月をながめて涼けり　丹野
から崎の人になりてや夕すゞみ　吟墨

有竹居に遊びて

蛸喰て蓼摺小木のはなし哉　凉菟
思ひよるすゞみ處やみなひとつ　諷竹

秌部

何〳〵とのぞくや星のあかり膳　木因
逢たがる星吹よせよあまの川　芦本
五百機の窓に草鞋や二ツほし　沾德

大伽藍造榮まし〳〵けるさしの今日、遠くおがみ侍けるに、富士・筑波根の間に、更に山ひとつ出來たるかと、空のにほひも、ちかくなるべきほど成けり。

上野より道や付らんあまの川　嵐雪
塀梢かけてかよへやあまの川　其角
につこりと宵の日和や天の川　涼菟
稲づまやもとの處にわたし船　石周
稲づまや棒に成たるあかりとり　十丈
いなづまのつよふて跡のくらさ哉　菟翁
いなづまの初手を吹けり松の風　野紅
稲むせにむされてさはぐ雀かな　柴友

禰宜らしきあるじや巣子にことし米　涼菟

旅行

炑風のきれいに吹や矢洲河原　歌十
秋の雨葉のなき竹の姿かな　嵐朝
蚊屋釣ておどりに出るや女房なし　木因
あのやうに汗をながしておどり哉　呂詰

兩國橋

人聲を風の吹とる花火かな　涼菟
扇的花火たてたる屆從かな　其角
橋杭の股に見得たる花火哉　沾洲
朝がほや笄さがすまくらもと　專仰
あさ顏はあかれぬ花のさかりかな　鳴田 秀藤
朝良や軒燈籠のきえ時分　哥三
次信が顏もうかぶや玉まつり　涼兎
さだまりの馳走もかなし魂まつり　乙由
親のかほしらぬ子もあり魂祭　反朱
お坊主の留守にも光るきりこ哉　空牙
盆の外通らぬ道やをみなへし　芦本

見るもうしひとりずまゐの玉祭　たつ
擂待や水くさい茶の物あはれ　淡路 野風
蓮の實や飛んで又飛はしの上　一八
梢まで死にのぼるか炑のせみ　鹿羊
いなせても又はかなしや火とりむし　野風
しゆろの葉や簑にもならず炑の風　岡ザキ 炑冬
山みちの世話を鳴けりくつわむし　江戸 柳烏
虫の音に火をさしつける野道哉　涼眠
松むしのちんばになれば放しけり　是竹
露ながく釜に落來る筧かな　素堂
病人としもくに寐たる夜寒哉　丈草
寐入かね虫齒に響くきぬたかな　涼菟

いますむ所、涼菟下向より上ゐべき時迄の日數に、四壁のこしばり迄を仕まへば、冬ごもり嘸さおもひやらせ侍ろ。

さい槌の音をしまへば砧かな　其角

挨拶

杵の音あれをもてなす夜寒かな　如舟
八ッ聞てあくび仕てゐる夜寒哉　釣眠
かゝえ帶とかずにたびの夜寒哉　たつ
何やらの音もきこえて夜さむ哉　芦本
ト石やしとゞにぬれて辻すまふ　其角
この庭はすまふずきなり眞四角　岩翁
かたびらの番して居や老相撲　宗乙
つよ過てひとりころびや露相撲　凉兎
押はれて帳に付けりすまふの場　一道
歷々もかくれてはいるすまふかな　温故
二番目は呑でまけたる相撲哉　昨應
相撲とりや美濃路をのぼる鮎のすし　芦本
栗切や鶉と成てこつそこそ　専吟
影ぼうしとゞけば迯る鶉かな　名古や其由
風落て蔦につらなる小猿哉　口遊

題ニ象棊ニ

蔦の葉や裏を働くはしり馬　凉菟

富田、廣瀨氏のもとにて

からうすの五條に似たり壁の蔦　仝
種になるもの見付たり薄の穗　素也

齋宮(さいぐう)にて

朽たりな何やらかやらむしの聲　ミノ梅丸
野ゝ宮の鳥井に蔦もなかりけり　凉菟
あれきけと鳴子ならして子守哉　諷竹

馬も餅喰うつの山さ、晉子が句についで

蔦の實を馬に喰はすなうつの山　凉菟
鱸釣いかにすゞきの味しるか　口遊
朝ぎりや漂木に汐のわかれ行　拊石
石川やかじかおさゆる手のはづみ　温白

旅行

先になり跡に鳴海やわたり鳥　凉菟
あけぼのゝ空や時雨るゝわたり鳥　神叔
白雁や女浪にたちて峯の松　闇指
いろ／＼の嶋になりてや渡り鳥　桑露
船の灯のちら／＼時や雁の聲　凉菟

又來たと鳥おちふや小田の雁　支考
けうこつに誰かさはるぞ鴫の聲　たつ
茸がりや山のあなたに虚勞やみ　其角
こち向て啼やらちかし鹿の聲　芦坡
鹿の音やすんがりとして夜の不二　嵐朝
おもふ事かなはで寐たか晝の鹿　空牙
誰を見る眥さがりぞ鹿の妻　凉莵

餞別に

三月は伊勢で逢ふぞわたり鳥　一柳

奉納

遙拜やそなたに向て神もみぢ　湖春
石つぼの八ッの夜ふかし秌の霜　木因

九月御祭

御穗とつて髮あるまねのかざし哉　其角
木萱迄たゞにおもはぬ御山かな　才麿
紅葉して朝熊の柘といはれけり　其角
芋洗ふ女西行ならば歌よまん　はせを
宿まいらせん西行ならば秌のくれ　常行

京へまかる女のもとへ申つかはす。

おそろしき鈴鹿もいまや初紅葉　凉兎
明寺の朝日に寒し梅もどき　元灌
柿の木に出て遊ばんわら一把　凉莵
栗柿に日の入わたる山路かな　秋不
木ざはしの目利つたなし爪の跡　扇車
菊の香やよい目をまちて酌に出る　ロ遊
畠から出て來る菊のあるじ哉　凉莵
はぜかゝる菊のつぼみや今朝の露　芦本

餞別

染飯や馬の上なる菊の花　沾洲

金澤

照月や夜干の網に風たまり　専吟

鎌倉一見

鶴岡の若宮は、元祿丑のとしに造榮ありて、松柏のみどり彌ふかし。

宮たちやいぶきの中にはつ紅葉　凉莵

鶴岡にて

尾をふるはかれらが情ぞ放生會　専吟

湯井

抱付て湯井の鳥居に月見哉　涼菟

大佛

夕顔や膝に稲おく大ほとけ　仝

江嶋

むかふ日や萱も薄も辨才天　仝

名月やうは氣で人のしまるころ　露沾

人音や月見とあかす伏見草　キ角

供つれぬ大名見たりけふの月　芦本

名月や池のくもりを掃とらん　木因

名月や青ふさし入る蚊屋の中　千

船にて木曾川をのぼるに

川ふねの砂長〳〵し白月夜　涼菟

涼子が旅やつれに鏡かして

はつとした鬢にかゝるやよしの花　木因

栗かりて庵のまはりや初月夜　一道

ひたちの鮭・かまくらの鰹・古江の
鱸膾・わたらぬ雁に俎板をならし、
遠き海の珍物、ちかき江のひれも
の、こゝろにおもへば、よだれに
ながれ、さもあれ、ことしの名月
ながめ得たり。

獻〳〵は咄してすみぬけふの月　嵐雪

扇の絵にたはぶれて、暑を思ふ。

懐に新月入やひとへ帶　ロ遊

名月やしのぶ見付し藪の屋根　乙棹

名月や物喰ふ時も草のうへ　宗乙

さかやきに月こそのこれ朝茶の湯　二休

見てゐるか宿かへ好の松の月　沾徳

左右の手は蚊にはたらいてけふの月　石周

けふの月鼻かむ帋も信濃なり　仙化

暮かゝる枯木の陰や今日の月　隨友

團友齋、海邊の趣向をあらはし、こ
の里に一折を殘す。あけなばいせ
の國へわたらんとなり。

遠けれどむかひ隣や月の海　桑田梅人

名月やはしを落ても船の中　乙由

名月やむかし／＼の人はさぞ　如舟
名月や末座に直る箱まはし　紫芳
柴の戸に出たり入たり月見哉　柴友
ひや／＼となる迄ありく月見哉　和聲
萑にもゑみて見ゆるやけふの月　たつ
橋過てはしに氣のつく月夜かな　白歌
御言葉のかゝらぬ迄やけふの月　正相
名月の園友坊はおとこかな　嵐雪
月見也旅籠の外に栗を出す　嵐朝

芝

名月や芝の網引に好なもの　凉兎

永代橋

あらたにこのはしを渡るに、景色めでたく富士・築〔筑〕波も見得たり。

この橋をかけた大工よけふの月　仝

大成殿

聖堂の庭に詩人や今日の月　凉莵

追加

混沌ととりひろげたる生海鼠哉　乙棹
剱かたばみに花いろの夜着　凉莵
生壁のにほひに朝日さし入て　空牙
あや織やうに木の小割する　乙由
賣ありく九條あたりの芋の莖　支考
人のこゝろの月見成けり　芦本
兒達に我とし添て百の烋　兎
柱相手にかゝる摺鉢　棹
晝渡る鼠の音に柴落て　由
松も五月雨竹もさみだれ　牙
鍬さげて駒の在所の畠道　本
供でしれたる宗入の嫁　考
むかしから上戸の額盃のまへ　棹
萩植かえて椽に寐ころぶ　莵
三日月のほそり過たるこの夕　牙
山はあらしの請取てふく　由
觀音といへばかならず花の奥　考

梅猷あるくいまのはいかい　本
飯蛸の明石ときいて舌つゞみ　兎
　金屏銀屏ひかりちらかす　棹
あそこにも十夜ゑに〻鐘の音　由
　薪のうへに寒き便船　牙
福山の殿は追付御座りまへ　本
　紺屋を雨の降ころす也　考
つきもない道具でせばき裏座敷　棹
　肝は比丘尼になりし臆病　兎
園栗の厨子をぬければ白月夜　牙
　あはれこかしに烌は戀する　由
我かほにほれる鏡の花薄　考
　女房の留主の衣桁さびしき　本
何の用有やら猫のかしこまり　兎
　今日の天氣のしぐれそこなふ　棹
手覆は芝るめきたる黑木賣　由
　かなたからげに干物十枚　牙
どなたにも目出度い花の二三月　本
　かう見渡した門の苗代　考

團友子が忙然たるふところに、一本をたづさえて校合の手つだいさせけるは、東都の人〳〵の句をひろひたる也。不五調の人の笠を荷へるも、此道のふかき一すぢ也と、たのもしくて、なをまめつなく見合す所に、勇士淡齋のおとづれにあひ、ほく一つ捜し出しけるに、金毛がはかまを預かり、泥足が薬箱をもさかせ、立吟が杖をとゞめて、とり〳〵なるに、江府より杜若が馬おりを抱入て、七吟ならべ行ほどに、哥仙にみちたるを卷尾にくはへん事となりて、醉裡の轍士　筆をそへぬ。

若草もあどないころよ月の色　淡齋
　小橋わたれば跡に雉子啼　團友
春の雨ういたつ虫が流されて　金毛
　竹のしなへにかゝる手拭　轍士
次の間によほどよい木を匂はする　立吟
　脇ざし提て欠しに出る　泥足
ウ
すり鉢で庖丁あはす船の中　杜若

いつの雪やらこんこりとなる　淡齋
谷底の啼きこゆるおくのゐん　園友
三筋右衛門を味に曲たり　金毛
傾城も喰ひ醉ては常の者　轍士
嚏もつらし鼻へ入る灰　杜若
米澤の狀が屆いていそがしき　泥足
聲高になる盆のかけとり　立吟
此家の頰うち柱秋ふけて　杜若
月に見すかす馬の寐すがた　轍士
花すくふ鯰ぬすみにおとり合　立吟
山のさくらは過てとらの尾　園友

名

あまりもの日和にまけてふら〱と　淡齋
とつと水のむ寺の門前　泥足
キリ幕に風呂鋪たるゝ大がしら　轍士
馬糞にすへる老の市立　杜若
何あてに池鯉鮒鳴海の八日吹　泥足
鳥毛の肩を替てふり出す　立吟
ほとゝぎす扈從中間かもめて來ル　金毛
舌うちならす汁の鹽梅　淡齋
川水に二階の行燈うつろひて　園友
月おもしろふ走るから駕籠　金毛
秋の來て念佛講は誰が番　立以
袖に飛つくいどゝ竈馬　執筆

ナ

大酒のよはけ見せじと茶漬喰　杜若
熊野で白う成しあたまぞ　園友
終にその金にまよふて緣を組　淡齋
どこやら戀をにほはせて云　金毛
夜の花御淸所の行かへり　轍士
烏帽子に双ぶ人のどかなり　泥足

元祿十二己卯年
賞花中澣

西村市郎右衛門

一幅半（ひとはばはん）
上・下
乙孝撰

一幅半

序

今はむかしはせをの翁、一幅半の袖をひるがへし、杖をひきづりて、路草亭にとゞまり、やゝ雨の花を興じ給ふ。そのきさらぎの跡なつかしく、ことし元祿庚辰の春、この巻のはじめになして、ほのかに行脚の面影をみる。

あるじ路草の主は
是、今の乙孝子

園友齋凉莵書

哥仙

紙衣のぬるとも折む雨の花　芭蕉
すみてまづ汲水のなまぬる　乙孝
酒賣が船さす棹に蝶飛て　一有
板屋〱のまじる山本　杜國
夕暮の月まで傘を干て置　應宇
馬に西瓜をつけて行なり　葛森

このすゑおきなの句をあげて余はのぞく。

稲妻の光て來れば筆投て
野中の別れ片袖をもく　芭蕉
夕に駕籠を借みやこ人
命ぞとけふの連哥を懐に　仝
汐は干て砂に文書須磨の浦
日毎にかはる家を荷ひて　仝
乞食年とる楢の木の中
聖して雹ながらの月もみつ　仝
目前のけしき共まゝ詩に作
八つになる子の顔清げなり　仝

一折

梅にうぐひすと
うの花に時鳥と

ほとゝぎす二ッとりには月夜哉　涼莵

　麥も早苗もなから半しやく　乙孝

蜘舞のやうに桶屋の働て　芦本

　定て余所は雪で御座らふ　乙由

膳中にこゝろの付て多葉粉盆　孝

　十本はらり萩も咲たり　莵

朝霧に馬は大津の追からし　由

　山のてへッに落かゝる月　本

小便にはだかで出たる不用心　莵

　唯はをくまい庫裏の笋　孝

あれをみて紋にも付る桐の花　本

　大殿様の鶴のひと聲　由

専と飯喰ふて居る男ども　孝

　ひくい所へこける脇ざし　莵

いかい目に出合ふた戀をしらぬ顔　由

　獨ふし木の木に挽なるらむ　本

こゝらまで鯛賣聲も花曇り　孝

　腹のたゝれぬ三月の空　筆

燭す　支考

笋のどこでかぬけて縄ばかり

　茗荷喰ふたる顔のぬつぺり　涼莵

十種香に世間の咳氣さし合て　乙孝

　後のしぐれは夕時雨なり　考

遠淺の月見て松のあらまほし　莵

　無刀の旅を鴈につれ立　孝

甘酒に久しい婆が門の穐　考

　地蔵のさたをばつといふ也　莵

夜は闇晝は五月の永霖雨　孝

　花散里は不便なさるゝ　考

是ほどに鮑の貝のかたおもひ　莵

　三六さつて猿の双六　孝

藪寺に茶ばかり有て漬はなし　考
年に一度の溝に杵借ル　莵
肌寒きうへに袷を堅ふ着て　孝
月の出見世の夜の商　考
満るかとおもへば花に繼念佛　莵
苺の名所の袋集る　孝
牢人をして鶯に寐ッ起ッ　考
雨中の手紙折に幸　莵
山崎といふから油おもひ出し　孝
江湖まいりの伯母に物相　考
夕影をまてば風たつ長縄手　莵
宇治のなぐれの螢飛なり　孝
ない戀をせかせてあそぶ小性共　考
たれをおもふぞ酒と饅頭　莵
大口のあたりは桃の花だらけ　孝
大豆を植れば鳩の御見舞　考
年寄のさし出る杭に朧月　莵
あふぎ立たる海士の大臣　孝
この神の今ぞ榮へて五百石　考
鶴の模様にわたる枯芦　莵
誰となき雪見の車静にて　孝
うき世の金はけふも入相　考
蒟蒻の近付もどす花の陰　孝
桙のむめの最早あたゝか　莵

六吟

どのやうな時がさかりぞ鶏頭華　蒲道
背戸はのとろにひろき秋風　凉莵
南じやとおもふた山に月出て　五桐
舳にたつ人の後とらゆる　雅草
さやはしる刀をみれば赤いはし　吟堂
とりさばきたる葛籠細引　由洛
せんじ茶の中へ湯煎を突込て　莵
夕部の震はしらぬがちなり　道
壁土をべたり〳〵と取落し　草

山椒の目の枯て摺粉木　桐
振袖をそつと裏よりまはらせて　洛
かうした時に酒がなふては　堂
月代(さかやき)にかゝれば用を持て來る　道
寄(よら)ふ所もないとしの數　莵
亦といふ事もなるまひ須磨明石　桐
うまい物をば宵に仕てやる　草
月花とならしに聲のかれにけり　堂
有頭轉にて春も暮行　洛
指當ていへど蛙の面に水　莵
子を持てから思ひし(知)らふぞ　堂
埒もなう取ちらしたる櫛道具　草
經はまだかと寺見せにやる　桐
いや〳〵といふて茶漬が三四盃　洛
絹布の夜着に久しうて寐ル　堂
是ほどに手を合せても合點せず　道
ようも泪の種があるまで　莵
文讀で居れば後に聞て居　桐
付ふ藥のないあほうなり　草
饅頭を持てながむる月の影　堂
望(のぞみ)しだいに垣の百瓢(ひやくなり)　洛
町からは畠の秋をうらやみて　草
あのちんばでも夫持ふか　道
眞實にお多賀抄子や孫抄子　洛
ぱつぱと暑いほ(埃)こり立なり　桐
此あたり湯谷(ゆや)の謠の花盛　莵
是までなりや彌生鶯　堂

春の部

叉の歳のむ(睦)月も祝へ千代の江戸　季吟
誰聟ぞ餅に齒朶をふ丑の年　芭蕉

蓬萊讃

嶋そより三の書院のかゞやく迄　其角
小女が酌取あふせたり春の眉(宵カ)　口遊
住吉のすみに雀や松かざり　專吟

閑居の器は漆嗅からず、元朝の茶碗寒けれども清し。蓋をひらけば猶風雅にして、餅と若草と花一輪。

梅散てかくれ家風の雑煎哉　木因
はつ空や宿直の歸るばん袋　宗乙
春たつやけふ目にしみて梅に鳥　乙孝
藏びらき田原藤太が俵かな　正九
抱て居る子の顔撫て御慶かな　之言

八幡元旦酒　秋陽

それも應是もをうなり老の春　凉菟
坂ひとつ越て平地や花の春　芦本
青によし奈良に親子や花の春　丹 了鹿
節衣着て板天神や梅の花　乙由
蓬萊やこれに候立ゐぼし　李中
蓬萊に抓まぜたり梅の花　萬斯
鶯の聲をなぐらぬ朝かな　南里
あけぼのや岩戸に名のる辰の年　美濃 不磷
羽子板の繪はさま〲よ明てから　羽かせ
羽子をつく童部心に替りたし　ツ子

ほか〲と鼻をむしたる雑煎哉　春卜
金銹に咽のかはくや節小袖　湖夕
若水やむかし語も五十鈴川　尙如
ようこそは取調へてむめわか菜　凉菟
火燵から工夫して出る薺かな　白歌
鶯や宮川のおく何百里　五桐
鶯のさき山かりて高音かな　乙孝
欄干にうぐひすとまる日和哉　羽かせ
鶯は袖より啼か梅の花　三木
うぐひすに面目もなき朝寐哉　白歌
尻見せて鶯なくや竹の中　昏古
うぐひすのはつ音は竹に油かな　晝凉
ひよ鳥に奥は見られじ梅の花　芦本
うぐひすやこちの藪からかうの物　竹酉
うぐひすや御指紙にてこちの梅　万斯
鶯のうなじなげたる曇かな　春甫
うぐひすや庵へ來初てけふ幾日　紫芳
飛鳥も落る句ひやむめの花　春甫

きら星のごとくに梅の蕾かな　万斯

まだ寒しまじ目に成て梅の花　蒲通

誓願寺にて

いろ〳〵の顔持て來るや梅の春　袖の

後から柳折なとあみだ笠　了岳

一抓柳の枝をかぞへけり　万甫

桑名のさまりにて

木男にこゝろ柳や圖習ひ　エド卜女

どふなりと風の氣に入柳かな　佳峯

長谷越にて

寒かへる山路やころり山椒味噌　凉菟

化そうに殘るや寺の雪丸ゲ　八菊

唐門をぬけて押合花見哉　乙孝

腹筋をよるの花見やたはけ共　仝

花鳥や賓もと思ひ染小袖　凉菟

伊勢哥のたぐひながら

難波女といづれ花笠伊勢おとこ　耕月

まめな足持合たり花ざかり　言助

門でまつ傘のむかいや櫻狩　加草

花ざかり旦那落して來るも有　凉菟

ほり物は菓子のやうなり寺の花　八菊

あちみればあちはこち見る櫻かな　袖の

蕎麥切に何の替ふぞ山ざくら　杜英

夜の明てひろげほしなり糸櫻　對水

逢た時笠を脱けり山ざくら　鷲黄

世話やいて末坐になをる櫻かな　鹿羊

うちおはる櫻の中やかはら葺　白歌

山櫻今朝は百里も飛心　万李

織物のやうにさはぐや花に鳥　羽かせ

此比は物おもへとやさくら花　沖

とやかうと物に成たる花見哉　与市

うつくしう櫻にならぶ姿かな　かや野

大しまの江の櫻

沖濟は花見ごゝろや江の邊　凉菟

櫓の所棹のところや江の櫻　木因

初瀬の花にもふで

舞臺に膝ふしな
　ふるひて

あぶながる所まで見るや長谷の花　不磷
塀越に花見る所化のあたま哉　木因
後むく人は何喰ふ山ざくら　柳玉
欲德はこゝへ來てから櫻かな　賴山
田も畔もぬめりさがして櫻かな　志冬
足摺に霞をゆらするひいなかな　由洛
廣袖で出るや近所のやつこ雛　乙孝
大井には子持の君ぞ雛の宴　凉莵
化粧たる顔出す桃の藥屋かな　佳峯
畠にもならぬ屋敷や桃の花　乙孝
貰ふても長ふきられぬ椿かな　是水
苗代の手ひたし水に曇かな　如約
田かへすや蛙も飛て骨を折　光任
橋わたる人にしづまる蛙かな　凉莵
飛のいてしぶとひかほや蟇　芦本
しほらしき聲ももたひで蛙かな　白歌

山川にながれてかろき蛙かな　羽かせ
鉢卷は男でもなし田螺賣　鳥羽諸友
つばくらのまづ馬をりを柳哉　乙孝
つばくらに四筋五すじ柳かな　如約
つばくらや人を尻目にかけて行　杜桶
巢をたちて跡を見に來る燕かな　曾古
振舞を迯れて鴈の歸けり　寄芬
雲雀見て戻れば内の闇ッ哉　柳玉
雀子や障子の内に立こまれ　凉睡
腹立ていつも居やら雉子の聲　呂詰
爰がよいかしこがよいと摘菜哉　八菊
亦けふもあまち覺て摘菜かな　沖
一面に目のはなされぬすみれ哉　袖の
茶摘からその通りなる曇かな　信昌
いろ〳〵の聲を出しけりたはれ猫　穗音
猫の戀のぼりつめてか屋根の音　信昌
羽づかひのあどなう遊ぶ小蝶かな　袖の
風雲や杜の筋からいかのぼり　畫凉

鳥どもは何とおもふぞいかのぼり　李中
壬生念佛猿が落ひて殘念なり　丹野
山吹や身をなき物に淵の上　白雪
むすばるゝ道の小松や若みどり　凉菟
夕暮やだらりと藤のあほうらし　与市
藤の花風になはれて散にけり　柴友
ほつとりとけふの曇や藤の花　信昌

夏の部

細ながう常陸の宮や衣がへ　乙孝
まめそうに早天からの袷かな　芦本
瘦ぎすな男に黑きあはせ哉　木因

貧

都にも夜着の袷はあるまいぞ　凉菟
花色にまたきんこりと袷かな　南里
すんがりと長の高さや衣がへ　橋草
拵たあわせ鼻あく寒かな　杜莫
うはの空風は吹ども袷かな　正光
はづかしや乳のおもたきひとへ物　沖
門出の聲を上たり晒うり　凉菟
足もとのくらがる山やほとゝぎす　白歌
時鳥名もなき森の茂りかな　起中 好風
ほとゝぎす初音に賦れ香需散　桐羽
山姥にきかせて來たかほとゝぎす　圭斯
ほとゝぎす啼や灯臺本くらし　万斯
郭公小坂ひとつや朝茶の子　凉菟
水鷄啼水の別れや椽の下　乙孝
朝起の相手になるやぎやう／＼し　起中 一草
若葉より人ぞ涌出るひがし山　凉菟
一重づゝ散を牡丹のたのみかな　石周
ほげるほど見られて牡丹散にけり　万斯
散とは櫻にまけじ芥子の花　一ノせ 一鷄
夢を見たやうに散たり芥子の花　八菊
芥子の花提て來る間や秤斗　對水
うつとりと髮結ぬ日やけしの花　如豹

すつとした所はつよしかきつばた　蒐副
茶莚や坊主あたまを振まはし　千船
けち〳〵と火をうつ音や麻の花　山下正勝
裏店に御明し細き蚊遣かな　はりま千山
筍や一鍬うちて思案がほ　春甫
竹の子や葉になる迄はおそろしき　扇雫
若竹の雨にはたらくにほひかな　乙孝
うれしさぞ鬼灯ほどに初茄子　涼莵
さゞ波のほたるをかけて夜道哉　芦本
振あへる袖のほたるや前わたり　乙孝
螢見や大キな長であるかるゝ　涼巴
あそこへは行れぬ川のほたる哉　涼莵
物いへば尻をもて來る螢かな　杜莫
飛ほたるなれ〳〵しさよ袖へまで　羽かせ
やう〳〵と五日で直なる田植哉　乙孝
四五日の旅おもしろき青田哉　千山
帆かけ舟見うしなふたる青田哉　木口
五月雨にながめ出したる屑屋哉　芦本

梅亭にて

來ん年も嗅にまいらむ花柑子　徹士
扇まづ繪のある方をかざしけり　丹野
蝸牛せつかく這ふてこけにけり　吟堂

鹽屋といふ里の名にのこりて物詫たり。

夏草や屋ねに手届くすまの浦　涼莵
もそつとに仕よせた道の暑サかな　万季
徹羽の音もあがらぬけふの暑哉　屯舌
くさつても鯛で見しらす祭かな　寄芬
京髪があかりうけたるまつりかな　涼莵

いづれの御時にかありけむ、大みやす所と聞ゆる御つぼねに

あらけなや祭の中のつるめさふ　犬神人　仝
撫子や大和に親の落し種　耕月
手を覆ふやうな曇や紅粉の花　涼花
切麥の茶屋に分たる清水哉　扇雫
ゆるぎ出る大女房や雲の峰　乙孝

夕立をしばしはたゝて詠めけり　仰水
白雨や水かけ論の中なをし　一鶏
夕立を根から吹ぬく嵐かな　十丈
夕立やむかいの山で晴あがる　好風

園友新會にいりて

生壁の色も涼しや松に竹　口遊
軒かしておも屋とらるゝ涼ミ哉　幾曾
村雲をあてばに出るや夕涼ミ　一八
けふといふ今日内にゐて涼ミかな　万斯
名聞をはなれて涼し丸裸　信昌
涼しさの滞りなし田の青ミ　凉莵

秋の部

山更に崩れて來るや相撲の場　凉莵
よぶ人もよばれても來ず相撲の場　一鶏
剃立の髭でもみ合すまひ哉　八菊
大根の二葉にたつや秋の風　素覽

桐の葉の不斗〳〵に落にけり　正也
夕暮をはぐれて桐の一葉かな　春甫
鳥どもに見かぎられてや散柳　凉莵

たはれ哥に竹の筒ひろいて
かみわりてみたれば　下略

たなばたや赤い小袖が十二色　乙孝
星合や蟻のおもひが天へゆく　貫枝
ほし合の空泣やうに曇けり　凉莵
近付に覗あてたるおどり哉　乙由
細長うおどれ酒屋の戸口まで　信昌
輪になりて先はなしれぬ踊かな　一鶏
運び雨來るや濡地な盆日和　乙孝
小式部を先に立てや玉まつり　白雪
挑灯の武者も踊や盆の門　口遊
稲づまの闇を出しぬくやよばひ星　賀枝
いな妻に寐すがた恥る板間哉　宗乙
早稲苅や隣の田には二番草　露川
はしり穂や千町色づく三ヶ一　支夕

七十の腰をそらすか啼子引　其角

稲付て馬言傳る家路かな　春甫

鶏頭やちらぬを花の祝ひ草　卿玉

鶏頭や列を揃へててんか茶屋　志冬

長たけに成てかはゆし鶏頭花　万李

鬼灯の啼ときもあり猿の口　宗乙

寺ひとつ有道ばたの薄かな　吟子

どちらへも合點〳〵とすゝきかな　袖の

筏士の寐てながるゝや芦の花　凉莵

菅笠の骨着て通る野分哉　反朱

虫の音のちぎれ〳〵に嵐かな　杜莫

月見塚は畠にあり。

爰からは誰が見出して不破の月　芦本

山の月・浦はの月・里の月
猶うごからず。

名月やことしも牛になぶられふ　乙孝

田夫

宵の間にうどんせしめて月見哉　仝

名月のあるじならましすまし汁　凉莵

雨後月

寐る人ばねさせて月の晴にけり　仝

海山に腹のふくれて月見かな　八菊

けむまくな雲のはづれや三日の月　南里

一しばゐ仕舞て宿の月見哉　鹿羊

爰に居りかしこに鴈の遠あるき　更顯

おどすとはしらでや松に鵙の聲　賀枝

梟を布袋のやうにわたり鳥　乙由

車座にゐて詠めけり鶉籠　錦帆

よきほどに菊のしめりや青疊　芝伯

おも〳〵と木の座敷や菊の花　九輔

夜の菊たれやら庭の聲作り　凉莵

啼ときの形いかならむ夜の鹿　万斯

山風や天窓の上を鹿の聲　幾曾

鹿の聲念佛中て答へけり　友夕

鹿の腹やせて時雨ゝ山路かな　呂詰

鹿の聲跡はしぐれて明にけり　凉莵

啼聲をきけば喰れぬ杜父魚哉　一口

義仲寺にまふで、翁の跡とへ侍るに、かの

塚もうごけ我泣聲は秋の風

と聞へしもおもひいでられて、ばせを一もとをゆするばかりのいたみを述て、みやこにさかり侍る。

華筒の塚もうごけよ穐の聲　乙孝

追悼

是非もなきうき世や霜のきり／＼す　涼莵

身におもひあたつて寒し秋の風　傾山

新蕎麥はうつゝなりけり一二臈　乙孝

錢の生木と申さふか蜜柑原　一八

柴栗のをのれと落て中がへり　桐羽

猪のてんふにあらす紅葉かな　乙由

鬼の目に泪があらば秋のくれ　正九

淺茅生にごそつく人や秋の暮　乙孝

冬の部

松こそ目出度かりけれ。

當流の者を呼出すしぐれかな　橋草

着物の身にしみつくや初時雨　杜桶

時雨降座はしづまりぬ古後達　涼莵

青物の店もかんそにしぐれかな　乙孝

時雨ゝやから臼べ屋の片あかり　雲黄

是非もなう馬で時雨る山路哉　空牙

噓の跡にしほなきしぐれかな　八菊

しぐれにも逢た顔なり旅戻り　無口

時雨てやさま／＼雲の入みだれ　越中好風

十月になるや正木のかづらより　乙孝

十月のもやう作るやとろゝ汁　豐後野風

達摩忌に編綴ぬらすしぐれ哉　桐羽

休まずにふれや亥の子の初時雨　野紅

木枯や畠にかはく鍬の土　如豹

木がらしやしのびがへしの笛の音　桐羽

裏ちりつ表を散つ紅葉かな　木因

入相に猿が紅葉も散にけり　八菊
下紅葉萱つけ馬の散しけり　桐羽
たが入のどつく門の落葉哉　乙孝
萱前に一ぺッ掃て落葉かな　蒲道
はら〳〵と不破の屋根ふく落葉哉　南枝
起されて腹はたてども火燵かな　鹿羊
火燵からすべり落たる鏡かな　芦本
飛のいて火燵にせかす日和哉　乙孝
京の圖にたとへて咄す火燵哉　春甫
若役にのいてもてなす火燵かな　時應
梅ばちに丼であたる火燵かな　萬李
四方から手で垣したる火燵哉　夏始
連子から鼻のさき出す寒サかな　佳峯
夕部までほめたにけふの寒サかな　芦本
美しき顔に角だつさむさ哉　臼杵
冬ざれのざれどの氣で寒サかな　耕月
姫君の屏風うて越すさむさ哉　竹堂
多篭ル顔や詩人のかぶり物　凉莵

梟の咳せくやうに冬ごもり　一旨
辛キ物くふた顔なり冬ごもり　臼杵
やねうらの傘見るや冬籠　如豹
隣さへいつ見たまゝの冬籠　桐羽
鍬の柄の雀や祖父が冬がまへ　乙孝
茶の花や大事の窓も寒ふなる　仝
有明の影冷じや枇杷の花　宗乙
仙人のにぎりこぶしや冬木立　乙孝
遠ふ見て草臥の付枯野かな　薄歩
初雪やあはたゞしくも身拵へ　素破
はつ雪やたま〳〵降れば庚申　万斯
初雪やおもひもよらぬ鯛を買　三屋
はつ雪に起ッころびつ亭主哉　凉莵
初雪や最一度橋を見に戻ル　露布
初雪の降はぐれたる月夜哉　抜不
はつ雪や見たらぬ物を日暮から　春市
初雪にだき力なし膝がしら　修彦
唯居れば身がやめるやら雪丸　凉莵

むかばきの祭に似たり雪の暮　乙孝
我物と覺へぬ雪に素足かな　蒲道
葉に替て雪を柳のしだれけり　吉女
あの中へ我もまじらむ笠の雪　空牙
鍋賣や霰ながらも得かぶらす　木因

舊友に對して

水仙やつぼみの中もしれた事　芦本
水仙や京なら錢で百が物　春流
水仙の小首かたげて開けり　南里

三位の神主に參りて

清淨な葉のいきほひや水仙花　涼莵
入船の波に骨折千鳥かな　如豹
すき通る聲や水田の友ちどり　乙孝
しどもなう千鳥立けり磯馴松　万斯
松かぜの吹てしまへば千鳥哉　八菊
一せきに三人ながら紙子かな　沖
老僧や額のかたへなげ頭巾　賀枝

白川の關はむかし古曾部の入道、秋風ぞ吹といひし所にて、竹田入道も殊更に新衣を着して通れりとかや。路通にもこゝろせよと申て

しら川の關で着かへよ青どてら　耕月
鰒つりや今も阿漕が浦の波　涼莵
投られて砂にいかるや鰒の面　竹酉
今の世の手柄ものなり鯨つき　吉女
藪などに遣ふて居さうな海鼠哉　素坡
でち達に毒じや〳〵と鴨の汁　八菊
目は鼻の下にあいたき頭巾かな　玄雀
夜あらしの波を共まゝこほり哉　宗雪
寒聲や月夜になりて一かゝり　如硯
寒聲のすゑたのもしうかれにけり　賀枝
寒聲や五條あたりの星月夜　乙孝
花ひとつしはる事なり冬の梅　涼莵
つめたさのちからに成や冬の梅　袖の
一ッづゝ師走になりぬ山ざくら　宗乙
我形は梅をたづぬる師走哉　素覽

あの人は先にも見たる師走哉　凉巴
帯するも片前だれ（垂）に師走哉　一鶏
錢金に替ぬ師走の日和哉　臼杵
月花の樂に苦のそう師走かな　言兆
はやされて娘逃るや節季候　（ヒタチ）聞之
妹が眉よし年の夜の星あかり　（同）子陽
ゆりなをせ〳〵ども師走かな　そ鹿
大そうに尻から起て師走かな　素也
切レ責の吹れてありく師走哉　凉莵
行歳や親のこゝろを子はしらず　桃風
年の暮膝と談合がなる物か　言助
行年のうしろ姿や雪の山　仄止
餅つきやかたな男もひとり前　春流
節季候の夕紅に家路かな　反朱
こゆるぎ（小淘）のいそぎ（礒（急））ありくや歳の市　佳峯
から鮭の身は京へ出て師走哉　乙孝
千石の門でおどすや歳の暮　蔦李
大豆（まめ）まきや暗き所は大づかみ　枝鳩

節分や亦来年の種を蒔　任他
力でもいけぬ師走やすまひ取　乙由
此顏で我は春まつ師走哉　空牙
味噌塩の玉手〳〵と師走哉　芦本

雜の巻

傀儡の詞に、鏡山・野がみ（上）の里・かやつがはら・東路のなどゝよめり。今の世西の宮のでこまはしのみ、にはもてあやつりて、本意は余所（よそ）事に成ぬ。やまと哥にても、心はさる事にて、題は雜の方にかたづき侍る。

言傳のけもない顏や傀儡師　乙孝

一幅半 下卷

一とせおきなたしのぶとありて、深川の茶室をとひもて、そこにまかりぬ。かれに酒堂・曾良なども伺候す。折節の興、繪の事などさまざまうかみて、手にとる士峰の雪見よと、みづから河岸におなひせられしも、今はむかし。

乙孝

その匂ひ佛なりけり冬牡丹　乙孝
小鳥四五羽に垣の朝霜　支考
踏に來る洗濯石のさし合て　涼莵
昨日の鼻をたゞおかしがる　杜桶
酒もりの尻もむすばぬ月の影　空牙
秋入わたる萩もすゝきも　乙由
ウ
武士のみかたがはらに鴈の聲　芦本
袖に鉦鼓をしまふ道心　孝
足本のあかるいうちに死はせで　考
師走が門の外に來て居　莵
人の着て行小紋うらやむ　桶
猗水に馬をこはがる女子ども　牙
大切な節句の花も暮かゝり　由
にがいをもつて野老一鉢　本
さい槌の和尚の顔も春めきて　孝
まづ寐所の尿瓶取置　考
手拭も嵐に氷る朝の月　莵
松の中より須磨の汐汲　桶
二
草臥を取返したる哥一首　牙
きのふの風に菴はひしける　由
田のやうに狼谷をこねまはし　本
喧嘩に酒のいつもつれ立　孝
茶碗鉢まづこんな物床の上　考
蚊屋つるやうにたゝぬ遲蒔　莵
道哲に後夜をつとむる月の影　桶
大豆の葉そよぐ畔の近道　牙
河原鴫雨にふられて走るなり　由

おれが船から盜人の出る　本
挑灯の來るとおもへばあちへ行　孝
逢ぬ毛拔の戀もするかな　考
ウ
うつくしいばかりで君は白うなり　荒
火燵めくれば足が八本　桶
ことりともせずに何やら仕て出して　牙
このたびの義はいかいお手柄　由
六十のむすこ持たる老の花　本
二見の藪に鶯の聲　筆

十菊菴

枕にもならぬ豆腐や冬籠　芦本
屋根の木葉を吹おろす風　空牙
小坊主は笠があゆむと思はれて　支考
川越ス牛の車引づる　乙孝
有明のぬからぬ顏に明殘り　涼菟
障子ひとへに匂ふ木犀　乙由
ウ
雅(稚)子の夢に乳をのむおもひ艸　牙
そらだのみなる際の約束　本
棒組は駕籠にもたれて橋の前　孝
今朝の曇はその通りなり　考
ひいやりと水の呑たき更衣　由
は入てみれば廣いお屋敷　荒
鷄の尻ならべたる臼のうへ　本
わすれて髪も結ぬ八朔　牙
名月の遊び所も次第へり　考
鬼若麿に寺の秋風　孝
雪隱を外からしめる花紅葉　荒
岸ふみちらす六鄕の舟　由
猿引の羽織の下に猿啼て　牙
餅屋の見世の杵に杉の葉　本
松風のはり合ぬけて暮の雪　由
人まつやうな琵琶の彈様　考
痩た身にしみつくほどの戀をして　孝
菊鷄頭の露もこがるる　荒

雀から朝起したる窓の月　本
　市にとりては住吉の市　牙
旅であふ人は地獄で佛なり　考
　髭に似合ぬこゝろこんにやく　由
指出せばにぎりこぶしに鳩よりて　蒐
　箕の音の念比に來る　孝
切かぶのあぶなう殘る藪まはり　牙
　鍬てんかうに狸してやる　本
藤代にたれがあらふぞ鈴木殿　由
　庚申待の晩に水風呂　考
正月の腹もへらぬに花咲て　孝
　日和よかれと臼うつなり　蒐

五吟　佳峯

餅つきのこしきかぶりて戻しけり
　雪に馴たる駕籠の百助　乙孝
二階から言傳呼る船見えて　鹿羊

鳥が飛ば鷺も追付く　凉蒐
氣のつかぬ所に御座る晝の月　信昌
　柿にふら〳〵客の木のぼり　峯
天台のふもとの秋は一乘寺　孝
　おゝ〳〵鼻のたかき轟　羊
おめ〳〵と女子に公事を負て來て　蒐
　逢夜のこゝろ沖をとらるゝ　昌
こいすねを長い袴にまぎらかし　峯
　神の巻のとうとかりけり　孝
青やかにかまはぬ杉の立のびて　羊
　どれも坊主に見ゆる月影　蒐
ひらき戸に勝手の砧ひゞく也　昌
　八幡の牛房今や引らむ　峯
爰かしこ類族の多き花盛　孝
　去年の手柄ことし千石　羊
嚔の出かぬる顏に春の風　蒐
　油斷をすれば又飯を盛　昌
孫六が吹革祭は雪も降　峯

古き着物の尻に紋所　孝
久しうて逢て何から巾ッやら　羊
夜船にちかき墨染の町　莧
ゐ眠のやうに茶をもむ朝曇　呂
鉢の次手に談義ふれ行　峯
宿老といへば機嫌を取まはり　孝
松にしぐれのさらぬ躰なり　羊
月の影はづかしぶりも宵の程　莧
鳥居額も野の宮の秋　呂
ウ
腹の形何としのぶの草衣　峯
一すじ脇へうどんこぼるゝ　孝
呼に來る使に星をくらはせて　羊
寐間にたしなむ例の長刀　莧
よいかぶか殘りて今も花が咲　呂
どふゆかふとも道の春草　筆

歳暮吟

足ッになる物か師走の雪兎　涼莵
鍋ひとつに自慢鱈汁　芦本
壁際にあはぬ疊のふくらみて　茶牙
田舎の月の貭〳〵と照　莧
秋の風埒をあがつて別れ道　本
小便すれば寒き芋の葉　牙
起〳〵に人のたゝせぬ腹がたつ　莧
二階の音は何ぞこけたか　本
降笘とおもへどあまり五月雨　牙
心ばかりで過る御むさた　莧
綿ほしを蓮におけば䗈が付　本
手前の園を澤山にのせ　牙
のら〳〵とあいつに年の寄果て　莧
袷時分に又なりにけり　本
どちらへも勝手がよふて河原町　牙
用をたのめば尻に開せる　莧
月花を棒にふりたる今朝の雨　本

隣の苣(ちさ)もやがて喰(くは)れふ　　牙

二

養父入にのつけはれたる戀をして　　蒐

二人つれ立初瀬の日歸　　本

ほとゝぎす嘸やみやこのうつけ共　　牙

山をさかなに鬼がつぶれる　　蒐

松風も目にみへて来る夜明方　　本

鼻に覺へのなき寒ッかな　　牙

雑水に桑名折敷を引よせて　　蒐

生るにしても最早四五年　　本

熱氣にもひへにも立ぬ南どの　　牙

瓜の蔓にはふり(瓜)がなる也　　蒐

さはつたらこぼれそう成松の月　　本

小女郎狐の夜寒啼らむ　　牙

さられたも道理な顔に秋更て　　蒐

手洗のうへに薄みだるる　　仝

垣をせふ〳〵とて先度から　　本

うなぎのぬめる浮世なりけり　　仝

ようもよう足が續くぞ花盛　　牙

柳見て居る笠の西行　　仝

水風呂のことば

乙孝

ひさつの控あり。ホなはかりて底のかたには、火を燃す所のおそろしき鰐(わに)さかやいふ物の口だ、ほがらかに明たるやうにほりしつらひ、誰も〳〵もてはやす物にて、是をなむ世に水風呂さはいへり。上ッかたなどのしろしめすものにもあらず、下官(やつがれ)ごときの擧(こぞ)りて、身を潤すひさつの寶さはなしぬ。亦てほう(鐵砲)釜さ名づけて、吸筒のやうなる物をかの中に側へながら、それに火を蓄へ燃すもありて、おなじなのれが名を呼しむる。是ぞたく物のすこしきをおもふ、かしこき人のぐし案じ出せるなるべし。いつもの浦のいつも〳〵竹編る物の上に備へ置て、かなた・こなたさ入かはるもおかし。あるは三吉野の芳野の里にもも乀遷れて、いみじう濡わたりたる人の肌へにちりかかる花をうちはらひ〳〵ては、後にや風のさ妬(ねた)きかたはしまで、むれさどろかすこそ、いさ興あるよすかならめ。たまたま市中にまかるとい有て、あけぼの

やう〳〵起騒ぐに、猶寒かへる岑のあらし、老せる身は殊更勞る事に侍れば、かの器に水を湛て例のたく物はら〳〵と折くべて、塩茶・たんぽゝのあへよこしたるに、湯漬やうのもの取認て、何くれとするほどに、器のうちもほのかに涌かへりて、しみわたりたる身のやしなひをなすも、行さきの事快く執行ひつべうぞおもひやらるゝ。さるはむれ〳〵しき方こそあらめ。むつかしげなる家つゞひにたちまじはりて、をのが業にもたへぬほどの法師すらは、よき隣もとめ出て、折ふしごとの施し、あなたうと〳〵やと口とくいひかなぐりて、明なき後の暮を契るも、おもふ事なき世なんめり。夏はうの花の咲みだれたる、あやしの垣ねなどに水のしほりたづれ出て、かの罌をそこにしつらひ、畑より歸來べき男を待も、睦じき世のありさまや。せなは褌めく物うち被きて、穿たる畑のもの運びのゝしるに、納戸のうちは松明すほどに暮渡りて、あらぶる土埃を洗清め、になう樂しみをなすも、いかばかりあらぬものかは。亦さゝやかなるをみな・童などの足繼物あらでは、出入もまかせぬ事に侍れば、こゝろのたけ物など積かされて、これかれと取騒げば、軒ふける菖蒲のこそ〳〵と障りて、鬢づらもかき亂すやうにおもひ侍るに、やよやまてともいはまほしき時鳥の、わが宿をしもしらずがほにて啼すぐるは、あかず本意なき事にこそ。なを水無月の比ほひは、蟬の羽衣さへ物くるほしきに、まいて麻の細布猶むつかしく、夏瘦の身はさはらざりけりと、獨ごちして八重葎の陰なる平石のうへに、やゝ尻をためらひ、かのまろの湯を取分て、さら〳〵と洗ひ物すれば、こぼれて落る竹のにほひもかろやかにて、たゞかの器こそ、尾上の鐘の余所に捨らるゝこゝちぞし侍る。穐は又猶更なり。芦の穗なみも風の姿に亂れわたる難波津の夕暮、あまたの舟の我さきにと爭ひ入も、冷じき櫂の音かな。かうむらひなる有樣にては、をのづから希有のあやまちも出來べきやうに、身にも屓ぬ物から、手覆ひべうぞおもひやらるゝ。爰にも例の寶を藻苅舟にとりのせて、多くの舟長どもにもてあてがふもいとせはし。かの商人を待にはあらぬ芦繁き中に、漁夫の器のちら〳〵と燃るも、いとこゝろ細げにて、海士の子なればとさへ打しのばる。めぐりて深浦に船をさゞむる處をみれば、芦荻の花中一點の燈となむいへるも、かゝる所の秋なりけらし。ものゝあはれも折にこそあれと、伴ふべき人もなき比ほひ、獨たのしむ檜破籠・小筒繯に取

したゝめて、小倉・高雄などの紅葉うちすぐさず分まよふに、いたくもふらぬ時雨のさき〴〵うちおごろかして、我たちぬれぬさも謳はまほしきけしきなり。からうじてみそかなる所にたどりつきぬ。かしこは簷ふける軒・松の柱・草の扉に蔦は所せきまで、鹿のかよひ路もいづちさたざるばかりに、生はびこりて、爰もかしこもくま〳〵しう、石六ッ五ッ踏もよごさぬほどに居置ぬ。苔なのづから青々たり。やゝらさし入て見るに、あるじはたちむかふより等閑のやうにもおぼへ侍らで、むかし今のことなむかたりつごひて、さるものも蓄へ侍らず。とみの事にあなればさて、飯櫃の蓋ごさ〳〵さ芋・蒟蒻それこれさ、もてさはぐもおかし。日も入ぬ。山ぶみのなやみさしはかられて、先客人なさ、けしきばむもうれしく、かた〳〵脱すてゝさしかかるに、折もすぐさず、山の端ちかき月のはなやかに出たるは、艶にもあはれにも有ぞかし。あるはやごさなく仕なせりさみへて、三ッ葉四ッ葉に殿造りせしかたの年經るまゝに、片はし甍なども落こぼれて、苔むす軒の人目も草もたゞ枯〳〵に、梢まばらなる雪の夕ぐれ、今朝だに人のさまやの傍うちくらみたる簾かなあけさせて、かの灣ながらながめやりたる心高サは、いかなる人のなせる業ぞや。清少納言もかゝるすこうは筆にもいはで過し侍るに、こよなふいまめかしきこゝろばへかなさ、うしろめたくぞ打うめかるゝ。なな驛路の有さま〳〵取〴〵にして、かの哀れさの淺やは。かのむすびすてる人の契りなさ、ながめ佗つる野がみの里の草枕も艶なるかたは、いはんかたな　。たゞ四阿の軒さし放ち、庭やうの明り總かなる別納に、かのものあらはにもあらず居置て、あるじどするも、はたなし有てこそ見へ侍れ。くだりてはいぶせきかたほなる傍に、風の通路のうるさきな藁むしろもて取しつらひ、かの罌なよひ〳〵どに、つかさどらしめて、旅人な饗すやから、馬牛に鼻つけられむも、いさ〳〵なしうぞおもひやらる。かくいへばとて一向おさしむるにはおられど、煤はらひには所せばく、餅搗には誰かいさめむ。左官のふまへものにぞ、折節はおもひつかるも由〳〵なるわざなりかし。

水風呂に車しかけて雪見かな

居風呂の客まつ宵や初時雨　　　　　　　　會古

水風呂や釜のかたへは親が入　　　　　　　五桐

水風呂の涌かへりてやかうの物　蒲道

水風呂に入て氣のつく頭巾かな　杜桶

水風呂の中に鼾やぬく太郎　凉莵

隣なる水風呂や我年わすれ　宗乙

京寺町二條上
井筒屋庄兵衛板

杜撰集
上・下
嵐雪撰

杜撰集 上卷

裴遊稿

嵐雪亭石中

星こぼれ鳥快きあした、鐵鞋をふんでおどり出たり。掛羅を肩にやすめ、拄子をうしろにわがねぬ。長明が海道の記一帖は、にのふにおもしとせず。意馬に鞭をかなでゝ、獨步の伊達ものとなれり。彼一帖をみるに、便の人の芳詠に乘じて、にはかに獨身の遠行を企てり。貞應二年うづき上旬五更にみやこを出て、一朝にたびだつとかけり。折ふしのよく似たれば、先達にたのみて、所〱の指南とせんがためなり。あしがら山に手をあてゝといへるを、我はいかいの葛藤にして、はこね路をたどり、ちまたの蟻に沓をとゞめて、芦間の蟹のあはれを觀ず。古郷をはこねに隔られて、みしまの宿に寐たる夜、ひと〱のはなむけせる句どもをとり出たり。百里・氷花はこゝろざしふたつならざれども、をのれ〱の根情あり。ひとりはよろづわざ〱として、餞別の句も趣なしとて、うちやりにして、旅でしねよとつきはなせり。ひとりは行さき跡のことなど、とりまかなひて、

　孤を捨るおもひや花の山

といたはり出しぬ。車を推あり、車をひくあり、彼も親しく是も不ㇾ疎。大道無門千着有道。

　かへる鴈闘とび越る勢なり

鴈通る日和は、敕使歸京ましますとて、海道も塵をはらひ、山も殊更耻しげに、けふを晴とつくろひたてり。砌のすだれはね上られたるに、ゑぼうしの用意なんど、きら〱とみゆ。をそらくはいまだきかず、富士の雲井の客人をみる人は、仕合なるたびに參合たり。

　富士を見ぬ哥人もあらん花の山

大井川ちかきしまだの宿に、としごろたゞよひ遊ぶ僧の侍りける。よの中を用なきものにおもひとりて、しゆくへ行にも戶をうち明て、出ありきける。一日、如舟に誘つれて、留守のほどうかゞひ入て、晝寐してかへりて後に申つかはしける。

　やすき瀨を人に敎へよ杜若

よしだの宿に日の暮たり。橋のもとまで行たれば、ふねに〳〵とよぶ。いづかたへ乘ことぞときけば、參宮の道者、爰よりのれば白子・川崎といふ所へ着て、くがには三日はやしといふ。身を持ものゝあやうき海路は、いぶかしとて行過るもあり。もとよりつながぬ船のかゝる便宜しらぬ國ざとも見ばやと、おもふこころ付て、苫の中さしのぞきたれば、三四十人込乘たり。おほくは出羽の新庄・仙臺のぬけ參り、遠州・山梨かいづらの籠作り・いもじ・大阪の商人なんど春正が蒔繪のごとく押合たり。夜すがらすねにかしらもたせて、明六ッの汐合よしとて、船よそひして一時ばかりはしるに、やゝ風あしきといふ程こそあれ。十たん帆をくる〳〵と地きりのやうにおし卷、ふねは茶うすに成て横雨骨をしぼる。かくてはいかゞし侍らんとて、嶋山をみかけて、からく船をよせたり。ところは伊勢の沖中にて、尾張よりしろしめせる代官也。しの嶋といふ所なりけり。纔一里ばかりのまろ嶋にて、人家百軒ばかりあり。いかさまみなとめきたれば、漁家に入てうかがふ。あるじの老婆いと深切に、たびはうきものにぞ侍る。うばも去年の頃、白子の渡海に便船して、西國をうち侍るといふ。かゝる離れ小嶋までも、大悲のめぐみの行わたりけるよと、たうとくぞ覺え侍ける。嶋の風俗、八丈ににたりとかや。いせのしの嶋はおはり八丈と、所の諺には申侍る。爰に三日をへて、ぬけ參りのつかれたるに、精を求てたすけあひぬ。ならいのかぜ待得たりとて、われさきにあらそひ乘て、ふたみの沖、たて岩をみかけたるに、また西かぜつよく出て、梶とり直せば、みなみにもめ北にかはる。神鳴どろ〳〵と海底にひゞき、各の顏夕ぐれだちて、いなびかり髭にもへつく。左にたふれ右にうめく。船中夜のごとくに、たゞじしやくを便にいせのかたを祈ばかりぞ、しばらくのひと〳〵のいのちなりけり。この時生涯のうかめることをおもふに、人ゝの首にかけ、はだにつゝめるこがねは、身をしづむるにあだ成べし。板子一枚には劣りたりける。とかくしてものし見えたるは、山にてこそ侍らめとて、そなたをたよりにはしる。いらこ崎にてぞ侍りける。此嶋さきを吹きはなたれて、遠江灘へ出たらば、つがるのかたへやながされ侍らむ。心

うき人ゝを乘せ合たりとて、水主も汐かきむすび、大祓はり〳〵とおしもむ。沖にたゞよふこと半日ばかり、のりを考るに五十里も侍らんといふ。漸空しづまりて皆いき出たり。鷹ひとつ見付てと、ばせを翁の申されたる所なれば、なつかしく立あがりて、

藤浪に鶚は得たりいらこ崎

けふは二見の御塩をはこぶ日なりとて、内外の神垣もことにすみわたりおはしましたるに、山田が原のほとゝぎす、ゐりのもとに落かゝりたり。

こゝろには松杉ばかりほとゝぎす

義仲寺の師父の廟は、ばせをしげり、ばせを破れて、七とせの露霜を送りむかへ、石碑やうやく苔生たまへり。

色としもなかりける哉青嵐

加茂の御蔭あふひの神事もいそがしければ、日吉のやしろの跡のまつりに參り、坂本の宿にとまりぬ。こり木つみたる火たき家の隅に、具足と太刀の挨にまじて侍りけるを、持つたへたる故やあると尋ければ、爰のならはしにて、かばかりの兵具もたぬ家は侍らずと申ける。心にくかりける。

なめくじり這て光るや古具足

賀茂の足揃は、神人淨衣にさしぬきして、駒のあしをためさる。帳の屋に着て、とき遲きをさだめ、赤かた黑かたをわかてるなり。けふはたゞ眞白にて馬上見わかず。

落たるがことに目立やあし揃

五日のくらべ馬はてゝ、森にうたひ芝生に醉る、けふの名殘も暮かゝりたり。

里石興行
あやめ中賀茂の假橋今幾日

十五日は今宮殿、七日よりお旅所の御出なり。當日小川をみなみへ神輿を渡し奉る。十八日まで夜宮に詣ッ。

埋火を凉とあふぐ夜的かな

一種賞翫にとて、皆海中にまじはり侍りて、

味噌掐にすゞ敷鮒の游哉

伏見にて、

明てのゝ家に伏見や夏の月

炬松ふつて野邊をゆくも、げに爰もとの古風なるべし。

行燈で來る夜送ル夜五月雨

よしだの宿に日の暮たり。橋のもとまで行たれば、ふねに〳〵とよぶ。いづかたへ乗ことぞときけば、參宮の道者、爰よりのれば白子・川崎といふ所へ着て、くがには三日はやしといふ。身を持ものゝあやうき海路は、いぶかしとて行過るもあり。もとよりつながぬ船のかゝる便宜しらぬ國ざとも見ばやと、おもふこゝろ付て、笘の中さしのぞきたれば、三四十人込乗たり。おほくは出羽の新庄・仙臺のぬけ參り、遠州・山梨かいづらの篭作り・いもじ・大阪の商人なんど春正が蒔繪のごとく押合たり。夜すがらすねにかしらもたせて、明六ッの汐合よしとて、船よそひして一時ばかりはしるに、やゝ風あしきといふ程こそあれ。十たん帆をくる〳〵と地きりのやうにおし卷、ふねは茶うすに成て横雨骨をしぼる。かくてはいかゞし侍らんとて、嶋山をみかけて、からく船をよせたり。ところは伊勢の沖中にて、尾張よりしろしめせる代官也。しの嶋といふ所なりけり。纔一里ばかりのまろ嶋にて、人家百軒ばかりあり。いかさまみなとめきたれば、漁家に入てうかがふ。あるじの老婆いと深切に、たびはうきものにぞ侍る。うばも去年の頃、白子の渡海に便船して、西國をうち侍るといふ。かゝる離れ小嶋までも、大悲のめぐみの行わたりけるよと、たうとくぞ覺え侍ける。嶋の風俗、八丈ににたりとかや。いせのしの嶋はおはり八丈と、所の諺には申侍る。爰に二日をへて、ぬけ參りのつかれたるに、精を求てたすけあひぬ。ならいのかぜ待得たりとて、われさきにあらそひ乘て、ふたみの沖、たて岩をみかけたるに、また西かぜつよく出て、梶とり直せば、みなみにもめ北にかはる。神鳴どろ〳〵と海底にひゞき、各の顔夕ぐれだちて、いなびかり髭にもへつく。左にたふれ右にうめく。船中夜のごとくに、たゞじしやくを便にいせのかたを祈ばかりぞ、しばらくのひと〳〵のいのちなりけり。この時生涯のうかめることをおもふに、人ゝの首にかけ、はだにつゝめるこがねは、身をしづむるにあだ成べし。板子一枚には劣りたりける。とかくしてものし見えたるは、山にてこそ侍らめとて、そなたをたよりにはしる。いらこ崎にてぞ侍りける。此嶋さきを吹きはなたれて、遠江灘へ出たらば、つがるのかたへやながされ侍らむ。心

うき人〻を乘せ合たりとて、水主も汐かきむすび、大祓はり〳〵とおしもむ。沖にたゞよふこと半日ばかり、のりを考るに五十里も侍らんといふ。漸空しづまりて皆いき出たり。鷹ひとつ見付てと、ばせを翁の申されたる所なれば、なつかしく立あがりて、

一藤浪に鶚は得たりいらこ崎

けふは二見の御塩をはこぶ日なりとて、内外の神垣もことにすみわたりおはしましたるに、山田が原のほとゝぎす、ゑりのもとに落かゝりたり。

こゝろには松杉ばかりほとゝぎす

義仲寺の師父の廟は、ばせをしげり、ばせを破れて、七とせの露霜を送りむかへ、石碑やうやく苔生たまへり。

色としもなかりける哉青嵐

加茂の御蔭あふひの神事もいそがしければ、日吉のやしろの跡のまつりに参り、坂本の宿にとまりぬ。こり木つみたる火たき家の隅に、具足と太刀の挨にまじて侍りけるを、持つたへたる故やあると尋ければ、爰のならはしにて、かばかりの兵具もたぬ家は侍らずと申ける。心にくかりける。

なめくじり這て光るや古具足

賀茂の足揃は、神人淨衣にさしぬきして、駒のあしをためさる。帳の屋に着て、とき遲きをさだめ、赤かた黑かたをわかてるなり。けふはたゞ眞白にて馬上見わかず。

落たるがことに目立やあし揃

五日のくらべ馬はてゝ、森にうたひ芝生に酔る、けふの名殘も暮かゝりたり。

里右與行

あやめ中賀茂の假橋今幾日

十五日は今宮殿、七日よりお旅所の御出なり。當日小川をみなみへ神輿を渡し奉る。十八日まで夜宮に詣ッ。

埋火を涼とあふぐ夜的かな

一種賞翫にとて、皆海中にまじはり侍りて、

味噌招にすゞ敷鮒の游哉

伏見にて、

明てのゝ家に伏見や夏の月

炬松ふつて野邊をゆくも、げに爰もとの古風なるべし。

行燈で來る夜送ル夜五月雨

祇園會の七日の鉾、十四日の山綾よりにしきより見ものなるは、狹野・いがらし・松尾・まつむら、素袍に太刀はきて、四條高くらの辻に床几を居れば、下の雜式をなじさまにて、くれなゐの房さげたる鐵棒かいこみ、かちんの上下着たる男等、黑漆の棒手に手に持て、粧をつくろひ非常をいましむ。兼て定られたる一二の鬮を改めかへす。威儀嚴重なる中に、はしごと臼と車につみて、町ごとに引は何の用にか侍けん。

　たて臼もともに踊や祇薗の會

かはらの凉に、

　松雨興行
　來る水の行水洗ふすゞみ哉

千本を南へ、よつゞかのほとりへ行とて、

　嶋原の外もそむるや藍畠

京よりから崎へ詣るとて、しがの山越はするとなり。

　志賀越とありし被や菊の花

七夕

　七夕や賀茂川わたる牛くるま

あすかひ・なんばどのゝ蹴鞠・いけの坊の立花・みやこの田夫・いなかの風流、立てみるあり、居て見るあり。

　秋風のうしろを覗く立花かな

九日の六道まいり、小野のたかむらの冥途にかよへるみちなりとて、洛中の貴賤まふでゝ、槇の葉をもとめて魂をむかふと印とし侍る。

　打ばひゞく物としりつゝむかへ鐘

ことしは爰に盆をむかへり。なきものゝこゝろざしふかく、京へ／＼といひけるほどに、舊跡を見るたび、ことに手向草にもとおもひよりたる也。彼はあそびものゝ果ながら、二十年來みしものなり。常にをのれが罪を懺悔してなげきけるほどに、ものしれる人に見へさせて、公案といふものをひねくりけるが、いかに省ありけん、人に名のなきときは、いかゞよび侍らんといふを、口をひらかずとひきたらば、耳をふさきて聞べけれと答たれば、いぶかしき顔して、猶ひねくりたり。尼に成べきのぞみ益やまざりければ、受戒せさせて雪山淨白と改名して、かしらくり／＼と成ぬ。爰に乞食し、かしこに行脚せんもこゝろやすしとて悦あへり。庵室も外にしつらひてんと、その

こととなく用意せしに、やまひ(病)せちにせめて、その本意ばかりはとげず終れり。けふは何となく思ひ出て、くきやうわりきやうなどいふもの調、みやこ心の魂(たま)むかへして、

魂まつり奚が願のみやこなり

十六日は山々の送り火・如意嶽の大文字・松が崎の妙法・河原にも廊がらに火をとぼして、魂送りし侍りぬ。

經を燒火のたうとさや秋の風

大文字の句をもとめたれば、雪のこゝろの出けるまゝに、

山の端を雪にもみばや大文字

里右の娘うしなひたるにつかはす。

ほうづき(鬼灯)のさすればつぶる歎哉

の(野)ゝ宮にまいりて、

嵯峨中のさびしさくゝる薄かな

いばらに袖をひかれては、そこに其日をくらし、道のちまたに尻をすへては、二夜・三夜とあかす。都の家の棟もあまたかぞへぬ。

洛外の辻堂いくつ秋の風

歸庵

痩る身をさするに似たり秋の風

濟雲方丈へ行脚のいとま申入たるとき、途中受用の一句を、問ッにしたがひて答申ければ、千牛曳ともかへらずと名残すて給へり。此秋歸りまかりて、

野に寐たる牛の黒さを秋の月

師問云去春望別
送乙片語今秋歸
來相見了也即今
如何是行脚眼。某
荅云觀音境裡古
松樹。師云松無古
今色作麼生無
古今色的一句
某進云春色無高下
花枝自短長
師頷之休去 某拜
退參堂去

塔澤記

石中

山野にかけり溫泉にひたつて、氣血をやしなふこと三廻りがほど、淨光禪院に日ごとに遊ぶ。寺の眺望なゝめならず、東北の山なだれ、左右より聳えかゝつて、蒼天を見越に、士峰逆に釣られたり。松露の瀧・深澤のながれ梢をつらぬき玉をまろばす。すべてこゝろを補ひ眼をいさましむること、溫泉のほか佳境の助る所なり。一日湯の記をみるに、ことのもと大かたならず、尤、信仰すべき靈場也。書は早雲瑞巖和尙の述作にして、紙上龍蛇を飛さる。爰を塔の澤と申侍ること、東天の阿育王八万四千の寶塔を作りて、滅後の佛舍利を籠奉り、四天下に分布し給ひたるが、此ひのもとに止れる七ケ所のそのひとつ也とぞ。塔のみねは麓より十八町の險阻を登りて、厚臺葺の一宇の御堂あり。阿育王山といふ。阿彌陀寺の四字は支那南源老師の筆跡、中興開基單誓上人ときこへし權化の人、座して籠居給ひし岩窟の跡は、猶夫より五六町斗山上にて、樵夫もかよひ難き片岨にあり。こゝにのみかゞまり居て、終に人間にくだらず、遷化有しとかや。漸、人の根氣もおとろへ行て今は庵も山の半腹に吹おろされ、里ちかき室となれど、たやすく行かよふべきにあらず。又東の澤と云こと、ひとゝせ江城より御湯めされけるに、塔の字いかゞ憚ありて歟、東の字に書替られ、その後、東塔通用して出來れりとなり。彼の阿彌陀寺に這登りて、院中にて手火なんど用意して、行〱いわやに入に、前後あやうく闇し。ひとつ薬といへる仙藥も、此邊りに侍りて各もとむ。

燕のかえり道ありほらの雨

此湯の世上にひろまれること、わづか六七十年前寛永の比、おろ〱きこへ初めけるとぞ。里の入口に熊野權現の小社あり。往昔よりこの地に垂跡まし〱けるが、其はじめを知る人なし。當所風祭の田夫、彼地の柴をこるに詫宣して、示現さま〲おはしけるが、そのころ恠しき少童出まみえて、名湯ありと告たまはりしを、人いまだ信用すともなく、としありて小田原より一家をうつし居住したりけれど、しゝ・猿のおそれ多く、友とするものさそひまねき、やう〱に隣をならぶ。今の一ノ湯（小川宗益 今宗泉）村開

の湯是なり。追レ日うらやみ集るもの六七家、所謂上湯・元湯・背戸の湯・瀧の湯・かはらの湯等なり。玉の緒の瀧の湯は近年流がれ出たりとぞ。由緒未詳。中興稻葉濃州大守の御家人水野何がし、手脚不仁の愁ありて、この湯に來るに、その夜ひとりの神女、十二人の客僧出向ひて、もてなされたるが、病たちどころに愈。まことに藥師十二善神の擁護ありて、諸病悉除の誓ひむなしからざる靈驗也とて、城下へいひ遣して赤飯一器・醴酒二樽をよせて、ことぶかれける。其時の使せしもの今の宗益なり。存命にして九十有餘、機嫌はなはだ健にて、大力量の翁なり。かゝる佛神の不思儀にあへる人〻に、むかしながらにうちかたらひ、晝はからむし剝に山路にさそはれ、夜はしぶつく杵の闇に仙源を尋ねぬ。

猶石にしぶ柿をぬる翁かな

河原に出て二百十日の波におどろき、貝ふきならす猪小屋も、めなれぬものから心とまりぬ。

水音も鮎さびけりな山里は

堂が島・宮の下・底倉・木香・芦の湯を經て、地獄廻りといふことあり。沸湯藍のごとく成るを、こんや地ごくといひ、鐵槌の音するを鍛冶や地ごくといふ。究て山陰の鬼窟を地ごくとよぶも宜なるにや。

梢禿て蔦の葉もえ、塊こがれて盤石輕し。女は見て佛の名を唱し、男はさらぬ顏するこそいぶかしけれ。惣じて此ほとりの濕化、蝶・蜻の類墨をぬりたるがごとし。

をのれさへ餓鬼に似たるよきり〴〵す

湯本早雲寺は小田原北條氏五代の菩提所なり。古墓五ツ、つく〴〵と並べり。元祖新九郎氏茂は永正六うのとし八月十五日に逝去ありしとかや。今早雲寺殿瑞公大居士と苔を削り、なき名を拜む。

早雲寺名月の雲はやきなり

宗祇の廟、

石塔をなでゝは休む一葉かな

長興山の瀧見にまかりて、梅花徑を下るに、白雲闕を見上ゲ、青蛇白象の寄石の間を、瀧は三筋に落たり。瀧のもとを川涯と號く。水の湛を心潭とよぶ。泉の砌に手たゝくほどの溜り江あり。かしらを付てうかゞひみるに、小田原

の海とひとつに成て、東西の廻船、鼻のもとに寄來る斗、いとあやしくまたゝきせらる。むつ(陸奥)のおくに影沼とかやいひて、かゝる所は侍るときゝぬ。言語同(道)斷の美景に口つぐみて此時句なし。三廻りの日比たちて、かへるべきになりぬれば、親しきかぎりこぞりて酒送りしつ。石さへ木さへかへり見がちに、小田原より峠をみあげたれば、雲かゝりたり。

袖つまにもつれし雲や露時雨

ことしも名月は、鎌倉大佛にて見る。

明月は南を得たり佛頂珠

杜撰集上卷終

杜撰集 下卷

餞別

いづくより誰よぶ子鳥明し行ヶ　作者不知

風鳥の跡見屈む花の雲　三翁

しら藤や維摩(ゆゐま)の眉の一やどり　朝叟

ふらすこや轉(ころげ)たりとも花の色　東潮

片敷に雉子を櫟るや三保が崎　沾洲

朝霞清水の明ぬほとり迄　序令

永き日や綱なし牛の丸ら成る　仝珂

梅が枝や水は左右に音遠し　序令

其笠を梅に預ヶよ田子の海　舟行

道づれと人もゆるしぬ花の山　石周

道下手の人も芳野の遲櫻　楸下

嵐雪の跡を追て

巣の中を立得ぬ鳥や花の山　竹雨

何ッ人をこゝろのつれぞ花の旅　仙花

春の句 次第不同

仲をする老の音あり垣の梅　百里

大井川しづめて落るつばき哉　素堂

鶯やせまき所の立まはり　湖雁

春なれや休ミぐるまのはづれ雪　朝叟

畠から鱠へかゝる胡蝶かな　臥苣

野邊の道づれおもはざりしに

むかふ歯を老の手柄やつばな摘　朝叟

朝熊にて

綾織の白刃のうへのさくら哉　濟通

僧増愛時ゝに變じ、眺望刻ゝにかはる。

松嶋やいらぬ霞が立て來る　桃隣

あたごにて

綿を敷て土器をまつ霞哉　氷花

見かへりの松など、かまなりさ申されたるにならひて

鶯のさまよふ聲やはたけ中　紅雪

陽炎や燃る蛇木の脇の下　舟行

苗代の繩にをひけり猿の影　百里

消殘る雪を蒸たるかすみ哉　湖雁

うそ眠る猫のつらはる椿かな　一桃

わか草や寐に來る牛の褥(しとね)程　默子

若中や人によき〳〵と氈の上　紅雪

垣越や寐鳥を攫(つかむ)やみのむめ　臥苣

雨の日や人なき家のはつ櫻　青曲

のぼり〳〵後の山もさくら哉　楸下

翠に成る流され人の櫻かな　心流

なつかしき心の種の木の目(芽)哉　丹野

山吹やかはづのつらに散ながら　嵐蘭

問へど山吹松はその夜をあかしけり　同

夏

ほとゝぎす鳴やからすの居ぬところ　尙白

郭公うしは由斷でゐたりけり　三翁

後聲は海にかけけり子規　百里

砂の灼水する時やほとゝぎす　心流

山里を覗やうなるほとゝぎす　拔不

旱天の雲引ならす早苗かな　百里

親の日は寺へ助たるさなへかな　臥莒

晝顏や人音もなき花ざかり　紅雪

桐の葉に秋をならすや五月雨　青曲

明る戸や早乙女ふゆる共隣　百里

飛石に藥朮のさはる若葉かな　默子

杉の風根をはなれたる暑サかな　紅雪

結たその髮をむしるや笹粽(ちまき)　氷花

清水にまふで、はせ川久藏繪馬を尋求て

くさずりが廻てきるゝ暑サ哉　氷花

梢には破風のひかりや青嵐　百里

鼠鳴にほたる(螢)ふり向すだれかな　臥莒

晴わたる旅の匂ひや荊の花　百里

鷄の塒つりかゆる蚊やりかな　氷花

起兼る蟬のもだへや石の上　濟通

唐人に一度見せたき競馬哉　草士

思ひ詫て蚊屋を覗けば臥猪哉　百里

白鷺の行山くらし夏木立　藤枝

旅籠やの木の下涼し寐入ばな　客友

抑氷花に因(ちなむ)こといくとせ、はや机をならべて筆を弄し、ともゝおさなびたり。嵐雪の門に春秋をむかへて、老行末を契りたりしに、わりなく京に住所さだむべきになりぬ。離別に及ぶ宵の名殘も、今少ゝゝと袂をひかへて

立も居るもあかつきまでの水鷄かな　百里

氷雨やみて水しづか也麥の花　舟行

手馴たる木魚を、嵐雪居士に送り侍るとて

なすびにもならでやりたる木魚哉　朔木

慶宅序

貧福は甘辛の二味より發(おこ)り、人間六根各つきそひ、生死輪廻顚到(倒)の根元となれり。甘に着せば彈指に苦しむ。また辛

に着せば火さしりて懼るごさし。此二味その根をくるしむる源なり。都て五味はいづくゟり出生したる味ぞや。萬の味を離れ又離たる所の味をも捨て、根にかへり源によつて味、大悟せんに、いかに有相の味に深く執着せん。是本來面目を舌覺えたる事にあらずや。もさ此一味ゟり地水火風さ散亂して、人間出生し、禽獸草木・森羅萬象、或は香さ變じ色さなり、味さなり、聲さなり、萬物有相皆是ゟり變化して、亦一理にかへるい圭鉛を燒に白粉さなり、朱さ成る。白朱もさ鉛也。萬物も又如此。まろき形を色〳〵やつし、万形さなり、萬形又もさへかへせば、丸きより外の形なし。もさ圓相は空形なり。空に形なし、自他の差別なし。男女の分ちなし、根元をすてゝ枝葉に着し、生死廻輪するなり。我今四させ五させ幸飛去て、なげきをかぞふるに、粟拾ふがごさし。なすことは角なる筥に、まろき蓋するに等しく、我家賣寶をうしなふ。されごも我禪會て失せず。佛性妙用・甘露妻藥・安樂世界さなる。家あれば賣相あり、なきものは買相あり、眼前行住座臥・平生心是なり。人此たのしみをしらず、忙然さくらす。有に無を孕み、無は有をはらむ。有無また非有無を孕む。我がいまの境界に、竹亂れ山木を荷ひ、蝙蝠の鳥空にかたよらず、應無所住而生其心、しかも是にも着せず、陽炎けぶりのごさく、不住して心を生ず。まことに夢幻の五十年、我を愛して我にたらされ、我を苦しむ。昔、龐居士は馬祖大師に參て、此ことを發明し、寶を海に捨つ。われ今家を賣、寶をすてゝ龐居士が分をわらふ。わが家さざす、われは是諸ッ一糸をたぐりもさめて、そのもさをみれば、主人公を拜むのみ、外のはいなし。

家を賣身の約束やなめくじり　氷花

大津の驛に出て

あぢさいを五器に盛ばや草枕　嵐雪

大津の梅主、入集の句あまたこされけるを、山案みだりがはしく、失ひければ

あぢさいやどこやら物のことたらず　嵐雪

秋

淸涼・紫宸のあらたに、みがゝれたる中に

新月や內侍所の棟のくさ　嵐雪

名月や見付越ればきつねなり　神叔
念佛の箒たばねんけふの月　仙化
錢をまく余情拙しけふの月　紅雪
名月や墟の中なる青松葉　青曲
曇るとも菊の十日や墟のぞき　朝叟
稲妻やとかく何ぞに突當る　白芷
すゞしさやとりも直さず秋の空　寄生
ふくろうの鳴音に落る熟柿哉　百花

雪中庵の留主

尻ッさすへ葬のくる透間かな　三翁
蛇のことわする時分やもみぢ狩　心流
雨の日や華を荷にする庭の秋　臥菖

茜あかれや美濃やさきこへたる、なき名のながれさゞまる所は、千日寺の蓬生の露さきえかへりぬ。盆のこのごろは夜ごとに群集して、逆緣にさぶらふ人もあまた侍りけり。戒名嵐雪月照さ石の塔婆に彫入たり。あるまじきこさならねど、おりからは思ひかけずおぼえ侍りければ

夢によく似たる夢哉墓參り　嵐雪

自慢の柳、庭馴たりければ

隣へも追ふてやりたる一葉哉　百里

回向返照

目を閉て誰を見るらん魂まつり　仙化
稲妻や寐てかへるさの鬢の髪　素狄
こらへずに星も落るか鹿の聲　氷花
いでや月湯屋の水手に海老が來ル　濟通
ひやゝかや化粧の顔にきはがたつ　東流

鎌倉建長寺

秋しらぬ法の常盤の舍利樹哉　紅雪

青蟾堂の旅宿をたづねて、日數ありければ、江行の句十四句を得たり。詞書など侍りけれど略之。

松杉に因ちなみ置たりみちの秋　青蟾堂 仙化
茶の花のつぼみて寒しく九月盡

まり子の宿を夜深に出て、うつの山を越ころ、まだ朝寒の風はげしかりければ、火をたける姥にたよりて

燒栗といろりへくはるうつの山

大井川

川越の蔦と舞たり秋の水

鈴鹿山

すゞか山その色顏や木の葉猿

義仲寺の師父の庵に參りて、木曾殿の古戰場曉の夢もすごく、ばせを亡師の風雅の地夕寂たり。往來の旅人、逆緣にさぶらひ、都鄙の門人順緣に拜す。句々は梢を撓、靑楡四序に凋さず、門下某その德風に笠をさられて、靈前にかしらを投す。

菊の香に鳩も硯の水添へり

松は花よりおぼろにてと侍りければ

辛崎は朧に似たり鶴の松

よし野にて

葛時分花はなけれどよし野哉

七夕は難波に侍りて

塲土を踏やよとての星むかへ

難波の遊女のまち通り侍りけるに、霜月のいく日よりか、灯を停止せられて、ひそやかなりければ

あたゝかに君を見まする炭火哉

寺前に遊びて

腰かけて梅が香を吸ふたばこ哉

端午

子に似たる子のかとう人や百代打

住よしにて

杖突た禰宜も出るや夏かくれ

梢より戸を明さする水鷄哉

冬

そのかとゆい霜さへにらひかれたりけん。

立つくす影をへだつる氷かな　紅雪

初雪や日比の芭蕉空地あり　氷花

代脈やころびてかへる雪の朝　臥高

初雪や浪に伊吹の風はづれ　千那

菅植る田面はひとり神無月　氷花

しのばずの池にまかりて

水鳥に餌を飼傍の乞食哉　石周

木の葉落ておだしき水の姿哉　紅雪

刹琵琶はたゝそけくのしぐれ哉　氷花

つゝじ咲岩をうしなふ枯野哉　百里

きかざるは庚申塚のしぐれ哉　方雨

口切のまたぐおもひや日本橋　氷花

炭賣や宿にひとつの明俵　心流

にじり〳〵枴(あふこ)の先や片しぐれ　百里

おそろしや此こまかさを古暦　氷花

摺れぬほど初雪したり木賊山　石周

大雪ふりつゞけたるに、たづねおこせし返事に

こちみんも同じ雪吹の雀かな　朝叟

御亭主の分別すはるこたつ哉　氷花

初霜や地藏の顔の薄化粧　湖雁

ばせを庵の芭蕉もいまだうい〳〵しかりける秋、桐の葉の一葉さへさ、つげこし給へることさなんど、思ひ出られ侍りて

錢ほしとよむ人ゆかしとしのくれ　嵐雪

井が金に成て働く師走哉　仙化

梅がへ(枝)にうしろ合やすゝ(煤)はらひ　百里

即興

鮊や波の立居る上ごろも　朝叟

海苔にもならぬ桶の水垢　嵐雪

雲と雨初庚申におかされて　沾徳

西の秤にけふかゝる銀　序令

引殘す足輕町の椎の月　沾洲

墓(暴)風にへらをつかふ夕貝　白獅

ウ

鶺鴒の共際まどの蚤小船　百里

根太は熟てとぼる挑灯　新眞

尼公よりツレをうち出す鉢たゝき　仝

蛇はふんでも手に入らぬ戀　洲

古ィ文貫ふてなりとこゝろばせ　雪

いざそばされと直す獅子の座　德

袖なしに弦を生たる旅羽織　獅

儒を落てより三世相よむ　叟

夏の月張子の馬の背に答へ　眞

たて茶呑にはうしろ向なり　里

小便が花盗人のあしへ遣ふ　德

淺草の帆は東風にふくらん　令

念佛の遠山を出る夕霞　洲

嚢狐なり行燈の鞘　獅

百石の息に實の有ル貝の役　眞

松みるばかり曾根で食喰　叟

町人は法躰するを官なりと　里

神の名残れ明年とよぶ　雪

白箸の泡はよどみに留りけり　眞

桃の花雨にしほる尨　獅

算置と三味線引と春かけて　叟

碎細に配る初午の粕　令

いつ焼て浪を見返す村の月　德

秋の雲雀の苦ィ聲持　洲

ウ

野の花に鐵針知らぬ牧下シ　雪

老が引摺る市の赤かゐい　里

雷のうれもひわつに石疊　叟

助言〱に空蟬の戻(頁)　德

齒を染ぬ顔と覗くか花の宗　雪

枕あらへば出かはりをきく　州

一夜歌仙

六月や雲の中なる淡路嶋　仙化
ひづまぬものは自在若芦　氷花
蛇の寄る夜の鬼灯幽にて　嵐雪
礫ひとつに蹄やみけり　化
有明や栩の樂も暮かゝり　花
踵を削る冬の近さよ　雪
ウ
馬引て碓井の神子を頼らん　化
内百石は好色の分　花
佛の白髪のも有ときく　雪
筧のつらゝはつ〳〵の水　化
鷄のおもみはうくる霜柱　花
山が見たくば江戸の冬瓜　雪
伴僧の手を引逢て夕月よ　化
きのふ瓤て端遠き秋　花
丸餅がくるまに榑て床のしほ　雪
かさね〳〵の夢ひだり繩　化
花捨る古郷をさすも十ケ國　花
春吹くものと希有な風の名　雪
のさ〳〵と面さへかへるあほう鳥　化
買ねばならず憎ィ秤座　花
濱松は曲り途からが都なり　雪
さらさに葺る灌佛のやね　化
竹もはや犢の角と打置す　花
干鱈を鬼とよめる成べし　雪
旅の舟とをの眠りのみなめざめ　化
太夫に逢ん口切の足　花
あらましのうさを心に點かけて　雪
藏の二階に晝鼠なく　化
月と日の影ほしち又青葉ろり　花
世上のことはかいしきの芋　雪
ウ
觀音の器量女の鬢の露　化
廿四孝とほめて情も　花
拔参りつきて尾張の侍衆　雪
大場を見たる颪たをやか　化
花に行心は沓も笠もなし　雪

蝶の鏡に羽をつくろふ　花

淳生がいはく、永覺禪師の云、大都六祖以前は、多くは是有儀の句、六祖以後に多くは是無儀の句也と、吾誹道にも禪機を具足せり。まづは初祖の廓然無聖、三祖の至道無難と謂しは道儀の句也。趙川の柏樹子、雲門の朝屎橛などは無儀の句也。有義は禪中の敎にして、中下根を導き、無義は禪中の禪にして、最上根に示されたり。俳諧にも有義は世人參ずること多く、みづからも吟行する者粗多し。無義は凡會すること難ければ、己が吐出する事はまして及がたし。所謂親句・疎句是なり。爰に不白軒の句を引合て、有無の句意を分たり。俳學の人是を了知せんかし。

有儀の句

名月は絶たる瀧のひかり哉

無儀の句

初空や烏をのするうしの鞍

爰に又百韵あり、其連衆は如何、曰、前三々後三々、其句意は作麼生、曰、凡聖同居龍蛇混雜。

雪中庵も旅〳〵に莶て寄添ひうこく、氷花も大津〳〵とおどろかしければ、おのれひとりの述懷を申侍る。

くし〳〵と年こそよらめ菊の霜　百里
　花はさめたりされば引板　嵐雪
有明の富貴の山はひがしにて　氷花
　遠き火影に居風呂を知ル　嵐雪
窓蓋におしき書物切ほどき　、
　子共が來てはなぶる耳鼻　氷花
振濯ぐ菜は川裾へ渡し守　百里
　米といわれて藏烏寄ル　嵐雪
ウ
めづらしき物がまた降正二月　氷花
　大工の氣韓梅は助かる　百里
花の空是ぞしらぬか石臼屋　嵐雪
　くわんぜなしめる尻の評判　氷花
袖引て名に行當ル法の場　百里
　狂哥を一ッくらはせにけり　嵐雪

傍の付合たがる親仁あり　氷花
　根釣人さはく出立其元　百里
錢ほどに働かねども牛の舌　嵐雪
　不斷諷ふてあほう殿哉　氷花
間も隙もげに手引手に近飢　百里
　明立鐘や百二三十　嵐雪
八日めも鶴はとんほと峯の月　氷花
　藍の雫のかゝる南瓜　百里
二
踊子は帯に呑れて身すほ也　嵐雪
　顏はうつゝの夢に燒食　氷花
仰山な名に改る古傍輩　百里
　近き葛和の裏は高藪　嵐雪
節季ゆの色も老衰したりけり　氷花
　咳氣の人數何聞召す　百里
それとこそ比丘も勤ル谷の音　嵐雪
　一町退ヶば萬紅葉　氷花
去年の波も合點の折の月　百里
　虫じやといふて通る大名　嵐雪

辻占に取殘さるゝ栴ばらひ　氷雪
　金銀はなししのぶ懐　百里
青土佐につたり〳〵とすくみ鷺　嵐雪
　是非は朧の石塔に淡　氷花
二ウ
朝起も五六日にて消にけり　百里
　運のつきなり貝燒が湯　嵐雪
川竹の永沉出て又候哉　氷花
　つゝみとつゞく恨なるらん　百里
錢木をだんたら筋に塗立て　嵐雪
　作ッた奴に案山子共僊　氷花
古嫗の今度も死ず十三夜　百里
　一葉になりぬ伊勢の殿中　嵐雪
松が添ふ昔普請の角ノ斗　氷花
　そのくせ下手の連歌大數寄　百里
夜〳〵は不便で晝は草履取　嵐雪
　戀が貴來る家賃せんかた　氷花
下ル上ル突拔くらも花の山　百里
　うぐひすはいくつ水けりの垣　嵐雪

三

鳴蛙奥方貧に防がれず　氷花
常は隱してたばこ盆取り　百里
わざくれといふ子は誰が作ルやら　嵐雪
泪以前の舞臺見上て　氷花
面白き時雨切くしてづぶ濡に　百里
友にもまれて鵜ゐちかる　嵐雪
近所みな明店にする太皷打　氷花
隱蓑也加賀染の袖　百里
はや〳〵と山路の栗に色付て　嵐雪
臥猪覗ケば月まその留主　氷花
博奕こき秋も寒サに成にけり　百里
こん〳〵と鳴ル堺からかさ　嵐雪
水車破れて居る馴の巣　氷花
蜘の巣だらけ茶畠の隈　百里

三ウ

爰迄も落着ぬ身を飛子也　嵐雪
酒と契らば一に浮む瀬　氷花
しより〳〵を何ぞと問へば三羽布　百里
顧へ蹴當て鞠はそれけり　嵐雪
遠近の地算の音は大豆を蒔　氷花
惠美須の□(蓬)と常器主付ク　百里
田の泥を圍爐裏の中へ踏込て　嵐雪
蔦の實や欠るほそ道　氷花
月を好ク人は實に年寄ルカ　百里
究竟頂迄雁の音を追　嵐雪
虎が伏木間の花の下り苔　氷花
四日を汐干降た程照　百里
一霞白樂天にてましますな　嵐雪
小糠〳〵とさわぐ常闇　氷花

ナ

御祕藏をひらりと拜ム横肥リ　百里
獅子に岡崎ぬれかゝる也　嵐雪
急ども足は蜘手に氣も付ず　氷花
拭ふて取ッた湖の一面　百里
五十年化すましたる墨衣　嵐雪
草木の機嫌月を客人　氷花
蟷螂はちよかい斗利發にて　百里
三尺相撲のめつたりけり　嵐雪

端の歩を突より外は意もなし　氷花
おもひはうちに鼻毛一本　百里
二日路はとつこかついで船の上　嵐雪
笑消さるゝ鍋つまの虹　氷花
弓と矢に火事の道具からげ付　百里
すねたる顔が本の樽屁　嵐哉
かつぎ着て皆ものまいる氈の上　氷花
男ひでりと北はすゞしき　百里
黑大豆も苫の衣のかゝりけり　嵐雪
足の下から底倉ぞ涌ク　氷花
代官の咳せくやうな雉の聲　百里
瓢か頭巾かぶる長閑サ　嵐雪
花と松きつとわかれて松花堂　氷花
柳は若し鏡とし寄ル　執筆

雷堂百里
露堂氷花

杜撰集下卷終

京寺町二條上ル町
井筒屋庄兵衛板

錢(せん)龍(りょう)賦(ふ)

百里輯

錢龍賦

雷堂百里輯

子日

一番　左

初薺狐かひつて夜明れば　朝叟

右

七くさや中院殿すてあふぎ　沾洲

かきよせてほと／＼さ興がる狐の夜なかにこきて、あしたの原の道さまたげに成たるは、生田(いくた)の小野の若菜なるにや。

右もまた此野に出て、彼一本な拾ひさりて、軒の家つまにはさめ納め、年中快き風雅に富中さるべし。左右珍重。

二番　左

武士(もののふ)の矢橋や膳所やわかな駈　百里

右

八橋へ餅を持参のなつみ哉　市盛

矢ばせ・八橋の若菜珍物なり。膳所やばせさ、のびやか成も、餅な持参さひれりたるも、左右のつくりおさらず、まさらず。

三番　左

大江山若菜の禮に女筆かな　序令

右

春の野に出てわか菜と菜摘哉　其従

左、わかなに添る文見てしより、大江山の五文字は、もうけられたるなるべし。葛西のゑぐは、式部も知らずや侍りけん。右、野に出てわかさ、つゞけたる一ふし、しほらしく、よき持にて侍るべし。

四番　左

人かほの一升水や雪なづな　曉松

右

七草の地主を見たり紙烏帽子　新眞

ふるさしのやせ貞を、わすれ水の薺つみ、餘念なくこそ。

右の地ぬしは垂井天蓋に、七間口をかまへ、

京はて三條堤に、持ひろげたる菜畑なるべし。いづれもよろしく覺えけ。

五番　左

はやともの捨松明に若なかな　仙鶴

右

若な野や袖炉の居はる石の上　白獅

めさしぬらすな沖になれ涙と、ふり立たる松のすさりより、若なさは心寄られたるか。右、春もの深きうづみ火にはあらぬ、石上の袖炉さもに、さりがたき雪間なるべし。

六番　左

手にすくふ雪や和國の若なつみ　秋色

右

琴爪のかたしは菴に菜摘かな　横几

かたみぬきいれ摘んよりは、まめやかなるわかな成べし。

右に法輪さがの御寺、野筋まじりの道野べのおくに、ひそかなる菜つみなるべし。

七番　左

封彊の馬くはんを無下に菜摘哉　其角

右

鶏鳴や當來導師ほとけの座　全阿

左、いかなれや野べにうりかふ浅草のくはんな馬のはみのこしつる

いつの比か長嘯子、浅草の観音に詣でおはして、よみたまひたる哥なりとかや。右も又、牛座をおさらず、暁の七草こほくさはやしたてゝなむ、當來導師佛の座を唱けむ、その障こそいさゝかしけれ。

朝叟のかたより、なゝくさの七つがひ、けふあすに判せよとうけたまはる。もさより見きゝたる事さても侍られば、なにの七艸さかはやしいでん。おもふに其角・沾徳まじり朝子の亭にうちより、初春の笑ぐさつまんさのいたづらなるべし。すべて今日のおすまふ、左右のかたやはげんで勝負なければ、行事獨轉して、双方のまけかたをになひ侍るならし。

七草を三篇うつた手くび哉　判者　嵐雪

すゞかけの姿不相替

法印の禮もよし野の鈴菜哉　沾德

これは七つがひの時におくれ、見物の趣なるべし。

芭蕉菴眺望

葛飾の郡はなれし花の雲　杉風
　一聲すてゝ雉子くゞる草　百里
灸にて二日の世間句ふらむ　嵐雪
　山おろしなり裏門の樽　氷花
何とやら白鞘ものはゆかしくて　專吟
　明衣はかろし尻に輪違　卜宅
月になるお杉お玉が板びさし　其角
　百ふくきせる野に烁はなし　執筆
鷹知りの覺わすれは糸瓜にて　沾德
　影向石の急度むらさめ　李下
空燒のかたじけなさは鼻にこそ　朝叟
　掛がねあそぶさゝがにの歌　序令
更るほどしよろ〳〵水の音はして　曾良
　雨方の足のまめのひりつき　蒼波
矢の中に墨を編たる菱つなぎ　八桑
　眞な箸を見て泥龜が泣　栢十
稻蚊屋に二人寐させて遠氣色　沾洲
　耻ある帶をしめる瓢簞　舟竹
此秋は美濃の谷汲打初ん　琴風
　京の入日も十三夜から　紅雪
置て見よ米にはしたぞ手癲業　神叔
　化るも道理地が綸子なり　甫盛

二

八乙女の笑はぬ顏に味はあり　岩翁
　せみ丸にして書散文　新眞
待ぬ夜の炉は松風の吹すさむ　仙花
　相場僞まで今日の珍說　白獅
癩病とにらめてかへり三笠山　全阿
　一の瀨踏に笹竹をさす　石周
音信も海馬の鮨の代ぞ久し　仙鶴

今は裏屋につぼむ陵(みさゝぎ)　胡雁
油煙藏鳥も覗かぬ寒の内　浮生
頭の水をこぼす河童(かはらう)　兎株
何ものか鉦太鼓にて泣て行　風水
月夜に蓋のならぬ別路　蚊足
角力とりこれは山科(やましな)十禪寺　東潮
いらひといかな鵙の鳴聲　太洛

二ウ

身ためとはいさ白雲の猿眼　午寂
作りのほせる峯は千石　杉風
霖雨(ながあめ)に浮世噺もみなになる　蒼波
貧乏ゆるぎも陽の戰ひ　專吟
筆に曲ヶ揚枝に尖る指をみて　序令
魚の脊は太宰府の石　沾洲
銀釧の色は夕としづむらん　市盛
護摩にあはせぬ玉もくれなゐ　神叔
いつ若衆いと物細くすつひしき　ト宅
夢路をかたる御預ヶの中　其角
ヒツトリに空しき床を打はらひ　氷花

四季の帳とは重肴にて　仙鶴
月花にがつそうばかり夕烏　沾徳
藤はしほれて伏見船たつ　八桑
乳のあがる春やむかしの鼻の下　舟竹
珠數の切レ場は談儀でもなし　全阿

三

長囲炉裏照日の洩をうけ取て　新眞
萬通ひのくろむ牡丹見　琴風
菓子の殘下座へ先をこされけり　柏十
兜巾(ときん)配りし瀧も白糸　朝叟
文月の闇にやぶれて万燈籠　百里
木刀ばかり稻妻に飛　岩翁
虫の音もおそらく嵯峨の丸太町　紅雪
しやんふくりんの駒は一しほ　嵐雪
有顔に火の物斷チと罷成り　白獅
風を愈(いや)した代に素謡　浮生
右左り井の字の中の柳陰　石周
つばめの針の小ぬすみが好キ　風水

三ウ

高砂に油屋もあり朧月　胡雁

胡地をさられて滿足の顏　午寂
花柚から木ずゑに雪のたはむまで　兎株
畫はよしなし海の常灯　東潮
小莚に綿をぼかして雲の峰　蚊足
三十俵と見ゆる葭垣　仙花
短尺の御禮ながらと云なぐり　太洛
片帆につれて須磨も式夂　沾德
安樂も娘が影と拜つゝ　專吟
あらはれやせむさがりはの中　序令
雲水の內まで聞ゆはやり文字　沾洲
鋏を乞て韮をそろへる　卜宅
瀨戸助が口紅粉したる花盛　朝叟
春宵を知る參宮のぬけ　新眞

名

永樂をかへせば滑は取られけり　嵐雪
中長屋まで臼の地ひゞき　市盛
何事も爰に人のと立別れ　百里
文見るなとは道中の傳ン　石周
茶俵にむくる後のかんこ鳥　序令
露休と問へば近イ比死　朝叟
いさゝかの白かねすれて九月盡　全阿
曇らぬ玉に長イ耳あり　嵐雪
應目ふり高キ笑は杉のこゑ　新眞
丸イ額をしめるさし櫛　白獅
難波江に鎗を持せて前渡り　市盛
推も敲も佛骨表　百里
摺鉢に雲の上人立騒ギ　朝叟
除夜の鶴にて針打は止ム　序令

ウ

唐音も後は通して哀がり　嵐雪
畫寐の夢に溫飩預る　全阿
伽羅一を陸から忍ぶ笠の內　序令
塩屋をまねて水も漏さず　朝叟
鳥ばかり外はあらしの國雄ひ　百里
蹴からむ草に鎭守尊き　新眞
うつぼ木にしまらぬ花の色よ香よ　大津 尙白
夕の蛙つらを亂さず　氷花

百韵滿尾

木　桑の實の西紅や施藥院　全阿
火　夏は爪炉にさすりたる膝頭　琴風
土　五月雨と磐手信夫ぞ君が畔　序令
金　うぐひすの戸も開らん華原磬　百里
水　筑摩川春ゆく水や鮫の髄　其角

東　月すむや彼樂天が浪まくら　沾洲
西　西〱と遊ぶ佛や盆月見　朝叟
南　みなみよや釣せぬ先の初鰹　舟竹
北　手のゆかぬ背中を梅の木ぶり哉　嵐雪
中央　四つ橋の土とる上やいかのぼり　濟通

青　荊ふむ枯野の下のにほひ哉　序令
黄　みだれてしこがねの露の渡り牛　渭北
赤　秋野ゝに撰出けり赤色紙　市盛
白　芦の温泉の石に精有ッ秋の聲　巴人
黒　夜過る山とや雪の雪の影　百里

武陵爲客

照もせずふり八専の薄ざくら　才麿
　土の芽のあさがほに飛　百里
湯をくゝるたばこは風の和ぎて　嵐雪
　旅の袂をしのぶ小茶臼　市盛
墨の付ク鳩はら〱に霜の月　濟通
　手斧の影をひつぱづしけり　巴人
塔頭の行厨道は竹の花　渭北
　腐た水に鼓虫澄　才麿
むらさめの音はしびるゝ爪の先　巴人
　ゆふべも待し君は目明シ　嵐雪
鴨の毛の思ひはかなき筆の腰　百里
　水無瀬の塀に柏のえの反り　渭北
紅葉ちる秋も有けり麥門冬　市盛
　外科の見物きりはたりてふ　濟通
名月を楊國忠が女ばら　才麿
　鰻のけぶり立わかれなば　百里
浮〱と落花を斗る水の奥　渭北

名　雉子とかけあふ峯の鰐口　甫盛
つぐひすの乳の日見得に子を借リて　濟通
坪皿にこの眞珠嚙あて　巴人
出ル盡の源氏揃にそゝなかし　嵐雪
嫈の大嚬に石竹を掃ク　濟通
結ぼれて下ゆく水の足駄藏　百里
物の果やら香にあふ鼻　才麿
狼の人を付ケ出す我思ひ　巴人
滋賀の地代に午房引ぬく　渭北
末枯のうらやましくもおつこそげ　甫盛
汁にも月は關の食宿　嵐雪
塩馴てほしか川邊のむら雀　百里
心中せずにしらけてぞ居る　渭北
ウ　一人半ン情は爰に數ならぬ　嵐雪
花の科かな抑入も見せ　濟通
ふりすゝぐ薄又は曇る獨活の脂　才麿
五六返しに春の俵もの　巴人
大津繪の鬼にも似たる墨衣　甫盛
摺めの白き藍染の纈　執筆

歸依佛
櫻木に斧を入るゝや韓退之　才麿
歸依法　肉邊の菜を喰ふ
河豚のやうに腹を立するあげ麩哉　嵐雪
歸依僧
秋風や明惠太郎の革ぶくろ　朝叟

衣　ひとつ脱でうしろに負ぬ衣更　はせを
食　むざ〳〵と鮓をたべぬる花の陰　貞室
角力といふ前句につけられたり、粉骨にや。
住　世にかまけ年の入日をみぬがちぞ　杉風
子　世の音も細し都の子燈心　甫盛
丑　うしの子の鍋を飛越ス五月雨や　琴風
寅　味噌搗の暦かうばしふごおろし　沾洲

卯　借られて往くやうさぎに雪の傘　古蓮
辰　うら枯や人はそこねぬ辰の道　舟竹
巳　仲國が實も有花の袂かな　巴人
午　萱原や枯かけろひて馬の陰囊(キン)　嵐雪
未　地をうつて羊や放つ歸花　序令
申　二月の三笠使や猿に太刀　才麿
酉　若竹や砂に震こむ鷄の腹　濟通
戌　通り犬身をうかゞひて枯尾花　百里
亥　猪子なり二筋踏ぬ糸遊(ど)　新眞

十二支を願。

狐　いづみなる雫や蓮の笠點者　渭北

草庵

名月や柳の枝を空へ吹く　嵐雪
鞘のほころび大豆(まめ)が飛行　百里
御腹取尼に砧をとめられて　其角
正宗じや迚(とて)嘗(ナメ)て置けり　嵐雪
しば／＼と便ゆかしき中盆田　百里
足半はねて袖はらふ雪　其角

ウ

水漉にたまる蛣(ボッテ)も八重葎　嵐雪
琴の師匠を待ぬ夕食　百里
とめよかし兩國橋で流るゝを　其角
さすがに錢は取らぬ人迹　嵐雪
碓(からうす)に力車の我等まで　百里
鷄頭二本駕籠にさゝるゝ　其角
紺屋とは人もしるかに名角力　嵐雪
沉ノ粉(ぢんこ)も燒(たか)ず居待立待　百里
せゝる手の乳房爭ふ蝸牛　其角
紗(しや)の金さへも古ざれし衣　嵐雪
近頃は横に大原の花盛　百里
先(まづ)孝を問ふ人のやぶ入　其角

名

餡引に手まづさへぎる巴也　百里
千住へ下る乘懸もある　嵐雪
物狂ひ亭主早速名のらめや　其角
古(こ)衾の柏から／＼　百里

天窓から烟の登る墨衣　嵐雪
　濱名のはしやつらきはしもと　其角
風に蕎麥昨日の花はもろ〳〵と　百里
　舌うちをして何恨ム虫　嵐雪
道の記を消ス所なり月に月　其角
　乳母と呼出す渠が塩梅　百里
穴蔵の上に朝るもいとはれて　嵐雪
　俣を越たる小夜の中山　其角
鼻かけて顔の住居の淋しさよ　嵐雪
　洗ひ川原に二番鶏哉　百里
引粥に氷を殘す鉢扣　其角
　瘤の生育に老ぞ知るゝ　嵐雪
嵐山はなに揃ふや間の猿　其角
　四ツの日影にしろむ山吹　百里

餞別

竹の子のひとよ〳〵と都哉　才麿

旅蚊屋に曙かはる梢かな　青流
若竹の千代の古道合點か　桃隣
看看去來相　菅笠を須彌に着たる暑かな　釋門修山
流抱く宿青からん嵐山　渭北

雪中菴へ贈

青風や笠を追ツかけ追ン廻し　舟竹
　五つぼたんの花は細膳　嵐雪
ぶんぬきに鰯一疋御覧じて　百里
　日影を逃る丸藥の箔　市盛
わなみ達たかう吹るゝ梅の月　渭北
　春を活すも新しき池　執筆
聲〳〵の兵庫へやらう霞覧　濟通
　ひれふる犬の息杖に飛　巴人
箒殿ツかゝる所の塵をだに　嵐雪
　わかれになれば殘る莨蒻　百里
南山の明日も檜に成もせず　巴人

關所を明ケて痳病に立つ　舟竹
覗こむ面をくはする鐘の風　甫盛
冬の子の日に誘へども痳て　渭北
月雪を淸き渚の下り海士　百里
隣の穴も塗ながら住む　濟通
花によく似たるものあり山櫻　嵐雪
欵冬さけり塩鯛の汗　巴人

名

舘代に水巾さむも後ばせ　渭北
私ばかりおしき元服　百里
山並の賀茂の芝原交りなし　舟竹
小雨をうけて靑染の蔦　甫盛
石蟹煮る暑や寒やの天の川　濟通
秋こそはあれ藝は口よせ　嵐雪
吉原の下谷へ出る萱が軒　百里
上る月より入月ぞ戀　舟竹
見世物に賣て仕廻た跡の親　巴人
皂角くらく靑墓の椀　渭北
時鳥おのれに付て一不審　甫盛
世間をふさぐ妹に歎　濟通

ウ

灰吹の長ばかりも京の伊達　風雪
物見の松の侍は徒　渭北
めつそうに三千尺の花の瀧　甫盛
砥取の道の細くかけろふ　舟竹
うぐひすに今朝の所の風疹　濟通
目のゆく空は水獨活の旅　巴人

三河鳳來寺

一もとのあふひを登る山路かな　嵐雪
鳳めぐる山も奥ある岩つゝじ　朝叟
花ながら道はからしの鳳來寺　百里

伊勢

五月雨の卒都婆何かは間の山　百里

紀州淡嶋

下闇や船を誘ば鈴の綱　百里

洛西

松の尾や横にも往ず稲莚　朝叟

京

近〃山に油煙を被る涼み哉　百里

靈山逸興

踊の時にのぞみて

初聲をあげたり。

文臺や千代のはじめの黒羽織　朝叟

空のほこりもはらふ穂薄　竹宇

秋の水膽の氷とはやされて　言水

二度の小鶴に月明るなり　好春

川船の下へ流るゝかるた箱　百里

手に風車親里の足　常習

丸といふ人や住らむ門柱　市盛

麩菘の音むせぶなる　我雪

ウ

呼錢に財布おほめく歳の暮　我黒

ませた顔にてものが一疋　執筆

振つけの我身はもとの茶筅髪　沾徳

奚の亂閙も竹を見ふるす　才麿

相口を綾になぶりて納めけり　嵐雪

賣は人にて狐かうやく　朝叟

村雨もまだ干ぬ内の糊手洗　竹宇

のぞいた斗揚屋町筋　百里

嫩葉にたもとをなして忍ずり　好春

綸旨に風を入るゝ秋山　市盛

七夕やいはふていなす一夜酒　我雪

月に恩なし盲目の杖　言水

もとゆひのかゝれとてしも花の蘂　才麿

數万の小鮎何ころしけむ　我黒

名

初午の皷こけ來る膝頭　沾徳

かつぎの褶紺世帯むきなり　嵐雪

打れけん衛士も掃部も雪礫　言水

小鬢のぬけて寒かりし雛　竹宇

幾人か醫者を追出す藥風炉　百里

物とり過てあぐむ中立　市盛

うき時は耳から蚤も散亂し　朝叟

さる子細にて伊賀を立退　才麿
今ぞ知るとけに鐃と老佗ぬ　嵐雪
摘てこなぎの片ふごにさへ　好春
春の日をずつと明恵の岩枕　我黒
月もおぼろか盗人の眛　沾徳
神供の櫃は古ひが名物か　我黒
かはつは馬の後臑を引　言水
ウ
早乙女の影言をいふ晝休み　竹宇
身をは端本にしたる指切　沾徳
泡沫の世ならばとても酒の淡　嵐雪
阿蘭陀通辭とかくふつさり　朝叟
嬉しいか雪吹を入るほんのくぼ　百里
小戻りをして拾ふ清書　我黒
花守はたのしき見せの綾段子　好春
曲を耕すうぐひすの舌　才麿

十老

禰宜　大荒木のくさい息かな神樂歌　沾徳
泉郎　玉とりの臍に灸して老の暮　朝叟
山伏　弦鍋や岩にかけ出の老の汗　沾洲
大工　影なれや藤もかゝらぬ手斧腰　舟竹
女　ねむる木の花や不可得油餻　序令
獵男　一聲の寐ざめ身にしむ子持猿　栢十
川越　卯波立甲斐なきとしも九十川　滑北
舞々　八郎が眉は南殿のさくら哉　市盛
關守　關守の何を囀やら縣召　百里
大名　御料理で槖籥の酒に並居たり　才麿

病床に虱をとる辨

しらず身の毛いよだちて、襟の程うさ〳〵としつるが、一飯つぶの半したる物さすりあてたり。疾くもの〻上に敲しはなち、めがね二重に疊て、渠がさまを窺ひ見るに、白き肉、黒き腸、呼呼につれて動搖ゆるく、眼きら〳〵

と見すへ、手足よつか六つかありて怒げなるが、護摩堂にまします明王尊に似たり。虎にも戰ひ龍とも爭ふべし。誠や、必死の人の床にはがいふり戻りて、あざむきにらむところこそ、本艸には見へたれ。いまだ死まじきにや、しり綣ひむけて行、恐ろしと見ればこそさも覺ゆれ。おのれが姿のなべての虫におとれる物かは。歌うたはぬは、聲のなければなり。今少身かろからば、待宵のふるまひもしかねやはすべきを、蓑虫にゆかりたる鬼の子なればか、かく世にうとみ果られたる業生のほどこそ、いと拙けれ。臭穢の中に質を請て、褌に潜り、ぬひめにかくれて人の血氣を犯し吸ふこと、蚊子の鐵牛を嚙むより猶甚し。その生涯の綣れる所は、火とりの中に細きけぶりと飛ひ、木まくらの角にからき耻をばさらされぬ。されば眞如の性のみてる事や、摩竭なにとかいへる魚の大百由旬より、蟭螟の微細なるまで行わたりて、憎愛かはる事なしとこそ見ゆれ。内裏にもの祈けるひじりの御灯の光に、一夜しらみ拾はれたるに、ものゝ化のこと治りけるとぞ。知識の肌に馴まとひて、徳をおなじういはれけるも、さるべき因緣にや。柱の穴に生をたくはへて、舊年の怨人には報ふとも、さもあれさついかにゆるしてんと、かたなひねくり鎗とりしごく迄、いらち思ふ間に、ころ〳〵ところけて見へず。こはもらしつるはと騷て、あなぐり求れどなし。淵に物落せしの人の顏して、手打はたきてより、夢もしらみにしらみ、東雲の空もしらみはてぬ。白身坊の衣被けしものか。

あさがほのはなほど口をあくび哉　嵐雪

錢龍

夏衣いまだ虱をとりつくさす　はせを
さむき身に果報すくなき虱哉　大津 尙白
蠹しらみ窓の螢にかたるなり　其角
髭に伽羅しらみも住ず單もの　才麿
月はなに耳ほる布袋しらみとは　朝叟
穗屋つくりかりにゐるにける虱哉　沾洲
からになる虱も寒し大内桐　琴風
瘦て來る高麗陣のしらみ哉　序令

走り温泉のしらみ吹上椎の花　渭北
槿に隣の竿のしらみかな　太洛
夏機の櫛のしらみや三輪の神　古連
しらみとは知らず爰より花車　甫盛
鯨つく人喰ふなり村しらみ　（難波）半隱
浮雲や虱のわたるさくら川　新眞
しられずや富貴の虱花の中　濟通
松の戸や乞巧奠のしらみ入レ　仙鶴
襟かけに一夏を廻る虱かな　栢十

神祇

宮川や扶桑のしらみ雪の水　百里

釋教

虱あり袖に露あり自然居士　百里

戀

春の夜の名こそおしけれ捻り紙　百里

無常

蚊やり火におもはぬ石の虱哉　百里

祝

春の日や八十八の虱とり　百里

　虱になくれ、蚤も又うるさし。

蚤に付ク狐はなれて虱哉　白獅

蚤

富士の山蚤か茶臼の覆かな　はせを
それにさへ願ひ絕めや金ンの蚤　嵐雪
投金やもろこし船に波と蚤　朝叟
おそろしや丹後丹波の蚤の宿　（大坂）半隱
蚤とぶや指にはたらく御曹司　（三河）白雪
塗桶にはまるや蚤の運の末　（大津）尙白
蚤に似て押へし虫の哀なり　百里
藥盤の晩鐘またぬ蚤の聲　沾洲
景淸もあきれし蚤の行衞哉　才麿
　ねりそを水にゆるす柚の花　百里
要なる松に一間葺かけて　渭北
はさみ箱へは入らぬ傘　嵐雪

夕月の引立もせず兀泥章　百里
　穂の上もよき國中と見よ　才麿
黄帝の臍のあたりに烋の來て　嵐雪
　雎鳩の宿に翥とまる玉　渭北
一節に醬油こめたる竹なれば　才麿
　歸れ〳〵と夜具の身震　百里
橘の腐れる迄の誓ひなし　渭北
　手水の代に廻す輪寳　嵐雪
俎箸に蒐て行人まねくらむ　百里
　七夕蒸て雲もゆるなり　才麿
死だとて月の入べき穴もなし　嵐雪
　茶碗の中の白い秋立　渭北
筑波から帆を吐出して花の風　百里
　子をおもふゆへに烏飢たり　才麿
殿上の誰とも春を津の論　渭北
　皆身はれする中に此腹　嵐雪
垢かきのよまずかぞへずや桁の數　才麿
　水の粽の芦の毛もなし　百里

つゐそこを旅じや〳〵と桂ぶね　嵐雪
　指うつくしき御肥滿なり　渭北
うそくらく燒ぬ日もあり護摩の釜　百里
　なぶりくさして土圭退轉　才麿
棚川のやね行水を吹かへし　渭北
　繪にも鵂翥はさかさまに書　嵐雪
いかな事胡は知らじ月の撥　才麿
　むらさき式部白く咲けり　百里
さは〳〵と目を流したる厠鮒　嵐雪
　いたいけしける物有馬山　渭北
小夜時雨しゆんで來れば伸出て　百里
　梟煙にぬける吸口　才麿
砂糖味噌べたりと花の鼻紙　嵐雪
　軒撫やなぎ人撫柳　渭北

雜詠

梅咲てはや布施詣鹿島舟　露沾

垣間見や干瓢比の松が岡　露沾

宇橋橋の串海鼠はづすや月の下知　其角

大母衣のうしろを押スや瓶の菊　其解

かたびらの尻はづかしや今朝の秋　尚白

名月や老をかくすかあらはすか　杉風

新宿の良夜に旅ねして

月の香のあら新シや夜着ふとん　朝叟

旅泊

錢矢立空に三五と呼聲を　風雪

宮根驛

新月やまだほや〱と雪の峰　百里

湖の玉を捜して蓴齋哉　沾洲

時ならぬ裾野かうばし茄子苗　琴風

正月旅行

水鳥に被せて越や影法師　序令

島山や消るけもなく天の川　全阿

うぐひすをざぶと木鋏けふの菊　渭北

鶯に帆をおろしけり小松原　白獅

ひよこすかと物あぶなしや子規　八桑

星の出る塵のふた毛の袷哉　舟竹

おもへ唯空を桂の太郎月　言水

おとがひの揃ふや月の廣小路　竹宇

つらぬくや豆腐の枝にけふの月　山平

けふの月をけふと思ふぞ氣の弱ミ　来山

名月や田邊屋橋の天王寺　伴自

卯はら出て桂馬打けふの月　蘭女

湖水

落月の枕や雑魚も亡想も　百里

稲荷奉納

稲妻をくはへられたり神遊び　百里

くさ木咲寐冷のうへの思ひ哉　沾洲

名月にまかる鼠の狹箱　專吟

影法師も行義正しき月見哉　琴風

餞別

鶏頭にも蚤の飛つく日和かな　好春

管笠に汝も取付きり〱す　言水

大津まで、さかおくりして

松本やわらひの跡の月の隈　京 竹宇
牛も漸物くひ止て二つ星　竹宇
夕〳〵狐の灯す涼かな　仝阿
灰吹の谷に澄行花は聲　渭北
眠らぬは馬に於てや花の供　百里
晝顔は動ぬ室に居りけり　八桑
鶯や藥鑵つめたき隅田川　新眞
朝立や薩陲の鰹雲に入ル　其従
織姫や綿に養ふはねつるべ　市盛
おの〳〵の桃の席や等持院　嵐雪
松明や狐も見ゆる鮭の魚　東潮
名月や古人ながらも生瓢　米澤 柳舟
不二白く富士青くして小春哉　朝叟
けふ菊に仙臺錫の箕かな　百里

美濃路の旅にのこりて

ほとをりも醒ガ井越さば初紅葉　沾徳
海にぬれて乾くや月の東山　沾徳

水茶屋に壹歩もゆやけふの月　序令
　つゞくだけはと柿の皮むく　嵐雪
彌市が菊の衣はいかならん　栢十
　安い斬の腐レ落たり　朝叟
小春より漁村の墜うち納め　沾洲
　胡麻を嗜む眞の塗桶　百里
ウ
見ぬ文を掃て捨たかそもやそも　嵐雪
　藪を圍へど人の知る中　序令
松に藤富之助こそ凉しけれ　朝叟
　竪十露盤に笑はせて行　栢十
誰番に滞たる敲き鉦　百里
　角をたやさぬ柴の糟　沾洲
秋寒き籃輿の物見ふりにけり　序令
　芋をこぼして芋あらひ橋　朝叟
舛の月納豆砂利に髭奉行　栢十
　買ちらしたる扉名號　百里

むかし見し尾籠わすれぬ花の雪　沾洲
　よく成て来るやぶ入の袖　序令

名

蛙にも一火すゑたしわが戀は　嵐雪
　紅紛さそうなら伊勢の爪白。　栢十
移徙は尿瓶團もろともに　朝叟
　揃手に蒐る五月雨の中　沾洲
能事はうなづく京の温飩桶　百里
　酸ッな所に松坂がある　嵐雪
篩する煙の下の六地蔵　序令
　高札讀ば殿は八人　朝叟
曉は盥を泣せて朝の月　栢十
　碎な〱萩の杉重　百里
たづねたる人を見付の舞車　嵐雪
　風なつかしく盥かたぶく　序令

ウ

水上は金堀さかる磯千鳥　沾洲
　石に生たるから竹の性　嵐雪
あの宿も飛び子が居ぞ無東西　朝叟
　月冷を見て歸る山もと　沾洲
おもふさま花に酔せて網の物　百里
　柳に與へ松に奪る　栢十

肋下にきたつて、三拳し去る。この風顚還而雪中の虱を被る。その義を錢龍賦といふ。ひといやしむで觸ることなし。捨むと要して、所を求るに他のはゞかりあり。捨ず、とらずんばこれを如何。蚤子過ニ新羅一。

寶永二年乙酉九月晦日　綏々閑人述

洛陽書肆
井筒屋庄兵衛梓

韻塞

乾・坤

李由
許六撰

風雅の實躰、山野に滿ていまだ亡師の跡をさまさず。しかれども取捨のたよりをうしなひては、やゝ面々の楊貴妃に誇り、をのが甲に似せて是非をあらそふに、翁の畵像唇を動さず。面受口決の輩も、ひとり〳〵露ときえ、雲と成南後、何を範とし、誰を柱とせむ。嗟乎かなしむべし。俳諧滅盡三十年に過べからず。かの優婆鞠多は數滴の油をこぼし、夫子は觚ならんや〳〵と歎ず。まことに後世の翁をまつは筆の跡なりとて、許六と額を合せ、函底に埋れし古翁の句、遠近親疎の佳什を烈ね侍りぬ。曾丹好忠の家集に習ひ、十二月をわけ、終に韻塞と題す。元祿九丙子冬臘月買年李由自序。

韻塞（乾）　　李由選

十月

宿明照寺　元祿辛未子昔 四十有八歲

當寺此平田に地をうつされてより、已に百年におよぶとかや。御堂奉加の辭に曰、竹樹密に土石老たりと。誠に木立物ふりて、殊勝に覺え侍りければ

百年の氣色を庭の落葉哉　芭蕉翁

御玄家も過て銀杏の落葉哉　李由

生壁にぬり込門のおちばかな　老如元

あかぎれの膏藥つゝむ落葉哉　木導

寒山と拾得とよるおちば搔　許六

雜水の恩をおくるや落葉搔　毛紈

狼の道をつけたる落ばかな　程已

掃おろす牛の背中の落葉哉　如行

旅行

夜の中に木の葉を聞や駕籠の屋ね　荊口
炭燒や朧の清水鼻を見る　其角
神無月豆腐のうれる嵐哉　杉風
一しきり闇もあかるし神無月　朱拙
兀山や化をあらはす神無月　ヲハリ素覽
裝束の塵も倒さぬ神の留守　大サカ松嵐
新藁の屋ねの雫や初しぐれ　許六
初時雨百舌鳥野の使もどつたか　大サカ諷竹
蔦の葉の落た處を時雨けり　此筋
蒟蒻の湯氣あたゝかにしぐれ哉　猿雖

無名庵にて當座

流れたる雲や時雨るゝ長等山　カヾ北枝
一方は藪の手傳ふしぐれ哉　丈艸
鴻(おほとり)の烈(列)を崩さぬしぐれかな　米替

惟然が田上の草庵に入けるに贈る。

もらぬかと先おもひつく時雨哉　長サキ牡年

松山や時雨の脚のはこびやう　エド利合
原中や星はつて居て降時雨　如行
麥糞(こえ)の土に落つくしぐれ哉　李由
時雨來る空や八百屋の御取越　汶村
水鼻にまと見せけりおとりこし　千那
同日に山三井寺の大根引　許六
乘物につかえまはるや大根引　李由
刈株に一すじ青し冬の稻　エド子珊
木がらしにいつすがりてや雨蛙　正秀
凩にうめる間寒きいり湯哉　荊口
木枯や簀子の下を通る音　エド奚魚
こがらしや百姓起て出る家　亡人馬佛
我(わが)形(なり)の哀に見ゆる枯野哉　智月

亡師一周忌に手づから壽像を寫して、野坡に贈て、深川の什物に寄附す。

髪の霜無言の時のすがたかな　許六
爐開や左官老行髪の霜　翁
見臺に髪ゆふうちの火燵哉　毛紈

山寺は山椒くさき火たつかな　千那子息 角上
小若衆に念者きはまる火燵かな　李由
脇見して中さかねたるこたつ哉　徐刁
御命講や顱のあをき新比丘尼　許六
御命講や紙子のうへの麻ばかま　奚魚
行かゝり客に成けりえびす講　去來
水鳥も寐あたゝまるか靜也　李由
明方や城をとりまく鴨の聲　許六
瀧つぼを覗て見たる小鴨哉　程已
あけ汐に弟雪ちかし鴨の聲　エド 文梁

有馬歸路

初雪やならぶ伊丹のかはら葺　朱佃
初雪や一面に降る勢田の橋　李由
はつ雪や獄屋見舞の重の内　錢芷
初雪や網代の小屋の高鼾　汶村
はつゆきや拂ひもあえずかいつぶり　許六
初雪をおしまではたく頭巾哉　毛紈
細すだれ鼻で分たるづきんかな　木導
寒菊や火を燒方の眞さかり　李由
布くろ戸の押繪に書や水仙花　木導

霜月

初霜や七夜の朝の樽さかな　荊口
初霜に覆ひかゝるや閣の星　千川
水風呂に垢の落たるしもよ哉　許六
柊の花に明行霜夜かな　汶郁
霜畑やとり殘されし種茄子　エド 桐奚

芭蕉庵十二日月前興行

萱屋ねに霜見る朝の日和哉　同 利牛
朝霜を火桶にのこす寒さ哉　京 謙山
初しもや麥まく土のうら表　北枝
鷹啼やしのび返しの霜の冴　カゞ 遲望
干鮭に喰さかれたる紙子哉　木導
肩置の出所かくすかみこかな　李由
さはがしくならぬとり得や古紙子　正秀

緞子着て棹柱にさはる音　錢芷

雅退て鼠の笑ふふすま哉　燕下(ミノ)

綿帽子の糊をちからや冬の蠅　許六

旅行

舟あてゝきや〳〵氷る寢覺哉　杉風

大儀して鍋蓋ひとつ冬ごもり　李由

人を吐く息を習はむ冬籠　千那

冬籠皺の筒のほこりかな　木導

土鑵子や燒火になるゝふゆ籠　米巒

しづかさや二冬なれて京の夜　其角

六條の豆腐の沙汰や夜の雪　吾仲(京)

乞食の事いふて寐る夜の雪　李由

雪の日や先からさきへ子取婆　程已

わづかなるスサにたよるや壁の雪　汶村

去來が雪の門を題にすえて、晉子に句を望まれける時

十四屋は海手に寒し雪の門　許六

帆ばしらに雪降そふや風面　泥足

水鼻を吹きつて行雪吹かな　李由

霙降宿のしまりや簑の夜着　丈山

川越のふとしをしぼるみぞれ哉　毛紈

これほどの霰に寒き朝かな　口鮮

冬瓜のかくてもあられ降夜哉　何空(カヾ)

紅の鷹の大緒や玉あられ　胡布

麥主の涙をこぼす鷹野哉　不知作者

御鷹野にすくんでゐたり網代守　李由

網代守宇治の駕籠舁と成にけり　許六

住よしにて

星寒き三ッの皷や松のかぜ　凡卿(大サカ)

かな物にさはる手もとや神樂姫　徐寅

曉方の聲や碎るみそさゞい　惟然

鶯に啼て見せけり鶺鴒　許六

狼のかりま高なり冬の月　奚魚

塀裏の桐の木ずえや冬の月　朱伯

冬の月杉を澄するあらし哉　木導

杉の葉の赤ばる方や冬の暮　許六

極月

寒き日は猶りきむ也たばこ切　千那
葱白く洗ひたてたるさむさ哉　翁
雨隠に足袋屋の弟子の寒さ哉　毛紈
鮫洗ふさゝらの音のさむさ哉　木導
蕎麥粕の枕の音の寒さかな　角上
大髭に剃刀の飛ぶさむさかな　許六
氣をつけて見るほど寒し枯すゝき　杉風
鵯(ひよどり)のかしらも寒し柞原　汶村
寒ければ寐られずねゝば猶寒し　支考
さむき夜は裾に鞍置旅ねかな　左次
物賣の急になりたる寒さ哉　風國
菜大根の土に喰つくさむさ哉　乙州
寒き夜や二階の下の車井戸　探志
嫁入の門も過けり鉢たゝき　許六
納豆きる音しばしまて鉢扣(はちたゝき)　翁

臘八は何とたゝくぞはちたゝき　木導
臘八に愚痴を一臼しらけばや　諷竹
臘八や腹を探れば納豆汁　許六
禪僧や悟たうへのくすり喰　(イセ)芦本
客人に見物させて藥喰　(平田)禪桃
寒聲を引づる松の嵐かな　李由
傾城もいとゞねられぬ寒念佛　奚魚
長崎に唐物もなし年の市　氷化
渡し場や人行とまる年の市　奚魚
節季候もはやす乙子の祝ひ哉　毛紈
節季候をまねて出けり煤はらひ　胡布
長明がいかに見るらんすゝ拂　介我
松かぜや琴とりまはす煤拂　臥高
煤はらひ不動に似たる眼かな　木導
すゝはきに鼻の欠(かけ)たる佛哉　米嘗
煤掃に砧すさまし雪の上　(亡士)嵐蘭
すゝ掃や圍炉裏にくばる番椒(たうがらし)　李由
煤の手に一歩を渡す師走哉　岱水

煎茶に食椀の入ル師走かな　胡布
問かへす咄もなしや年わすれ　曲翠
追鳥も山に歸るか年の暮　丈艸
氷魚(ひを)といふ名こそおしけれとしの暮　千那
股引や膝から破れて年のくれ　馬佛
木綿買門の座頭やとしの暮　百里
同じ人に又あふ年の一日かな　仙化
來年は〳〵とて暮にけり　(ヲハリ)露川
行年や多賀造宮の訴訟人　許六
行年に疊の跡や尻の形　去來
嫁がしら出して餅押す寒さ哉　(ヲハリ)東推
餅の手をはたいて出る衣配　木導
衣くばりいそがぬ顏の廿日頃　望翠

示小坊主両段

訴を直に聽也節布子　許六
春ちかき三年味噌の名殘哉　李由
待春や机に揃ふ書の小口　浪化

正月

七種や明ぬに聲の枕もと　其角
なゝ草や次手に扣く鳥の骨　桃隣
俎板に寒し薺の青雫　此筋
古箒の相伴にあふ卯杖哉　許六

蜆子の畫賛

白魚や黑き目を明ッ法の網　翁
擂鉢もほされぬ梅の盛哉　岱水
寺町や向ひ合せの梅の花　李由
から風をうけつながしつ梅の花　木導

寄梅戀

ふり袖のちらと見えけり闇の梅　野坡
梅が香や屋ねに干たる酒袋　朱仙
むめがゝや山の大師の廻り月　汶郁
梅がゝや通り過れば弓の音　毛紈
むめが香に濃花色の小袖哉　許六
上塗に澁つくんめの匂ひかな　(大サカ)保直

かしこさの脱で行けり梅の花　角上
ふるひ行心はしらず坊の梅　諷竹

深川懐舊

豆腐やもむかしの顔や檐の梅　許六
かぞへ來ぬ屋敷〳〵の梅柳　翁
それ〴〵の朧の形や梅柳　千那
寶引に夜をねぬ貞の朧かな　李由
おぼろ夜や塀の棟木の鳥の糞　徐寅
黒土の庚申塚や朧月　許六
乞食の寢所かへるやおぼろ月　毛紈
朧〳〵直に霞て明にけり　杉風
海山の霞冥加や生れ國　千那
氷凝解にほつれて咲や蕗の花　米讃
養父入の客のとりけり蕗の臺　木導
やぶ入や親なき里の春の雨　李由
春雨やはなれ〴〵の金屛風　許六
物よはき草の座とりや春の雨　荊口
幸に柳も雜るや春の雨　吾仲

はる雨に水のいさみや雲出川　昌房
春雨や鶯遣入ル石灯籠　杉風
逢坂や、鶯きかば小關越　尙白
うぐひすやまん丸に出る聲の色　木導
鶯の鳴破つたる紙子かな　許六
うぐひすにうかれて脱や下ひとつ　千川
鶯の聲もさはらぬ日和哉　濁子
うぐひすや此まに雪も降ながし　支考
春雪や茶糞の上のむら鳥　毛紈
下萠の氣色を消すや春の雪　李由
掃ためを捨かけてをく春の雪　許六
初丑の盃と見えけり野老賣　共角
傾城の生れかはりか猫の妻　木導

二月

二ッ月の雨より細き柳哉　汶村
梅がゝをくだく柳の梢かな　木導

風のむきけふは隣の柳哉　子珊

川上へ流るゝやうな柳哉　此筋

大和巡路の頃、六田の渡りにて

伐たてゝ空に青みや川柳　徐刁

我まゝに枝のそろはぬ柳かな　如元

結たての髪を撫たるやなぎ哉　李由

唐人のうしろむきたる柳かな　許六

奈良にて故人に別る。

二俣にわかれ初けり鹿の角　翁

おもひ子をしかるに似たり雉子の聲　千那

大峯や櫻の底の雉の聲　李由

蜂の子をのがれて蝶のそだち哉　丈草

蟷螂の夢見て逃る胡蝶哉　如行

眞直に矢橋を渡る胡てふかな　木導

砂川や芝にながれて鳴ひばり　許六

日中のあをみにすはる雲雀哉　謙山

くろき物ひとつは空の雲雀かな　李由

陽炎や足もとにつく戻駕籠　去來

かげろふや破風(はふ)の瓦の如意寶珠　許六

雀子と聲鳴かはす鼠の巣　翁

鳥の巣に蓋して置は椿かな　支考

春風にむかふ椿のしめり哉　野坡

古佐和や赤菜の中の春の風　馬佛

題余寒

灸の點干ぬ間も寒し春の風　許六

きさらぎや身は思はねど押やいと　千那

藪中の烟るも二日やいとかな　毛紈

苗代を先あてにして歸る雁　汶村

苗代やうれし顔にもなく蛙　許六

百姓の訴訟顔なるかはづかな　毛紈

芦の葉の達磨に似たる蛙かな　木導

菜の花を身うちにつけてなく蛙　李由

菜の花や豆の粉食の晝げしき　許六

菜のはなや畑まぶりの大蕪(かぶら)　毛紈

涅槃像後は釋迦の立佛　左次

三月

芳野山又ちる方に花めぐり　去來

寄霞谷元政上人

草の戸の草もゆかしや花の雲　明照十二世 了超

雛事のつゞきにあそぶ花見かな　李山

五斗の米の爲に、腰を折に憫し。

年〻に猶いそがしや花盛　許六

日あたりの花見る顔や婢子の目　エド 孟遐

花にいざ節振舞の遲なはり　望翠

崖端をひとりか覗けば花の山　野坡

遊五老井

花の山常にながるゝ井戸ひとつ　諷竹

壁土に道せばめけり花ざかり　句空

東叡山吟行二句

寢とすれば棒突まはる花見哉　其角

饅頭で人を尋ねよ山ざくら　同

伐口を人のおしむや山櫻　徐刁

鯉のぼる瀧の濁りや山櫻　毛紈

大竹の間に咲や山ざくら　木導

茶のはりにそゝつて散や山櫻　許六

山彥に散果したるさくら哉　米讃

春の夜は櫻に明て仕廻けり　翁

金の間の庭一ぱいや八重櫻　李由

逢坂のかたまる頃や初ざくら　千那

鸛の巢や日は入はてゝ散さくら　汶村

桃さくや宇治の糞船通ふ時　程己

實をねらふ足輕町の桃の花　朱袖

火は燃て家に人なしもゝの花　鼠彈

室咲の桃に糀のほこり哉　ヒコネ 梨期

草餅にいな振舞や鱠汁　土芳

足あとのやさしきもある汐干哉　ヒコネ 一咕

鹿嶋には杉菜の生るしほひ哉　山店

松原に風を殘して塩干哉　風國

出替や傘提て夕ながめ　許六

紙屑や出かはり跡の物淋し　千那

出かはりに替るや髮の結ひ心　木導

五器箸に離れて出るや一季者　李由
出替に都司王丸の葛籠哉　肅山
長〳〵と蛸も伸する春の海　大サカ附鳥
懺法のあはれ過たる日の永さ　許六
永き日や大佛殿の普請聲　李由
革足袋や野はあたゝかに木瓜の花　錢芷

旅行

草臥て地にとりつくや木瓜の花　殘香

難波の諷竹、之道といひける時、しばらく行脚の頭陀をとゞめて、又美濃の方へも赴むさ申ければ

紬着る容に取つけ木瓜の花　許六
獨活の香に亭主のすゝむ出立かな　李由

其の頃岐阜の方よりの文通に

うどの香や膳のむかひの稻葉山　諷竹
藤の花さすや茶摘の荷ひ籠　許六
水風呂の置處なし春の暮　エド嵐竹
大和路の堂の春も暮に鬼　ウツ月
行春や麓にをとす馬糞鷹　荆口
ゆく春に佐渡や越後の鳥曇　許六
行春に鉋や千鰯のむしり物　李由

四月

世の中をうしろの皺や衣がへ　支考
水引て髪ゆふ姫や更衣　李由
上ひとつ脱で大工のころもがへ　許六
いつところに袷になるや黑木賣　キ角
傾城に喰つかれたるあはせ哉　程己
風の日は何にかたよる杜宇　杉風

遊長命寺

笋の鮓を啼出せほとゝぎす　丈中
蜀魂門は胡桃の茂り哉　木導
草臥て三井に歸るかほとゝぎす　千那
杜鵑鴨川の水山法師　李由
外宮内宮とたんに聞や杜宇　毛紈
兄弟が顏見合すや蜀魂　去來

時鳥眞一文字のきおひ哉　徐刁

子もふまず枕もふまず杜鵑　キ角

大津に住み侍る頃、勢田にて
はつねを聞て

ほとゝぎす勢田は鰻の白慢哉　許六

烏賊賣の聲まぎらはし杜宇　翁

青天に向ッてひらく牡丹哉　汶村

題観心寺牡丹

楠の鎧ぬがれしぼたんかな　其角

三味線の音にはり合ぬ牡丹哉　木導

蠟燭にしづまりかへるぼたんかな　許六

畫賛

から獅子の血を干つけて牡丹哉　李由

芥子の香にたま〳〵似たるぼたん哉　陳曲

本庄の三ッ目の橋やけしの花　汶村

信濃・上野を過、むさしの地にいりて芥子の花を見る。馬頭初見米嚢花といふ句の力を得たり。

熊谷の堤あがればけしの花　許六

花芥子や握りつめたるあたゝまり　木導

白川の關こえける時、竹田の大大装束つくろひける事おもひ出て

卯の花をかざしに關の晴着哉　曾良

うの花の葉は持ながら笹の垣　土芳

卯の花に隣ありきやぬれ鼠　諷竹

灌佛や捨子すなはち寺の沙彌　キ角

佛法を裸にしたる産湯哉　許六

傘にかゞやく色やかきつばた　木導

藤棚や池の小すみの杜若　奚魚

日あたりや紺屋のうらの杜若　許六

くらがりに覆盆子喰けり草枕　史邦

草刈や蕗の葉もゝの蔓いちご　汶村

鼻紙の覆盆子に染る晝ね哉　朱袖

筍やからげてかつぐ手傘　木導

竹の子に身をする猫のたはれ哉　許六

筍の勢にこけたり鮓の石　李由

巻柏を植た痕ありすしの石　嵐竹

五月

夕だちのかしら入たる梅雨哉　丈草
五月雨や蠶わづらふ桑ばたけ　翁
さみだれや焙炉にかける繭の臭　汶村
布杭に桶の尻ほす五月哉　ミノ可吟

許六が東武に趣くと聞て中途ゟ。

猫の手も江戸拵や夏ごろも　李由

仁和寺懷舊

柑類の花の盛の御室哉　大ツ亡人句兒
競馬見てもどりは陣の噺し哉　朱拙
なよ竹の末葉殘して紙のぼり　キ角
むつかしきすゐのとまりやのぼり竹　胡布

東武吟行のころ美濃路より
李由が許へ文のをとづれに

ひるがほに晝寐せうもの床の山　翁
晝顏の果も見えけりところてん　許六

出女や水鏡見るところてん　木導
簑笠もあら鵜つかひや川おろし　李由
鍛冶の火も篝に登るうぶね哉　汶村
見物の火にはぐれたる歩行鵜哉　去來
伊勢萩や鵜の進む夜の風の音　馬佛
箸持て鵜籠を覗く宵月夜　朱拙
大名に馴たる鮎や大井川　毛紈
投られてもろき命や簗の鮎　此筋
涼風や青田のうへの雲の影　許六
青鷺や世間ながむる田植哥　正秀
腰のして念佛申す田植かな　ミノ吏明
菩薩とはならでや道の餘り苗　乙州
燕の下腹さはる早苗哉　胡布
胴龜や昨日植たる田の濁り　許六

月澤の夜遊　四句

風呂屋より直に見に行螢かな　木導
夜の更るほど大きなるほたる哉　汶村
苗塚を休み處や飛ほたる　李由

宇治川の螢は、昔日三位入道の亡魂なりといひつたふ。今の世は

かしこさに合戰なしに飛螢　許六

六月

有難き時代にあふや土用干　杉風

内張の錢の暑さや土用干　許六亡父 理性軒

八十に餘る老祖父、子孫の榮ゆくにつけて、はやく死たしとばかり、願はれける。

一竿は死裝束や土用ほし　許六

南天にしばしと干や汗拭　山店

撫子の泚は落さじ麻地酒　史邦

田の草にをはれ〳〵て富士詣　奚魚

夏不二にほつれて涼し雲の緣　汶村

雲の峯石臼を挽ク隣かな　李由

暮待や藪のひかへの雲の峯　去來

眞白に繭干す庭や雲の嶺　奚魚

照まけて夕立雲の崩れけり　猿雖

夕立に幾人乳母の雨やどり　許六

白雨に二足はやし旅籠町　此筋

ゆふだちやひし〳〵とやむ鳥の聲　李由

桐の葉に埃(ホコリ)のたまる暑さ哉　孤屋

大磯や砂のひかりのあつさ哉　陳曲

憖(なまひ)に兀長持の暑さかな　如行

川端をうちかへしたるあつさ哉　游刀

伊賀の舊友より文通の返しに

米の直も大かた似たるあつさかな　大サカ 羅香

蟬鳴や土用の中の書談義　程己

木曾路

棧(かけはし)やあぶなげもなし蟬の聲　許六

あつみ山吹浦かけて夕すゞみ　翁

中入(なかいり)や面(めん)をはづして一すゞみ　汶村

乳母共の食の噂や夕すゞみ　毛紈

此あたり二三度もどる涼み哉　野坡

前おたれはづして町の夕すゞみ　李由

山伏の髮すきたてゝ夕すゞみ　許六

中間の堀を見てゐる夕すゞみ　木導

肩衣はおの〳〵すゞし帆かけ船　支考

あげ笘(とま)に凉むばかりぞ向ふ風　長サキ 魯町

凉しさや松の葉越の破風造　サガ 野明

爪紅の濡色動く淸水哉　長サキ 卯七

鷹匠のはしりつきたるし(淸)水哉　徐刁

いそがしきから臼踏の團(うちは)かな　許六

　　ある方より畫扇の葬に、當座所望

朝顏や扇の骨をかきね哉　其角

　　かされて武者繪かきたる
　　　扇つきつけられて

すゞ風や與市を招く女なし　仝

　　旅行

凉風や峠に足をふみかける　許六

月代をさはぎたてけり蚊のうなり　イガ 苔蘇

蚊遣火や食にさしあふ西の岡　乙州

世をいとふ心のはしか蚊屋の中　謙由

　　旅行

大垣は夜明になりぬ眞桑瓜　ヒコネ 賦石

口の代で蠅をはせぬが爪(瓜)つくり　利合

水無月やとりをくれたる卅日待　奚魚

　　宿山中

川越や蚤にわかるゝ横田川　彫棠

蚤虱馬の尿するまくらもと　翁

七月

　　素堂の母七十あまり七とせの秌、七月七日にとぶきする。万葉七種をもて題とす。これにつらなる者七人、此結縁にふれて、各また七叟のよはひにならはむ。

七株の萩の手本や星の秌　翁

織女に老の花ある尾花かな　嵐蘭

布に煮て餘りをさかふ葛の花　沾徳
動きなき岩撫子や星の床　會良
けふ星の賀にあふ花や女郎花　杉風
蘭の香にはなひ待らん星の妻　共角

むかし此日家隆卿、七そじなゝのさ詠じ給ふは、みづからな祝ふなるべし。今我母のよはひのあひにあふ事なこさぶきて、猶九そじあまり九つの重陽なもかされまほしく、おもふ事しかなり。

めでたさや星の一夜も朝顔も　素堂
五位の聲まだらに更ぬ天の川　汶村
かさゝぎの橋や繪入の百人一首　許六
七夕や馬すしますする川の端　錢芷
初秋や帷子ごしにかゝる雨　毛紈
あさがほのうらを見せけり風の秋　許六
焼たての食のにほひや烋の風　李由
濫壁に何をたよりの秋の風　程已

作り木の糸をゆるすや烋のかぜ　嵐雪
さびしさや馬屋の蚊屋の秋の風　汶村
朱の丸の入日の中や穐の風　毛紈

宇津の山を過

十團子も小粒になりぬ烋の風　許六

同じ頃島田・金谷の送火に感なます。

聖靈とならで越けり大井川　同

追悼

玉棚の奥なつかしや親の顔　去來
芋の葉に風の吹けり玉まつり　徐刀
そなへ物名は何〳〵ぞ魂まつり　卓袋
烋の蝶一葉と散や夢の中　大サカ　一桐
蜻蛉のつつとぬけたる廊下哉　ミノ　斜嶺

贈清貧僧

下帯のあたりに残る暑さ哉　李由
初烋や親に離れし相撲取　米糟
相撲取の腹に着けり虻の聲　木導
投足に灯籠打消すすまひ哉　朱紬

單身に麻の匂ひやすまひ取　許六
後から家老のあふぐ勝相撲　汶村
傾城の汗臭くなるをどり哉　木導
食の湯の汗に出たるをどり哉　李由

訪卿庵

秋さびし手每にむけや瓜茄子　翁
はしり穗を分て出けり三日の月　李由
三日月や柱にすはる高灯籠　錢芷

八月

八朔に酢のきゝ過る膾かな　許六
鷄頭を黑うてらすやけふの月　文鳥
酒臭き皺うちけり今日の月　キ角

病床

捨らるゝ目に度〳〵や今日の月　馬佛
夕月や無事に穗を出す竿はづれ　千那

名月は蕎麥の花にて明に鬼　李由
名月のこれもめぐみや菜大根　許六
小草までともにそよめく月見哉　徐刁
十六夜はとり分闇のはじめ哉　翁
いざよひや有馬を出てかへる人　許六
十六夜の氣色わけたり比良伊吹　汶村
いざよひや堅田かもとる神明講　毛紈
日暮から長屋へやつて礒かな　如元
松茸の笠のひゞれる礒かな　徐刁
松茸や園爐裏の中に植て見る　圍友
松茸や大きな蘆のなぐれ萱　吾仲
葉隱れの蟋蟀のやどりや番椒　米嵛
生れつく草の靑みや啄の虫　文鳥
くるゝほどばせをにひゞく虫の聲　許六
屋ねまくる薹風の中や虫の聲　李由
虫の音や木綿所のわた車　汶村
豇豆を引手にはづむ鎰かな　爲有
豆まはし廻しに出たる日向哉　支考

蟬の音や株ほす藁の日のよはり　汶村

蛤蜊のすがたも見えず稲雀　李山

稲刈の共田の端やこき所　許六

禪門の珠數持そふる落穂哉　木導

亡母年回追悼

同年の尼くづをれて袖の露　李山

おなじく供養に詣て

唐がらし菜摘水汲法の人　許六

源氏の畫賛望まれて、いなみけれど、ゆるさゞればひきのけて

傘持も月にをくるゝすがたかな　其角

大きなる家ほど炑のゆふべかな　許六

石山の石にも蔦のうら表　乙州

霧雨の空を芙蓉の天氣哉　翁

朝霧や水をはなるゝ鵜の雫　毛紈

世の中を這入かねてや蛇の穴　惟然

孟耶観の夜話

夜ばなしの長さを行ばどこの山　丈草

九月

塗物にうつろふ影や菊の花　木導

顔痩て花肥したり菊作り　李由

菊は猶捨じ佛のたてからし　千那

猫の毛の濡て出けり菊の露　岱水

濡落の雫霽けり菊の露　朱佃

菊の香やふるき難波の呑手共　千川

加州山中の重陽

山中や菊は手をらぬ湯の匂ひ　翁

水鼻にくさめなりけり菊紅葉　其角

宿山寺

むく起や峯の紅葉の朝しめり　李山

木曾路にて

てりたてゝ夕日春け初もみぢ　野童

棧や命をからむ蔦もみぢ　翁

遊五老井　二句

早咲の得手を櫻の紅葉哉　丈草

あだ空やねざしもならず秌の水　仝

翫十三夜

月影やこゝ仕よしの佃島　其角

穂のうへに高低もあり後の月　游刀

月代に吃と向ふや鹿の胸　木導

小男鹿やころびうつたる蕎麥畠　許六

むら尾花ふりむく鹿を招きけり　梨期

穂すゝきをたばねよするや畑の畔　芦本

秌の野をあそびほうけし薄かな　李山

あたゝかに九月日和や藪の照り　水魚

歸り來る魚のすみかや崩れ簗　丈草

又來たと鴉おもふや小田の雁　支考

稲主に喙をかくすや小田の雁　毛紈

雁の行くづれかゝるや勢田の橋　北枝

雁がねのむすび合すや眞野堅田　李由

白壽白贊　二句

白雁や野馬ををどす草の露　許六

落雁の聲のかさなる夜寒哉　仝

訪郷里舊友

病人と鉦木に寐たる夜さむ哉　丈草

客人の夜着押つくる夜寒哉　程己

遊五老井

毬栗の笑ふも淋し秌の山　李由

いが栗や落る合點に笑て迯　苔蘇

徙移や先へ來てゐるきりぎりす　露川

干鮭の日へかゝんだる篭馬哉　許六

磯際の波に鳴入いとゞかな　惟然

訪二隱者一不レ遇

喰殘す柚味噌の釜のいとゞ哉　程己

青き葉をりんと殘して柚味噌哉　園女

麥地ほる一くらがりや民の秌　汶村

のびのびて衰ふ菊や秌の暮　許六

謝下芭翁被レ訪二艸菴一悦而書贈上

十年もと葉一つよ暮の秌　禪桃

行秌や身に引まとふ三布蒲團　翁

匂ふたぎ追加

閏月

芭翁後の遊行、餞別に

五月雨も日と月のびよ閏月　（エド）石菊

さみだれにふた月ぬるゝ青田哉　芳山

衣配りまつや師走の一かさね　（古）立甫

雛の來ぬ閏に咲や遲ざくら　如元

三月も閏の分の寒さかな　水魚

極月に閏ありて、次のとし歳旦

味噌つきより七十五日目也花の春　（エド）似春

大

晦日も過行嫗がゐのこかな　尙白

小

文月の三十日おどろく灯籠哉　此竹

助番や二十九日の大晦日　（ヒコ子）孟什

朔日

朔日は猶あはれなり鉢扣　（イセ）柴雫

日蝕

日蝕の日に喰入や栗の虫　李由

月蝕

練絹の色もうるむや月の蝕　汶村

月蝕の露にあてまじ白牡丹　木導

彼岸

百姓の娘の出たつひがんかな　許六

くゝ立の花うちこぼす彼岸哉　支考

きら〳〵と烁の彼岸の椿かな　木導

土用

おほつかな土用の入の人ごゝろ　杉風

八專

頭痛する八專中や椎の花　程已

十方くれ

てり曇る十方くれのあつさ哉　毛紈

庚申

庚申や殊に火燵のある座敷　殘香

節分

大豆をうつ聲の中なる笑かな　其角

年内立春

冬の春心の外や梅の花　智月

立春

春立や齒朶にとゞまる神矢の根　許六

甲子

甲子をまつや隣の茶蕺引　米𥳑

入梅

胴龜の夜番を起すついり哉　錢芷

八十八夜

ふく病につれなき霜の名殘哉　千那

二百十日

茶大根に二百十日の殘暑かな　李由

半夏生

半夏水や野菜のきれる竹生嶋　許六

石竹も半夏に胡麻蒔ついで哉　朱紬

冬至

門前の小家もあそぶ冬至かな　不知作者

ゐのこ

しみ〴〵と餅腹寒きゐのこ哉　徐刁

寒

月花の愚に針たてむ寒の入　翁

寒に入こゝろにかゝるし夜着の裾　卓袋

跋

日本書記は天理の賾を窮め、源氏物語は人情の實を盡すとかや。今、韻ふたぎと題せる二卷は、李由・許六が腸なり。木導・汶邨其ほか羅漢のやうなる者ども、花の雲にあそび、月の水にたゞよひ、天人一如の俳諧の一揆、赫然として百尺の竿にともし火をかゝぐ。詩哥・管絃の舟をかざらば、おの〳〵身を和けて、夢乘ぬべき彼廬山東林の交り、遠法師・陸道士、車座に酒のむ顏ならむかし。

蒲萄坊　僧千那書
印　印

孟耶観主頭
月澤衛人　買年　李由
五老井主人
武林　森羽官　許子六

韻塞

京　いつゝや庄兵衛板

句塞（坤）　許六選

五老井記

靈泉あり。水のたゝゆる事纔に尺あまりして、三尺の盆池より流れ出る事、滾々滔々タリ。五老井と名づく。別埜をひらけて五老菴を結ぶ。主人姓は森、名は許六、みづから五老井居士と潜す。五老は予が別號也。驛が原不知哉川流れて、鳥籠の山南にちかし。十旬の休暇をうかゞひ、半日の閑を領する所也。遙にきく、東江はせをの翁、錫を坂西に趣しめ給へるの折ふし、靈泉を共に汲て、風騷の匂ひを莚の中にとゞめむとならし。其水の淸き事は、惠山の泉脉を通じ、あまきとは肅州の金泉にひとし。立かへる春の朝、白散の藥をさげてより以後、四時の生涯を養ふ事かぞふべからず。一とせの間にわけて泉を翫ぶ事は夏を主とす。霍山鳴か井盤の納涼、西上人の柳の陰も、今此水に俤添ぬ。其德其要、廣大にして神佛の尊をすゞし

め、且ッ堯の井を掘リ禹の水出を爽らげてより、四民猶おだやかならしむ。後に山あり、さゝ栗の岡といふ。晴に望み雪に對して、眺望きはまりなし。湖水の島〻、江南江北の山のたゝずまひ、日枝・伊吹の嵩、比良・三上の高根に眸をさく。中西の方に衛が岡あり。聖德太子の御哥より、犬上の名所となりぬ。杖を曳ては蘿を廻り、岡に登る。薇は蕭をたすけ、栗は茗粥を炊ぐ。抑、庵は纔に莚三枚を設けて膝を窄め、賓主六人一座に至からず。茶碗五ッ、枕五ッ、筆墨の外に物なし。月に杜宇を添へ、驛路の鈴に里の砧を合て怺をかなしむ。庭に笋をあてず、樹に木鋏を入ず。窓外の草自ラなり。たま〳〵畑を穿ては狛の瓜種を求め、五色の茄子を植るといへども、山蟆の爲にせゝり落さる。噫〻潜居士文匣に僻する事二十余季、子膽・芝瑞を師とし、楊子朵道人が骨髓を窺て、雪裡の芭蕉・夏天の梅、自然に一味の風雅を兼むとす。世上、予が筆痕を樂て、予の心頭のたのしびをしらず。風雅は是非をあらそひ、畫圖は鄉童の前の戲となる。いまだ風雅の爲に文書を樂むものをきかず。予と共に志を同して、はやく我をたすけよや〳〵。終日樹下に徘徊すれども、更に荅る物なし。四隣の鳥の聲・花間の蜂蝶のみ笑て、清天に腹つゞみを鼓し、五老の流に脚を洗て還る。予嘗元祿五季壬申春貳月於蒼梁樹林下識焉。

水すじを尋ねて見れば柳かな

印 印

元祿壬申冬

十月三日許六亭興行

けふばかり人も年よれ初時雨　はせを

野は仕付たる麥のあら土　許六

油實を賣む小粒の吟味して　酒堂

汁の煮たつ秋の風はな　岱水

宿の月奥へ入ほど古疊　嵐蘭

先工夫する蚊屋の釣やう　筆

ウ

才ばりの傍輩中に憎まれて　水

燒焦したる小妻もみ消　翁

粽つむ笹の葉色に明わたり　六

輾磑をのぼるならの入口　堂

半分は錣はぬ人もうち交り　蘭

船追のけて鮹の喰飽　水

宵闇はあらぶる神の宮遷し　翁

北より荻の風そよぎ立つ　六

八月は旅面白き小服綿　堂

燒山こえの雲の赤はげ　蘭

打起す島も花の木陰にて　水

つらも長閑に鶴の卵わる　翁

名

春ふかく隱者の富貴なつかしや　六

當摩の丞を酒に醉する　堂

さつばりと鱈一本に年暮て　蘭

夜着たゝみ置長持の上　水

灯の影めづらしき甲待　翁

山ほとゝぎす山を出る聲　六

兒達は鮎のしら燒ゆるされて　堂

尻目にかよふ翠簾の女房　蘭

いかやうな戀もしつべきうす霙　水

琵琶をかゝえて出る駕物　翁

有明は昆舍門堂の小方丈　六

舌のまはらぬ狐やゝ寒　堂

ウ

一すじも青き葉のなき薄原　蘭

篠ふみ下る筥根路の坂　水

宗長のうき寸白も筆の跡　翁

茶磨たしなむ百姓の家　六

花の春まつへて廻る神樂米　堂
七十の賀の若菜臺立　蘭

四吟　李山

鱈船や比良より北は雪げしき
蘆浦納豆寐せ初る比　許六
酒道具つけて家賣年暮て　汶邨
京の返事に機嫌なをする　徐寅
月くらき腰湯に裾のぬれ廻り　六
一城わたる四十雀鷹　山
ウ
盆過に濱手の早稲を米にして　刁
女房の供に夫のいかるゝ　村
門口に化粧立たる宿の者　山
向ふに付る日野の壺皿　六
紫蘇の葉のちり／＼となる夏の暮　ソン
ざんない尻のあまる小盥　刁
引飯の算用たてる男部屋　六
肩で風きる後の出かはり　山
大坂は木綿のやすき秋の末て　寅
月夜に諮る奥の世の中　村
一あらし老樹の花の崩れたち　六
池は田蕎麦に蛙鳴なり　山
名
永き日の十三鐘に暮かゝり　村
惣／＼醉て禮をいはるゝ　刁
肥足にこびとの革袋のはな緒すれ　山
廻したふれのつゞく前橋　六
傾城の心中噺一ぱいに　寅
上の出駕籠の揃ふ朝明ヶ　ソン
掃ちぎる小庭に栢を作りたて　六
うつぶけて置溜塗の丸　山
物喰の先口もとにほれ初て　村
やいとの隙をもらふかこつけ　刁
そよ／＼と簾に風たつ夕月夜　山
腮に挾でむすぶ犢鼻褌　六
ウ
豐島御座一枚持て草枕　寅

河に聞あく信濃海道　ソン
鵤(イカルガ)につちくれ鳩の啼つれて　六
糊のまゝ子の鍋をはだける　山
此春は閏に花の遲なはり　村
荳も赤菜も冴かへる色　寅

參吟　野坡

秋もはや鴈ッおり揃ふ寒さ哉　許六
藁を見てからかゝる屋普請　利牛
暮の月宿へはいれば草臥て　坡
何ともしれずうまひ臭ぎする　六
大勢の中で精出す疊さし　牛
はやい七ッの鐘の穿鑿　八
ウ
葬禮に傘は隣へことづけて　六
女房の酌に一ッ呑む也　牛
餅米は手つけの銀をあてゝ置キ　坡
かい暮かゝる番町の坂　六

用心のやねの硾(ヲモシ)に雪降て　牛
玉子の殼の多き掃溜　坡
何事も年を越れば長閑なる　六
日野商人の戻る春風　牛
後家鞘をひねくり廻す花心　八
踏崩さるゝ寺の芝土手　六
しんへと月夜の水の落る音　牛
惣(そう)嫁(か)追出す肌の寒けさ　坡
名
秋さきはならぬ米屋もざはめきて　六
峯入前の三井の振舞　坡
一ふりの雨に凉しき槇の色　六
女子ばかりがもの思ひ居る　八
煤掃の道具で戀の現はるゝ　六
はやう濟たる町の寄合　坡
雪院は場を通つて奥に有　六
ばんばともえて食の焦(コゲ)つく　八
旅人のもらひばかりに伊達をして　六
此界祭日ぐれから行　六

霜稗の穂の見え初る月の代　拔
　醉の競ひに鹿を追也　六
ウ
根原越へ水のたしなきかり枕　同
　痺癬をうつる江戸の絹買　拔
懸隔に暑や寒むやの梅雨の中　六
　立まはつては座敷掃なり　拔
一年の醬油喰込む花盛　六
　彌生の雉子の鳴さかる聲　筆

三吟

雌を見かへる鷄のさむさ哉　木導
　宵の豆腐の氷る俎板　朱徊
たばふたる昨日の草鞋隙やりて　許六
　壹歩が錢を腰中に卷　導
暮切て灯とぼすまでの薄月よ　徊
　鷹場の上を雁わたる也　六
ウ
ひつそりと曹洞宗の夏は濟て　導
　せつかれて又藥研もどする　徊
五器ふいて下女は化粧にかゝりけり　六
　泣出すたびにくらがりをむく　導
芬〳〵とよい茶を入て茶漬食　徊
　座敷へ昇て上る駕物　六
皺の手に琥珀の珠數のたふとさよ　導
　蓑も動かぬ嵯峨の有明　徊
砧うつ隣は馬のいなゝきて　六
　漁村の並ぶ濱の漉糟　導
葭葺の五門徒寺に花もちり　徊
　彌生も暮て夜着の洗濯　六
名
筒藥首にふらつく春の風　導
　宮井ゆたかに藤堂の藤　徊
早乙女の子持は畦に腰懸て　六
　前に皺よるかひ割の帯　導
瓜茄子戸板の上の魂祭　徊
　まだ瞿麥に秋の初かぜ　六
御前〳〵から甲を脱で月を見る　導

矢口のさとにかゝる玉川　徇
粂粒のほろ〳〵落る雨の中　六
脚半の紐の廻る草臥　導
精進に箸馳走する旅の宿　徇
解毒の禮を孫にいはする　六
ウ
珊瑚珠の色うつくしき夏羽織　導
木どりではてぬ夷大黒　徇
正月の夜食は餅に極りて　六
佐和山母屋の齋聞ゆる　導
花盛つれ〴〵草を引出し　六
春から雨の降つゞく年　徇

三唫

秋かぜに吹すかされてけふの月　汶邨
河原柳の一まいにちる　許六
相撲とりの勸進もとを唫たてゝ　木導
たよりのたびに上る綿の直　村

かしこさに伯父の跡まで丸めけり　六
能するやうに家の手番(ツガヒ)　導
ウ
いそがしう見せるも戀の一思案　村
膳にほろりと泪つれなき　六
尼になる宵は潜(ひそか)に洗ひ髮　道
星は氣疎く光る雪空　邨
荒海の久世戸を越る鴨の聲　六
五十過てはならぬ先懸　道
土器をしばしひかゆる舞の内　ソン
青い疊に月の澄きる　六
灯籠の果もちかづく地藏盆　道
白川石の色の露けさ　村
花ざかり衣類法度の御觸狀　六
出替時の外のそはつき　道
名
より飴に日のさす頃は長閑にて　ソン
伊勢路の者の錢の取あき　六
染物に雲の模樣も一はやり　道
作で半分過る城下　村

めつきりと拵え藥仕出來して　六
むす子が嫂をあつらえてやる　道
さゞ波や大津にたよる浪人衆　ソン
又ほめられて見する手鑑　六
夕涼み水増雲に夏の月　道
掃除の跡の十藥の臭ざ　村
傾城の土葬はかなき淺茅原　六
小僧が母にばつと名の立　道
食繼に莖大根を折曲て　郁
師走にしきる支那の糞取り　六
水風呂を居えて燒たる藏の內　道
去年の燕の家を忘れぬ　ソン
本町の垢塵の末は花曇　道
つけ木の輾る東風遙也　六

四 三吟

誰宿ぞ穴明き岩に紅牡丹　毛紈
細ふ涼しき水のくまぐ　米帶
西行の軍法ばなし小夜更て　程己
秋もやうく湯豆腐の月　許六
菊の花金をならべて遊びけり　ラン
穗むけの風に五反百姓　紈
ウ　ひたくと腹疫病にまいられて　六
武士荷が來れば馬が休まぬ　己
水もなき河原雲雀の夏の雲　丸
よい寺になる黃檗の山　帶
月雪にいつも八百屋の作兵衛　己
五年が中に女房三人　六
奉公の邪魔になるほど戀をして　ラン
酒とたばこで世にもすむ哉　紈
花の陰越前衆の旅枕　六
一本鎗に冴かえるなり　己
山こしのかねに六尺をき直し　紈
戸板平目の鍋をとりまく　帶
名　順風にしらゝ吹上見渡して　己

物つかふたる公事の勝口　六
とやかくともはや日もなき年のくれ　轡
只身代は眞木の簡略　丸
傾城の地女になるもあはれ也　六
脉が早ふて夢もむすばず　己
青みたる下弦の月の夜明方　紈
松茸植る野屋鋪の山　轡
峯入の過怠に宇治の橋かけて　己
即非の下で禪にかたぶく　六
閑さにやつれ果てたる學白集　轡
芳野もかれて冬は來に鬼　丸

ウ

一時雨後に下す炭俵　六
晩まで通す晝と場の馬　己
から〳〵と烹豆の上に日のさして　紈
寺請狀の判を見に來る　己
よい花もはや端〳〵は火をともし　轡
霞の中にうぐひすの聲　六

二唫

しゆんけいの膳居え渡す花見哉　許六
日向に照らす顏の陽炎　李由
奉公ぶり出替前のきは立て　同
中でとつたる屋根の麥から　六
月の秋うそ〳〵時の切通し　同
腹のふくれた躍聞ゆる　由

ウ

上下で送りむかひの魂まつり　由
死ごしらえの布を啗む　六
ちやつくりと灘の餘にわな懸て　由
驗氣を得たる尾張商ひ　六
慳貪な女房の顏を化粧だて　由
烏帽子で禰宜の出入する　六
青雲に若草山の夏あらし　由
氣をつけて見る小の十五夜　六
初鴈のまだ寝所も定まらず　由
革羽織着て江戸の良寒　六

するくと大根の市の四ツさがり　山
　姉がもどつてふえる喰口　六
白い物直を持揚て年の暮　同
　牛がつかえてよどむ逢坂　由
上紺の衣にはねのきれ草鞋　六
　ひよつと餌さしの出る塀間　山
ほかくと豆腐の布に湯氣立て　六
　兄弟ながら妾奉公　由
詰筆の手を習ひ込むたはれ文　六
　御夜詰ひけて世間靜る　由
鼠鳴に灯口の丁子祝ひ入　六
　棚から物の落た音なり　由
水風呂の中より見たる暮の月　六
　後の彼岸の談義草臥　由
醬油の二番にかゝる初紅葉　同
　田舍芝居の穢多をこはがる　六
雨乞の躍の代に屋ね葺て　由
　わめいて通る宿の馬方　六
竈の火もほのかに明て茶の出ばな　由
　分限見かけて多賀の頭さす　六

亡師三回忌　報恩

月雪に淋しがられし紙子哉　許六
　小春の壁の草青みたり　李由
蕎麥切のおろしの音に座つくりて　木導
　相役同志の御用さゝやく　朱徊
懐のふくれてつれる夏衣　汶郁
　きふな广齒を人に押るゝ　馬佛
家くに烟をたてる揚や町　米櫂
　松めづらかに羽子ひゞく也　胡布
數の子に扣き牛房の小重箱　毛紈
　春の奥ある醫者の新宅　程己
人宿の後はやがて城の塀　徐寅
　外郎買に荷は先へやる　六
雪隱を覗てまはる腹ごゝろ　由

根太つぶして相撲崩るゝ　導
秋の日に村中こぞる喰ひ祭　徂
いつか出てある暮方の月　村
息災で花見る人はうらやまし　佛
一歩もらふて長閑也けり　讃
二
雪消て上る佛の御洗濯　布
藤に暮たる細呂木の關　訥
佩(ハイ)板(タテ)のひた〳〵濡るゝ川越て　己
味噌燒(タク)門を扣き明たり　刁
から臼の棹に積たる古莚　六
馬が放れて管(菅)笠を喰ふ　由
いひはやす鏡の食屋見て行む　導
早(ハタ)麥(カ)あからむ並松の風　徂
黒い帯女の仕たる夏の月　村
夜宮の町の山のはり番　佛
跡先にだんだと通る十駄物　讃
木曾材木でかゝる琵琶橋　布
ウ
ならべ置大落雁の箱の蓋　丸

日は赤う出て雪のひらつく　己
後から被(カツギ)の裾をつまみ上ゲ　刁
門の外より拜む大佛　六
ごろ〳〵と車の音の花曇　由
其衣更着の夢の境界　筆

辭世

日は横に鼻は竪也雪佛　馬佛

悼馬佛

茲に丙子霜月廿二日六皮堂の馬佛、例の箭血をはしらして終に身まかりぬ。六年の多病に毎座吟席を欠、ことしも仲秋又病床に臥て、諸士が三夜の遊をしらず。事終て一軸を送れば、跋を作て自ら病馬佛と披露す。しかはあれど亡師三回忌の追善報恩の席まで這出、そくさいで花見る人はうらやまし　といひ出す

句もけふのむかしとはなりぬ。蒼くすゝどきものゝふの顏色も、干鮭と死貞をあらそひ、雨眼を利觜にかけられ、いたづらに鳥の腹を肥す。噫〻かなし。風雅の片腕をおとされ、花下月前の遊びにながく一人を欠事、千悔万悔の悲涙、空しく靈前にそゝぎ、各焼香・追悼して斷金のちぎりを謝すのみ。

干鮭もさぞな子共の離れ際　李由
時雨てばつと友千鳥なく　錢芷
道中の味噌にこまらぬ旅ねして　許六
湯桶の酒に月のかたぶく　朱廸
主の留守ぬけて出たる一をどり　木導
うす柿の香に秋の初風　程己
湖を北に見渡す柴屋町　汶村
西大名の二かしらつく　徐寅
鼻よせて嗅で廻れる鮎の鮨　毛紈
灸の順〻にかたびらの蠅　米巒
放參の鉦しづまれば沓の音　執筆

癸酉記行并師友之餞別

許六離別詞

去年の秋、かりそめに面をあはせ、ことし五月の初深切に別をおしむ。其わかれにのぞみて、ひとひ草扉をたゝいて終日閑談をなす。其器畫を好く、風雅を愛す。予こゝろみにとふ事あり。畫は何の爲好や。風雅の爲好といへり。風雅は何爲愛すや。畫の爲愛といへり。其まなぶ事二にして、用をなす事一なり。まことや、君子は多能を恥と云れば、品ふたつにして用一なる事可感にや。畫はとつて予が師とし、風雅はをしへて予が弟子となす。されども師が畫は、精神徹に入、筆端妙をふるふ。其幽遠なる所、予が見る所にあらず。予が風雅は夏炉冬扇のごとし。衆にさかひて用る所なし。たゞ釋阿西行のことばのみ、かりそめに云ちらされしあたなるたはぶれども、あはれなる所多し。後鳥羽上皇のかゝせ給ひしものにも、これらは歌に實ありて、しかも悲しびをそふるとのたま

ひ侍しとかや。さればこのことばを力として、其細き一筋をたどりうしなふる事なかれ。猶古人の跡をもとめず。古人の求たる所をもとめよと、南山大師の筆の道も見えたり。風雅も又これに同じと云て、燈をかゝげて、柴門の外に送りてわかるゝのみ。

元祿六孟夏末　　風羅坊芭蕉述

おなじく五月六日の頃、旅だゝむと申つかはしけるにおどろき、例の次郎兵衛を使として、後の旅は我も木曾路を經て眞一文字に五老井と志す。彦城の諸子にはやく對面せむ事をつね〴〵にねがふ。かならず人に沙汰する事なかれと、こまやかに文して色紙・短尺・繪讃の類もたせ給はる。猶離別の情あさからずとて、發句などいとねんごろにしたゝめ、かさねて詞書をそえて、むまのはなむけを寄られたり。井 杉風子各餞別あり。

其詞

木曾路を經て旧里にかへる人は、森川氏許六と云ふ。古しへより風雅に情ある人々は、後に笈をかけ、草鞋に足をいため、破笠に霜露をいとふて、をのれが心をせめて、物の實としる事をよろこべり。今仕官おほやけの爲には、長釼を腰にはさみ、乘かけの後に鑓をもたせ、歩行若黨の黑き羽織のもすそは、風にひるがへしたるありさま、此人の本意にはあるべからず。

椎の花の心にも似よ木曾の旅　　はせを

うき人の旅にも習へ木曾の蠅　　同

兩句一句に決定すべきよし申されけれど、今滅後の形見にふたつながらならべ侍る。

餞別

笠摺や葦わたしたるあやめ草　杉風

梟啼て跡もさらなる青田哉　桃隣

木を流し〱行涼しさよ　百里

木曾山水の旅行をそゝれば、畫圖俳諧のたすけにすらんといひて

蚊のなきを又かこつけて旅ね哉　草氏才汶

夏草にあくび移さむ駕籠の者　安氏孟退

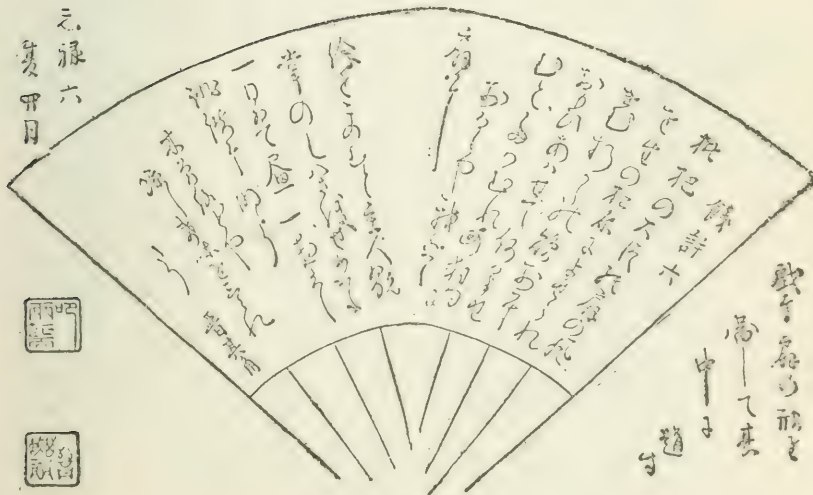
千鳥たつ夏の氣色や諏訪の海　田氏笑魚

甲斐の道すじを敎へて

手の跡をわすれな甲斐の覆盆子時　門氏陳曲

不二淺間中にかけはしほとゝぎす　林氏隣郭

いに乘し客の形見や夏の月　松氏日鮮

夏山の形ナリみ忘れぬわかれ哉　前氏達化

哥仙さも多ければ、餞別の誹諧今こゝに略す。

甲路記行

五十年の行脚に一點の難も蒙らぬは、西上人獨の上也。蘇氏八州の逆旅は、皆不平の上の流浪也。古人は是なるも非なるも共に風雅の境を出ずして、万古の情を述たり。我雲水の客となる事二十季、ある時は不破・清見が明月に鞭をあげ、士峯の空に顔をあふぐ事五たび、又むさし・かむづけを經て、碓氷の雪にまよひ、木曾の若葉を分入事已ニ六度に及ぶ。東西南北に奔走する事合て十一度也。水村山郭、木のふり・石のたゝずまひ、前後左右はまのあたりにおぼえぬ。明朝趣むとする道は、甲斐の猿橋を渡て上の諏訪にかゝり、又もや木曾の川音のゆかしきに枕を支むと、灯下に先達の紀行を披きて、名所の和歌・古戰場の由來をとゞめて旅行の嚢に收め、足袋・はゞきの破を補ひ、竹杖の節をおろして枕の上にかけたり。我むつまじき翁に別れ、行末覚束なく心細き身に成行空に、蜀魂の一聲も尋常ならず、月落烏啼て、やゝ市に行人の足音は已に首途をすゝめぬ。明れば五月六日、武江の舘を退。

　卯の花に蘆毛の馬の夜明哉

日ゝの文章は、去ぬる記行にゆづりて筆をとゞむ。猶名所ところ〴〵の句共おほくは前輩の集に出れば、これをももらす。しかはあれど、旅の情のおかしきをあつめ、たはぶれに賦作り、旅すく翁のなぐさめに書あつめて草庵へおくる。今ついでよければ、亡師のかた見の一烈にこれをしるす。

風狂人が旅の賦　并小序

旅は風雅の花、風雅は過客の魂、西行・宗祇の見殘しは皆誹諧の情也。我翁白川の田植哥を聞初め、奥羽の間を廻り、高舘の夏草に兵共が夢を驚し、あつみ山の夕すゞみには、吹浦をながめ、佐渡に横たふ天の川に初秋の状をしほる。それより蛤の二見を渡て、七百三十余程を吟ず。

舎良が落髮の力輩を感じ、一鉢の飯を分て風流を盡さる。ひとひはせを庵を敲き、諧の雜談に及ぶ時、予に旅十躰の繪をかゝせて、讃して何某が求めに應ず。其風雅にたより俗語をあつめ、狂賦五段とたす。穴賢。奥の細道、草枕の類には非ず。旅店のさま上段に書院床、銀夌のすかし、火のなき火燵にやぐらかけて、門口の入湯桶傾て居えたり。底に小砂のさはるは、夜べの殘りもいぶかし。出女の堅嶋は春秋をしらず。根だ板敷は落て、隅／＼まで疊とゞかず。天井・ふすまは雨もりにきはつき、鉄行灯はくらく、紙は童部の心といふ事に燃えたり。錢賣・草鞋賣にせがまれ、やう／＼に枕を傾け、心よき寐入ばなは、馬さしの聲に夢を破る。出たちは七つと云ふくめたるに、旅人も亭主もよく寐て、夜の明てふためくつらもにくし。

大名の寢間にもねたる寒さ哉

道づれの上をいはゞ、船頭の胸つくしをとり、駕籠廻しをたゝき、馬さしとつかみ合、一僕の跡にさがるをねまはし、鷄の鳴ぬにつれの男を起し、挑燈とぼして夜道を行を手柄のやうにし、入湯の一番に入たがるは何の爲ぞや。つはの枯葉に雨のはら／＼といふ前に、

世話やきの友にあきたる旅の宿

といふ句も此情にかなへり。

海道の賣物に餅酒のなき所もなし。摺鉢峠の餅を喰ねば、未來焔王の前にてからきめを見るといへり。寒天にも冷素麵をすゝむるは、逢坂の茶屋、饅頭のほか／＼と見えたるは見付の臺也。玉子の煮ぬきは木曾の旅、はな紙は竹にはさみ、錢の看板は筒をかけたり。昆蒻の田樂は何者の喰けるぞ。

乘懸に春の蜜柑や宇津の山

舟川の上・馬駕籠の情、しば／＼かぞへがたし。五月の大水もかり借の手形に書入れ、おのが艸の戸は流るれど、首たけの借錢を納してしばらく息をつくものは、嶋田・金谷の賊也。水の淺深を何文川とこたえたるは、大きなる洒落也。天龍の中の瀨は、馬人足を空にまとふ。乘る人は股だけ入て荷を肩にかけてまち、あがる者は凬れ支度して舟端に立ッ。旦那が鑓をかたねたるは渡し場の情也。

馬士・駕籠舁は輕重に日月をおくり、一盃の酒に浩然の氣をやしなふ。一生を漂〻飄〻とすまして雲介の號を蒙る。炎暑の日・玄冬のあしたも榎の木の下に眠て、蟻の都にいたる。終に飲喰を座敷につかず、汁かけて出す馬方の食と作られ、小便ははしりながら、吸がらは手の裏にはたき、錢は耳の穴に納め、金はふんどしにむすぶ。一とせの名殘も暮て、世にある人〻のことぶく月日を、出替の季と定めけるは、世をやすうおくる人にも似たり。

出女も出かはり顔や年の暮

流浪漂泊の上にこそ、あはれなるためしはおほけれ。獨坊主には宿をかし兼、同じ所に二夜はとめず。五月雨の朝、霙の夕暮に情ふかきあるじは、長持臭き衣かして、ぬれたる物を燒火にあぶる。あるは三方荒神といふ物にしがみつきて、しばらく足を休むれ共、極めの札場より追おろされて、却てのらぬ先より股をすくめ、兩方の手に杖を携て歩むべしとも見えず。人間病死の到來は時も所もまたず、醫療のたすけはうとく、懷中の振藥はやう〳〵急病を防ぐ。巡禮・飛脚の族は、路頭に倒れ臥。大片目なる肝煎に追たてられ、老僧の慈みにて門下に入る。おとろへかさなり、終に黄泉の下に趣く。かねて何國の土とならん終りをしらず。犬はしりの土中にこめて、年の齡ひ衣類の模樣を小札にしるされて、何國のいかなる人といふ名もしらずなり行也。岡部の辻堂の笠に、經文をよみて同行の別を惜み、隅田川の念佛を尊て、亡子が古墳に登る。今來古往の人、旅懷の情を盡して、風雅の腸をさらす。能因は白川の哥をよみて、二たびみちのくへ趣き、不二都鳥の句を求て、すみやかに故里に歸る者は貞室老人也。東海道の一すじしらぬ人、風雅におぼつかなしといひし翁の聲、耳の底にとゞまる。

于旹元祿九年丙子冬臘月日於

風狂堂選之

五老井主人

武　林　森羽官　許子六

孟耶觀主頭

月澤衜人　買年僧　李　由

京寺町二條上ル町

井筒屋庄兵衛板

正風彦根躰

許六撰

正風彦根躰序

盛者必衰の教も物換り星移て、靈鷲山も虎狼群をなし、鹿野園も馬の草飼所となれり。今の俳諧も又かくのごとし。直躰の誰かれも大方失果、師説も日々に衰ぬれば、分別・才覺に世を貪り、翁も猿簑の比はよけれど、後には盡されたりといふ。せめては善とおもはず共、惡しといはずば可ならんか。在世の門人十哲の中にも手筋を得たるものは、みな〳〵失はて、其角が下は其角が手筋をうけ取、嵐雪が門葉は嵐雪が手筋を殘す。先師の手筋を露ばかりもしらざれば、是をつくすとも老耄ともいふこそ理なれ。見とり聞取は我儘に云ちらせど、目當にすべき的なければ、終に己が心に納得せず。けふも明日も同じ事にて、面白みは日夜に失て、是より止事の始也。爰に風雅の腸を正くして、正風の血脉を慥に相續する者は洲東の門人也。故に此書彦根躰と名づく。若此事過當ならば、亡師蕉翁の御罰を蒙ん。世に俳諧に習なしといへるは、習をしらぬ故也。先師直判の祕本二冊あり。名をきく人もすくなし。まして見たる人は猶なし。是をしらぬ人、見とり聞取にて習なしといへるも斷か。されば俳諧あさましく悲き事に成はて、行末心細こそ侍れ。あさましき淺間の山の夕煙も、富士の新燒に紛かされ、俳諧の出來癖こそ見ぐるしけれと、正德第二の秌八月　五老井菊阿佛序。

雪

第一 雪月花・時鳥の沙汰

鷹の巣に初雪白し岡の松　菊阿
初雪や内にゐられぬ公儀もの　李由
はつ雪や八百屋にたのむ今朝の鐘　木導
初ゆきや馬がはなれて朝ぼらけ　汶村
はつ雪や急にまばゆき朝日山　越闌
初ゆきやはじめて芝の新御門　孟遠
はつ雪やたま／＼藪にかうの物　魚珞
初雪や伊勢路へこゆる雁の聲　紀達
初雪やまだあら土のいけ大根　冶天
初雪や鵙の草莖うづむらん　菊阿
はつ雪や普請の小屋の泊番　一曉
初ゆきや客馬の場の掃除人　可笠
朝戸出に敷居の畦や雪のたけ　曰良
祖父と祖母あつて茶をのむ雪の暮　古白
油うりまでども見えず雪のくれ　凸迦
楞負に高野へ行ん雪のくれ　孟遠
雪の比叡何をおもふや京大津　隨子
湯をのまぬ蕎麥切腹や雪げしき　冶天
雪ふりや障子あかるし新世帯　呂蚕
しつとりと雪もつもるやもめん夜着　菊阿
西山はまだ雪ごしの入日哉　孟遠
買たての足駄のたけや春の雪　菊阿
ゆで物の汁に染まるや春の雪　木導
雪どけや箱根八里も一なだれ　越闌
大譲するあたらし屋根や雪なだれ　呉川
消のこる足あといかし雪の原　冶天
雪もまだ餅だけ殘るさむさかな　紀達
春雪に落城したり乞食小屋　菊阿

月

名月やくらきところは虫の聲　汶村
名月や赤穗の汐くみいとまなみ　菊阿
名月や申酉あれて犬のこゑ　木導
名月や西にもちよつと如意が嶽　孟遠
名月も高間が原や國の母　越闌
名月に挑灯とぼす浮世かな　紀達
名月や近江表の床の山　舍番

名月や出頭人の宿もどり　呂曇
石山のおくから晴てけふの月　冶天
世の中に似た人もなしけふの月　曰良
百姓に軍役もなしけふの月　張會
是も鳥桐にからすや今日の月　田札
蚊屋しまふ夜は武藏野の月見哉　菊阿
一わらひ〱して月見哉　孟遠
梟の世を晝にして月見かな　泥芹子西モノへ 希志
仝月
名月や廬山の芋に雨の音　菊阿
咲わけに照るやくもるや月の花　木導
龍の臥す勢田の背中や雨の月　越闌
名月に降はづれなし一つ松　孟遠
寐支度やふとん引ッぱる月の雲　紀達
涅槃像見るがこどくや月の雲　冶天
蕎麥がきやねりそこなふてくもる月　古白
柿もまだ半分かゝる月のくも　魚珞
もみなをすつぶりの形や小望月　菊阿
かくれなき法然なりや小もち月　越闌

いざよひは長雪隱の最中かな　菊阿
勿躰をつけて出るや宵の闇　汶村
立待に汲や晋羽の瀧の月　曰良
松茸の笠とり出るや峯の月　凸迦
味噌塩を離れきつてや秌の月　菊阿
桐の木も坊主になるや秋の月　越闌
明月や一聲くもる天津雁　菊阿
入る月の山のあらしや見て來たし　呂曇
くらがりの座頭もよしや月の友　三河村 角水
とがりたる兎の耳や初月夜　古白
牡丹花は牛にのりてや三日の月　菊阿
ひつそりと御門徒寺や盆の月　曰良
筋違に箔の背中や盆の月　李由
極樂も地獄も盆の月夜哉　菊阿
夜食喰ておどらぬ人に月夜哉　越闌
踊見るうつけた顏に月夜哉　孟遠
中汲も冴かゝりけり後の月　舍番
疱瘡しての痲疹は輕し後の月　越闌

うらかへす傾城買やのちの月　紀達
升の市塩屋長次が月見かな　菊阿
西ひがしうら門跡やのちの月　孟遠
二番には紀三井寺也後の月　隨子
尋ねすむ二俣や後の月　吳川
ためつけて連歌師出たり後の月　古白
清水の上から出たり春の月　菊阿
火に醉て猫も出るや朧月　木導
四條から五條の橋やおぼろ月　菊阿
朧月猫とちぎるや夜ゝの殿　越闌
うす濁る入湯の果や朧月　孟遠
白むくに手拭帶やおぼろ月　木導
有明の朧を行や帆かけ舟　孟遠
淡路瀉汐干はくれて三日の月　菊阿
裏から見通す藏や夏の月　孟遠
吹尖る雪氣の風や三日の月　佐近
目のひかる夜啀ずきや冬の月　菊阿
四つ辻に軒のとがるや冬の月　孟遠
跡を見る狐の顔やふゆの月　張竹

花

深山の猪の身ぶるひや花の雪　木導
かねかりて旅する武士や花の時　菊阿
大坂がやしなふ花の都かな　李由
奥方はあすの花見の樂屋哉　汶村
一僕を酢にもみそにも花見哉　越闌
鳥部山無常をやめて華見かな　孟遠
女房の産穢のうちや花盛　凸迦
何用に座頭の上るはなざかり　紀達
睡りせぬ月おもしろし花盛　曰良
ふるまひに寺から呼や花盛　舍香
勘略や法度くづるゝはなざかり　紀達
鬼月のみな吐息なり花ぐもり　菊阿
呑あげる多葉粉の果や花曇　冶天
厚着してぶらりと出たり花曇　孟遠
うなりこむ鐘の響や華ぐもり　越闌
白けたるうこんのはてや花ぐもり　魚璐
海原は何をたよりや花ぐもり　古白

顯昭は佐野のわたりに時鳥をよみて、俊成卿にしかられたり。是を拜領して

時鳥

俳諧の佐野のわたりやほとゝぎす　菊阿
淺瓜と茄子の間やほとゝぎす　木導
郭公安居の藤も散にけり　汶村
口のお醫者四ッ猿樂や子規　李由
參勤も小粒になるやほとゝぎす　孟遠
茶山して田植に出るや時鳥　越闇
野の口のあくを待けりほとゝぎす　紀達
四月田に打いそがしや杜鵑　冶天
夜道には刀たのみやほとゝぎす　凸迦
田植女の寐たらぬ空や蜀魂　菊阿
入逢に能因きくや杜宇　臼良

古語に三日不レ言口含ニ荊棘一

いはざれば口の茨や不如歸　孟遠
唐やまと十方くれやほとゝぎす　紀達
こゝろみの坂でまたばや蜀魂　越闇
博奕うつ老曾の森や鵑　木導
どの殿の供して來るやほとゝぎす　可笠

第二　歲旦・歲暮の場

歲旦

眞白にがしらのはなや年男　菊阿
朝起や番太をたのむ年男　越闇
若水に顏のうつるや歲おとこ　程已
鶯が起て糞すりや花の春　李由
一六でぬけて出るや花の春　臼良
犢鼻褌を腮にはさむや着そ始　汶村
つまさきを引出す糸やきそ始　孟遠
蠟燭に帶のあふちや着そはじめ　魚路
大門の扉の腹やかゞみもち　木導
つき臼もうごかぬ御代や鏡餅　田札
大ぶくの茶は越前をはじめ哉　徐刁
大ぶくや梅干ほどの淡路嶋　舍番
若水や障子にはぢく鬢の櫛　凸迦
入替る雪隱の口の御慶かな　紀達
元日やかけかはりたる勢田の橋　冶天

元日の裝束もなし道具持　呂蛩
うてつきに立る里なし御代の春　錢芷
歳暮
串貝もやはらがぬ間に年くれぬ　李由
江戸は江戸京は京にて年くれぬ　菊阿
公平も濟際はよし年のくれ　汶村
世の中はゐり神たちや年のくれ　曰良
股引や膝から破て年のくれ　亡人 馬佛
行年の宿や娘のかねくらひ　越闌
どつさりと歳暮の響く侭哉　孟遠

第三　四節之段

春
春立や餅の間の人とをり　木導
七種や八百屋が帳のつけはじめ　汶村
七草やまづセイナンとは芹の事　菊阿
大黒も茶碗もおどる薺かな　孟遠
豆腐屋もけふは呼こむ薺かな　曰良
堀川の端に蒔てやつむ若菜　菊阿
節物や前をはさみて摘わかな　越闌
はやり日をかゝえて雪の若菜哉　冶天

酒袋ならびて洗ふわかな哉　紀達
左義長やみな鍮泥の燃ほこり　越闌
伊勢海老のかゞ見開や具足櫃　菊阿
蘁にする節の座敷や梅の花　汶村
朝比奈は引物役や和田の節　孟遠
やぶ入の友切丸や苞ひとつ　菊阿
藪いりや待て鵰の餅の塔　越闌
娵らせて娘の空や雛節句　菊阿
嬉しがる女子上戸やひな節句　越闌
まな板に節句の帳や桃の花　凸迦
ひな節句来るや産屋の初娘　孟遠
雛ながす七度が濱の汐干哉　紀達
三月の四日五日も汐干かな　菊阿
赤貝の新やまかすむ汐干哉　越闌
つけかはる汐干の中や大和川　孟遠
遠霞舟の尻やく汐干かな　曰良
月花の名残の霜や雁の聲　越闌
春もはや時斗のくるふ日の永さ　田札

細ながふ首に日永し山の兒　菊阿
參宮のつれを待間に春くれぬ　紀達
麥の髭ほう〱として春暮ぬ　舎番
いもゝしの木地の出る時春くれぬ　孟遠
庭訓もみな三月で春くれぬ　菊阿
嶋原に足とめられて春暮ぬ　凸迦

夏

ひとつ引左手が聲や衣がえ　越闌
虚無僧の對の出立や衣がえ　木導
江戸見せた袷も出るやころも更　菊阿
羽二重の赤ばる御代やころも更　汶村
短夜や目に泊らす時飛脚　孟遠
木綿帆の幟節句や湊いり　曰良
長竿に杈の武者繪や帋幟　汶村
定紋の破風に並ぶや染のぼり　孟遠
笹賣も見物したるのぼり哉　越闌
竹に虎大竹の子や染のぼり　菊阿
下京に竹の過たるのぼりかな　紀達
暑き手に拜領したる氷哉　菊阿
さげ帶もきつと結や嘉祥菓子　魚珞
爪紅粉の指でつまむや嘉祥菓子　菊阿
虫干や素人醫者のくすり箱　紀達
虫干や具足の胴の二ッ割　越闌
土用餅腹で廣がる雲の峰　菊阿
刈豆に百石町のあつさかな　凸迦
鷹の目の光る暑や鳥屋の内　越闌
毛泥障に辨當醫者の暑哉　曰良
不出來なる温飩ぐもりのあつさ哉　孟遠
山椒の目を見出したる暑かな　舎番
文盲に無病な人の暑かな　冶天
許由巣父牛あしらふて清水哉　越闌
水無月や身は黒木にて矢背小原　菊阿
六月に勿體なしやめしの籾　古白

秋

上弦のちらりと見えて秋立ぬ　菊阿
夜の雨けんがく晴て今朝の秋　曰良
七ッ持名人號やほし祭　菊阿
質うけてかす人もなし星祭　魚珞

田舍まで初物うりや星まつり　冶天
夕食も盆のいそぎや墓まいり　菊阿
七月は母海士人(あまびと)や魂まつり　越闌

病中

聖靈に薄紙ひとへ影灯籠　菊阿
やぶ入や盆の手品の切きざみ　越闌
八朔の節句になるやたの母(も)汐　菊阿
さびしきに表え出たり秋のくれ　紀達
一つ茶(きい)つぼ皿淋し秌のくれ　菊阿
㽔癖を柱でもむや秌のくれ　孟遠
子を産まぬ一ッ壹歩や秌の暮　越闌
子もりする大の男やあきのくれ　凸迦
冬瓜や半分くふて秋のくれ　冶天
七リンは鳥になつてあきのくれ　孟遠
つき臼や哀の外の秌の暮　小クリ 一菊
隣から棒つき出すやあきのくれ　後藤 延珍
岸の土ひとり崩て秌のくれ　隨子
國替やしらぬ所のあきの暮　ゼゞ 利万

秌さびし何を仁王のまなこ玉　土濱セリノ 以試

萬、古代のわざこそしたはしけれ。我たのむ家中には、古例とて、夏馬な水草きよき山ヽ中にのぼせて、名月の比は家〳〵にむかふ。外國には其沙汰をきかず。

平樽の脊籠もちや駒むかえ　菊阿
せきとめてこぬか流すや駒の旅　冶天
ゐのころのしらりと寐せぬ夜寒哉　越闌
阿痛しと寐がえりしたる夜寒哉　孟遠
愚智を出て筒香煎の夜さむかな　一菊
乳のみ子の寐くたびれたる夜寒哉　凸迦
くず餅に砂糖のたらぬ夜さむ哉　張會
秌の夜に寐たらぬ人のたふとさよ　菊阿
待かねる四つはながし初夜の鐘　日良

去年の師走九日、娘身まかりける後は

精進の節句は寒し菊のはな　菊阿
菊酒や祖(ヂ)父(ヂ)祖(バ)母(バ)あつて三夫婦　孟遠

末廣の影をうつすやきくのさけ　菊阿
だしからの山や十日の菊の花　汶村
さめぬ間にお暇申新酒かな　利万
朝立の新酒でこすや田村川　凸迦

冬

治りて新米はやし武士やしき　一甸
炉開や火箸にかゝる鬼の豆　菊阿
炉びらきや鏝でつきわる灰の石　孟遠
酢おろしの身にしみそむる玄猪哉　張會
律僧を上座にすえて玄子かな　孟遠
三ッある中の猪の子や大根引　菊阿
國替にうれぬ石あり神無月　越闌
方〳〵に紅葉のうたや神無月　木導
内井戸に魚屋の顔や夷講　汶村
夷講の中にかゝるや日本橋　菊阿
鯛の跡え亭主の出るや恵比須講　孟遠
正客の次は番太やゑびすかう　随子
かねもちの握て居るや冬籠　張會
人くふて酒天童子やふゆごもり　菊阿

楠の千破劔が城や冬ごもり　越闌
冬ごもり鰤に皮けり孤の中　紀達
ふゆ籠湖水の背や地侍　菊阿
藁くさき村の畑や冬のくれ　木導
板敷に徒櫃の穴のさむさかな　孟遠
手の垢のひかる柱の寒かな　木導
つつぱらすせんたくたびの寒哉　小スケ楚香
塗盆にこんにやくすべる寒かな　孟遠
余所行のよい物きれば寒かな　冶天
かな佛の鼻のひかりて寒哉　木村屈黄
はな息に塗物くもるさむさ哉　大ツカ落葉
豆の直にとうふもつれる師走かな　越闌
人の顔苦のはしる師走哉　孟遠
月次の屏風に似たるしはす哉　日良
鰊鯑に　便しこむ師走哉　合番
毛がはえて呼人もなし師走醫者　魚珞
肝にたつ狐の聲や寒の入り　孟遠
おどさるゝ女子の寒や厚ごほり　菊阿

寒聲や惣嫁を直なす橋の上　凸迦
弘法も棒であしらふ年の市　毛紈
かけ鍋や牛に股がす年の市　舍番
老をかむこれやはじめの年の豆　越闌
柊や目さすもしらずとしの夜ゝ　紀達
碓に春をまたぐやとしの米　越闌

年內立春

連哥師の去年とやいはん冬の春　菊阿
夢介が春は來にけり年の內　古白
根つぎする柱ごよみや冬の春　菊阿

第四　草木づくし

勸修寺はわら屋の宮や梅の花　菊阿
梅寒し柿かたびらでなくすゞめ　汶村
靑天に白熊の鑓やむめの華　木導
藪の中えやぶ入せばやんめの花　臼良
いく春か木は干鮭で梅の花　孟遠
今朝はまづ餅をやすまん梅の花　越闌
梅咲や土とりかける鴫ばたけ　凸迦
おやしきの男住居や梅のはな　紀達
軒口に羽子のとまるやむめの花　舍番
われるほど物申こふやんめの花　田札
炉次口にかしやの札や梅のはな　張會
治まれる鐵砲の音やむめの華　冶天
汐ぐもり沖から見るや濱のむめ　古白
實をとるにさぞ御苦勞や藪の梅　魚珞
梅折て箸おもひ出す手の匂ひ　希志
上野から見るや下谷の梅ぐもり　菊阿
樗蒲一に散かゝりけり梅のはな　越闌
武士と町背中合せや梅の花　孟遠
くはら〳〵と猫のあがるやむめの花　菊阿
鰐口の朝觀音や初ざくら　越闌

木導子が櫻の四句

指折のこれや家中の初櫻　菊阿
のんでほめ喰ては譽る櫻かな　孟遠
馬乘にしづかにたのむ櫻がり　汶村
吉野より酒屋はちかし山ざくら　魚珞

澁風呂の見まひは來たり山櫻　孟遠

蓮生も山刀すて谷ややま櫻　越闌

波の日やむかひ近江の山ざくら　孟遠

やすめ田の水にうつるや山ざくら　紀達

武士の身は鑓で見に行櫻かな　桑門 千峯

久堅の日光椀や藪ざくら　紀達

木導が櫻は、よしの丶口の花さ盛をひさしくし、口が山の五老井の櫻は、都高臺寺の櫻さ時節をたがえず、折よせて病床にながむ。

五六年見ぬ間に老ぬ兒櫻　菊阿

山里にわらびは早し遲ざくら　曰良

北向のつぼねも待や遲ざくら　匊水

わるかねの上にしだる丶柳かな　菊阿

飯去來

宿がえの舟をさしこむ柳かな　魚珞

瘤だちし師走をぬけて柳哉　紀達

かけ迄をやなぎにやれば柳かな　越闌

門松の上ゆたかなるやなぎ哉　曰良

百姓のそろ〳〵うごくやなぎ哉　孟遠

質の舟うけてはつなぐ柳かな　凸迦

片づりになる川欠のやなぎかな　呂曇

寺町はまだ洛中のやなぎ哉　越闌

老僧のかはゆがられし柳かな　孟遠

くつさめの顏はづかしき柳哉　木導

醴に散かゝりけり桃の花　菊阿

毛むくだつ末座の雛や桃の花　越闌

出替りの口紅粉あかし桃の花　治天

物中に女子の出たりもゝのはな　紀達

下機の布苔の中やもゝのはな　曰良

佐樂の壺屋がからや桃の花　木導

うらのすく一側まちや桃のはな　孟遠

糞船をあげから押やもゝの花　凸迦

梅ちりて嫁が姑や桃のはな　千峯

ふごの子の中へ散こむ桃の花　張會

鐵砲のしぶ〳〵ちるや桃のはな　越闌

舌打にア、春なれや蕗の薹(トウ)　菊阿

蕗ま醬に白箸出すや京みやげ　木導

ふきみそは甘からぬとや尼が庵　西亡入 有近

蕗さがす掃溜藪や高あしだ　紀達

苗代や麻がら冴て水かゞみ　小林 圯鶴

柄杓でくむ井戸の流や杜若　汶村

さかさまにぜひとも持やかきつばた　冶天

つるべ上げぶらりと提てかきつばた　魚珞

尼寺や芥子の散こむ日なた水　越闌

けし咲ば一夜寐にけり金(コガネ)むし　曰良

川上(ゲ)て碇(イカリ)を干や百合の花　舎番

頼(ライ)豪(ガウ)も竹の子につく哀なり　菊阿

笋や小口なれど寺二本　越闌

たけの子の鋲(ビヤウ)のところに弱りけり　菊阿

竹の子や折てさいたる猿の腰　紀達

京口や雲の粟田の茶筌むき　越闌

のり懸に麥のあぶらやむかふ風　曰良

いり粉くふ付木の智惠や麥の杯　菊阿

煤掃の支度でつくや麥の秋　木導

相聟のやら九ら兵へや麥の秋　菊阿ヵ

口(クツ)籠(ゴ)の牛にまもらす夏のかな　越闌

おのがはむ馬草(まぐさ)をつけて夏野哉　菊阿

晝顏を見て來た貞や田草取　孟遠

筏士の見あげる松や藤のはな　菊阿

煮えて行辨當持や山つゝじ　越闌

中紅(モミ)にふまれて啼や木瓜の花　菊阿

菜の花や雨にきこゆる晝のかね　越闌

雪解る比良のなぐれや麥の風　内山 雲泥

雀子のすゞめがくれやさくら麻　越闌

うらやまし年のわかさの獨活(うど)ぎらひ　菊阿

肌ぬひで古茶かき出すや壺の庭　田札

つぼ干て奥山寺の茶は遲し　冶天

卯の花に卯の時あめのくもりかな　菊阿

花聟よ聟引出せん白牡丹　木導

春過て夏來にけらし白牡丹　菊阿

酒の家譜第にわけて牡丹ずき　孟遠

遲櫻くすり牡丹のさかり哉　菊阿
地子をもつ白芍薬や下やしき　吉白
芍薬や調合の間のあかり床　菊阿
駒鳥の格子になくやかきつばた　木導
供舟の小裾(ツマ)からげやかきつばた　越闌
夕皃や妾借屋の犬源氏　凸迦
夕がほや暖簾ごしの萌の蚊屋　孟遠
押あふて瓜くふかほや蚊屋の裾　菊阿
石づきで瓜直しけり道具持　木導
そら豆の京にいなかや雜穀めし　曰良
青梅をかつや女子の塗木履　木導
青みだつ水のあをさや夏木立　冶天
狼の子をはやしけり麻の中　菊阿
首ばかり哥をうたふや藻刈舟　越闌
鯉鮒の此世の池や蓮の花　菊阿
赤〳〵と殘る暑や死人ばな　孟遠
ひか〳〵と茄子にのこるあつさ哉　冶天
若やひて姑(しうと)の顏や烋なすび　張舎

鬼灯(ホウヅキ)の種にきはづく浴衣(ユカタ)かな　菊阿
朝顏の日を拜ますや土龍(ウゴロモチ)　紀達
蕣のはないろ着たり時行(ハヤリ)醫者　孟遠
初茸をはさみて燒や茶辨當　菊阿
茸狩や百石したるあがり口　紀達
松茸やあつたら鼻に愛宕山　菊阿
松だけの名を苔といふ國もあり　越闌
治れる代に松だけのきらひ哉　菊阿
きのふまで椿つなぎや蕈(キノコ)とり　舎番
茸狩に鳴る開帳の佛かな　冶天
山寺はきのこも干や菊のはな　孟遠
白湯(サユ)をのむ人なつかしやきくの花　菊阿
佛檀の隣の夜着やきくの花　越闌
折〳〵に日がねで見るや菊の花　隣遠
ほんと鳴る障子の蠅やきくの花　凸迦
茶わかして隣を呼や菊のはな　舎番
細なる細工のすきやきくの花　孟遠
ぬかみそに飽てやせるや菊の花　冶天

浮世には下戸の禁酒やきくの花　菊阿
竹瓦初しもさむし菊のはな　越闌
菊もはや霜につれたりやねの苔　汶村
はな紙で「鏍」ぬぐふや菊の露　湖鴎
尾花こぐ馬は誰かや西がしら　曰良
柄鮫の南蠻黍も尾花かな　菊阿
武蔵野の尾花の波や一たるみ　藤和
よろ長に瀧本流や女郎花　孟遠
天高し笹龍膽のたまり水　木導
から風に片頬さむき花野かな　菊阿
抱合す二子の栗や猿の顔　凸迦
毬ぐりを鎌でこぢわる山路哉　利方
柹もはや鎌で柿むく片田舎　隨子
ほつかりと柘榴の口や柹日和　凸迦
どん栗は鈍でたふとし奥山家　紀達
まびき菜にいれぬ人あり唐がらし　菊阿
番椒粉でもらひけり江戸みやげ　古白
あか〳〵と見るや京の唐辛子　越闌
唐人のはなしの出たる西瓜かな　紀達
世にすめば扣かれくらす西瓜哉　菊阿
奥方え目見にまいるする瓜かな　治天
相撲とりの腹の音するすいくは哉　越闌
身代のぶらりとさがる瓢かな　菊阿
冬瓜としきり雪隠のふくべ哉　越闌
針たての撫〳〵道入るふくべ哉　菊阿
雪隠へおちてさはがぬふくべ哉　治天
冬瓜や誰ならはしの細むすび　凍郊
新蕎麥の干かねる空や老の柹　越闌
新そばや花も實もあるこぎおとし　菊阿
蕎麥の花散るをも待ずこかれけり　曰良
新そばや種ほどとらぬ草の庵　菊阿
打あげる鱇の中のもみぢ哉　木導
口おしや奥の龍田は見ぬ紅葉　菊阿
大峯は祕密の山やみぬもみぢ　汶村
散紅葉箸で拾ふや多武の峰　孟遠
柹もはや岩に時雨て初もみぢ　菊阿

白雲にちりこむ峯の紅葉かな　越闌

漸脚半ふみわけ行や下もみぢ　木導

はり物に松の落葉の時雨かな　古白

手ざはりも紙子の音の落葉哉　菊阿

掻わけて芹つむ中の落葉かな　田札

名のしれぬ城の落葉や武者屯　孟遠

木の葉かき天狗ぐるみや愛宕山　越闌

茶の花の首から上や水仙花　菊阿

炭の手ですぐにいけるや水仙花　木導

寒菊や百万石も雪の底　菊阿

片道は日のくれになる枯野かな　木導

大佛の鐘を見わたす枯野かな　菊阿

衣のうら茨のかゝる枯野かな　汶村

酒のみて百姓もどるかれ野かな　菊阿

冬枯や小家がちなるはかり炭　越闌

第五　生類あつめ

うぐひすや御櫻に松楓　汶村

鶯や寺觀音になき不動　越闌

うぐひすや日あたりのよき淀堤　曰良

鶯に道で逢けり丹波越　菊阿

うぐひすや逢坂山の納豆汁　一曉

ふれ〳〵と伊駒ながめて啼蛙　孟遠

親なしかゲンケの花になく蛙　越闌

ぐひ〳〵と葭の子ぬけば鳴かはづ　舍番

菜の花や山吹顔になく蛙　菊阿

陽炎をたよりにのほる雲雀哉　木導

さかさまに落るひばりや悲想天　菊阿

中日を拜みかねたるひばり哉　孟遠

菜の花や色なる波に鳴雲雀　越闌

野火の中おとしかねてや鳴ひばり　紀達

子をつれて日見に出るや藪の雉子　菊阿

江戸なれてやつ谷の土手や雉子の聲　曰良

武藏野や山もおもはずきじのこゑ　越闌

矢を入る白河石やきじの聲　孟遠

江戸留主のくゞりを出る燕かな　汶村

傘をひらりとはづす燕かな　越闌

鳫魚と一度に來たるつばめ哉　治天
ちら／＼と雛を見に來る燕かな　閑近
町半(ナカ)や座頭をよけて飛つばめ　菊阿
笛木はな矢ぶくろとつてとぶつばめ　孟遠
やすみ行柄長の鋤や飛つばめ　紀達
燕や馬にわかれて長門馬場　張會
羽子板にまねいて見るや歸雁　木導
一つ着て身がるになるやかえる雁　孟遠
ざら／＼と舌のさゝけや猫の戀　木導
吉原のわかれに扣(たた)く水鷄哉　越蘭
新屋敷ふけてたゝくは水鷄かな　菊阿
刈いれて秣(マグサ)の中のほたるかな　孟遠
石山の石にもとまる螢かな　菊阿
辛崎の松でくらすや蟬の聲　治天
杖の間の逢坂山やせみの聲　菊阿
食の湯の煮える暑や蟬の聲　舍番
をし日和(ニヘ)に帆柱あつし蟬の聲　土橋 奇通
晝の蚊に線香さびし草の庵　汶村

蚊の聲や太皷櫓のくずれ口　菊阿
晝の蚊や机の下の手ならひ子　治天
笛吹の蚊にくはれけり口の端　菊阿
三(さん)の間(ま)の水の寒さや鮎なます　孟遠
茯苓に咲消れたるともしかな　菊阿
牛膝つけてや鹿の口のはた　木導
うつそりと月夜の鹿や芋畠　汶村
血をこぼす手負の鹿や薄原　菊阿
とろひ日になりて耳かく鹿の枝　孟遠
大阪に綿の舟漕く男鹿かな　越蘭
鵲の橋かけわたせ佐渡の雁　菊阿
品川の仕置場ひろし御代の雁　越蘭
白犬の腹をくゞるや江戸の雁　紀達
産(ウミ)月やけんがく延てかりの聲　孟遠
鶴(タチ)ばなれ戸(と)津(つ)坂(さか)下(もと)や孤(ヒトツ)雁　治天
鷹匠に箸やめさせて啼鶉　菊阿
水あびる砂のうづらや濱の聲　汶村
世を捨てば鶉ごろもよ長ゲン坊　菊阿

鷹なみに馬糞つかみもわたりけり　曰良
一のしに目白目黒やわたり鳥　越蘭
各務野や並木をつたふ渡り鳥　盤松
おし合て熟柿を落す目白哉　凍郊
毛見衆に付てわたるや小鳥共　菊阿
やね葺もやねでわめくや鵙の聲　紀達
百舌なくや臼の大工の村づたひ　冶天
朝寐しておやぢわめくや鵙の聲　古白
きり〳〵すなくや夜寒の芋俵　菊阿
奥筋は今にねこざやきり〳〵す　魚珞
燃えぬ火や竈馬のつまる火吹竹　冶天
虫の音の中をのぼるや高瀬舟　舎番
店かえてしばし這入るや蛇の穴
泥染や足引ずりて飛いなご　越蘭
わけ入るや田刈の顔にとぶ螽　凸迦
刈こきや螽のぬける籾とをし　凍郊
股引の威勢に戻る鷹野哉　菊阿
行灯に夜店の鷹や長ぎせる　汶村

挑灯にすかして見るや鷹の鳥　菊阿
小男のさし荷ふてや鷹の鶴　冶天
夕ぐれや井戸から出たる鶺鴒　菊阿
鶯のにらみの介やみそさゞる　木導
背木口や割木をくゞるみそさゞい　越蘭
八景を只一口のいさゝかな　曰良
海老はみな氷魚どしかゝる網代哉　菊阿
丁銀の握りごゝろや初生海鼠　越蘭
頓死して跡はたらずと鰒と汁　菊阿
初雪の消る所や河豚汁　冶天
金でする二十四孝や凝鮒　菊阿
風の吹芦の枯穂や鴛鴦の夢　古白
冬がれや蘭田をたづねてなく千鳥　孟遠
眞野堅田長者の代に啼鵆　紀達
日あらしに雪の粉吹や川千鳥　奇通
闇の夜や幾瀬戸こえて鳴鵆　越蘭
關の戸をさゝれて鳴や小夜千鳥　菊阿
夢なれや芦刈あとになく千鳥　一匊

第六　發降物の間

薹だちの日で見る人や朝霞　菊阿
陽炎や門より内はいし疊　越蘭
かげろふや今を出がけの茶辨當　菊阿
かげろふや樂くろめる通町　孟遠
掃溜にくらす烏や春の雨　菊阿
春雨や何やらかじる藁ねずみ　汶村
こつそりと降出す音や春の雨　木導
桑の芽や蠶紙卵わる春の雨　越蘭
踏なをす新木の弓やはるの雨　孟遠
しかもたる姑の顔やはるのあめ　凸迦
より飴のよりをもどすや春の雨　紀達
水の出る伊勢道中やはるの雨　冶天
春雨や身うけ待間のはしたがね　一曉
猫の毛やはかりと破て春の雨　菊阿
蜘の巣やひはりとうけて春の風　曰良
砂漉の水のわるさや五月雨　菊阿
舟ぎらひ本坂越やさつき雨　越蘭
わさ〱と人足宿や五月雨　木導
五月雨にやねのくさるや浮御堂　曰良
さみだれや茶うりながるゝ大井川　冶天
白雨や亭主と見えて鐵熊手　菊阿
夕だちに土器うりや急ぐらん　越蘭
白雨の瀧にうたすやそく飯板　孟遠
夕立の雲や曾根太郎曾根次郎　菊阿
眞ッ黒にくづやね葺や雪のみね　木導
馬場先を乘出す果や雪の嶺　菊阿
家〱に綿むく里やくものみね　越蘭

病中

雲の峰土用をこゆる鶴もなし　菊阿
六月の松の葉色やくもの峯　木導
雲の峯によつと出るやところてん　孟遠
竪町へ出たればあつし雲の嶺　曰良
帷子に似せて染るや夏の雲　菊阿
汁鍋に土用の雲や魚の腸　冶天
稻妻やはしり屆かぬ京の上　汶村

いなづまや近づき舟の行ちがひ　孟遠
稲妻の間や大佛の窓の顔　菊阿
かづらきやいなづまに見ん神の貞　越蘭
ひぞりたる關所の棒や秋の風　木導
西瓜と尻をはねるや秋の風　菊阿
耳穴に粃の　やあきの風　凸迦
板ぶきに透とをる日や烁の風　孟遠
辻君もうれぬ野分のあした哉　菊阿
鞠網の目にもたまらぬ野分哉　越蘭
暴風して鍋取公家のそこねけり　孟遠
のはきして蚊の聲もなし日本國　紀逹
ぬれわたる鶴の背中や初時雨　菊阿
荒鷹の手ぶるひしたり初時雨　越蘭
月のうへ雲のはしるや初しぐれ　冶天
初時雨馬もなづむや鈴のをと　（西モ人）信道
門番の膝にかゝるや北しぐれ　木導
市に立箕うりは笠の時雨哉　紀逹
上京をはづゝてとをるしぐれかな　曰良

牛が來てしるうなるほど時雨けり　菊阿
よい綺羅で出たる所をしぐれけり　孟遠
すさの出る塀すらにしぐれ哉　越蘭
あと舟は大津見かけて時雨かな　仄哉
白馬に塩つけ込ばしぐれ哉　與川
海原や横から佐渡の北時雨　冶天
店さきや時雨ておろす御藏米　利万
背負たる火燵疊にしぐれ哉　田札
木がらしや吹かためたる峯の雲　木導
風や冬米搗の丸はだか　菊阿
こがらしや鳴渡の果は熊野浦　孟遠
木枯に石の仁王の芝おもて　越闌
凩や胸をつき出す高瀬ぶね　一和
糊米や水すみかねて初ごほり　菊阿
鷺たつや芹の中から水けぶり　（見）化兒
張たての傘はしる霰かな　曰良
猫もいぬ枯竹藪のあられ哉　信道
肩ぎぬのひだにはしるや玉霰　越闌

貧乏な耳にたまらぬ雹かな　菊阿
白川や牛の尿つく橋の霜　紀達
醉ざめの下戸口おしきしも夜哉　越闌
帶とひて寐たれば氷る霜夜哉　菊阿
跡合て腮を踏るゝしも夜哉　舎番
建付のびしやりと響く霜夜かな　孟遠
乞食の犬抱て寐るしも夜哉　菊阿

第七　神佛のうはさ

初午や涅槃をにぎる東福寺　菊阿
初むまや阿闌陀人の都いり　紀達
雲なしに天人まいる涅槃哉　曰良
鮟鱇を人のとりまくねはん哉　木導
上をろし帆のあしらひや涅槃像　孟遠
新寺ややけ殘たるねはん像　紀達
涅槃會に參るや京の靈聖女　越闌
木佛は殊勝過たりねはん像　菊阿
めづらしき人に逢たる彼岸哉　古白
によき〱と尼も土筆も彼岸哉　菊阿
くちなはも嶋襦子したるひがんかな　越闌
菅笠に筑摩祭はなりにけり　菊阿
肩ぐまに麥の波こぐまつり哉　越闌
何わたり太閤樣のつくり髭　菊阿
木のぼりの木の葉をゆぶる祭哉　木導
太皷たゝく聾の神の祭かな　菊阿
饅頭も人に蒸さるゝまつりかな　孟遠
灌佛や取あげ婆〻の御念佛　菊阿
灌佛や乞食子をうむ寺の門　治天
七段の外を乘けり足ぞろえ　菊阿
眞桑瓜御輿あらひのついで哉　曰良
こぼれ物腹にかゝえて御祓かな　菊阿
峯入や頭巾で斗る二合半　魚珞
みね入は夜るも頭巾や草まくら　越闌
法のたね菜を蒔なをす彼岸かな　凸迦
澁柿を箕ではかりたる彼岸哉　治天
御遷宮過て大工の夜は永し　菊阿
風外の達摩も出たる五月かな　紀達

達摩忌や一榮西に二道元　菊阿
鎌倉は牢の中まで御命講哉　汶村
こんにやくに箔のつきたる御命講かな　菊阿
着かざりて取あけ婆々の御命講哉　越闌
御城から女中のさがる御命講哉　菊阿
聾(ツンボウ)の婆々にすゝめや御命講　冶天
行違ふ袖のみかんや御めいかう　田札
長珠數を手にとらるゝ御命講哉　曰良
一番に西陣遊ぶ御命講かな　一匊
獨潭(ドクタン)は阿(ア)彌(ミ)陀(ド)佛(ッ)にて十夜かな　菊阿
柴うりも牛にひかれて十夜哉　舍番
海道え袖みその匂ふ十夜かな　一匊
ころも屋の十夜まいりや夫婦づれ　孟遠
とうふ屋へ夜から起て十夜かな　冶天
三井寺や貧乏神の神無月　菊阿
十月や禰宜は麥蒔神の留主　紀達
粥腹で年取蝿や大師講　曰良
平太郎も佛の名也おと(取)りこ(む)し　菊阿

御佛事や編綴(ヘンテツ)つれの朝がらす　越闌
とうふ屋にでんがくたのむ冬夜哉　菊阿
罪になる箔屋のかどや鉢たゝき　孟遠
辻〳〵や丑嫁すゝめて鉢扣　菊阿
牛若に逢て逃けりはち敲(キ)　越闌
聖一は片目で悟る八日かな　菊阿
臘八や火傷(ヤケド)につかむ耳の鈥　木導
臘八や汁のあまりの羅漢達　孟遠

第八　仁物之態こと

正月やつんと打出す日のはじめ　木導
あざ天下伏見の春や御博奕　越闌
疱瘡(いも)したる顔をならべてかるた哉　汶村
薬子や先ッ一番に筆はじめ　李由
かき初やまづ一ばんに鰹ぶし　曰良
書初やむかしも義之が團扇賣　(亡人)如元翁
高砂に又ひくさごや謡ぞめ　菊阿
新宅や建具に響くうたひ初　冶天
乘初に下手のあたるや門の松　木導

うり初にいはふ詞や尾張百　馬佛
万歳につかえぬほどや大かざり　張會
萬歳や鼻の下なる柄ばらひ　程己
万歳の烏帽子に似るやひしの餅　如元
御遊山のおかしやそれに舟遊山　古白
野あそびやまだ樂介で夏ふどし　冶天
二の宮の姉の節句や雛あそび　菊阿
西行は笠でさはがしひなあそび　越闌
秘藏子のてらのむすめや雛遊び　孟遠
臭かひで髪をゆふ子やひな遊び　菊阿
邪魔になる乳母のらく寐や雛遊び　冶天
ふり袖は常盤腹なり鷄あはせ　菊阿
出替や城になじまぬ姫路衆　孟遠
出かはりや馬の粥かふ御乳の人　菊阿
出かはりや笈さがされて門ン切手　木導
出かはりやいさかひたらぬ古傍輩　菊阿
出替や澤山他屋の京の客　越闌
出かはりや繪圖に合する妾(おもひ)もの　紀達
出かはりや給仕しまふていとま乞　菊阿
半日は汁のきほひや茶摘うた　日良
れき〳〵の小町のはてや茶つみ哥　菊阿
さがなしや野口山口茶つみうた　凸迦
茶刀に菅笠すげる茶摘かな　木導
菅笠で雉子をふせたる茶摘哉　紀達
出女も只の顏にて茶摘かな　越闌
人もみな皮をぬぎたる茶つみ哉　孟遠
合羽籠出して家中の茶つみかな　冶天
日藥も得さゝぬ賤が蠶飼かな　菊阿
鉄拐(テツカイ)が口から出すやいかのぼり　木導
世の中の親たぐりたや紙鳶　越闌
經緒(ヘヲ)つけて纖尾の鷹やいかのぼり　菊阿
琉球は三味線ひいて田植かな　日良
觀音に尻つきむけて田植哉　菊阿
臺所青みだつたるちまきかな　孟遠
繩むすび女子の習ふ粽かな　越闌
たちさはぐ粽の中やはなれ馬　菊阿

笋の番してしたるうちはかな　木導

和尙から買てとらする團扇うり　菊阿

赤土で落書するやうちは賣　木導

白蛇のなまごろしなるうどん哉　孟遠

五月闇蓑に火のつく鵜舟かな　菊阿

精進上ゲ

長髪を剃れば涼しき鱠かな　孟遠

いかにねる客をしまふて涼かな　紀達

藪入にもどつて京のおどり哉　菊阿

一繩手御油赤坂の踊かな　孟遠

三男の三郎出たり無理ずまふ　菊阿

片頰にやき米入れて相撲かな　木導

蒜が出ればしてやるすまひ哉　越闌

大名の獻立にのるすまふかな　孟遠

坊主子に夜を寐ぬ尼の砧哉　菊阿

柿ひとつ袖からこかすきぬた哉　木導

祐成を片手うちなる砧かな　孟遠

稻うちやめいわくそうな臼の形　利万

盜人のぬすむ沙汰あり大根引　菊阿

ほめらるゝ御門〳〵や大根引　越闌

先供の羽織よごすや大根引　孟遠

嫁入の道具のあとや大根引　張會

强力を召す山伏の大根引　木導

木曾山や杣の手つだふ大根引　藤和

榾の火は三代五代にゆづるとかや、わが祖父は越後の國の產也。

なつかしき先祖の榾や越後もの　菊阿

雪國や榾たく殿の大廣間　孟遠

請出して女房下地やくすり喰　越闌

紙子着て膝に姿のなみだかな　曰良

半銅の飛火をたゝく紙子かな　孟遠

禍物を出かねる醫者のかみ子哉　治天

見せ馬を出て見る武士の紙子かな　利万

闇の夜に人行違ふかみ子かな　呉川

拜領の雁にぬぎたる頭巾哉　不塢

頭巾着て殿をまねるやお煤掃　孟遠

奥方へ態の泥障(あふり)や煤はらひ　越闌
内井戸へ落るや煤の大さはぎ　紀達
煤掃や悪魔外道(げだう)も逃て出る　菊阿
すゝはきもなし大佛の鼻の穴　木導
節季候のもやうを見ばや江戸鏡　菊阿
節季候の辻で出あふや四人づれ　木導
のし餅のうへにいざ寐て年とらん　菊阿
うしろから茶釜汲なりもちの隙　李山
餅つきや犬の見上る杵の先　吳竹

第九　紀行のおしえ

五月雨にかゝるや木曾の半駄賃　菊阿
晝中も月夜が原や蕎麥の花　呂曇
短夜や手變(テヘン)に殘る富士の雲　菊阿
公家衆から嫁入の旅や不二の雪　孟遠
八橋(やつはし)や田ばかりありて啼蛙　菊阿
五月雨やまだいくとまり遠江　孟遠
雨夜泊
楊梅(やまもゝ)や千躰佛のあたま數　越闌
粟田口獄門もなし秌の風　孟遠

さびしさや晝も蚊の出る小柴垣　越闌
廣澤や四角な池に菱の花　仝
奈良にて
痒(カユガリ)に背をする鹿や大花表(トリヰ)　仝
大和路はみな奈良茶也花ざかり　菊阿
同
菜の花の中に城あり郡山　仝
同　法隆寺
舎利の手を開くがごとし初蕨　仝
龍田
御利生(ごりしやう)も口は青葉や奥紅葉　孟遠
菜の花はみなうこん也初瀬寺　菊阿
秌風や横から這入る初瀬でら　孟遠
まつ白に佐野のわたりや蕎麥の暮　仝
高取に雉子のかよふや多武の峯　菊阿
吉野三句
暖に花のふすまや吉野山　仝
唐の花ながれて來るや吉野川　仝
とく〳〵と解て落るや凍(イテ)清水　仝
元輔(もとすけ)が花舟くだすよしの川　孟遠
當麻
蛇の皮ぬけてかけたる櫻かな　菊阿
鶯の高間に越すや竹の内　孟遠
大和路を出れば山吹盛にて　菊阿

住吉奉納
月花にかなしき下手の蛙哉　仝

大坂古戰場
首共は二たびはえず春の草　仝

有馬紙すく山口やむらもみぢ　孟遠

春風や湯女の笹原わけて寐ん　菊阿

くもりなき砂の月夜や須磨明石　仝

福原
短夜や夢の覺たる內普請　孟遠

横それ
河舟を追ぬく夏の夜明哉　曰良

足ながの二見の浦や垢離涼み　仝

鱗の名もかつほ木や外宮內宮　仝

蜂の巣の末社の數や宮めぐり　紀遠

中乘のあらめの馬や伊勢の旅　仝

いせ
ひれふすや又うへもなき鶯の聲　治天

岩戸から白〳〵見るや富士の雪　仝

柄ですくふ麥粉の旅や澁團扇　越闌

七月は寐させぬ旅のおどり哉　越闌

留別
まびかれて麻にわかるゝ蓬哉　吳竹

うしろから近江の風や鈴鹿山　仝

さく旅出んさ、いひふくめたるに、
夜のあけゝれば
朝顔のあさまになりて旅出哉　延珍

第十　雜題讃物の格

花平重く風鈴
風鈴に秋風きくや歐陽子　菊阿

大石内藏之介が硯を持ける人より
發句所望の時
世を計石さえあるを稲びかり　仝

千地内寒月
大龜の耳穴寒し洞の月　菊阿

始の裏中に春なむかふ。
元日や板倉殿も御命日　仝

書讃
粟刈れば野菊が下に啼鶉　仝

富士の書讃
初雪や薩田をこえる鈴の聲　汶村

同
帆をあげて伊豆の御崎や渡る雁　孟遠

書讃
篠ためて雀弓はる笹の雪　菊阿

同
枝ぶりの日に〳〵かはる芙蓉哉　翁

同
秋海棠西瓜の色に咲にけり　仝

借錢涅槃經

汶村

北方に佳人あり。南無俳諧未來經を說ク。高キものは危く、作あるものはつきるといへり。又西方の佛有、菊阿佛と名づく。われ問レ之、答曰、かれ昔は俳諧に遊び、中比俳諧墮落して、今ははいかいを喰故に世を諂もの也。溫なる縕-袍を脫ぎて、乞食修行に出たらん時、始て此埒は明キぬべし。此人靈鷲の說法聞ちらし、借錢涅槃の後、獨上手と亢ゆへ才覺分別賢て、敎外別傳を說事多し。師の曰、危き所に居て仕損ずべしといへり。洛の信德はよくすれども

〽すさましや女子のめがね年のくれ

と憶成事をば云也。されば上手の位にのぼらず共いへり。作はいづれと云も心得がたし。昔より詩歌・連俳を一字に註する時、作の一字には極りたり。其詩歌・連俳を好人を作者共云。此比の御作意を聞たし共問フ。句作り共いひ、又不作共いふ。師一生作を好めり。作はつくらずといふ事をきかず。まして書置る物にも見えず。敎外別傳の一ッ也。蚓、佛に歎て曰、此土くひ盡したらん時、何をか喰んといへるに似たり。つきぬといふ彼は、今日たち所につきて、つれ〳〵讀に乘替、つきると云菊阿は涅槃經てつきず。又むかし、

〽砂に麥まく松の冬枯

と云句より、

〽組討に骨折せたる膝頭

といふ句を付たる事を、未來經に論ぜり。又其比の支道にも不實・おどけの句也といへり。陳じて曰、おどけ不實と云も心得がたし。歌道の虛實はうそなきを實と取り、たとひおかしくても虛なるをば、不實とも花の過たるとも云。組付の膝頭何の僞かあらん。討るゝものも、討ものも一生の骨折は、只膝頭には極り侍る。膝頭の二字前句に對して益なしと云る。さらに心得がたし。前句田畑に麥蒔は常にして古し。砂地の麥のさびかへりたる寒さを、一句の新みと見付たれば、砂の一字此句の眼也。砂をのけて陣の組討、憶に付く共思はず。此句陣よし、陣ならば組討よし、組討ならば膝頭よしと、魂にすえて案

じたる也。彼ノ此句に、

〽組付の靑を歎く道心者

と付て、枯の字に歎といふあたり本情に背かずと、例の自賛に書侍れど、砂のあたりは何をか付侍ると問たし。枯は冬のむすびにして、捨てもくるしからず。砂の一字は大切にして重し。彼は付る事を專にして、一句の古き事を旦(曾)て知らず。組付の蓮生法師は、扆(負)子抱子も聞古し六百年以前の古ノ口也。組付の膝頭は彥根風のこなしと難じ侍れど、門下壹人もこなしをする人なし。是が面白くて彥根の俳諧にはする也。先師敎て曰、陣の句・禁中沙汰の句は必ずこなしてすべし。こなさねば全く古手に落るといへり。我これをよく聞うけて、こなしをする事得もの也。ある集に前句はわすれたり、

〽めつたに星の光る

と云句作りとは覺たり。此次坊ッの句に當れり。予に問、予が曰、これには陣を付たるがよし。陣は船軍よしといへば、例のこなしをたのみける時、

〽草摺わけて舟の小便

と申侍れば、大きにうなづき合點はしたり。其後伊勢の涼莵來ッて此句の事をいへり。東花坊が一生の秀逸とほめける時、是は予が代句なりと白狀しければ、だまされたりと大笑したり。こなしの句よしとおもへばこそ、わが代句には望たれ。大かた是にて御推量あるべし。此未來經の題號の古き事、聖德太子より事起りて、しかも俳諧御經の題號にあらず。未來ばかりにて人合點せざる故に、俳諧の二字を敬せり。是不作ものゝ付る御嘉例也。此借錢涅槃經のはいかいは、釋尊の尊のサシスセソのセンの字にかえて、一字の師を說キ侍る、汶子又問曰、上手と云は誰をかいふ。答曰、家路の遠きものを上手とするべし。俳諧會有て百韵みてり。連衆わかれ〳〵に歸る時、其家の門口を出ると亭主をそしり、其次に別るゝ人を嘲り、段々〳〵誹りて、後には家路の遠き人誹るものなければ、一人上手にはなりて歸る。たとえば碁をかこむ人、持碁に打なしける時、端より何れが勝ぞと問侍れば、是は見物の扆(負)也といひ、川向ひの喧嘩は兩方が勝也と、どつと笑てしまひけり。

寐釋迦御免銘

佛臥スコトㇾ病ニ已六年、ついに一日も不ㇾ起ヤ。人みな菊阿は寢る物と覺ゆ。もし頭を擧る時は、無禮者とや人いはむ。されば畜生の横なるものも、竿立に立つ時は是を曲馬といふ。世に坐像・立像の佛は常住あれど、涅槃の寐佛に人崩れするは、ねたる所こそ有難くや有けむ。

牛馬も涅槃の眞似の佛かな

京寺町二條上ル町
野田彌兵衛板

二葉集

惟然撰

のうごくともとにあれば、さらに今二えう集となむ。

雲出河　笑〻翁

によつとしたる草木も、あるは種、あるは地によりけん。その萌芽にすら百千のとしをあらはすものか。芳野ははなにうごき、奈良はさらし(晒布)にうごく。たつ田はもみぢにうごきつゝ、こはた(木幡)はくちなしにうごくなる。宇治は茶にうごき、高砂は松にうごきつ。丹波はたばこにうごくとこそ。いせは椿にうごき、志賀はあれ(荒)たれどさくら(櫻)にうごいて、伊丹は酒にうごくものならん。土佐やくまの(熊野)や木曾のながれは材木にうごきながら、醐醍・きよみづ(清水)・さが(嵯峨)・祇園、これみなはる(春)にうごくものならし。仲尼は儒にうごき、老莊は道虚にうごきける。その外賢たるもの文にうごいて、張良・彭越も計にうごき、みなよくうごくとかや。扶桑は和哥にうごき、式部は源氏にうごきつる。清少納言も草紙にうごくのたぐひ、官女みなものがたり(物語)にうごきてん。義經・正成も武にうごき、空也は念佛にうごき、とらは色にうごくにぞ。これなを世にうごくものなれば、いま烏落人もこのみちにうごき、散人風草子も湖南にうごくものから、初學成長、模は別にして、様はおなじう。そ

二葉集

春

年内の立春侍し除夜に

わするゝな日／＼に福はうち鬼はそと　吉備樵夫

さしの朝の句に

鶯のほう法花經や今朝の聲　淡水子

うぐひすに心とらるゝあさごんめ　錦江

鶯もそょつてそこの花ふむな　露堂

うぐひすや年を申さばどなたにも　遅望

おほくの山／＼をこへながら、伊達桑折に出るさいふ詞書ありて

うぐひすが山はなるれば各別な　出羽山形 風仙

落つかぬ鶯かして鶯の　東海

鶯の終になかぬがあれを聞きや　除風

うぐひすをすかぬ氣からはどうあろと　ハリマ龍野 元上

鶯や今朝の力に起あがり　備中クラシキ 可鄉

うぐひすにちょつ／＼さいらぬさしで口　坡三

無名庵の草の戸をひらけば、晝靜なり。

梅にとへ晝盗人の去んだあと　浪花

梅一重たゞ何となく手のつかず　ミノ 低耳

吹かぜも心ありげなむめのはな　智月

初會十二日に

今日ぞけふ梅の坐禪のおもしろさ　キソツカ 方舟

それはそれそこらの梅のほんの／＼　柳門

梅の花何とおもやるすつぺりと　釣壺

閑居のこゝろを

竹といへば痩藪梅は老木かな　倘白

壁からぞ投出す梅のをのが形　母風

むづかしい輪を飛ぬけた梅の花　作州久世 山重

梅が香や向合に寺の門　クラシキ 稚志

むめの花白を見さひあかひのも　箋里

梅花遠薫

梅が香を小袖にちつととめたいぞ　ハリマ的形 吟女

足軽の宿や水ゆく梅の花　ヲカヤマ 知義

行路梅

これは〱どちへゆかふぞ梅の花　久世 林雪

野の梅は方量もなうにほふつら　ヒメヂ 良々

窮屈をこらえぬ筈かこぼれ梅　久世 遅候

抱つかふとは梅の木のうつろひを　ヒメヂ 冬月

梅の花にまたれつ白分立ふかる　雲鹿

たとへば牛に馬、火に水媒せんに
かなふべきやいなや。

からびたる寐ごとや梅にあゝまれ　元灌

霞はどこをどうまよふかの　惟然

雛祭る彼是など〻有事で　千山

さしてもないにきやつきや〱ア　多幸

月影のたれやらほんに似たはいの　定當

それ〱〱よ松たけ(竹)かそれ　元用

自慢するは死、たらざるとおもふ
は生。雲はみな拂はてたる秋風に
松にのこして月を見るかな

あそこらの柳も今はあたゝかう　柯上

ずらりずう柳は風に吹れても　車庸

しばしとてこそたちどまりつれ

つゞいたぞ柳五町か六町か　作州濱嶋 貞義

あれちら、せ上野〻梅に猫のこゑ　厚風

あたまからないて見せけり猫の戀　クラシキ 枳邑

土手に添ふてまがれば藪の椿哉　岡山 知香

春もなうまだ二三日寒かろう　出羽ツルガヲカ 胡冬

此水がちつと流れば白魚は　ヒメヂ 燕州

のんとりとどふやら春の海の色　如牛

湖上

わたつたか霞も山のとぎれから　如好

のし込や霞の中へありや舟が　箕里

二ツ三ツ霞に舟がちよつ〱ちよ　ヒメヂ 梅高

かすんでぞ名のみうつろの松なれど　志吟

松山八正寺へ鬼追を見に行て

松原の鬼を追ちらかすみかな　浮佛軒葉紳 六兵衛

松杉もうらゝ眠らば石をうて　風仙

芝燒や出てわめきをるあの所　乙艸

蕉翁の塚に詣でゝ

苔にいま蛙ののぼるあしだから　チクゴ 湛鷗

わか艸の中に何やら鳥がいの　的形擧桃妾 つね女

春の野や三人よればものになる　イタミ 素白

たんぽゝのあそこやこゝにさつてもな　ヒメヂ 至樂

土筆ぬつと出たので久かたぞ　里零

一盃　又一盃

たれか又とりのこいたぞつぼ菫　クゼ 廿石

野も山も皆青やいた餅つかう　キソヅカ 泥山

野はさらに葛根の空や雉子の聲　筑前鞍田 季翠

風になを眠りねぶるか萱時分　備中ヤカゲ 一甫

さりとてはくく降春の雨　作州クゼ 且流

野ゝ野ゝの菜種の花に浮たゝん　厚風

ちよつくと居る所替る小蝶ども　ヒメヂ 定當

菜畑の日和に蝶がさあ浮は　ハリマ西治 風聲

金屏の裏をめぐるや村つばめ

是は貴人の句なるよしきこえ侍る。作者の名はしらずなむ。

ひだるかろかつばめ一日かけまはる　風草子

きのふけふの空を隨分啼雲雀　千山

おちざまはかぜにかたぶく雲雀哉　イタミ 沖見

美濃木因探ニ支考之笈一以ニ名櫻山伏一予亦聞ニ惟然之頌一以爲ニ絶倒一云

是がかの雲雀つゝもの風呂敷か　元灌

青柳のふはつく中に桃きつと　ヒメヂ 多幸

誰そ出や相撲取氣でもゝの花　同 梅嵐

やれそこなひいなにはぢよみつちや顏　簔里

山吹のあゝ黄なるかなく　氷花

山吹や麥の穂なども出そろうた　常女

奈良にて

先以一重櫻に朝茶かな　如行

目が行はまばゆふてゆふて花曇　イタミ 知牛

嶋原といふ所に行人に口號て

いつ死のもしれぬと花に小盃　簔里

泥染のこむな此手で花にとは　ヒメヂ 雪柯

この花にをれじやとてまた行いでは　ヒメヂ 柳雫

どこぞでは何ッのいでくよし野ゝを　ハリマ的形 擧桃

こちとらも駕籠でやる茶も花は花　芳船

花時心不靜

明日の日のないでなけれど先花が　雙里
どつさくさ花の盛よさればなを　（久世）遲川
乞食にかはるも淸し花の山　（作州田原）露紅
べつたりとやれめづらしう花の中　行三
狂人にまだ成かねて山ざくら　三惟
どさくさのまぎれに花を折てせう　（キソヅカ）鳥五

南化庵のあるじ除風にむかひて

夜着ながら腹で見あげむ峯の花　雙里
雨の花庭にごましほふつたりな　（大ツ）草士

空言によする戀

その答で增位へかける花なれば　千山
吹や風芳野ゝはなを今爰で　之房
さら〳〵とこぼれたまゝぞ花なれば　（大阪）そめ
花にそも腹が立ふか寐起でも　サリ
ひよい〳〵と花にあかれつけふも又　（作州落合）忠女
念佛にぞ花の扉のちらりほら　義孝

おろしをく天目籠や寺の花　（岡山）知鴻

花見席

そんならば花に蛙の笑ひ顏　智月
落つくやうな雲も陽炎　柯上
覺へたい事ども多ふ春くれて　方舟
所ならひの風のりつぱさ　惟然
夵籠に腰かけながら月ながら　遲望
くわつと薄も見ゆるしんなり　船彥
參詣もなければ秋の水もまた　昌房
案じらるゝは今度目の首尾　也風
されぼいの年寄くさふつくれども　乙州
宿から宿のどつさくさたゞ　泥山
ほとゝぎす聞人御座らふ此うちぞ　山路
何ぞのかけやら酒をいつでも　松賀
ふら〳〵と植てぞ松も小百年　錦江
應〳〵なれば中もたがはず　月

象潟のこゝらで月の今宵とは　上
つまみ菜すこし是もしるじか　舟
不屈のそなたさりとは漸寒う　然
あつたら水の海へ流れつ　望
身躰はどうをどうともかうじやとも　彦
下略之

廣ふても廣かれ世界花にやれ　良々

よし野山にかゝる麓のはなは葉になり、河は氣色をのこす。

散か〳〵咲あり花の花の奥　元灌

西行の菴に入

浮世をば散しつ花の苔清水　元灌
花ちりて風のちからも拔たりな　冬年

湖上落花

うつ波に花のよするは寄るはの　除風
長閑さはひよつと出るからはいるから　芳船

今朝は先火燵ふさいで中〳〵の　千山
春の空あてどもなしにふらり〳〵　孤峰
鶺鴒の是さへをのが玉子かな　作州杜 蜘蛛

あたり見むささそひつゝ

永たらしい日を長柄にて入相か　大坂 猪同
鹿もまだ朧氣ながらふくろ角　二信
あたゝかな泥もどろ〳〵なれよ　諷竹

夏

花の種たねとなりてやまた花の　高世
實をすうと吹に櫻はぬけ〳〵と　雪柯
葉櫻に氣づかひもなう釣がねの　擧桃

伊賀の上野に入

四手の花まて〳〵あはせぬぎかけん　元灌
しら雲のなでゝ通るや夏木だち　備中井原 里蝶
夏木立かたまつて居て又涼し　兀峯
暮て行茂りに鳴は何ンである　ヒメヂ 梅嵐

一折

此さきは何ゝであらふぞ夏木立　備中井原　正興
あのやうに只月すゞしかれ　惟然
そこもとの替た事とせり付て　、
ぼん(盆)どおろ(燈籠)より細工ほつ／＼　興
温泉は山の中から涌て來る　、
雨はら／＼かさら／＼とまた　然
延(のべ)すまひとにかくかるふ杖で出ふ　、
火をかきたてむ油へつた(蔦)の　興
とろ／＼は臼のおとやら何ゝじやら　、
そもさとりとはかうさだめたり　然
見て通る松よ流よ月よ雲　、
さあ秋風が烌かぜがさあ　興
五器ふけばはやすゞむしの思はるゝ　、
我が居る所は福嶋の先　然
終夜(よもすがら)いふた事みなうそでない　、
どうでも是は薪(マキ)がふすぶる　興
花／＼散と盛はいつの比　、
遊びはじめの若菜なるべし　然

禁裏を拜し奉るに侍りて

橘も鈴もしら／＼この夜明　盾(ヒメヂ)山

ほたんといふを
句の上に置て

ほつとりとたみにはおしきむすめの子　つね女
蜘の子の雨をいやがる住居かな　枳邑
はつ花はほめて喰けり茄子汁　作州落合　浮水

ある人にさはれて

見やれ見や茄子のをうたのやうなもの　冬月
卯のはなにちらりとはゝあ裸身で　千山
うの花にくだくか杉のかんこ鳥　擬(ヒメヂ)艸
切畠の松の雫やかんこどり　蓑里
かんこ鳥あるじはいづこ戸の細目　千之

書寫山にて

寐よふなら山寺でこそかんこ鳥　至樂

閑んこ鳥たゞ山里のさびやうなら　ハリマ亡人　前陸

此句舉牲がしたしみふふの哀なれば爰に書うつすべきのよし傳へはべる。

もうちつとすぺつたらとぞ杜若　正興

杜若車軸中でもすんとやる　ハリマヨコウチ　若水

義仲寺にて

杜若蛙がよつてぶつくさと　高世

船頭は何ッとおもふぞ行々子ぎやう〳〵し　備中サヽカ　一藤

湖南人、西國に行わかる。

宿〳〵をかり寐の麥ぞはしかかろ　冬月

青梅や花の咲たもちかひころ　タツノ　春山

道は水のながるゝがごく、ものごあらそはざれば、おのづから爰もあからむ時あればなり。只濇龍なもちゆる事なかれと、涙々士秀峯のもさにおくる。

をのづからをのづからこそ雲の峰　惟然

五月闇どこへとり付夢のはし　除風

布流亭にて

若竹の風さら〳〵と句よ月よ　千山

わか竹のねよふよ起ふよ身一分　露堂

五月雨もいかに蛙の高しそ　青楮

三の輪はきよくきよきぞから衣さるさおもふなくるさ思はじ

五月雨の晴間ならねど鉢坊主　一市

さみだれのもろうそもろよそりやうしろ　知義

五月雨のやれ〳〵傘ぞむかひ迄　孤州

神鳴は入梅をわするゝそれからよ　作州高山　花泥

雨ならば寐よふぞどれも田植時　備中今市　一盃

早乙女やかゝぬ所をつるかいた　知義

鳥が啼は、もいの往さおしやる。

ほとゝぎす虚言らしう夜の明けるぞ　乙州

此まゝでなんのおかうぞほとゝぎす　芙雀

ほとゝぎす鳴たりや腹がへつてきた　車庸

程遠う來たとの事か郭公　舍羅

鳥落人にむかふ。

云ふはづか我等が分に時鳥　作州三坂　山鹿

ほとゝぎす子飼あるなら飼ふもの　岡山 山頂
泥足もはづかしうこそほとゝぎす　作州久世 口黄
時鳥むらむらさきのかきつばた　義孝
寐ぬがそん(損)とはいひながらほとゝぎす　キビ 高吉
時鳥もふ床入をはじめうか　赤穂 紅龍
寐られぬぞ風に蛍も吹かるゝか　備中矢懸 荻雪

さがの大井川にて

もちつとの所ぞぬれうほたるなら　千山
心からふたつ蛍もふたつ飛　雲洞
喰はねどもほたるにたよる坊主なりや　廿石

文の奥に

みじか夜やまたの御けんもちかふなる　タツノ つや女
そうしたことを戀の風蘭　野男

わらぢ解里は鴨方さなん、その家
あたらしう三つば四つ葉になど

覺ふぞ十七日の夏の月　惟然
にほひ匂ふか忍冬の花　備中鴨方 行流
さは／＼と麥を付たる馬飛んで　同 國久

湖南人に別る

夏菊やまた來る年を侍ぞのふ　伯州米子 安貞
晝良よそれ／＼牛が喰て來る　龍野 有宜
晝顔や牛行跡の土烟　岡山 知十
傘の蓮と我とにたらぬ也　故構

濁りにしまぬ心もて

蓮の葉に浮世の露のこけ歩く　靑楷
づくづねいあふひかなんと望(のぞみ)なら　作州久世 和流
石竹に目の毒立や四十暮　季翠
澤瀉(おもだか)や水際探る船の杭　岡山 知香

藻の花・河骨も折からなれば

さてぞ／＼やれ來い麥の水の艸　ヒメヂ 丸水

子をおもふみちにまよひぬる哉

今の内添寐をさせぬ小蠅(サバヘ)かな　忠女
のみよ蚊よ能ィ楽の味は□とある(露)　キビ 子冬
なんそれぞそれ／＼蚊屋に月はそれ　元灌
雨氣つくのみささはりや蚊のよはみ　露紅
やれとここそ四五十せんのところてん　梅嵐

冷汁はよつほどすいな勝手衆　青楷

煮ざましにそより〳〵とそよめくよ　良〻

塩なふく鯨のいきさ見ゆるかな

夕立やとろ〳〵とあの雲が　除風

ゆふだちのそりやといふ間にそれ來るへ　蓑果

三韵

松風の縄手へはむくあの白雨　矢嶋 雅竹

菜種から今小麥大麥　惟然

何がなと先干魚の苞解て　田龍

送別

澤山な鮎まいらすにどうじやいの　元上

山川や岩の間から鮎が浮　大坂 市休

五六人寄合へばこそ涼しけれ　作州久世 取貝

涼風の陰囊ふり出す晝寐じやよ　正興

川音をたつときかふか夕涼　冬年

兎に角に寐ずばなるまい暑哉　ヒメヂ 共風

着のまゝのすゞみござれば涼し過　作州久世 歌扇

湖南人を送る。

あつくとも風こそまねけさらば〳〵　朧覺

行ク水にちりも芥も涼かな　春山

あついはのこれ〳〵みんなこれみんな　之白

高砂も空でやりやるか夕涼み　作州久世 松水

智月をしたふ文のはしに

あの雲につれて行たし夕涼　ヒゼンツノヘ 紫貞

此暑さ瀬戸物棚に立寄らん　ハリマタツノ 一指

夕涼おとなげなうてあとからも　冬月

かゝる寄し寺を出かぬる暑さ哉　岡山 梅林

閑中亭

もの事くはしからざれば(闕)□こまろこさならずや。(闕)□□□利さ名をはなるゝにあり。たゞ(闕)□□□なからは、をのづから理明なら(闕)□□はきかなる時は、その外を肆にするものか

ら、その中を閑ずるの號なるべし。

鳥落人

此亭號を高〳〵と懸けて、冬月が訴笑の間となしぬ。しかるをある夜ならん、煙艸など枕ともとりあへず、かのすう〳〵の吟行ひたつゞけに、つゞくるものにこそ。

雪柯

暑いのに帽子のまゝのかはゆさよ　至樂
とらば團の中でこれらか　冬月
奇麗さは石のこら〳〵こら〳〵に　柯
どうなれこなれつふうめこふは　月
すつとたゞ出たれば月のすつとたゞ　樂
芋の葉よ〳〵風のほゝふほ　月
さはるにもすもふはいやとぬかしおる　柯
掃た〳〵かまんだそれごみ　樂
かくそうぞ戀に穴ほりほつてもさ　月
拍子にのつてやるよばさらだ　柯
都でも時鳥ならこゝでまて　樂
座敷持チとはのとちかくて祉　月

無名庵に語りて

前は鳰その相手には蟬の聲　大坂　如祿
雲晴てさあ涼しいはかゞみ山　備後半城　扣鷺

兀峰亭にて

涼しいか草木諸鳥諸虫ども　惟然
出そもない所から出る淸水かな　ハリマタツノ　呂秀
さま〳〵のあはれや寺の土用干　枳邑
六月の名殘おしさも二三日　備前牛窓　玄幸

奈良の小川の夕なぎは

そふはまたあるまい事よ御祓川(みそぎがは)　千山

秋

二えふ集をこさぶきて

ばせを〳〵末もすみけり露の玉　紫見

はつきりとばせをは風の出所か　冬月

これは扨さて／＼これは秋の風　ヒメヂ 止角

山ぶしの耳にも須磨の砧の風　元灌

あき風の今朝からはまだ艸に迄　胡冬

秋風のよひころなれどまだ蠅が　擧桃

ぬつくりと秋もたまるか雲の上　簑里

光陰可レ惜時不レ待レ人

天然とかふはや秋の三ヶ月よ　良々

三ヶ月に暇乞して出たれども　柳雫

坂本に泊る夜、湖水の眺望に

此湖の撥ともなりて天の川　元灌

七夕のかさねやうすきとまりがけ　簑里

こちとらもひよんな氣になる星祭　且流

七夕や娘子達をなぶりけん　久世 重就

たなばたや男の分はのとかせも　ヒメヂ 至柳

栗柿つみける川舟にうちのり、おもふどちつぶやく事侍りて

帷子でまだ色かえぬ山の原　備前建部 路林

蠅にをはれてよはる日陰かな　露紅

ぬけるやら着ぬでもなしに秋の空　厚風

三里飛ホ西瓜／＼となふてはの　タツノ 羅峰

さあ西瓜西瓜喰ふのは誰／＼ぞ　同 有宜

扨は江戸西瓜にあふて手ばしこい　同 一歩

我里は久米のさら山につゞく道のほとりにして

さら／＼とたうきびや吹家まはり　路林

瓜蔓をまくりてすぐに大根畑　浮水

あたらしき卒都婆も垣にほうせん花　厚風

外の事いはずもふせよ盆じやもの　久世 哥扇

油揚にすべらしやますな聖靈たち　簑里

燈籠の幾夜さがりてふうら／＼　口黄

さんざ菅笠、〆緒がきれて、さらにきもせず、捨もせず。

踊ぞの分別捨る此場から　クラシキ 青楮

送り火の見ゆる間ぞ風羅念佛　作州寺田 花泥

送り火の跡の廣みやもの淋し　下ノ目 流枝

此句の風羅齋より賞へし

迯り火を網に打込生見玉（いきみたま）　路林

盆徳で寺方いきる椀の音　絲水（クゼ）

朝顔の花につりあへ念佛鉦

是は備中國足守の作者の吟なるよし。

蕣に青石などのぬれて猶　冬月

朝顔の今朝も起たりや苔居（ゐる）之上

あさがほに女子出て行そりや〳〵な　止風（ヒメヂ）

山家に住なせる艸の戸ありて、一日閑をさまたげて

茶の外に萩にをきたる露の玉　故構（クラシキ）

こゝろざしあるかたよりのいつはりは誰まことより嬉しかりけり。

糊賣の何喰ふてをる萩の花　雲台

薄（すゝき）〳〵もう是で穂がなうてもぞ　有宜

湖南人は春儘に、たゞ飛花落葉を云り、されば世のかろき事をすかれける。我風雅に星霜あまたなれども、いまだその味をしらず。花時鳥さは知ながらまたしらず、たゞうちあけし心一ぱいのみ。

むかしから何にもかにもをんなへし（女郎花）　作州タカタ　白鳥

晝になる毛貫の腰や女良花　雲鹿

こゝらまで稲穂おとすかむら小鳥　定當

稲妻にけたれて出ぬか宵の虹　稚志

面

其一

浪の上秋がありくや風のあし　箕里

此句、三ヶ月の秋をはこぶや草の上　さいふに等類ならむさ難ずるにぞ、答、風龍齋が句は眼前の風景ながら、かたちなきものなり。草のうへの句はかたちあれども、實地を踏さいふべき躰用あれば、かの秋風ぞ吹白河の紅葉の辨になぞらへ□□□（虫食）更別吟に沙汰し侍るものならし。

霧の日次つゞくかりがね　雲鹿

宵やみとかねて合點はしたれども　惟然

此淋しいで庵(アン)がすぐれた　除風
どこからぞ味噌せつかひにつけて來る　晩翠
見かゆるやうに人がなつたは　筆

其二　病中

秋風の夢にあそぶや蓮の笠　除風
ひやうにくつたも枝折戸の月　雲鹿
海なきは大和山城霧はれて　晩翠
馬上はしらず馬にこれもの　篗里
問ふことがありともだまり(默)だまられよ　惟然
池か川へかけふはあびようか　筆

其三　惟然

なむでやのふ柿が大分なつたはさ
角だつ山も月はまろいは　篗里
人中で屁をこくほどの錆(サビ)付て　雲鹿
雪がちらはら椽の小包　除風
生豆腐くゝつて山に歸るらん　晩翠
前をおとせば顏がちらけた　筆

其四

旅五器の際はあかはや三ヶの月　雲鹿
もうもみちから實事こそ　惟然
くゝつてもおかれず秋はくれかけて　篗里
着ればゆたんかかるふ成けり　晩翠
たつた今喰ふたに腹がこれ〳〵これ　除風
こゝをぬけるかさうはなるまい　筆

其五　晩翠

いろ鳥や皆くす〳〵と籔のうち
ちつとちがふが夕とは月　惟然
素麵の香やら秋風つたい來て　除風
先わら(笑)はする町人の鑓　雲鹿
去程に咄がきれたさるほどに　篗里
たてつけた戸のすい〳〵と吹　筆
ふりにし跡は人もこそしれ
月もうや(憂)われは籬(まがき)に戀の息　たゝ女
ゐいさらば野越を行む月夜じやに　車庸

どこなりと栖(スミカ)は月の有所　兎葉

陰魄(インバク)が見るからか月見るか月　白鳥

吟は善惡不二、馴ては殘多き鳥落人に別ろ。

またもやと月は眞上のいとまごひ　遲侯

月は月でこれ〳〵爰に竹はずう　(ヒメヂ)寒瓜

何なす事もなう、ひかささいふ山ちかき所に、幾穐露をいたゞきて

牛山へ出て月見がしたいまで　(ハリマ白形)何白

雨ぞ降午の八月十五日　(タツノ)巳百

湖南の鳥落人はばせをの翁の跡を惜み、せめて彼おもかげを、木曾塚の无(無)名菴に殘しをきてむさて、勸化の句集を思立侍るぞ。まことに俳諧の風雅にやつれし心、殊勝ならずや。ことし難波津に首途しつゝ声のかりねのひと夜ふたよさ、しかまのかちぢをしのぎて、うつろひこされしが、折しもあれ、

五月雨の村の田植の苗うつ、いそぎかたづき、麥も所せきとや。たけ笠の雨もほしあへず、久米の更山の露もさむさて、美作におもむかれし道の、かぎりも遠くさいへろかつまたのみゆに、たびのいたづきなどひたしやすめて、このごろ立歸られしは、中山の名月をもひよせられしならむ。細谷川の影もさゝることなれど、さなる國にこそ高嶋さなんいふ所の月、舟おかしからんと、南化菴の除風法し(師)をまじへ、備陽の岡府にゆく。簑里が病(やむ)ことありて、藥もさむさて、旅宿せしを主として

艫〳〵奇麗で腹にあたらひで　高世

今宵舟の月見むとそれかれ催しあへるに、晝より曇りければ

舟ならばさぞ名月の十分で　除風

もしや月晴よ〳〵と思ふたが　高世

雨しばしやみければ、やがて舟にのるに、はたかきたれてふりそぼてば、かく申はべる。

今宵月もしや晴ると漕出ぬ

苫もる舟よ雨もうらめし

またしばしして晴わたりければ、やがて漕出るに、一葦の逝(行)こころ、浩々としておほぞらに馮り、風に御してさいへるも、更に思ひ合する事也。

こむな所(トコ)で見よふとは更にこしまの月　惟然

生て月どふ見よふ德はなけれども　籆里

我も我人も人じやか月の舟　高世

名月や浦の戸並の北はらし　除風

結句また降ての氣たで今日の月　高世

月じやものいひたいまゝにいひちらす

葉月それの日備の岡府にして

吉備の神部

藤原高世記

かふ寄て月なれたとへ降ふとも　至樂(ヒイラク)

名月やかうみてはまた氣に入らぬ　冬年

行水も扨〳〵月のたゞ中や　若水

名月や半分くづるゝ藁葺屋　重就

ありや月の出たるぞ芋も□(虫食)する　可曉(ブンゴ)

いやがうへゝ重(かさね)たやうなむしのこゑ　布流(同)

このむしがゆふべのやうに啼虫か　流末

降は〳〵虫ども雨に流るゝな　一指(タツノ)

此道に心をよするものから、古翁のその風骨にのみ。

ものゝ葉の露にいごつくむしなれど　至樂

湖南人を待うくる事漸にして

野に花のどれからどふかとう〳〵ぞ　冬月

牛どもをへらへいとうに花野哉　之畦

面

其一

おさだまりぞないてや鴈の渡るらん　厚風

うかり〳〵と杯をくらいた　涼風
是もまた食になる葉ぞ月にみや　惟然
すべりころべど土はかまはぬ　定當
此橋は作物ばしか作藏か　多幸
いつの間にまあ我はとうから　元用

其二　多幸

どつこいなどつこいどこいほうなげた
はつ〳〵と秋風が吹　涼風
のらりくらりやだけるさかひ月暮て　元用
めつたやたらに鴈が啼はい　定當
其所(ソコ)ちつと大事の事がのいてくれ　千山
隣にやまぶ何をごろつく　元灌

其三　涼風

まあ寐まいあれほど月が晴て居ル
ふら〳〵〳〵のすゝきふら〳〵　惟然
くつとその猫にはかえぬ鳥啼て　定當
今のどさりは何ンじやどさりは　千山
こまりますそれではあまりどふもども　元用

たつた所は男いつぴき　多幸

其四　定當

取のいてすゝきはたんたず〳〵ず
月夜と申さらば□(虫食)ん　元灌
ひよんらひよらこゝらあそこらひよらめいて　千山
烏帽子がずればはげが光るぞ　厚風
くつ〳〵も諷の中に有事か　元用
いつからかはや炭がいつぱい　惟然

其五　惟然

だゝつかふ此穗のうへの見事さぞ　多幸
古川筋にアリヤリヤ鳥ども
大天狗慮外な鼻を月の前　元灌
ちつちつほうてはいふきがそれ　元用
うつかりとおもふて留守へ行ました　涼風
のほんぶしにて犬にたでられ　定當

湖南人にさはろゝ

何がなと見廻し芋を取て來た　呂山
欠してしてするたびに芋の露　元櫻
露でこそ隅にむしやつく木も見ゆれ　江舟
はや取て裏屋の大豆の出る時分　梅高
明たけな是からわたの吹風よ　雪柯
やがて〳〵御意に入ふぞそばの花　布流

後八月廿一日月を理貞菴にして一折

それめかぬ草に猶この雨さゑ　千山
様子がましう受許を出る　良々
眞丸な物どもたんとすへたてゝ　惟然
にんげがらなる小謡をやる　寒瓜
月花にめつたと寐ても能事か　盾山
ふうとぼつかり坂の春風　布流
此水が何所等に有てぬるむとは　菰州
後悔するでこうびんがはげ　之畦
やつて居子日とふまくと　雪柯
抱ついたれにかほが違ふた　梅嵐
共様になぜそのやうにお□い　良々
どふだかふだと佛た□□む　盾山
貧乏は嬉しいけれど然ども　寒瓜
何ぞといふと江戸を取出ス　菰州
この革は狐の革でござります　布流
月も南を照じやそうなよ　雪柯
けよろ〳〵とへどつく中ににやゝ寒く　之畦
すつぺらぽんが秋をさびるか　梅嵐

鶴のはしもなが〳〵さ松、松もおのづから、秋興もことさらならむ
厚風が別墅にして

惣たゝい何の場もなふ闇て秋　良々
まくり上たる露じや尻じやは　定當
アッアッあのどの畚を吹出して　路茨
くつしやめ長者晝中の月　梅嵐

むつとする所の梶をとり□(虫食)かは　厚風
そふ言たので物かお□□(虫食)る　尋旧
ぬか味そにぬかぬ佐(まう)太刀候ふよ　元灌
寒いじやないかめたくたにやりや　流末
これはまた安房げた木が生へて居る　寒瓜
いかふ〳〵とおもふたが寐た　惟然

ちさせをのぶるならし、肝をやしなひ、きあつかひの旅の心も大にならむ。むかふはあはち、松嶋はごちかふ、くろみのからにさなむ。日かさの山もこそ。うらならひのしほになるゝ小娘・小童もさもに朝夕ふけらるゝ。月花のあるじ擧桃の里、的形といふにしばらくとて

塩風にさあさ吹りよよ泊り山　惟然
出ばなは月のすんず一氣ぞ　擧桃

薄やら何やらかやら秋めいて　常女

其次

しほらしい鳥が來るので秋も又　常女
そのそばならば花のは□□□(虫食)　惟然
やあらやう是は今つこな月夜にて　擧桃

又

ものゝかふしろふ見ゆるが淡路いの　擧桃
あのものいへばかる晝になる　つね女
ふむばつてそれ〳〵そこらふむばつて　いせん

悠藏見二南山一

ほつこりと蒸せ出る色や菊の露　イセ南利
命ぞや菊のせんぎもちかふなる　紫見
そのつぼみ取つて捨たら菊はどふ　コ州
濟よせた顏や八日の菊の花　イセ賀枝
さしあたる手柄や姥が垣の菊　同如駒

ほしがるものは酒にぞ有ける。

はり立の障子もひろふきくの花　イセ 杜英

代もつきじきかゝる袖を菊の友　凉莵

福祿壽かもふり(冬瓜)の繪でおもひ出す　多幸

秌なればさゝごひろはむあそこ爰　蓮坊

何ものがいふたはちやうぞ秌のくれ　笑〻翁

我がおれば隣も出るよあきの暮　貞義

さやにはちい、耳かきにはまたちおほ也。しやみゝにならぬ裏のかきの木

柿の木も隙(ひま)さうにこそ後の月　イセ 萬水

とらまようとりしめないぞ後の月　同 相鼠

見るものに氣のとゞまるや後の月　同 萬斯

色づかぬ木も諸(もろ)ともにのちの月　同 萬里

此人數見てはたさうか後の月　ハリマアコ 禿峯

雲埋ニ行客跡一

明たかい松原を出てひいやひや　之哇

芙蓉〱猶雙六の人出入　梅嵐

牛の聲もものに成たり浦の秌　斂眞

おとなしう松は紅葉をせかぬ顏　羅峰

了管をしてもどうやら秋の暮　林雪

一ぶんの人にも見せず蓼のはな　除風

妻の身まかりたる人のもとに

どのやうな夢見て秋の夜や明る　學桃

朝霧にむせるやうなりわたし船　岡山 知文

からいぞとしりつゝからき穗蓼哉　如牛

專治レ痴

長ふても丸ふても皆唐がらし　菰州

蓮の實の飛や淋しくしよんぶりと　風聲

あはれさよみやま木の花尉が鬚　タツノ 秋翁

此外に見やうがあるか秋のくれ　芦本

今宵三五州月　閨中只獨看

そろ〱と余所も碪をうちますか　ヒメヂ 江舟

ぐに〱と後ほど廻す柚味噌なりや　タツノ 花吟

醉た同士おもひよたどし梅もどき　大坂 可風

秌の實のおのが酢をしる鱠かな　酒堂

冬

爰へ出る筈かよ月の冬木立　淡齋
冬枯や何から何をいひ出さん　芙雀
　蕉翁の古墳に樹をうへて
冬枯も人の批判にあはぬほど　何中
木枯やこがらしこがらしから〳〵し　冬月
こがらしの山におちては松の波　篗里
　書寫にて
木枯の人音もせず此寺は　千山
どちからと極(きはま)りもなふ木枯の　芳船
　別戀
こがらしのこちら向さへつんとたゞ　至樂
何事もかたういはれぬ村しぐれ　浮水
木の葉ちる拍子に乗か村時雨　呂秀
凡俗をはなるゝ場より時雨哉　元灌
待宵やさうは時雨てもらふまい　千山

草臥そしかもやはきてこれ時雨　母風
　洛よりきこへ侍る
山ひとつそちよ此方の時雨ぞや　對六
藁三ば、なげ込かどのしぐれ哉　ハリマ高砂 好景
其曲り有はしぐれの枝のまゝ　雲洞
　山家月
麥蒔の三ヶ月森をあれ〳〵あれ　多幸
むぎまきや脇にかゐるこむうつはもの　正秀
引ぬいて尻もちつくも蕪かな　布流
こゝちよやあゝこゝちよや赤大根　之畦
　雲無心以出岫
つく杖を腰に指たる寒さかな　賀州金澤 書軒
草枕さとつて見れど寒き哉　除風
馬の屁の首途さむし夜半の月　篗里
朝霜や鳥のくゞる小田の注連　貞義
どう龜に似たる霜夜の寐覺哉　備前岡山 竹重
　これは今の世になかりし人の句なればとて、そのなつかしきを門葉敏眞が方よりきこえ侍る、さぞ。
おもしろやぬり笠着たる初雹　忠女

ちとの間は水の中でもあれあられ[霰]　擧桃

六韜

寒とやなんだ辨慶こつちとか　元用
　月かげながら頭巾取出す　定當
ふとふやつて跡を細ふに云すへて　厚風
　鼻つまむやらずんとしれぬは　凉風
ごほり〱〱とからうすが　元灌
　よひ時にこりや來たぞ成程　盾山

おもふことふたつのけたかそのあとは
　花のみやこもいなかなりけり

初雪をどろにこねたる都かな　正秀
はつ雪やよつほど重い身のまはり　遲川
たゝふぞと見あはす顏か雪ぐもり　可鄉
しら雪や手水に立て松の裏　梅林

旅宿雪

ふるは〱降るは雪の夜中起　菰州

鳥一羽ようこそ雪の旅寐哉　車嘯
雪に猶なをぞわらやのむら雀　露紅
この雪に何がなとかく座禪かよ　惟然
そちはそちこちらへ行ぞ雪はなふ　定當

昨夜開一枝

起て見てねるにきはめし雪なれば　青楮
これはなふ風の痛ィに梅がなふ　春
水仙の花にすねたる梅もこりや　芦角
水仙のへらや先達ひなたほこ　船彥
つんと此花の王かよ水仙花

是は柯上が母の句なればとて、爰に書付侍し。

あの坊ンが鰒にまよふて落葉かな　籛里
鰒汁をひとり得くはぬ誰ぞこい　冬年
元灌が味噌であへたる海鼠哉　良々
夜着出てごさぐりありけば犬が鳴　青楮
これ〱よさあ〱火燵さあ火燵　梅嵐

翁なしさふて

人は死ねしねば忍ぶぞかにはらひ　智月

明松の消れば淋し啼ちどり　厚風

味やりやるこれは千鳥かめづらしい　惟然

いざ桂馬是から春へ飛でくれよ　簑里

つくろはずしはす（師走）の川のさら〳〵と　雪柯

詼諧非レ藝

皐餘今世有下以二詼諧一鳴中乎世上者上盖(虫食)□□六七予聞其謂二詼諧一者乃滑稽之流耳親下其所二口誦一者上則剖二折和歌一以爲二一句一一人唱之一人和之遽三四以至二于百句一謂二之百韻一考二之漢韻一則止五十韻而已而亦別有二五十韻一（句五十）又有下號二歌仙一者上乃三十六句也是乃倣下藤公任撰二三十六人和歌神秀一以爲中歌仙上而云爾考二之和歌一則止十八音而已而亦別有二一折一（句十八）亦有下至二千句萬句一者上未三嘗有二的當者一其名條屬二四時氣候一之外有二神祇釋教戀雜等一爲二之綱一焉其中各自有レ目有下終二一句一者上有下至二三句四句一而終者上若乃至二五六句一亦有下去二一二句一而用レ之者上有下隔二三五句一者上如二春秋多レ景冬夏少レ趣等一多至二三五一少止二一二一皆以隨レ宜也有二惟然者一非レ道非レ釋亦非二吾儒一周二流天下一以二詼諧一行脚者也居無二定宇一身無二完衣一安レ貧忘レ世樂而晏如也蓋叟由之質而避二世於詼諧一者乎予素稱二其爲一人也予義父元灌亦好二詼諧一有レ年二于此一一時來過之際謂□□（惟然ノ）詼諧其幾非レ藝哉予答曰我非下謂二詼諧一者上何爲知レ之雖レ然藝云者予知レ之曰禮樂射御書數非レ翅是已天地之間有レ法有レ則有レ格有レ式者□□（虫食）非レ藝且太史公序二於滑稽傳一以二六藝一謂之則詼諧亦一薄伎藝焉耳矣惟然曰不レ然夫詼諧者見焉而言思焉而作各有二其志一故觀二其人之志一者莫レ如二於詼諧一士曰二其武一農曰二其野一工曰二其巧一商曰二其利一萬上莫レ不二皆然一一言之美惡人皆知レ之故言不レ可レ不レ愼矣然言巧則非二詼諧一言華亦非二詼諧一但戯言俗諺無レ飾無レ巧矣然頓出不レ煩二思慮一此之謂二詼諧一也其於二法則格式一何設之有一句自是滿意不レ假レ待二次句一而後意明上矣今世大抵不レ覺二此義一妄多下似二和歌之艶語一者上其言曰詼諧亦和歌之餘也是可二亦笑一

乎詼諧固滑稽詼笑耳不始倣和歌矣字數又可增
減我哀天下詼諧之徒有濡滯執固于玆故排格破
例欲導蒙昧矣予聞之曰眞詼諧焉乎哉夫謂之
藝焉也則無法無則無格無式謂之非藝焉也則
亦自有似于藝者也原夫藝焉矣而爲非藝焉矣者
也歟

元祿十五玄默敦牂閏八月初七

播陽學生安積周仙識齋漫書

雜

腹たてぬ人も佛の背中かな　元灌

松風の四十過てもさはがしい　鬼貫

松の木や本がわるけりや末もよい　庭賢

温泉の雨中

このやうな降を知つたら來まいもの　山頂

どふぞいのおてふとおもふがなんと日和　多幸

別湖南人

ちかつたはまた〳〵例のむくろたち　千山

棕櫚葉戰水風涼と樂天も作れり。
予も湖南の義仲寺にたよりて

棕櫚よしゆろすかたないとは書つれど　冬月

竹たんとはえて愛ら淋しさは　菰州

屁のぬしのしれぬ伏見の夜船かな　知牛

鳥落人に餞別す。

いかしやるや山をへだてゝまあどこへ　箕里

ゆるまれよそれ〳〵はだか何方も　流木

やかましう物嬉しうてむら烏　一指

雨中熟眠

ねる〳〵をつきぬくやうな聲で扨　至樂

よつほどの池に餘程の白鷺が　布流

しづめ合なみだ未練の別哉　厚風

湖南人をさゝめて

はあてはて節用來ふとおもやこそ　學桃

しらぬあほうが起てはたらく

りこむにてとかくに我(ワレ)は寐る夜哉　千山

楚山門はふる旅庵にとゞめてん、鳥落人は日比たゞくさなすかるにぞ

不亭主をとりへに爰にしばらくも　蕋州

かゝる世の鉦が敵(かたき)か鬼の食(めし)　智月

さりとては梢に氣味な風ぞかぜ　蜘蛛

うれしやなけさはねくさが生て出た　惟然

淡無味

人は和を以てよしとす。味なきこそいみじけれ。

くはするも喰ふ人もた□□(虫食)かな　山頂

鳥落人松嶋・しら川のはなしには、旅は旅ともおもはざりしを、思ひ出して

ぞく〳〵と旅したいとは雲よ鳥　車庸

我住礒の餘は、凉風の夜もにのた(藻)れあがりて人有ともしらず、伏入たるに、をのが軒に目をさまして逆行事たび〳〵也。

うたゝ寐の餘は人を佛とか　乙州

その鳥糞こきながら慮外なぞ　風草子

のぼらふか見あげて松へのぼらふか　車庸

四所明神法楽

いくばくの道あづけふぞ松と杉　之白(無量坊)

船よふねこちがはやいか須磨の岡　惟然

松本にて白の字を探る。

たれ〳〵ぞ雪に來るなら月ならば　車庸

浪たゝで風おさまれるうらやすの國とは、公朝の言の葉なり。今蕉門世にひろまり、合歡の木の眠たきも、椰の木のとが〳〵しきも、俳諧のみになりて、畔をゆづるのはしなりけらし。爰にあらたならぬ鳥落人、膝をいるゝのやすきにいこはず、雲の尾上を樓とし、霧を籬の詠(ながめ)として、松風もおなじみどり(緑)に年經ぬる苔衣、めぐら(廻)ぬ國もなしとなむ。それにもあき(飽)やらでか、す(須)磨明・石のおもしろきによりけむ。ことしも姫路の市にあそびて、あやしの柴

の袖垣にもといれぬ。むら鳥のにぎはゝしきまで、鳴まどふ夕暮、この末も槖駝(たくだ)が植けむ、さかへたりなどたはぶれて曰、きゝ傳へし枯野と云舟は朽ても琴になり、宸襟をやすめ奉り、し□□□(虫食)は終焉のかれ野(枯)の吟は、國のはて迄あはれに、もてはやしぬるぞ。頓て霞をたのみ顔なるけぶりを見るにしも、師の像を安置せむことを思ひたつとぞ。予も有がたき事におもほえて、山はふかゝらねど、あらはたらず。印南野(いなみの)ゝいなにはあらぬことに思ひよりぬ。大和は花の國、越後は雪の國、その國〳〵の名物、俳諧にうたはぬ物なし。頼保は綠河にしづみて、身を石にならむといひ、衣笠(きぬがさ)の大臣は、堅田の鮒のつゝみやきと詠(ながめ)られけり。祝致のこと〴〵しくは□(虫食)ねが皷のかたおろしなるも、みな俳か(諧)ひならぬかは。

はりマ　千山

井筒屋重勝八十二才□(虫食)

庭（には）竈（かまど）集（しふ）

上・下

越人撰

俳諧庭竈集　上

聖君

仁德天皇

高き屋にのぼりてみれば、その御製の有がたさを今も猶

叡慮にて賑ふ民の庭竈　芭蕉

天智天皇

蘇我入鹿國家を亂らんとせしに

うち治む入鹿が首に四海波　其角

延喜帝

寒夜は國土の民どもが寒からんと、夜〻御殿にて、御衣をぬがせ給ひけるとや。

脫給ふ御衣は天下の衾哉　嵐雪

賢臣

武内大臣

在官二百五十年、壽三百十餘歲

六朝につかへて松は冬もなし　簑笠

大織冠鎌足

子房は石公が沓を圯上に取、鎌足は皇子蹴鞠の沓を槻の木の下に奉らる。ともに天下昌平の其はじめ也。

手にすへて御世を捧る花の沓　越人

昭宣公基經

御位の繼木も華陀が療治哉　仝

小松内府重盛

淸盛入道、法皇を奉レ傾ントせしを諫るに、淨海武具の上に法衣を着するは、内府に恥て也。

荊唉胸の金物かくしけり　其角

武藏守泰時

仁愛を先とし、政以テ去レ欲爲レ先ト

明月の出るや五十一ヶ條　芭蕉

中納言藤房

於テ二馬場殿一龍馬ニ付て直諫を奉られしが、其言行末ヘ如シレ鏡。

亂るべき風の御を指すの神子　嵐雪

細川常久

我威の盛を憂へ、自蒙二勸氣一主君
にゆづる威は

月移る水やこぼれて仰ク空　越人

忠孝

楠帶刀正行

南山ノ帝位は累卵のごとく成に

冷じや傾く天を指二擧る　仝

正行守二父遺言一其氣象に

獅子の子の中がへりけり雲の峰　擧白

菊地肥後守武光

君父の守レ義九州の軍

いつ見ても小武大友羽抜鳥　擧白

義士

佐藤忠信

吉野に留り、惡僧學範を討、都堀
川にて江馬小四郎と戰死。

忠信の文字の薫りや雪の梅　夕道

兒島備後守高德

元弘の始より終身宮方

盈昃は月にさへあり此男　文長

村上彦次郎義照

大塔宮の御諱をかし戰死。

花の名を雲に借る世の手本哉　夕道

毛受庄助

志津ヶ嶽にて替二柴田一討死。

朽る名の命に有か杜宇　仝

木村長門守

大坂籠城の士の内に無二比類一討死。

時は夏首の色香や雪の梅　夕道

守義

畠山庄司重忠

梶原に讒られる、野心なき旨起請
文書可レ進仰らるれども不レ書

書よりは書ぬ起請の氷哉　存行

伊藤九郎祐清

昔は頼朝卿を奉レ助、今は守レ義賴
朝に不仕、平家のために加賀のし

の原にて死。

篠原の露ぞ頼朝の袖の上　仝

彌平兵衛宗清

池大納言一門にわかれ、頼朝に屬し、鎌倉へ下ルに宗清不レ下。

殘り居る其むね清き清水哉　仝

由利八郎

泰衡滅て生捕れ、梶原が無禮を呵シ、頼朝に向て義朝の事をいふ。

鐵鎚で氷を砕く言葉哉　文長

權謀

武藏坊辨慶

安宅の關にて義經打擲は、變化を不レ知忠義なき人の不レ及所。

此時はこゆるを忠の安宅哉　中桃

伊勢三郎義盛

櫻間傳内左衛門が三千餘騎を、一言にて降らしむる。

耙にかき寄らるゝ落葉哉　仝

今井四郎兼平

頼朝・義仲不和を調へるに

鎌倉へ渡す清水の結び哉　仝

細川宗禪

三井寺を落さるゝ覺へに　、京沒落せしに、其夜謀計にて又京を取。

九年母や直す鯨の大食膓　單二

山中鹿之助

尼子の家を再興せんとて、乞食を用ひし軍は

案山子より乞食をつかふ作意哉　仝

猛武

鎭西八郎御曹子

保元の軍に鎌田政清を手取せんと

干雷や雪吹の中に落掛る　農石

惡源太義平

平治の合戦に重盛を討ん、鎌田や助んと政清を助て

氷たる鞍ぞ手形の付始　仝

能登守教經

安藝太郎兄弟、左右に挾み、はせかゝる奴原を蹴入、入水。

鎌鶯の小鳥を羽打翼ヶ哉　仝

朝比奈三郎

押シつぶす門や脱の蟬の空　羽笠

畑六郎左衛門時能

鷹巣ノ城に只十七騎にて、北陸道七ヶ國と合戰ノ

初汐や海は干にけり金翅鳥　農石

長崎二郎高重

はじめ武藏野より鎌倉沒落に至る迄、其勇猛。

韋駄天に稻妻近き光哉　巾桃

三浦荒二郎

北條早雲と最後の軍

鐵棒で人を雀の玉子かな　單二

暴逆

相馬將門

平親王と僭號し、逆惑を振ふも

露霜か七ツ眼鏡のきゆる影　農石

赤松左京滿祐

義教公を討、己が代々の家を滅ス。

赤松の火こそ胸より吹ク野分　若水

松永彈正

主の器量を忌ミ毒殺し、聚斂して城を築に

柿の串や慈悲なき城の壁下地　仝

陶全姜

世々の主義隆を討、逆威を振へども天罰嚴嶋にて

其暑サ惡蠟燭のなだれかな　若水

盜賊

長田庄司

左馬頭義朝を湯室にて

あへなしや莟をちぎる室の梅　機石

五大院右衛門宗繁

相摸太郎は主也おのれが姉の腹也。是を敵へ告て討せけるはさらに

人の皮おのが子を喰フ猫ぞ着る　越人

三浦右衛門

男色より氏眞の蒙ル寵愛ヲ身の駿州沒落に、一番に迯去る。

羽根斗美し雉子は逃る性　中桃

長坂長閑
跡部大炊
二人勝頼を邪路へ入、黄金の仲立
賂を受、北條三郎を討、終に武田
の家を滅ス。

露よりは先に消けり一万兩　仝

僭　奢

北條時政
三代將軍過て天下は其まゝ

いつの日に松を枯して藤の花　梅夕

足利直義
讒大塔宮ヲ、又將軍宮・東宮をも奉リ
毒殺シけるが、其身も終ニ毒にて

其罰や殺生石にとまる百舌鳥　仝

伊勢守貞親
義政を迷し、御臺所にたより、終
に大亂を引出す。

青蠅の荆にとまる惡ザ哉　仝

明智日向守

愛宕山にて世を取らんとせし祈禱
連哥の發句

惡逆とあめが下しる五月哉　若水

石田治部少輔
恩を不レ知、時を不レ知、人を不レ知、
身を不レ知、只知る物は利欲にて

蟷螂が何ニの車に擧る臂　梅夕

奢　侈

御堂相國道長、世の執政たらんと
民の膏油を以て、佛像・寺塔の莊
嚴實に淺まし。

民の汗しぼるゝ木や法成寺　考遊

平相國清盛、奢侈の餘り都うつし、
法皇を押こめ、公家の官職をとゞ
むる。

落むとて暑サをはづる雷の音　仝

佐々木道譽、東山の花見ニ二本の
櫻に瓶を鑄かけ、一雙の立花さす。

花瓶鑄る鑪鞴仕かくる櫻かな

豊臣秀吉非ニ其家ニ關白にいたらる

ゝ者は

關白を買ふや芭蕉の枯ル花　仝

往古大合戰

神功皇后宮

三韓御征伐の御時、いひ傳る乾珠滿珠は

御心の珠ぞみちひる其潮　簑笠

日本武尊

東征の御時、東賊野に火を放欲レ奉レ燒、十握劔にて拂ィ給へば

草薙の氷に燒る夷かな　仝

伊豫守賴義

阿部貞任兄弟と九ヶ年奥劦にて

貞任が亂せる糸や厨川　如筑

木曾義仲

平家十萬の勢を、倶利迦羅にて一時に

丈夫木曾倶利迦羅くりや大あたり　仝

九郎判官

一谷の數千丈を馬にて落さるゝは

立板の馬は水かな坂落し　仝

新田義貞

兵庫にて高氏と戰退キ口に馬に放れ、敵にかこまるゝ中に、小山田太郞一人、我馬を奉り終に討死し

青麥は敵の矢を刈ル求女塚　仝

近代大合戰

北條氏康川越の夜軍

鱮つる針にかけたり大鯰　仝

織田信長、今川義元を一戰に

今川を織田へ汲込桶挾間　存行

武田信玄、川中嶋にて上杉謙信と戰ッ時

眞劒のけんに濁を圍かな　考遊

羽柴秀吉、志津ヶ嶽の勝利

雲の峰七本鑓に突崩ス　仝

戰國四大將

武田信玄は征ニ敵國ニ、三年前より其國の地形を圖し、強弱を謀て

五月雨の日數に切るゝ堤哉　龜洞

上杉謙信はいつも二陣に有て、我旗本の勝を以て勝利さし、前後不レ顧し

野分哉一目龍のまる備へ　仝

北條氏康、別强の敵には示ニ柔弱ヲ大軍を取ひしぐ。

東風(アユ)の吹空に落來る四三(シサウ)風　仝

織田信長は强には隨順し、弱を怖トし、小敵も思ひ切ルを見ては、軍をかへす。

白雨や日の照る方は雲もなし　仝

貞女

槿齋院、源氏につれなく、終に御かざりおろし給へり。

槿(あさがほ)のはかなさを知る衣かな　文長

空蟬(うつせみ)君は伊豫介が妻也。光ル君戀渡り給へど、のがれて

非義の名や脫(モヌケ)の蟬のから衣　文長

宇治宮の御娘總角(あげまき)ノ大君、薫大將さま〴〵の給ふ中に

泣音聞け浮世を思ひ蟋蟀(きりぎりす)　仝

佛御前、六波羅を忍(シノ)び出、妓王がかくれ家へ行。

若竹の節や操(ミサホ)の個性骨　登鯉

靜御前、鎌倉へ召下されし時、梶原源太が艷言をはづかしむる。

有明の水ははせ出す油皿　澤田氏 水尺

賴朝の姫君、淸水ノ冠者の事を思ひ死に死に給ふ。

共まゝになびくや枯るゝ女郎花　登鯉

婬婦

高野ノ帝、弓削道鏡法師を寵幸し、寶位を讓んとは

暖ナ弓削(ゆげ)立んとや神の國　越人

薄雲女院、源氏に通じ、出來たる御子を御門の御子には

夫なり子なり申せば猫の戀　文長

朧月夜内侍、院の愛寵をくらふし、大將に通ずる。

此罪にしく物もなし朧月　仝

才女

紫式部、石山寺にて八月十五夜、物語のけしき湖水に浮みて

湖や筆を柄杓に汲ム月夜　臨之

いせ物がたりは、在五中將の自記とはいへども、伊勢の御の書る也。

凋(シホ)む花に昔男(むかしをとこ)のかほり哉　柳塘

枕草紙は清少納言が筆也。彼中に中宮香爐峰の雪を問せ給へば、たちて

御返事の雪か御前の御簾(みす)をまく　臨之

榮華物語は赤染衛門が書に、公任卿致仕の表、匡衡書るにも、赤染が心を借りてこそ彼卿の心に叶へり。

ことの葉や彼反古(ほうご)より歸り花　柳塘

勇力女

巴御前は木曾義仲の妾にて美貌、有軍の時は、一方の大將也。

振舞は眉間(みけん)尺(じやく)也花の顏　農石

板額女は越後の城ノ太郎が伯母也生捕て鎌倉に來るに、淺利與市其勇なつかんと申受て妻とす。甚醜女也。

年貢には力納る化粧田　仝

伊賀内侍は篠塚伊賀守娘也。南帝敵に襲(ヲソハ)れ落給ふ道の大河に

大木をねぢれば橋か五月川　農石

讀物語

うつほ物語、仲忠の童成時、母うへと熊の住けんうつほ木にふる、年月は

空(ウツホ)木も時や日出度キ花の咲　文長

竹取物語に、八月十五夜かくや姫の天上。

守りても專(サハ)なし月に入光リ　象度

伊勢物語に、在五中將、女と薄の中より顯れ出るは

そらに名や薄の中に亂れけん　登鯉

源氏物語若紫の卷に、北山にて彼ゆかり始て見付。

それに似る若草嬉し懷ロ子　巴雲

同じ巻に、犬公が、はなちける雀の子を泣給ふを

雀子に目を摺赤む櫻哉　越人

須磨のまき

琴聞に波只爰もと へ來ル穐　怡石

蓬生巻

鞭に拂ふ草に時雨る宿の露　倘水

御法巻、紫上、頼みすくなく成給ふさま。

嚔にも亂るゝ萩の露かなし　仝

源氏物語、詞花言葉はさら也。所〻の狂言また類ひなければ、それを爰に

源内侍

所〻にて源氏の君へ物いひかけて、老たるさも思はぬは

大どれてまねく薄の恥しらず　怡石

近江君

さま〴〵成中、小雙〴〵と舌早に

もむ雙も暑し明石の尼君と　問景

玉葛の下女三條、初瀨に右近に逢て

喰物にさもしこたへぬ汗の顔　仝

宇治の宮の門もり、薫大將の御衣を給はり、其香を持あつかひ

おほけなし蘭の香を着る翁草　仝

山路露

此巻は式部にはあらず、後に書添るとぞ。浮舟、小野にやつれ住給ふは誰、がなせるにや。

浮舟を山へ誰ガ漕グ小野の秋　怡石

狭衣に、大將飛鳥井の君へ通イ給ふに、御名はあかし給はねども

闇の夜も梅とはしるき匂ひ哉　象度

同じ物語に、姫君唐泊りと云所にて水に入給ふ。長門守が妻は伯母なり。京へのぼるさて見合助けまいらせけり。

蜘のゐにはかなや留る露の玉　(圖)(風吹軒)呑雲

平治軍に義朝、信賴を大將とせられしは

鎧着たばかりなり梟雪人形　象度

東鑑、兵衛佐殿、上總介が遲參を呵後陣に連レ給ふ。

雁陣の數万や跡に鷹の聲　仝

太平記、正成ハ赤坂の平ラ城を東軍責あぐむ事。

柊さす門は鬼さへあぐみもの　調泉

義貞、北國落こゝへ死。

いかならむ弓矢燒ク日の雪の山　登鯉

小貳大友、菊地を背くは

葛の葉の表も裏か秋の風　青山氏茨口

甲陽軍に、武田信玄十六の年、父信虎責落さぬ平賀の城を、士卒に酒を入づて卽時に

鰗や師走の城の雪きやし　素仝

大閤秀吉、天下草葉の速なるは

年切りも花になかり梟吉野山　青山氏茨口

畫圖

賴光切ル二酒呑童子ヲ圖

鬼の首兜の上に頭巾かな　芝響

綱切ル二羅生門ノ鬼ヲ圖

羽織かと黑犬掬む辛夷哉　里童

賴朝隱ル二樹ノ竅ニ圖

竅木は天下を孕む命かな　仝

牛若千人切ノ圖

燕か舍那王どのゝぬぐ足駄　素仝

實盛著ル二錦ノ直垂ヲ圖

梔の花は大將かさぶらいか　機石

佐々木渡ル二宇治川ヲ圖

生喰や宇治川に打墨の糸　梅振

景清追二箕谷ノ圖

頭巾取ルやりて惡七兵衛かな　勝哉

朝比奈與二時宗二爭レ力ヲ圖

尻餅や草摺り切れて汗は瀧　文錦

熊谷討ツ二敦盛ヲ圖

花かあらぬか兒のうちは湯で玉子　仝

五郎丸抱ニ時宗ヲ圖

薄衣を荆の花と思ひきや　機石

大森彦七負ニ化生ヲ圖

橘もこちらむくるに枳殻哉　芝響

盛綱殺ス案内ヲ圖

朧夜に酒買ふて尻切れけり　簑笠

風雅

前中書王陰レ西山ニ

腧一筋酒一觴伏而眠起テ彷徨

西山の月を我世の太山かな　老猫

融ノ大臣、河原院摸ニ塩竈ヲ難波の浦ヨリ

汲レ潮ヲけるは

塩竈の烟に秋も朧月　仝

博雅ノ三位、篳篥を吹れしに、其聲

清雅にて、盗人ぬすみし物を皆か

へして逃去ル。

角鷹も篳篥に欲の消る霜　江戸　宗和

帥ノ大納言經信卿、西山の行幸に三

舟に乘れけるは

月に花に聞や彌生の郭公　越人

同じ三舟を

三ッの舟一人して漕グ胸涼し　老猫

宗祇法師、髭に香を燒て

髭に燒香取の衣は着ぬ身哉　臨之

牡丹花、牛角に押レ薄鶴ル

角文字の花や心の直な文字　老猫

宗鑑法師、風顛漢

旅籠食雑煮喰ふ世のたわけ哉　越人

隱遁

僧正遍正は深草の御門におくれ奉

りて、世をのがるゝ身類なし。嵯

峨野にての落馬貴し。

粟食に時齋や落る女郎花　機石

みやこのうちは住ぬさされりさは、

玄賓僧都の哥なり。

芋の葉にかくるゝ露や猶光ル　臨之

空也上人

あるけとて親は育てじ寒念佛　　羽笠

増賀上人、名聞こそ苦しけれ、乞食の身こそたのしかりけれと、諷ひて、ついに

乾鮭の太刀に切たる名利哉　　還田氏 水尺

明惠上人、好み給ふ物と、ある人松茸を送りければ、是も心に執する煩と、其後は不レ食玉。

松茸の笠も心に着ぬ清し　　柳塘

解脱上人、官僧に成る事を惡み、笠置の奥へ遁る。

無心なり君にはへ付佛の座　　仝

新宗師

日蓮上人念佛無間諸宗無得道との建立、首を切レニ太刀折レ梅ニ降レ星。

梅に降る星や袈裟掛け松の德　　水尺

親鸞上人は妻帶肉食在家一道。

葛水の濁も白し雲の峯　　若竹

遊行上人は時宗の祖、念佛を踊り、六十万人決定往生の札。

極樂の札場込合ふ踊かな　　越人

隱元禪師の勤行の作法は、百丈禪師の勤法と

唐めいて叩く水鶏の木魚哉　　水尺

正三老人の發明は、勇猛精進と齒をかみ腕を握り

寒月は仁王を睨む眼かな　　彈風

近代禪者

愚道和尚は眠り來る時、尊卑を不レ憚、仙洞の御所にても

明月の雲吹拂ふ鼾哉　　單二

大愚和尚は不レ禁二葷酒一蒜を喰ひ、大茶碗にて酒を

涼しさよ咽は鎌倉海道にて　　水尺

雲居和尚は念佛の功德を諷ひ、頭陀

其花を今も笑へる迦葉哉　　若水

雪窓和尚は只草鞋藏香を作

皆人を蓮に乘する草履哉　　水尺

明庵和尚は常座

其まゝの達磨は安居姿かな　若水

此丘老駿河國にて一夏勸られし事是なり。

術者

術家白藤道長言、其日家内有怪。至期閉門謝客。晡時叩門、和州之瓜使也。納之。大史安晴明大醫重雅僧勸修有座。道長問、瓜可嘗否。

晴明

曰、瓜中有毒不可嘗。

晴明の名に明るさよ瓜の中　文錦

相國曰、許多瓜何有毒。

勸修

誦呪加持。一瓜子宛轉騰躍。一座驚怪。

飛上り踊る瓜見よ手脚なし　文錦

重雅

一針出袖中針瓜子動止割見中有毒蛇。針貫眼。

虱射る矢はいさ瓜の蚫に針　仝

長壽

若狹國白比丘尼

其父一旦入山逢異人得人魚歸。娘得袖裏喰。壽四百歳。

春四百いつもわかさの白比丘尼　芝響

越前國大男

入山伐木。渴甚有樹竅水。著口飮。味淸淡而不人間水。壽數百年。

一口に壽の字を結ぶ淸水哉　仝

陸奥國殘夢

自稱秋風老人。風顚漢也。常食枸杞飯。源平亂義經辨慶親見。又曰一休我禪要師。是慶長之比事也。

常陸坊居らば是なり拘杞の食　芝響

茶人

千利休

太閤秀吉より非義を仰て、殺さるゝを知り、先達て死する期に一匕(カイ)をけづる。名付て今に

花におく露は泪の茶杓かな　梅振

古田織部

竹束の中に茶杓竹を尋るに、城中より見(テ)元頭(ノ)鐵鉋を打つ

竹束(タバ)を覗くきんかの蠅すべり　仝

宗丹

富貴に風雅なし。茶は詫を要とす。

此人以(テ)レ貧(ヲ)鳴(ル)レ茶(ニ)。

そのはづみ枯木におどる霰かな　仝

異部凶主

殷ノ紂王、象牙箸を作れるを、箕子見て泣給へるが、はたして

袖の露や象牙の箸に指ス天下　旦千

秦始皇平(ニ)呑(ン)六國(ヲ)、天下の焼(キ)レ書(ヲ)、儒者(ヲ)坑にす。

書を焼火飛ッで阿房の紅葉哉　旦千

隋煬帝、父を毒殺し、柳堤四十里江都樓を作り、奢侈に心黒ー闇となる。

江都樓自ら迷ふ柳かな　仝

宋忠臣

文天祥捕(ヘ)レテ元(ニ)五年、有(リ)レ獄(ニ)、氣たまはず、よく浩然の養(テ)氣(ヲ)丹心如(シ)金石(ノ)。

日月を貫く胸の梅清し　仝

謝彷得、元にとらはれ、將相と傲岸媛言終に不レ屈。燕に行に妻子朋友(ニ)別るゝ詩。

時雨ても松は南八男兒哉　仝

劉因、宋をおもふて元に不レ仕、心如(シ)鐵肝(ノ)。

野分にも微塵動かぬ巖かな　仝

人物之發句終

書史語

土階三尺茅茨不レ剪(ヲ)

蝶足て雜煮奢りや恵美須講　羽笠

勿以惡小而爲之勿以善小而
不爲之

一雫漏ともふせげ五月雨　楊柳

嚴子陵曰、昔唐堯著德巢許洗耳故
有志

寒菊や陰れし秋を見出さるゝ　羽笠

漢于公有陰德曰、高大閭門令
容駟馬高蓋

乘て世を門につかへぬ櫻哉　雪跡

莊子曰、脣竭則齒寒

花を切られ水仙は葉の覆なし　倚水

澤雉十步一啄百步一飮不蘄
畜樊中

欄を結ふ庭は願はぬ野菊哉　怡石

周之夢爲胡蝶胡蝶之夢爲周。

蝶に問ん金數へ見る共現ッ　越人

白氏文集、巫峽水能覆舟若比人
心是安流也

行年や阿波の鳴渡に高鼾　唯人

韓退之符讀書城南文、新涼入郊
墟燈火稍可親

學文の田地に親は案山子哉　高木氏 英正

郭槖駝傳、吾問養樹得養人術

樹を植るはなしや致知の藏開キ　楊柳

玉造小町

花の色は跡形もなし頭陀袋　怡石

頑夫廉懦夫有立志

白梅の外に伯夷に似るもなし　象度

申包胥秦求救依庭牆日夜不
絕聲

袖に降リ垣や流るゝ五月雨　楊柳

樂志論、出宇宙之外豈羨夫
入帝王門哉

雁よりもろくに居て喰ふ菜汁哉　需笑

長恨歌、姉妹弟兄皆列士可憐
光彩生門戶

出來花の菊に每日酒宴哉　素全

長恨歌、行宮見月傷心色夜雨聞

金屏に有明闇し獨り蔟　唯人

猿斷腸聲

詩題

一片春帆帶雨飛

行舟を石の燕や舞きやす　機石

十二回綠心裏空

霞晴レ胸ハ喜樂の脫かな　仝

生涯千項水雲廣

影ハ空水に聲聞雲雀哉　登鯉

不照綺羅莚偏照逃亡屋

田螺取我顔しらぬ水鏡　唯人

窓梅北面雪封寒

月銹て梅より明る北の窓　瓢哉

一夢沉香亭下窔春魂化蝶叉飛來

藤棚は蝶羽衣を舞ァ舞臺哉　怡石

留春不用關城固

關越る春の切ッ手やほとゝぎす　問景

黃金用盡敎歌舞留與他人樂少年

客の樂は我レが苦をして作る菊　楊柳

不貪夜識金銀氣

むさほらで夜番をしたし時鳥　羽笠

潭荷葉動是魚遊也

蓮の葉の動くを泛子の相圖哉　問景

鳥盡聲不盡

繪書たる羅穀は洩レよ鶴の聲　機石

洛中戰鼓轟天地正是松江獨釣時

白雨も無疵ナ空や川向ひ　三徑

同じこゝろな

夕立のせぬさきに知る風凉し　押山氏 東狐

買咲未知誰是主万人心逐一人移

見る人は睫よまるゝ踊哉　二徑

馬惡衣香欲嚙人

藤袴香ひにあがく厩かな　長野氏 正久

家人獨自寄ス寒衣ヲ

手心に打ぬ礁のうれへかな　和靚

昔好ム盃中ノ物ヲ今爲ル松下ノ塵ト

連のなき酒は上戸の時雨かな　唯人

驛路ノ鈴聲夜過グ山ヲ

鈴の音馬しどろ也岨時雨　若水

雪中ニ放テ馬ヲ朝ニ尋ヌ跡ヲ

影法師の雪の跡踏む岨路哉　英正

墻角短ノ檠還テ有レ用瓦瓶相對シテ一枝疎也

寒梅の軒の隅照る燈かな　怡石

酒泉郡之民一頃未レ知ラ近陰ノ之地ヲ

大雪を花に極る上戸かな　如塊

浮屠語

楞嚴觀音章偈曰如シ世ノ巧師幻ニ作ルトキ諸ノ男女ヲ雖ドモ見ルト諸ノ根動クヲ要以テ一機ヲ抽ツメテ息レ機ヲ歸スレバ寂然ニ諸幻成スルガ無性ヲ

貴妃死ンで驪山の月の寂さよ　越人

臨濟三ノ中玄

三ッの名は稻籾米の替りかな　尚水

古釋迦不レ先今彌勒不レ後

出いりはおなじ光ッぞ月は月　考遊

臨濟ノ一喝如ヘシ鳥ノ啄ム董毒ヲ可シ殺シレ人ヲ活スレ人ヲ

臈寒に水をあびせる療治哉　越人

馬祖曰汝一口吸ス盡四江ノ水ヲ龐居士言下ニ悟ル

月ともに西江を飲む簀かな　仝

大論曰佛法ノ如ヘ海ノ以レ信ヲ爲ニ能度ト

一聲や二ふしかまはす時鳥　東狐

四十八願曰唯除ク五逆誹謗正法

梟やおのれ闇にて見ぬ日影　共角

至心信行欲生我國

たゆみなく歩や峯は玉井蓮　江戸 宗和

極重惡人無他方便惟稱彌陀得生極樂

ひだるさを食より外の秡なし　越人

去此不遠

心より咲こそ花の吉野山　杜國

六則之內名字則

蓮の實の植るを知れば終に花　越人

止觀文月隱重山擧扇喩之風息大虛動樹敎之

月なき夜柳をあふぐ扇哉　仝

阿字一刀下入識田中生死復斷涅槃復斷

櫻木を切れば餅なし酒もなし　仝

題法華經十卷幷序

いにしへの哥仙達、多く佛經の文をとりて、和哥に詠ぜらるゝ事、家〳〵の集に見ゆ。中に法花の文多し。ひとり我俳諧に聞こと希なり。人の心をたれとして、いひ出むは和哥・連俳、其句質は異なりとも、心は同じかるべきにや。物に感じ言に顯はるゝ時は、春に囀る鳥、秋に啼虫の聲、曲節なしといへども、哥謠なりけるとぞ。俳諧は俗語をもていふといへども、せめては十の內二三は、道のたよりともし、よしあしに付て、心のいましめとせざらんは無下の事也。其本を捨てするに渡り、珍しく人にかはらむ事を思ひ、我がだましき心を正とし、いふ事いはぬ事のわいだめなく、目のあたり人の句をうばひ、おろか成人にほこり、邪ま成道へ我と共に引入るゝは、此比のならひと成ぬ。往昔、我法花を讀れし莚の端に侍る事有しに、わづか一言半句を種とし、發句にしるしおけるを今見出、爰にならべ侍れども、身おろかに心つたなければ、其文の心には、いかで叶ひ侍らん。哥にあらず、詩にあらず、わづかに五七五の大和文字ぞかし。かくしるしたりとて、白氏が讚佛乘因轉法輪緣といへるにもあらず、保胤が儻得難逢一乘文と、いへるごとく成心にもあらず、只昔の反古を見て、それにたらざる所をたし、佛法は當時人の上下となく、はやり事のごとくする物なれば、我も合點は行ずながら、童子の小哥・淨瑠璃をまねるごとくに、跡先はしらぬ事なりけり。佛の道しらるゝ人、笑ひ給へ〳〵。

春　越人

開經無量義經曰四十餘年未

顯眞實

鶯を畫て燒筆掃にけり

妙法蓮華經序品曰　諸漏已盡無復煩惱

枯れつくす木には花咲世話もなし

方便品曰　止々不須說我法妙難思

春來てもなを鶯や聲惜む

譬喩品曰　常處地獄如遊園觀

あだ花の色賣ッ笑ッ摽かな

信解品曰　無量珍寶不求自得

心ぞと知る時胸の藏開

藥草喩品曰　其雲所出一味之水

一いろの雨やさまぐの花の艷

授記品曰　願賜我等記如飢須敎食

東風吹ば開むと待梅の花

化城喩品曰　化作一城告衆人曰汝等勿怖

蜃の息はつばめの臺かな

夏

五百弟子授記品曰　以無價寶珠繫汝衣裏

更衣すれば衣裏より出る珠

授學無學人記品曰　於此佛法中種佛道因緣

いつとんだ蓮の實ならん卷葉立ッ

法師品曰　已說今說當說而於其中最以爲第一

春も風穐も吹べし夏涼し

寶塔品曰　若有人取須彌投他方未得爲難　此經一句一偈爲難

須彌山を鞠よりかるし法の蓮

提婆品曰　忽然之間變成男子即往南方無垢世界

泥水と見しが蓮に光ル玉

勸持品曰　惡世中比丘邪智心諂曲

毒を能か腹立夏の河豚のつら
　未レ得謂レ爲レ得我慢心充滿
　安樂行品曰　一切諸法空無レ所レ有

火と見ゆる螢の尻に付木哉

秋

　涌出品曰　從レ地涌出諸菩薩種々讃レ佛所讃ニ於佛一

地より涌く𦬇咲たつ花野哉
　壽量品曰　大火所燒時我此土安穩也

靜なり紅葉の中の松の色
　分別功德品曰　若我滅後能奉ニ持此經一此人福無量也

殘し置籾や來ん世の人の福
　隨喜功德品曰　聞ニ此法華經一隨喜功德勝ニ八十年布施一

菩提樹の實に八十年の布施輕し
　法師功德品曰　莊ニ嚴六根一皆令ニ清淨一

六ッの門掃除仕廻ふて月清し
　常不輕𦬇品曰　以ニ杖木瓦石一而打ニ擲人一

秋風に逃てはもとの柳かな
　神力品曰　一一毛孔放ニ無量無數色光一

紅葉する林漏り來る日影哉

冬

　囑累品曰　如レ是三摩ニ𦬇摩訶薩頂一

撫給ふ御手に冬なき頂哉
　藥王𦬇品曰　如ニ寒者得一レ火如ニ裸者得一レ衣

雪の夜や口はなされぬ御酒の間
　妙音𦬇品曰　見ニ是蓮一而白レ佛言世尊是何因緣先現ニ此瑞一

子細あらんによつと冬咲此蓮
　觀音普門品曰　弘誓深如レ海

其深さ氷らぬ魚や海の恩
　陀羅尼品曰　如ニ阿梨樹枝一頭破作ニ七分一

氷よりかたき十女の誓ひ哉
妙荘嚴王品曰 身上出レ水身下出レ火

敷火燵しらず額や汗の瀧
普賢菩品曰 少欲知レ足

足る事を知る心には師走なし
結普賢觀經曰 衆罪如二霜露一惠日能所レ照

罪いづこ胸の光りに消る霜

伎

樂
陵王

冬の日も三舍に延て照す鉾　存行

平家
祇園精舍

散花の鐘に現や夢ならん　仝

鱸

茂る葉の始ぞ船に入る鱸　仝

六道

死なで見る此六道も時雨哉　仝

舞
大職冠

乳の下の玉の光りは春日かな　農石

滿仲

稲妻の太刀受ヶ流す御經哉　仝

高舘

辨慶が具足や慈悲の衣川　仝

浄瑠璃
十二段

毛の鞘の太刀を覗くや花の顔　考遊

富士牧狩

切麥の御相伴かな大藤内　仝

貞基命乞

琴にのる落花の雪や肥前ぶし　仝

生犧

八の卷に虵の角もろし芥子の花　越人

公平地獄破

涼しさは齒黒釜なき臺所　仝

説經

山桝太夫

舟伏セの年より狹き葛籠哉　亀洞

小栗

鬼鹿毛に障子も諏訪の氷哉　仝

信德丸

霜消て釘の跡なし鳥箒　仝

梵天國

仲人いらず花楝の降る五條哉　亀洞

藍子若

花咲ッと桃はなるなの憂誓ィ　仝

小哥

弄齋

糸よりも鹿の半左が續ク聲　亀洞

隆達

龍達の哥や鶯の出家落　仝

小六

女ンナごや小六が杖の笛に鹿　仝

清十郎

菅笠や似たと泣出す袖時雨　仝

與作

しやむと流石刀嬉敷江の江戸　仝

伎曲

蜘舞

山雀の曲ク盡しけり空胡桃　豆花

アヤ織

おり上るあや見よ空は村燕　豆花

八丁鉦

稲妻か八丁鉦に出す鳥居　仝

能

千歲

面箱に袖持添る朝の月　老猫

翁

此所千代世面白し翁草　越人

三番叟

燕のそれより鈴に踏拍子　巴柳

高砂

十かへりの白髪目出度し松の霜　羽笠

狂言

花子

忍び見る花に嵐や山の神　仝

田村

千の矢は誰打豆や鬼は外　老猫

狂言 朝比奈

ひよい〱と閻魔の尻や玉霰　仝

關寺

簑笠は鳥の巣に喰ッ小町哉　羽笠

狂言 釣狐

釣れけり花には下戸も浮藏主　仝

中入

蟬よりも番付〱役者附　巴柳

辨當なしは

暑氣也近付覗く頬被り　越人

また有所ゝ

棧敷で神ぞ切麥喰ィ居る　夕道

石橋

狂言 唐人相撲

花に身や捨て飛越ス石の橋　羽笠

禪も牡丹なり土俵入　羽笠

道成寺

花散す鐘の内にて見ル鏡　仝

狂言 入間川

伊勢の春や旦那様へは笙の笛　老猫

長良

鴨の脊取に漲る流れ足　羽笠

狂言 那須與市

愛で又判官に成かへる雁　老猫

猩々

よも盡じ醉人はつきじ花の下　羽笠

かく思ひよること、世にいへる集など、こと〱しく人の句のよしあしを定て、爰に書付るには侍らず。往昔芭蕉庵

に旅寐せし比、一日、其角・嵐雪・卑白・宗和・其外も二人リ三人リヘ吸筒を袖にして來り、醉て終日遊びかへれる人も有、其外鮓くらべして初夜過る程に月を開キ、そこはかとなく昔今のこと共屈し出て、世にむまれ人はきたなき心なく清きわざこそ、古へを今聞ても耳凉しと云イもて行に、唐土の聖リの御代賢ヒ臣など數ゆるを、我も傍に侍りてそれはしらぬ事也、我日の本にはなき事にかはと、うめき侍れば、翁のいなや、我國の賢キ君・まめなる臣、他の國になじかはおとるべき、さらば句のよしあしはしらず、いひ出給へと、おの〳〵吻し給へる發句共は、此始に書付る所也。是むかしのこと成けり。其時我は深川に秋至りて冬歸りぬるに、芭蕉庵にて來る人毎に何ッのかのといへる言ども、我申スよしなしごとなど、反古の裏に書もて來けるに、半は何帳などにも出たり。猶殘れる中に是を見出て侍るに、其時の人々は、はや中ば過キ泉下の鬼となりぬ。おのれひとり生殘り侍ればいと心細し。昔を戀る涙に催され、爰に語らふ人々に、かゝる物見出侍り。是ばかりにては物にまぎれ捨りなん。古人の言は、難波に付ておかしきぞかし。是にたよりあらむ事の給へ。無下に昔のことばを、蠹魚の住家となし果ッも本意なしと申侍りて、自ラのも人〳〵のも、かくして書付、帳にとぢ侍るなりけり。繰かへす賤の小手卷なれども、其有増なればり四時のついでもみだりに、花紅葉の次第をも正さず、只聞まゝ語るまゝに、鶯・時鳥・秋の鹿の哀成も耳の余所に、戀・無常・祝ひなどわかつ事なく、忍ぶ草のみだりに八重葎の垣にすがれるやうに、始も終も何かは、人のしられん。されば發句のうちに、季なしなどいふ人も有なむ。しかれども其一段は古人の式にしたがひ侍りぬ。待賢門の軍・賴朝大佛供養など、皆其時の季を持事也。いや敷川原役者の顔見せ初狂言など申さへ、季持事に成ぬ。天下の動靜に預りし事共、何ッの事もなく成なんや。必竟新式目のむねに隨ふべし。彼式は敕定にて、二條殿の多年肺肝をくだき被レ遊し式とぞ。俳諧は彼和漢扁の掟なりとや。それを宗祇獨吟の俳諧に移され、其後幽齋・紹巴などもはいかいには其趣成けりとぞ。近代わけもなく盆は釋敎にてなし、野郎・遊女も戀ならぬなど、表の中にて右の類イ

くに戀付ず、捨るも有とぞ。此式は末代迄誰か改むべきや。私に改メたりとて、何ッぞ世に用んや。其始をしらざれば、末するに至りて心迷ッ物なり。世に名正敷、功高き人のいますは民の大幸也。重職に有て心ねぢけ、政に偏成は又民の大ナル不幸也。しかあらば左様成人の善惡共に、其時の季にならん事むべ也。富士の牧狩は夏也。義經北國落は春なり。春夏の詞いらでも春夏なり。それより遙にくだれる虎が泪と云を夏にして、降り物にも嫌ふは、よく人の知りたる事也。源平の大將、天下の記録に殘る事成をや。不審有まじき事なり。只理を探りて法に隨ふべし。何にてもあや敷事は、人先ッそれを好む物なり。韓退之がいへるごとく、甚矣人之好レ怪也。不レ求二其端一不レ訊二其末一惟怪之欲レ聞と。必怪ッ信ずる人、始を問へず、終りを正ざる物也。此式の言は、私にいかで定むべき。皆彼式に准じて其旨を可レ守物也。いでや愚成心にも思ひよる所は、いにしへの人の行狀、善は本より惡も惡と知るは、皆我禁と成よし。三人行ふ時は我師有とぞ。實に善は人の鑑と成むべ也。惡きを見て心にすまじき事とかへり見る、又是鏡ならずや。諫を不レ用心を改されば、王侯の尊きも累卵のごとし。唐の天寶に凉州の樂をいれらるゝ事しからざるよし、寧王のの給ふを玄宗不レ用、祿山が亂來り、本朝東山義政公、熊谷某が諫言を怒り給ひて、應仁の大亂を引出し、ついで日本を戰國となし給へり。されば花の朝・月のゆふべのたわむれにも、おのづから直キ曲れるはしらるべき事なり。心のいましめには謠・舞・淨瑠璃早哥・伎藝も成べし。然ば老莊・佛氏の說、發句に顯はるゝ所、皆爰にならへよかしと、人のいへる言葉にまかせ侍れども、其よしあしの品はしらぬ成べし。取集めたる藻屑、かきよする手のつたなく心愚にて、眞名は文字の置所、假名はその文字のつかひやうしらねば、見る人の心も迷ぬべし。されども能人の實有言は、又おのづからしれぬべくもや。我はよせ來る波にまかする、うつせ貝のなんの心もなし。

俳諧庭竈集 下

春

年の内より御芳野を

せわしなや冬から花と峯の雲　羽笠

もろこしまでも行春なれども

來る春が草鞋脱しよしの山　仝

人日

七草は秋の礎の早苗かな　越人

飲明す上戸へ直に薺粥　越人

櫻か香と夢に鳴込ム風鈴かな　機石

月前梅

月や弓梅が香を射る梟の先　間景

闇梅

梅が香は啼ぬ烏を聞夜哉　考遊

社頭梅

神垣は其まゝ梅の立枝かな　箕笠

雪中梅

冠着た行儀なりけり雪の梅　和覗

雨後梅

一雨に鉋かけたりんめ華　仙炉

田螺取

塔見えて唐子に似たりたにし取　仝

親迎の人を賀して

二ッ月の二の字を見よや子持筋　飛泉

人丸の寐姿もがな春の雨　芝響

旅立ける人を送りて

はるさめやまねかるゝ笠まねく笠　間景

茶摘

其中に眼鏡懸たる茶摘哉　三径

曲水

川下で亭主盃納めけり　箕笠

往昔よし野ゝ花見侍りしが、猶其俤忘れがたく、又思ひ立首途に

俤の花そ見えすくよし野紙　旦藁

枇杷橋を通りしに、喩へば瀬田の橋のごとく中嶋有て、其跡さきに

かゝる橋なれば
月霞む折枇杷橋や夕端川　仝
行〳〵て、美濃のすのまた川のわたりにて
鮠(ハエ)あゆる墨股(スノマタ)川の瀬ごしかな　仝
垂井の驛
喫(ヌク)き口や垂井に暫し休らはむ　仝
關ヶ原
人來(ク)とや鶯聲のせきがはら　旦藥
蝶
よるの蝶晝寐螢や夢くらべ　瓠哉
柳
花さかで花の位のやなぎかな　臨之
菫
誰ヵ染て紅(クレナイ)奪ふすみれかな　簔笠
花
小町讃
影うつせさそふ水あらば姥櫻　一空
誓文で櫻譽るに虚(ウソ)はなし　仝
さくら狩三升樽を箙(エビラ)かな　飛泉
峯の花こゝろを橋の蜘手かな　越人
馳走せよ風の祝部(ハフリ)を花の時　問景
黑土にまた一ト盛ッさくらかな　仝
散花や雲にながるゝ吉野川　臨之
款冬
いはでおもふ身や山吹の瘦せ姿　枝春
藤
行秋の菊か彌生の藤のはな　越人

夏

郭公
扨はあの月が鳴たか時鳥、といへる句のうらやましさを取て
あの月がうそをつきけり時鳥　越人
ほとゝぎす役者に好む謡哉　單二
丁ど來たおもひ出す夜やほとゝぎす　一空
不如歸〳〵となくといへば

杜宇春を教て啼もどり　　間景

初鰹

幸(サチ)替(カヒ)や鋼はすがれて先ッ鰹　　勢州山田 東水

瓜

白瓜の四月女の五十かな　　考遊

夏月

聟は弓とるは弦なり夏の月　　越人

山あふぐ捻(ヒネ)り響やくれの月　　枝香

雪の名も聞き卯の花くだしかな　　間景

五月雨にぬるゝ隙なき菖蒲哉　　一空

もる山や松の葉しげれ五月雨　　弓爾

もろともに哀とおもへ山櫻は、行尊僧正五月に、よしのゝ櫻見給ての哥なりとぞ。

帷子でよしのゝ奥はさくら哉　　巴雲

蟬

蟬の位に登る地虫やころもがへ　　飛泉

木の間より夕日碎(クダケ)て蟬の聲　　簑笠

白雨

古風を思ひいでゝ

夕立に切崩しけり雲のみね　　越人

村雨の露もまだひぬ暑さかな　　豆花

ゆふだちや鳴立澤にとぶ鳥　　唯人

白雨や軒の雫に夕日影　　簑笠

夕だちに月が降ッたか行潦(ニハタヅミ)　　瓢哉

奇峰

春はいはゝ花と化(バケ)たる雲のみね　　簑笠

神鳴の宿もあるべし雲の嶺　　飛泉

清水

いまぞ知ル清水は冬の隱レ里　　間景

我顏のおもへばむさき清水哉　　芝響

水鷄

何故にたて出されたる水鷄哉　　文錦

更行よはの戸ざしをたゝくは、王弘が使にもあらで

水鷄にてもらぬ月見る庵哉　　間景

六月祓

熱間をならの小川の御秡哉　越人

みそぎこそ夏のしるしとは、すゞしかりけると申せば

秋

織姫の師走や文月朔日(ツイタチ)　考遊

星合の千とせや人の三の年　里童

あふものや割符(ワリフ)蛤けふの星　問景

鵲のはね橋ならむ天の川　越人

寄七夕月

ふたつ星月を一ッのかた見哉　枝香

いづくもおなじ秋の夕ぐれ、といへるにとりつきて

我やどへまた歸る秋の夕かな　越人

定家卿の、此さとのみの夕と思はゞ、と詠じたまへる其里にはあらで

ながめすてゝいざ吉原へ秋の暮　問景

女郎華

女郎花蒸(ムセ)る粟とは口惜き　簑笠

あさがほ

蕣はいなづまの花の咲にけり　考遊

霧

明石の浦にて

朝霧や人丸ともに見失ふ　弓爾

華火

鐘(カネ)のねを聞ヵで散行花火哉　簑笠

月

明月のむかふ棧敷や須磨明石　越人

八月今日雨ふり侍れば

名月の雨や西施に疱瘡(イモ)の神　越人

明月の雨は佛のわかれかな　臨之

宵寐するは下戸めなるらんけふの月　問景

月の雲反魂香のけぶりかな　仝

世界から見る影ならむ月の中　飛泉

擣衣

强手(コノイ)の音はづかしき碪かな　芝響

九月十三夜

今日の月満ぬぞ人の丸鏡　　越人

替りとは間酒ばかりぞ後の月　　弓爾

紅葉

春は化にあこがれしも

ともいはで花の思はむもみぢ狩　　羽笠

行秋の關札高き紅葉哉　　越人

木がらしと明日名を替る嵐かな　　蓑笠

朴の葉に推茸干て晦日哉　　杜國

冬

俳諧の名を、かへたる人に申つかはす。

今日ぞ着る砧の衣を初時雨　　弓爾

俳諧の名開きいそげ初しぐれ　　枝香

碁の過た跡で氣のつく時雨哉　　文錦

傘の我は供なり行しぐれ　　飛泉

乘合の時雨に諸國ぬれにけり　　芝響

ぬれて來る馬で知たるしぐれ哉　　蓑笠

星見えて顔にもの降ル寒さ哉　　間景

世の中を繪にかき晴るしぐれ哉　　越人

稲かりて雀鴨になる冬田かな　　觚哉

雁がねの冬に生たる田面かな　　三語

冬枯や關の名を守ル不破の宿　　巴雲

嶺の雨里の食燒ク落葉哉　　間景

線香の煙おかしや霧の朝　　一空

雪

雪と申さず先紫の筑波哉　　嵐雪

日の影は守屋也けり雪佛　　間景

冬は猶明やすき夜ぞ窓の雪　　考遊

合羽より蓑かし給へ雪の暮　　三語

氷

水鳥のうかむ瀬もなし厚氷　　象度

歳暮

煤はきをしらぬ顔かな井戸屋形　　蓑笠

主を打辨慶もがなとしの關　　仝

賛は子夏にまさりたれども、もと

よりこゝろは小人なり。金をもたれば、かしたる世話なし。肌寒は常となり、大晦日の靜さ、一燈いとのごとく、灰に暖氣なし。是貧乏神の祉なるべし。貧乏神ども來りけへ、〱。

年の夜の餅我を折レ貧乏神　越人

四節發句終

尾張十藏、越人と號す。越路の人なればなり。粟飯・柴薪のたよりに市中に隱れ、二日つとめて二日遊び、三日つとめて三日あそぶ。性酒をこのみ、醉和する時は平家をうたふ。これ我友なり。

二人見し雪は今年もふりけるか　芭蕉

昔はせを老人、此ことば書に此發句をおくられ侍るを見出て、彼老は松下の土となり、此蓬頭は生殘りけるよと、綵蘂のなみだ紙衣のつぎめをひたし、折ふし人の來りけるにみせて、やらむかたなきこゝろを、かく申侍りぬ。

胸のしのぶも枯よ草の戸　越人

鶯や梅なき冬の窓に來て　十貫
月いり果るあけぐれの空　巴柳
橋杭を振こむ壁は霧の中　夕道
網代うつ木をはこぶどや〱　五明
ウ
耳垂の力雪隱に金の壁　柳
人參飲ンで女產ム憂き　貫
あぶなひに誰じや紙燭をして行クは　明
竹植てから嬉し寐られず　道
何よりも酒は瓢につぐおかし　人
繪には唐子の頭を大ゥ書　柳
習はねば叶ぬ祕事は睫なり　貫
たゝかれながら拜む一捧　明
我身とは思はず主の敵持　道
河豚の名付には鯆もおそろし　人
唉華に月添て見る樂みは　柳
松のおぼろもまたあはれ也　貫
二
春雨は湯谷が心に小止なし　明
ふかきおもひやうち笑ふらむ　道

氣違を隱れ家にする其高さ　貫
　帝の腹へ足をなげゝる　柳
世は風の艸もなげきて寰中に　道
　藥物にも盜人はなし　貫
私のこゝろに終にうち勝て　風
　菊こそ晉の名殘なりけり　明
晨明の影を南の山の端に　貫
　秋よ我彈ク琵琶に我泣　道
美しき鏡の顏にたのまれて　柳
　偖も吝しといはむ恥かし　人
名
一間づゝ手づから障子張給ふ　明
　宋の太祖は洗濯の御衣　貫
斑猫も耆婆がつかへば毒ならず　人
　歌はことばのつゞけがらなり　柳
きぬ〴〵を枝に惜まぬ風の花　道
　蝶聲あらばいかになくらむ　筆

十月江南天氣好
可レ憐冬景似二春華一

邯鄲の夢を見つぐや歸花　篗笠
　氷る胡蝶のとまる蒲英　聞景
廣き野は只繪の狂ふ野馬にて　豆花
　夕日に筋をかする村雨　越人
盃も十六夜までを三ッ組に　文錦
　晝こそ秋はさびしかりけれ　執筆
ウ
盆過は虎落に市を群雀　景
　素はながれに仕出す棧棚　笠
塩賣が來たら賴むと呼ル聲　人
　娘を化粧ふ母のはだぬぎ　花
恥しきこゝろのなきも哀なり　笠
　かさぬ錢乞ふ諷誦は書出シ　錦
金銀にだみたる柱疎々しき　花
　二月半にたてまつる瓜　景
海棠の眠李白が貧乏神　錦
　世を春風の思ひなき顏　人

有明のぬるい茶漬を五六杯　景
　眞麻苧の薄雨に問ふとて　笠
二
蓮の實の飛ンで出たる鹿相さよ　人
　女産ンだといかい聲かな　花
借上な何レの甑の落し事　笠
　頭巾ゆがむで折烏帽子形　錦
むく起に共まゝ辻へ出てたつ　花
　せわしき江戸を富士に慰む　景
道灌が松原遠く海近く　錦
　是も浮世の夢にぞありける　人
賣ル家の瀬にかはり行飛鳥川　景
　顔は見知ッてしる人でなし　笠
暮の月脉取てさらば御暇と　人
　羽織かぶせる新蕎麥の膳　花
名
内井戸の釣瓶時雨るゝ冷敷　笠
　旅立今朝の日和嬉しき　錦
郭公啼山の端のあかねさし　花
　花は青葉に替るからくり　景
見る内に娵が姑とつゐなりて　錦
　今の尻目は皆吝い事　人

山礬是弟梅是兄

水仙は松の常盤を夫かな　問景
　雪抱とむる二またの竹　飛泉
玉子酒是みて何とかへるらむ　越人
　買ふといふて錺質に取　景
鞠の跡噺にかはる暮の月　泉
　風一段のかた〳〵の色　人
ウ
言傳を螢に聞て來たか雁　景
　剩へ狀の名は作文字　泉
何ンじややらつゝき合ては笑ひをる　人
　わるい武具ではせぬか手柄は　景
はら〳〵と降矢の雨を切ちらし　泉
　其時はこれ此求女塚　人
土運ぶ和泉の舟に邪魔をする　景

めんつの食の替る穿鑿　泉
陣立に朧を作る月の影　人
吹〻ども身にはしまぬ春風　景
鮮かく人を堀出す花の雪　泉
かゝる時にや越の檋　人

二

千尋とも深き思ひはたぐられず　景
いはで實を見する傾城　泉
必のしたにをの字を返事にて　人
皆にあたまをわらさするなり　景
七曲の玉をつらぬく蟻通　泉
年寄いやがる奴原よ聞ヶ　人
御名付ヶて菊桐の御衣被らる　景
仕所なふて小便に舞ッ　泉
不圖起てさぐるあたりはみんな壁　人
やれ漏〻といふにぐはら〳〵　景
夜の明て凋む桂の華惜き　泉
平家都を落果にけり　人

名

露ほども神に祈のきゝめなく　景
全一といふに重六をうつ　泉
湯豆腐を喰も手もめと中物　人
天井のない寺の花見る　景
これは扨ひとく〳〵の聲斗　泉
すつぺり蝶は寐てくらす也　人

建武二年の冬、相州竹の下の合戰に、脇屋義治十四歳にて敵陣へ不レ思入、爰に依て難を遁れ味方へかへられしは

矢なみより霞たばしるさばき髮　如筑
日のいろ寒くいり違ふ旗　越人
木の竅圀臼洼鳴る嵐にて　昨木
寐るほど樂は世になかりけり　農石
川づらを手水に月やすくふらむ　存行
蓼のはな咲岸によする船　中桃
沙魚釣て酢を買にやるせわしなさ　人

風は裳裾を吹まくる尻　筑
木の端の獨坊主の板返し　石
茶碗にもしむ汁の移り香　木
藻屑燒く火にほす雨の幣袋(ヌサ)　桃
むすび上ゲたる狩衣の露　行
末枯(ウラガレ)の野邊に泥障(アフリ)をかたしきて　筑
空に太鼓を傳ふ望月　人
立舞ふに怒(イカ)れる獅子の氣を隱し　木
柄もとをれとゑぐる胴腹　石
静なる花の都の場中にて　行
お店かまへる春の開帳　桃

二

有か無キ身はかけろふのいく程ぞ　人
めし替たまふ御衣も芥子の香　筑
あこがるゝ魂も音をのみ泣居たり　石
今朝のわかれもこりず待宵　木
月見とは合點が行ぬ徳大寺　桃
秋を申さば白良(しら)吹上ゲ　行
今年産ム鹿(カ)の子妻戀ふこしやくさよ　筑
しがらみ伏る萩しどろ也　人
唐土の水は得がたき泪川　木
畫工却て漢の忠臣　石
金(こがね)にて鑄(イ)らるべき身の殺さるゝ　行
惡(アク)をにくむも病なりけり　桃

名

當世の毒は飯より地黃丸　人
此六月に白い足袋みよ　筑
心中のいはれ賣行いやな聲　石
夫婦連にて諷ふ今樣　木
あだなりと花も思はむ恥しき　桃
彌生三十日に時鳥まつ　行

恨戀　昨木

あだ人に金の輪ゆるし袖の露
身は鷹ならで思ひ艸取　越人
鶤犬は鷄に奉公いたすらん　農石
一度に聲を添る秋かぜ　存行

寐られぬや月に笳吹舟の中　中桃
たばこはあれど燧石なき　素龍

ウ

梅が香に留主を預て枝折立　人
余の鶯をよせぬうぐひす　木
行春を樽つき居て車坐に　行
甥に庄屋の落る入札　石
編笠をならべてはなす橋の上　龍
よい着物きて京は丸腰　桃
船岡に大の字灯す月の暮　木
松蟲の音を借る鉦の音　人
露時雨洩ルぞおそろし草の庵　石
三度とはれて蜀の粟はむ　行
さるほどに軍は華を散しけり　桃
櫻の色ととり違ふ顔　龍

二

須磨の繪を見せぬ恨を打霞メ　人
かづきの海士の子どもいさかひ　木
落て行塩の船に帆を上ヶて　行
唐皮に添へ送る小島　石
夢の世はゆめの中なる夢ぞかし　龍
人間の種共はじめ何　桃
丙丁と掛たる謎を水と解　木
笑ひほのかに御簾もるゝ聲　人
見ぬ戀の菖蒲引手は振れて　石
まづ傾城ははやる名を賣ル　行
虚言にても實に似るはいさぎよし　桃
かざす木太刀の薄寒る月　龍

名

正眞もかうはあるまい上手藝　人
勸進帳をついつくりよむ　木
大膽は武藏野狹し廣い胸　行
つら〳〵醉てみぬ富士の山　石
花のさく時が詩人の師走也　龍
琴釣ありく橋に春風　桃

台家の僧、此日被る縹の帽子は、往智者大師、梵經飜譯の場へ、隋

の煬帝御衣の袖を取て、寒風のふせぎに送り給ひしより、今に其流れに

松の雪縹の帽子や其御袖　木阿
結ぶ修多羅か葉の落る藤　臨之
月は師走池の心も清ミ切て　大椿
明がた近くまき上る翠簾　越人
人の和を塀に櫓に石垣に　柳塘
欲を捨れば何世話もなし　阿

ウ
みよし野の華に虱やひねるらむ　之
鶯啼クにうたふ陽炎　椿
燈を消スな此春宵は千金ぞ　人
來ぬ僞にまたつられけり　塘
薙刀の鞘ひろふ身の宿世にて　阿
まがらぬ髮をゆふうしろ紐　之
神葭つく里は狐の付ごとく　椿
桶にぐる〳〵魚も踊子　人
唐弓で生キ綿打のも近い事　塘
乘物はしる秋の日の醫者　阿
責馬に人立とまる月の暮　之
しぐれむとしてかい晴る空　椿

二
撫子の一二輪咲野も枯て　人
阿佛にわかる冷泉の家　塘
那須紙の鴈緋をもどく末の世に　阿
鰭譽るも借上のうち　之
止る酒破りはじめの頰の皮　椿
こゝろ淺くて何シの山住ミ　人
三毬打の炬には麓も曇りなく　塘
むかしの殘る越の粥杖　阿
今庄の遊女をいへば猫の戀　之
蚤とる事のいかひしやれ樣　椿
月見也とかくゆるさぬ順の舞　人
そも〳〵相撲と申はじまり　塘

名
大黑と布袋南瓜西瓜にて　阿
足ルを知る氣の靜さよ　之
死ぬる迄つかはれはたす道具好キ　椿

廣き北野に傘一本　人
咲といへば心の華の先ゆかし　阿
かはらず來る軒の燕　塘

鶚腹(ミサゴ)の鷹をとり飼ふ事は、一條院の御時、信濃の國ひちの兼枝豊平と云者奏し、始て池の魚をとらせ、母の藝より習はせけるとぞ。必逸物なり。

其藝を魚になら柴鳥もがな　考遊
浮寐の夢を覺て見る鴨　若水
歸る道花かいくもり雪散て　梅夕
幕に留主する下戸長閑也　越人
春の夜も嫦娥の影や永からん　水
いまの咄の歌をわするゝ　遊
ウ
私は不斷者なりいざろくに　人
毒と怖(ヲド)して我は河豚くふ　夕

燈(ヒ)をたてゝ招けば役に經をよみ　遊
痣(フスベ)ひとつに顏のあからむ　水
村雨の涙やひかぬ琴に落チ　夕
敵と知ッて我色を賣ル　人
終夜(よもすがら)月もこたつもくらくなり　水
夢の蛙は秋の茄子を　遊
善導の吹出す彌陀も稍の殿　人
ない金日うち又石を置ク　夕
梅が香の跡を櫻の賑かす　遊
内裏雛にも法皇は見ず　水
二
春といへど鳴ぬ松虫ほとゝぎす　夕
奈良漬に醉ひ胸はだく〳〵　人
引ずれば拜(ヲガ)む〳〵と横に寐る　水
碁では殿をもなぶる若武者　遊
毛虫かと見れば髭あり鼻の下　人
日高に着て蠅に釣蚊屋　夕
何よりも水のたしなき不自由さ　遊
續松(ついまつ)の火に燃へ落る橋　水

馬人も野分の朝の紅葉にて　夕
みむな弦なき弓は三日月　人
取とつる消る重ゞや露の玉　水
はかなき種を殘す葬　遊
名
是は扨あられぬ事に世話を燒　人
衣も脱ず鯉の庖丁　夕
村中の產には腰を抱に行　遊
うらやましさよ思ひなき人　水
朝夕の膳は宿から花の下　人
藤のしなへもながき此御世　夕

懷舊

入まきのはじめに置文と發句は、芭蕉庵主、昔我におくれる言（ことは）也。年月經るに猶懷舊の情止ず、雪の夜・雪の朝・杖を引、鞋を踏し風漢、雪見にころぶ所迄、あるは、馬をさへ詠る、又、ため付て雪見に、箱根こす人もあるらし今朝の、などいへる句と、其冬爰に遊ばれし時の吟なり。酒を懷にして旅寐の床を訪ひける事共、皆其人と共に跡方なく、たゞ箕居散帶の蓬髮一人殘りて、昔に替らぬ紙衣に往事（わうじ）を泣キ、月やあらぬ春やむかしのといへる哥をかりて、いさゝか古人をしたふこゝろをのべて、かく

雪やあらぬ我も昔の紙衣にて　越人

其茶の羽織したふ茶の花　機石

是は昔、翁更級（さらしな）より歸られしを悅て、菜堂、茶の羽織おもへば主に秋あなし　とせし文と發句を見て、我をなぐさめてかくいへり。

何事の喩（タト）へにも似ず三日の月　吟人 芝響

芝響は菜室が詞を聞て、なき人の面影を思ひ、芝響は翁の句を吟じてお下の塵を繼ふる。ともに其情同じければ、こゝにならべて跡をつぐ。

秋のゆふべは白うるり也　觚哉
理屈なし細キ莖から大飄（フクベ）　石

風衆籔の形をふく音　　人

ウ

千石も板一枚のしたは海　　哉

烏帽子を笠にやつす左迁　　響

幕切ルとよぶ御出やつた〳〵　　人

親はないかのあれは佛作　　石

蕣に笑るゝ身を持ながら　　響

月もなみだも落るきぬ〳〵　　哉

其つらさ壁の中なるきり〳〵す　　石

花に乗たる牛も死けり　　人

春日影勅使の前にはだぬぎて　　哉

されど雑煮は頂戴て喰ッ　　響

次の間へ腮をかゝへて皆逃る　　人

油に水と申御隠居　　石

二

敲き立テ念佛無間禪天魔　　響

たつた一手で活る片盤　　哉

唐土の須磨の繪の出る繪合セに　　石

世の費とは女なるらむ　　人

姉ながら弟の鎧つきをみて　　哉

枳殻の花を浮る盞キ　　響

不如歸鳥麥の出揃ふ里おかし　　人

醫者殿様と申律儀さ　　石

乳上し御子はとわつと倒レ伏シ　　響

纔のうちに見違へる顔　　哉

葺替は月に雲かな不破の關　　石

口惜きものつくりたる菊　　人

名

面白し桔梗かるかや萩薄　　哉

おれも旦那と乗て行馬士　　響

引拔イて投出す今朝の沓の錢　　人

錦を見れば苦を着たる也　　石

花園の鳴子は金の鈴を挽ク　　哉

柳は幕をしらぬ目出度キ　　筆

享保涒灘歳孟冬甲子之日

武陽　日本橋南一丁目　須原茂兵衛

洛邑　堀川通佛光寺下ル町　河南四郎右衛門

尾陽　名古屋本町一丁目　木村理兵衛

幾人水主

素覽撰

序

この船守素覧が云、俳諧の句毎によくせんと思ふ人は、淺瀬に大船をいれ、泥中に車をおすが如し。予答て曰、先師も是を歎給へり。いざさらば小舟をして自由に、心のゆくところにあそばんと、をの／＼櫂をとり櫓を立て、既に舟を出さんとするに、神風や伊勢の園友齋凉菟、漂ゝとして來れり。さあ、よき梶どりこそあれ。遠近の誰かれが句も此舟に乘せん。さりとて此舟こゝろしらぬ友を、猥にのせて醉さん事なかれ。していくたり水主ぞや。

館山狂客露川

幾人水主　素覧撰

夢想　御

船で見る鴉の纓や郭公

ある夜託神を得て、この集の初に置。

冬　尾張之分

噺させて置て寐いるや小夜時雨　露川
松風は跡でふけとやむら時雨　東推
海川をまたぎ／＼や神の旅　獨卜
洲崎まで出て咲梅や神むかへ　一秀
から風の髮や鍾馗の大根引　且栖
その息に茶の木はひくな大根引　千夾
初雪を反古にしたる烏かな　此通
初雪や道者の笠の讀る迄　倘計
ゆく人を只はとをさぬ落葉かな　林月
爐開やお齒黒壺の得たり良　吟水

風吹の浪に木の葉やむら千鳥　随柳
舟待のうちに仕立る帋衣かな　仙市
しぐるゝや上戸泣する小盃　榎秖
口切や白洲に木の葉蒔せけり　朝雀
ほし綿にちらせてあそぶ木の葉哉　不識
あさ漬の重石はさむし桴乘　樵船
行過て戻りともなき寒さ哉　桴月
柴刈の棒つき立て寒さ哉　誰螢
水鳥の五百羅漢や鳴海潟　如瓶
水鳥のかぶり〱や波の雨　淵翠
居風呂の下知して扣く納豆哉　景芳
古宮や雪ふむ足のこそばゆし　漁船
はつ雪やまづ献立に唐がらし　自樂
はつ雪や顏にひらりと星月夜　卍春
用のなき人の通るや冬の月　湖雀
柴くべて尻あぶらせん雪の客　十竹
しぐるゝや骨まであぶる置火燵　露舟
ひよ〱とひよこあまゆる霰哉　都柳
木枯にふらりと垣の瓢かな　ナルミ 獨笑
綿畑に手の裏かへす霜寒し　同 一邑
何もなき棚をながめて火燵哉　推之
曲もなき吾が俤子の赤き哉　素覽

冬　諸國之分

美濃の人に虎渓を尋侍りて
雲水のうつゝ海道は時雨けり　京莵
世の中の後はさむき火燵哉　豐後 朱拙
乘物の上戸や夢の小夜千どり　ミノ 木因
何事も御座らぬやうで水仙花　惟然
屋根ぶきの藁よ〱と時雨かな　イセ 芦本
白鷺の高ッとまりて寒さ哉　越中 嵐青
禮拜のあたまくはするおち葉哉　ミノ錦織 鷗小
朝〱の楊枝減しや水仙花　同兼山 風也
初雪や寐て居る上の山白し　越中 荻人
寒聲に鬼やら暗し下馬の前　加賀 牧童
蘭の香にすゝびのつくや冬の月　京 子直

柊の花のにほひやおほつかな　大坂 舎羅
木男の足に毛のなき寒さ哉　京 蓼阿

木曾塚にて

船馬にまた泣よゝるや神無月　去來
一めぐり塚も黒むや冬木立　ゼゞ 正秀
弦かけぬ闘屋の弓や冬籠り　加州山中 桃妖
水鳥の磯に船まつ一道者　ミノハチヤ 魯九
臘八や味噌する音をさあ悟れ　同竹ガ鼻 巴靜
白鷺や白き礫を雪の中　鷗小
はつ雪をすべりに出たか篠の鳥　ミノ麻生 海毛
さしまはる日當を雛の火燵哉　同 世柳
甘干の素肌に寒し雪の暮　同加治田 圓解
目をのべてやるや雪ふる岑の松　同 丹芝
瓢簞の身とは思はじ鉢たゝき　同 共由
この雪をやれて見せたる障子哉　イセ一ノセ 草風
凩やのこる木の葉の清かんな鉋　同 品女
石佛乳から下は木の葉哉　ミノ深田 嘯風
五十里もさきから寒し岑の雪　同錦織 足柳

湯のぬるき居風呂釜を脚婆哉　木曾福嶋 還珠
干綿の雪や日の出に啼雀　ミノ桐嶽 國雛
餅杵も暮ゆく年の湯行水　圓解
水仙にあの火はゆかし障子越　支考
串貝もやはらがぬ間に年暮ぬ　李由
大晦日分別ばかり殘りけり　許六

夏　諸國之分

山路や壺荷にひゞくほとゝぎす　丈艸
あけぼのがおもしろさにや合歡花　支考
鞠程があれになりけり雪の峯　涼菟
すり針の茶屋や折ふし杜宇　ミノ狐穴 疎竹
松原の間や傘かんこ鳥　京 怒風
若竹に髭すりつけて涼哉　佐渡 雲鈴
雲の岑側り落すや北の風　越中高岡 十丈
蚊の聲や藥屋へ逃る小人形　嘯風
折釘に見ても涼しや奈良團扇　ミノ蜂屋 如朴

就中よきつりあひやしやがの花　同スワラ 可吟
杜宇そこでは休め志賀の松　同クロセ 柳雪
夕立にしまりぬかすや三ケの月　同クロセ 松吟
白瀧を覗く若葉や羽根帚　同錦織 窓竹
惣〳〵が屋根の陰ふむ暑さ哉　キソ福島 秀葉
朝起の目のうち青き若葉哉　同 紫嶂
くま蟬や手に握らるゝ聲かなし　ミノ竹鼻 左江
行燈の晝はよしなきほたる哉　同 市堂
身にさびをつけて山路や青嵐　同寒生 淡水
痩山の骨を隱して若葉哉　同 頑石
谷川に螢をしぼる雫かな　同 松寸
笹の葉に揉くだかれて螢かな　同 三行
初五架や一はなたつて膳の上　三州新城 野星
たてかけて和尚をつぶす新茶哉　同大村 一柳
西窓のうちへも咲や花さゝげ　巴静
水引でゆひたき鮎の揃ひ哉　遠州水クボ 蟻角
氣のむいた所に居るを夕凉　三州欠塚 岩水
幽靈の出さうな暮や蓮の中　京 范孚
すり鉢の音や五月の薄曇　京 夏段
切麦に腹をわたして晝寢哉　吾仲

夏　尾張之分

明星と隣あはせやほとゝぎす　夾始
夜烏にそゝりつけてや杜宇　杜旭
手と足で泥に働く田植哉　可樂
植る手に風のとりつく早苗哉　東推
杜宇釋迦に提婆ぞ群烏　捨石
朝風や房に追はるゝ翠簾の蠅　吟水
欠伸からさらばになるや門凉み　一風
取こして明日の暑さを夕凉　水杖
垢つかぬ雲や出て來る衣更　如瓶
大水の跡や四月の芳野山　羽重
川風の雲を繰出す凉かな　アツ田 孫峯
見出してはそれ程凉し晝の月　且柳
すべり道やれこの咲た栗の花　知多 如山
杖だけにかき盡しけり萱の花　ナルミ 近利

あひ鎚や鍛冶屋の闇を飛螢　渚高

素覽上京の餞別

とりはづす笠のしころや夏木立　推之

方〳〵の麥や刈なと啼鶉　可樂

蚊柱の中に洲の立月夜かな　千夾

來ぬ風に訴訟申すや夏の月　林鏡

寒聲のつれもかはらで涼みかな　（知多）卜志

鳥さへ卯の花咲ばねぶた皃　渚高

つばくらの虱うつるなほとゝぎす　素覽

灌佛や婆ゝが目からは男の子　湖雀

いれ物に鳥の古巣やはつ茄子　澤水

鍋のはた覗く年より茄子哉　露川

どの柱など請とりて夕涼　如行

春　諸國之分

山櫻をのが花とや鳴鳥　支考

障子までひゆる匂ひや梅の花　（越中）林紅

嶋原の外は畠やおぼろ月　子直

畦塗の鍬目見事に夏ちかし　（加賀）温故

松風のたゝみよせてや八重霞　（ミノ栗田）千皐

鶯の息まだ見えて寒さ哉　（同）水尺

朝比奈や花見る時もちから瘤（こぶ）　（同クロセ）里鳩

左義長にはぜて咲たつ野梅哉　（同）岑蛙

蹴あはせよ佐渡と越後の紙鳶（いかのぼり）　（福嶋）還珠

礫（つぶて）かと小坊主迯てちり椿　（同）快風

鰒の子に足の付たる蛙哉　（同）東津

石磨の音にうかれつ猫の戀　（同）孤松

青柳や風にわかれて中なをり　（同）久保

七種の粥や貧者の持あはせ　（同）梅養

老の目の掃除にけふの花見哉　（同）卜舌

黑雲を照はがしたる躑躅哉　（ミノ）水石

ちる花の嵐は昨日たゝき哉　（遠州）和詠

御免（ごめん）なれ魚喰ふ梟に梅の花　岩水

剃立を撫させあそぶ藤見哉　（イセノ一ノ瀬）燕說

藪陰に乘馬や見えて若菜摘　（三州）白雲

東堂のお袋わせる彼岸哉　同 桃先
村雲につかえて落る雲雀哉　ミノ黒瀬 普石
梅が香の雪につれてや二年越　鷗小
瀧にちる薄彩色や山ざくら　ミノ錦織 左木
山城を空へ釣りたる霞かな　秀葉
鶯もきり〳〵なけや朝飯後　ミノ竹鼻 素臺
干棹にあまる燕の巣立哉　淡水
鶯やことさら梅に只一羽　桃先
白梅やけふは豆腐の南禪寺　吾仲
狐火を撓て鳴する蛙かな　桃妖
尋よる門やしまりて梅の花　豐後 野紅
その匂ひ紙燭消ても蕗の塔　大坂 諷竹
海棠は傘にかけたる錦哉　同 三惟

春 尾張之分

出かはりやこなたの井戸は竈の前　素覽
出替や女もまじる吉野落　露川
裸身で春へ飛こむ梅のはな　且栖
新田に手入もいらず小米花　四山
つかまれて碇の中の若菜哉　林月
道寄の目にはあつたら櫻哉　東起 雖吟
鶯の聲のなまりや遲ざくら　下一色 上鈎
花まつや店に菅笠小あみ笠　知多 一爲
苗代に若き案山子や歸ル鴈　ナルミ 知足
鶯の竹に聲干ス朝日哉　獨笑
こつへいな良で咲けり梅の花　知多 如山
鶯の朝日を呑ンで高音哉　ナルミ 業言
足袋の土きさふ摘菜の余波哉　同 龜世
黄鸝のほほうと譽る朝日哉　東推
鶯の親を聞手に初音哉　龜洞
三郎が憎まれ時の田うち哉　一秀
茶の泡の良やはかなき涅槃像　推之
石川の底に澄けり帋鳶　野木
七草や柏子に落る松の雪　卍春
子のありて機經る寺の柳哉　此道
雉子の尾も洗濯比に雨ちかし　杜旭

秋　諸國之分

夕月や人を抱手に膝がしら　其角
うつゝなや渦に降こむ踊笠　轍士
腹のたつ貞で落るや栗のいが　ミノ松星
秌たつやたすけてまはる艸の露　野紅
稲づまの跡さき白き寒さ哉　越中路健
来る秌に並べて見たや黍の丈　カヾ北枝
雪隠も伽藍のうちや秋の暮　范孚
聖靈の物數寄はなし蓮の飯　京呂物
露わたる薄や橋に天の川　夏段
菊の香や川音さむき枕元　カヾ白笑
火とぼして性根入けり蓼燈籠　普石
名月や出端を大事に雲の中　昆柳
狐火のあかり見て居る案山子哉　左木
あたらしき松葉や酒の初紅葉　ミノ兼山逸竹
鳴たつや鳴立澤もあの通り　同口晴
乳をしたふ貞うつくしや日向草　キソ福シマ波枕
鶏を狐に飼はん星まつり　イセ一ノセ市女
稲妻に突くだくやら細小路　福シマ栗船
立のけば世帯噺しや玉祭　素臺
瓢箪の垣に下るや菰つゝろ　ミノ川邊如流
小豆ならなを豆の粉や女郎花　ミノ山崎二竹
十六夜や枕相手にむかひ酒　同イフカ幾錐
行秌のけつまづきたる西瓜哉　蟻角
行秌も休んでゆくや峠の松　遠州水クボ嵐夕
美男さに勝せたがりし相撲哉　三州牛クボ素楓
稲妻のきれ／＼になる簾哉　イセ一ノセ梅風
かくれ家やかけ字の裏のきり／＼す　魯九
草刈の鎌鳴おとせきり／＼す　紫嶂
昼の間は鳶の留主にや高灯籠　左江
三味線にのせてかなしや虫の聲　頑石
廣き野に輕薄らしや虫の聲　ミノ麻生海毛
稲づまのぬれ色見えて稲葉哉　草風
合掌に湯入の痩や秋の暮　涼菟

宵まてよ戸に打れたか蝙蝠　丈艸
山鳥の尾にかへて鳴鶉かな　白雪

秋　尾張之分

日あたりに蚤見てやらん雞頭花　推之
薪ものに朝貞咲す分限哉　如行
草を出て浮世あふのく桔梗哉　立枝
葛の葉の羅團扇や夕あらし　獨卜
山風の雲に包んで紅葉哉　倘計
白菊の似せむらさきや秋の暮　任節
洗濯の雲や干かねてけふの月　水也
敷つめて莚匂ふやけふの菊　景芳
いけてある影法師飲やけふの菊　林鏡
兀山に暮て難儀かわたり鳥　桴月
世をわたる人の上にや影燈籠　木之
骨折や山を出かぬるけふの月　楚亦
稲づまや毎夜さ撫て米の出来　呑水
寸白も鳴や世間もむしの聲　卜志

梢からつき落したし鳴の聲　栢柯
鳴〳〵て闇日に細し寛の影　拾石
來よ〳〵と狐まねくか花薄　立枝
茸狩やいつれ子共のかくれんぼ　凹山
露霜に面着て並ぶ菌哉　如瓶
唐黍のまねき出してや夕寒ミ　呑水

見になく〳〵五夕を示ス

芋くふて浮世をわすれ寄かたし　推之
九十越す人を野菊に胡蝶哉　十竹
置た物見えぬ手つきや菌がり　東推
穂薄のありたつ時やほんの株　東芳
浪人の秋や根來の薄羽織　栢柯
酌取の多き布袋の月見哉　近利
田の隅を刈殘してや鳴の聲　ナルミ 重辰
ゆきどまる山の戻りや初あらし　同 坂松
若い子に見せしや菊の物狂ひ　同 知足
鷄頭に踏れん萩の花の痩　同 蝶羽
爰は須磨いち〳〵名乗れ渡り鳥　素覧

扨ははや秋も更たり冬瓜汁　露川
穐中の世話やからげてちる尾花　千夾

神祇

神垣の留主に類母し源太夫　凉莵
鴉四五羽に森の冬枯　素覧
横雲のやぶれて落る月明て　露川
米ふむ音に秋は来にけり　推之
紫蕒の呼戻さるゝ初あらし　如瓶
日はしのきかぬ雨のはら〳〵　莵
出来たからさきへ畳のまはり敷　覧
あちらをむいて御座れ祖父様　川
唐蓮の今年は痩て弱法師　之
十九土用のするゐの涼しさ　瓶
遅牛に莚一枚帆にかけて　莵
こんな在所に鳥羽の戀塚　覧
あそぶにはよけれど盆の精進腹　川

行水はやき日ぐらしの聲　之
晩の月照てやらふと屋根の上　瓶
橋のあたりが宇治でゆ　莵
息災にそなたは今も花守か　覧
烏賊は本より獨活は勿論　川
春の日の永さはながし雨は降　之
判官殿も四十八ヶ瀬　瓶
つれと退負に小袖を打かけて　莵
撰ぶところゆる胸の苦しさ　覧
伽藍堂のこれの内さへあら暑し　川
あはれ出よかし見越入道　之
杉の木のやがて雲へも屆ぞ　瓶
夫々の鼻毛を風の吹らむ　莵
面箱が出たはと膳に飛しさり　覧
翠簾のはづれて山の一覧　川
づら〳〵と糸引やうに松の月　之
跡からも雁その跡も雁　瓶
二ウ
白露のさもきらめきて見玉黨　莵

みな水色に菖蒲帷子　覽
築地からひらりしやらりと今出川　川
さらりとあがる空のきつする　瓶
手前にて役者調ふ花ざかり　之
伊勢や名古屋の春の海づら　執筆

釋教

やら寒し居佛つかふ立佛　素覽
つらつら氷る窓の晨明　凉莞
川からの餘りを藪に風吹て　湖雀
畠の笠の此地を招くか　嘯風
ぬつくりと蛸をしとらうとや鳶の色　露川
あやめ葺日の空も目出たき　覽
ウ
誰あらう鑓鼴の鑓つかひ　莞
駿河から來たその菓子を出せ　雀
此たびの箔の柱が二十兩　風
けふ人の上あすの世の中　川

葛の葉のさりとは是は團十郎　覽
痩骨たてゝ蛇の行　莞
照る時はどんどゝ御座る瀧の月　雀
坊主あたまに薪して來る　風
降らばふれ霰の殺すためしなし　川
迷惑ながら不破の雜炊　覽
哥一首都の花に引返し　莞
ころは彌生の卯腹辰腹　雀
二
起きの機嫌そこなふ雉子の聲　風
山にもすまでなんの山伏　川
是にさへありておかしき鍋の蓋　覽
玄猪の空に餅はふらぬか　莞
醫者の子の藪の跡つぐ紙袋　雀
時節が來れば釋迦も達磨も　風
さしのぼる月にたちまち岑の雲　川
稲の番して狐つるらむ　覽
飲折は浮世わすれて濁り酒　莞
靨に見ゆる鼻の穴哉　雀

居風呂の中より戀の沸かへり　風
梦になれとぞ思ふ約束　川
耻かいた事もなければ白ィ辱　覽
主にあまえて罰があたらふ　莧
疊んだる上に熨斗置花衣　風
日柄もようて鷽姫の琴　雀
是よりの寶の山や霞むらん　川
北から南舛で種まく　執筆

素覽子の慈父八十餘の春秋を見る事、冥靈の露にいさむが如し。物終りなからば、いかばかりたうさからまし。

百年の模様も梦の枯野かな　露川
松に消たる霜の明星　素覽
御下りの余波に食を押つけて　凉莧
簀かきの上の疊はねつる　景芳
唐黍の葉もひらしやらと暮の月　推之
化るは古し狐蘭菊　湖雀
浪人の襟からしたるきり／＼す　覽
けふの手透をちつとねまらふ　川
晴たくばあちから雲の晴よう迄　芳
あさけの橋をこゆる朝腹　之
六十にあまれば駑馬におとる也　雀
おさめの能に屛風倒るゝ　莧
今の雪御忩が入て玉あられ　川
轉んで拜む遊行上人　覽
町並に畠もまじる遠江　莧
とれる時には鯛も八文　芳
花見れば目にも客がついて來る　之
歴々様の雛の一門　雀

二

蝶／＼の袖をあはせてたすきがけ　覽
苧かせの糊にいるゝ櫛の歯　川
八幡に多賀の華表を取ちがへ　芳
天仙子の花のきつう咲けり　莧
船からの暑さの殘るあから良　雀

月もやがての盆に一晴　之
姉ぶつて隙で御座るも笑止也　川
聞てたもれの身は飛鳥川　覽
吹みだす壽永の木の葉ちり〳〵に　莵
あの星が出て米がくつろく　芳
馬士の戻りつれだつ後帶　之
龜山かけて長ィ約束　雀
盃の上に涙は何事ぞ　覽
誰やら見ゆる藪の傘　川
一疋が音頭をとればむら鴉　芳
千の矢さきに投るやたら木　莵
七浦にうち出の濱の花盛　雀
晩(いり)鐘(あひ)過て跡も永キ日　之

戀

法師にもあ(逢)はで枯けり女郎花　推之
ふみかへさるゝ橋の初霜　露川

蓑笠の市に在郷の香(カ)がして　景芳
馬の耳にも風の吹なり　素覽
七ッから出て居る月のしらぬ貞　凉莵
あそこにひとつ奚に木守　之

ウ

まだ蠅のあるに木曾路の渡リ鳥　川
風もあてまい君に股引　芳
盃に名殘なさけの明ばなれ　覽
階子の段に鰐口もなし　莵
五月雨の日本國を思ひやり　之
腹の減たる脈を案ずる　川
女子の中にあほうの寐ひろがり　芳
そりや御歸と門の晨明　覽
長町の切籠も長ッ見え渡り　莵
ふりみふらずみ霧のさめ〴〵　之
尻つきを被(カヅキ)に隱す花の袖　川
誓文ひとつ捨る春の日　莵

二

斷もたゝず如在の去年今年　覽
どちへ出るやらしれぬ御屋敷　芳

猫またの又猫ならば尾があらう　之
三四の十二餅に哥よむ　川
腰張のあたまの上に惠比須棚　芳
金をすましに來れば權柄　覧
世の中の人がよければ吾もよし　莵
早苗の水の九合八合　芳
晝とをる寐物語のねぶたくて　川
那智であふたもあの坊主也　之
霜雪に月も廿日と瘦てゆく　覧
木もすりこぎに枯て梟　莵
書院から賣て勝手もうれ懸り　芳
布施に小袖を泣てさし出す　川
浮舟の身はしどもなき滋戸の浦　之
酌茶の中に松葉ちり込　覧
畢竟がなうても爰は花の陰　莵
蝶に悟れば眞ッ裸なり　報　筆

旅　露川

誰もいふ旅は道づれ老の坂
一樹の陰の昆布に煎茶　京莵
春秌のこともおろかやかゝる世に　素覧
無瑕に月の晴て行覧　推之
草花の咲ひろげたる砂島　莵
人より軒の低い蔦の戸　川
子共等が祈禱の爲のお念佛　之
雪をおこすか越の雷　覧
ゆりかけて上帯しむる袖じるし　莵
いとま申てはやみだれ雛　川
小便に出れば爰にも醉ふて居る　覧
大事の牡丹たんだ一輪　之
僧正の御留主と見えて諫鼓鳥　川
星はあけぼの月はたそがれ　莵
川舟をとろゝで下す秋の風　之
魚の鳴とはかぢかなるべし　覧
風道ふ吾を麓の花の客　莵

種まきはやき作太夫どの　川

二

長かれと思ふ彼岸もけふばかり　覧

是はうどんに久しうてあふ　之

若衆の母に面目なかりけり　川

御旅まいりに笠の伊達こき　莵

一本の榎の陰が八九間　之

鶴龜あれば世に雀あり　覧

柴賣の雪を背おふて山めぐり　莵

二寸にたらぬ彌陀に大寺　川

鍋とりのその業平に何代目　覧

あの稲小屋に戀がならうか　之

弓張の引にひかれぬうき思ひ　川

乗かかりたる舟のはつ雁　莵

ウ

商ひに聖のいらぬ苦勞して　之

爰にも城があれば松代　覧

凉しさの是は〳〵と感じ入　莵

御子息達の扨も成人　川

朗詠の花ありがたき正二月　覧

すらり〳〵と梅に若松　之

いかなるか是風雅

この舟に俳諧わせで物喰ふて

眠る人をばねぶらせておく　雞頭野客

癸未仲冬下浣　素覧秋印

京寺町二條上ル町

ゐつゝや庄兵衛板

通説

芭蕉の藝術は一つの新しい道であるが故に、之を奉ずる者はおのづから之を宣べ傳へようとせざるを得ない。近來「宣傳」といふ語は名利の爲になすもの丶如き意を以て用ひられるけれども、宗風を「宣揚」するといひ、教旨を「傳道」するといひ、要するに、己の信奉する所の眞實を宣べ傳へる事である。それが內的なる熱誠を以てするか、外的なる手段としてなすかに依て、貴きと卑しきとが分れるのである。芭蕉自身は己の藝術を信ずる事が深かつたに違ひなく、其新風を提唱するに意を用ひた事も察せられる。芭蕉が江戶に出て初めて門戶を張つた延寶の頃、其名は未だ高くなかつたにもかゝはらず、年少なる其角(螺舍)嵐雪(嵐亭治助)等のいち早く彼に傾倒したる如きも、彼の新しき心に共鳴した爲かと思はれる。其頃、芭蕉一門の制作句評の發表が殊に數しげく、宛も他流に對して陣を構ふるかの如く見えた事も、內的なる意味に於ての宣傳に外ならない。しかも、當時の俳壇は貞門の傳統が堅く、又、檀林の流行が盛んにして、芭蕉等の新風に靡くものは多くなかつた。從つて、芭蕉は社會的に酬いられる所が乏しく、其衣食の資は脅され勝であつたらしい。其時、俳壇の頑迷なる聾に挑戰して、いよ〳〵發揚的なる態度に出る事もうそではない。けれども、其樣なる世俗から一步を退いて、ひたすらに己れを純にしようとする沈潛的なる態度に出る事もほんとうである。芭蕉は此の後者を選んだ。天和の頃、深川の隱栖が其である。然しながら、內に滿つるものは、外に溢れざるを得ない、新しき生命は自ら發動をなさゞるを得ない。貞享の頃、芭蕉が深川の草廬を出でゝ、東海に杖を曳いたといふ事が、意識的に新しい道を宣べる爲の旅ではなかつたとは云へ、其結果に於て、彼の主張の弘布とな

つたのは、極めて自然なる事實である。

芭蕉の新風の發祥地は江戸である。而して初めて扶殖せられたのは尾張美濃である。又、近江である。之は第一次の行脚の過ぎたる跡である。次に、伊勢、伊賀、京都――伊賀は芭蕉の故郷であるけれども、彼の名聲が中央に於て降々たることが知られてから後に漸く彼に追隨する者が增した觀がある。近江と美濃尾張とに於ける其地盤はいよ〳〵堅くなつた、之は貞享第二次の行脚の跡である。奥羽北陸は、新風に於ける殆ど未開の地であつたが、芭蕉の名は、さうした所にももう聞こえてゐた。元祿に入て、「奥の細道」の行脚は遊說が目的ではないけれども、彼の過ぐる所に俳諧の新しい眼を開く人が少くなかつたのである。羽前大石田に於ては「爰に古き俳諧の種こぼれて、忘れぬ花のむかしをしたひ、蘆角一聲の心をやはらげ、此道にさぐり足して、新古ふた道にふみ迷ふといへども、道しるべする人しなければ、わりなき一巻殘しぬ、此たびの風流爰に至れり」と彼は書いてゐる。古き道、新しき道、初心の人は迷ひ易くて探り足をしてゐる、道しるべする人に依て、どうにでも導かれるのである。されば、芭蕉の新しき道は、彼自らが先に立つて諸人を導かねばならない。彼の行脚は、その道を宣揚開發する爲に缺くべからざるものだつたのである。行脚の中にあつて、假寓とも云はるべき脚だまりも、近江に無名庵、伊賀に兄の家、其他門人の諸庵は其邊に少くなく、彼が錫を留むる事が長くなるにつけて、しぜんに其處が新風の一中心地たる勢を作つたのである。

本集の首めに收めたる「笈日記」は、芭蕉門の地方的狀況を知る一助となり、又、其弘布が如何に彼の行脚と連關してゐるかゞ覗はれる。伊賀には土芳、猿雖、苔蘇、卓袋、万乎等があつた。伊勢には、凉菟、路草、園女等が居た。近江には湖南に、尙白、丈草、木節、正秀、曲翠、乙州等、堅田に千那、彦根に、許六、李由等があつた。美濃には木因、如行、己白、落梧等があつた。支考、惟然も此地から出た。尾張には、名古屋に、荷兮、杜國、越人、野水、

重五、露川等、熱田に桐葉、鳴海に知足、業言、如風等があつた。三河には白雪、鶴聲等がゐた。京都には去來、凡兆、風國、史邦等がゐた。大阪には洒堂、之道、車庸等がゐた。さて、江戸には、素堂、其角、嵐雪、杉風、嵐蘭、曾良、濁子、野坡、孤屋、利牛、桃隣等がゐた。奥羽北陸は「奥の細道」の行脚に依て開發されたので、下野に翠桃、桃雪、岩代に等躬、羽前に清風、風流、呂丸、重行、不玉等。越後に靑庇。加賀に北枝、牧童、秋の坊、小春、万子、塵生等がゐたのであるが、加賀を除いては多く振はない。凡て是等の門葉は芭蕉の藝術に同感したが爲めに道を同じくしたに違ひないが、彼の人間としての風格から一層多く動かされたのであらう。冊子に依るよりも、行脚に依つて、多く其功を收め得たのも其理である。西行も好く行脚した、宗祇もよく行脚した。けれども此二人には道を弘通せしめようといふ氣持はなかつた、又、自ら人を化するといふ包攝力に於ても、芭蕉程のものを持たなかつたかと思はれる。

芭蕉歿後の同門が程なく一種の混亂を來したのは、珠數の緒が切れた珠の如く、當然の事だとも云へる。其道の盟約が藝術上の主義のみであつたならば、彼等の間に合致點を見出す事も或は困難でなかつたかも知れぬが、其道を全的に統率するものは「人」でなければならない。其大きな「人」として芭蕉を繼ぐほどの者がなかつたのである。芭蕉が「兩の手に桃とさくらや草の餅」とゆるしてゐた其角と嵐雪とは、蕉門第一の古參でもあり、師が歿後の江戸俳壇を擔ふべきものであつたが、其角は才華煥發するに過ぎて、幽遠の厚みを缺き、嵐雪は溫健着實に過ぎて通俗の風に傾いた。素堂は別に斬新な一體を試みたけれども、新しみの爲めの新しみには生命が乏しい。關西の俳諧奉行を以て目せられた去來は、師の遺戒を守る事のみに努めて、遺鉢を嗣ぐべき作家としては力薄く、凡兆は社會的に失脚したが爲めに韜晦してしまつた。此間に立つて、芭蕉には晩年の門人ではあるが、辯說言論に巧みにして、當時の俳壇

を推薦せんと試みたものに、許六と支考とがゐた。許六は「先師の發句仕様を前後よく俳諧の底をぬきて古今に獨るものは五老井(許六)一人なり……發句の自由を得、俳諧の作意をつくし文章をたくさんに書くものは許六が事なり、正風血脈の門人芭蕉翁二代目といはんもにくからんか」などゝ自ら稱してゐるが、彼には文と論とがあるだけで、肝心の藝術がないのだから問題にならない。支考は、さかんに入門作法の書を著して、初心の徒、地方の輩を導かうとしたが、眞に師の道を愛護する心はなくして、己の名を賣らんとする念に專らであつた故に、當時から同門の指彈を受けた。越人と露川とは俳論といはんよりも喧嘩をはじめた。凉菟は己の見る所の師風を乙由に傳へたが、それは遂に卑俗に流れさしてしまつた。是等の諸生は、芭蕉の生前から信愛を受けてゐたもので、それ／＼の地に新風を宣べてゐた、いはゞ傳道の使徒であつた。されば、師の歿後は一層、その道を傳へる爲めに力を協せて精進すべき事は然るべきであるが、彼等の見る所の師風がそれ／＼に違つてゐたのだから仕方がない。甲よりすれば乙が邪道に見え、乙よりすれば甲が異端者と思はれた、爭はざるを得ないのである。それは群盲が象を撫したといふ話にも似てゐる。象の鼻に觸れた者は象は箒の如しと云ひ張り、象の脚に觸れた者は象は露柱の如しと云ひ張つた。けれども蕉門諸生の錯誤は一部を知つて全部となしたばかりでなく、師風の外面を知つて其內在する所を感じえなかつた所にある。卽ち、俳諧の風體のみに目をつけて、其奧にある所の生命を感じ得なかつたのである。所謂、「不易」も大自然の本源としての生命の不易性として打出されたものでこそ貴さがあり、所謂「流行」も脈々として流動する生命の移行性として打出されたものでこそ新しさがある譯ではないか。生命の乾燥膠着したる「不易」や、生命流動の必然性なき流行は致し方がない。夭々たる芭蕉の大葉下にあつてこそ、實に多士濟々たる如き觀をなしてゐたけれども、是に到つては、眞に藝術を解し、詩を成し得るもの、殆ど一人もなきが如き有樣である。

彼等蕉門の諸生は兎も角。師風を祖述するといふ意圖に於ては一致してゐる。しかも、其上に見解の相違があるとすれば、そも〳〵師風の眞髓は何かといふ問題に就ての討索を起さなければならぬ。當時、芭蕉の遺吟の發句だけでも未だまとまつたる一冊としては公にされてゐなかつた。世に愛唱される所の師の句といふものにも、訛傳が少くなかつた。同門の秀句佳什にして、既刊の集に洩れたるものも頗る多い。是等を校考蒐輯して研究上の參考となすといふ企劃は素より結構な事に違ひない。史邦の「小文庫」、支考の「笈日記」、浪化の「有磯海」「となみ山」、風國の「菊の香」の如き、本卷に採錄する諸集は、さうした意味で刊行されたものであり、又、是等の忠實なる輯錄が殘されたが爲に、後世の研究者が當時の俳風を覗ふ上に如何ほどの便益を得たか知れない。彼等の仕事はまことに多としなければならぬ事勿論である。然しながら、其等の忠實なる研究に依て、如何なる新しき世界が產み出されたか――曰く、何ものも產み出されなかつたのである。芭蕉在世當時、かの小卷なる「冬の日」「春の日」「猿蓑」等が與へたる甚大なる影響を之に比較すればどうであらう。要するに研究の爲めの研究は、藝術的生命の涸渇したる時代の一現象であつて、其は次の時代の肥料としては有意義であるけれども、研究の幹から藝術の花の咲かない事は事實である。

桃隣は師の行履を思慕するといふ氣持を以て、奥の細道の跡を行脚した。「陸奥衛」に其記がある。支考、露川もよく行脚した、彼等は芭蕉の宗風の未だ浸潤せざる地方に其大旨を傳へたといふ意味に於ては、後世、芭蕉の名と流とが其の弘きを致す上に大なる功績を貽すものといはねばならない。支考の「梟日記」、露川の「北國曲」「西國曲」の如き、その努むる事の多かつたことがうかゞはれる。然しながら、稍皮肉なる觀察をすれば、此二人者の如きは、芭蕉の名を看板とし、亡師の高弟といふことを估券として、道の爲めに道を廣めるといふよりも、己れの利養の爲めに道を賣り物にしたといふ點がなくもないと思はれる。芭蕉の行脚は、其の內から發する所しぜんに大道を宣揚する結果

となつたのであるが、彼等の行脚は、外に望む所あるが爲であつて、つまり低き意味に於て所謂、宣傳に墮ちざるを得なかつたのである。之も其人に藝術的生命があるか否かの問題、やはり「人」の問題である。百千の名論卓說があらうとも、一の眞實不虛なる作品に如くはなく、而して眞醇無雜なる作品は、純心實情なる人に待たなければならない。其「人」あつて、おのづから其「道」がある。「道」はいたづらに師傳を以て拘束すべきものでない、千變萬化して且つ其の趨ふ所に外れないものこそ正しい「道」である。藝術の道は窮まるべきものでない。俳諧の「道」の創作とは、一句一句の「創作」であるばかりでなく、前人未到の境を拓くといふ意味で「創作」でなければならない。風國は「菊の香」に序して、斯う書いてゐる――

はせを庵の先生、一日門人に對せられていはく、今の風體を以て故人のいたされし所を見るに、その趣向作意すでに求むるにたやすし、また我々が今もてあそびて情志を樂ましむる境も亦さぞしかないゆくべし、後世何者か出て、いかなる新しみを探り出すべし、我はたゞ來者をおそるばかりにぞ。

（荻原井泉水）

日本俳書大系　第參卷　終

大正十五年八月五日印刷
大正十五年八月十日發行

非賣品

日本俳書大系（3）

著作者　神田豐穗

發行者　神田豐穗
東京市日本橋區數寄屋町一番地

印刷者　谷口熊之助
東京市牛込區早稻田鶴巻町四〇三

印刷所
春秋社印刷所

發行所
東京市日本橋區數寄屋町・春秋社内
日本俳書大系刊行會
振替東京二六八七二・電話大手一一二四 二二二四